

金井東裏遺跡

《古墳時代編》
本文編 1

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築事業(国道・連携)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

金井東裏遺跡

《古墳時代編》
本文編 1

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築
事業(国道・連携)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一九

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



2019

群馬県渋川土木事務所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

金井東裏遺跡

《古墳時代編》
本文編 1

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築事業(国道・連携)に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2019

群 馬 県 渋 川 土 木 事 務 所
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



1 榛名山を北東上空より望む



2 榛名山噴火の火砕流堆積物の下から姿を現した甲を着装した1号人骨と2号甲

口絵 2



3 小札甲を着装した状態の1号人骨



4 3号人骨の出土状況(南より)



5 1号人骨の頭蓋骨



6 3号人骨の頭蓋骨



7 4号人骨の頭蓋骨

口絵 4



8 胃表面



9 胃裏面



10 1号甲表面(左が前胴、右が後胴)



11 1号甲裏面(左が前胴、右が後胴)



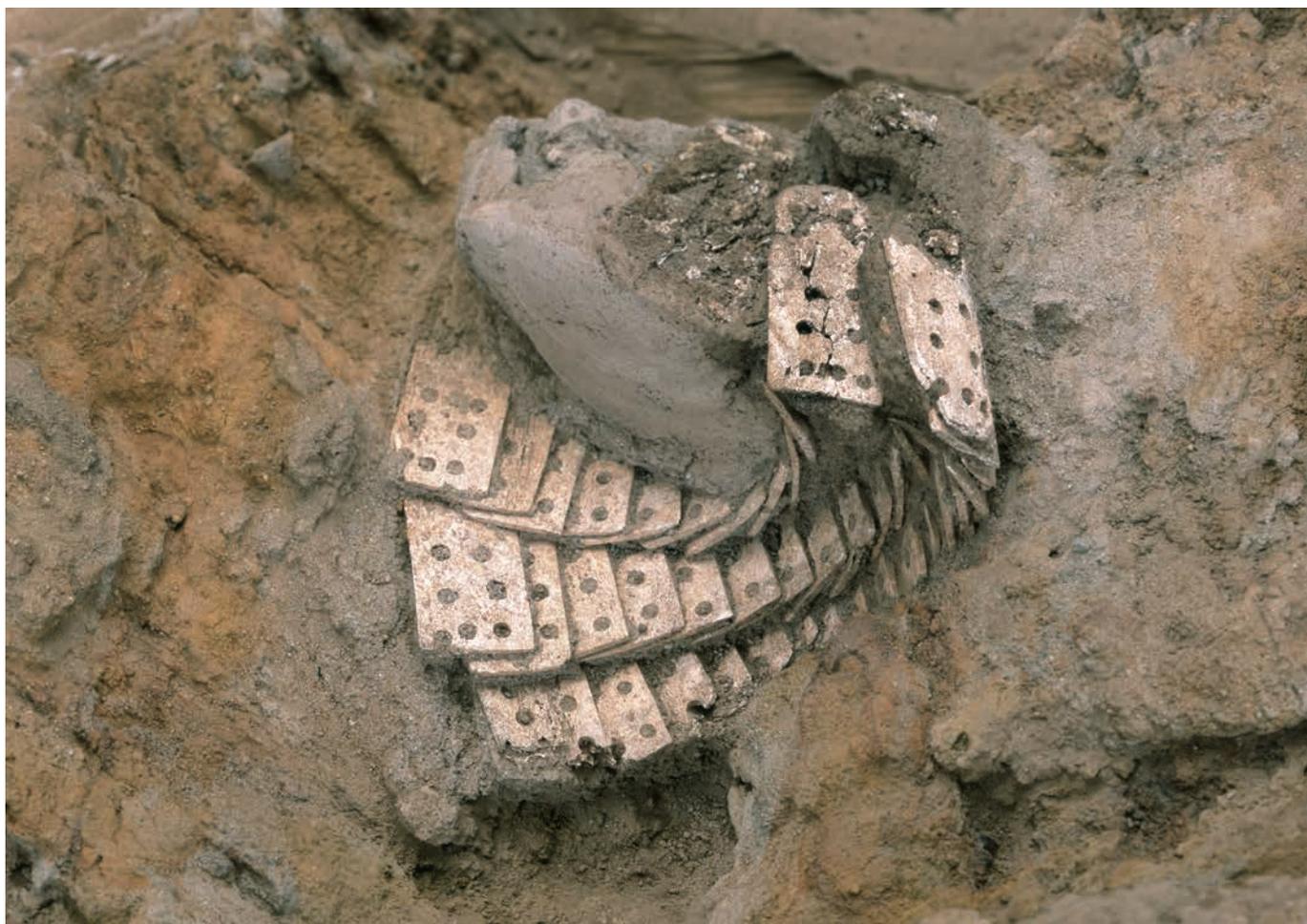
12 甲を着装した1号人骨が腰に佩びた鹿角装刀子・提砥



13 鹿角装鏃



14 2号甲(鹿角製小札が内に納めてある)



15 鹿角製小札出土状況

口絵 8



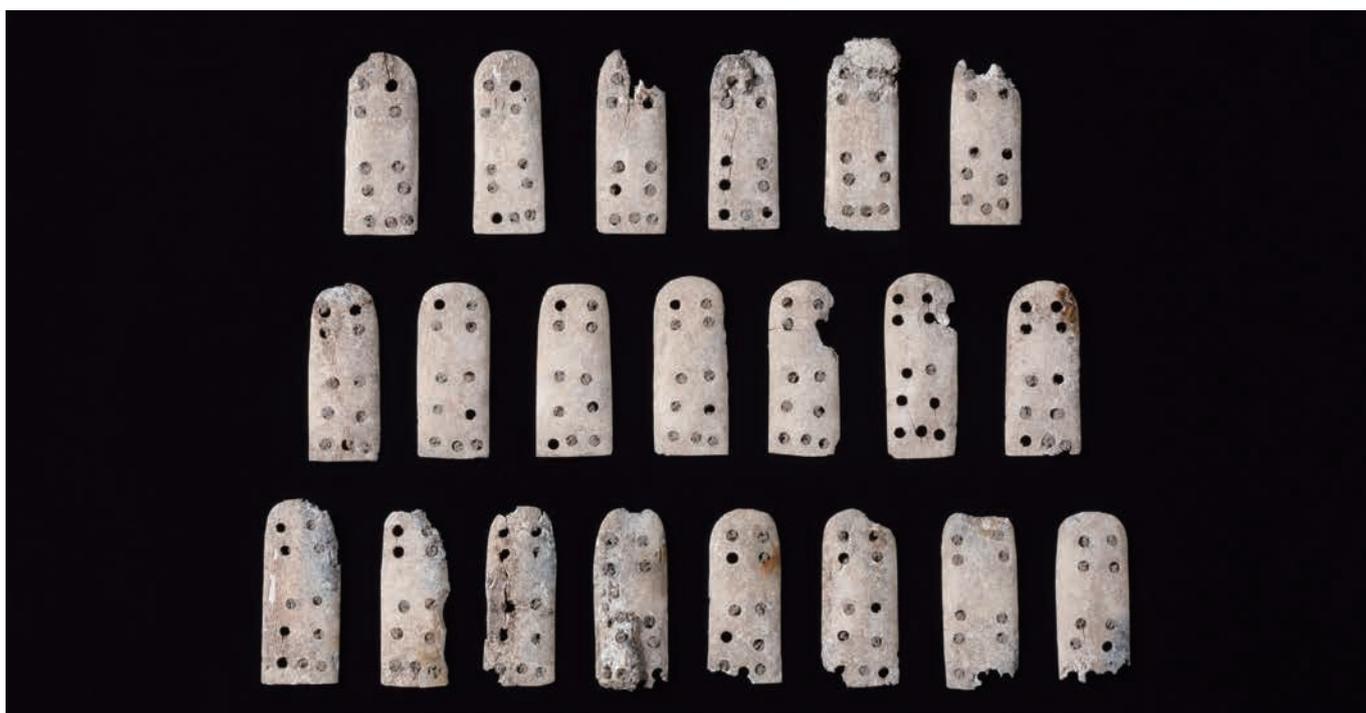
16 2号甲表面



17 2号甲側面



18 2号甲と復元鹿角製小札(表面・側面)



19 鹿角製小札

口絵10



20 銀・鹿角併用装鉦



21 鉦柄端部銀装具・鹿角装具



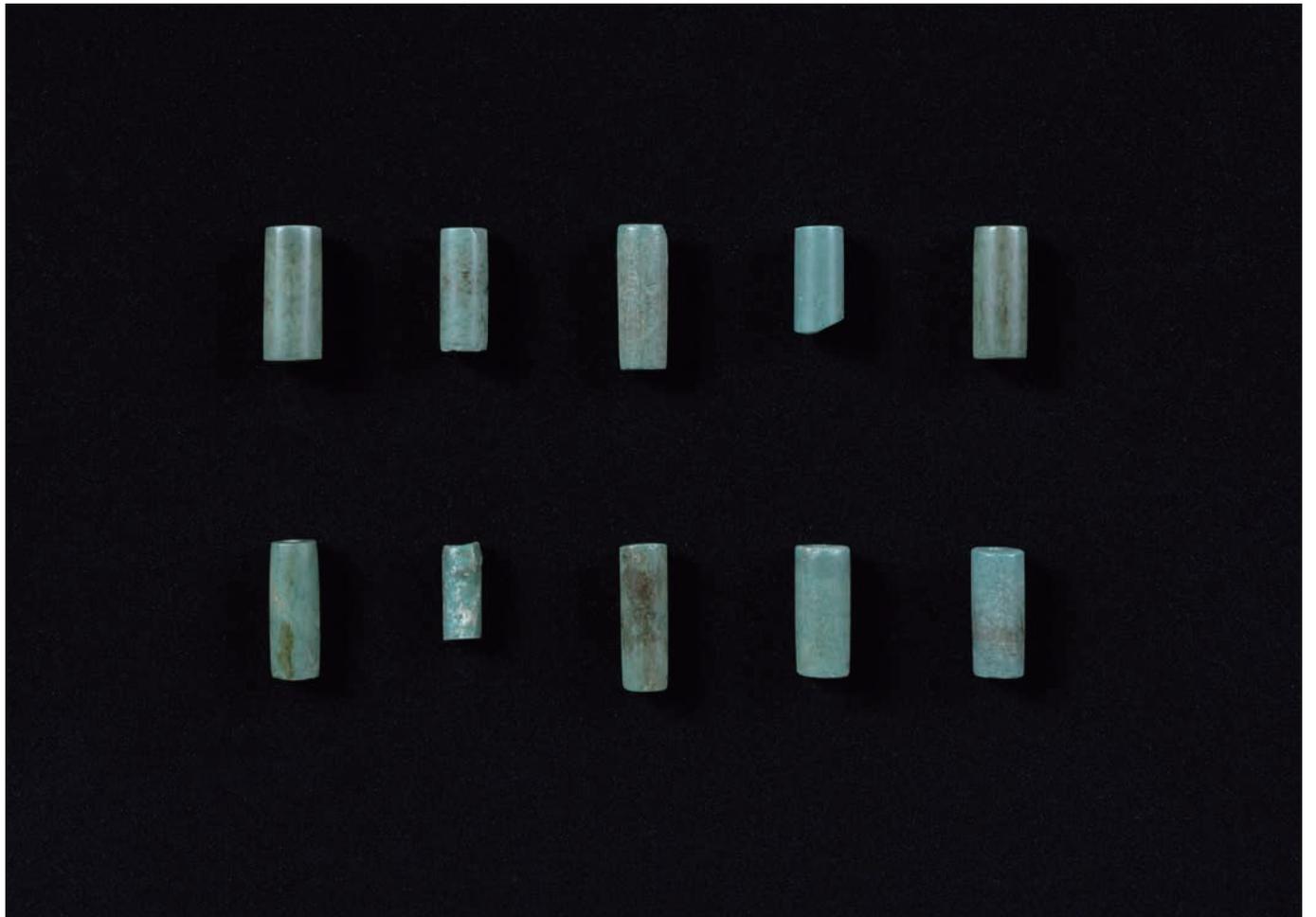
22 鉦柄(4方向から)



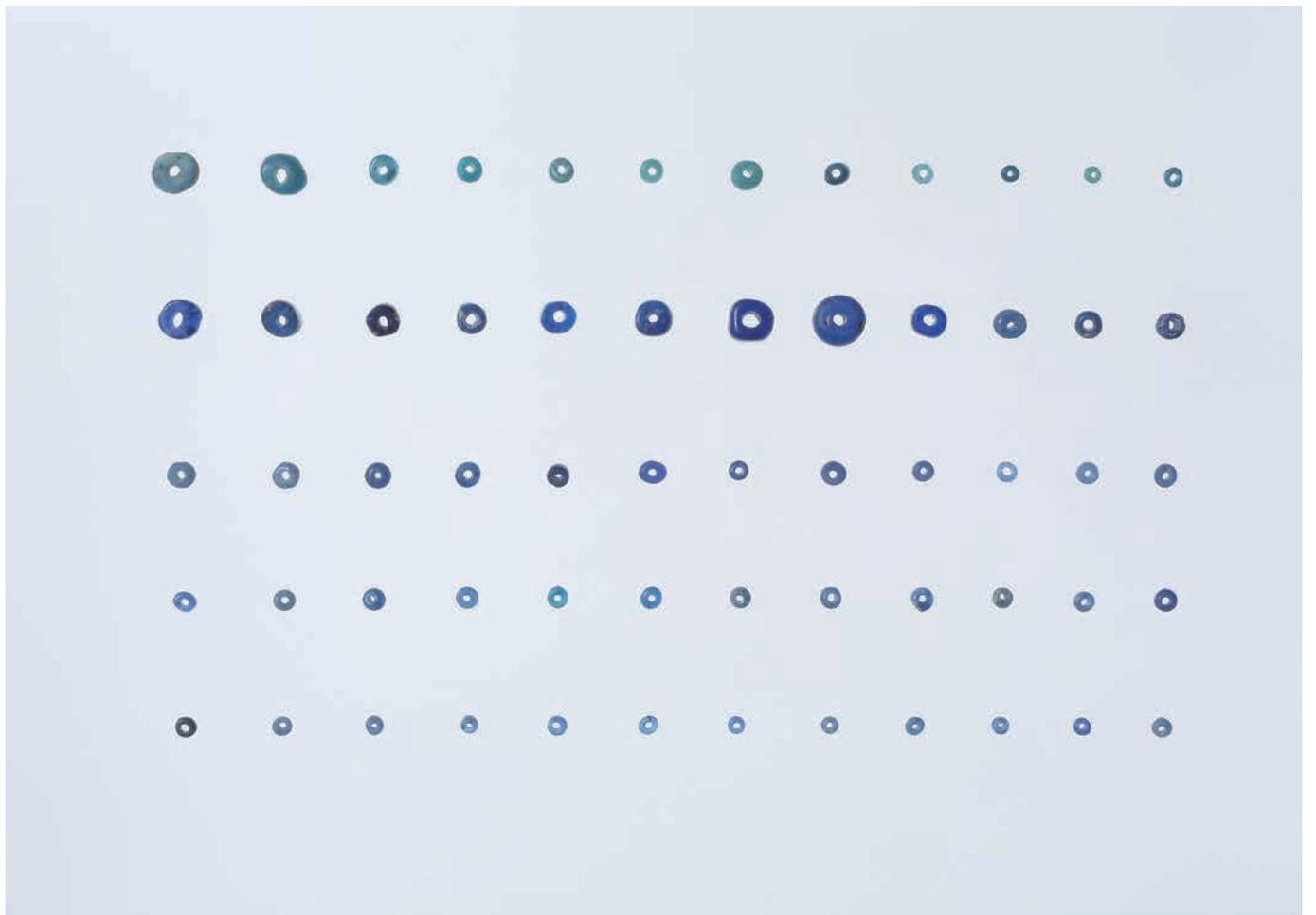
23 1号人骨が着装・所有した武装具他



24 1号人骨が着装・所有した可能性がある武装具他



25 3号人骨の頸飾りに使われたと思われる管玉



26 3号人骨の首飾りに使われたと思われるガラス小玉



27 3号祭祀遺構の検出状況(南東より)



28 3号祭祀遺構出土鏡・玉類・石製品



29 3号祭祀遺構出土鉄製品(鏃・農工具・素材・滓)



30 3号祭祀遺構出土須恵器・土師器



31 3号祭祀遺構出土須恵器



32 1・2号墳検出状況(手前西)



33 1号墳 第1主体部 副葬品



34 2号墳 主体部副葬品・墳丘裾出土品

序

上信自動車道は、渋川市を起点とし長野県東御市へ至る、沿線地域の産業活性化に大きく寄与する地域高規格道路です。

この道路建設に伴って群馬県渋川市の金井東裏遺跡は今から7年前の平成24年9月1日に発掘調査が開始されました。同年11月19日は、当事業団の歴史の中でも特筆すべき一日となりました。榛名山の噴火による火砕流で甲を着たまま亡くなった古墳時代の男性が発見されたのです。国内では初めての発見例でした。甲着裝人骨は榛名山の1500年前の噴火に被災したもので他に3人の人骨が発見されました。人類学の研究者との共同研究により、西からの移住者であることなどが突き止められました。また区画された屋敷地や900点以上の土器と大量の祭具を持つ祭祀遺構が発見されて、当時のムラやマツリの姿を生き生きと示しています。

また、金井東裏遺跡では様々な朝鮮半島との関係が深い遺物・遺構も確認されました。それは5世紀後半という大陸との交渉が盛んになった時期、最新技術や知識と関わりがあるものと思われまます。

関係者のご尽力により、甲着裝人骨や屋敷地・祭祀遺構などが発見された地区は、火山灰に覆われていた結果、遺構・遺物の情報量が極めて多く、遺跡の重要性を鑑みて保存されることとなりました。

今回の報告書刊行に至るまでに、金井東裏遺跡出土甲着裝人骨等調査検討委員会の各委員の方々をはじめ、多くの研究者及び大学、研究機関、文化庁、群馬県教育委員会、渋川市教育委員会、渋川土木事務所の皆さまなどに多大なるご尽力を賜りました。ここに深く感謝を申し上げます。また人骨の調査・研究の指導者としてご尽力いただいた、故田中良之氏のご冥福を心からお祈りいたします。

金井東裏遺跡が同じく火砕流により被災した渋川市中筋遺跡、数十年後の火山噴火の軽石により埋もれた渋川市黒井峯遺跡とともに、火山災害と古墳時代の生活を知ることができる遺跡として有効に活用されることを願ひまして序といたします。

平成31年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 中 野 三 智 男

例 言

1. 本書は、平成24～29年度に実施された金井東裏遺跡の発掘調査報告書古墳時代編である。
2. 遺跡の所在地は、群馬県渋川市金井1721、1721-1、1723-1、1724、1727、1728-1、1729、1803、1806、1807-1、1807-2、1821、1827-1、1827-2、1828-1、1838、1839、1846-1、1847、1848、1853、1877-1、1877-2、1878、1879、1883、1884-1、1884-2、1884-3、1885、1886、1890-1、1917、1921-2である。
3. 事業主体は、群馬県渋川土木事務所である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 調査期間及び調査体制は以下の通りである。

平成24年度発掘調査

履行期間 平成24年8月1日～平成25年3月31日 調査期間 平成24年9月1日～平成25年3月31日
調査担当 友廣哲也(上席専門員・調査統括) 麻生敏隆(上席専門員) 杉山秀宏(主任調査研究員)
山中豊(主任調査研究員) 宮下寛(主任調査研究員) 調査指導 桜岡正信(上席専門員・資料統括)
遺跡掘削工事請負 株式会社 歴史の杜
委託 遺構測量・デジタル編集業務 技研測量設計株式会社
空中写真撮影 技研測量設計株式会社 株式会社測研

平成25年度発掘調査

履行期間 平成25年3月29日～平成26年3月31日 調査期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
調査担当 友廣哲也(上席専門員・調査統括) 関根慎二(上席専門員・調査統括) 杉山秀宏(主任調査研究員)
都木直人(主任調査研究員) 須田正久(主任調査研究員) 山中豊(主任調査研究員)
宮下寛(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負 株式会社 歴史の杜
委託 遺構測量・デジタル編集業務 技研測量設計株式会社(10月より技研コンサル株式会社)
遺物洗浄・注記業務 スナガ環境測設株式会社

平成26年度発掘調査

履行期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日 調査期間 平成26年5月1日～20日
調査担当 友廣哲也(上席専門員・調査統括) 菊池実(上席専門員) 須田正久(主任調査研究員)
山中豊(主任調査研究員) 小野隆(主任調査研究員) 石坂聡(主任調査研究員)
遺跡掘削工事請負 株式会社歴史の杜
委託 遺構測量・デジタル編集業務 技研コンサル株式会社
空中写真撮影 技研コンサル株式会社
遺物洗浄・注記業務 スナガ環境測設株式会社

平成27年度発掘調査

履行期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日 調査期間 平成27年9月24日～10月2日
調査担当 山中豊(主任調査研究員) 原雅信(専門調査役)
遺跡掘削工事請負 技研コンサル株式会社
委託 遺構測量・デジタル編集業務 技研コンサル株式会社
遺物洗浄・注記業務 シン技術コンサル株式会社

平成28年度発掘調査

履行期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日 調査期間 平成29年2月3日～2月17日
調査担当 小野隆(主任調査研究員) 原雅信(専門調査役) 飯田陽一(専門調査役)
委託 遺跡掘削工事請負 技研コンサル株式会社
遺構測量・デジタル編集業務 技研コンサル株式会社

6. 整理事業の期間及び体制は以下のとおりである。

平成26年度

履行期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日 整理期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

整理担当者 杉山秀宏(主任調査研究員)、佐藤元彦(補佐(総括))、
石田典子(主任調査研究員)(12/1～2/31)、大西雅広(上席専門員・資料統括)(1/1～3/31)

平成27年度

履行期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日 整理期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日

整理担当者 杉山秀宏(主任調査研究員)、神谷佳明(専門調査役)、
石守晃(上席調査研究員・資料統括)

平成28年度

履行期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日 整理期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日

整理担当者 杉山秀宏(主任調査研究員)(4/1～3/31)、大木紳一郎(専門調査役)(4/1～5/31)、
田村博(主任調査研究員)(3/1～3/31) 石坂茂(専門調査役)(4/1～3/31)

平成29年度

履行期間 平成29年4月1日～平成30年3月31日 整理期間 平成29年4月1日～平成30年3月31日

整理担当者 杉山秀宏(主任調査研究員)(4/1～3/31)

7. 本報告書作成の担当者は以下のとおりである。

編集・遺物写真撮影 杉山秀宏(主任調査研究員) 大木紳一郎(専門調査役) 津島秀章(資料2課長(総括))

デジタル編集 齊田智彦(主任調査研究員・資料統括)

遺物実測・観察表 石器・石製品：津島秀章 土師器・須恵器・土製品：神谷佳明 徳江秀夫(専門調査役)

金属製品：関邦一(専門調査役) 杉山秀宏(主任調査研究員)

執筆 第I章1・2 石田真(当時群馬県教育委員会指導主事)、

第I章5-1・2、第III章3-4(5)～(11)、(14)～(17)大木紳一郎、

第III章3-4(1)～(7)、(19)～(21)、5(1)宮下寛、

第III章3-4(16)～(18)津島秀章(資料2課長(総括))、

上記以外杉山秀宏

考察編の執筆者は、考察編の目次に記載する。

8. 石材同定は飯島静男氏(群馬地質研究会)に依頼した。

9. 記録資料及び出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

10. 発掘調査及び整理事業・本報告書の作成には下記の機関によりご指導・ご教示をいただいた。

文化庁、奈良文化財研究所、九州大学東アジア文化センター、群馬県教育委員会文化財保護課、渋川市教育委員会、群馬大学若井研究室、渋川土木事務所

11. 専門的な自然科学分析や考察については、専門機関に依頼・委託した。

分析・保存処理・撮影 他

人骨の形質人類学的調査・Sr同位体比分析 代表 田中良之(九州大学)

人骨DNA分析 代表 太田博樹(北里大学)

炭素・窒素同位体比分析/放射性炭素年代測定 米田穰(東京大学総合研究博物館)

植物珪酸体・寄生虫卵・花粉分析 株式会社古環境研究所

織物・繊維分析 沢田むつ代(東京国立博物館)、奥山誠義(奈良県立橿原考古学研究所)、手代木美穂(山形大学)

ガラス分析 田村朋美(奈良文化財研究所)

金属分析 柳田明進(当時奈良県立橿原考古学研究所、現奈良文化財研究所)

管玉・白玉・石製模造品原産地同定分析 藁科哲男(有限会社遺物材料研究所)

琥珀分析 植田直美(公益財団法人元興寺文化財研究所)

獣骨分析 宮崎重雄(元群馬県立大間々高等学校教諭)
鹿角製品同定分析 山崎健(奈良文化財研究所)
赤色顔料分析 志賀智史(九州国立博物館)
キャピラリーバリア(毛管障壁)保水試験 西村友良(足利大学)
テフラ分析 早田勉(株式会社 火山灰考古学研究所)
X線CTスキャン撮影・解析 株式会社日立製作所
樹種・種実・漆膜状物質同定・土器材料他薄片作成・蛍光X線分析 パリノ・サーヴェイ株式会社
須恵器胎土分析 犬木努・三辻利一(大阪大谷大学)
黒色物質・有機質・無機質・金属器蛍光X線分析 株式会社パレオ・ラボ
三次元計測 株式会社原製作所
遺物(甲冑)取り上げ・保存処理 公益財団法人元興寺文化財研究所
実測用オルソ写真撮影 株式会社測研
遺物(甲他)写真撮影 たつみ写真スタジオ

考察

金井東裏遺跡周辺の地形について 吉田英嗣(明治大学)
金井東裏遺跡に被害をもたらした榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)の噴火について 早田勉(火山灰考古学研究所)
須恵器から見た金井東裏遺跡 藤野一之(坂戸市教育委員会)
金井東裏遺跡42号竪穴建物出土の棒状礫(薦編石)について 田村博(当時(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、現群馬県教育委員会)
金井東裏遺跡の甲冑と関連資料 内山敏行(とちぎ未来づくり財団)
北東アジアから見た金井東裏遺跡出土鹿角製小札について 中澤寛将(青森県教育委員会)
金井東裏遺跡1号墳出土素環頭大刀をめぐって 徳江秀夫(当時(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、現群馬県立歴史博物館)
金井東裏遺跡の農工具 河野正訓(東京国立博物館)
金井東裏遺跡出土鏡の位置づけと意義 加藤一郎(宮内庁書陵部)
金井東裏遺跡と朝鮮半島の遺物・遺構との比較 高田貫太(国立歴史民俗博物館)
日本における金井東裏遺跡の位置づけー東日本における渡来系遺構との比較ー 土生田純之(専修大学)
甲着装古墳人が保持していた砥石をめぐって 右島和夫(群馬県立歴史博物館)

12. 金井東裏遺跡に関する報告書について

古墳時代以外の、近世・弥生・縄文時代に所属する遺構・遺物に関しては、石坂茂ほか『金井東裏遺跡 近世・弥生・縄文時代編』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団として、平成30年3月15日に発行している。

4体の人骨とこれに関わる甲冑・鉄銚・鉄鍬・装身具玉類・刀子・砥石については、金井東裏遺跡出土甲着装人骨等詳細調査を行った。その成果は、『金井東裏遺跡 甲着装人骨等詳細調査報告書』群馬県教育委員会として、平成29年3月24日に発行している。

今回の報告は、古墳時代の遺構・遺物について行うものであるが、詳細調査報告書で報告した内容についても、その重要性及び他の古墳時代遺構との関連性を考慮して、再度収録して報告するものである。具体的には第I章5甲着装人骨等詳細調査の経過と、第III章3-4(1)～(18)の4人の人骨と関連する遺物に関する項目である。

13. 翻訳は以下の方に依頼した。

要約文翻訳

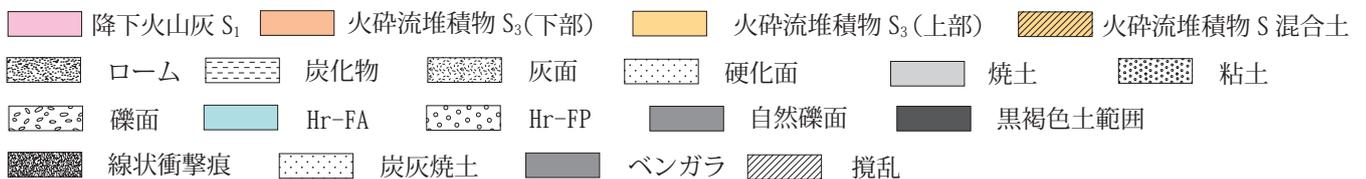
韓国語 高田貫太(国立歴史民俗博物館)
中国語 蘇哲(金城大学)
英語 ジーナ リー バーンズ(ロンドン大学)

凡 例

1. 本書で使用した座標値は、国家座標(世界測地系2000平面直角座標IX系)を用いた。遺構図中に記した座標値については、国家座標軸X・Y値の下3桁のみを用いて表記した。
2. 遺構図の中で使用した北方位はすべて座標北であり、真北方向角は、+0°14′、43.30″(東偏)である。
3. 遺構平面図、遺物実測図の縮尺は各図にそれぞれ示し、遺物実測図と遺物写真は原則として同縮率とした。
4. 遺構平面図や遺構断面図に表示した数値は標高であり、単位はメートルである。
5. テフラについては以下の略称を用いた。

榛名二ツ岳渋川テフラ=Hr-FA 榛名二ツ岳伊香保テフラ=Hr-FP

6. 本書で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。



7. 遺構平面図中のマークは次のことを示す。

- ・土器 ◦石器 △骨 ⊙種実 □鉄 ■炭 ▲赤色顔料
- 勾玉 ◐勾玉 -管玉 ●丸玉 ▲垂飾 ●紡錘車 ▼剣形 □方形板
- ⊙有孔円盤 ◆破片 ●ガラス玉 ●ETC □白玉 YK 床面小溝

8. 遺構の主軸方向・走行は、長軸方向で北から90°以内を主軸とした。表記は北を基準とし、東に傾いた場合は、N-E°とした。竪穴建物の主軸方向については、南を意識した入口が多いので、基本的に南側を下にして配置した。遺構の面積は上端を計測し、計測はプランメーターで3回行い、その平均値を採用した。遺構の計測値は、縮尺1/20の図面を用いて計測し、m単位で表した。
9. 掘立柱建物の柱間寸法は、柱筋に沿った柱穴心々間をメートル法計測した。
10. 遺構土層注記及び土器・陶磁器類の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』に準拠している
11. 本書で使用した地図は、以下のものを使用した。

第3・4図 国土地理院 20万分1地勢図 を元に編集

第5図 国土地理院 20万分1地勢図 高田・日光・長野・宇都宮を元に編集

第6図 国土地理院 5万分1地形図 中之条・沼田・榛名山・前橋を元に編集

第7・8図 早田勉氏作成図をもとに加筆

第9図 国土地理院 2万5千分1地形図 金井・鯉沢・伊香保・渋川を元に編集

第10図 群馬県地質図 10万分1をもとに作成

第11図 渋川市都市計画図 2千5百分1 No. 8

第12・13図 国土地理院 2万5千分1電子地形図を掲載。

12. 遺物図中で使用したスクリーントーンは以下のことを示す。



13. 土師器・石製模造品・白玉については種類が多く分類の必要があったので、分類基準を示し、以下図を掲載して説明する。

14. 出土した土師器及び石製品の分類基準は以下の通りである。

土師器

杯(869例(3号祭祀))

杯A(内斜口縁)、杯B(内湾口縁)、杯C(須恵器蓋模倣)、杯D(その他の杯類)の4分類する。

杯A(内斜口縁杯)(330例(3号祭祀)) 大きく口縁形態で4類に区分する。5段階に区分される。

I類 内斜の屈曲がやや強めで、口縁端部につまみ上げる小さな屈曲があるもの。

II類 内斜の屈曲はやや強めであるが、口縁端部につまみ上げが無いもの。

III類 内斜の屈曲は強く平らに近いものであるが、口縁端部につまみ上げる小さな屈曲があるもの。

IV類 内斜の屈曲は強く平らに近いもので、口縁端部につまみ上げの屈曲がないもの。

I～IV類は、口径ごとに大きい方から小さい方へ、4類に区分する。

① 口径 15cm以上を大型とする。 ② 口径 14cm以上～15cm未満を中型1とする。

③ 口径 13cm以上～14cm未満を中型2とする。④ 口径 13cm未満を小型とする。

①～④類は、更に、高さ/口径(×100)の指数により2類に区分される。

a 深形 指数 46以上 b 中形 指数 38～45 c 浅形 指数 25～37

a～c類はさらに、横から見た形全体の形状で、3類に区分される。

ア 横から見た形全体が箱形を呈するもの。イ 横から見た形全体が箱形から皿形への移行形に当たるもの。

ウ 横から見た形全体が、丸底で皿形を呈するもの。

ア～ウ類はさらに、内面の調整方向や種類で3類に区分される。

1 右斜方磨きのもの 2 左斜方磨きのもの 3 不明あるいは磨きの無いもの

杯B(内湾口縁杯)(202例(3号祭祀)) 大きく口縁形態で3類に区分する。5段階で区分される。

I類 口縁内部内湾の屈曲はほんの少しかあるいはほぼ直線状のもので、口縁外側は、直線状のものと内湾状を呈するものもある。

II類 口縁内湾の屈曲がややあり、少し内側に屈曲するもの。

III類 口縁の内湾の屈曲が強めで、大きく内側に屈曲するもの。

I～III類は、口径ごとに大きい方から小さい方へ、3類に区分する。

① 口径13cm以上を大型とする。 ② 口径12cm以上～13cm未満を中型とする。

③ 口径12cm未満を小型とする。

①～③類は、更に、高さ/口径(×100)の指数により3区分される。

a 深形 指数 47～54 b 中形 指数 40～46 c 浅形 指数 34～39

a～c類を、更に横から見た形状で3類に区分する。

ア 横から見た形全体が箱形を呈するもの。イ 横から見た形全体が箱形から皿形への移行形に当たるもの

ウ 横から見た形全体が、丸底で皿形を呈するもの

ア～ウ類はさらに、内面調整方向・種類により3類に区分される。

1 右斜方磨きのもの 2 左斜方磨きのもの 3 不明あるいは磨きの無いもの

杯C(須恵器蓋模倣杯)(316例(3号祭祀))

大きく5類に区分する。

- I類 口辺が直か直に近く立ち上がるもの
- II類 口辺が、やや外傾するもの
- III類 口辺が、内傾した後、直か外傾するもの
- IV類 内面調整に磨きを多用するもの
- V類 須恵器の技法を模倣(回転ヘラ削りによる仕上がり)したもの
- VI類 それ以外の異形の須恵器模倣杯

I～III類は、更に、口径で区分する。口径ごとに大きい方から小さい方へ、大きく3類に区分する。

- ① 口径 13cm以上を大型とする。
- ② 口径 12cm以上～13cm未満を中型とする。
- ③ 口径 10cm以上～12cm未満を小型とする。
- ①～③類は、更に口縁が平らに整形されているものと、丸くなっているものの2類に区分。
 - a口縁端部が、平らに整形されており、内面端部に稜線を形成するものもある。
 - b口縁端部が、整形は無く、丸くなっている。
- ①～③類は、更に、高さ/口径(×100)の指数により3類に区分される。

ア 深形 指数48～53 イ 中形 指数40～47 ウ 浅形 指数34～39

- IV類 ヘラ磨き多用のものは、口辺が大きく開いて外傾するものと、稜線がはっきりせず、ほぼ直に立ち上がるものがある。
- V類 須恵器模倣技法杯には、口辺が直のもの(1例)と外傾のもの(8例)と、外にやや広く開くもの(1例)と、稜線あまり持たず内傾するもの(1例)など特殊なものあり。

杯D (21例)

杯A・B・C以外に属する杯群をまとめたもの。

- I類 口辺が短く、内面やや内傾するも、外側はほぼ直に立ち上がる。(2例)
- II類 口辺端部がほんの少し外反する。造りは粗雑で粗いものが多い。(3例)平底と丸底で①・②の2類に分類。
- III類 口辺がやや長めで、やや外側に開く。平底。(2例)
- IV類 口辺が長めで、やや外に開く。丸底(2例)① 放射状磨き。胎土・色調・暗めのもの。② 斜行磨き。焼き・色調が、内斜・内湾口縁杯より明るい。
- V類 外反状に直線状に開く口辺を持つものである。内面口辺部には横ナデ、体部内面には放射状の磨きがある。同一の胎土、調整、焼きで同じ工房の作と考える。(3例)
- VI類 椀状にやや内湾しながら、そのまま外方に開いていく形態をとる。平底である。胎土は粗い。色調は赤黒く、内面は並行ナデ。(1例)
- VII類 胴上部がやや張る形態で、少し窄まった後に開く形態のもの。底部は平底状で、色調は赤味が強い。(1例)
- VIII類 体部上部に最大径を有し、短めの口辺を有するもので、口辺部は帯状にナデで面を形成する。丸底状で、赤味の強い色調。(2例)
- IX類 体部上部に最大径を有し、そこからくの字口辺を有する。平底。やや口辺が長いものもある。(2例)
- X類 口辺が、IX類に比べ中が広く、しっかりと面を形成して直線状に立ち上がるもので、平底である。(1例)
- XI類 口辺が、垂直状に幅広く立ち上がり、丸底。内面の口辺は横ミガキ、体部は斜行ミガキである。(1例)
- XII類 杯部が浅く、体部全体が、外側に開き気味で、体部上位でさらに外方に大きく開く長めの口辺を有する。内面は黒色のイブシあり。(1例)

椀(32例)

椀は基本的に、口径に対して深さが増したもので、高さ／口径(×100)の比率は、55以上80未満である。55未満は杯、80以上は甕・壺とする。ただし、鉢に特徴的な外形を有するⅧ・Ⅸ類は例外とする。底部は丸底、平底がある。椀と鉢の区別が、底部の平底の有無や形態では難しく、同一のグループとして捉えることにした。椀の中には、炭化物が付着し、調理具としての機能を持つものも確認でき、器形だけでは用途を特定できない。ここでは、一定の基準で器形分類を行い、用途については、その後の検証に任せるものである。椀・鉢の形態を大区分するのが困難なため、椀・鉢形態として一括りにして形名称は椀として分類を行う。

椀は9類に分類される

- A類 胴上部よりやや内傾した後、立ち上がりはほぼ直線状に短い口辺を有しているもの。平底である。(1例)
- B類 口辺はほんの少し外反している。色調は赤黒いものが多い。(6例)明瞭な平底を有するⅠ類(4例)と、丸底状のものⅡ類(2例)がある
- C類 口辺がⅡ類に比べ、やや外反度が少ないもの。(11例)明瞭な平底を有するものⅠ類(7例)と、丸底状のものⅡ類(4例)がある。
- D類 胴部最大径は、胴上半肩部にあり、短いやや外側に広がる口縁を持つ。(3例)平底のものⅠ類(1例) 1673と、丸底のものⅡ類(2例)がある。
- E類 ボウル状で、口辺は自然なカーブで内湾状に屈曲して端部にいたる。丸底。(1例)
- F類 口辺がやや長めで、屈曲した後、やや開き気味のもの。(5例)平底のものⅠ類(4例)と、丸底のものⅡ類(3例)がある。内面に放射状磨きを施すものがある。
- G類 口辺が、ほぼ直線状か少し外反気味のものである。コップ状の外形を有するもので、底が少し高い高台状のものや平底のものがある。指数は80以上であるが、形態よりこのグループに入れた。(2例)
- H類 ボウル状を呈するが、やや口辺に向かって内側にすぼまり、内湾状にゆるやかに曲がるものである。底部は平底を意識した不定形状である。指数は84だが、外形からこのグループに入れた。(1例)

高杯(42例)

高杯は9類に分類される

- A類 有段の肩部を持ち口辺が外へ開く形態の杯部を持ち、長脚。(8例)
- B類 脚部に有段状の形態を持つものである。破片のため、杯部は不明。(1例)
- C類 外方に口辺が開く形態で、脚部が極端に小さく短いもの(破片で、脚部一部のみ)(1例)
- D類 外方に口辺が開く形態で、A類の短脚化したもの。屈曲部に稜は持たないが、段状となる。(5例)
- E類 Ⅳ類に比べ、段がほとんど無くなり、杯部が皿状の形態となるもの。(8例)
- F類 杯A(内斜口縁形)の杯部を持ち、短脚。(9例)
- G類 杯C(須恵器蓋模倣形)の杯部を持ち、短脚。(6例)
- H類 杯B(内湾口縁形)の杯部を持ち、短脚。(1例)
- I類 須恵器の技法を模倣した回転ヘラ削りで、杯部形態も須恵器に近いもの(3例)胎土の色調は、にぶい橙色(7.5YR6/4)で、3つとも同じ胎土・色調・造りで同一工人の作の可能性あり。

A類は、体部の磨き調整により分類される。磨き調整のあるものⅠ(4例)と磨きを行わないものⅡ(3例)がある。

D類は、段が明瞭なものⅠ類(1例)と、段がゆるくて弱いものⅡ(4例)に分かれる。(5例)

E類は、やや深めの杯の形態となるⅠ類(3例)、浅めの杯の形態で外方に大きく開くⅡ類(5例)がある。

F類は、杯部がやや浅めの皿状のものⅠ(7例)と、やや深めで椀に近い形態で、脚部と杯部の接合部が狭いものⅡ(1

例)。杯部が浅めで、口辺部が長めに外に広がる形態のものⅢ(1例)がある。また、浅く皿状のものⅠ類は、体部の調整技法の違いで、内外面ともにヘラ磨き調整を行うもの①(1例)と、内面及び一部の脚部に、磨き調整を行うもの②(6例)、脚部外面のみに磨きを行うもの③(1例)に区分される。

G類は、通有の短脚のものⅠ類(5例)と極端に短脚のもので、胎土も浅黄橙色(10YR8/3)で、赤色顔料が塗布され、稚拙な造りのⅡ類(1例)に区分される。

甑(11例)

いわゆる有孔鉢を含めて甑とする。A類は基本的に、小さな一孔を底部に開けた鉢形のもので、いわゆる有孔鉢と呼ばれるものである。甑は基本的に、やや大き目な孔を底部に開け、外方に向かって開き、口辺はさらにやや開き気味になるもので、把手付のものや、外形の形が甕・椀に近いものなどがある。

A類 小さい一孔を有する在来形のいわゆる有孔鉢の形態を示すもの。

I 外方に直線状に開く形態のもの。形式属性とは無関係。(1例)

II 外方に直線状に開いた後、口辺が更に開き気味のもの(1例)もう1例は破片で口辺部が無く不明。

B類 大形のもの。細長く外方に開き、口辺部がさらに屈曲して外方に開く形態のもの。(3例) 中に、内面に磨きが施されるものがある(1例)。

C類 把手付のもの。(1例)

D類 甕に外形が近似したもの。(2例)

E類 椀に外形が近似したもの。底部近辺に籠目あり。

埴(11例)

埴は、頸部が狭く、胴が張るものを中心として、丸底のものである。器高が20cm未満のものをいう。埴の基本的な胎土の色調は、明赤褐色(5YR5/6)である。ほとんどが同じ色調をしている。形態的にかなり画一的なので、形態分類は下位での分類となる。(11例)

① やや短い口辺部を持つもの。口辺高と胴部高の比が30未満のもの。(2例)

② 普通の口辺部を持つもの。口辺高と胴部高の比が40未満のもの。(6例)

③ やや長い口辺部を持つもの。口辺高と胴部高の比が40以上のもの。(2例)

①～③は磨きの有無によりさらに区分される。

①は、内外面に磨きを施している(2例) ②は、内外面に磨きを施すものa(4例)と、磨きが施されていないものb(3例) ③は、内外面に磨きを施していない。(2例)

小型壺(21例)

小型壺は基本的に、頸部が狭く、胴が張るものを中心として、器高が20cm未満のものをいう。小型甕との区分が判別しがたいものもある。平底・丸底のもの両方ある。小型壺は大きく頸の広さにより、頸部の幅が狭いA類、頸部の幅がやや広いB類、いわゆる短頸広口壺と呼ばれる、口径が広く口辺が短いものをC類の3類に区分される。さらに、それぞれの類の中で、A類は2区分、B類は3区分される。

A類 頸部の幅が狭く、胴が張るもので、平底と丸底がある。

I く字口辺を持つ、すべて平底。(2例) 高さで、①14cm以下(1例)と、②14cmより大きいもの(1例)の2種に区分される。外面にはいずれも磨きを施す。

II く字口辺がやや緩やかに曲がり、胴部の張りもやや緩やかなもので丸底。甕の可能性もあり。(2例) 高さで、①14cm以下(1例)と、②14cmより大きいもの(1例)の2種に区分される。外面は刷毛目が施される。

B類 頸部の中がやや広く、胴が張る形態を有する。平底と丸底ある。(13例)

- I く字口辺を持ち、平底。(5例)高さで、①14cm未満(1例)と、②14cm以上(4例)の2区分される。外面は、①はヘラ削り、②はいずれも内外面どちらかに磨きを施す。
- II 有段口辺を持ち、平底である。(4例)有段の口辺を持つもので、①口径が胴部最大巾未満のもの(3例)と、超えるもの(1例)がある。
- III く字状口辺で、丸底。(2例) ①14cm未満(1例)と②14cm以上(1例)に2区分される。共にヘラ削り。
- IV 直口辺で、胴部の張りはやや弱い。丸底。(2例)高さで、①14cm未満(1例)と ②14cm以上(1例)に2区分される。①は外面調整はヘラ削り、②は外面刷毛目及び磨きである。

C類 短い口辺を持ち、胴部が張り出すもので、器高は低く丸底である。いわゆる短頸壺と呼称されてきた一群である。(4例) ①の高さ14cm未満の小型(3例)と、②の大型(高14cm以上)(1例)に2区分される。①・②ともにヘラ削り調整。

壺(47例)

壺は基本的に、頸部が狭く、胴が張るものを中心として、甕との区分が判別しがたいものもある。一部は甕に入る可能性のものも含む。壺は4類に区分される。

A類 有段口辺を持ち、頸はやや狭く、胴は中央部で張るもの。(19例)

B類 単口辺で、くの字形に曲がるもの。(22例)

C類 B類より胴部の張りが弱く、長胴状を呈するもの。(5例)

D類 口辺がいったんくの字に曲がった後、直に立ち上がる形態を有するもの。(1例)

A類は、高さで、①30cm未満(8例)と、②30cm以上の大きいもの(9例)、40cm以上の大きいもの(2例)の3種に区分される。さらに、外面に磨きを施されるもの(2例)、刷毛目調整を行うもの(2例)、ヘラ削りのみのもの(14例)の3類に区分される。

B類は、高さで、①30cm未満(4例)と、②30cm以上の大きいもの(14例)、40cm以上の大きいもの(4例)の3種に区分される。さらに、外面に磨きを施されるもの(7例)、刷毛目調整を行うもの(6例)、ヘラ削りのみのもの(6例)の3類に区分される。

C類は、細長い胴部を有する一群で、頸径を胴部最大径で割ったものが70台のものである。甕との区別が困難であるが、頸径を胴部最大径で割った比率が0.49～0.53と、0.55以下なので、甕では無く壺としている。4例ある。すべて30cm以上である。外面調整は磨きを施すもの3例、刷毛目調整1例、ヘラ削り1例である。

D類は、受け口状の特徴的な口辺部で1例のみである。

小型甕(91例)

小型甕は基本的に、頸部がやや巾広く、胴が張るものから長胴化するものを中心として、一部広口状の甕がある。器高が20cm未満のものをいう。壺との区分が判別しがたいものもある。小型甕は大きくA～C類の3類に区分される。さらに、それぞれの類の中で、A・B類は、I・IIに2区分、C類はI～IIIに3区分される。

A類 く字口辺で、胴が張る形態を有する。(22例)

I 胴部があまり長くないもの。(20例)

II 胴部が細めでやや長胴化しているもの。(2例)

Iは、高さで、①16cm未満(10例)と、②16cm以上大きいもの(10例)の2種に区分される。さらに、①は、a外面に磨きを施すもの(1例)、bヘラ削りのみのもの(9例)の2類に区分される。②は、a磨きを施すもの(3例)、b外面に刷毛調整を行うもの(1例)、cヘラ削りのみのもの(6例)の3類に区分される。

IIは、高さ16cm以上のもののみで、外面調整は、ヘラ削りのみのものである。

B類 口辺の反りが弱いくの字口辺で、頸部の中がやや広く、胴の張りの程度で二分される。(21例)

I 胴の張りがやや弱い。(12例)

II 胴の張りが弱い。(9例)

I は、高さで、①16cm以下(9例)と、②16cmより大きいもの(3例)の2種に区分される。さらに、①は、a 磨きを施すもの(1例)、b 刷毛目調整を行うもの(1例)、c ヘラ削りのみのもの(7例)の3類に区分される。②は、a 磨きを施すもの(1例)、c ヘラ削りのみのもの(2例)の2類に区分される。

II は、高さで、①16cm以下(3例)と、②16cmより大きいもの(6例)の2種に区分される。さらに、①は、a 磨きを施すもの(2例)、b 刷毛目調整を行うもの(1例)、②は、b 刷毛目調整を施すもの(1例)、c ヘラ削りのみのもの(5例)の2類に区分される。

C類 頸部の中がやや広く、胴部が短いもの。(48例)

I 受け口状口辺を有するもの。(1例)

II く字口辺を有するもの。(35例)

III 直か直に近い外反口辺を有するもの。(12例)

I は、高さで、①13cm以下が1例のみで、II は、高さで、①13cm以下(29例)と、②13cmより大きいもの(6例)の2類に区分される。①は、a 磨きを施すもの(3例)、b 刷毛目調整を行うもの(5例)、c ヘラ削りのみのもの(21例)の3類(17例)に区分される。②は、c ヘラ削りのみのもの(6例)である。IIIは、①高さ13cm以内が11例あり、外面調整は、a 磨きを施すもの(7例)、c ヘラ削りのみのもの(4例)の2類に区分され、③高さ13cm以上は1例で刷毛目調整

甕(61例)

甕は基本的に、頸部がやや中広く、胴が張るものから長胴化するものを中心として、一部広口状の甕がある。壺との区分が判別しがたいものもある。一部は壺に入る可能性のあるものもある。器高20cm以上のもの。甕はA～Eの5類に大区分される。

A類 頸が幅広のもので、胴部もあまり長胴化しない (11) ①～③の3類に区分される。

① 頸はやや広めで、くの字形の口辺を持ち、胴の張りが球形胴に近いもの。(2例)

② 頸はやや広めで、くの字形からやや直に立ち上がった後、外板する立ち上がり有するもので、やや長胴化したもので器高30cm未満のもの。(6例)

③ 類はやや広めで、くの字形からやや直に立ち上がった後、外板する立ち上がり有するもので、やや長胴化したもので器高30cm以上のもの。(3例)

B類 頸部がやや幅広く、胴部の張りも少ない、小型甕に形態的に近似する、大形のもの(3例)

C類 頸部がやや狭いもの。長胴化する。(16) ①・②の2類に区分される。

① 頸部がやや狭く、くの字形の口辺で、やや長胴化したもの。器高30cm未満。(21例)

② 頸部がやや狭く、直にあるいはやや外板する口辺で、やや長胴化したもの。器高30cm以上。(5例)

D類 口辺部は、くの字形の口辺で、長胴甕の一群。胴部最大径÷高さの比が0.6～0.7代のもの。(20例)①～③の3類に区分される

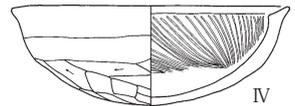
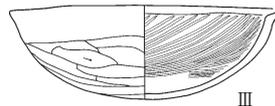
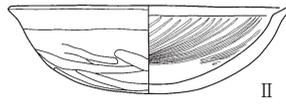
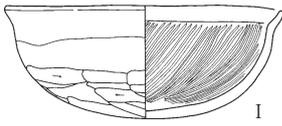
① 高さが30cm未満のもの。(8例) ② 高さが30cm以上のもの(7例)

③ 細身の長胴化が進行しているもので、胴部最大径÷高さの比が0.6代のもの(5例)

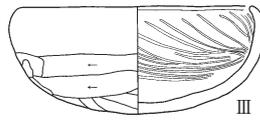
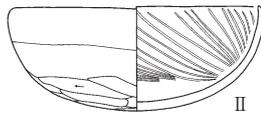
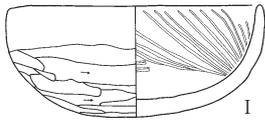
E類 その他 口辺が短くやや外反するもの(1例)

A類①は、外面に磨きが施されるもの(1例)、ヘラ削りのみのもの(1例)の2類に区分される。

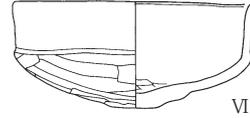
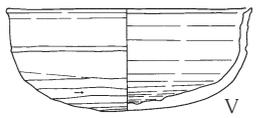
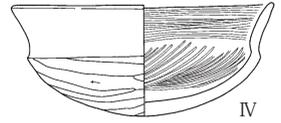
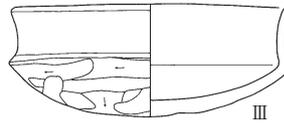
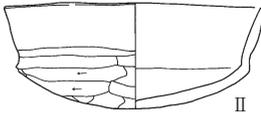
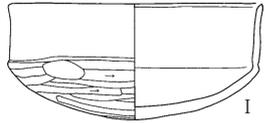
杯A



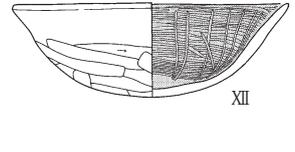
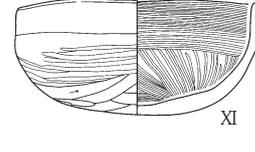
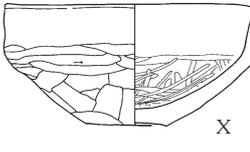
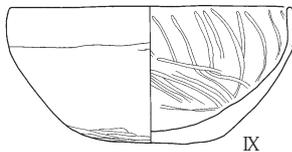
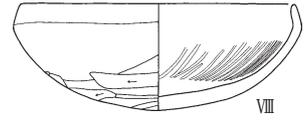
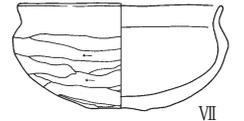
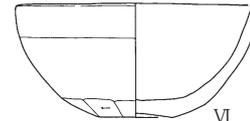
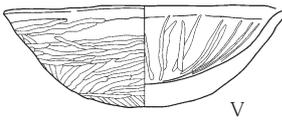
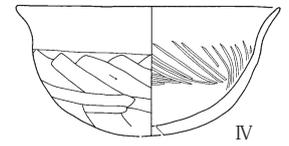
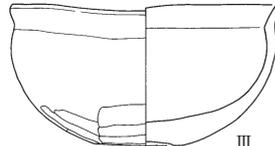
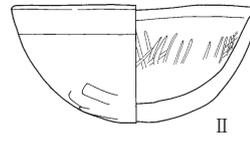
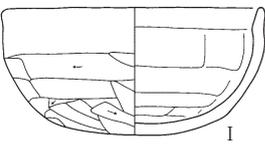
杯B



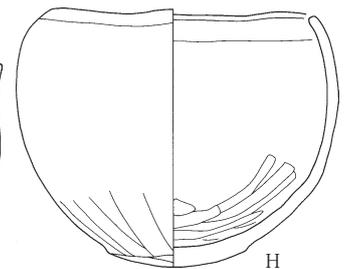
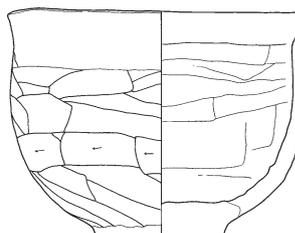
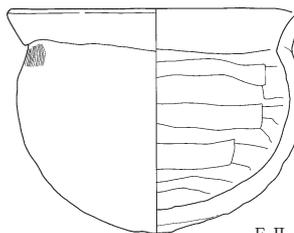
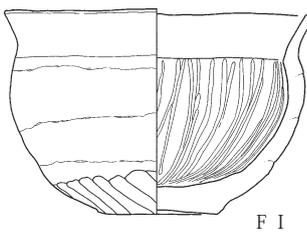
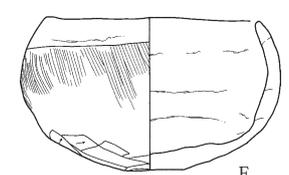
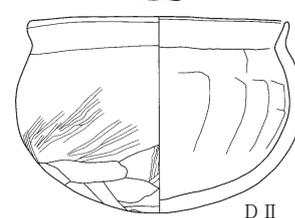
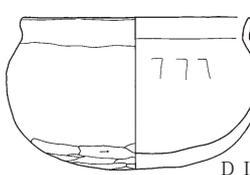
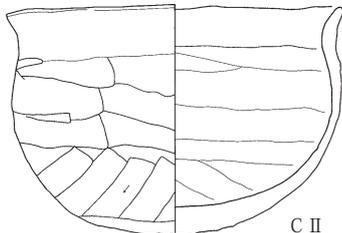
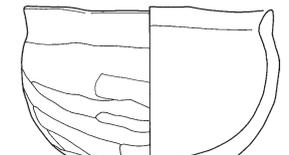
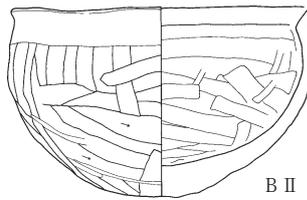
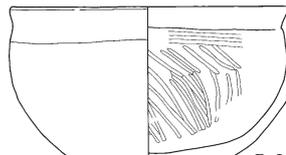
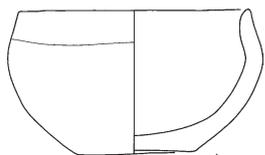
杯C



杯D

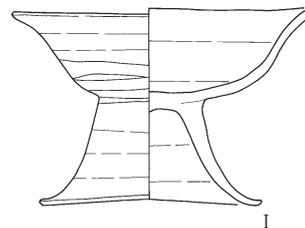
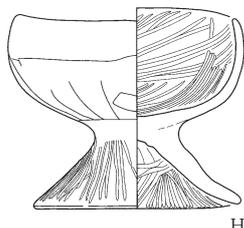
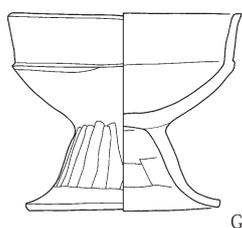
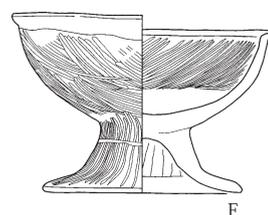
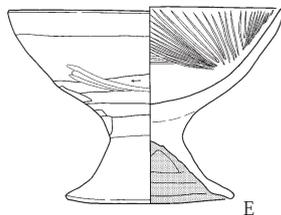
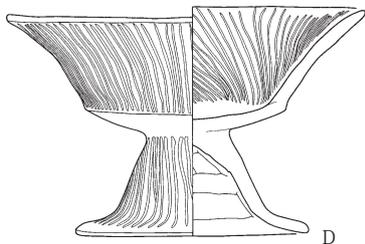
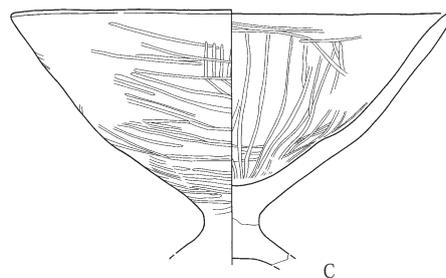
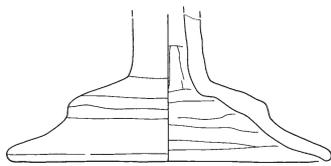
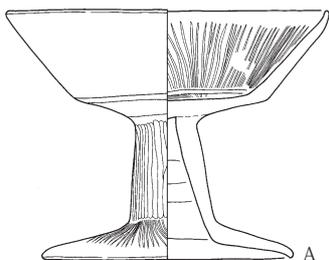


碗

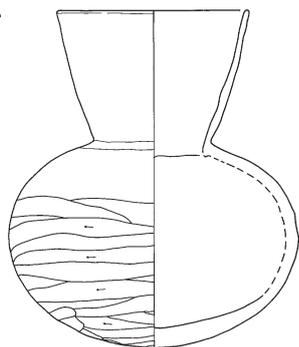


0 1:4 10cm

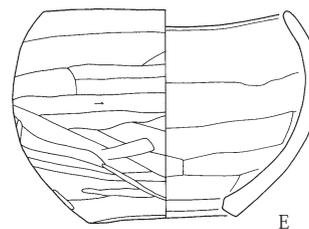
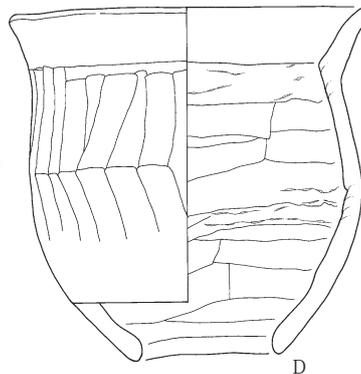
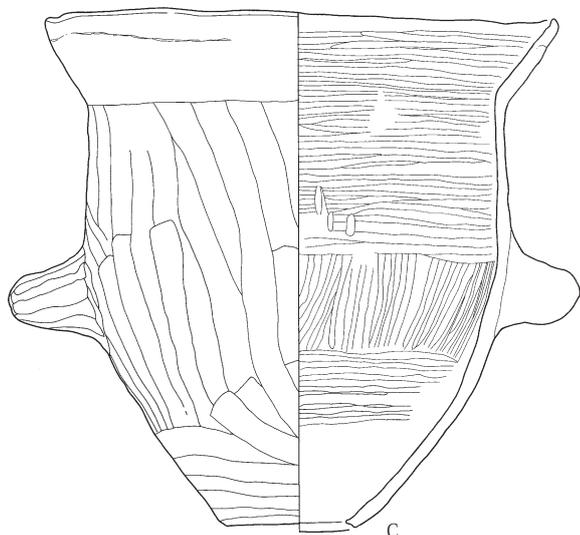
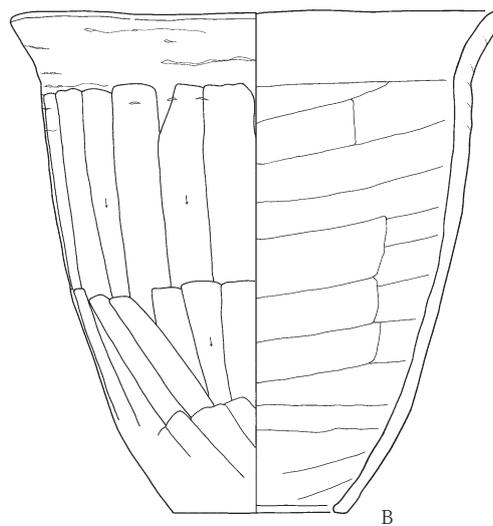
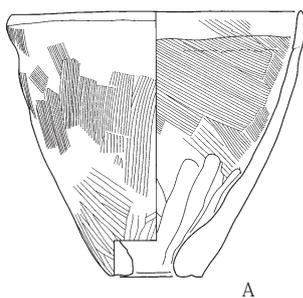
高杯



埴

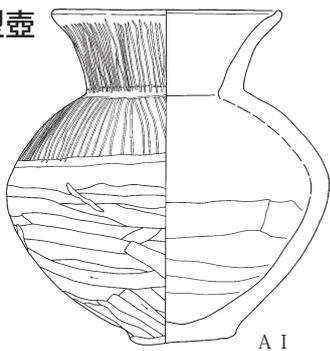


甑

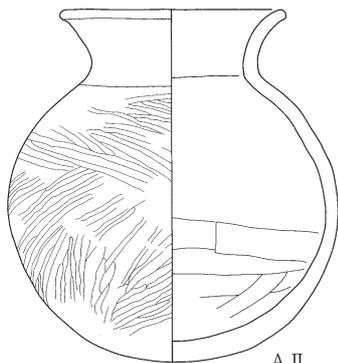


0 1:4 10cm

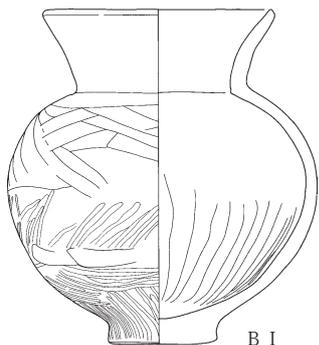
小型壺



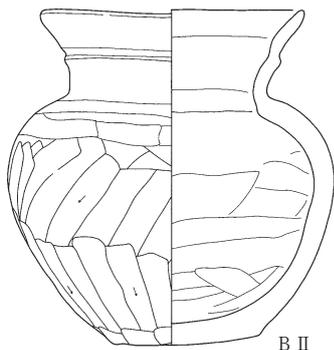
A I



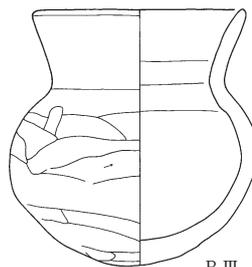
A II



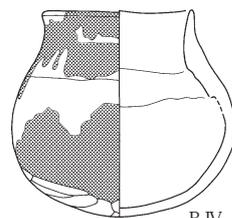
B I



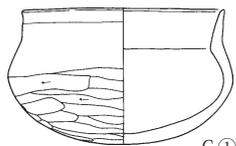
B II



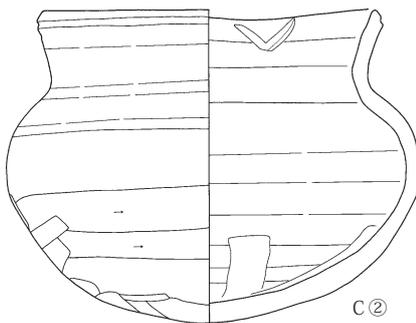
B III



B IV

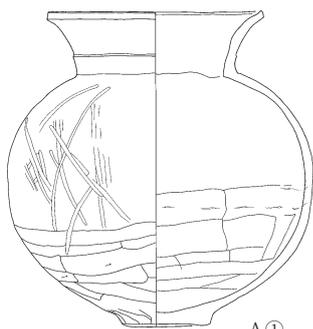


C ①

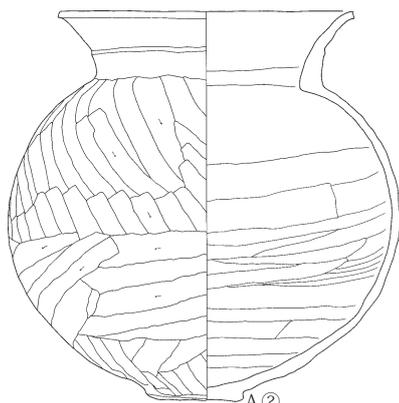


C ②

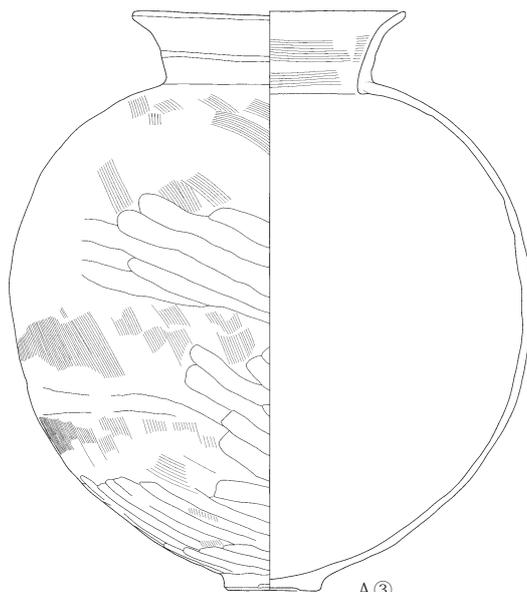
壺



A ①



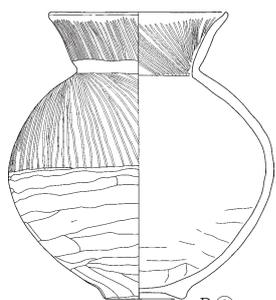
A ②



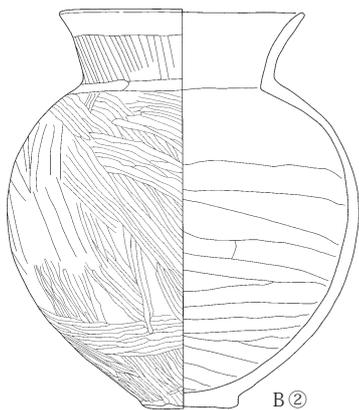
A ③

0 1:4 10cm

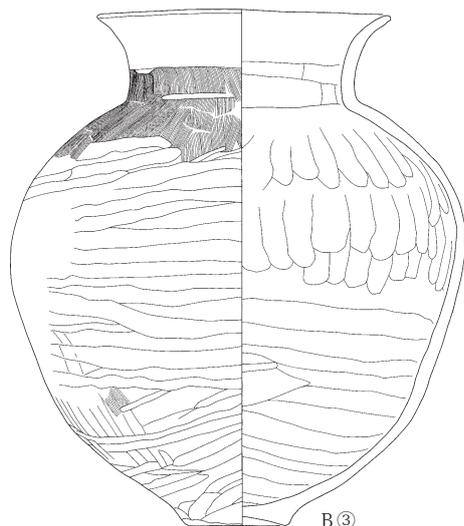
壺



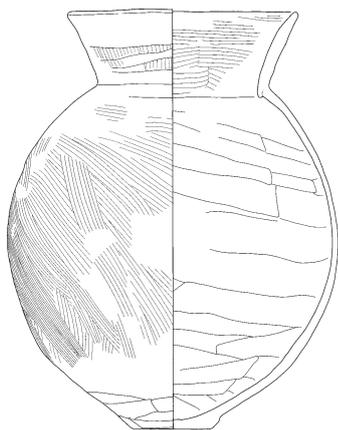
B ①



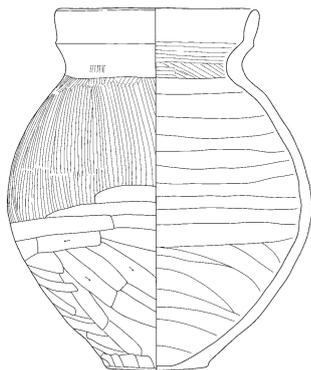
B ②



B ③

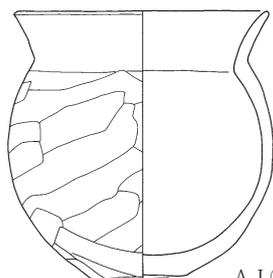


C

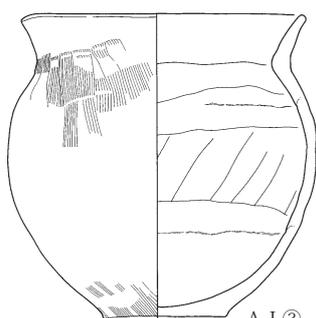


D

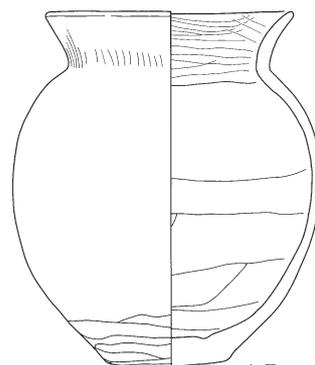
小型甕



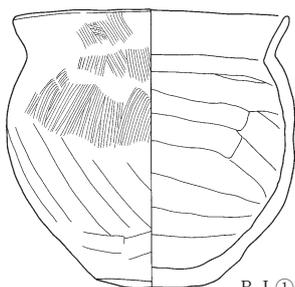
A I ①



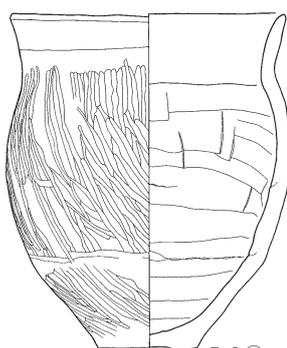
A I ②



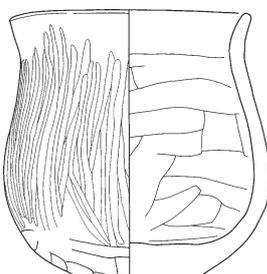
A II



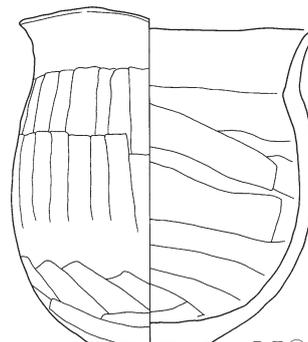
B I ①



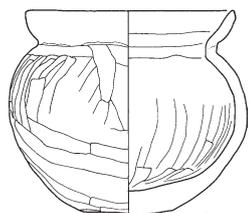
B I ②



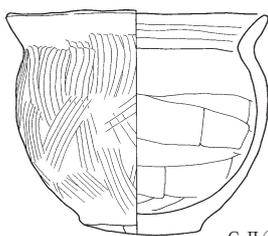
B II ①



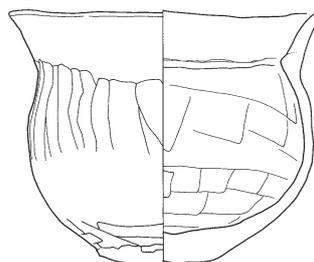
B II ②



C I



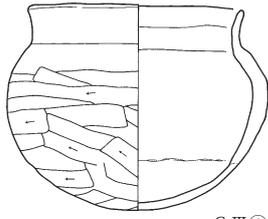
C II ①



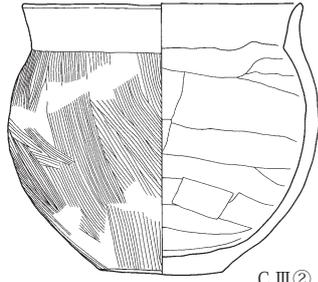
C II ②

0 1:6 12cm

小型甕

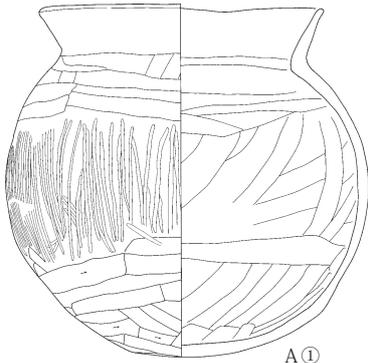


C III ①

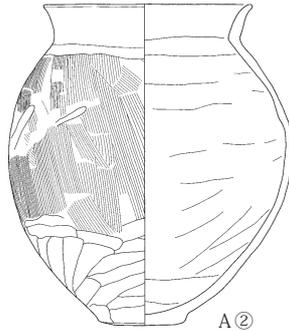


C III ②

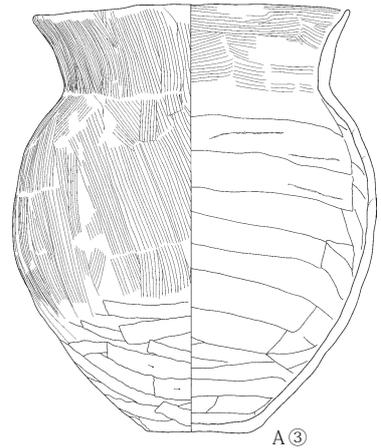
甕



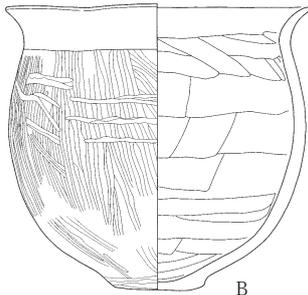
A ①



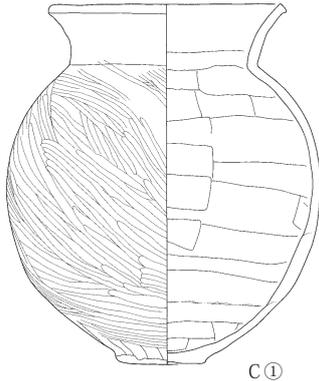
A ②



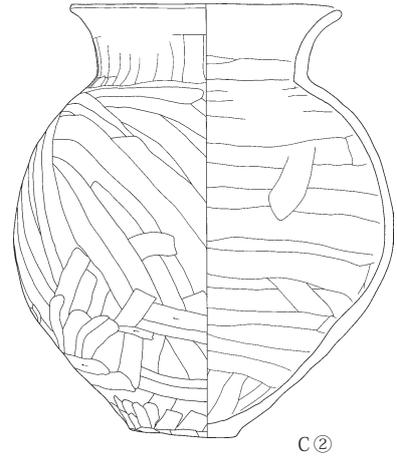
A ③



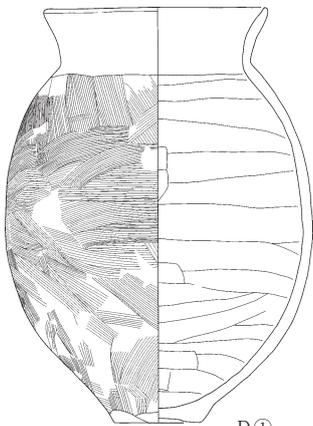
B



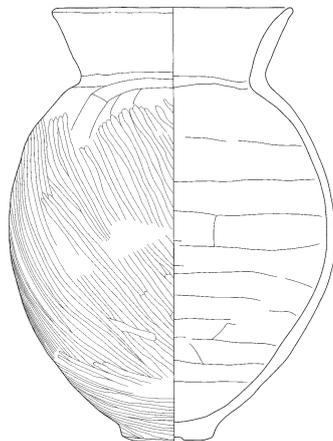
C ①



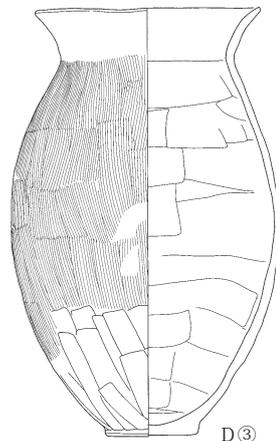
C ②



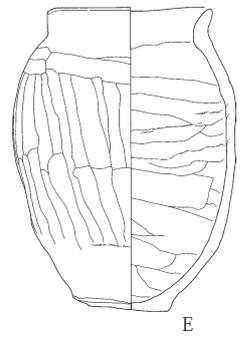
D ①



D ②



D ③



E

0 1:6 12cm

②は、外面に刷毛目調整を行うもの(1例)、磨きを施すもの(2例)へら削りのみのもの(3例)の3類に区分される。

③は、外面に刷毛目調整を行うもの(1例)、へら削りのみのもの(2例)の2類に区分される。

B類 刷毛目調整のもの(1例)と磨きが施されるもの(1例)の2類に区分される。

C類 ①は、外面に刷毛目調整を行うもの(3例)、磨きを施すもの(3例)へら削りのみのもの(11例)の3類に区分される。②は、同じく外面に刷毛目調整を行うもの(1例)、磨きを施すもの(1例)、へら削りのみのもの(2例)の3類に区分される。

D類 ①は、外面は、刷毛目調整のもの(1例)、へら削りのみである(7例)である。

②は、外面に刷毛目調整を行うもの(1例)、磨きを施すもの(3例)、へら削りのみのもの(3例)の3類に区分される。③は、外面に磨きのもの(1例)、刷毛目調整のもの(1例)、へら削りのもの(3例)の3類に区分される。

E類 外面へら削り調整(1例)である。

石製模造品

石製模造品の中で、分類が必要な勾玉形・半円形・有孔円板形・有孔方板形・剣形について説明する。

勾玉形

勾玉状にくの字に屈曲するもので、単孔と双孔のものがある。さらに屈曲が目立たないものの3類に区分される。

I類 勾玉状に、くの字状に屈曲するもので、単孔のもの。

II類 勾玉状に、くの字状に屈曲するもので、双孔のもの。

III類 くの字状の屈曲が目立たず、窪み状を呈するもの。単孔のみ。

半円形

勾玉形のさらに簡略化されたものの可能性が高いが、かなり変異しており、ここでは独立した形式として取り扱う。半円形が整美なもの、多角形状のものに区分され、さらに多角形状のものは単孔と双孔のものに区分される。

I類 半円形が整美でやや多角形状を呈するものもあるが、円弧状を意識しているもの。

II類 半円形というより多角形状を呈している。かなり形態が変異しているものもある。

III類 II類の形態で、双孔を有するもの。

有孔円板形

いずれも双孔を中央部付近に有し、円形に近い多角形状と、多角形状化が進んだ形状のもの2類に分かれる。

I類 円形に近いが多角形状の調整が少し残るもの。大型のものが中心である。

II類 多角形状の平面で、小型化したものが多い。

有孔方板形

盾形の形骸化したものの可能性が高いが、有孔円板形・剣形の変化形とも考えられる。個数も多いので、ある程度独立した形態として認定して、有孔方板形とする。双孔のものと単孔のもの2類に区分される。

I類 双孔を有するもの。

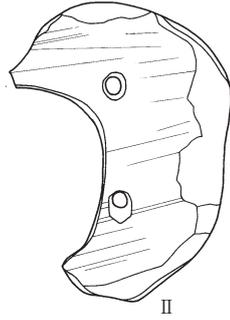
II類 単孔を有するもの。

剣形

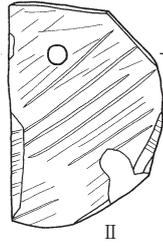
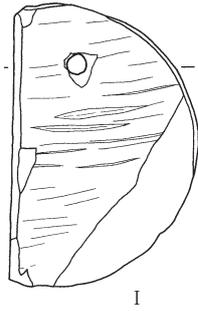
剣形品は多数出土している。東日本全体の特徴と言える。頂辺部が、円弧状あるいは多角形状を呈して尖る形態を示すもので、単孔のものと双孔のものに2区分される。ほぼ直線状に截断されているものも、単孔のものと双孔のものに2区分され、計4類に大区分される。

I類 頂辺部が、円弧状や多角形状で、頂部が尖る形態を示しているもので、単孔のもの。数は少ない。さらに、剣先部を直線状に截断するものをb類として区分する。

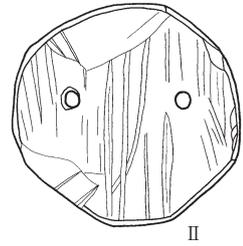
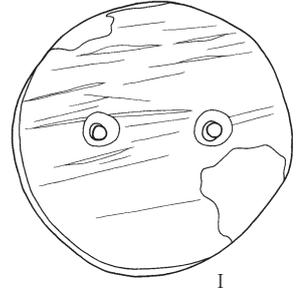
勾玉形



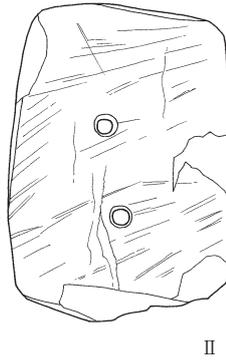
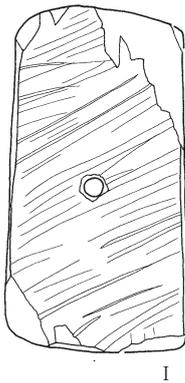
半円形



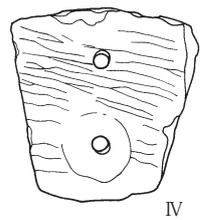
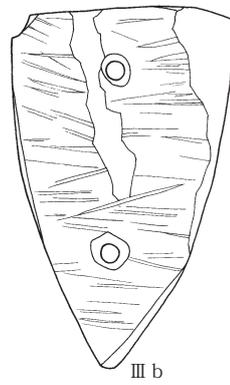
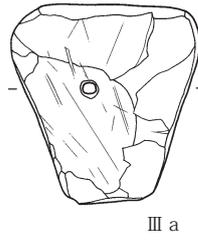
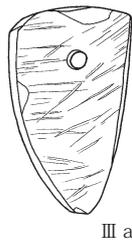
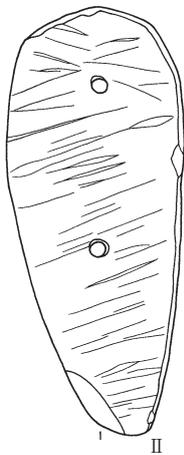
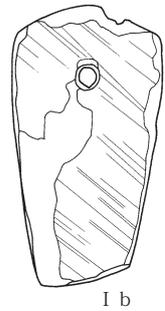
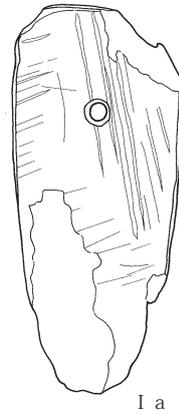
有孔円板形



有孔方板形



劍形



0 1:1 2cm

Ⅱ類 頂辺部が、円弧状や多角形状で、頂部が尖る形態を示しているもので、双孔のもの。最も数が多く、大型から小型まで万遍なくある。

Ⅲ類 頂辺部が、直線状に截断されているもので、単孔である。さらに、剣先部を直線状に截断するものをb類として区分する。

Ⅳ類 頂辺部が、直線状に截断されているもので、双孔である。一方の角を斜めにカットしているものもある。大型から小型まである。さらに、剣先部も直線状に截断しているものをB類として区分する。

I・Ⅲ・Ⅳ類のB類はあるいは有孔方形板の可能性もあるが、三角形の形態を優先して、剣形品の中を含めたものである。

白玉

白玉は総数1万個に及ぶ数量である。白玉の型式分類は、篠原氏の分類に拠った。分類は、4段階に区分される。ただし、篠原分類の側面形A類(算盤玉形)、側面研磨状況の1類(縦方向に研磨)は当遺跡では認められない。

①側面形

B類 棗玉(太鼓形)は、中央に明瞭な張りを持つもの C類 弱い棗玉形 D類 円筒形

E類 高さが直径以上で管玉形(弱い棗玉形) F類 高さが直径以上で管玉形(円筒形) G類 高さが直径1/3以下のもの(平玉形)

②側面研磨状況

2類 斜め方向 3類 縦方向 4類 研磨方向不明 5類 研磨無し

③孔面研磨状況

a類 両面研磨 b類 片面研磨 c類 研磨無し

④ 穿孔方向

I 両面穿孔 II 片面穿孔 錐先貫通 III 片面穿孔 裏面押圧剥離貫通 IV 片面穿孔錐先先端割れ

V 片面穿孔 両面に穿孔時の割れあり ただし、ⅢとⅣの区別は現実的に難しいところがある。

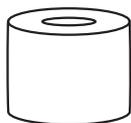
① 側面形



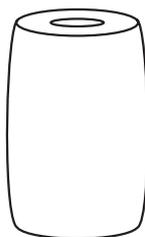
B 棗玉形(太鼓)



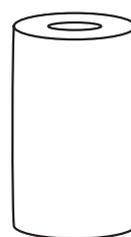
C 弱い棗玉形



D 円筒形



E 管玉形
(弱い棗玉形)

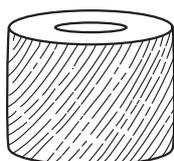


F 管玉形
(円筒形)

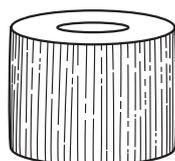


G 平玉形

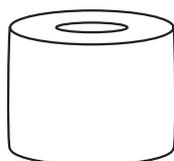
② 側面研磨状況



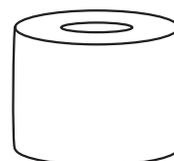
2



3

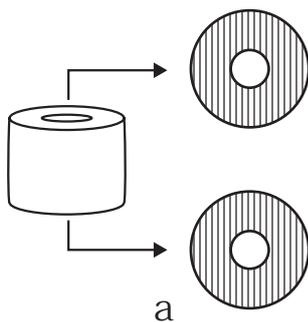


4

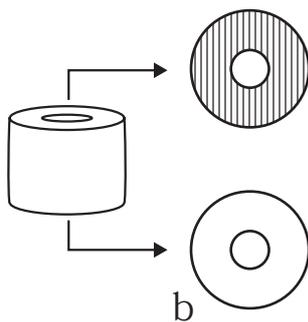


5

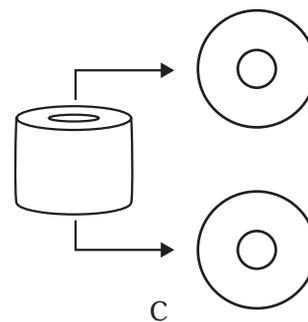
③ 孔面研磨状況(擦痕)



a

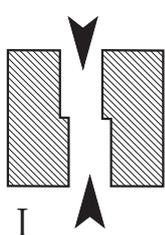


b

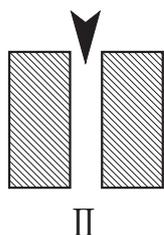


c

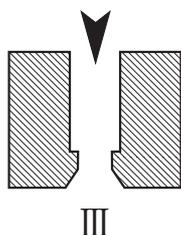
④ 穿孔方向



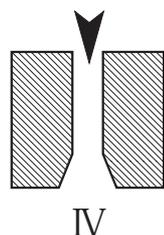
I



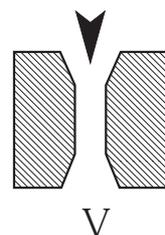
II



III



IV



V

金井東裏遺跡報告書総目次

本文編

本文編 1 (第 1 分冊)

口絵

序

例言

凡例

総目次

目次

挿図目次

写真目次

表目次

第 I 章 調査の経過と方法

第 II 章 遺跡の立地と環境

第 III 章 発見された遺構と遺物

第 1 節 5 面遺構

本文編 2 (第 2 分冊)

目次

挿図目次

表目次

本文写真目次

第 III 章 発見された遺構と遺物

第 2 節 4 面遺構

第 3 節 3-2 面遺構

第 4 節 3-1 面遺構

第 5 節 2 面遺構

第 IV 章

まとめ

英文・韓文・中文まとめ

報告書抄録

写真図版編(第 3 分冊)

図版目次

遺構図版

遺物図版

観察表編(第 4 分冊)

凡例

表目次

遺構計測表

遺物観察表

理学分析編・考察編(第 5 分冊)

目次

挿図目次

表目次

写真目次

理学分析編

考察編

本文編 1 目次

口絵	2	旧石器時代	25
序	3	縄文時代	25
例言	4	弥生時代	25
凡例	5	古墳時代	26
総目次	6	奈良・平安時代	30
目次	7	中世	30
挿図目次	8	近世	30
写真目次		第3節 遺跡の基本層序	34
表目次		1 地形変化と土層	34
		2 基本土層	37
		3 各地点でのHr-FAテフラ層の状況	39
		4 遺構確認面	41
		5 Hr-FAの年代について	41
第I章 調査の経過と方法	1	第III章 発見された遺構と遺物	42
第1節 調査に至る経過	1	第1節 5面遺構	42
第2節 4・9区の現地保存に至る経過	2	1 5面遺構全体状況	43
第3節 調査の経過	3	2 10区5面遺構	43
1 調査の全体工程	3	3 9区5面遺構	43
2 調査の開始	3	(1) 1号墳	45
3 「甲を着た古墳人」の発見	3	(2) 2号墳	63
4 4区古墳時代以降継続と3号人骨発見	4	(3) 43号竪穴建物	75
5 火山灰面に足跡・馬蹄跡の発見	5	(4) 46号竪穴建物	78
6 3号人骨調査と4号人骨発見、1号古墳・		(5) 畠・土坑・ピット	82
3号祭祀遺構の調査	5	(6) トレンチで確認した竪穴建物	83
第4節 調査の方法	8	4. 4区5面遺構	87
第5節 甲着裝人骨等詳細調査に至る経緯	11	(1) 3号竪穴建物	87
1 委員会立ち上げの経緯	11	(2) 21号竪穴建物	93
2 調査検討委員会の経過	12	(3) 25号竪穴建物	99
3 詳細調査報告書の刊行	15	(4) 28号竪穴建物	106
第6節 その他の整理作業の経過	15	(5) 26号竪穴建物	106
		(6) 20号竪穴建物	115
第II章 遺跡の立地と環境	17	(7) 10号竪穴建物	128
第1節 地理的環境	17	(8) 9号竪穴建物	130
1 関東平野	17	(9) 11号竪穴建物	138
2 榛名山北東麓	17	(10) 焼土・土坑群他	139
3 榛名山の活動	18	(11) 馬歯の出土	142
4 金井東裏遺跡の地形的特徴	20	5. 2区5面遺構	143
5 遺跡地の地質について	23	(1) 1号竪穴建物	143
6 まとめ	23		
第2節 歴史的環境	25		
1 はじめに	25		

(2)7号豎穴建物	152
(3)5号豎穴建物	161
(4)6号豎穴建物	164
(5)1号豎穴状遺構	164
(6)2号豎穴状遺構	171
(7)焼土・土坑・ピット群	172
6 3区5面遺構	177
(1)溝・ピット群	177
7 1区5面遺構	179
(1)土坑群・ピット群	179
8 8区5面遺構	181
(1)68号豎穴建物	181
(2)70号豎穴建物	184
9 7区5面遺構	185
(1)39号豎穴建物	185
(2)72号豎穴建物	193
(3)53号豎穴建物	204
(4)40号豎穴建物	206
(5)32号豎穴建物	217
(6)38号豎穴建物	230
(7)41号豎穴建物	230
(8)37号豎穴建物	235
(9)36号豎穴建物	239
(10)11号平地建物	240
(11)1号方形周溝遺構	244
(12)2号方形周溝遺構	244
(13)集石・焼土・畠・土坑群	247
10 5区5面遺構	257
(1)13号豎穴建物	257
(2)15号豎穴建物	258
11 5面遺構面出土遺物	263

挿図目次

第1図	金井バイパス事業地と金井東裏遺跡調査区全体図	1	第61図	3号竪穴建物全体図・土層断面図	88
第2図	調査区配置図	10	第62図	3号竪穴建物炭化材等出土状況図・土層断面図	89
第3図	日本地形図	17	第63図	3号竪穴建物平面図・掘方図・土層断面図・断面図	90
第4図	中部～東北部地形図	17	第64図	3号竪穴建物カマド図・土層断面図	91
第5図	群馬県地形図	18	第65図	3号竪穴建物出土遺物図1	92
第6図	金井東裏遺跡(榛名山・赤城山・子持山・小野子山)地形図	19	第66図	3号竪穴建物出土遺物図2	93
第7図	榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)火砕流・火山灰分布図	20	第67図	21号竪穴建物全体図・土層断面図	94
第8図	榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)火砕流・軽石分布図	20	第68図	21号竪穴建物炭化材・遺物出土状況図・土層断面図	95
第9図	金井東裏遺跡周辺地形図	21	第69図	21号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図	96
第10図	榛名山・赤城山付近地質図	22	第70図	21号竪穴建物出土遺物図	97
第11図	金井東裏遺跡周辺地形図	22	第71図	25号竪穴建物全体図・土層断面図	98
第12図	金井東裏遺跡周辺遺跡分布図(古墳時代前期～Hr-FA下)	24	第72図	25号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図	99
第13図	金井東裏遺跡周辺遺跡分布図(Hr-FA上～7世紀)	29	第73図	25号竪穴建物断面図・土層断面図	100
第14図	金井東裏遺跡各調査区基本土層配置図	35	第74図	25号竪穴建物カマド図・土層断面図	101
第15図	金井東裏遺跡各調査区基本土層断面図	36	第75図	25号竪穴建物カマド掘方図・竪穴建物掘方図・土層断面図	102
第16図	金井東裏遺跡基本土層模式図	38	第76図	25号竪穴建物出土遺物図1	103
第17図	金井東裏遺跡各調査区・遺構でのテフラ層堆積土層断面比較図	40	第77図	25号竪穴建物出土遺物図2	104
第18図	5面遺構全体図	42	第78図	25号竪穴建物出土遺物図3	105
第19図	10区5面遺構全体図	43	第79図	28号竪穴建物全体図・土層断面図	107
第20図	10区5面土坑図	44	第80図	28号竪穴建物炭化材等出土状況図・遺物出土状況図・土層断面図	108
第21図	9区5面遺構全体図	45	第81図	28号竪穴建物断面図・カマド図・土層断面図	109
第22図	1号墳全体図	46	第82図	28号竪穴建物カマド遺物出土状況図・掘方図・竪穴建物掘方図・土層断面図	110
第23図	1号墳立面図・フク土土層断面図	47	第83図	28号竪穴建物出土遺物図	111
第24図	1号墳周掘埋土土層断面図・断面図	48	第84図	26号竪穴建物全体図・土層断面図	112
第25図	1号墳葺石石材種別図	49	第85図	26号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図・断面図	113
第26図	1号墳墳丘頂部平坦面遺物出土状況図	50	第86図	26号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図	114
第27図	1号墳第1・2主体部断割土層断面図・断面図	51	第87図	26号竪穴建物出土遺物図	115
第28図	第2主体部構築状況図・埋土土層断面図	52	第88図	20号竪穴建物全体図・土層断面図	116
第29図	第1主体部遺物出土状況図・立面図・土層断面図・断面図	53	第89図	20号竪穴建物遺物出土状況図・平面図・土層断面図	117
第30図	第1主体部遺物出土状況拡大図	54	第90図	20号竪穴建物断面他図	118
第31図	第2主体部遺物出土状況図・立面図	55	第91図	20号竪穴建物カマド図・土層断面図	119
第32図	1号墳出土遺物図	56	第92図	20号竪穴建物カマド掘方図・竪穴建物掘方図・断面図	120
第33図	1号墳第1主体部出土素環頭大刀図	57	第93図	20号竪穴建物出土遺物図1	121
第34図	1号墳第1主体部出土剣図	58	第94図	20号竪穴建物出土遺物図2	122
第35図	1号墳第1主体部出土鎌図	59	第95図	20号竪穴建物出土遺物図3	123
第36図	1号墳第1主体部出土長頸鉄鎌図・第2主体部出土ガラス勾玉	60	第96図	20号竪穴建物出土遺物図4	124
第37図	2号墳全体図・土層断面図	64	第97図	20号竪穴建物出土遺物図5	125
第38図	2号墳フク土土層断面図	65	第98図	20号竪穴建物出土遺物図6	126
第39図	2号墳葺石断面図・墳丘裾遺物出土状況図	66	第99図	20号竪穴建物出土遺物図7	127
第40図	2号墳墳頂部遺物出土状況図・主体部付近遺物出土状況図	67	第100図	10号竪穴建物平面図・土層断面図	128
第41図	2号墳主体部内平面図・断面図・遺物出土状況図	68	第101図	10号竪穴建物断面他図	129
第42図	2号墳主体部平面図・土層断面図・断面図	69	第102図	10号竪穴建物掘方図・出土遺物図	130
第43図	2号墳墳頂部出土土器・主体部内副葬品図	70	第103図	9号竪穴建物炭化材等出土状況図・遺物出土状況図	131
第44図	2号墳主体部内副葬品図2・墳頂部出土鉄器	71	第104図	9号竪穴建物平面図・土層断面図	132
第45図	2号墳墳裾出土鎌図	72	第105図	9号竪穴建物断面他図	133
第46図	2号墳墳裾出土鑿図	73	第106図	9号竪穴建物カマド図・土層断面図	134
第47図	2号墳墳裾出土鉤図	74	第107図	9号竪穴建物貯蔵穴図・竪穴建物掘方図・土層断面図	135
第48図	43号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図	75	第108図	9号竪穴建物出土遺物図1	136
第49図	43号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図	76	第109図	9号竪穴建物出土遺物図2	137
第50図	43号竪穴建物出土遺物図1	77	第110図	9号竪穴建物出土遺物図3	138
第51図	43号竪穴建物出土遺物図2	78	第111図	11号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図	139
第52図	46号竪穴建物平面図・土層断面図・掘方図・カマド図他	79	第112図	4区焼土・土坑図・土層断面図・出土遺物図	140
第53図	46号竪穴建物出土遺物図1	80	第113図	4区土坑・ピット図・土層断面図	141
第54図	46号竪穴建物出土遺物図2	81	第114図	4区馬歯出土図	142
第55図	畠・土坑・ピット平面図・土層断面図	82	第115図	2・3区5面遺構全体図	143
第56図	トレンチによる竪穴建物(45・47・48・50号)確認状況図	83	第116図	1号竪穴建物全体図・土層断面図	144
第57図	1～3号トレンチ土層断面図	84	第117図	1号竪穴建物遺物出土状況図	145
第58図	4～10号トレンチ土層断面図	85	第118図	1号竪穴建物土層断面図・断面図	146
第59図	45・47・48・50号竪穴建物出土遺物図	86	第119図	1号竪穴建物炉・柱穴等土層断面他図	147
第60図	4区5面遺構全体図	87	第120図	1号竪穴建物掘方図・土層断面	148
			第121図	1号竪穴建物出土遺物図1	149

第122図	1号竪穴建物出土遺物図2	150	第187図	40号竪穴建物周辺溝図2、土層断面図・集石・集石出土遺物図	213
第123図	1号竪穴建物出土遺物図3	151	第188図	40号竪穴建物出土遺物図1	214
第124図	1号竪穴建物出土遺物図4	152	第189図	40号竪穴建物出土遺物図2	215
第125図	7号竪穴建物全体図・土層断面図	153	第190図	40号竪穴建物出土遺物図3	216
第126図	7号竪穴建物遺物出土状況図	154	第191図	40号竪穴建物出土遺物図4	217
第127図	7号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図	155	第192図	32号竪穴建物全体図・土層断面図	218
第128図	7号竪穴建物柱穴等断面図・カマド図・土層断面図	156	第193図	32号竪穴建物全体断面他図	219
第129図	7号竪穴建物掘方他図・出土遺物図1	157	第194図	32号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図	220
第130図	7号竪穴建物出土遺物図2	158	第195図	32号竪穴建物断面他図	221
第131図	7号竪穴建物出土遺物図3	159	第196図	32号竪穴建物カマド図・土層断面図	222
第132図	7号竪穴建物出土遺物図4	160	第197図	32号竪穴建物掘方図	223
第133図	5号竪穴建物全体図・平面図・土層断面図	161	第198図	32号竪穴建物集石図・集石出土遺物図1	223
第134図	5号竪穴建物カマド図・土層断面図	162	第199図	32号竪穴建物集石図・集石出土遺物図2	224
第135図	5号竪穴建物出土遺物図	163	第200図	32号竪穴建物出土遺物図1	224
第136図	6号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図	163	第201図	32号竪穴建物出土遺物図2	225
第137図	1号竪穴状遺構遺物出土状況図・土層断面図	164	第202図	32号竪穴建物出土遺物図3	226
第138図	1号竪穴状遺構平面図・土層断面図	165	第203図	38号竪穴建物全体図・土層断面図	227
第139図	1号竪穴状遺構炉平面図・断面図・出土遺物図1	166	第204図	38号竪穴建物平面図・土層断面図	228
第140図	1号竪穴状遺構出土遺物図2	167	第205図	38号竪穴建物掘方図・カマド図	229
第141図	1号竪穴状遺構出土遺物図3	168	第206図	38号竪穴建物集石図・集石出土遺物図	229
第142図	1号竪穴状遺構出土遺物図4	169	第207図	38号竪穴建物出土遺物図1	229
第143図	1号竪穴状遺構出土遺物図5	170	第208図	38号竪穴建物出土遺物図2	230
第144図	2号竪穴状遺構平面図・土層断面図	171	第209図	41号竪穴建物全体図・土層断面図	231
第145図	2号竪穴状遺構出土遺物図	172	第210図	41号竪穴建物平面図・土層断面図	232
第146図	2区焼土平面図・出土遺物図・土層断面図	173	第211図	41号竪穴建物カマド図・土層断面図	233
第147図	2区土坑図1・土層断面図	174	第212図	41号竪穴建物掘方図・竪穴建物出土遺物図1	234
第148図	2区土坑図2・土層断面図	175	第213図	41号竪穴建物出土遺物図2	235
第149図	2区土坑図3・ピット図1・土層断面図	176	第214図	37号竪穴建物全体図・土層断面図	236
第150図	2区ピット図2・土層断面図	177	第215図	37号竪穴建物平面図・土層断面図・カマド図	237
第151図	3区溝・ピット図・土層断面図	178	第216図	37号竪穴建物掘方図・土層断面図	238
第152図	1区5面遺構全体図	179	第217図	37号竪穴建物集石図・土層断面図・集石出土遺物図	238
第153図	1区土坑図1・土層断面図	179	第218図	37号竪穴建物出土遺物図	238
第154図	1区土坑図2・ピット図・土層断面図	180	第219図	36号竪穴建物全体図・土層断面図	239
第155図	8区5面遺構全体図	181	第220図	36号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図	240
第156図	68号竪穴建物遺物出土状況図・平面図・土層断面図	181	第221図	11号平地建物平面図・土層断面図	241
第157図	68号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図	182	第222図	11号平地建物出土遺物図1	242
第158図	70号竪穴建物平面図・土層断面図	183	第223図	11号平地建物出土遺物図2	243
第159図	70号竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図	184	第224図	1号方形周溝遺構平面図・土層断面図	245
第160図	7区5面遺構全体図	186	第225図	1号方形周溝遺構断面図・土層断面図・出土遺物図	246
第161図	39号竪穴建物全体図・土層断面図	187	第226図	1号方形周溝遺構集石図・出土遺物図	246
第162図	39号竪穴建物周堤断面図・竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図	188	第227図	1号方形周溝遺構フク出土遺物(弥生時代)	247
第163図	39号竪穴建物土層断面図・断面図1	189	第228図	2号方形周溝遺構平面図・土層断面図	248
第164図	39号竪穴建物土層断面図・断面図2	190	第229図	2号方形周溝遺構断面図・掘方図・土層断面図	249
第165図	39号竪穴建物掘方図・土層断面図	191	第230図	2号方形周溝遺構出土遺物図	250
第166図	39号竪穴建物集石図・土層断面図・出土遺物図	192	第231図	7区集石図・土層断面図・出土遺物図1	251
第167図	39号竪穴建物出土遺物図1	192	第232図	7区集石図・土層断面図・出土遺物図2	252
第168図	39号竪穴建物出土遺物図2	193	第233図	7区集石図・土層断面図・出土遺物図3	253
第169図	72号竪穴建物出土遺物図・土層断面図	194	第234図	7区集石図・土層断面図・出土遺物図4	254
第170図	72号竪穴建物平面図・土層断面図	195	第235図	7区14号島平面図・土層断面図	255
第171図	72号竪穴建物断面図・カマド図・土層断面図	196	第236図	7区焼土・土坑図・土層断面図	256
第172図	72号竪穴建物掘方図	197	第237図	5区5面遺構全体図	257
第173図	72号竪穴建物出土遺物図1	198	第238図	13号竪穴建物全体図・断面図	257
第174図	72号竪穴建物出土遺物図2	199	第239図	13号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図	258
第175図	72号竪穴建物出土遺物図3	200	第240図	13号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図1	259
第176図	72号竪穴建物出土遺物図4	201	第241図	13号竪穴建物出土遺物図2	260
第177図	72号竪穴建物出土遺物図5	202	第242図	15号竪穴建物平面図・土層断面図	260
第178図	53号竪穴建物平面図・土層断面図・掘方図	203	第243図	15号竪穴建物出土遺物図1	261
第179図	53号竪穴建物カマド図・土層断面図	204	第244図	15号竪穴建物出土遺物図2	262
第180図	53号竪穴建物出土遺物図	205	第245図	97号土坑図・土層断面図	262
第181図	40号竪穴建物全体図・土層断面図	207	第246図	5面遺構外出土遺物図1(9区)	263
第182図	40号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図	208	第247図	5面遺構外出土遺物図2(4・2区)	264
第183図	40号竪穴建物断面他図	209	第248図	5面遺構外出土遺物図3(2・1区)	265
第184図	40号竪穴建物カマド図・土層断面図	210	第249図	5面遺構外出土遺物図4(8・7区)	266
第185図	40号竪穴建物掘方図	211	第250図	5面遺構外出土遺物図5(7区)	267
第186図	40号竪穴建物周辺溝図1・土層断面図	212	第251図	5面遺構外出土遺物図6(7区)	268

表 目 次

第1表	甲着装人骨等詳細調査の実施経過	16
第2表	金井東裏遺跡周辺遺跡一覧表（1）	31
第2表	金井東裏遺跡周辺遺跡一覧表（2）	32

本文写真目次

写真1	平成24年度第1回調査検討委員会	14
写真2	平成24年度第1回調査検討委員会	14
写真3	平成25年度第1回調査検討委員会	14
写真4	平成25年度第1回調査検討委員会	14
写真5	平成25年度第3回調査検討委員会	14
写真6	平成26年度第2回調査検討委員会	14
写真7	平成27年度第1回調査検討委員会	14
写真8	平成28年度第1回調査検討委員会	14

第I章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経過

上信自動車道は、群馬県渋川市の関越自動車道渋川伊香保インターチェンジ付近と長野県東御市の上信越自動車道東部湯の丸インターチェンジ付近とを結ぶ地域高規格道路であり、平成6年に計画路線に指定された。計画延長は約80kmである。また、群馬県が推進する「群馬がはばたくための7つの交通軸構想」の一翼を担う路線として、群馬県から長野県にかけての交流促進、そして、吾妻地域内の連携強化及び地域の農業・観光・医療・物流等、多方面における機能向上を目指す重要な路線である。

金井バイパスは、この上信自動車道の一部を構成し、平成17年3月に整備区間指定を受けている。整備区間は約1kmであり、南は渋川市入沢付近で渋川西バイパスに、北は渋川市金井地内で川島バイパスに接続する計画であ

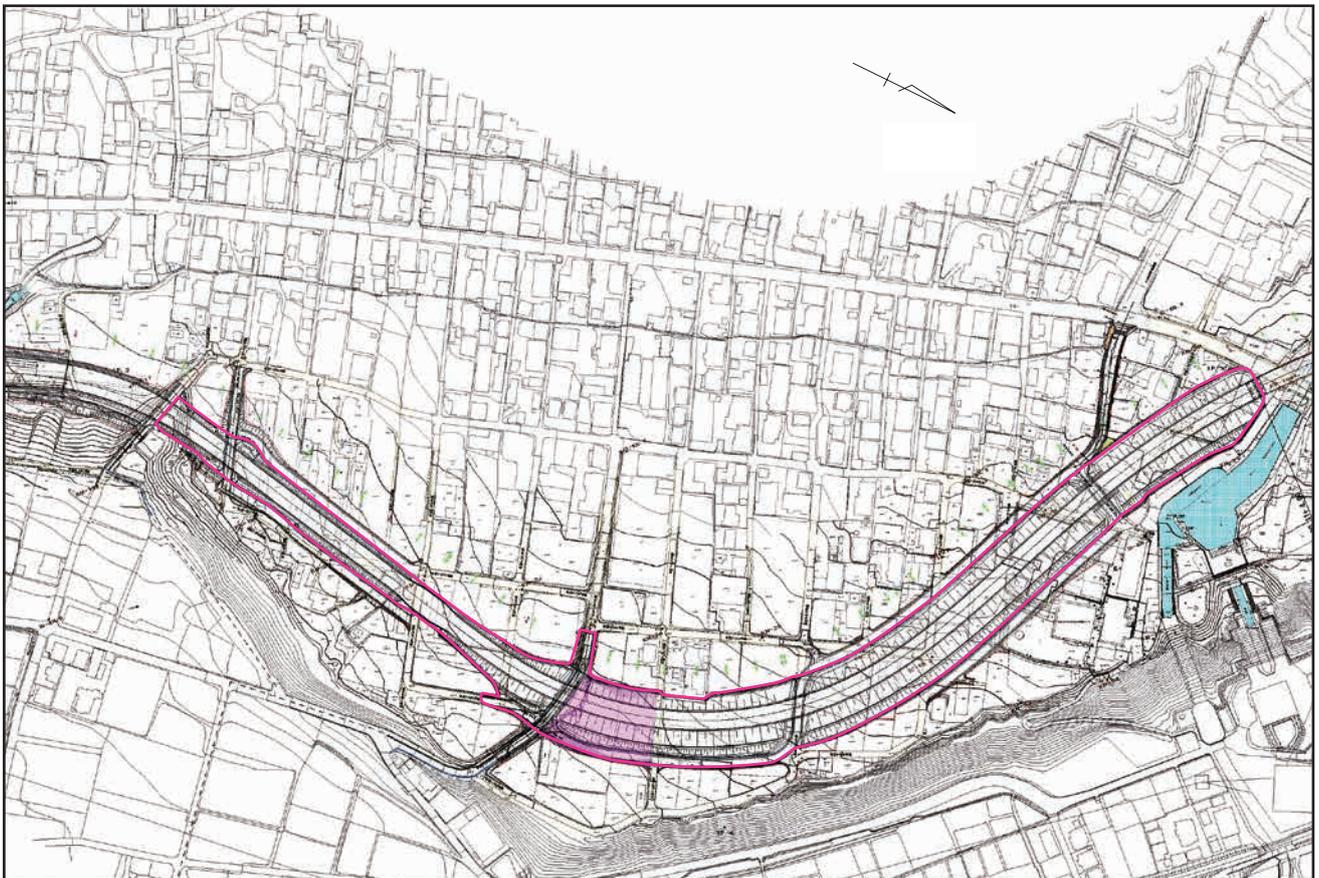
る。

本事業に伴う埋蔵文化財調査は、平成22年5月11日付けで群馬県県土整備部監理課建設政策室から群馬県教育委員会文化財保護課(以下、県文化財保護課)に、事業地内の埋蔵文化財の取扱いについて照会があったことに始まる。県文化財保護課は、事業地内の一部に周知の埋蔵文化財包蔵地が含まれ、また、新たな埋蔵文化財包蔵地が見つかる可能性も高いことから、平成22年5月22日付けで、事業地全線において埋蔵文化財の有無及び内容を確認するための試掘確認調査が必要であることを回答した。

その後、事業主体である渋川土木事務所からの依頼を受け、県文化財保護課が試掘・確認調査を実施した。試掘・確認調査の経過は、以下の通りである。

①平成24年2月15・16日

金井東裏遺跡調査区の2・4・5・7・10・13区に該



第1図 金井バイパス事業地と金井東裏遺跡調査区全体図

第1章 調査の経過と方法

当する地区で実施。古墳時代の遺構及び縄文時代から古墳時代にかけての遺物を検出し、試掘依頼地の全域において発掘調査が必要と判断。

②平成24年10月24日

金井東裏遺跡調査区の9区及び13区より北の地点で実施。9区では、古墳時代の遺構を検出し、発掘調査が必要と判断。13区より北については、遺構・遺物ともに検出されず発掘調査は不要と判断。

③平成25年2月28日

金井東裏遺跡調査区の13区に該当する地点で実施。古墳時代の遺構を検出。北側の攪乱を受けている範囲を除き発掘調査が必要と判断。

なお、金井バイパスの事業地内には、試掘・確認調査の実施前に2カ所の周知の埋蔵文化財包蔵地が把握されていた。東裏遺跡と金井丸山遺跡である。これらの遺跡は、切り通し法面からの遺物採取等による把握であったことから、その範囲は局所的なものであった。このため、本事業に伴う試掘・確認調査の結果を踏まえ、渋川市教育委員会において埋蔵文化財包蔵地の見直しが行われた。その結果、平成24年7月3日付けで渋川市教育委員会から埋蔵文化財包蔵地の把握について報告があり、県教育委員会は平成24年7月9日付けで埋蔵文化財包蔵地の変更について決定した。その内容は、東裏遺跡の遺跡名称を金井東裏遺跡に変更する。そして包蔵地の範囲を大幅に拡大し、もとの東裏遺跡と金井丸山遺跡を含む範囲とする。その上で、金井丸山遺跡という遺跡名称は削除する、としたものである。

金井東裏遺跡の発掘調査は、平成24年7月23日付けで群馬県知事より文化財保護法第94条に基づく通知があり、県教育委員会教育長が記録保存のための発掘調査の実施を勧告したことによる。これを受け、県文化財保護課は発掘調査を公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(以下、県埋文事業団)が実施することで調整を行った。平成24年8月1日に渋川土木事務所長と県埋文事業団理事長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、同日、県埋文事業団理事長は、文化財保護法第92条第1項の届出を提出した。発掘調査期間は平成24年9月1日から平成25年3月31日までである。その後、事業用地の買収状況及び発掘調査の進捗に応じて、随時、調査範囲の変更、追加を行い最終的に1～7区の調査を実施した。

平成25年度は、平成25年4月1日から平成26年3月31日までに1、4、7～10、12、13区の発掘調査を実施した。

平成26年度から平成28年度は、同じく金井バイパスの事業地内にある金井下新田遺跡の発掘調査と同一契約で実施した。平成26年度の調査期間は、平成26年4月1日から平成27年3月31日である。金井東裏遺跡については7・9区の一部を発掘調査し、現地保存の決定した4区及び9区の埋め戻しを実施した。

平成27年度の調査期間は、平成27年4月1日から平成28年3月31日である。4区及び9区の現地保存の決定に伴う橋梁の橋台・橋脚工事の開始に合わせ、現道下等のため未調査であった範囲の発掘調査を実施した。なお、10区の一部についても発掘調査を実施する計画であったが、用地買収の状況及び他調査区の調査進捗状況から次年度以降に延期になった。

平成28年度の調査期間は、平成28年4月1日から平成29年3月31日である。平成27年度に予定されていた10区の未調査部の調査を実施した。

第2節 4・9区の現地保存に至る経過

平成24年9月1日から開始された金井東裏遺跡の発掘調査は、約2カ月が経過した11月19日に考古学史に残ることになるであろう大きな発見があった。

4区において、古墳時代の榛名山噴火(Hr-FA)に伴う火山灰や火砕流堆積物に覆われた溝の調査時に、その火砕流堆積物の中から骨及び鉄製品が出土し、その後の調査によって、骨は人骨であり、鉄製品は小札甲であることが判明したのである。甲着装人骨の発見である。これを受け、県埋文事業団は12月10日に遺跡現地において報道機関向けの説明会と現地公開を開催した。次いで、12月12日に一般向けの現地公開を開催したところ、平日にもかかわらず2,635人もの見学者が駆けつけた。その後、甲着装人骨は、冬期の降霜等の影響を考慮し、発泡ウレタンで保護しつつ周囲の土ごと切り取って県埋文事業団に運び込み、室内で調査を実施することとした。平成25年3月3日から8日には、室内での調査に先立ち、運び込んだ甲着装人骨の一般公開を開催した。6日間に訪れた見学者は8,306人を数えた。甲着装人骨に対する関心の高さをうかがわせるものであった。

11月19日の最初の発見では、甲着裝人骨の他に別の小札甲1領と2号人骨も発見されており、その後も、4区では3号人骨や鉄鉾や鉄鍬など関連遺物の発見が相次いだ。平成25年度には、4区の北に隣接する9区の調査が開始され、両区の調査が並行して行われた。4区では、昨年に引き続き、4号人骨や900点以上の土器類や多数の石製模造品、玉類、鉄製品等が出土した土器集積遺構、道の上に降り積もった火山灰の上に残された無数の足跡などが続々と発見された。9区においても、火山灰直下から竪穴建物や平地建物、畑、2基の古墳などが検出され、赤玉や剣菱形杏葉など貴重な遺物も出土した。

このような発見が続くなか、県文化財保護課では、この遺跡の現地保存の可能性について検討をはじめることになる。まず発掘調査の方針として、保存範囲の検討をすべく、道路予定地全線において古墳時代の同一面(FA下面)までの調査を優先させる方針とした。その結果、道路予定地内では、4区及び9区に特に重要な発見が集中していることが判明した。このため、4区及び9区の調査をS₃下面までで中止し、埋め戻した上で現地保存が可能となるよう、県土整備部と協議を行うこととした。

平成25年10月17日には、県文化財保護課と県土整備部及び渋川土木事務所との間で、現地保存の可能性について最初の協議が行われた。その場では、結論は出なかったものの、保存に向け道路構造等の技術的検討を行うことについて前向きな回答を得た。その後も、現地保存についての協議を重ね、ついに、12月27日に行われた大沢正明群馬県知事の年末記者会見において、現地保存の方針が表明された。

ここにおいて、現地保存の方針は決定し、その保存範囲と道路構造の設計見直しの協議が本格化した。最終的には、道路構造を盛土構造から橋梁に変更し、4区及び9区を現地保存することに決定した。保存地区の南側の2区及び北側の10区付近に橋台を設置し、その間を橋桁にするというものである。ただし、構造上、保存範囲内に2基の橋脚が必要であることから、その範囲については、最終面まで発掘調査を実施する記録保存の措置をとることとした。

これにより保存範囲については、平成25年度にFA直下またはFAの最下層部であるS₁を残した状態で調査を中断し、平成26年度に遺構保護用の砂と遺跡の発掘で排出し

た火砕流堆積物を用いて埋め戻し現地保存を行っている。

第3節 調査の経過

1 調査の全体工程

金井東裏遺跡は現生活道によって1～13区の調査区に分けて調査した。各区の調査は、1～9区(13,536.13 m²)・10区 南部(1,916.72 m²)・12・13区(3,904.38 m²)を平成24年9月3日～平成26年3月31日、7区の一部(546.29 m²)を平成26年5月1日～20日、9区南部橋脚台部(221.21 m²)を平成27年2月4日～3月3日、9区北側橋脚台部(243.8 m²)を平成27年9月24日～10月2日、10区北部の925.93 m²を平成29年2月3日より平成29年2月17日の合計6次にわたって実施した。一部残置となった11区の731.73 m²については、平成29年度下半期に実施した。以下は古墳時代の遺構調査についてその経過について記すものである。

2 調査の開始

平成24年度

金井東裏遺跡は、平成24年9月3日に調査担当2人体制で調査に入った。翌日4日からバックホーを入れて表土掘削を開始した。2～4区を並行して掘削した。各区のHr-FP上の江戸期の面の調査を終了して、Hr-FPの掘削をバックホーにより開始したのが、2区で9月13日、3・4区で9月24日である。

2・3区は、9月26日にはHr-FP下で馬蹄痕等を確認し、調査開始した。4区は9月28日にHr-FP下の遺構調査開始。Hr-FAの掘削を3区は10月3日、2区は10月4日、4区は西部のごく一部で10月11日に開始した。2区はHr-FA下面遺構精査を10月9日に開始した。3区は、10月11日に古墳時代包含層(5面)調査を行い、遺構が検出され、10月15日には古墳時代遺構調査終了した。4区は11月7日より西部の大部分を重機によりHr-FP掘削を11月14日まで行った。その後、Hr-FP下面の馬蹄痕跡等の調査を行った。2区は10月18日にHr-FA下面の調査が終了。古墳時代包含層(5面)の調査に入った。

3 「甲を着た古墳人」の発見

平成24年11月19日に、4区の31号溝から甲を着たままの人物及び別の甲らしきものを発見した。

11月20日には、渋川土木事務所関係者及び、県文化財

第I章 調査の経過と方法

保護課関係者が来跡し、状況を確認した。さらに、古墳時代を専門とする事業団職員により、甲であることを確認した。また小札甲の可能性が高かったので、破片の一部を保存処理室でX線撮影を行った結果、小札甲であることが判明した。また、2号人骨(乳児骨)が出土し、すぐそばでガラス小玉2点が発見された。調査工程及び記者発表、九州大学田中良之教授への人骨調査について、事業団・県文化財保護課での協議を開始した。

11月21日には、事業団の理事長、常務、事業局長、副事業局長、担当課長、八ツ場ダム調査事務所長、渋川市教育委員会職員、右島和夫理事が状況確認のため来跡した。

11月26日には、栃木県文化振興事業団の内山敏行氏が甲の検討を行うために来跡した。

11月29日、九州大学大学院田中良之教授と舟橋京子助手、学生3名が、人骨の調査を30日まで行った。また、人骨と甲冑出土状態全景写真を撮影した。

12月3日に、調査担当者2名のうち1名について古墳時代を専門とする杉山と配置を交代した。また、人骨の調査が終了するまで桜岡統括が指導に参加することになった。12月5日に本部にて、右島理事を含めた金井東裏遺跡調査関係者で第1回プロジェクト会議を行い、金井東裏遺跡の評価・意義の共有化をはかり、記者発表・現地説明会の打ち合わせを行い、スケジュールを確認した。

12月10日に記者発表及び報道関係者に対する現地説明を実施した。

12月11日には県関係者(文化財保護課長、埋蔵文化財係長、県土整備部長、道路整備課長、渋川土木事務所長他)が視察した。また、調査では甲周辺を清掃して、外部委託による写真撮影と3次元測量を行った。

12月12日に現地説明会を開催し、一般に公開した。2635名の参加者があり、報道関係者も多数集まった。

12月13日には、1号甲の取り上げを14日に行うために甲のすぐ西側にある鉄鍬群の実測・取り上げを行った。並行して、1号甲・人骨の取り上げを依頼した元興寺文化財研究所所員により、甲周りの土を掘り下げ、ビニールをかけた後に発泡ウレタンを流し込んで、1号甲取り上げの準備を行った。金島小学校・中学校・教職員ら約500名が見学を訪れた。

12月14日は、1号人骨・1号甲の下部の掘り込みと鉄板を井桁状に組む作業を実施したが、礫層に当たり困難を極めた。待機していたクレーン車で吊り上げて、レッカー車に移動した。事業団本部へ向かい、クレーン車で吊り降ろし、保存処理室に運び込んだのが20時30分であった。また隣接して出土した2号甲は、当事業団の保存処理担当が取り上げた。

4 4区古墳時代遺構調査継続と3号人骨の発見

12月17日は、2・4区のHr-FA下面の古墳時代遺構調査を継続した。

12月20日に、新たな人骨を発見。後に3号人骨とされるものの脛骨である。翌21日には新聞朝刊に新たな人骨の発見の記事が報道された。また現地公開は行っていないが、道路から見学する人があとをたたないため、翌日からの3連休には民間の警備員を配置した。

12月25日には、金井東裏遺跡の調査方法を協議する第2回プロジェクト会議を開き、今後の甲調査・現場調査の計画を確認した。また、県教育長・教育次長、総務課長、渋川市長が現地視察した。

12月27日に、2区古墳時代遺構の年内調査が終了した。

平成25年1月4日から4区古墳時代遺構調査を継続した。調査担当が2名増員され、合計4名で調査を行うこととなった。

1月16日に第3回プロジェクト会議を開催した。5・6区調査の準備を行った。

1月17日の調査で、6区は深い谷となっていることがわかり、遺構を確認できなかったので6区の調査を終了した。5区調査は継続となった。

1月21日に、1区の表土掘削を開始した。

1月23日には、5区の表土掘削を開始した。

1月27日に、5区のHr-FPの掘削を開始した。

1月28日に、5区Hr-FP下面の調査を開始した。他で見られた馬蹄痕は確認できなかった。

1月29日には、火山灰考古学研究所早田勉氏が、火山灰分析のための調査を断続的に31日まで行った。また、同日、5区のHr-FAの掘削を開始した。

1月30日に、5区Hr-FA下面の遺構確認調査を行った。

2月4日には、県文化財保護審議委員・専門委員が来跡し、調査状況の視察をおこなった。1区のHr-FPの掘削を開始した。

2月18日に、7区の表土掘削を開始した。

2月20日に、1区のHr-FP下面の遺構調査を開始した。

2月26日に、1区のHr-FP下面の調査を終了した。また、7区のHr-FPの掘削を開始した。

2月27日に、1区のHr-FAの掘削を開始した。また、5区のHr-FA下面の遺構調査を終了した。

3月1日には、7区Hr-FP下面の調査を終了した。これで7区の当該年度の調査は一旦終了することとなった。

3月3日から8日まで、事業団本部にて1号人骨の一般公開を行った。合計8306人の見学者が来場した。

3月5日に、県知事、県教育長、渋川土木事務所長が視察した。

3月6日に、西村足利工業大学教授が、キャピラリーバリアの調査を実施した。また、須貝俊彦東京大学教授、吉田英嗣明治大学講師が来跡し、遺跡周辺の地形を調査した。

3月11日から13日まで、事業団本部にて九州大学田中教授グループの甲人骨詳細調査。

5 火山灰面に足跡・馬蹄痕の発見

3月12日に、1区で、Hr-FAのS₁面を踏み込んだ足跡・馬蹄痕を発見した。今までの調査で気づかなかった、足跡・馬蹄跡が出たことで調査の方法の再検討が必要となった。1区はS₁面での調査を継続することとした。他の調査区でもS₁面での足跡・馬蹄跡の確認・調査を行うこととした。

3月13日には、4区北側でも、S₁を踏み込んだ馬蹄痕が確認された。高田寛太国立歴史民俗資料館准教授が来跡した。

3月19日に、5区古墳時代遺構調査を終了した。

平成25年度

4月1日から、25年度の調査は、杉山・須田・宮下・山中の4人体制となった。

4月12日に、9区の表土掘削を開始した。

4月17日に、群馬県警察本部刑事部参事官兼鑑識科学センター長、県警刑事部科学捜査研究班職員2名が、足跡の調査の視察のため来跡した。

4月19日に、9区Hr-FP下面で円形状の高まりを発見した。古墳の可能性が考えられた。

6 3号人骨調査と4号人骨発見、1号古墳・3号祭祀遺構の調査

4月24日に、九州大学大学院田中教授他学生4名が来跡し、3号人骨の調査を開始する。

4月26日に、3号人骨と足跡の調査内容を記者発表した。

5月1日には、9区Hr-FP下面馬蹄痕を調査した。

5月7日に、4区3号祭祀遺構の調査を開始した。保存処理室関が3号人骨の取り上げ作業を開始した。

5月8日(水)9区Hr-FP下遺構の調査を終了し、1号墳の調査を開始した。9区S₁面の調査も並行して実施した。

5月13日には、4区で新たに4号人骨が発見された。九州大学による人骨調査日程調査委のため調査を中断することとした。

6月11日に、群馬県教育委員会設置の金井東裏遺跡出土甲着装人骨等調査検討委員会の右島和夫委員長、高妻洋成委員、土生田純之委員、田中良之委員、内山敏行委員、藤森健太郎委員が来跡し、調査状況を視察した。

6月4日に、報道関係者に発掘区を公開した。

6月18日に、飯島静男氏が来跡し、古墳の葺石と竈石の石材同定調査を行った。火山灰考古学研究所早田勉氏が1号墳周堀内の火山灰を調査した。

6月25日、若井明彦群馬大学教授が来跡した。

6月28日、調査担当に友廣・都木が合流した。4区3号祭祀遺構より短甲形石製模造品が出土した。9区東側S₁下面を高所作業車により全景写真撮影。13区の表土掘削を開始した。レーダー探査調査について協議した。

7月1日に、1区古墳時代遺構の調査を再開した。

7月2～3日に、9区1号墳主体部、9区東、10区のレーダー探査調査を実施した。探査により1号墳に2基の主体部がある可能性があることが分かった。7区表土掘削を開始した。13区Hr-FP掘削を開始した。

7月8日から、九州大学大学院田中教授他、学生5名が来跡し、人骨調査を実施した。

7月10日に、3号祭祀遺構で骨の入った埴の頸部周りに、剣形石製模造品を複数吊り下げる様子が確認された。また、7月11日に3号祭祀遺構からコハク勾玉が出土した。

7月16日に県文化財保護課長、同係長が来跡。7区の

第I章 調査の経過と方法

Hr-FPを掘削開始。13区のHr-FP下面の遺構を調査した。

7月23日に、9区1号墳第2主体部の蓋石を除去し、主体部内を調査した。13区のHr-FP下面の調査を終了した。

7月24日に、7区Hr-FP下面の精査を開始した。13区Hr-FAの掘削を開始した。

7月31日に、4・9区的全景写真を撮影した。

8月1日に、九州大学大学院田中教授と学生4名が4号人骨調査のため来跡した。8月3日午前中まで調査を実施し、人骨を取り上げた。

8月2日に、10区の調査を開始した。

8月7日に、県教育次長が来跡した。

8月8日に、9区1号墳の高所作業車による全景写真を撮影した。

8月9日に、9区1号墳第1主体部の遺物出土状況写真を撮影

8月19日に、10区のHr-FPを掘削。

8月20日に、13区のHr-FA下面の調査を終了。

8月21日に、9区1号墳主体部写真撮影。7区北側のHr-FPの掘削を開始した。

8月26日に、7区南側のHr-FA掘削を開始した。同時にS₁面の精査を開始した。

8月29日に、9区南側のHr-FP掘削を開始した。

8月30日に、4区3号祭祀遺構の重ね置き杯形土器の取り上げを完了した。コ字形配列土器の出土状況写真を撮影した。

9月6日に、4区3号祭祀遺構の土器取り上げ後、完掘状態写真を撮影した。小型鏡を重ね置き土器群の下より発見した。9区南側のHr-FP下面を精査した。13区西部の表土を掘削した。

9月9日に、13区西部の表土掘削を開始した。また、10区のHr-FA掘削を開始した。

9月11日に、7区S₁面の精査を開始した。調査区的全景写真を撮影した。9区南側のHr-FP下面の全景写真を撮影した。同区Hr-FA掘削を開始した。10区のHr-FA(S₇)掘削を終了した。

9月13日に、9区2号墳を検出した。

9月19日に、9区2号墳周堀調査で、S₁面の検出作業を行った。

9月20日に、9区にて赤玉を検出した。4区3号祭祀

遺構の土器取り上げを終了した。

9月27日に、9区42号竪穴建物より、赤色顔料が線状に塗布された編物石を発見した。

10月2日に、7区S₁面下遺構の調査を開始。

10月3日に、13区西Hr-FP掘削を開始した。9区S₁面遺構検出状況の写真を撮影した

10月4日に、4区3号祭祀遺構調査終了

10月7日に、保存に向けての協議が開始され、4・9区が保存の対象予定地となるので、ごく一部の遺物が露出している箇所を覗き、調査は中止することになった。

10月10日に、13区のHr-FP下面で馬蹄痕の検出作業を終了した。

10月11日に、県文化財保護課との打ち合わせが行われ、各遺構についての調査内容の協議・指示が行われた。13区北部Hr-FP面の遺構検出作業を開始した。群馬県副知事・教育次長他が来跡した。

10月21日に、13区Hr-FA下遺構検出作業終了。

10月22日に、9区Hr-FP下遺構の確認トレンチを掘削・調査した。

10月23日に、4区補足調査を終了した。

11月6日に、9区S₁下遺構群、7区5世紀後半竪穴建物群の空中写真撮影。

11月14日に、9区42号竪穴建物脇より剣菱形杏葉が出土した。

11月19日に、4区遺構のロールマット、ブルーシートによる養生作業。

12月4日に、9区2号墳調査を再開し、主体部の調査を行った。

12月10日(火)文化庁林正憲調査官、設楽博己県文化財保護審議委員が来跡。

12月13日に、プラントオパール分析試料を採取した。

12月25日に、9区の赤玉出土地点は、8号平地建物(2間×2間)と確認した。

平成26年1月7日に、7・9区の調査を再開した。

1月10日に、9区保存前の調査が終了した。

1月23日に、8区の表土掘削を開始した。九州国立博物館本多光子氏、志賀智史が視察した。

1月28日に、9区保存前の状況を空中写真撮影。設楽博己文化財保護審議委員来跡。

1月30日に、8区のHr-FP掘削を開始した。

2月3日に、7区の5世紀後半遺構面空撮

2月4日に、7区北側の表土掘削開始。8区Hr-FA下遺構を確認した。

2月10日に、奥山誠義奈良県立橿原考古学研究所所員、手代木美穂山形大学客員准教授が来跡した。

2月13日に、飯島静男氏が土層観察と石材同定のため、来跡した。

2月24日に、8区古墳時代遺構調査終了。

2月25日に、4区3号祭祀遺構出土フク土のフルイ選別作業(140袋)・水洗作業(9袋)を開始した。また、同遺構出土玉類の水洗を開始した。

2月26日に、7区北部Hr-FP下面調査終了。

2月27日に、7区北部Hr-FA掘削を開始。

2月28日に、4区3号祭祀遺構フルイ選別作業終了。

3月3日に、7区1号方形周溝遺構、北部Hr-FP下面の、高所作業車による全景写真撮影。

3月4日に、7区北部古墳時代の竪穴建物調査を開始した。

3月12日に、平成26年度の調査を終了した。

3月16日に、文化庁禰亘田佳男主任専門調査官が視察した。

3月26日に、東大総合研究博物館米田穰教授が来跡した。

3月27日に、青柳泰介奈良県立橿原考古学研究所所員が来跡した。

平成26年度

5月1日、7区Hr-FP下、5世紀後半竪穴建物残存部の調査を開始した。

5月12日、群馬県教育次長、総務課長来跡。

5月15日に、7区古墳時代遺構調査終了。

平成27年2月4日に、保存区の9区の橋脚部の調査に入った。竪穴建物2棟を検出した。

3月3日に、橋脚部調査を終了した。

平成27年度

9月24日に、保存区の9区A2橋台部調査を開始した。S₃まで掘削し、S₁下面の遺構確認を行った。

9月29日に、9区の調査と並行して、4区P1橋脚部の調査を開始した。Hr-FPの掘削開始。

10月1日に、9区A2橋台部調査終了。

10月19日に、4区P1橋脚部調査終了。

平成29年度

2月3日に、10区北部の調査を開始した。道他の遺構を検出した。

2月17日に、10区北側の調査を終了した。

以下、遺跡見学者を列挙する。

遺跡見学者(調査依頼者・関係者を除く)

大学関係者

東 潮、石川日出志、梅沢重昭、及川輝樹、大塚初重、菊池芳朗、熊倉浩靖、酒井清治、佐々木憲一、須貝俊彦、高久健二、辰巳和弘、寺前直人、橋本達也、浜田晋介、日高慎、山本孝文、吉村武彦、

海外研究者

禹炳喆、金在弘、キム・チョンチュ、権五榮、サルマン・アフメッド・アルマハリ、曹永鉉、田庸昊、朴 升圭、咸 舜燮、ライラ・アリ・アフメッド

研究機関・県外埋蔵文化財関係者他

赤田昌倫、阿部雅史、安蒜政雄、諫早直人、及川輝樹、黒濟玉恵、下司信夫、小林孝秀、千賀久、西口和彦、西村康、林部仁、原田怜、本田光子、町田洋、松村恵司、宮代栄一、毛利和雄

群馬県内埋蔵文化財関係者・研究者他

石井克己、井浦崇、絲山秋子、大塚昌彦、川道了、後藤佳一、小林正久、孔智賢、澤口宏、勢藤力、田口一郎、中道美代子、三浦茂三郎、水田稔、横澤真一、若狭徹

第4節 調査の方法

金井東裏遺跡の調査では、調査に初めに入った地区を1区として、以下調査順に調査区の番号を付けた。第2図にあるように、市道を挟んで、調査区を区分しており、北から13・12・11・10・9・4・3・2・1・8・7・5・6区と分けした。

1 調査遺構の想定 文化財保護課の試掘調査の結果から、地表面すぐから2m近いHr-FP層が堆積していること、Hr-FA層下に竪穴建物と想定される遺構があることが予想された。調査では、Hr-FP下に馬蹄跡を含む遺構があることが予想された。また、Hr-FA下にも火山灰下の竪穴建物などの遺構があることが想定され、それぞれの面で、調査が必要になることが想定された。

2 テフラ堆積確認 Hr-FA・Hr-FPテフラが多く堆積しているため、それぞれの軽石・火山灰・火砕流の様相を把握しながら調査を行うことにする。具体的には、火山灰考古学の研究者に火山灰等を随時、現地にて同定を依頼して、火山灰のステージの確認を行った。

特に、Hr-FP軽石下、Hr-FA火山灰下の遺構は残りが良く、情報量も多いので慎重に調査に臨んだ。

3 調査手順 調査は、まず地表面をバックホーにて掘削し、Hr-FP上面を露出させる。Hr-FP上面には、江戸時代の土坑・溝・墓がHr-FPを掘り込んで築かれているので、それらを1面として調査した。なお、奈良・平安・中世の遺構・遺物は一切発見されなかった。その後、Hr-FPをバックホーにて掘削する。Hr-FP中に、遺物・遺構が検出される可能性もあることから慎重に掘り進めたが、遺跡全域で、Hr-FP中の遺物・遺構は無いことが分かった。

4 Hr-FP下(2面)の調査 Hr-FPを掘り下げると、Hr-FAの火砕流後の自然堆積で黒色土化した面が検出される。この面の存在から、Hr-FAの火砕流堆積後、数十年後には、植物が生えてそれが腐蝕した黒色土層により面が出来たことが分かる。

この面には、ごく一部から馬蹄跡と道が確認されている。この面を遺構確認面の2面とした。建物などは発見されておらず、ほとんど人の住んだ痕跡が無いが、道があることから少なくとも人の往来はあったものと思われる。ただ、この後の2mに及ぶ軽石降下で、この地にい

た人々はこの地を放棄したものと考えられる。この面の馬蹄跡は残りが悪いが、竹べらを主に使用して、軽石を外すことで馬蹄跡を検出できる。

5 Hr-FA(3面)に関連する調査 Hr-FAの火砕流・火山灰の調査では、調査当初は機械を使用して掘削していたが、甲を着た古墳人の発見によりただちに機械での掘削を中止し、主に手作業で行うことにした。というのは、火砕流中には、遺物や遺構の一部が流されたものなどが存在するので、丁寧な調査が求められたからである。

Hr-FAの火砕流は、場所により異なるが、S₁～S₁₅までであるステージの中で、基本的に上から、S₁₂、S₉が一部確認されるとともに、S₇が大量に堆積し、その下から甲人物をはじめとして馬などの生き物を死に至らしめ、建物などの構造物を倒壊させたS₃が上部層と下部層の2つに分かれた形で検出される。その下には、金井東裏遺跡では、溝などの堆積が多くなる部位にはある程度確認できる程度のS₂があり、その下にHr-FAの最初のマグマ水蒸気爆発により噴出した火山灰であるS₁が検出される。

調査は、上から火砕流を順々に剥いでいき、それぞれの面で、遺物・流出物が無いか確認しながら行った。その結果、S₇より上の層からは、木片も含めて遺物が出土することが少ないことが分かった。

6 S₃(3-1面)の調査 S₃層を調査する中で、S₃層を抉る様にして、溝状のもので、西から東にほぼ一直線状に進み、東端が隆起しているものが見つかり、火山灰考古学研究所の早田勉氏の提案により線状衝撃痕と名付けた。この名称自身に、すでに火砕流にともなう火山弾などの物体が西から東に向けて飛来して、地面に激突していく様子を想定した名称である。これらの線状衝撃痕が遺跡全体にS₃層に突き刺さるように検出されており、この衝撃痕跡が形成された要因となるのは土層断面の観察などからS₇と考えている。1,000以上の数の線状衝撃痕跡が認められるので、大規模な火砕流に伴う衝撃を示すものであろう。この衝撃痕跡が出る面を遺構確認面の3-1面とした。

7 S₂火山灰上面(3-2面)の調査

この線状衝撃痕の調査が終了すると、次は、S₃の火砕サーージ中から検出された遺物・遺構及びS₂を踏み込んだ人足跡・馬蹄跡についての調査である。この面を遺構確

認面の3-2面とした。人物4体、建物などが特に4・9区から検出された。これらは、S₇火砕流を剥がした後のS₃の火砕流とともに検出されるもので、全体の地区の中のごく一部の調査区から出土している。炭化した遺構もあり、火砕流の温度を示す可能性がある。4体の人物遺体は、S₃火砕流中より、人骨として確認できた。S₃の火砕流により亡くなったのである。人骨の周りを慎重に精査し、火山灰層との関係なども観察しながら調査を行ない、火山灰・火砕流との関係を明らかにするために、なるべく多くの人骨との関係が分かる土層断面を作成した。写真も多く撮影するようにした。

次に、S₃下に堆積する、S₂あるいはS₁の火山灰層の上面を露出させる。すると、まず出てくるのがS₁・S₂の火山灰で埋もれた道の痕跡の上を中心に検出される人の足跡及び、馬蹄跡と足跡が並行して検出されることで分かる馬を引いた跡である。さらに、道とは関係なく、馬蹄跡が単独で出土しており、これも土層断面の観察で確認できた。これらの足跡・蹄跡は火山灰降下後に、人々や馬がどのような行動を行ったかを示す重要な証拠となる。

S₁・S₂面のシルト質の火山灰の堆積の上に、明瞭な人の足跡・馬蹄跡が確認できる原因は、S₁・S₂のシルト質の上を踏み込んだ充填する窪みの中に、S₃の火砕サージに伴う粗砂が入ることで、ヒト足跡・馬蹄跡が明瞭に分かるのである。

また、S₃の火砕流により倒壊した建物は、S₁・S₂面の火山灰降下時には上屋があった可能性が高く、S₃により倒壊して、S₃中に流された部材などを精査した。

Hr-FAのS₂を踏み込んでできた人の足跡・馬蹄跡は、残りが良いものが多く、足指などが残る人足跡が検出された1区3号道、4区4・5号道の人足跡・馬蹄跡の調査の際には、掃除機を使って、軽石等を吸い込むことで、窪み内面の詳細な状況を把握した。また、このうちの残りの良いものは、シリコンあるいは石膏で型取りをして、以後の展示での活用や、微細な観察を行うための資料とした。

8 S₁直下面(4面)の調査 S₁・S₂を剥がした段階の調査では、榛名山噴火直前の生活面がそのまま残されている。この面を遺構確認面の4面とした。火山灰降下では、建物の屋根には積もっても、量が多くないので、潰

れることはないで、その後の火砕流により倒壊するも、本来の建物の情報はかなり残っている可能性がある。この部分での遺構は、火山灰降下直前まで生活していた状況なので、当時生活していた痕跡が一番残るものとして情報量も多い。そのため、調査においてもなるべく多くの情報を採取できるように調査した。火山灰層との関係が分かる土層断面の作成は特に注意して行った。しかし、S₃で建物が倒壊しており、先ほども述べたように火砕流で部材等が流されてしまい、上屋や壁などの情報はあまり得られなかった。Hr-FA降下時に生活していた4区の屋敷地内の3棟の建物から赤玉・編石・大型土師器壺などが出土した。

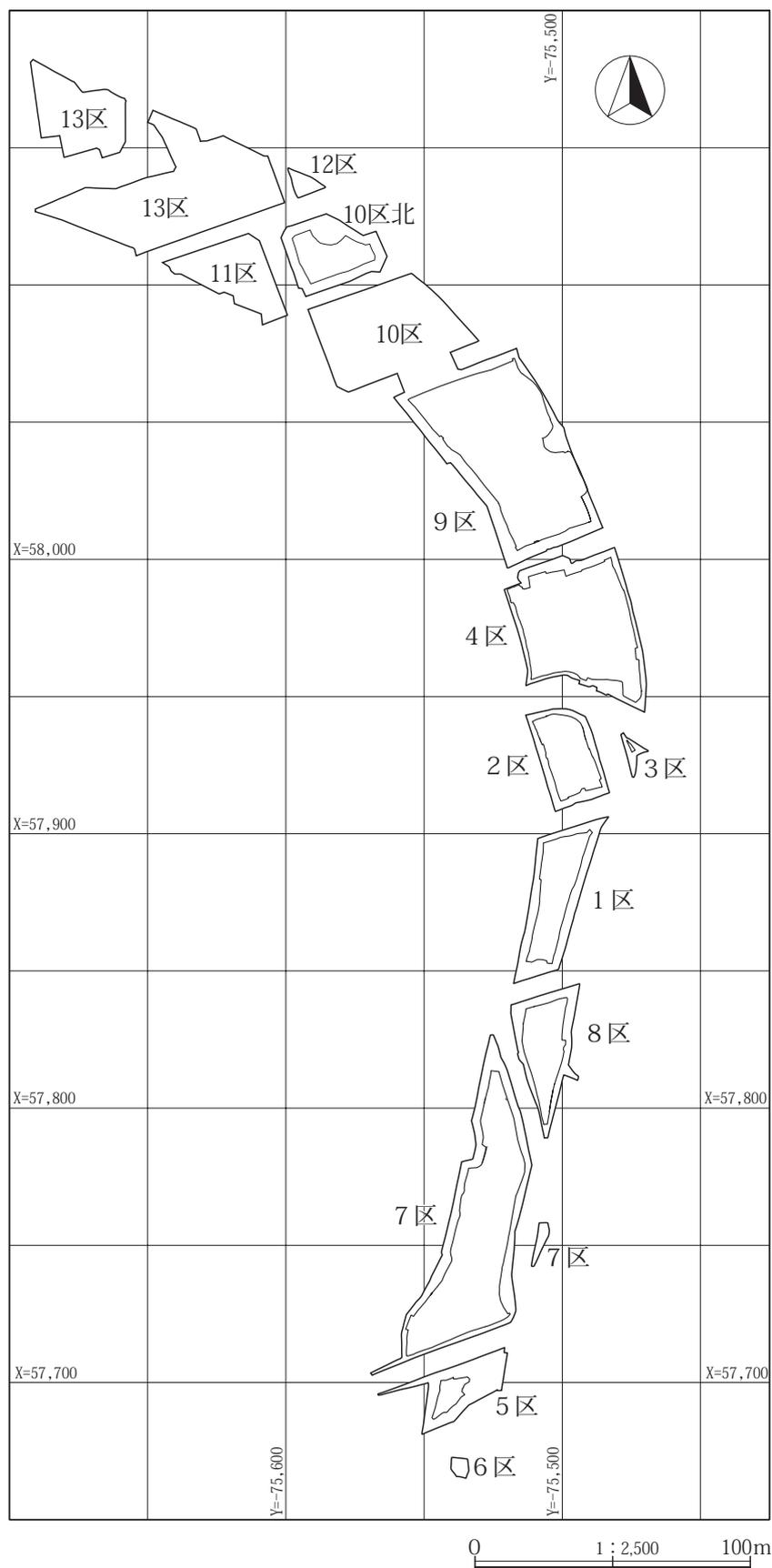
9 S₁下面(5面)の調査 S₁直下面の遺構の調査が終了すると、5世紀後半を中心とするS₁より下層の5層内で検出できる遺構の調査を5面として行った。その際に、S₁をはがした段階で既に、5世紀後半の竪穴建物を廃棄したものが埋まりきらずに窪地状になっているものが観察されており、調査前から、住居を特定して、トレンチを入れることが出来る。5世紀後半の建物も、基本的には、Hr-FA及びその後のHr-FPにより完全に埋没するので、後世の攪乱の影響が無く、情報が良く残る。そこで、廃棄された状況ではあるが、その廃棄の状況を詳細に調査することができた。住居の廃棄の在り方を調べるのに良好な資料である。

10 古墳時代以前の調査 5面の調査では、弥生時代後期の遺構群も検出される。古墳時代前期及び中期前半の遺構は遺物も含めて一切出土していないが、弥生時代後期の遺構群の遺構面は、黒色土中であることから確認できなかった。

弥生時代後期の長方形の竪穴建物は数棟検出され、5世紀後半の竪穴建物同様遺存状態が良い。

縄文時代は、黒ボク土中より通常の調査同様に竪穴建物等の遺構を調査するとともに、旧石器時代についても各区で、トレンチを入れて確認を行った。

11 遺構表記 遺構の表記については、上層の確認できた遺構から調査順に番号を付けていった。江戸時代から縄文時代の遺構まで、種類ごとに通番で付けていった。故に、当遺跡の報告書では、遺構番号が、古墳時代以外の遺構にも通番で付いているので、報告の中で欠番となっているものがある。



第 2 図 調査区配置図

第5節 甲着裝人骨等詳細調査に至る経緯

甲着裝の1号人骨が発見されたのは平成24年11月19日であり、その後の検出作業や古墳文化及び人骨・甲・火山灰の専門研究者による視察・検討を行ったうえで、平成24年12月10日に報道機関に対して、①古墳時代の甲が実際に人体に着裝した状態で出土したのが全国初例であること、②古墳時代において、火山噴出物の下から被災人骨が発見されたのも全国初であることを発見の要点として公式発表を行った。同日以降のニュース報道により国内はもとより海外でも反響を呼んだことが伝えられ、極めて大きな発見であったことを、当事者としても改めて再認識したのである。また要望の高かった一般公開については、同月12日の1日に限って行うこととなり、2600人を超える見学者の方々にこの稀有な大発見を目の当たりにしていただくこととなった。

発見された人骨については、冬季の乾燥と凍結の怖れがあることから、可能な限り早い段階での室内搬入の必要が生じていた。そのため、現地での計測や観察記録を行ったのち、12月14日には発泡ウレタンで固定して群馬県埋蔵文化財事業団内に運び込まれたのである。なお、甲を着裝した人骨の発見後も、12月3日には鉄鏃、同月20日には成人女性と思われる全身人骨、翌平成25年1月11日には幼児骨が続々と発見されることになった。

群馬県教育委員会では、発見された4体の人骨とこれに直接かわると想定される甲・鉄鏃・鉄鉞・玉類などの出土品について、詳細な研究を行う必要を認めた。これにより古墳文化・形質人類学・保存科学・火山学等の専門研究者で構成された調査検討委員会を立ち上げ、その指導に基づく形で詳細な調査研究を行うことが確定した。この詳細調査は「金井東裏遺跡出土甲着裝人骨等詳細調査」と命名され、群馬県教育委員会と公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団との間で締結された受託契約のもとに実施されることとなった。詳細調査の実施は群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、平成24年度末から平成27年度まで足掛け4年に亘る具体的な詳細調査が進められることとなった。

1 委員会立ち上げの経緯

金井東裏遺跡の発掘調査は、平成24年9月に開始され、11月19日に甲着裝人骨(1号人骨・1号甲)が出土すると、その後も周囲から2号人骨、2号甲、鉄鉞などの出土が相次いだ。特に甲着裝人骨は、甲を着裝したまま火山災害に巻き込まれたと想定される稀有な出土状態であった。群馬県教育委員会では、発掘調査を実施している(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団からこの発見の報告を受け、その取扱いについて関係機関と早急に協議を行うとともに、文化庁への報告を行った。そして、過去に例を見ない、非常に貴重な資料であるとの判断から、資料の保全及び学術的な情報の採取に十全の体制で取り組むこと、そして今後、群馬県の宝として、広く一般に公開し、活用することを念頭に調査を行うこととした。調査にあたっては、本資料の取扱いについて、多方面の専門家の意見を聴取し、取扱い方針を決定するための金井東裏遺跡出土甲着裝人骨等調査検討委員会(以下「調査検討委員会」)を設置し、その指導・助言のもとに調査を進めることとした。

調査検討委員会の主な検討項目は大きく、①甲着裝人骨等の調査方法について、②甲着裝人骨等の保存方法について、③甲着裝人骨等の学問的位置づけについての3項目とした。

委員会の構成は下記の通りである。

(1) 委員・臨時委員

委員長：右島和夫(古墳時代考古学、県文化財保護審議会専門委員、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

副委員長：設楽博己(考古学、東京大学大学院教授・県文化財保護審議会専門委員、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員：内山敏行(古墳時代考古学、(財)とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員：高妻洋成(文化財保存科学、奈良文化財研究所保存修復科学研究室長、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員：早田勉(火山学、(株)火山灰考古学研究所代表取締役、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員：田中良之(形質人類学、九州大学大学院教授、

第I章 調査の経過と方法

平成25年2月23日～平成27年3月4日)

委員:土生田純之(古墳時代考古学、専修大学教授、

平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員:藤森健太郎(古代史、群馬大学教授、平成25年2月23日～平成29年3月31日)

委員:舟橋京子(人骨考古学、九州大学大学院講師、平成27年11月1日～平成29年3月31日)

臨時委員:米元史織(形質人類学、九州大学総合研究博物館助教、平成27年11月1日～平成29年3月31日)

(2)指導:文化庁文化財部記念物課

(3)調査担当:(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

(4)オブザーバー:渋川市教育委員会

(5)事務局:群馬県教育委員会事務局文化財保護課

2 調査検討委員会の経過

調査検討委員会は、その第1回を平成25年2月23日に開催し、平成28年11月までに計10回を開催した。各年度の開催回数は、平成24年度1回、平成25年度4回、平成26年度2回、平成27年度2回、平成28年度1回であり、その概要は下記の通りである。

(1)平成24年度第1回

- ・期日:平成25年2月23日
- ・参加委員:右島委員長、設楽副委員長、内山委員、高妻委員、早田委員、田中委員
- ・内容:金井東裏遺跡の概要及び甲着裝人骨等の出土状況及び取扱い経過について報告を行った。その上で、発泡ウレタンで保護して取り上げ室内に運び込んだ甲着裝人骨の実物の観察を行った。その後、甲着裝人骨の調査方法および保存方法の方針について協議し、特に、資料の保全に最大限の留意していく必要性、CTスキャンや3Dスキャンなどを駆使し、十分な記録を取りながら調査を進める必要性を確認した。また合わせて、新たに遺跡で確認された3号人骨の取上げ方法について協議した。

(2)平成25年度第1回

- ・期日:平成25年6月1日
- ・参加委員:右島委員長、設楽副委員長、内山委員、高妻委員、早田委員、田中委員、土生田委員、藤森委員

- ・内容:平成24年度及び平成25年度5月までの調査成果、特に九州大学大学院の田中良之教授を中心に実施した甲着裝人骨の調査状況、2号甲のCTスキャン撮影の結果等を報告した。また、金井東裏遺跡現地の調査概要について報告を行った。資料観察では、甲着裝人骨の甲背面を外し、内部の椎骨や肋骨等を検出した段階の観察を実施した。その後、平成25年度の調査内容について協議し、甲着裝人骨のCTスキャン撮影やDNA分析の実施について検討した。

なお、午前中に金井東裏遺跡発掘調査現場において、4号人骨検出状況や土器集積遺構の調査状況等を視察した。

(3)平成25年度第2回

- ・期日:平成25年11月3日
- ・参加委員:右島委員長、内山委員、早田委員、田中委員、藤森委員
- ・内容:平成25年度10月までに実施した調査の成果、特に田中委員による1号人骨、3号人骨の調査状況、甲着裝人骨の頭部部分のCTスキャン撮影結果の報告を行い、併せて金井東裏遺跡現地の調査概要について報告を行った。資料観察では、1号人骨取上げ後の甲腹部側内面等の観察を実施した。その後、今後の調査計画について協議を行った。特に、頭部部分のCTスキャン撮影の結果で頭骨の下位に胃が存在することが判明したため、その頭骨と胃の分離の仕方等が議論された。

(4)平成25年度第3回

- ・期日:平成25年12月20日
- ・参加委員:右島委員長、内山委員、高妻委員、早田委員、土生田委員
- ・内容:甲着裝人骨の胸部CTスキャン撮影結果及び2号甲の調査状況について報告を行った。特に2号甲に伴い出土した鹿角製小札(発見時は骨製小札と呼称。その後の調査で鹿角製と判明し改称。)について報告し資料の観察を行った。その後、金属製品の保存処理方針について協議を行い、できる限り現在の形状を優先し、長期の保存に耐える適切な処理を実施していくこととした。また、保存処理とともに活用に向けての視点が必要である

5. 甲着裝人骨等詳細調査に至る経緯

との指導があった。また、金井東裏遺跡の総合的な評価についても検討され、火山灰下の景観がほぼそのまま保存されている点等、その重要性が改めて指摘された。

(5)平成25年度第4回

- ・期日：平成26年3月7日
- ・参加委員：右島委員長、設楽副委員長、早田委員、高妻委員、田中委員、土生田委員
- ・内容：平成25年度12月以降の調査成果、DNA分析や食性分析等の各種分析の進捗状況等について報告をした。資料観察では、鹿角製小札の検出作業を進めた段階を観察した。協議では、鹿角製小札の性格について議論され、DNA分析の必要性についても指摘された。また、平成26年度の調査計画について提示し、甲着裝人骨等関連遺物の考古学的調査を継続するとともに、人骨の形質人類学的調査、DNA分析、食性分析、織物・繊維痕の分析、ガラス玉分析等の各種分析、また、これまでに撮影したCTスキャン画像の解析等を実施していくこととした。

(6)平成26年度第1回

- ・期日：平成26年11月25日
- ・参加委員：右島委員長、内山委員、高妻委員、早田委員、藤森委員
- ・内容：平成26年度10月までに実施した調査成果、特に甲着裝人骨の頭部の下から出土した胃の調査成果について報告した。また、田中委員による人骨の形質人類学的分析の途中経過において、1号人骨は渡来系、3号人骨は関東・東北的な形質の特徴が認められることが報告された。また合わせて金井東裏遺跡に隣接する金井下新田遺跡の調査概要について報告した。金井下新田遺跡は、金井東裏遺跡と同じ火山災害により埋没した遺跡であり、金井東裏遺跡及び甲着裝人骨の性格を考える上で重要な遺跡である。中央に大型の竪穴建物を配し、その四周を網代垣で区画した政治及び祭祀の拠点と考えられる遺構が検出されている。資料観察では、胃を中心として観察を実施した。その後、2号甲と鹿角製小札の取扱いについて協議し、保存上の観点等から2号甲と鹿角製小札は分離す

ることとした。また、平成26年度後半以降の調査計画を協議し、全体計画として平成28年度に報告書を刊行することを目標に調査を進捗させることとした。

(7)平成26年度第2回

- ・期日：平成27年3月6日
- ・参加委員：右島委員長、設楽副委員長、高妻委員、早田委員、土生田委員
- ・内容：平成26年度の調査成果として、人骨の形質人類学的調査、DNA分析等各種分析の結果及び途中経過の報告を行った。また併せて、金井下新田遺跡の調査概要を報告した。資料観察では、1号甲内側から出土した砥石・刀子の状況やクリーニングを実施した胃等を観察した。その後、平成27年度以降の調査について協議した。平成27年度は各種分析及び考古学的調査を継続し、報告書の執筆等を進めることとした。

(8)平成27年度第1回

- ・期日：平成27年11月11日
- ・参加委員：右島委員長、設楽副委員長、内山委員、早田委員、藤森委員、米元臨時委員
- ・内容：平成27年度の10月までの調査成果、特に鹿角製小札の取上げとその3Dスキャン画像、繊維痕分析や骨角製品の材質同定等について中間報告を行った。また、金井東裏遺跡で現状保存とした範囲に架かる陸橋部の記録保存調査について報告した。資料観察後、平成27年度下期以降の調査について協議を行った。

なお、本委員会から平成27年3月に御逝去された九州大学大学院田中良之教授にかわり、これまでの経過を踏まえ、九州大学大学院助教舟橋京子氏に委員、同大学総合研究博物館講師米元史織氏に臨時委員を委嘱した。

(9)平成27年度第2回

- ・期日：平成28年3月16日
- ・参加委員：右島委員長、内山委員、高妻委員、早田委員、米元臨時委員
- ・内容：平成27年度の調査成果及び各種分析の結果について報告するとともに、資料観察を実施した後、平成28年度の計画について協議した。平成28年度

第I章 調査の経過と方法



写真1 平成24年度第1回調査検討委員会



写真2 平成24年度第1回調査検討委員会

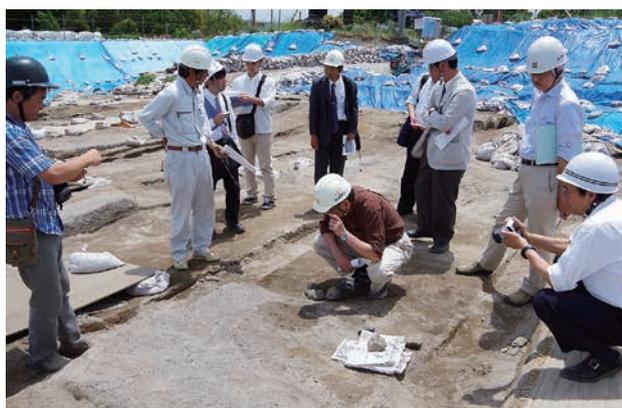


写真3 平成25年度第1回調査検討委員会



写真4 平成25年度第1回調査検討委員会



写真5 平成25年度第3回調査検討委員会



写真6 平成26年度第2回調査検討委員会



写真7 平成27年度第1回調査検討委員会



写真8 平成28年度第1回調査検討委員会

は、これまでの調査成果をまとめた調査報告書を刊行することとし、その執筆・編集を行うこと、また、1号甲、2号甲、冑の保存処理を実施すること等とした。

(10)平成28年度第1回

- ・期日：平成28年11月11日
- ・参加委員：右島委員長、高妻委員、早田委員、米元臨時委員
- ・内容：平成28年度(上半期)の調査の進捗状況、及び、1号甲、2号甲、冑の保存処理の進捗状況について報告した。その後、1・3・4号人骨の資料観察を行い、今後、人骨を保管及び展示をするにあたり、どのような処理が必要か協議した。

3 詳細調査報告書の刊行

委員の意見を踏まえ、先述した理学分析・整理を行った。古墳時代の火砕流に被災した、4人の人骨とそれに関連する甲冑を中心とする遺物群についての詳細調査の成果は、平成29年に、大木紳一郎ほかにより『金井東裏遺跡甲冑装人骨等詳細調査報告書』として群馬県教育委員会より刊行された。

第6節 その他の整理作業の経過

平成26年度より、平成29年度まで整理作業・自然科学分析・原稿執筆・外部原稿依頼を行い、30年度に報告書を刊行した。

以下、各年度の整理の概要を記す。

平成26年度 図面点検、遺物の基礎整理を行った。膨大な図面と3号祭祀遺構などからの大量遺物のため、基礎整理に時間がかかった。出土土器の接合作業を開始した。平成27年度 各遺構の図面下図作成作業。石製品の写真撮影・実測作業進む。出土土器の接合作業・写真撮影・実測作業が進む。金属器の整理作業進む。

種実同定300点(パリノ・サーヴェイ)、炭化材樹種同定30点(パリノ・サーヴェイ)の分析委託を実施した。

平成28年度 デジタル編集図作成開始。3号祭祀遺構の編集図作成作業継続。出土土器の写真撮影・実測作業継続。石製品の实測作業終了。

杏葉蛍光X線分析(パレオ・ラボ)、石製品石材同定玉類・石製模造品・白玉計32点(遺物材料研究所)、青銅鏡主成分分析・鉛同位体比分析、金銅製杏葉鉛同位体比

第6節 その他の整理作業の経過等詳細調査に至る経緯

分析(国立歴史民俗博物館)、材料薄片分析・蛍光X線分析 土器11、赤玉1、赤色鉱物3(パリノ・サーヴェイ)の分析委託を実施した。

平成29年度 デジタル編集図作成終了。3号祭祀遺構の作成継続。出土土器の実測作業終了。金属器写真撮影・実測終了。白玉写真撮影終了。原稿執筆終了。外部原稿依頼成果提出終了。編集作業終了。

鉄器材質分析鉄製袋柄斧1(日鉄住金テクノロジー・元興寺文化財研究所)、須恵器胎土分析16点(大阪大谷大学)、黒色物質分析土師器付着物質4点(パレオ・ラボ)の分析委託を実施した。

平成30年度 報告書を刊行した。

第 I 章 調査の経過と方法

第 1 表 甲着裝人骨等詳細調査の実施経過

実施項目	目的	対象	年度(平成)					成果の概要
			24	25	26	27	28	
考古学的調査	遺跡現地における調査及び室内での詳細調査、記録作成	1～4号人骨	●	●				九州大学調査チームによる現地調査、取上げ。 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団により群馬県埋蔵文化財調査センター内で調査を実施(提灯、刀子、ガラス小玉、管玉、白玉を含む)。
		1号甲	●	●	●	●		
		冑	●	●	●	●		
		2号甲	●	●	●	●		
		鉄鉾	●	●	●	●	●	
		鉄鏃	●	●	●	●	●	
形質人類学的調査	出土状況と、人骨の形質人類学的調査。	1号～4号人骨	●	●	●	●		九州大学大学院の(故)田中良之教授を中心とした調査チームにより、室内での人骨詳細調査と記録作成を行った。1号人骨は渡来系の形質をもつ熟年男性。3号人骨は関東・東北古墳人の形質をもつ成人女性、2号人骨は乳幼児、4号人骨は5歳前後の幼児と判明。
人骨DNA分析	血縁関係の有無、来歴を調査。	1号人骨 3号人骨		●	●	●		ミトコンドリア内DNA分析で1号人骨と3号人骨は母系が異なることが判明した。全ゲノム分析については断念。
炭素・窒素同位体比分析 放射性炭素年代測定	摂取食物を明らかにし、年代測定を行う。	1号人骨 3号人骨		●	●	●		コラーゲンの遺存状態が悪く、比較検討できるデータが得られなかった。
ストロンチウム同位体比分析	生育した地域を特定する。	1号人骨 3号人骨 4号人骨			●	●		九州大学 田中教授・田尻准教授。1号・3号人骨は長野県伊那谷周辺で、4号人骨は金井東裏遺跡周辺で幼少期を過ごしたと推定。
寄生虫卵分析	腹部周辺土壌中の寄生虫卵から、食生活等の情報を得る。	人骨周辺土壌		●				寄生虫卵は検出できなかった。
花粉分析	古墳人の周辺自然環境を明らかにする。	人骨周辺土壌		●				樹木花粉のクリ・トチノキ他、草花粉のイネ科・カヤツリ草科他を検出。
織物繊維分析	甲冑内外面に残存する織物や紐の材質と構造を明らかにする。	1号甲 2号甲 冑		●	●	●	●	1号甲内面に衣服と思われる平織物、平絹を確認。繊維は絹とカラムシを確認。
ガラス分析	ガラス玉の製作技法と材質の分析から、産地同定を行う。	2号人骨、3号人骨に伴うガラス小玉			●	●		奈良文化財研究所。引き伸ばし技法が主体、材質はカリガラス11点、アルカリガラス191点と報告。
金属製遺物の材質分析	有効な保存処理を行うために材質及び錆等の状態を明らかにする。	1号甲 鉄鉾			●	●		鉄は溶出が顕著、付着白色物は方解石と判明。装具には銀が使われたと判明。
管玉他原産地同定分析	管玉と白玉の石材原産地を特定する。	2・3号人骨に伴う管玉・白玉				●		出雲産碧玉の管玉1点のほかは、既知の原産地と同定できなかった。
獣骨角同定分析	鹿角と思われる材質について同定を行う。	小札 刀子柄 鉾・鏃装具				●	●	分析対象は全て鹿角製と判明した。小札原木の鹿角は太い材を用いている。
赤色顔料分析	赤色顔料の材質を明らかにする。	1号人骨腰部の顔料物質					●	パイプ状構造をもつベンガラと判定した。
X線CTスキャン 撮影・解析	表面からの観察が不可能なため、CTスキャンによって三次元情報を得て構造を明らかにする。	1号甲		●	●	●		小札を連ねた構造の詳細、紐・織物など有機質の残存状況、鹿角製小札・頭骨との関係等の肉眼観察不能な情報についての基礎データを得た。
		冑		●	●			
		1号人骨頭部		●	●			
		2号甲	●	●	●			
テフラ分析	被災原因となるHr-FAの詳細な認定	31号溝		●	●	●		人骨を覆うS7の下位にS3の火砕サージ堆積物、その下にS2・S1の堆積が確認された。冑と甲着裝人骨はS3の中にあると推定。
		人骨・冑埋没土層						
キャピラリーバリア(毛管障壁)保水試験	人骨の残存した要因の可能性を探る。	31号溝		●				Hr-FAの下部(S3とS7)、Hr-FAと上層の黒褐色土層の間でキャピラリーバリア構造が確認された。
樹種・漆膜物質同定分析	鉄鏃の篋と鉄鉾の柄に残っていた有機質の材質を特定する。	鉄鏃				●		鉄鏃の篋(矢柄)と思われる部分の樹種はイネ科タケ亜科と判明。
		鉄鉾					●	鉄鉾柄部の膜状物質は考え得る漆、タール、膠ではなく不明である。
三次元計測	出土品を立体的に計測し、三次元での正確な画像記録を作成する。	1号人骨 3号人骨 冑 2号甲		●	●	●		発掘調査時の出土状態の画像データに詳細調査時の調査状況のデータを追加して、各出土状態の正確な合成画像を作成した。また、直接触れることのできない鹿角製小札について実測・観察用の計測を行った。
報告書作成	遺物記録作成 報告文記述 報告書編集 印刷・刊行	人骨等対象資料の全て					●	報告書編集までを公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が担当し、印刷・刊行は群馬県教育委員会にて実施。
遺物保存処理	劣化防止のための金属製品や有機質の脆弱品の保存処理を行う。	1号甲 2号甲 冑 鹿角製小札ほか					●	1号甲・2号甲・冑については公益財団法人元興寺文化財研究所に委託。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境(第3～11図)

1 関東平野(第3・4図)

金井東裏遺跡は、日本の中ほど、関東地方の西北に位置する群馬県渋川市に位置する(第3図)。以下、関東地方、群馬県、金井東裏遺跡近郊の地理的環境について記す。

関東地方は、北部と西部を山岳により画されており、東部と南部は太平洋に臨んでいる(第4図)。北部の山塊を東から見ると、東北地方から延びた阿武隈山地、八溝山地、越後山脈、群馬県に入ると三国山脈、さらに草津白根山や御飯山などが並んで北との境界となる。西部の山塊は、北から四阿山、浅間山に続いて関東山地がそびえ、その南に丹沢山地から箱根山が並び、西の区切りとなる。北と西の山塊により区画された中に関東平野がある。

関東平野は、1.5万Km²にも及ぶ日本最大の平野である。平野の中には、低地台地・丘陵・山麓などの地形を含んでいる。平野の地下には、「関東ローム層」と呼ばれる火山灰土が堆積している。北部は、赤城・榛名・浅間山、南部は、富士・箱根山の火山灰が西風により運ばれたものである。

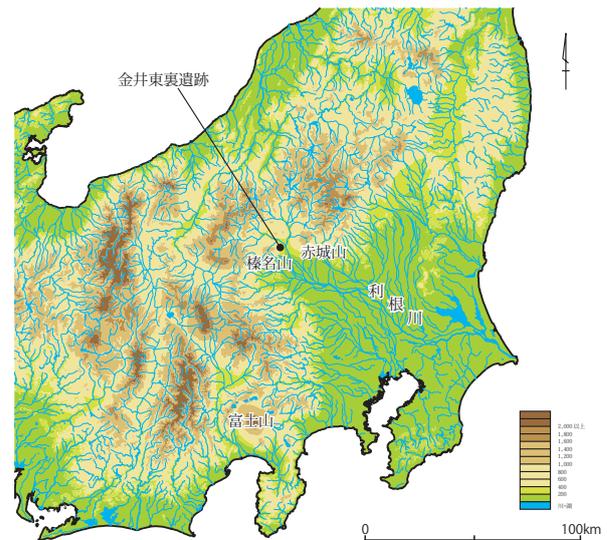
関東平野には、三国山脈を源流とする利根川とその支流の川筋に人々の多くが生活を営んできた。

群馬県は、海に面しない内陸県である(第5図)。北は三国山脈・草津白根山により新潟県・長野県北部との境界となり、西は浅間山や関東山地により長野県中部と区画される。南は利根川が埼玉県と区画され、東は栃木県・茨城県・埼玉県と接するように、渡良瀬川の遊水地に向かって突き出ている。中央部には赤城山と榛名山の2つの大きな火山がそびえている。

三国山脈の大水上山を源流にした利根川は、赤谷川・片品川・吾妻川を合流し、現在の広瀬川の流路を流れて、烏川などを合流して、古墳時代には今の江戸川とほぼ同じ流路を流れていた。渡良瀬川は古墳時代当時、別の流路で独立して流れていたものと推定されている。



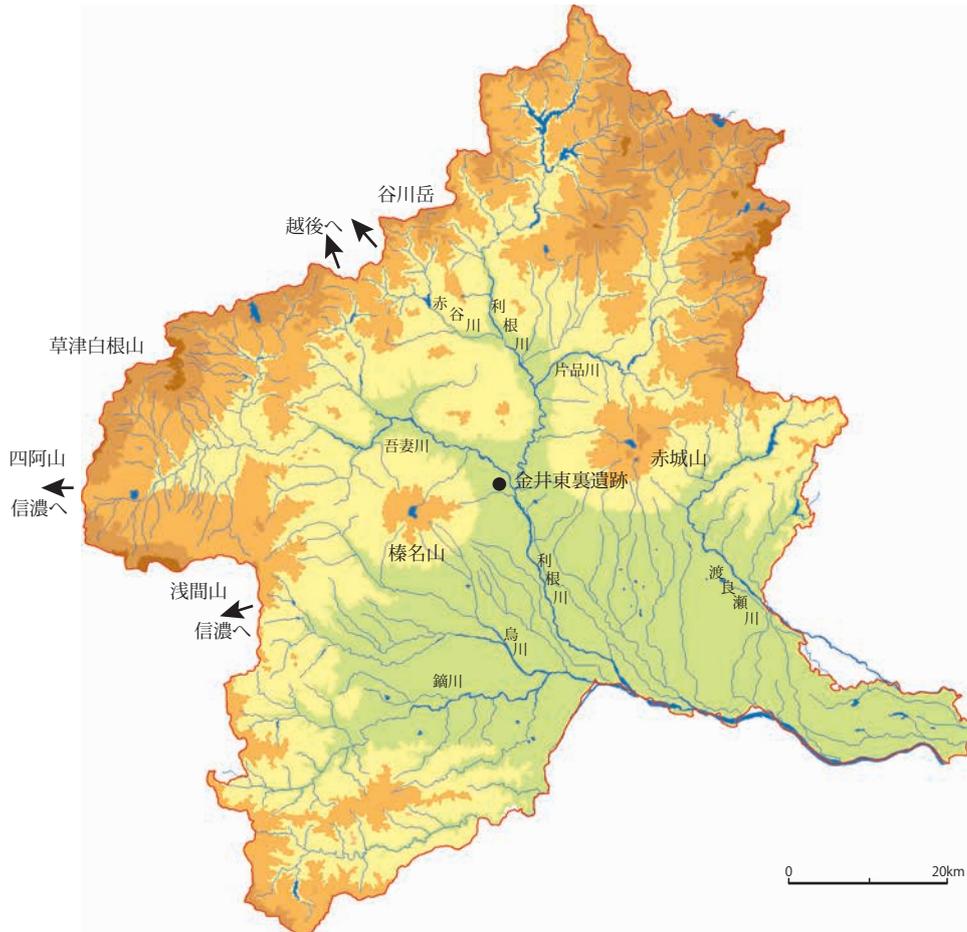
第3図 日本地形図



第4図 中部～東北南部地形図

2 榛名山北東麓(第5・6図)

金井東裏遺跡のある渋川市は日本列島のほぼ中央に位置する。関東平野全体で見ると広大な関東平野最奥部にあたる位置でもある。遺跡地は関東平野の西北隅に聳える榛名山の北東麓にある。榛名山の北を長野県境の鳥居峠付近を源流として西から東へ流れ下る吾妻川の南岸に位置する(第5図)。利根川が、遺跡地の東を北から南へ流れ、さらに利根川を隔てて東に赤城山がある。遺跡地北には、吾妻川を挟んで、子持山・小野子山が並んで聳えている(第6図)。以上あげた山はすべて火山であり、



第5図 群馬県地形図

4つの火山に囲まれ、利根川と吾妻川の合流地点からやや北西部に遺跡は立地する。長野県に抜ける吾妻渓谷への入り口であり、新潟県に通じる交通路の重要な拠点と考えられる。

3 榛名山の活動(第7・8図)

ここでは、遺跡地の地形環境を理解するために、榛名山とその活動について簡単に述べる。現在の榛名山は、直径25kmの成層火山体と山頂部に発達する溶岩ドーム群からなる。榛名山の成層火山体には放射状の侵食谷が多数発達しており、遺跡地を形成した登沢川の西隣の沼尾川には大規模な侵食谷がある。

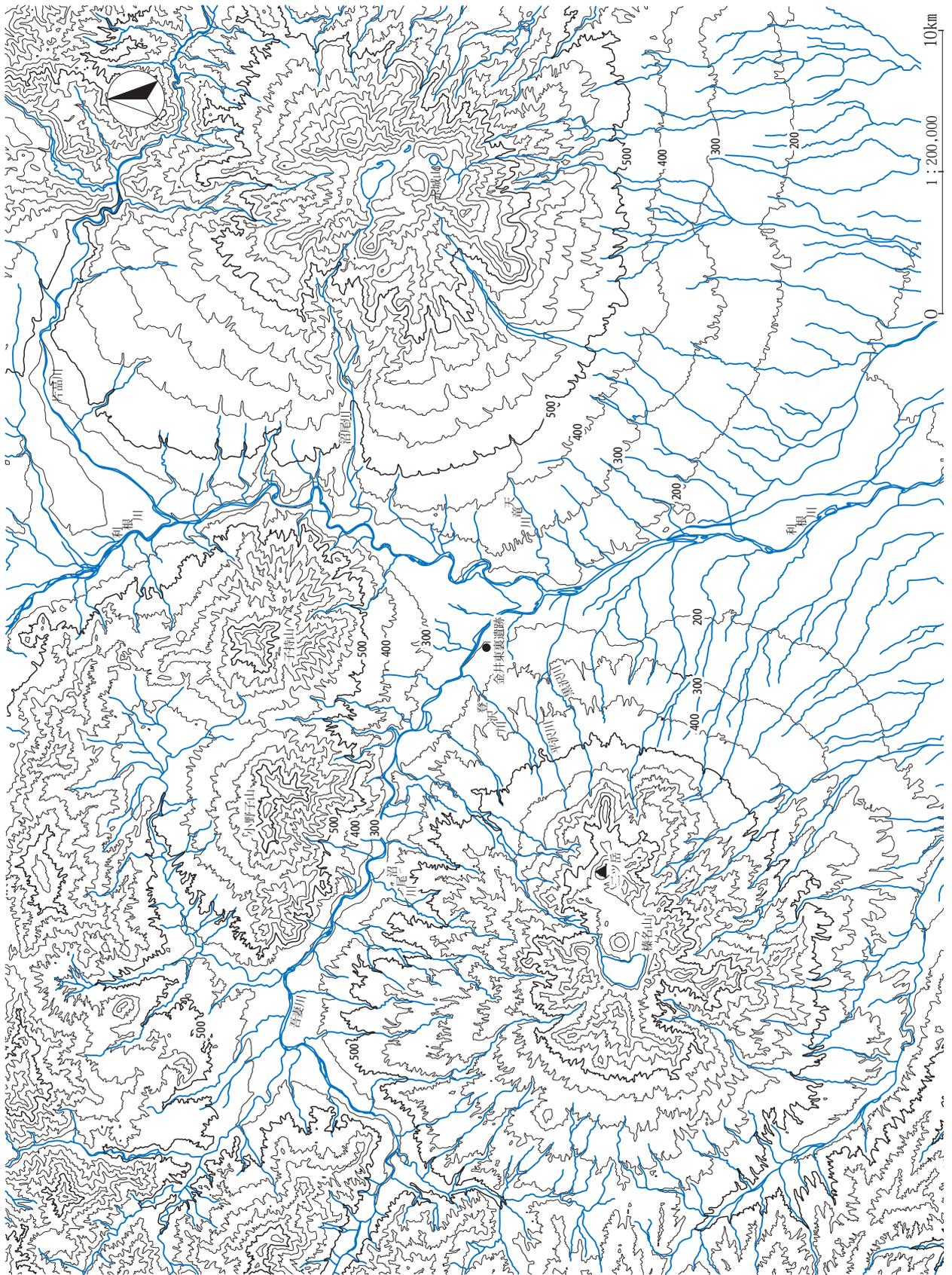
榛名山の活動は外輪山形成の数十万年前から始まる古期の活動と、中央火口丘や寄生火山を作った新期活動に大別できる。

古期の活動は、2000m級の円錐形の成層火山が形成された後に、大爆発を起こし、巨大なカルデラを形成した残骸が現在の外輪山である。その後大爆発を起こして新たなカルデラを作り、そこに形成された溶岩円頂丘も

4万年前に大爆発を起こして軽石が降下している(HP八崎軽石)。この際にできたのが現在の山頂カルデラである。この時期の火山碎屑物のほとんどが、榛名東麓の丘陵地域(標高600～320m)にある。東麓よりさらに東側は、吾妻川の河原となっていた。

新期の活動は、相馬山、水沢山などの寄生火山の誕生に始まり、山頂カルデラ内には、粘度の高い溶岩が盛り上がり榛名富士などの中央火口丘が生まれている。そして榛名山の最後の活動として、古墳時代に3度にわたる噴火が起きたのである。うち、初回の噴火による5世紀の榛名有馬テフラ(Hr-AA)は小爆発で、ごく一部の限られた地点で確認できるのみのため、今回は取り上げない。この後に2度の大爆発があった。

榛名山の1回目の大爆発(6世紀初頭)では榛名渋川テフラ(Hr-FA)を噴出した。マグマ水蒸気爆発で火山灰が降下した後、高温の火山灰と火砕流が北東に向かって高速で流れ下るもので、東麓の沼尾川、大輪沢川、登沢川、平沢川、黒沢川にも多く流れ、谷を埋めて当時の吾妻川



第6図 金井東裏遺跡(榛名山・赤城山・子持山・子野子山)地形図

にまで達するものであった(第7図)。

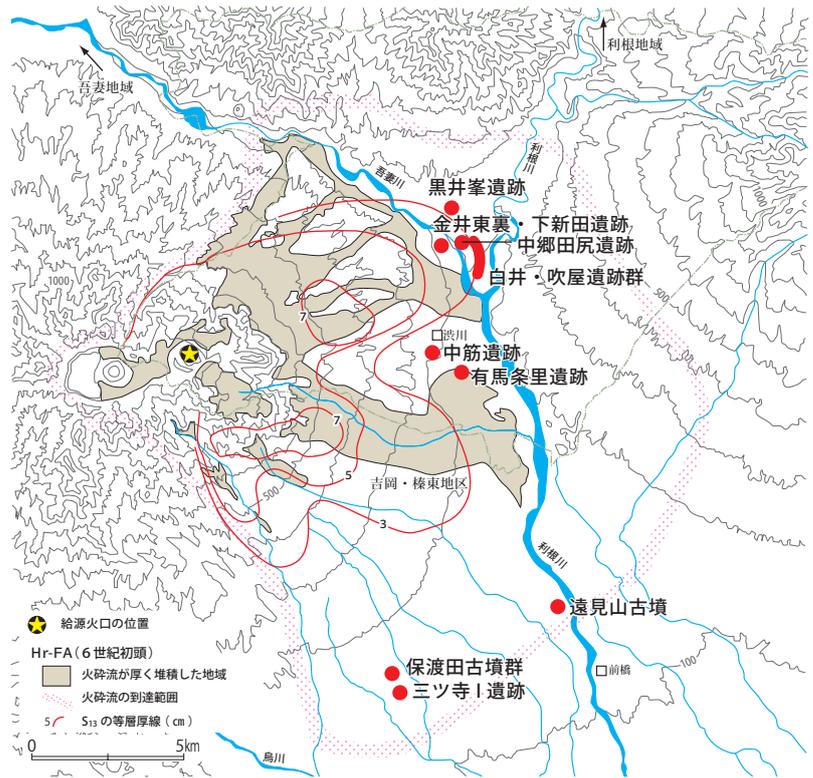
数十年後(6世紀前半)に、榛名山は2回目の大爆発を起こし、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)を噴出した。大量の軽石を噴き上げ、沼尾川、大輪沢川、滝沢川の谷を埋め尽くした(第8図)。この2回目の爆発により、二ツ岳に爆裂火口ができあがり、そこに粘性の高い溶岩が盛り上がりてきたのが現在の二ツ岳である。つまり、噴火時には、二ツ岳の山体は無かったのである。この活動を最後に榛名山は活動を停止している。

金井東裏遺跡は、2回の爆発ともに、直撃を受けており、1回目(Hr-FA)の火砕流で壊滅してしまい、2回目の爆発時には、火山災害からある程度復興し、草が生え始めて、馬が少しいる程度であったが、そこに厚さ2mに及ぶ軽石が降下し、完全に埋め尽くされてしまったのである。火山灰・火砕流の状況については、後章で詳しく述べる。

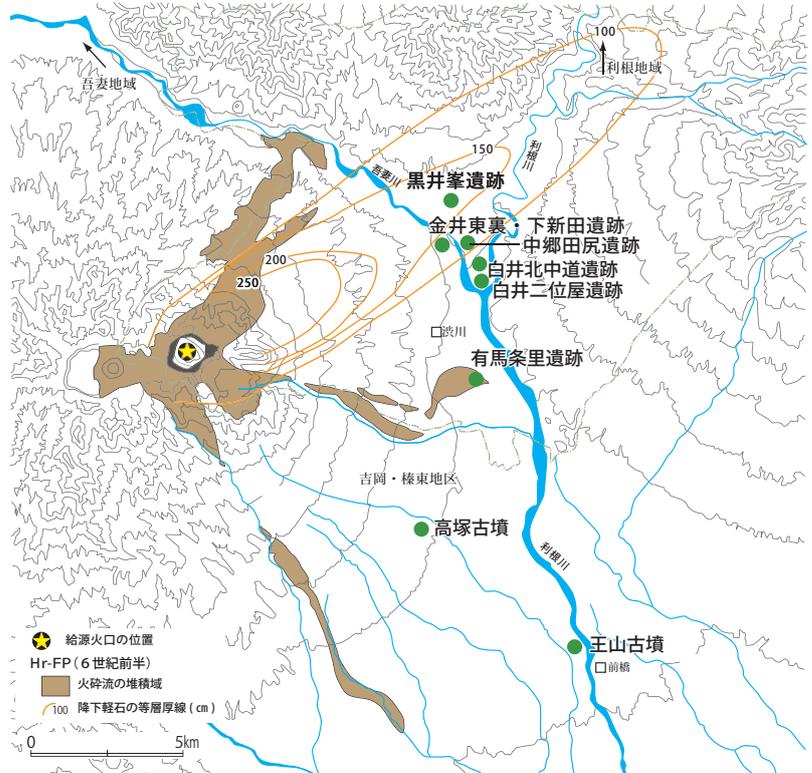
4 金井東裏遺跡の地形的特徴

遺跡地は、吾妻川南岸に形成された段丘面上に位置する(第9図)。吉田(本書論考編)が詳述するように、約5万年前に形成された長坂面に対応する面と想定される。また、榛名山により形成された古い火山麓扇状地を開析した登沢川が段丘上に小扇状地を形成したものである。

西500mの所にある山麓は、榛名山のHr-FA、Hr-FPによる火山灰・軽石・火砕流が堆積している。この山麓の高まりにより、現在は、遺跡から二ツ岳を見ることができない。また、現地表から2.5m掘り下げて、Hr-FA時の地表面に立ってみると、二ツ岳が見える所は段丘面の東端からに限られている。もちろん、二ツ岳は2度目の6世紀前



第7図 榛名二ツ岳渋川テフラ(Hr-FA)火砕流・火山灰分布図

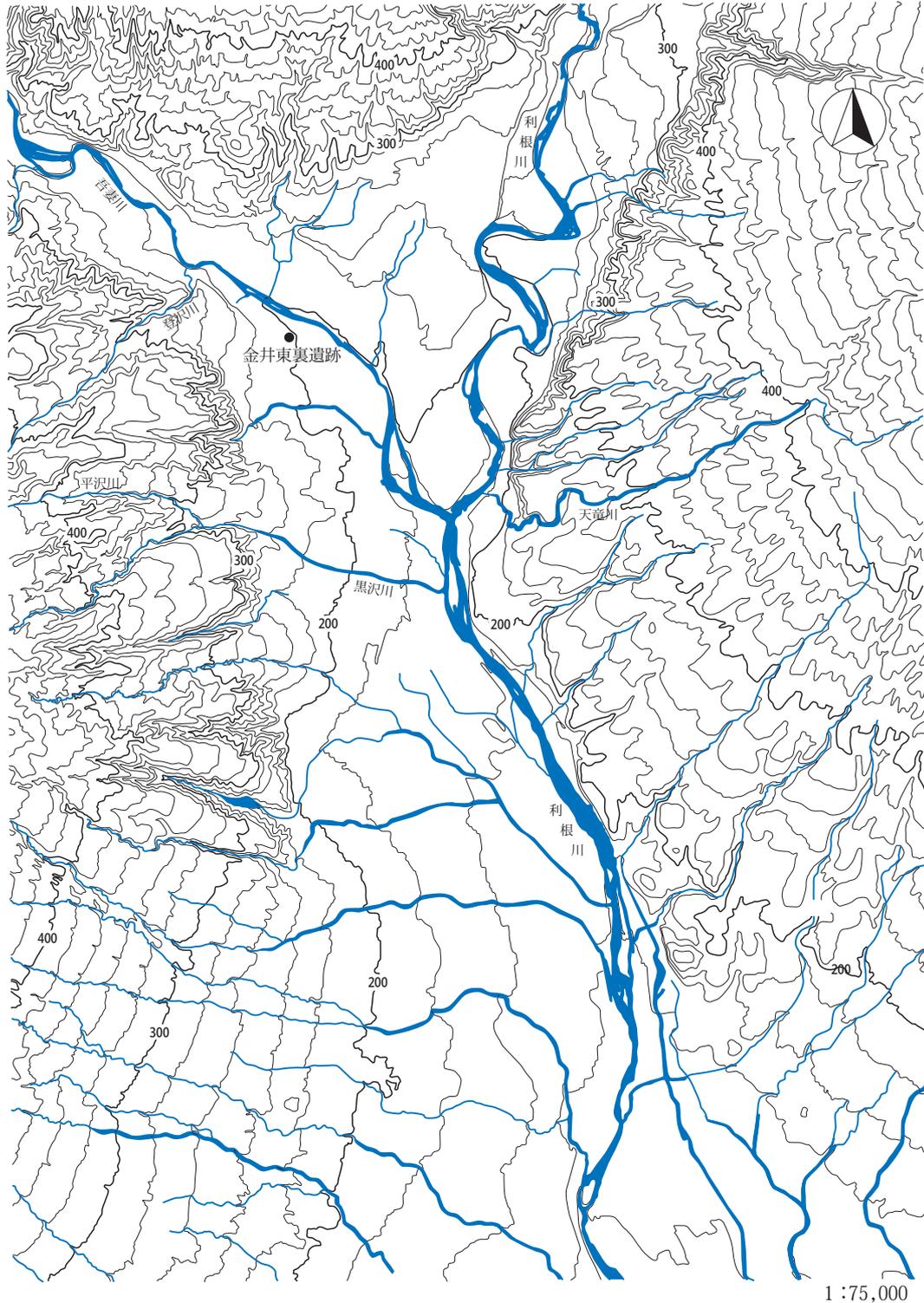


第8図 榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)火砕流・軽石分布図

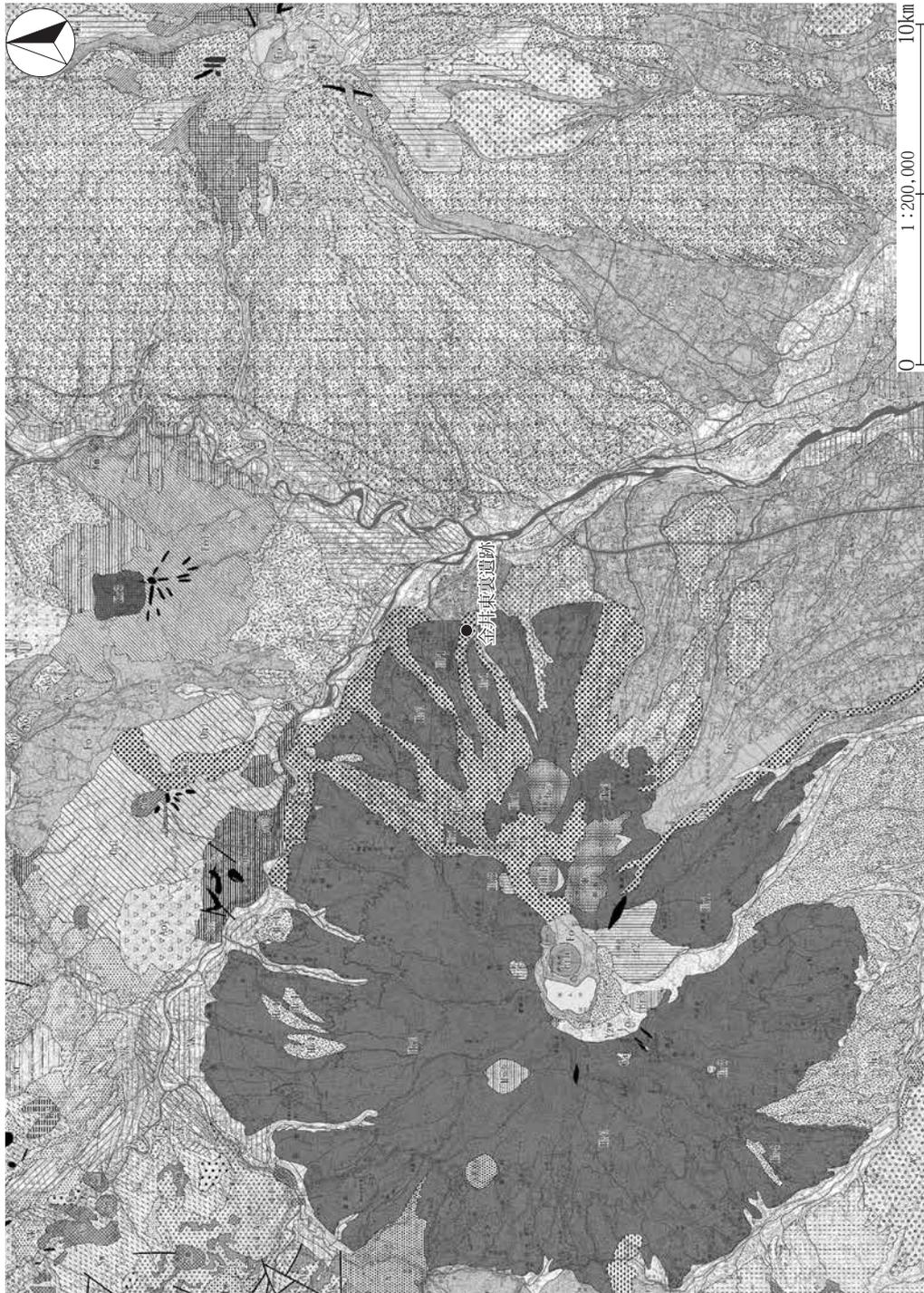
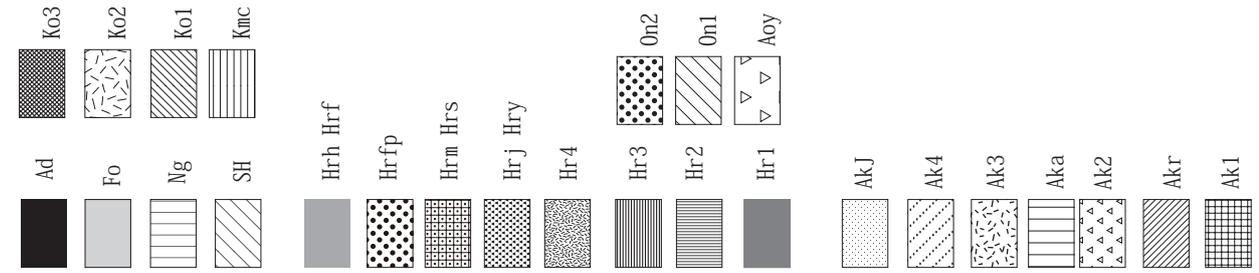
半の噴火後に出来た溶岩ドームなので、当時のムラ人にはもともと山体は見えなかったと考えている。

以上のように遺跡周辺の土壌は、基本的に、利根川・吾妻川の低地の堆積物を除くと榛名山に由来していることが分かる。そして、金井東裏遺跡の立地する地点

は、吾妻川の河岸段丘として形成されたもので、その上位に火山麓扇状地を開析した登沢川の小扇状地が形成されたものと考えて良い。細かな地形の形成については、本書の吉田氏の論考を参照されたい。



第9図 金井東裏遺跡周辺地形図



- Ad 安山岩岩体
- Am 安山岩岩体
- Fo 山麓堆積物
- NS 段丘長坂面
- SH・AS 段丘井面・浅田面
- NI 自然堤防堆積物
- A 沖積
- 嶺名火山噴出物
- Hrf Hrh 二ツ岳溶丘他 角
- Hrj Hry 四石デイサイト
- Hr1 第5期 二ツ岳火砕流
- 火山灰・火山岩塊
- Hrm Hrs 第5期 水沢山他溶岩門頂
- 丘 角四石デイサイト
- HryHrj 第5期 行幸田・陣馬岩屑なだれ堆積物 火山岩塊、火山礫、火山塵、火
- 山吹
- Hr4 第4期 火砕流 軽石、火山灰・火砕流
- Hr3 第3期 溶岩類 紫蘇輝石安山岩
- Hr2 第3期 噴出物 紫蘇輝石普通輝石安山岩溶岩及び火砕物
- Hr1 第1期 噴出物 紫蘇輝石普通輝石安山岩溶岩及び火砕物
- 赤城火山噴出物
- AkJ 第4期 地蔵岳他溶丘丘頂 紫蘇輝石・デイサイト
- AK4 第3期 湖成層 シルト及び砂
- AK3 第3期 大畑火砕流 溶結凝灰岩、軽石及び火山灰
- Aka 第2期 荒山溶岩 普通輝石紫蘇輝石安山岩
- AK2 第2期 土石流・岩砕なだれ 火山岩塊、火山礫
- Akr 第1期 黒楡山溶岩 普通輝石紫蘇輝石安山岩
- AK1 第1期 沼尾山溶岩 かんらん岩・紫蘇輝石安山岩他
- 子持火山噴出物
- Ko3 溶岩門頂丘 かんらん石普通輝石紫蘇輝石安山岩
- Ko2 末期活動期 泥流堆積物
- Ko1 主活動期 普通輝石紫蘇輝石安山岩溶岩及び火砕物
- Kmc 古子持火山噴出物 普通輝石紫蘇輝石安山岩溶岩及び火砕岩
- 小野子火山噴出物及び関連地質
- On2 山頂溶岩 普通輝石紫蘇輝石安山岩
- On1 成層火山噴出物 かんらん石・紫蘇輝石安山岩
- Any 青山岩帯 紫蘇輝石安山岩から珩岩

第10図 嶺名山・赤城山付近地質図

5 遺跡地の地質について

榛名山及びその付近の地質について簡単に記す。地質図を見ることで、榛名山の火山爆発の様子が窺えるとともに、遺跡地周辺の地質の特性が分かる(第10図)。

榛名山は、その表面は第四紀火山及びその火砕物で構成されている。それは、東の対岸にある赤城山も北の対岸にある子持山・小野子山も同じである。山体の南～西～北にかけて、紫蘇輝石安山岩及び火砕物からなる榛名第1期の古期の噴出物(Hr1)が堆積する。これら山麓傾斜地に分布する各種の火砕流堆積物の多くは、山頂カルデラ形成期に噴出したものである。

古墳時代に爆発した榛名山には、角閃石デイサイトから成る、榛名5期二ツ岳溶岩円頂丘(Hrh)からなる3つの溶岩ドームがある。また北東～東南方向に向かって、榛名山起源の小河川沿いの溪谷に、第5期二ツ岳火砕流(Hr-FA)が流れくだっており、薄く覆っている。金井東裏遺跡もまさにこの火砕流の下にある。さらに、榛名二ツ岳伊香保テフラ(Hr-FP)の軽石は、北東方向に降下し、堆積した。また、第四紀更新世～完新世の山麓堆積物も東裏南方に認められる。行幸田付近には、榛名第5期行幸田・陣馬岩屑なだれ堆積物が認められる。

東側対岸の赤城山は、古期成層火山を形成した安山岩質と、新規成層火山を構成したデイサイト質の火砕流堆積物で構成されている。金井東裏遺跡との対岸部分である山体南西側は、赤城第3期大胡・棚下・糸井火砕流堆積物で埋め尽くされている。一部には赤城第2期土石流が入り込んでいる。これらの赤城山の堆積物の上に、榛名山から飛んだHr-FAの火山灰やHr-FPの軽石が浅く堆積している。南側の白川流域は、泥石流堆積物が堆積している。

北側対岸は、後期更新世のローム土堆積の長坂面(黒井峯遺跡面)が中心である。子持山は、第四紀初期頃の複合成層火山で、開析が進んでいる。子持末期活動期の安山岩溶岩と火砕岩からなる火砕流堆積物が山側にある。北岸西よりの小野子山も、ほぼ子持山と同時期の活動期で、山頂及び南東側には、紫蘇輝石安山岩からなる小野子山頂溶岩と、同じく、紫蘇輝石安山岩とかんらん石輝石安山岩及び火砕物からなる小野子成層火山噴出物がある。川沿いには、第四紀前期更新世の凝灰角礫岩、砂岩及び泥岩からなる小野上層がある。

6 まとめ

このように地形・地質を見てくると、榛名・赤城・子持・小野子の4火山の噴出物による、第四紀火山及びその火砕物で構成される地質が遺跡の四方にあることが分かる。まさしく、火山で囲まれた立地にある遺跡と考えて良い。遺跡立地点は、先述したとおり、吾妻川の河岸段丘として形成されたもので、それに火山麓扇状地を開析した登沢川の小扇状地が段丘上に形成されたものと考ええる。

遺跡地のすぐ東には、比高20mほどの段丘崖の段差がある(第11図)。登沢川が、吾妻川に向かって流れ出る北側から南西にかけて続いており、金井下新田遺跡はその南端にあたり、比高も数mとかなり縮まる。上信自動車道は、段丘面の東端近くを通るので、崖線に沿って調査を行う形となった。

先述したように当時の古墳時代人には、榛名山爆発の本体は見え、上に上がった噴煙を見ることで分かったものと思われる。

また金井東裏遺跡の西北から西にかけての山麓3ヶ所からかつて湧水が存在したことを踏査で確認した。一部は、畑の灌漑に使用していたとのことである。現在は湧水を確認できないので、これらの湧水が、層厚2.5m以上に及ぶ火砕流・軽石降下前に湧出していたものかどうかは、はっきりとはしないが、榛名山麓から湧き出た湧水が、遺跡内を数箇所流れていた可能性は考えられる。その一つが、甲着装人骨が出土した31号溝と呼称した自然流路と想定している。これらの湧水を利用して、飲料水や畠の耕作などを行ったものと考えている。

第2節 歴史的環境(第12・13図)

1 はじめに

金井東裏遺跡は、榛名山北東麓で、利根川合流前の吾妻川を上流側に遡った吾妻川南岸の河岸段丘面上に位置している。この地点は、北の利根地区を通り、越後に至るルートと、西の吾妻地区を通り、信濃あるいは越後に抜けるルートの両方のルートを見下ろせる地点である。特に吾妻から信濃に抜けるルートを押さえる重要拠点である。

この地域周辺は、大きく3つのエリアに分かれる。①地域：金井東裏遺跡がある地域で、榛名山北東麓から吾



第11図 金井東裏遺跡周辺地形図

妻川の南岸まで、榛名山東麓から利根川西岸までの地域。
 ②地域：旧子持村にあたる地域で、利根川と吾妻川に挟まれている。吾妻川北岸側と利根川西岸側で様相が異なる。
 ③地域：利根川東岸で、赤城山西麓にあたる地域。
 それぞれの地域差を考慮しながら、以下簡単に旧石器時代から弥生時代まで歴史的な背景を述べる。古墳時代の榛名火山の爆発の時期を中心にした古墳時代についてはやや詳しく歴史をたどる。その後の奈良～江戸時代は、地域の歴史の流れを知るための簡単な記述とする。

なお、遺跡分布図は古墳時代のみ分布図を作成した。遺跡分布図は2枚作製し、第12図は古墳時代前期～Hr-FA降下以前まで、第13図はHr-FA降下以降～7世紀までの遺跡分布図となる。なお、主要遺跡のみ取り上げている。参考文献も分布図に掲載した古墳時代の遺跡のみに限定した。

2 旧石器時代

金井東裏遺跡には認められない。

周辺からは、石器群の調査事例が確認されている。As-BP下からは、中郷遺跡、吹屋犬子塚遺跡、上白井西伊熊遺跡、As-Sr下からは吹屋犬子塚遺跡、上白井西伊熊遺跡、As-YP下からは、吹屋遺跡、吹屋中原遺跡に出土例がある。

3 縄文時代

金井東裏遺跡からは、前期～後期までの竪穴建物等が出土している。(石坂茂ほか2018『金井東裏遺跡近世・弥生・縄文時代編』)

草創期 利根川西岸の旧流水域に接した河岸段丘上に立地している。隆起線文・爪形文・多縄文土器や有舌尖頭器などの石器が出土している。

早期 赤城山西南麓の尾根状の丘陵地形、子持山南東麓、榛名山東麓などの広域に遺跡の分布が認められる。草創期の河岸段丘上の遺跡分布が丘陵地形に移行している。竪穴建物による集落の形成がはじまる。赤城山西南麓に数多くの遺跡がある。

前期 縄文時代の他の時期に比べて遺跡数が急激に増加し、最多となる。子持山東麓や赤城山南麓での調査によりこの時期の様相が明らかになってきている。関山・黒浜式期に増加し、諸磯b式期に最多となり、諸磯c式期には衰退し、十三菩提式期には無くなるという極端な動きを示している。

中期 山麓末端の台地や丘陵上に、阿玉台Ⅱ式期以降に、集落数が急激に増加し、加曾利E3式期には大規

模環状集落の形成が認められて頂点に達する。しかし、加曾利E4式期になると、急激に小規模集落主体に変化する。

後・晩期 集落の減少はさらに進展し、集団墓が集落とは別に形成されてくる。一方で、明瞭な集落跡はこの周辺では確認できていない。

4 弥生時代

金井東裏遺跡では中期前半～後期中頃の遺構・遺物が出土している。

前期 押手遺跡で東海系の条痕文系土器と共に、遠賀川式系土器が出土している。南大塚遺跡では、条痕文系土器を利用した再葬墓が確認されている。

中期 金井東裏遺跡からは、中期前半から後半にかけての筒形土器や石鍬などの遺物と壺棺墓・土坑などが出土している。半田南原遺跡から、土器とともに石鍬が出土する。行幸田山遺跡からは岩櫃山式土器が出土している。この時期の土器に糊の圧痕が残るものがあり、稲作が行われた可能性がある。

中村遺跡、有馬条里遺跡からは櫛描文系の栗林式(竜見町式)土器が出土し、環濠集落が出現している。利根川西岸の低位段丘面上に立地している。

後期 金井東裏遺跡からは、後期前半から中頃にかけての遺物と竪穴建物などの遺構が検出されている。人形土器も出土した。渋川市周辺では、榛名山麓端部や、吾妻川南岸、利根川西岸の段丘上や、利根川東岸の赤城山西麓に、急激に遺跡数が増えてくる。櫛描文系の樽式土器の標識遺跡である樽遺跡のほか、中筋遺跡、有馬条里遺跡などからは建物が、有馬条里・有馬・中村・石原田中遺跡からは礫床墓が検出され、鉄器やガラス小玉が副葬されている有馬遺跡の例も知られる。有馬・押手遺跡などからは方形周溝墓、空沢・中村遺跡などでは円形周溝墓が確認されている。人形土器は、有馬遺跡以外にも長野県からの出土例があり、分布圏を形成する。水田遺跡の確認はなされていない。

5 古墳時代(第12・13図)

金井東裏遺跡では、中期中頃～後期前半の時期のみの遺物・遺構が出土している。

前期～中期前半(3世紀後半～5世紀前半)(第12図)

金井東裏遺跡では、この時期の遺構は出ていない。

集落 ①地域の利根川西岸の有馬条里遺跡、②地域の吾妻川北岸の中郷恵久保遺跡、吹屋糺屋遺跡、中郷田尻遺跡、白井北中道Ⅲ遺跡、③地域の利根川東岸の北町遺

跡などがある。そのうち、継続してムラを維持するのが、①地域の有馬条里遺跡である。

生産地 畠が3世紀末に浅間山の噴火で降下した軽石(As-C)下より、①地域の有馬条里遺跡から検出されている。

古墳 ①地域の行幸田遺跡A区1号墳は前期後半の小型の方墳で、銅鏃や鉄剣などを副葬していた。渋川地区の最初期の古墳である。有馬条里遺跡など継続的に集落を維持できるこの地域だからこそ、この時期の渋川地域で唯一の古墳が構築できたものと推定する。

他に低墳丘墓・方形周溝墓としては、①地域の空沢遺跡、中村遺跡、②地域の田尻遺跡、押手遺跡、黒井峯遺跡、③地域の見立溜井遺跡がある。古墳は構築できなくても低墳丘墓なら築造できたものと想定される。

中期後半(5世紀中頃～後半)

金井東裏遺跡でもこの時期にムラが始まり、20棟以上の建物が建てられた。畠の痕跡もあり、竪穴系の埋葬主体部をもつ古墳も築かれた。この時期は、①～③各地域に遺跡が多く出現する。

集落 前期から継続して居住する①地域の有馬条里遺跡のような形もあるが、全体的に上位段丘に集落が移り住居の棟数も急激に増えてくる。①地域では、中筋遺跡、高源地東I遺跡があり、②地域の吾妻川北岸には中郷田尻遺跡、中郷恵久保遺跡、吹屋糶屋遺跡などがある。③地域でも、見立溜井遺跡、三原田三反田遺跡などがある。

いずれの地域でも遺跡数・建物数が急激に増えるのがこの時期である。

生産地 水田・畠遺構としては、明瞭に調査で確認できたものは無い。ただし、次のHr-FA下から出土した水田・畠遺構は、遡ってこの時期に水田・畠耕作が開始されたことを推測できる。

古墳 竪穴系の主体部を持つ古墳が各地に現れてきている。①地域の吾妻川南岸の金井丸山古墳、金井諏訪古墳、金井前原古墳、坂下町古墳群、東町古墳、利根川西岸の大崎古墳群、石原東古墳群、空沢古墳群などである。特に坂下町古墳群や東町古墳は積石塚系の方墳で、いずれも川沿いというどちらかという縁辺地に築かれていることなどは、他地域の積石塚と近似する立地性を持っており興味深い。また大崎古墳群には、くびれを有する古墳があり、前方後円墳の可能性も説かれており、注視しておく必要がある。①地域の優勢が古墳の状況から認められる。

S₂上 後期初頭(6世紀初頭Hr-FA直下)(第12図)

金井東裏遺跡では、屋敷地や3号祭祀遺構及び数棟の平地建物、掘立柱建物甲着装人骨等や、この遺跡で初めて調査されたS₂火山灰上の人足跡・馬蹄跡などもこの時期に含める。

集落 Hr-FAの火砕流で被災した①地域の中筋遺跡がある。竪穴建物や垣根・祭祀遺構が検出されている。火砕流により、ムラはほぼ放棄された。②地域の中郷田尻遺跡では、竪穴建物3棟にHr-FA降下時に上屋があったと考えられている。この火砕流により柱痕が榛名山と反対方向に大きく傾いた掘立柱建物跡も検出されている。

生産地 水田 ①地域の吾妻川南岸の渋川坂之下遺跡、利根川西岸の中村遺跡、②地域の吾妻川北岸の中郷恵久保遺跡、中郷田尻遺跡、吹屋犬子塚遺跡、吹屋糶屋遺跡、北牧大境遺跡、③地域の田ノ保遺跡などがある。火山灰により埋もれていることから数多くの遺構が確認されている。

生産地 畠 ①地域の金井東裏・下新田遺跡以外にも高源地東I遺跡、中筋遺跡、有馬条里遺跡などから出ている。②地域の吹屋糶屋遺跡、吹屋中原遺跡からも出ている。③地域からは、宮田諏訪原遺跡から出ている。

各地域で、水田・畠の耕作が行われていたことが分かる。

馬蹄跡 Hr-FA下の水田面などから、①地域の利根川西岸の行幸田城山遺跡、②地域の吾妻川北岸では、吹屋糶屋遺跡、中郷田尻遺跡、北牧大境遺跡、③地域の利根川東岸の田ノ保遺跡で馬蹄跡が確認されている。②地域の吾妻川北岸、①地域の利根川西岸から榛名山北東麓、③地域の利根川東岸から赤城山西麓の広範囲に馬がいたことを馬蹄跡から確認できる。馬具の出土は少ない地域だが、馬がいたことは明らかである。

これ以外に火砕流に被災した時に機能していた状況での遺構の検出を見る明瞭な遺跡は無い。なお、Hr-FA火砕流直前のS₂上で馬蹄跡と人足跡を行幸田城山遺跡では確認している。金井遺跡群以外では初めての確認である。

後期前半(6世紀前半 Hr-FA上～Hr-FP下)(第13図)

金井東裏遺跡では、Hr-FAの火砕流で直撃を受け壊滅しているが、数十年後、草が生え、腐食土が形成されるとともに、馬が少数行き交い、道も確認されている。

この時期は、Hr-FAをまともに受けた榛名山北東麓以外では、継続してムラが営まれ、水田・畠・牧が作られる。さらに古墳もHr-FP下からいくつか確認できる。

集落 ①地域のHr-FAにより大打撃を受けた、中筋遺跡の7号平地建物では、食物を取りに掘り返しに来ている。ただし、米・粟は火砕流で炭化していることから途中で諦めた可能性が高い。他にHr-FA火砕流で被災した①地域ではほとんど無い。反対に、Hr-FA火砕流の被害があまりひどくなかった、②地域の吾妻川北岸の旧子持村付近は、集落全体がHr-FP軽石により埋没して遺存しており、集落の情報が多く、当時の景観が良く分かる国指定史跡の黒井峯遺跡を代表に、西組遺跡、田尻遺跡、八幡神社遺跡などが良く残っている。ムラは、豊富な湧水が利用できる上位段丘面に縁辺部多く、竪穴建物・平地建物・馬小屋・高床倉庫などで構成され、周りに畠と、下の段丘には水田が造成されていた。中郷田尻遺跡Ⅲ区では、Hr-FA降下後も垣根により囲まれた様々な形態の平地建物や掘立柱建物がつくられ、Hr-FA上面で複数棟の様々な形態の平地建物が造られた。さらに、これらの建物を壊し畠が造られている。Ⅳ区では、畠を壊し建物が造られている。他に、押手遺跡、吹屋恵久保遺跡、浅田遺跡などがある。

生産地 水田では、①地域の利根川西岸の有馬条里遺跡は、Hr-FA降下前は畠であったが、被災後は、火山性泥流が1.5m堆積した後に、水田耕地として利用しており、土地利用が変化している。②地域の吾妻川側北岸に面した白井面には、湧水からの豊富な水が供給されているため、水田は広範囲にある。吹屋糶屋遺跡では、畠が水田化されている。下位の浅田面では、吹屋瓜田遺跡・鯉沢瓜田遺跡において水田が検出されている。本地域の水田は、Hr-FA被災後、復旧されていることがHr-FP下でも水田が検出されていることからわかる。他に中郷恵久保遺跡、北牧大境遺跡、吹屋瓜田遺跡などがある。②地域でも利根川に面した側では、白井面の浅田遺跡でHr-FP下水田が検出されているのみである。他にも多くの水田遺跡が検出されている。

畠 ②地域の吾妻川側の雙林寺面・長坂面にあるムラの周辺にある。下位段丘の白井面では中郷田尻遺跡や吹屋糶屋遺跡のように、一部が畠となっている。他に、宇津野・有瀬遺跡、白井北中道Ⅱ遺跡、中郷恵久保遺跡、黒井峯遺跡、館野遺跡、西組遺跡、八幡神社遺跡などから畠が検出されている。

放牧地 多数の馬蹄跡が集中することから確認できる。放牧地の②地域における北限は、利根川の谷が狭く深い尻平沢が想定されている。白井・吹屋遺跡群での膨

大な数の馬蹄跡に示されているように、白井面に広大な放牧地があったと思われ、その面積は5.80km²に及ぶという想定もある(齋藤聡2010)。馬蹄跡は、白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡、白井北中道Ⅲ遺跡、白井十二遺跡、白井南中道遺跡、白井大宮遺跡、白井大宮Ⅱ遺跡、白井佐又遺跡、白井佐又Ⅱ遺跡、吹屋伊勢森遺跡、中郷遺跡、上白井西伊熊遺跡などがある。

③地域の利根川東岸では、宮田諏訪原遺跡や山間部の滝沢御所遺跡で馬蹄跡が出ている。

①地域の利根川西岸でも、中筋遺跡の西、榛名山東麓端部にある行幸田城山遺跡などから馬蹄跡が検出されている。滝沢御所遺跡や行幸田城山遺跡、子持山のHr-FP採取に伴う調査から、山間部からも馬蹄跡と畦状遺構が確認されており、山間部や丘陵上などで馬の放牧がなされていた可能性がある。

馬の遺存体も、中郷田尻遺跡のHr-FP下水田耕土から骨が出土している。3才の幼齢馬である。馬蹄跡から見ると、それぞれの地域で広範囲の放牧がなされていた可能性が高い。

古墳 ②地域では吾妻川北岸の雙林寺面で、中ノ峯古墳、長坂面で田尻2号墳、利根川西岸側の西伊熊面で宇津野・有瀬古墳群がある。有瀬Ⅰ、Ⅱ号墳で、初期の無袖形横穴式石室や小型積石塚が出土しており、中ノ峯古墳・伊熊古墳でも無袖形横穴式石室が出土している。①地域には火砕流の被害を受けた北側にはほとんど認められない。③地域には、無袖形横穴式石室を持つ津久田甲子塚古墳がある。

横穴式石室の初現型式の無袖形石室が数多く現れる注目すべき地域である。

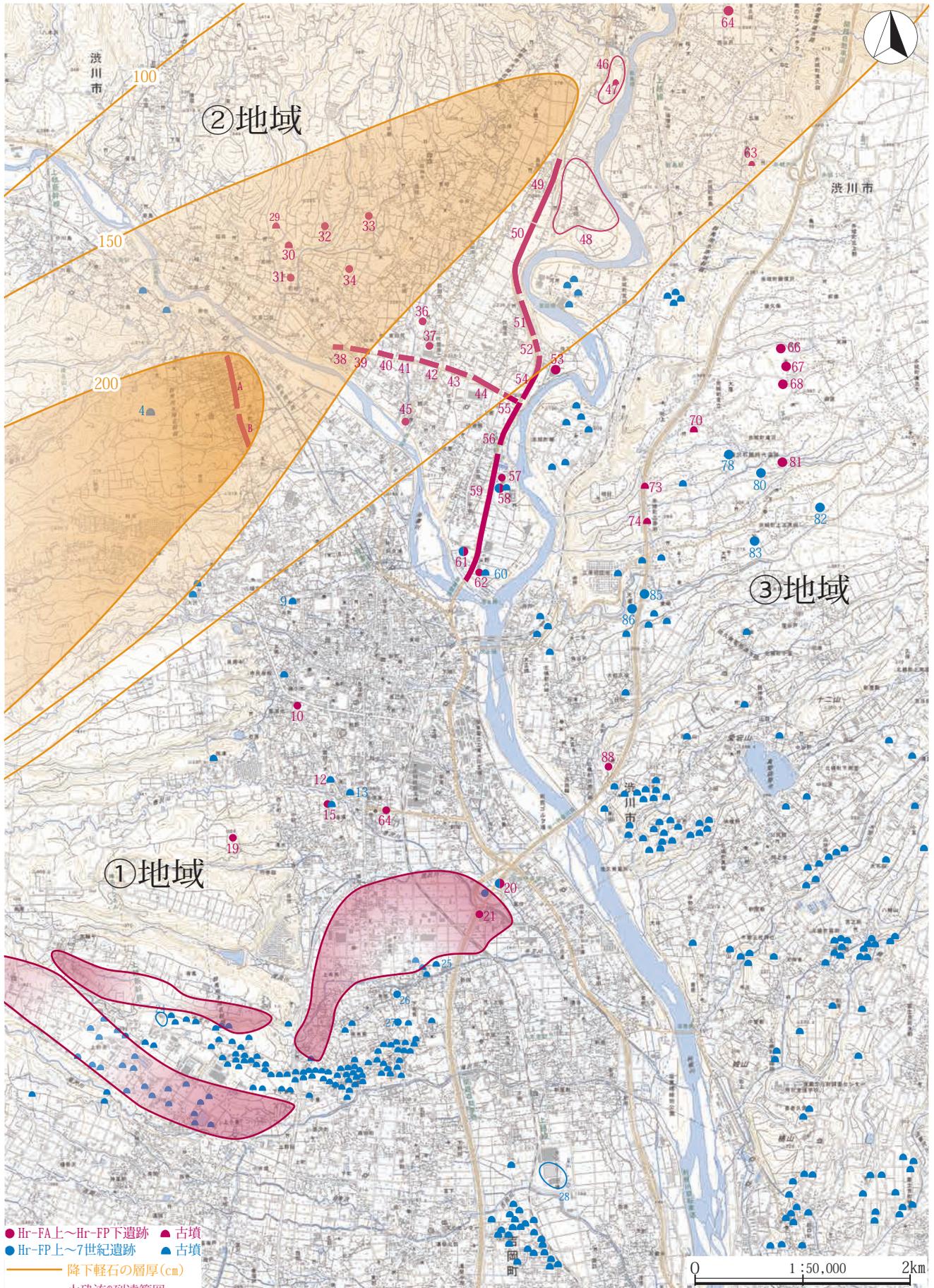
後期後半～終末期(6世紀中頃～7世紀Hr-FP後)

(第13図)

金井東裏遺跡では、Hr-FPに2m覆われてしまった後は、江戸時代まで遺構の検出が認められない。

この時期は、2m近く堆積した地域ではほとんど遺跡が確認できず、Hr-FP降下あまり多くない榛名山北東麓以外の地域に遺跡がある。

集落としては、①地域では、軽石降下の少ない南部で中村遺跡、有馬後田東遺跡などがある。②地域は、最も軽石が降下した量が多い地域であるが、その中でも軽石降下がそれほど多くない地域では、6世紀後半～7世紀に入り、白井掛岩遺跡、白井南中道、白井二位屋遺跡な



第13図 金井東裏遺跡周辺遺跡分布図(Hr-FA上～7世紀)

どがある。いずれも1mほどの軽石層が堆積しているが、
竪穴内の軽石を外し、Hr-FA面を床に活かして竪穴建物を
構築している。③地域では、やはり軽石降下が少ない
ので、三原田諏訪上遺跡、見立峯遺跡、房谷戸遺跡、水
泉寺地区遺跡群などの集落がある。

古墳では、②地域の中ノ峯古墳や宇津野・有瀬遺跡の
伊熊古墳などでは、Hr-FP降下後に追葬が行われた痕跡
がある。また、軽石を墳丘にするなどの白井北中道Ⅲ遺
跡例がある。大災害後に被災地に戻り、死者を埋葬した
ものである。②地域は、先ほどの白井北中道Ⅲ遺跡例も
含まれる白井古墳群がある。①地域の軽石が多く降下し
た北部では金井古墳、虚空蔵塚古墳がある。いずれも墳
丘の下及び墳丘の一部に軽石が使用されている。軽石降
下の少ない①地域南部では、半田南原遺跡、有馬堂山古
墳群などがあり、第13図を見て分かる様に、南部の吉岡
町方面にかけて膨大な古墳が構築されている。③地域で
は、やはり軽石の降下が少なく、水泉寺地区遺跡群他多
くの古墳がある。

①地域北部及び②地域では、軽石降下が多く、古墳の
築造はかなり少なくなり、構築する際にも軽石を墳丘に
利用するなどの工夫を行っている。①地域南部や③地域
では、多くの古墳(群集墳)の築造が行われ、特に南部の
吉岡町には非常に多くの数の古墳が構築される。被災地
域からの住民の移動も考える必要があると思われる。

生産遺跡(水田・畠・牧)は大量の軽石降下による軽石
堆積の影響で、畠・水田の耕作や馬飼育に困難が伴い、
遺跡の確認も困難である。ただし、白井二位屋遺跡から
7世紀後半～10世紀までの竪穴建物10棟の中から、馬
歯・馬骨片が出ており、馬がいたことが分かる。

6 奈良・平安時代(8～12世紀)

金井東裏遺跡では、この時期の遺構は見つかっていない。
金井下新田遺跡で、炭焼窯が検出されている。

集落 ①地域の渋川南部地域では、中村遺跡、有馬遺
跡、有馬条里遺跡、半田南原遺跡、中筋遺跡、行幸田畑
中B遺跡など多くの遺跡が認められる。②地域の吾妻川
北岸では、白井面で多く認められ、白井二位屋遺跡、白
井南中道遺跡、中郷田尻遺跡、北牧大境遺跡などがある。
③地域では、三原田三反田遺跡、分郷八崎遺跡などがある。
渋川地域は、古代の群馬郡有馬郷の一部に比定されて
いる。

寺院 有馬廃寺が建立された。上野国分寺式瓦を持つ。
鉄生産 製鉄遺跡が急激に出現し、①地域で、金井製

鉄遺跡、半田中原・南原遺跡、空沢遺跡、有馬条里遺跡
などにある。

水田 水田は、①地域の八木原沖田遺跡、半田薬師遺
跡、②地域の田ノ保遺跡から検出されている。軽石降下
の多い地域からの検出は難しい。

牧 『延喜式』には、「御牧(勅旨牧)」が甲斐・武蔵・信濃・
上野の4ヶ国に32ヶ所設置されており、上野では、利刈・
有馬嶋・沼尾・拝志・久野・市代・大藍・塩山・新屋の9ヶ
所ある。うち、利刈牧・有嶋牧・沼尾牧の3ヶ所が遺跡
地のある渋川周辺にあったものと推定されている。半田
中原遺跡では、広大な土地区画溝と推定される溝が検出
され、馬を飼育する牧の有馬嶋牧の可能性が考えられて
いる。

7 中世(鎌倉～戦国時代 13世紀～16世紀)

金井東裏遺跡では、この時期の遺構は出ていない。渋
川地域では、鎌倉時代に源氏系の渋川氏と足利系渋川氏
という二系統の渋川氏が活動し、やがて長尾氏が上野守
護代として白井城に入る。白井城の一部が白井北中道遺
跡で確認されている。二位屋城の堀が白井二位屋遺跡、
白井南中道遺跡で確認されている。

8 近世(江戸時代 17世紀～19世紀末)

金井東裏遺跡では、土地区画に関係する溝状遺構や、
畠跡の可能性のある畝状遺構、土坑墓がいくつか出土す
るのみである。

近世の金井村は高崎藩領から安中藩領を経て幕府直轄
領になった。畠作中心の村であったが、元和8年(1622)
頃に、越後と本庄を結ぶ三国街道の宿駅として、金井宿
が成立した。本陣・脇本陣を置く宿であった。北側すぐ
の吾妻川を渡り越後に抜ける南牧村に空ヶ橋の関所が設
けられた。また、金井宿は祖母島村へと通じる吾妻道の
宿でもあった。

第2表 金井東裏遺跡周辺遺跡一覧表(1)

No	遺跡名	遺跡種類・内容															文献番号	備考		
		建物・集落			墓・古墳			水田			畠			馬跡・放牧地						
		前期 ~ 中期 中頃	5C後半 ~ Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-FP 下	Hr-FP 上-7世 上紀	前 中 中頃	5C後半 ~ Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-FP 下	Hr-FP 上-7世 上紀	前 中 中頃	5C後半 ~ Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-FP 下	Hr-FP 上-7世 上紀	前 中 中頃	5C後半 ~ Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-FP 下			Hr-FP 上-7世 上紀	
A	金井東裏遺跡		○				○								○		○		本書	FA火碎流上の足跡・蹄跡もある
B	金井下新田遺跡		○												○		○		B	
1	金井丸山古墳						○												1	
2	金井前原古墳						○												2	
3	金井諏訪古墳						○												3	
4	金井古墳								○										4	
5	坂下町古墳群						○												5	
6	坂之下遺跡									○									6	
7	東町古墳						○												7	
8	大崎古墳群						○												8	
9	虚空蔵塚古墳								○										9	
10	高源地東I遺跡	○	○							○				○	○				10	
11	田中遺跡		○																11	
12	諏訪ノ木V遺跡								○										12	
13	石原東古墳群						○		○										13	
14	石原東遺跡									○									14	
15	空沢遺跡						○	○	○										15	
16	糺屋遺跡		○																16	
17	行幸田西遺跡		○																17	
18	中筋遺跡		○				○?			○				○					18	
19	行幸田城山遺跡			○												○			19	FA火碎流上の足跡・蹄跡もある
20	中村遺跡					○				○	○								20	
21	有馬条里遺跡	○	○							○			○	○					21	
22	有馬遺跡		○										○						22	
23	行幸田山遺跡					○													23	
24	有馬堂山古墳群								○										24	
25	有馬後田東遺跡		○			○													25	
26	有馬久宮間戸遺跡					○													26	
27	有馬寺畑遺跡					○													27	
28	半田南原遺跡						○		○										28	
29	中ノ峯古墳							○	追葬										29	
30	丸子山古墳					○		○											30	方形周溝墓、積石塚
31	北牧相ノ田遺跡									○									31	
32	押手遺跡					○								○					32	
33	西組遺跡					○													33	
34	黒井峯遺跡					○				○				○					34	
35	田尻遺跡		○																35	
36	八幡神社遺跡					○								○					36	
37	吹屋恵久保遺跡					○								○					37	
38	北牧大境遺跡									○	○	○							38	
39	吹屋糺屋遺跡													○	○		○		39	
40	中郷田尻遺跡		○	○						○	○			○					40	
41	吹屋三角遺跡									○	○			○					41	
42	中郷恵久保遺跡	○								○	○			○			○		42	
43	吹屋中原遺跡													○	○		○		43	
44	吹屋犬子塚遺跡					○				○	○						○		44	
45	鯉沢瓜田遺跡 吹屋瓜田遺跡									○	○								45	
46	宇津野・有瀬遺跡													○					46	
47	伊熊・有瀬古墳群							○											47	
48	浅田遺跡						○							○			○		48	
49	中郷遺跡													○			○		49	
50	吹屋遺跡													○			○		50	
51	吹屋伊勢森遺跡													○			○		51	
52	白井十二遺跡													○			○		52	
53	白井佐又遺跡													○			○		53	

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第2表 金井東裏遺跡周辺遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	遺跡種類・内容																		文 献 番 号	備 考		
		建物・集落				墓・古墳				水田				畠				馬蹄跡・放牧地					
		前 期 中 期 中 頃	5C 後 半 Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-PP 下	Hr-PP 上-7世 紀	前 期 中 頃	5C 後 半 Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-PP 下	Hr-PP 上-7世 紀	前 期 中 頃	5C 後 半 Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-PP 下	Hr-PP 上-7世 紀	前 期 中 頃	5C 後 半 Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-PP 下	Hr-PP 上-7世 紀	5C 後 半 Hr-FA 下	Hr-FA 上 Hr-PP 下			Hr-PP 上-7世 紀	
54	白井北中道遺跡Ⅲ							○											○	54			
55	白井北中道遺跡Ⅱ																		○	55			
56	白井北中道遺跡																		○	56			
57	白井大宮遺跡																		○	57	FA火砕流による倒木		
58	白井掛岩遺跡				○														○	58			
59	白井遺跡群																		○	59	FA火砕流による倒木		
60	白井古墳群							○												60			
61	白井二位屋遺跡Ⅲ				○														○	61			
62	白井二位屋遺跡4				○														○	62			
63	津久田甲子塚古墳							○												63			
64	宮田諏訪原遺跡	○	○																	64	祭祀遺構		
65	勝保沢中ノ山遺跡	○																		65			
66	寺内遺跡			○																66			
67	寺内(勝保沢城)遺跡	○	○																	67			
68	勝保沢刺刀窪遺跡		○																	68			
69	滝沢天神遺跡	○																		69			
70	見立八幡遺跡							○												70			
71	見立溜井遺跡	○																		71			
72	見立相好遺跡	○																		72			
73	諏訪西遺跡							○												73			
74	中畦遺跡							○												74			
75	三原田諏訪上遺跡	○																		75			
76	三原田三反田遺跡	○																		76			
77	見立清水遺跡	○																		77			
78	滝沢石器時代遺跡	○		○																78			
79	滝沢日向堀遺跡	○																		79			
80	見立峯遺跡			○																80			
81	滝沢御所遺跡																		○	81			
82	上三原田大畠遺跡			○																82			
83	上三原田東峯遺跡			○																83			
84	樽舟戸遺跡	○																		84			
85	房谷戸遺跡Ⅰ			○																85			
86	房谷戸遺跡Ⅱ			○																86			
87	北町遺跡	○																		87	鍛冶		
88	田ノ保遺跡								○	○	○									88			
89	分郷八崎遺跡	○																		89			
90	下遠原遺跡	○																		90			
91	水泉寺地区遺跡群			○																91			

参考文献

A『金井東裏遺跡甲着装人骨等詳細調査報告書』2017 群馬県教委
 B埋文ぐんま 62・63号 2017・2018 (公財 群埋文)
 1『丸山古墳発掘調査報告書』渋川市教委 1978
 2『渋川市誌・第二巻』渋川市 1993
 4『渋川市市内遺跡9』渋川市教委2016
 5尾崎喜佐雄「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』 1971
 『渋川市誌・第二巻』渋川市 1993
 6『坂之下遺跡発掘調査報告書』渋川市教委1988
 7尾崎喜佐雄「古墳文化」『北群馬・渋川の歴史』 1971
 山本良和「東町古墳」『群馬県史資料編3』 1981
 8『渋川市誌・第二巻』渋川市 1993
 9『上毛古墳総覧』群馬県1938
 『渋川市誌・第二巻』渋川市 1993
 10『高源地東Ⅰ遺跡』(財)群埋文 2006
 11『田中遺跡』渋川市教委 1999
 『渋川市内遺跡Ⅶ』渋川市教委 1999
 12『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』(財)群埋文 2005
 13『石原東古墳群』渋川市教委 1997
 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014

14『石原東・中村日焼田遺跡』渋川市教委 1991
 『市内遺跡Ⅳ』渋川市教委 1991
 『石原東遺跡・中村日焼田遺跡・中村久保田遺跡』渋川市教委 1993
 『石原東遺跡(Ⅱ)・(Ⅲ)』渋川市教委 1994・1995
 『石原東遺跡D区・諏訪ノ木V遺跡』(財)群埋文 2005
 『石原東遺跡E区・F区』渋川市教委 2001
 15『空沢遺跡』渋川市教委 1978
 『空沢遺跡第2次・諏訪ノ木遺跡発掘調査概報』渋川市教委 1980
 『空沢遺跡第3次・5次～10次』渋川市教委 1982・1985・1986・1988
 ～1991
 『空沢遺跡O地点』渋川市教委 1987
 『市内遺跡Ⅴ・Ⅵ・Ⅶ』渋川市教委 1992・1993・2000
 『市内遺跡Ⅵ』渋川市教委 1993
 16『市内遺跡発掘調査報告書』渋川市教委 1988
 17『市内遺跡Ⅴ』渋川市教委 1992
 18『中筋遺跡』渋川市教委 1987
 『中筋遺跡第2次・5次・7次～9次・11次・12次発掘調査概要報告書』
 渋川市教委 1988・1991・1993・1995・1996
 『市内遺跡Ⅲ・Ⅳ』渋川市教委 1990・1991
 『渋川市内発掘調査報告書(石原西浦遺跡3・石原東古墳群2・八崎大宮遺跡2・中筋遺跡13次・白井吹谷戸遺跡)』渋川市教委 2014

- 19 『行幸田城山遺跡3』澁川市教委 2018
- 20 『中村遺跡』澁川市教委 1986
- 21 『有馬条里遺跡』澁川市教委 1983
- 22 『有馬条里遺跡Ⅰ・Ⅱ』(財)群埋文 1989・1991
- 23 『行幸田山遺跡』澁川市教委 1987
- 24 『有馬堂山古墳群』澁川市教委 1999
- 25 『市内遺跡発掘調査報告書』澁川市教委 1988
『市内遺跡Ⅵ』澁川市教委 1993
『市内遺跡Ⅸ』澁川市教委 2006
- 26 『有馬久宮間戸遺跡』澁川市教委 1997
『澁川市内遺跡Ⅺ』澁川市教委 1998
『市内遺跡ⅩⅢ』澁川市教委 2000
- 27 『市内遺跡ⅩⅣ』澁川市教委 2000
『有馬寺畑遺跡』澁川市教委 2014
- 28 『半田南原遺跡』澁川市教委 1994
- 29 『中ノ峰古墳発掘調査報告書』子持村教委 1980
- 30 『丸子山遺跡』子持村教委 2005
- 31 『北牧相ノ田遺跡』子持村教委 2000
- 32 『押手遺跡発掘調査概報』子持村教委 1987
- 33 『西組遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1985
- 34 『黒井峯遺跡Ⅰ』子持村教委 1985
『黒井峯遺跡発掘調査報告書』子持村教委 1991
- 35 『田尻遺跡—第11地点』子持村教委 2005
- 36 『年報11』(財)群埋文1992
- 37 『吹屋恵久保遺跡』澁川市教委 2006
- 38 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 39 『吹屋椀屋遺跡』(財)群埋文 2007
- 40 『中郷田尻遺跡』(財)群埋文 2007
- 41 『吹屋三角遺跡』(財)群埋文 2007
- 42 『中郷恵久保遺跡』(財)群埋文 2006
- 43 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 44 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 45 『吹屋瓜田遺跡』(財)群埋文 1996
『鯉沢瓜田遺跡』子持村教委 2000
- 46 『宇津野・有瀬遺跡』子持村教委 2005
- 47 『子持村誌』子持村教委 2005
- 48 『噴火で埋もれた古代の村(浅田遺跡、宇津野・有瀬遺跡)』子持村教委 2002
- 49 『中郷遺跡(1)-古墳時代以降編-』(財)群埋文 2008
- 50 『吹屋遺跡』(財)群埋文 2007
- 51 『吹屋伊勢森遺跡』(財)群埋文 2006
- 52 『白井十二遺跡』(財)群埋文 2008
- 53 『白井左叉遺跡発掘調査報告書』子持村教委 2005
『白井左叉遺跡Ⅱ』澁川市教委 2010
- 54 『白井北中道Ⅲ遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2009
- 55 『白井北中道Ⅱ遺跡・吹屋犬子塚遺跡・吹屋中原遺跡』(財)群埋文 1996・1998
- 56 『白井遺跡群(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997
- 57 『白井大宮遺跡』(財)群埋文 1993
『白井大宮Ⅱ遺跡』(財)群埋文 2002
- 58 『白井掛岩遺跡』澁川市教委 2016
- 59 『白井遺跡群—古墳時代編—(白井二位屋遺跡・白井南中道遺跡・白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡)』(財)群埋文 1997
- 60 『白井北中道Ⅲ遺跡(1)・(2)』(財)群埋文 2009
『上毛古墳総覧』群馬県1938
『群馬県古墳総覧』群馬県教委2017
- 61 『白井二位屋遺跡Ⅲ』子持村教委 2005
- 62 『白井二位屋遺跡4』(有)毛野考古学研究所 2012
- 63 『津久田甲子塚古墳』赤城村教委 2005
- 64 『宮田諏訪原遺跡Ⅲ・猫持久保遺跡』赤城村教委2004
『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ』赤城村教委 2005
- 65 『勝保沢中ノ山遺跡Ⅰ』(財)群埋文 1988
- 66 『寺内遺跡』赤城村教委 1975
- 67 『寺内(勝保沢城)遺跡発掘調査概報』赤城村教委1996
- 68 『勝保沢剃刀窪遺跡』赤城村教委 1999
- 69 『滝沢天神遺跡—A地点—棚下ひばり塚』赤城村教委 2005
『滝沢天神遺跡—B地点—』赤城村教委 2005
『滝沢天神遺跡—C地点—滝沢江戸久保遺跡』赤城村教委2005
- 70 『見立八幡遺跡』澁川市教委 2008
- 71 『見立溜井遺跡・見立大久保遺跡』赤城村教委 1985
『見立溜井Ⅱ遺跡』赤城村教委 2005
- 72 『見立相好遺跡Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』赤城村教委 2005
- 73 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
『中畦遺跡・諏訪西遺跡』赤城村教委 2000
- 74 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』(財)群埋文 1986
『中畦遺跡・諏訪西遺跡』赤城村教委 2000
- 75 『三原田諏訪上遺跡Ⅰ～Ⅳ』赤城村教委 2004・2005
『三原田諏訪上遺跡Ⅴ・南雲諸峯遺跡』澁川市教委
- 76 『三原田三反田遺跡』赤城村教委 2001
- 77 『見立清水遺跡』澁川市教委 2007
- 78 『史跡瀧沢石器時代遺跡Ⅰ・Ⅱ』澁川市教委 2008
- 79 『見立峯遺跡Ⅱ・滝沢日向堀遺跡』赤城村教委 2003
- 80 『上三原田日向遺跡・上三原田大宮遺跡・上三原田中坪前遺跡・見立峯遺跡Ⅰ』赤城村教委 2002
- 81 『滝沢御所遺跡』(公財)群埋文 2014
- 82 『上三原田大畠遺跡』赤城村教委 2005
- 83 『上三原田東峯遺跡Ⅰ・Ⅱ』赤城村教委 2001・2002
- 84 『樽舟戸遺跡』赤城村教委 1999
- 85 『房谷戸遺跡Ⅰ』(財)群埋文 1989
- 86 『北橋村村内遺跡Ⅲ』北橋村教委 1995
- 87 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委 1996
- 88 『北町遺跡・田ノ保遺跡』北橋村教委 1996
『田ノ保遺跡Ⅲ』北橋村教委 2001
- 89 『分郷八崎遺跡』北橋村教委 1986
- 90 『下遠原遺跡A・C区』澁川市教委 8
『澁川市内遺跡Ⅲ』澁川市教委 2010
『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』澁川市教委 2012
- 91 『水泉寺地区遺跡群』北橋村教委 1995
『群馬用水分郷八崎遺跡・滝原遺跡・下遠原遺跡E区・八幡山遺跡・真壁城山遺跡・棗久保遺跡・西浦遺跡・水泉寺遺跡B区』澁川市教委 2012

第3節 遺跡の基本層序(第14～17図)

1 地形変化と土層

金井東裏遺跡あるところの地形は、吾妻川の河岸段丘形成とともに、開析した登沢川の小扇状地が段丘上に形成されたものと考えている。この遺跡地の地形をまず把握して、北から南へ遺跡地の基本土層を説明したい(第15図)。遺跡地全体は北が高く標高240mほどであり、南に行くにつれ低くなっている。金井東裏遺跡の北端から南端までは、約10mの比高がある。この比高は、火山扇状地の形成時に生まれたものであろう。

まず、遺跡地の北端の13区の土層を見ると、現地レベルは標高239.4mである。ここでは、古墳時代の遺構は、馬の蹄跡がごく少数確認できたのみで確認できなかったが、Hr-FPの軽石が2m積もり、5cmの腐植土層を間に挟んで、厚さ55cmのHr-FAが堆積している。Hr-FA降下直前の標高は、235.5mである。遺構が確認されなかった13区は、人の住まない地点であった可能性が高い。弥生～古墳時代に相当する包含層が、60cmほどある。

南東に100mほど下った10区では、道とヒト足跡が確認できており、人の生活痕跡がある。現標高は235.5mで、13区より5m程下がる。Hr-FPも1.9mの厚さで堆積し、Hr-FAも50cmほど積もっているHr-FA降下前の標高は、232.6mであり、北の13区より約3m下がる。弥生～古墳時代の包含層は、30cmとやや薄い。

南東に70mほど下った9区中央部では、屋敷地が確認されており、Hr-FA時に人が最も多く住んでいた地点である。ここは、現標高231.4mで、10区より4mほど下る。Hr-FPは、1.9mの厚さで降下し、Hr-FAも30cmほど堆積している。Hr-FA前の標高は、228.5mであり、北の10区より約4m下がる。弥生～古墳時代の包含層厚は、保存が決定し、調査を行っていないので不明である。

さらに、南東に60mほど下った4区中央部は、「甲着装人骨」など4体の人骨が確認されたが、Hr-FA時の遺構は約900個の土器と豊富な祭具を出土した3号祭祀遺構以外には、あまり見つかっていない。保存が決定される前に、区域の一部を先行して調査したが、その限られた区域のみで、Hr-FA降下時には埋もれていた5世紀後半の竪穴建物が7棟確認されており、ムラの中心地であった可能性がある。この標高は、現地表面230

mで、北の9区と1.4mほどの差がある。Hr-FPが2m積もり、Hr-FAは30cmほど積っていた。Hr-FA前の標高は、227.4mであり、北の9区より約1m下がる。弥生～古墳時代の包含層は35cmほどある。

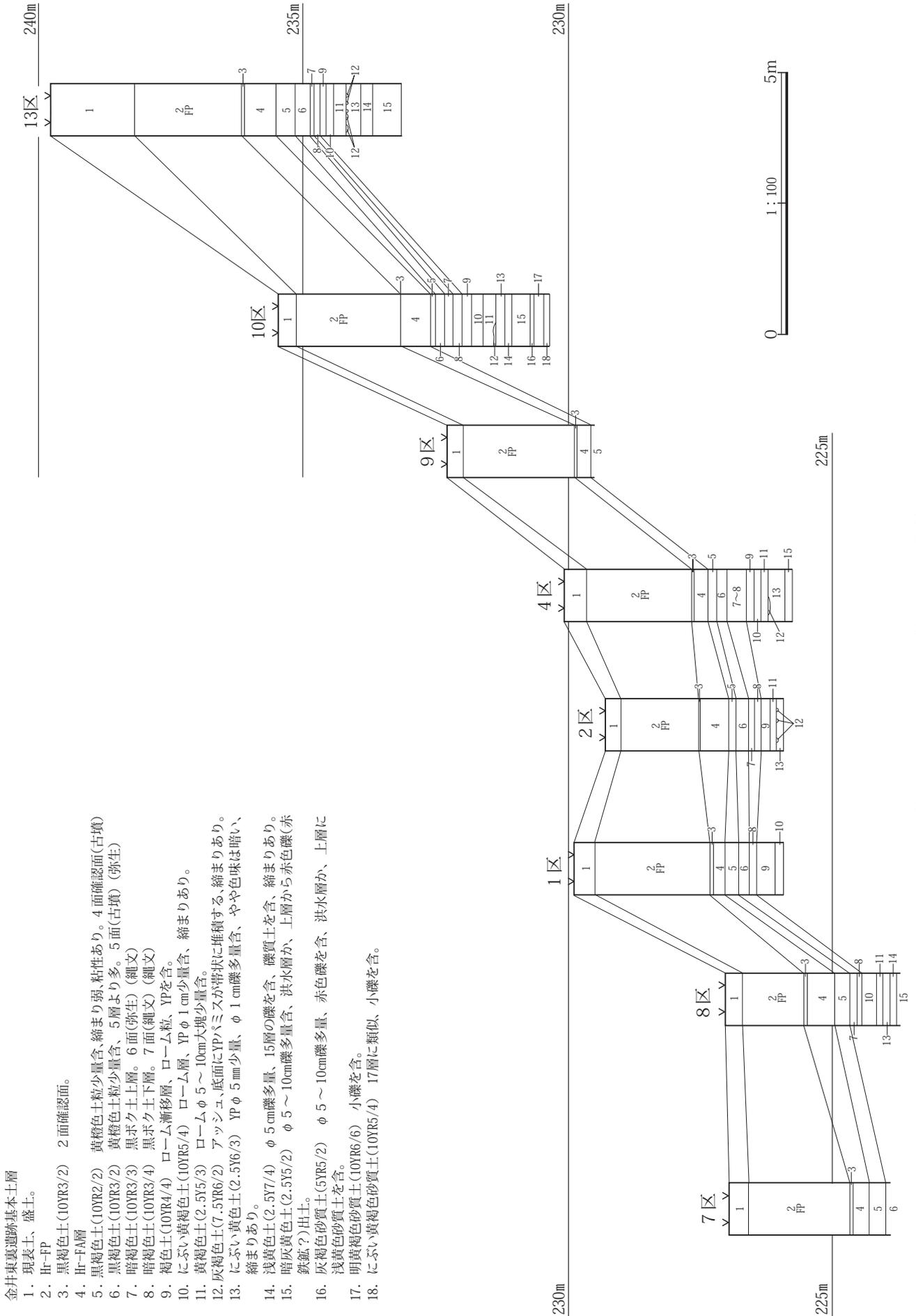
4区から南下した2区は、Hr-FA降下時には祭祀遺構があるのみで、それ以前の5世紀代の竪穴建物は数棟ある。4区中央から35m南下した2区北部で、現標高は、229.2mで、4区より0.8m下がる。現状でも、切り通しの道が、4区と2区の間にあるが、おそらく小さな谷が入っていたものと考えている。Hr-FPは1.5mで、Hr-FAは60cm堆積している。Hr-FA前の標高は、226.9mであり、北の4区より約50cm下がる。弥生～古墳時代の包含層は40cmある。

2区から南下した1区は、Hr-FA降下時に道、足跡、平地建物などがある。降下以前の5世紀代には、土坑・ピットがある。谷地形でやや低くなった1区に比べ標高が少し高くなり、2区北部から90m南下した1区南部で現標高は229.9mで、0.7mあがる。Hr-FPは、2.2mと多く、Hr-FAは、30cmである。Hr-FA降下前の標高は、227.1mであり、北の4区より約20cm上がる。弥生～古墳時代の包含層は、50cmである。

1区から南下した8区は、1区で高くなった地形がまた南に向けて低くなるもので、Hr-FA降下時には、遺構は道と石集積があり、5世紀後半には竪穴建物が2棟あり、路線内遺跡地北部のムラの拠点である。1区南部から35m南下した8区中央部で、現標高227.8mで、2.1m下がる。Hr-FPは、1.3mとやや薄く、Hr-FAは、55cmである。Hr-FA前の標高は、224.9mであり、北の1区より約2.2m下がる。弥生～古墳時代の包含層は、30cmである。

8区から南下した7区は、やや南に向かい下がる地形である。Hr-FA降下時は、道と集石、平地建物などが少しあるのみで、5世紀後半には多くの竪穴建物が構築され、ムラの中心部と推定される。8区中央部から110m南下した7区南端部で、現標高227mであり8区中央部より1mほど低くなる。Hr-FPは、1.9mと多く、Hr-FAは40cmである。Hr-FA前の標高は、223.4mであり、北の7区より約1.5m下がる。弥生～古墳時代の包含層は50cmである。

さらに南の5区は7区の延長でさらに南にやや下がる状況である。その南の6区は、東西方向の小さな谷地形



第15図 金井東裏遺跡各調査区基本土層断面図

で急激に地形が下がっている。谷底に近い6区では、道路建設に伴う後世の攪乱等で、良好な土層断面が取れず、土層図の掲載はできなかった。

2 基本土層(第16図)

金井東裏遺跡の地形は、北から南に下がる段丘地形であり、各調査区は下記のようなほぼ共通した土層断面を持つ。

1層：表土は、Hr-FP混じりの暗褐色土で、層厚は、30～40cmである。ほとんどが耕作により、下の軽石を巻き上げているもので、畑の耕作土となっている。

2層：現表土の下には、榛名伊香保テフラ(Hr-FP)層がある。場所により、層の厚みは異なり、1.3～2.2mと幅はあるが、基本的には、2mほどの層厚を持つことが多い。この地域では層厚で見ると限り軽石は、榛名二ツ岳の北東方向で、最も多く軽石が降下した箇所にあたり、大量の軽石が遺跡地全体に降ったものと考えている。

3層：軽石の直下に、層厚3～8cmほどの黒色腐蝕土層がある。Hr-FA降下後に安定期があり、草などが生えてそれが腐蝕した土層で、これらの土層の上に馬蹄跡及び道が確認されている(2面)。Hr-FA降下後、壊滅した金井東裏遺跡の地に草が生え、そこに馬が駆け巡っていた様子が窺える。一部焼土が観察され、野焼きの可能性はある。

4層：榛名渋川テフラ(Hr-FA)層は、遺跡地全体に広がり、層厚は、30～60cmほどで、場所により厚みが少し異なるが、平均で50cmほどの層厚である。Hr-FAは、早田勉氏により15層に区分されている(soda 1996)が、金井東裏遺跡では9層が確認されている。下の層から順に説明する。なお、基本土層図は遺跡地4区の土層図を元に作成しているので、一部の層が図示できていない。以下、早田氏が古い層から番号を付けた層について、金井東裏遺跡で確認できる層を解説する。

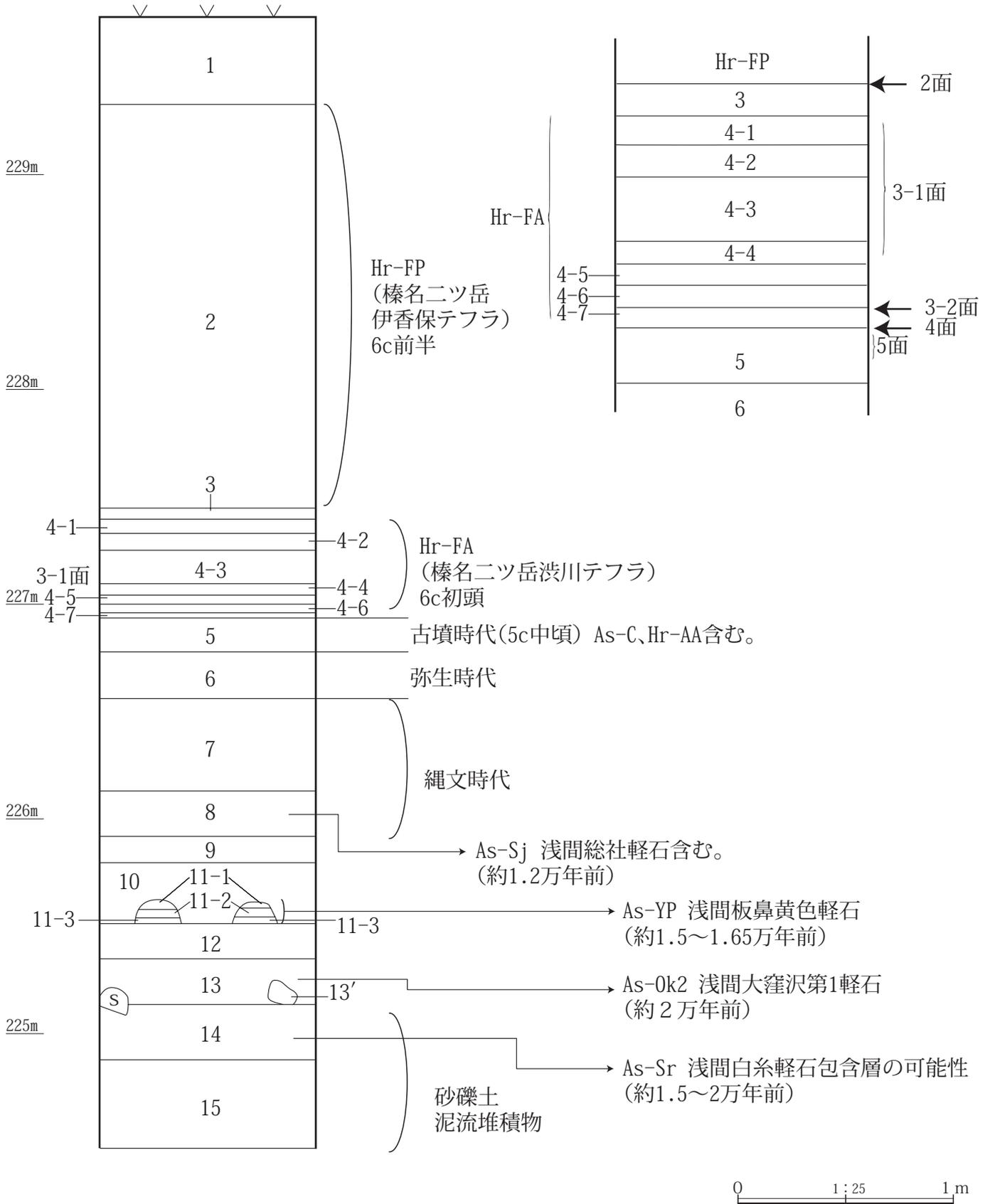
S₁(4-7層)：Hr-FA最下層のアズキ色細粒火山灰層。層厚は、平坦面で、1～5cmほどで、北部に行くほど薄くなっている。南部の7区では、5cmほどの層厚がある。遺跡地全面に降下しているものである。粘り気を持ち、地面に張り付くような形で遺存する。S₁降下時に、家などの上屋を持つ構築物がある場合、上屋の部分には、屋根の上にS₁が積もり、床面に積もらず、それ以外の部分には地面など全体にS₁が積もるので、S₁降下時の家等の

上屋の有無を知ることが出来る。

S₂:31号溝、1・2号古墳や、15号竪穴建物のフク土などで、薄く確認されている。南に隣接する金井下新田遺跡では、遺跡地全体に亘って確認できるが、金井東裏遺跡では、厚く堆積する溝や堀や竪穴建物埋没土などから確認するも平坦面の土層断面では、ほとんど確認できなかった。金井下新田遺跡の調査の所見から、金井東裏遺跡の平坦面でも、一部線状にS₂が堆積していた可能性があるが、写真のみの判断なので、土層断面図に入れることは出来なかった。このS₂降下後に人間の足や馬の蹄が踏み込まれて、足跡・蹄跡を残し、その後のS₃火砕流により、埋め尽くされて良好に残っている。

S₃(4-6層,4-5層)：調査初期段階で、灰色砂質土の下層部(4-7層)と、成層した桃色砂質細粒火山灰層の上層部(4-5層)からなる。その後の調査で、S₃が更に2つのフローユニットから構成されていることが分かった。金井下新田遺跡では、S₃が厚く、3つのフローユニットから構成されていることが分かっている。金井東裏遺跡の特に、平坦面のS₃の層厚は、北部の13区では、5cmほどと薄い、中部の4区では10cmと倍ほどの厚みとなり、さらに南下した、7区では15cmとなり、南部に行くほど層厚が厚くなる傾向がある。S₃の火砕流に伴う堆積が南側程厚かったことが分かる。この傾向は、さらに南側の金井下新田遺跡で顕著で、さらに厚みが増している。その中で、S₃のさらに細かなフローユニットが確認されたのである(早田分析報告より)。

S₇(4-1～4層)：成層した厚い火砕流堆積物で、31号溝の下位より、粒径のそろった灰色砂質部、細粒火山灰を含む不淘汰な灰色砂質部(4-4層)、粗粒で不淘汰な灰色砂礫部(4-4層)、成層した桃色がかった灰色砂質部(4-3層)、細かく成層した桃灰色砂質部(4-2層、4-1層)に5区分できる(早田分析報告より)。ただし、S₇も平坦面では、層厚が、全体としては北から南に下がるにつれ厚くなるが、場所に寄り極端に薄くなったり、厚くなったりするところもあり、S₇火砕流の複雑な動きが層厚に示されるものと考えている。例えば最北部の13区では、S₇の層厚は10cmほどであるが、次の10区では45cmと大幅に厚くなり、次の9区・4区では20cm、14cmと、10区からは大幅に薄くなるが、北端の13区よりは厚くなる。ところが谷状になる2区になるとまた43cmと厚みを持ち、南平



第16図 金井東裏遺跡基本土層模式図

坦部の1区では、8cmとまた薄くなるも、南の7・8区はそれぞれ32cm、33cmと厚みがある。このように、火砕流の層厚が場所により厚みが増えるのは、S₃と同じで、該地点の地形に応じた火砕流の複雑な動きを示しているものである。また、1,000におよぶ線状衝撃痕を残している(3-1面)。

S₉ (第17図7・9・10・13区)：2区を除いてほぼ確認できる土層である。細粒の成層化した黄褐色火山灰層。層厚は5cmほどである。

S₁₂ (第17図-2区)：成層した桃灰色火砕流堆積物。全体からは確認できず、現在の所、1区の調査区北部や2区で限定的に確認され、層厚は2cmである。

S₁₃ (第17図-2区)：非常に細かい黄褐色降下火山灰。1区や2区など限定された地点より出土する。層厚は4cmである。S₁₂、S₁₃は、特定の地点より出土しており、この火砕流・火山灰の動きを示しているものと思われる。

他に、早田氏によると、S₆、S₁₀、S₁₄が確認されたとの記述もあるが、調査のほうでは明瞭に確認することが出来ず、記述から外した。これらについては、早田氏の分析報告を参照してほしい。また、代表的な地点・遺構ごとのHr-FAの層相について、いくつかの地点を選んで後述する。

5層：灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色(10YR8/1)径1～2mmのパミス1%入る。有馬軽石(Hr-AA)の可能性はある。浅間C軽石(As-C)を極少量含む、古墳時代の旧堆積土である。5世紀中頃～後半の遺構がこの層を掘り込んで造られている。金井東裏遺跡のHr-FA以前の古墳時代の遺構はすべてこの層中からの掘り込みである。

6層：黒褐色土(10YR3/2) 明黄褐色(2.5Y7/6)径1～2mm粒1～2%入る。弥生時代の遺物包含層と考えられる。

7層：灰黄褐色土(10YR4/2)縄文時代の遺物包含層。総社軽石を含む可能性がある。

8層：褐灰色土(10YR4/1)縄文時代の遺物包含層。ローム粒1%含む。灰黄色粒(径1～5mm)浅間総社軽石と想定されるものが1%含まれる。

9層：暗灰黄色土(2.5Y4/2)灰黄色粒(径1～5mm)が1%含まれる。

10層：にぶい黄色土(2.5Y6/3)

11-1層：As-YPアッシュ

11-2層：As-YPアッシュ

11-3層：As-YPパミス

12層：にぶい黄色土(2.5Y6/4)ローム土。浅間大窪沢第2軽石粒極少量含む。

13層：灰黄色土(2.5Y4/2)ローム土。浅間大窪沢第2軽石粒極少量含む。

13'層：黄灰色土(2.5Y5/1)砂質土

14層：暗灰黄色土(2.5Y5/2)砂礫土、泥流堆積物。浅間白糸軽石粒極少量含む可能性あり。

15層：黄灰色土(2.5Y5/1)砂礫土、泥流堆積物

本篇で対象となる土層は、以上のうち、2層のHr-FP層から古墳時代旧堆積土の5層までとなる。

3 各地点でのHr-FAテフラ層の状況(第17図)

遺跡地最北部の13区では、FAの層厚は、65cmで、上部のS₉は6cm、S₇は60cmほどの厚い層厚があり、S₃は、8cmあり、S₁は3cmである。

10区になると、FAの層厚は56cmで、上部より、S₉が6cm、S₇は46cm、S₃は6cm、S₁は4cmである。

9区はFAの層厚は32cmで、上部のS₉は4cm、S₇は20cm、S₃は8cm、S₁は4cmである。

4区は、FAの層厚は26cmで、上部よりS₉は5cm、S₇は20cm、S₃は6cm、S₁は3cmである。

2区は、FAの層厚は60cmで、上部よりS₁₃は5cm、S₁₂は3cm、S₇は42cm、S₃は7cm、S₁は4cmである。

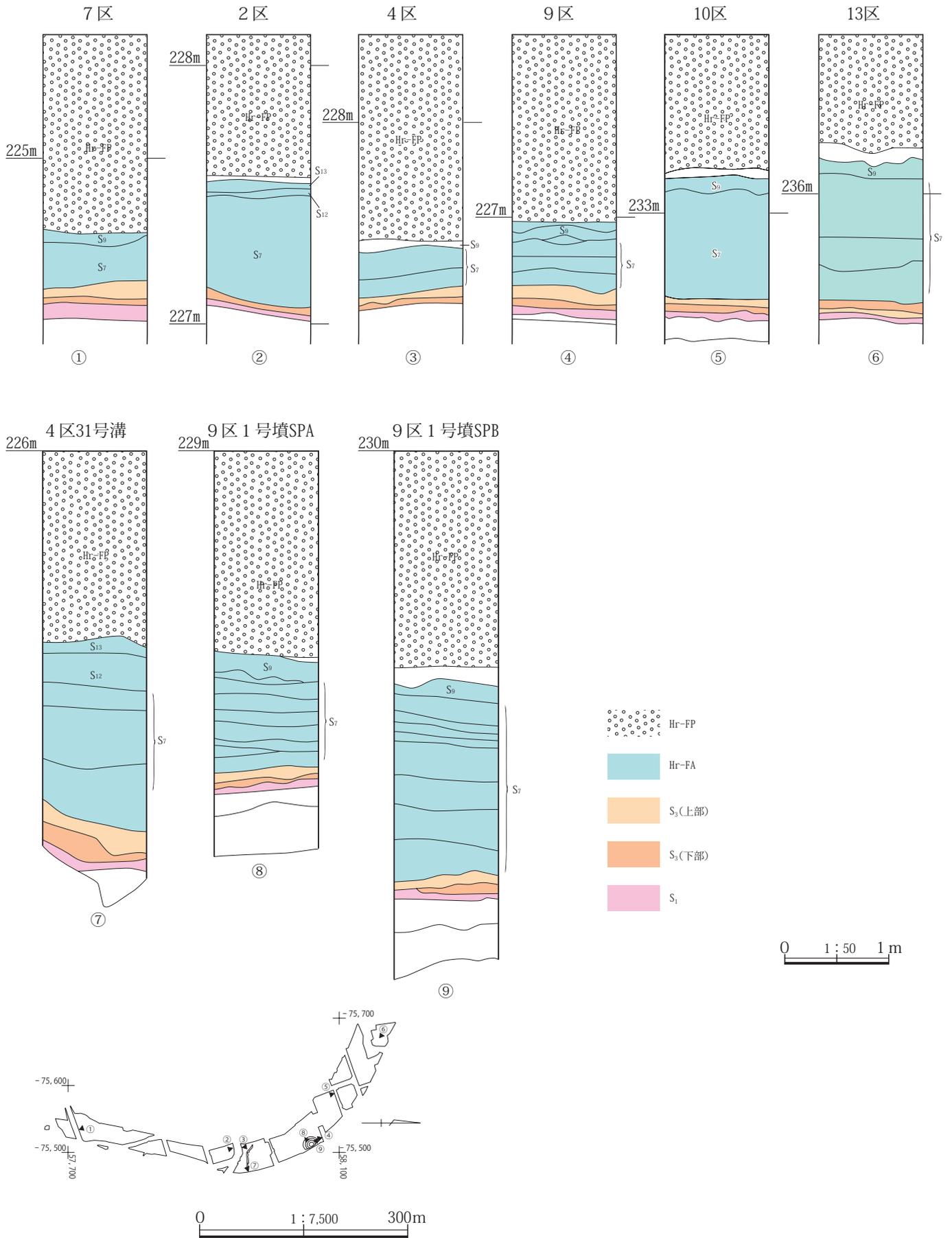
7区は、FAの層厚は40cmで、上部よりS₉は7cm、S₇は30cm、S₃は15cm、S₁は6cmである。

9区にある1号古墳Bセクションでは、深さ65cmの周堀を埋め尽くし、FAの層厚は85cmで、S₉は5cm、S₇は75cm、S₃は9cm、S₁は3cmである。深さ70cmの周堀のAセクションでは、FAの層厚は53cm、S₉は11cm、S₇は36cm、S₃は6cm、S₁は3cmである。

4区にある深さ0.6mの31号溝には、火砕流が多く堆積し、S₁₃は3cm、S₁₂は10cm、S₇は55cm、S₃は15cm、S₂は1cm、S₁は4cmである。

以上見てみると、Hr-FAテフラは、各地点でそれぞれの火砕流の層厚が異なることが分かる。S₁₂・S₁₃は、一部認められない地点はあるが、2・4区を中心に層厚8～13cmで堆積している。

S₉は、やはり一部認められない所がありながら、層厚は5cm近くで同じような値を示す。



第17図 金井東裏遺跡各調査区・遺構でのテフラ層堆積土層断面比較図

S₇は、全地区で最大の層厚を示すもので、北部の13・10区が30～40cmと厚く、中央部の9・4区は20cmと薄く、南部の2・7区は、30～40cmと厚い。薄い堆積を示す9区でも、1号墳の堀には、38～75cmほど積もり、4区の31号溝には55cmほど堆積する。

S₃は、北部は3～6cmほどであるが、南部の7区では、15cmと厚く南に行くにつれ厚みが増している傾向がある。

S₁は、ほぼ3～4cmでほとんど層厚は変わらず、全体に同じように火山灰が降下したことが分かる。

4 遺構確認面(第16図拡大図)

当遺跡の古墳時代では、5つの遺構確認面がある。

1面 1層上面で主として近世遺構が検出された。

2面 Hr-FP(2層)下、3層土上面から確認される面。第16図拡大図にあるように、2層のHr-FP下の、Hr-FAの火砕流後の自然堆積で黒色土化した3層上面を踏み込んだ馬蹄跡と、道が検出される。

3-1面 S₇(4-1～4層)火砕流層中の面である。S₇火砕流により流され、あるいは飛来したものがS₇層中から出土し、また、S₃層を抉る様にして検出されるものがある。S₇火砕流が原因となる遺物や痕跡である。草木が炭化したものなどが、S₇層中より出てきている。S₇の火砕流で流されたものである。また、溝状のもので、西から東にはほぼ一直線状に進み、東端が隆起しているものがあり、これらは火山弾などの物体が西から東に向けて飛来して衝突した状況を示していると考え、衝撃痕跡として検出される。これらの痕跡がこの面からは検出される。

3-2面 S₃(4-5・6層)の火砕流中及びS₂層上面で遺構が確認される面である。S₃の火砕サーージ中から検出された遺物及びS₂を踏み込んだヒト足跡・馬蹄跡が確認される面である。厳密にはS₃層中とS₂層上面は時間的には、S₃層中が新しく、S₂層上面が古い。S₂を踏み込んだ後の、S₃火砕流流下による人馬の被災、家の倒壊などを考えると一連の動きを示している可能性があり、そのつながりを重視して、同じ面として扱う。

S₂層上面を踏み込んで、ヒト足跡・馬蹄跡がある。ただし、金井東裏遺跡では、S₂の堆積が溝などの窪み以外には確認が困難で、S₁を踏んだ形と当初は判断した。ただし、S₂が降下していることは間違いない。

S₂降下後、人馬は足跡、蹄跡を残しながら移動した。

その後S₃の火砕流が流下して、亡くなった4人の人物や、倒壊した3棟の建物の部材などが出土した。

4面 S₁層を剥がした、S₁(4-7層)直下の5層上面の遺構確認面である。火山灰降下前直前まで機能していた屋敷地、畠、建物、祭祀遺構などが検出される。

5面 5層土上～中層を掘り込んで造られた遺構・遺物群の遺構確認面である。遺構の掘削面は、建物に数十年の年代幅があるので、多少深淺があるが、明瞭な差は見いだせない。竪穴建物、祭祀遺構などがある。

5 Hr-FAの年代について

土層説明との関連で、Hr-FAの年代についてこの報告書での年代比定の根拠を示す。Hr-FA年代については火山灰層の埋没木の炭素14ウイグルマッチング年代に基づき、「西暦497+3/-6年」と同定されている(早川ほか2015)。ただし、年代学的には、いくつかの問題点が指摘されている(箱崎・坂本ほか2018)。年代判定に使用した3種類の試料としての樹種が、正確な年輪判別と計数が難しいこと。3本の木が同時に死んだと仮定していること。日本産樹木は、欧米産樹木に基づくIntCalに比べ、炭素14年代では「古く」出てしまい、特に4～6世紀はIntCalとの乖離が大きい時代で、真の年代よりも古く較正されてしまう可能性が高いとされること(坂本ほか2013、箱崎2016)などである。

このような年代学からの疑義がある段階においては、5世紀末という年代については確定的とは言えず、保留としておきたい。年代学からすれば箱崎・坂本らが提唱する「酸素同位体比年輪年代法」を採用するなどして、さらなる年代判定を継続して行う必要がある。

また、考古学の立場からもさらなる詳細な検討が必要であるが、実年代については、やはり、年代学からの正確な年代比定が重要となるであろう。まだ、年代学的に5世紀末という判断が確実にできない段階では、従前の6世紀初頭という年代でHr-FAの降下年代を比定する。

第Ⅲ章 発見された遺構と遺物

以下、古墳時代の古い時期(5面)から順を追って、遺構遺物を説明する。

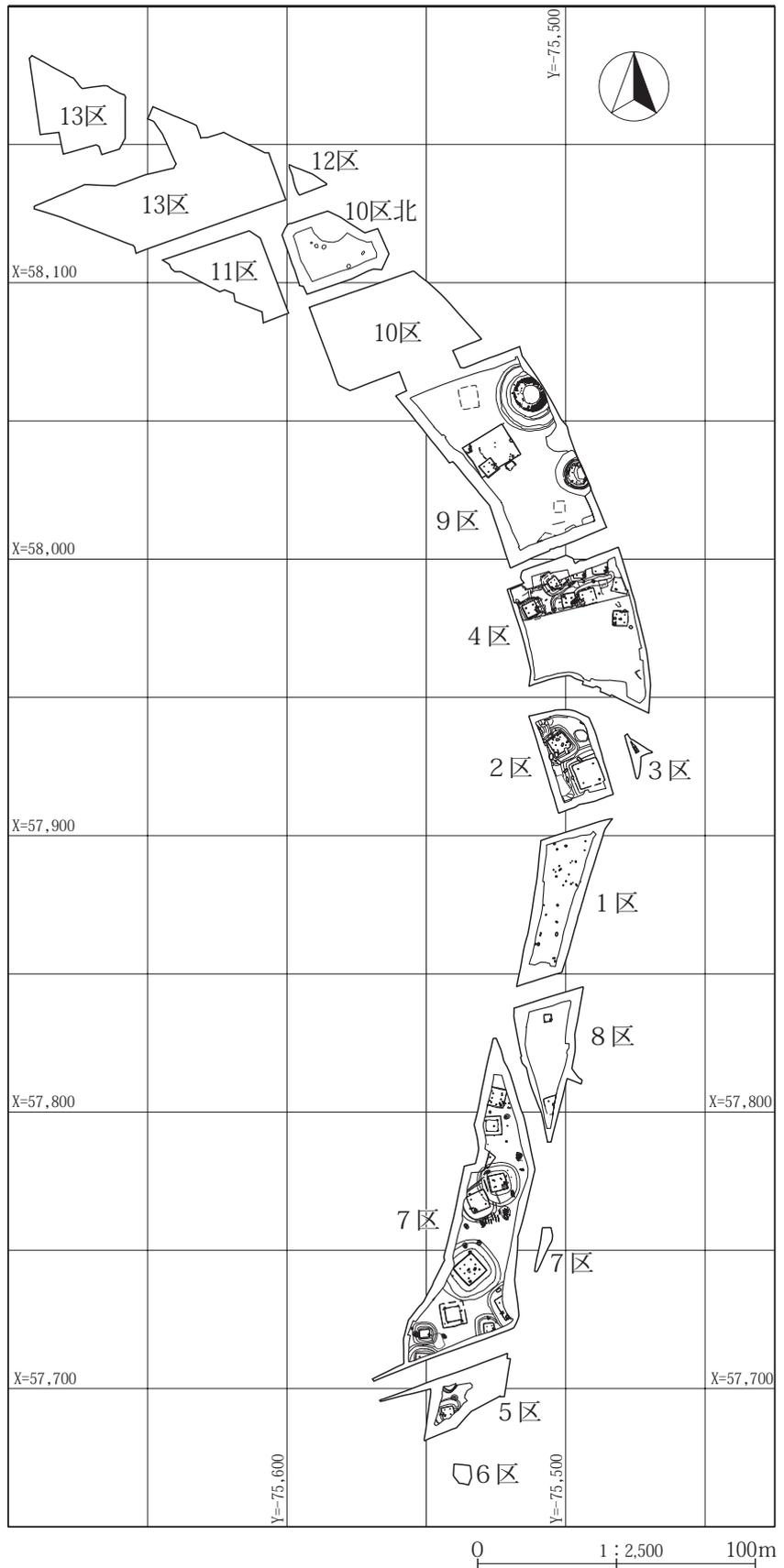
第1節 5面遺構

1 5面遺構全体状況

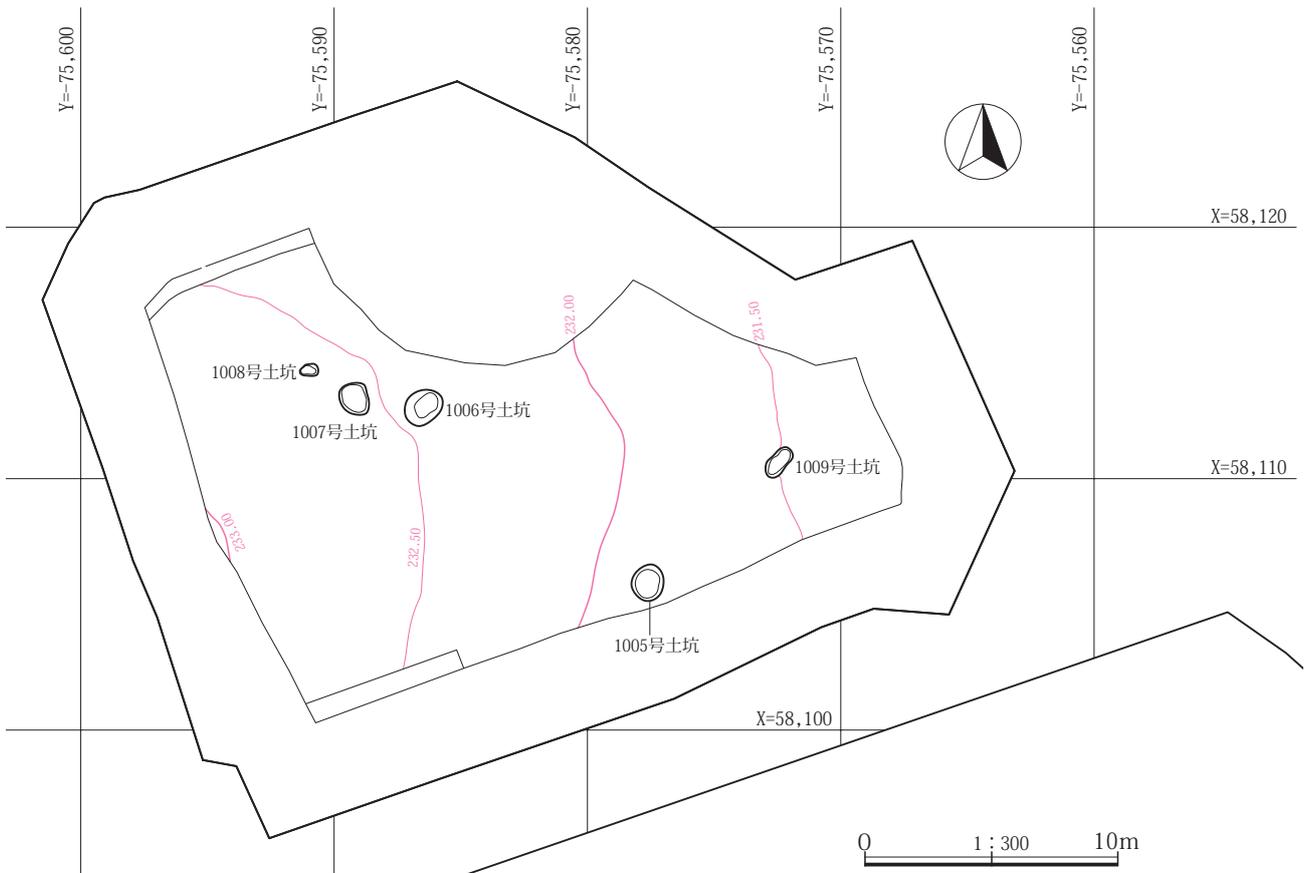
(第18図 PL. 6 付図1)

金井東裏遺跡のHr-FA火山灰降下前の5世紀後半の遺構群である。10区北半で土坑群を検出している。ここが、5世紀後半の遺構群の北端となる。これ以北は、遺構の確認がされていない。9・4区では、保存のため一部の箇所しか調査できていない。古墳が2基、段丘崖端に位置する。さらに竪穴建物が複数棟建っている。その南の2区にも竪穴建物がある。さらに南下すると1区は遺構数が少なく、土坑・ピット群がある。さらに南の8・7・5区にまた、竪穴建物群が出てくる。9・4・2区の竪穴建物群と、8・7・5区の竪穴建物群の2群の竪穴建物群がある。2つのムラの単位があったと考えられる。そしてムラの境に土坑群・ピット群がある。

5面遺構全体の遺構数は、竪穴建物32、平地建物1、竪穴状遺構2、方形周溝遺構2、古墳2、畠2、溝3、集石7、焼土集中9、土坑41、ピット35である。



第18図 5面遺構全体図



第19図 10区5面遺構全体図

2 10区5面遺構(第19図 PL. 6)

10区北部の5面は、土坑群が確認できた。標高233.0mから標高231.2mの西から東に傾斜する地形での土坑群である。

1005号土坑(第20図 PL. 6) 長径143cm、短径127cm、深さ30cmの平面楕円形で、やや緩やかな立ち上がりを持つ土坑である。

1006号土坑(第20図 PL. 6) 長径162cm、短径128cm、深さ29cmの平面楕円形で、緩やかな立ち上がりを持つ浅い土坑である。

1007号土坑(第20図 PL. 6) 長径130cm、短径110cm、深さ15cmの平面不整楕円形で、緩やかな立ち上がりを持つ浅い土坑である。

1008号土坑(第20図 PL. 6) 長径72cm、短径48cm、深さ23cmの平面不整楕円形で、急な立ち上がりを持つやや浅い土坑である。

1009号土坑(第20図 PL. 6) 長径137cm、短径66cm、深さ25cmの平面楕円形で、急な立ち上がりを持つやや浅い土坑である。

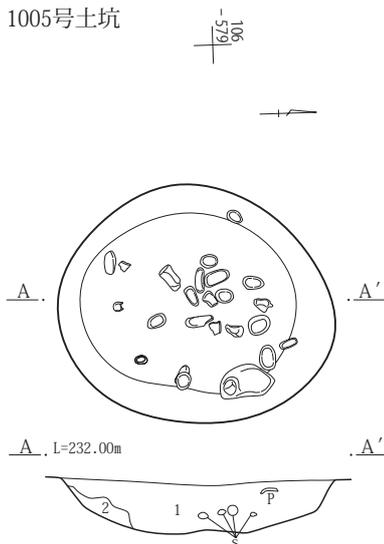
この土坑群はムラの境界に位置することなどから土坑の性格について検討する必要がある。

3. 9区5面遺構(第21図 PL.20)

9区の5面遺構は、河岸段丘崖に近い東端付近から、2基の古墳があり、その西側に建物がある。2基の古墳は、地形面の端部に構築されていることを示し、さらに古墳のそばに、並行するか直後の時期に屋敷地を設けるとともに、5世紀後半段階の建物を少なくとも5棟確認したことから、この地区が南の4区に続いてムラの中心であったことを示している。この地区は、保存されることになったことから、橋脚部の調査及び、窪みから想定される建物の確認をしたのみである。

第三章 発見された遺構と遺物

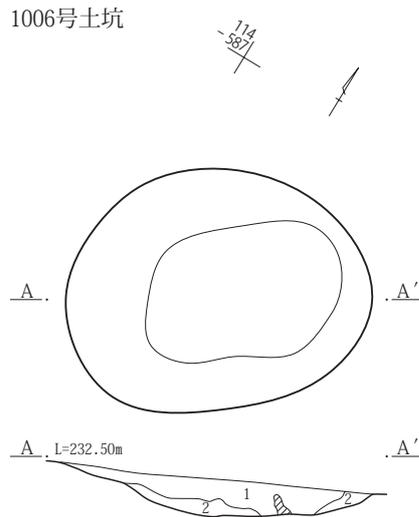
1005号土坑



1005号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 土坑群中、最も黒色味をおびた落ち込みみとして確認。微細なパミス少量、不均等に含む弱粘性土。炭化物混じる。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 上側はローム状土で、下側ほど暗色。ややしまりあり。

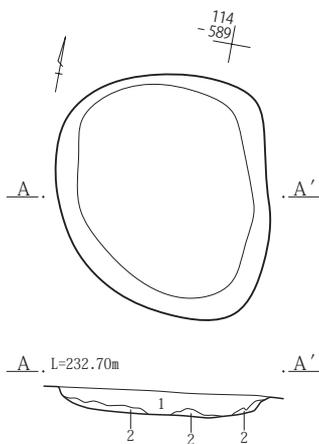
1006号土坑



1006号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ややしまり欠く弱粘性土。不揃いの黄色パミス不均等に含む。炭化物粒散見。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ややしまりある弱粘性土。1層土中にローム状土・ロームブロックを含む。2'はローム状土多い。

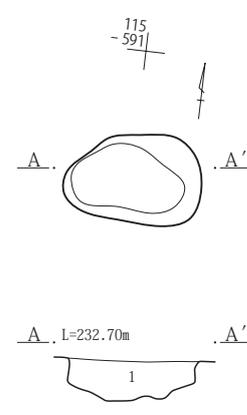
1007号土坑



1007号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) 1006土坑1層に近い。色調やや明るい。パミスの混入少なく、炭化物を少量含む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 1層土とローム状土の混土。ややしまりあり。

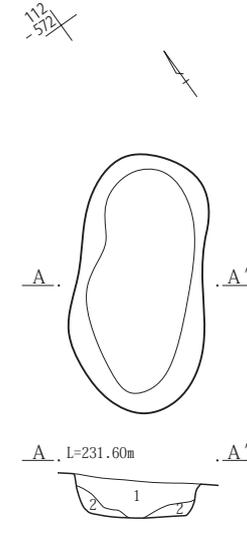
1008号土坑



1008号土坑

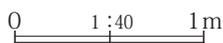
1. 暗褐色土(10YR3/3) 1007土坑1層とほぼ同じ。炭化物は含まない。小礫の混入やや多い。

1009号土坑

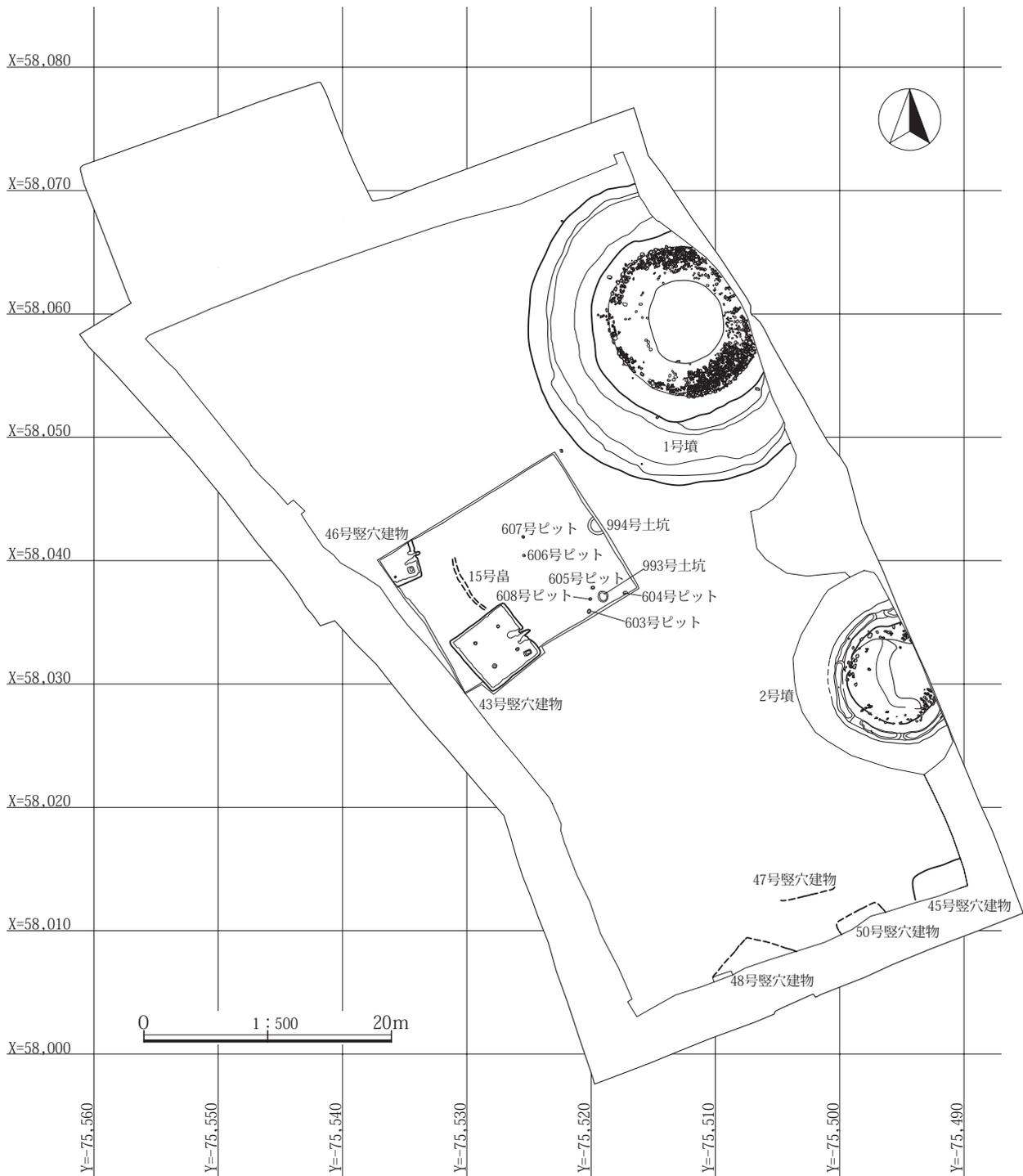


1009号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) 1007土坑1層と同じ。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 1007土坑2層に近いが、1層土少なく、地山の可能性。



第20図 10区5面土坑図



第21図 9区5面遺構全体図

(1) 1号墳(第22～36図 PL. 7～21・259～261)

位置 調査区北側東端で2号墳より北15mに、2号墳と並んでいる。

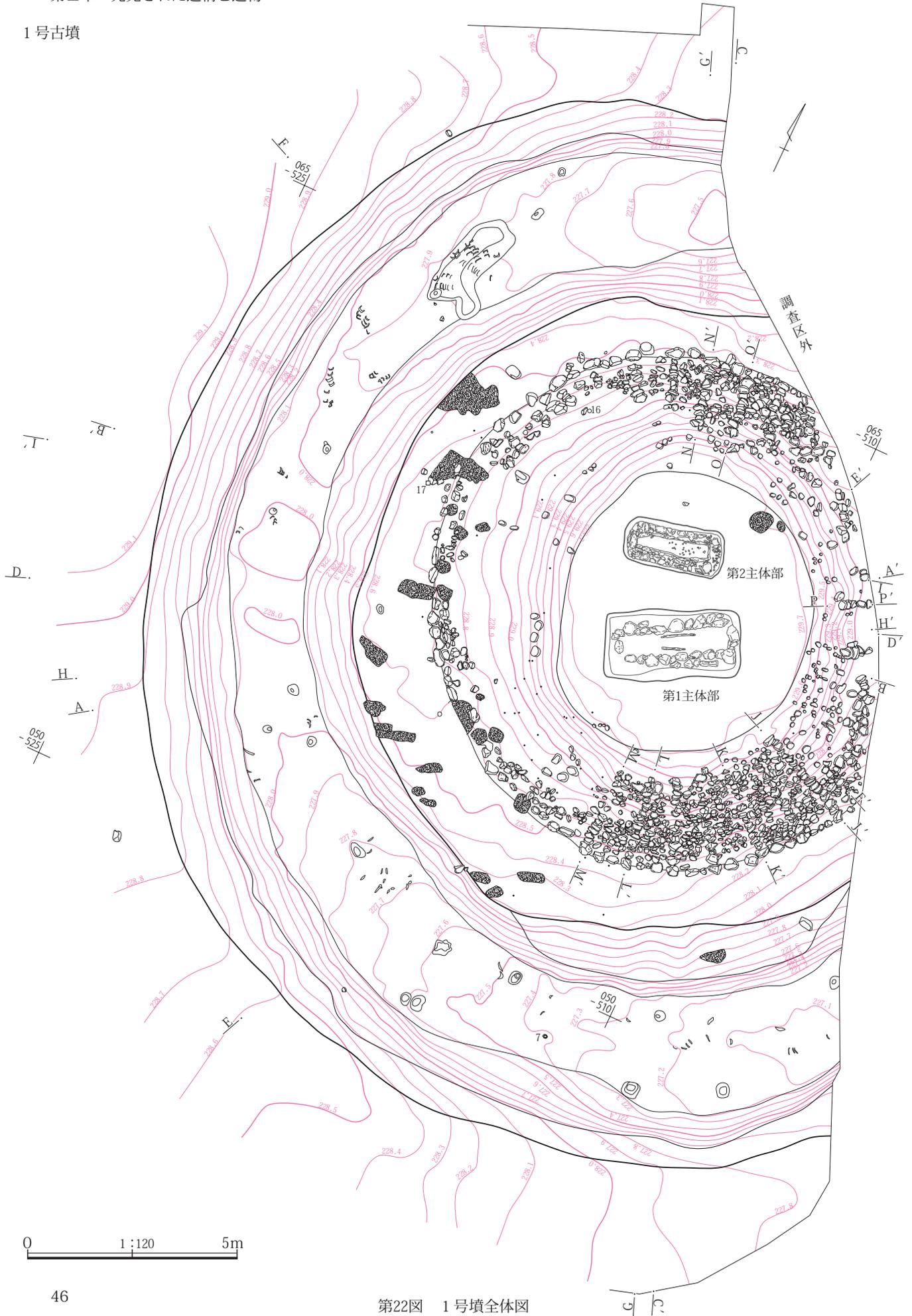
遺存状況 墳丘の一部と周堀は調査区外で、全体の2/3ほど調査した。

規模 墳丘第1段、平坦面からの直径が15m、周堀下面立ち上がりからすると、直径17.4mの2段築成の円墳である。高さは、周堀底面からすると、1.5～1.7m、

墳丘2段目の高さは、90～100cmである。円墳の規模としては、群馬県の古墳から見れば中型である。周堀外の空間に屋敷地や建物などの居住地との間を空ける平坦面を設けるような空間設定があったと考えられる。古墳周堀まで含めた外堀外径は25mである。

周堀 周堀は、4.8～5.7mの幅がある。堀底には、U字形鉄鋤先の角が直角のタイプの鉄鋤先で掘削された痕跡が数か所に認められており、堀の掘削の様子が窺え

1号古墳



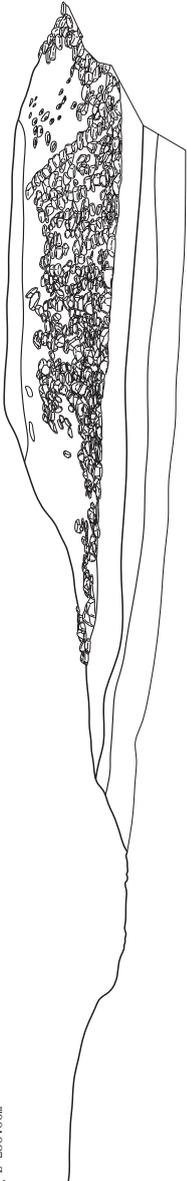
第22図 1号墳全体図

1号墳

- 1. 表土現耕作土
- 2. PP軽石層
- 3. 黒褐色土(10YR3/1) FP下黒。
- 4. 黒褐色土(7.5YR3/1) φ 1mmの軽石粒含、粘質固く締まる。
- 5. 灰褐色土(7.5YR6/2) φ 1mm以下の軽石含。
- 6. 褐灰色土(10YR6/1) 砂粒。

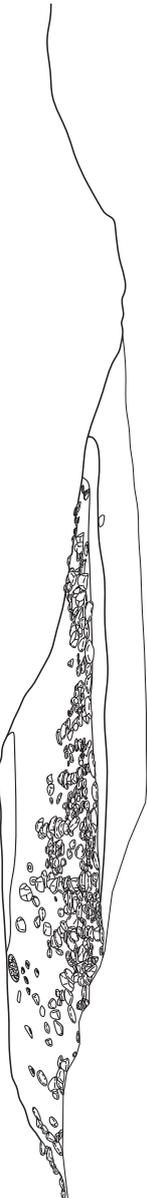
- 7. FA(S₉)
- 8. FA(S₉)下部固く締まる。
- 9. 明黄褐色土(2.5Y6/6) S₉、軽石(φ 1 ~ 10mm)を含。
- 10. 灰褐色土(7.5YR6/2) S₉混じり。
- 11. 褐灰色土(7.5YR5/1) 極細砂(φ 1mm以下)含。
- 12. 褐灰色土(7.5YR5/1) 極細砂、11層よりやや粗い。
- 13. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト、固く締まる所あり。
- 14. 褐灰色土(10YR5/1) 粒子大きいφ 2 ~ 3mmの軽石粒含。
- 15. 褐灰色土(7.5YR5/1) 粒子細かい、固く締まる。
- 16. 褐灰色土(7.5YR5/1) 粒子細かい。
- 17. 褐灰色土(10YR5/1) 上部に灰層、下部にφ 2 ~ 3mmの軽石層が溜まる。
- 18. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト。
- 19. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト。
- 20. 褐灰色土(7.5YR6/1) φ 1mm以下の細かい砂粒含、やや色調暗。
- 21. 褐灰色土(10YR4/1) 下部に大粒の軽石あり。
- 22. 褐灰色土(7.5YR4/1) 細かい砂粒含。
- 23. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト、やや色調明。
- 24. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト、粒子極小。
- 25. 灰黄褐色土(10YR5/2) 粒子細かく灰に近いシルト、粒子は23・24層に比べ大。
- 26. 褐灰色土(10YR5/1) 粒子大きいφ 1 ~ 3mm混じり土、大粒の軽石と砂粒が混合。
- 27. 褐灰色土(10YR5/1) 粒子大きく全体に大粒の軽石が混じる。
- 28. FA(S₃)上部
- 29. FA(S₃)下部
- 30. FA(S₁)
- 31. 黒色土(7.5YR2/1) 粘質土・ローム粒φ 1mm含。
- 32. 黒褐色土(7.5YR3/1) ロームブロック多く含。
- 33. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黒褐色土含。

A'



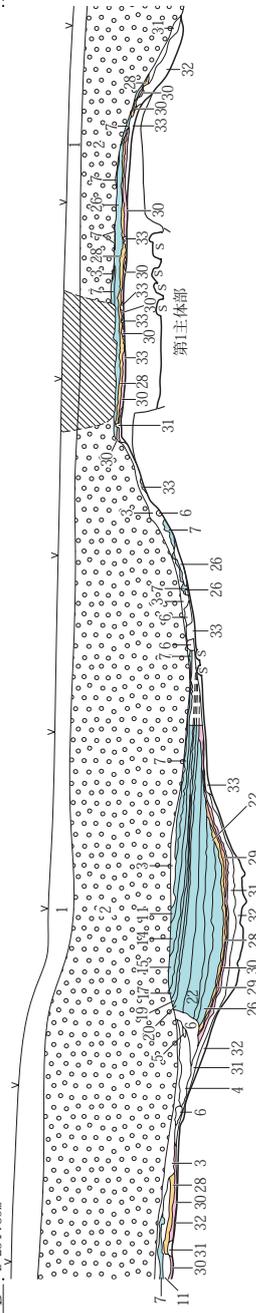
A, I=230.00m

B'



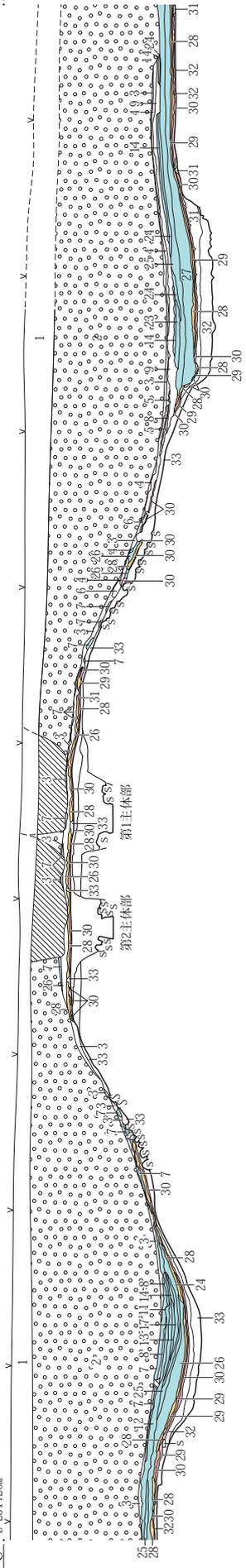
B, I=230.00m

D'



D, I=231.80m

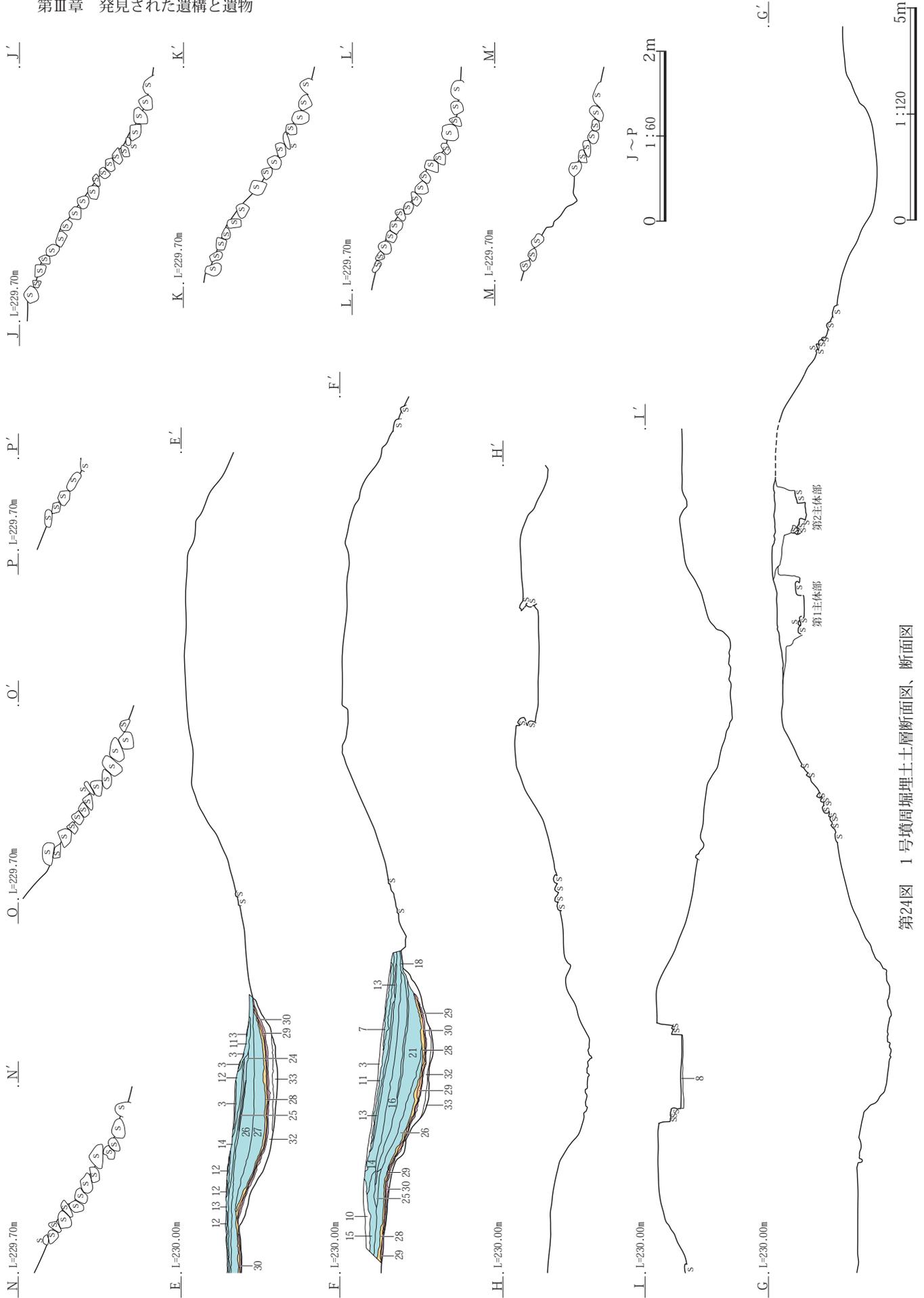
C'



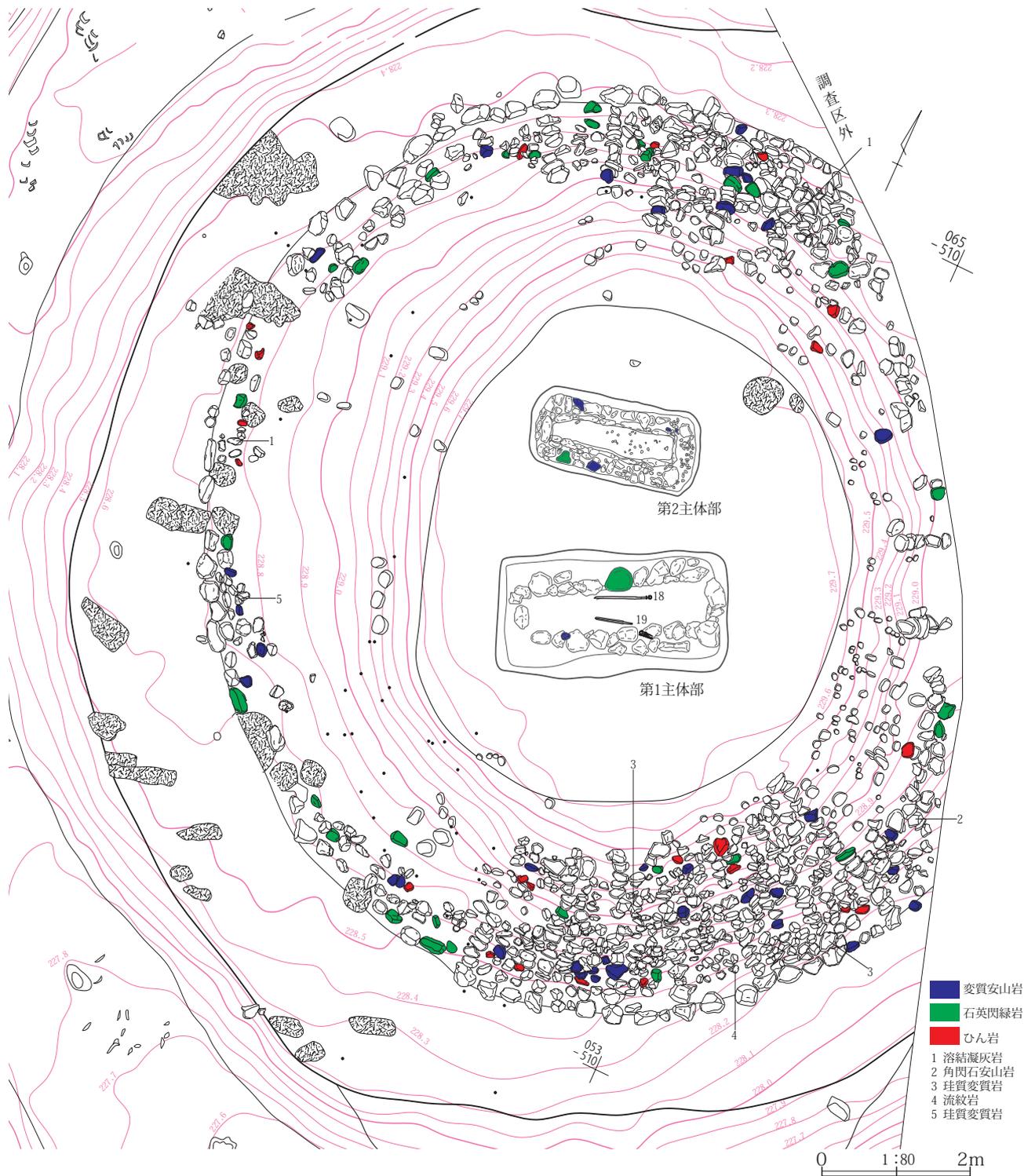
C, I=231.20m

第23図 1号墳立面図・フク土層断面図

0 1:120 5m



第24図 1号墳周堀埋土層断面図、断面図

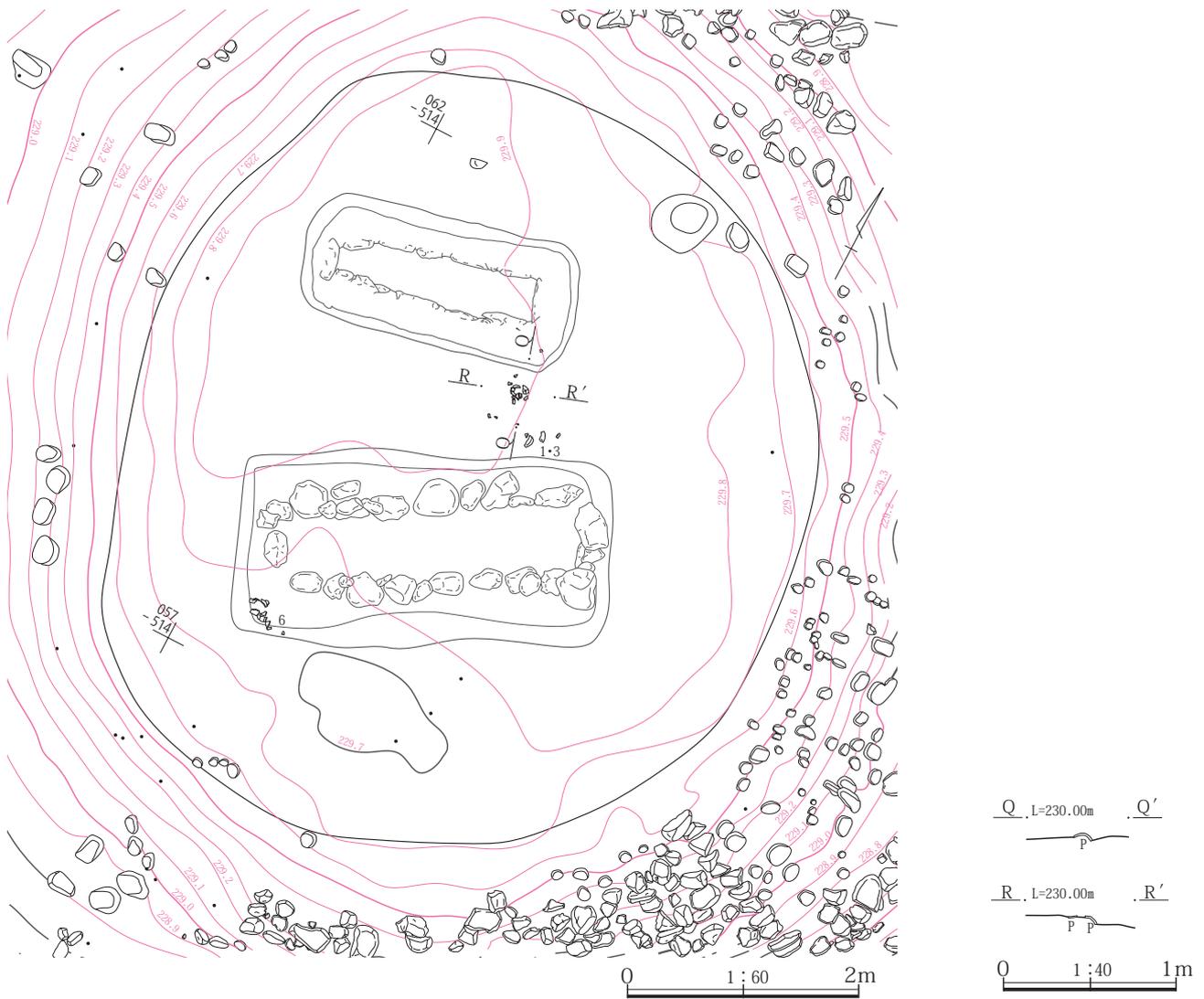


第25図 1号墳葺石石材種別図

る。2号墳では堀掘削の単位が堀の掘削単位ごとの凹みの形態から明らかにできたが、1号墳では、堀底が平坦になるように調整されており、明らかにすることができなかった。周堀底の標高が一番高いところで、西側の堀底で、228.0mで、現状が一番低い標高の周堀は、南東端の227.1mで90cmの比高がある。

埋土の状況 周堀には、Hr-FAのS₁火山灰が、周堀中

央部平坦面で13～26cmの堆積土の上から確認できており、Hr-FAからある程度の時期が経っていることを示している。Hr-FA降下前数年～数十年と考えられる。Hr-FAは全体で54～90cmほどが堆積している。S₇の火砕流がその8割を占めている。墳丘の頂部にもS₁～S₇の火山灰・火砕流が認められる。ただし、火砕流の直撃を受けた西側墳丘面にはS₁・S₃は認められない。S₇の直撃で吹



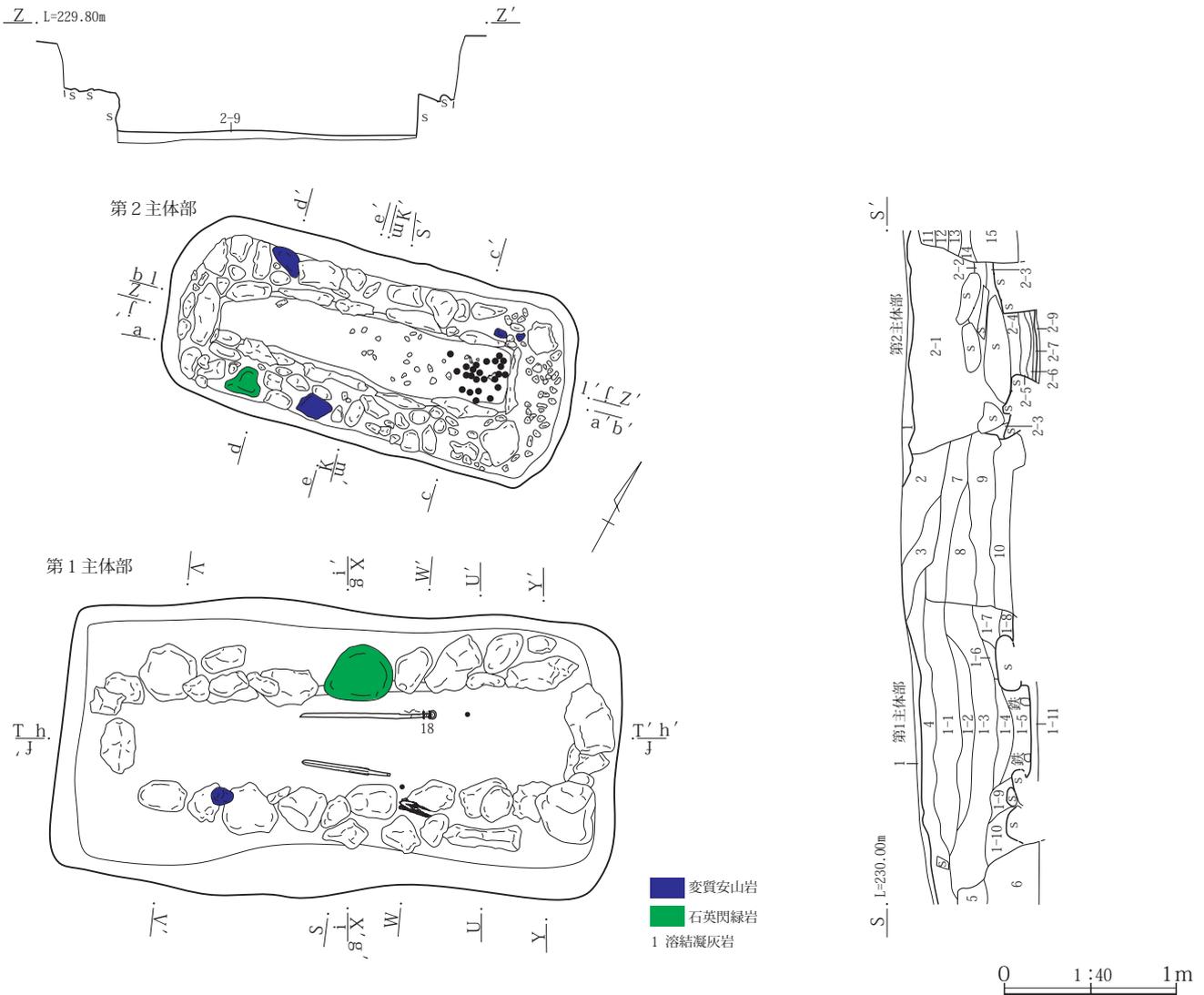
第26図 1号墳墳丘頂部平坦面遺物出土状況図

き飛ばされたものと考えている。この古墳の墳丘を削り、
 葺石を吹き飛ばしたのはS7と考えている。

墳丘構造 堀からの墳丘の立ち上がりで、第1段の平坦面を有する面までは、旧地形を掘削して、墳丘に利用した地山と考えている。墳丘第1段の堀底からの高さは、60～70cmである。第1段の平坦面は、0.96～1.8mの幅で多少の広狭がある。この面には、石も葺いておらず、埴輪の設置も無い。墳丘第2段は、古墳の周堀の掘削土を利用した盛土で構成されていると想定している。墳丘第2段の高さは、平坦面から90～100cmある。堀底からの総高は、1.5～1.9mある。

葺石 第2段の墳丘の傾斜面には、葺石が葺かれている。残りの良い南東側の葺石を見ると、平坦面に葺く根石は大型で幅のある石を選んで配置し、平坦面近くで、1mの間隔を設けて基準となる石を葺いていき、第2段

の平坦面では、50cmほどの間隔となる作業区画が設けられている。基準となる平坦面で1mごとの墳頂部に向けて葺かれた基準の区画石列は、第25図にあるようにしっかりと葺いており、この区画の間の空間に、石を適宜置いていく形態を取っている。保渡田八幡塚古墳でも良く見られる葺石を葺く工法の一つである。また、図面を見てわかるように、火砕流が来た方向の西面から東面にかけての葺石は根石やその付近の石を除いて、ほぼ完全に吹き飛ばされており、西から来た火砕流が直撃したものである。葺石の石材は、飯島静男氏によりすべての石について同定を行い、粗粒輝石安山岩を主体として、変質安山岩、石英閃緑岩、ひん岩の順に構成される。また、1～2個確認できた石材が5種類ある。圧倒的に粗粒輝石安山岩が多い。礫の形状は垂角礫が多い。変質安山岩は吾妻川から多く出るもので、これらの葺石の礫が吾妻



1号墳盛土

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%含、盛土。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土40%含、第1主体部構築後の盛土。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%、弥生後期の土器含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含、締まりやや弱、第1号主体最終埋土。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
6. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
7. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
9. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
10. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロック・にぶい黄褐色土(10YR4/3) 2%含。
11. 灰黄褐色土(10YR4/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3) 1%含。
12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含。
13. 灰黄褐色土(10YR5/2) ロームブロック(φ 4~7mm) 40%含。
14. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土2%含。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土1%、にぶい黄褐色土3%含。

1号墳第1主体部

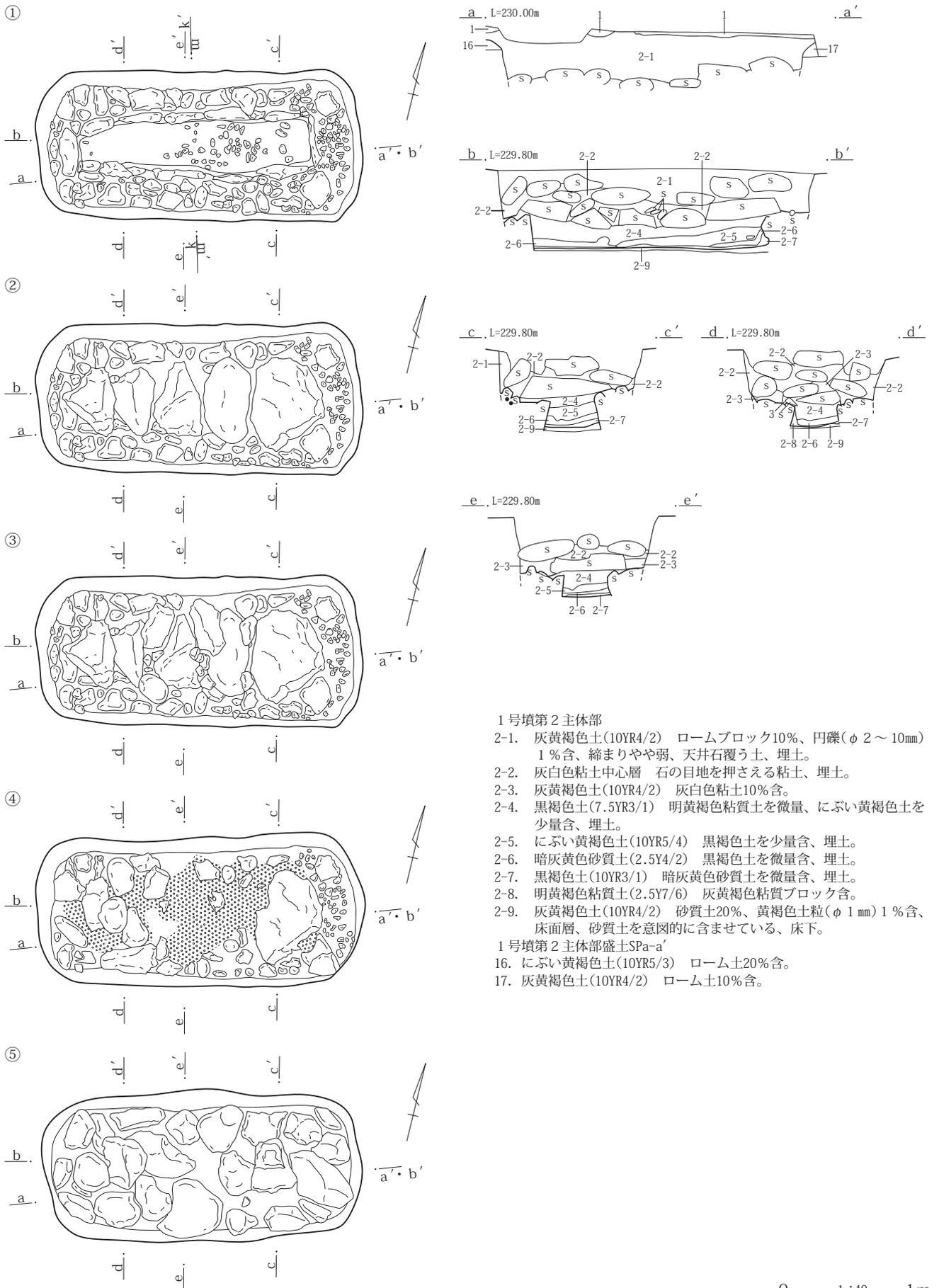
- 1-1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%含、締まりやや弱、埋土。
- 1-2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%含、締まりやや弱、埋土。
- 1-3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含、締まりやや弱、埋土。
- 1-4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含、締まりやや弱、埋土。
- 1-5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含、締まりやや弱、1-4層より少し締まりあり、埋土。
- 1-6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%含、締まりやや弱。
- 1-7. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土3%含、締まりやや弱。
- 1-8. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱。
- 1-9. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含、締まりあり。
- 1-10. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%含、締まりあり。
- 1-11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土(φ 1mm) 1%含。

第27図 1号墳第1・2主体部断割土層断面図・断面図

川から持ち運ばれた可能性を示すものである。後述するが、2号墳の葺石は、粗粒輝石安山岩でほぼ占められ、吾妻川から持ち運んだのではなく、榛名山麓の河川(登沢川)から持ち運んだ可能性が想定されている。

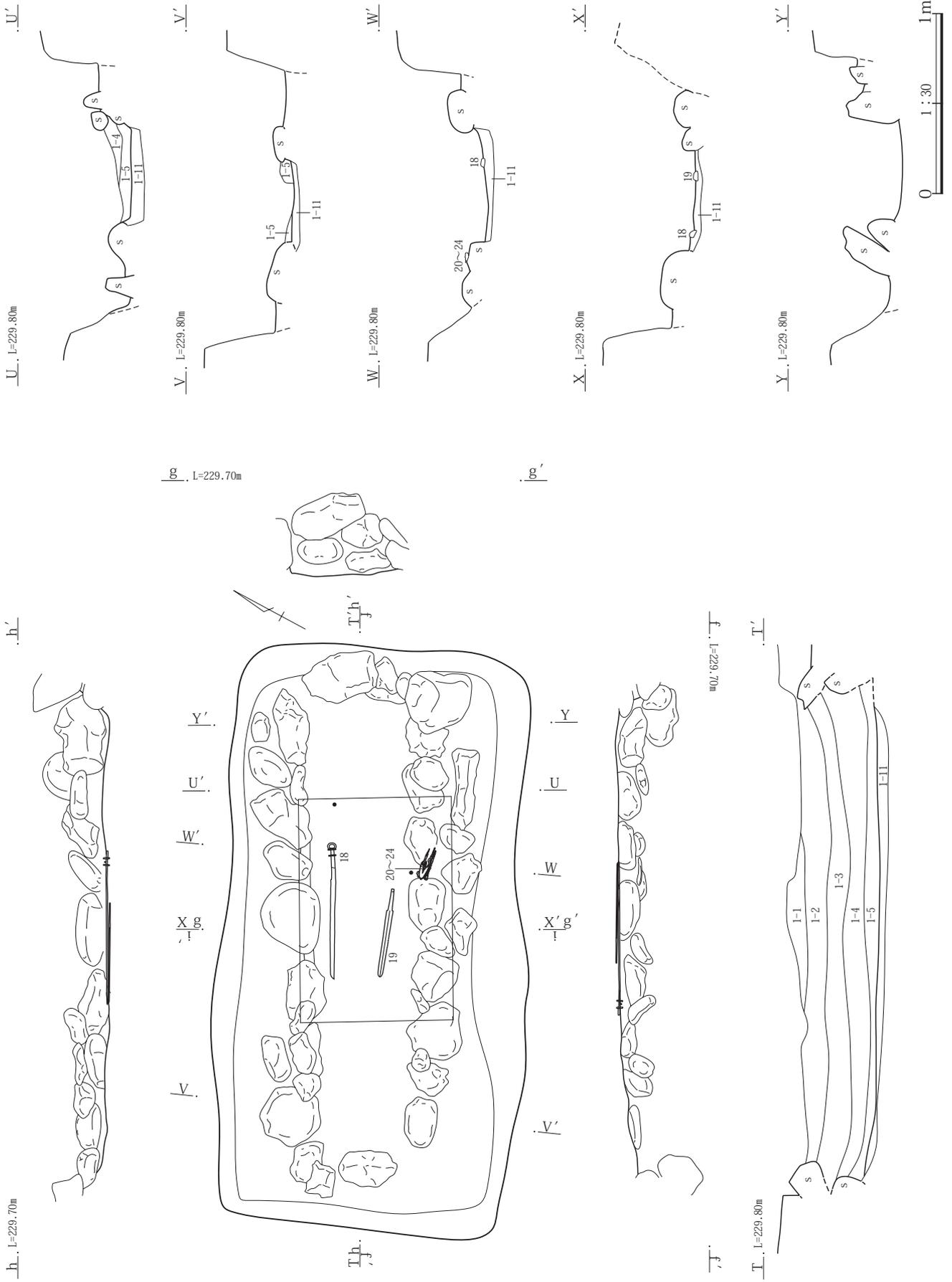
墳頂部他 墳頂部平坦面は、現状で、南北径6.6m、東西径6.0mであるが、東西方向は、衝撃により削られ

ているため、本来は径6.6mの平坦面であったと思われる。平坦面には、埴輪の設置も無く、石も葺いていない。主体部を埋めた後、土器を置いた後に、それを破碎して祭儀を行った痕跡が、主体部上の2ヶ所から出土している。墳丘傾斜面には、提碇なども墳丘の火砕流中から出土している。これらは、火砕流で流されたものかもしれ

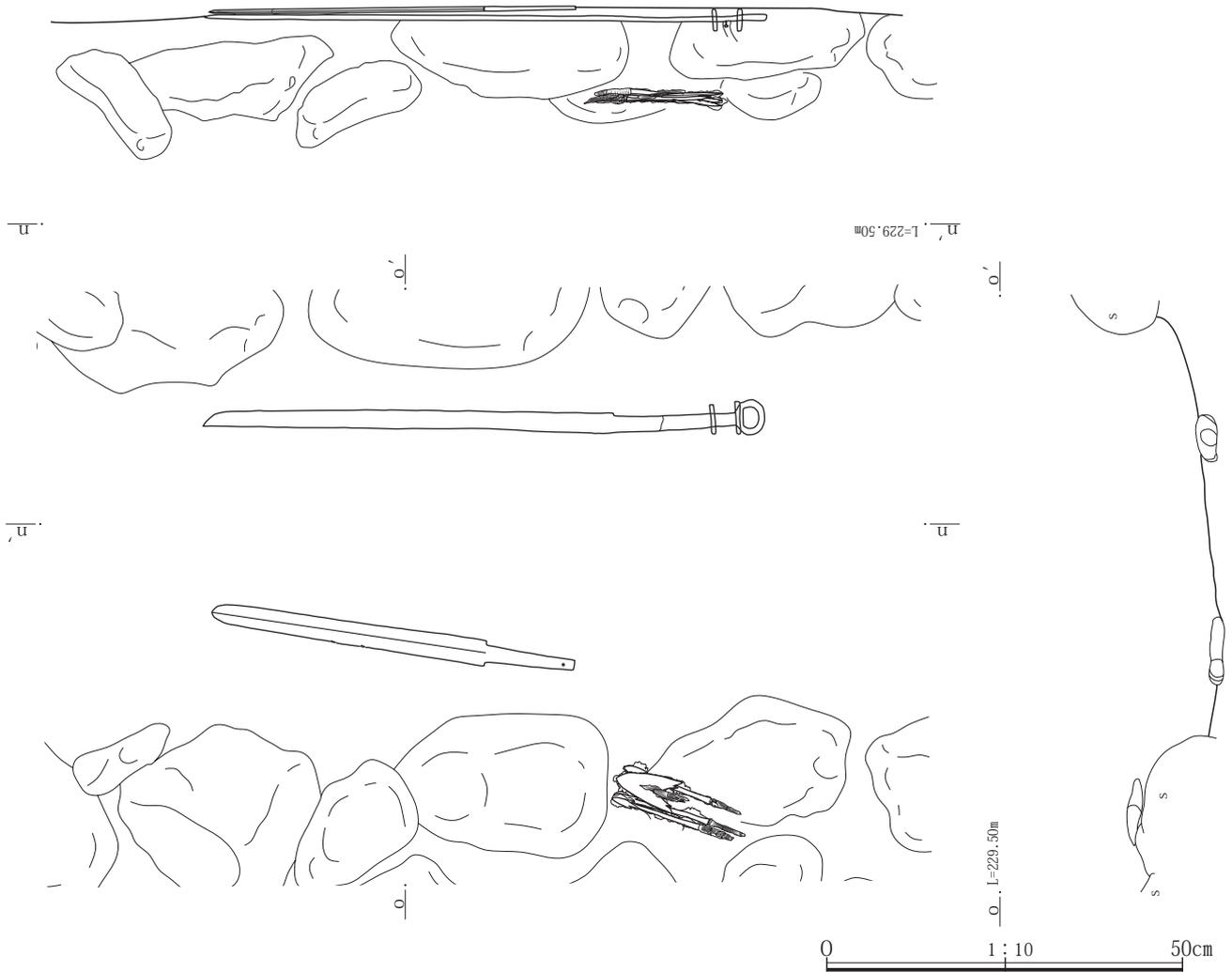


- 1号墳第2主体部
- 2-1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック10%、円礫(φ 2~10mm) 1%含、締まりやや弱、天井石覆う土、埋土。
 - 2-2. 灰白色粘土中心層 石の目地を押さえる粘土、埋土。
 - 2-3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色粘土10%含。
 - 2-4. 黒褐色土(7.5YR3/1) 明黄褐色粘質土を微量、にぶい黄褐色土を少量含、埋土。
 - 2-5. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 黒褐色土を少量含、埋土。
 - 2-6. 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 黒褐色土を微量含、埋土。
 - 2-7. 黒褐色土(10YR3/1) 暗灰黄色砂質土を微量含、埋土。
 - 2-8. 明黄褐色粘質土(2.5Y7/6) 灰黄褐色粘質ブロック含。
 - 2-9. 灰黄褐色土(10YR4/2) 砂質土20%、黄褐色土粒(φ 1mm) 1%含、床面層、砂質土を意図的に含ませている、床下。
- 1号墳第2主体部盛土SPa-a'
- 16. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム土20%含。
 - 17. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含。

第28図 第2主体部構築状況図・埋土土層断面図



第29図 第1主体部遺物出土状況図・立面図・土層断面図・断面図



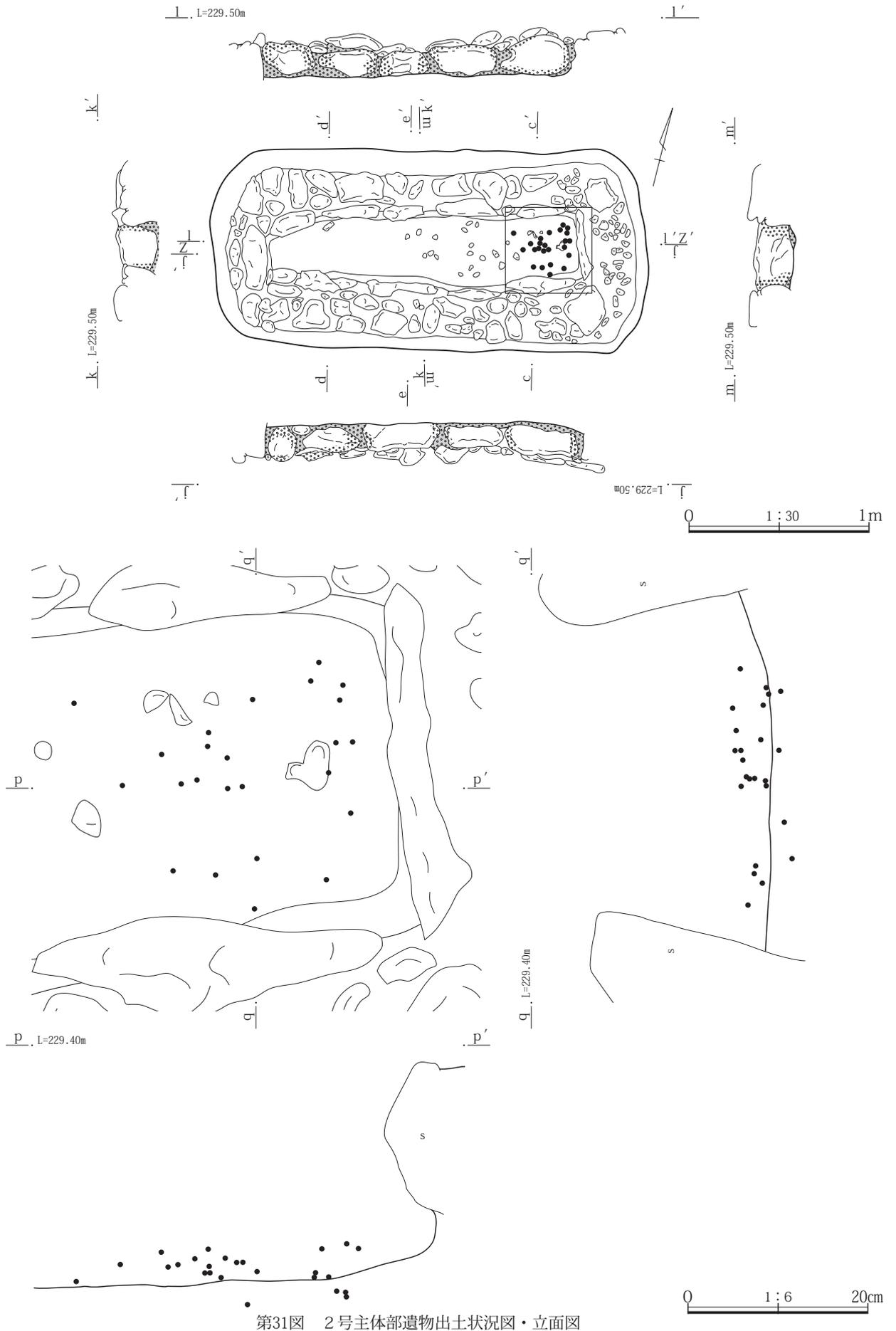
第30図 第1主体部遺物出土状況拡大図

ない。

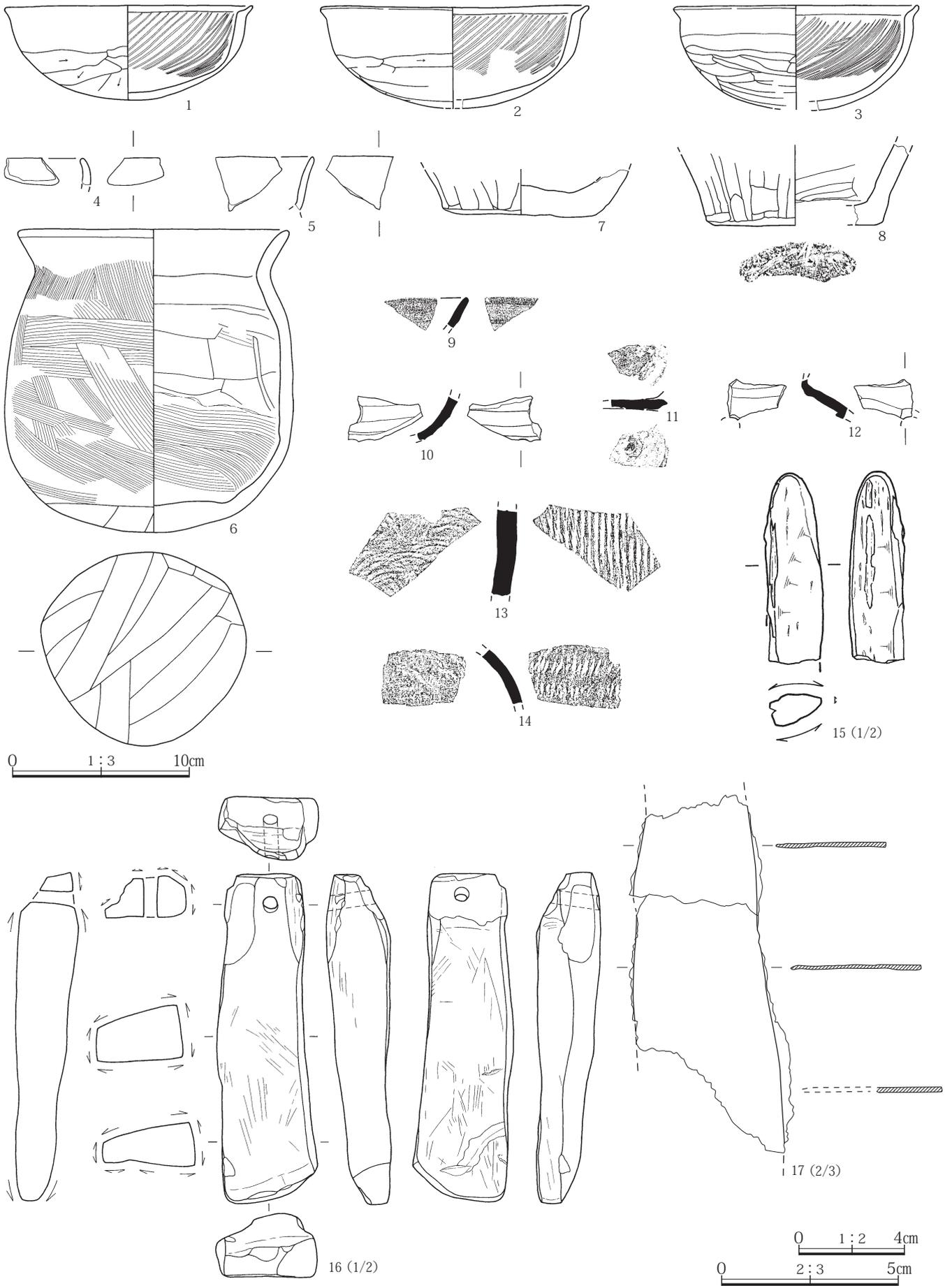
主体部 主体部は、墳頂部平坦面まで、盛土で構築された後に、墓坑を掘削したものと想定している。ただし、墳頂部には、墓坑の掘削の状況を明らかにするためのトレンチは保存の関係から設定できず、主体部際の一部のトレンチからの想定である。さらに、そのトレンチの土層の切り合い関係から、第1主体部が、第2主体部より古く掘削されたことが分かった(第27図)。つまり、あらかじめ2基の主体部を構築することを前提に、第1主体部を墳頂部平坦面の中央ではなく、南側に偏して設置したと考えている。そして、第1主体部を構築後、その際に墓坑を埋め戻した土層の端を切り込んで、第2主体部の墓坑が掘られている。

第1主体部 長辺3.25m、短辺1.7m、深さ60cmの大きさの墓坑を掘削して、床面は、ほぼ平坦面である。墓坑には木棺が安置されたものと考えられる。それは、短

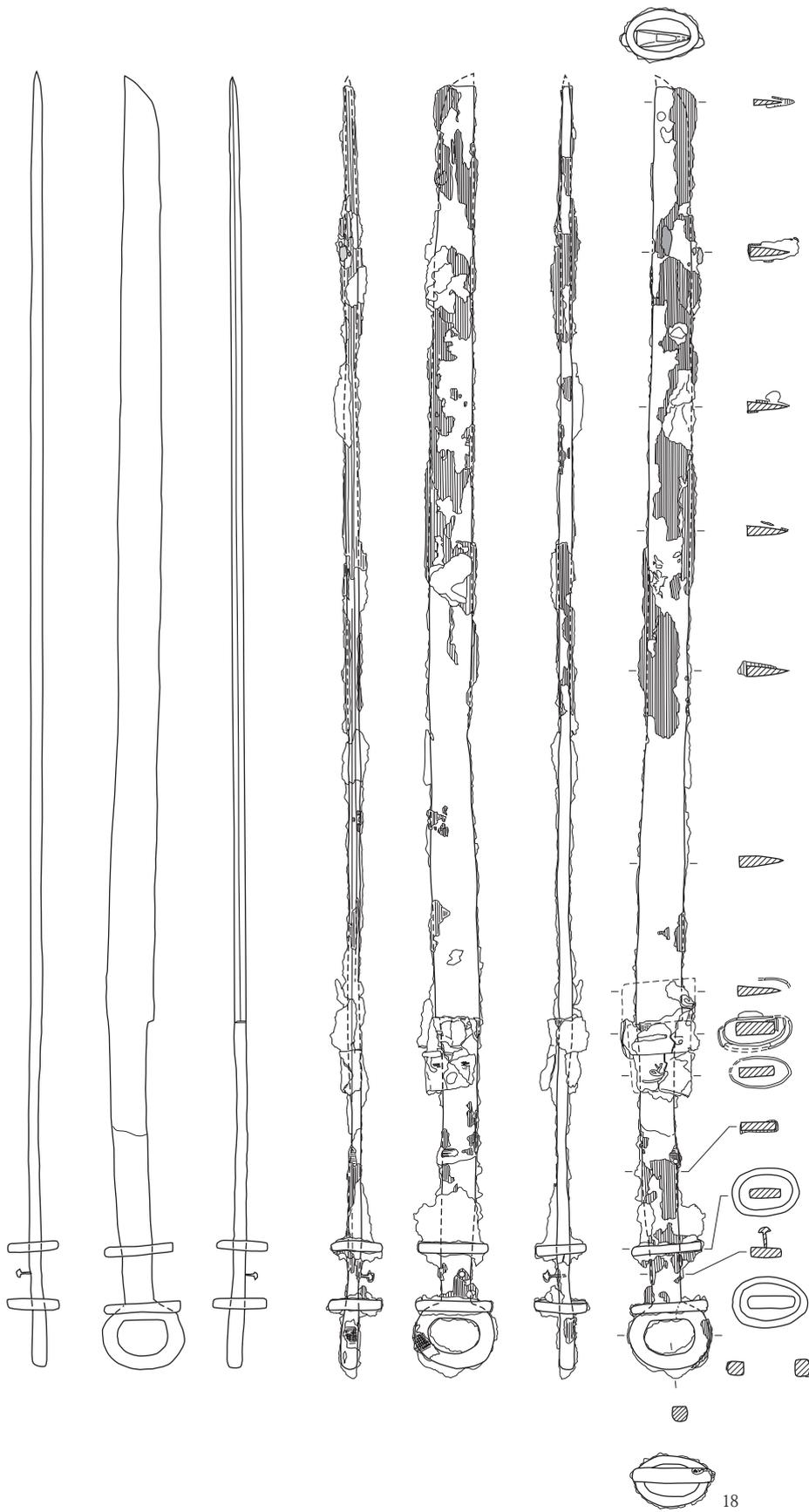
側壁の両面にオーバーハング状に礫が検出されたことで、木棺の短辺の蓋を抑えるような形をとっていたことが想定されたからである。内壁長側長2.53m、内壁短側東壁幅52cm、内壁短側西壁幅42cm、側石の深さ10～18cmである。頭位は、短側壁の幅から見れば、東にあることは明らかである。木棺の大きさは、周りの側石や、オーバーハングしている石から、長2.5m、短側頭位幅50cm、足位幅40cm、深さ35cmほどと考えられる。木棺の痕跡は残念ながら土層断面の観察や、有機質の痕跡からも認められず、想定のものである。棺を置いた後に、石を周りに置いていく。副葬品は、棺内の遺体の右手の位置に素環頭大刀、左手の位置に剣が添えられるようにあった。共に、切先は足のほうに向いている。さらに、棺外の南側石列の石の上に、短径有重扶長三角形鏃2本と、長頸有腸扶長三角形鏃3本の計5本が矢先を東に向けて配置されている。



第31图 2号主体部遺物出土状況図・立面図

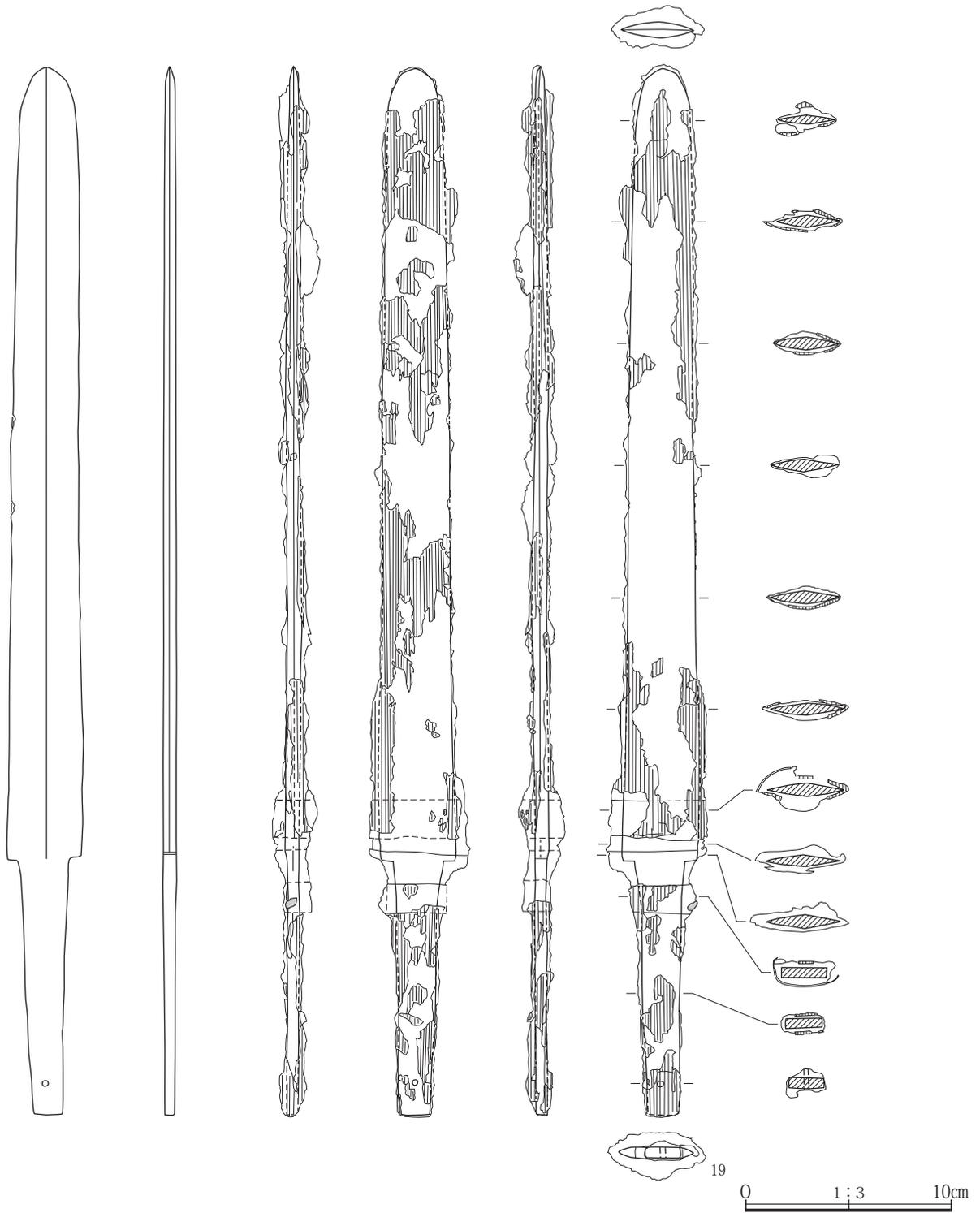


第32図 1号墳出土遺物図



第33图 1号墳第1主体部出土素環頭大刀图

0 1:4 10cm

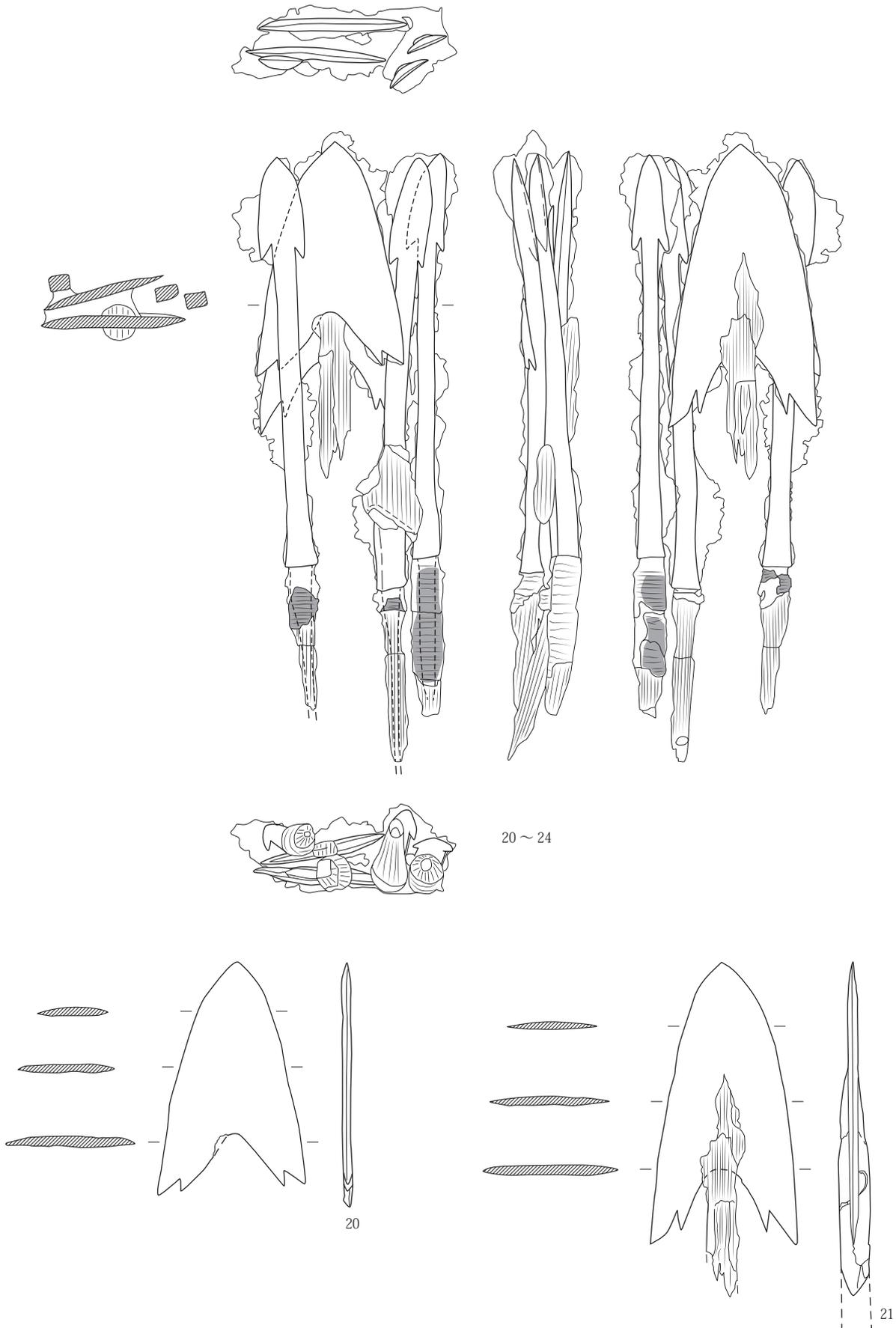


第34図 1号墳第1主体部出土剣図

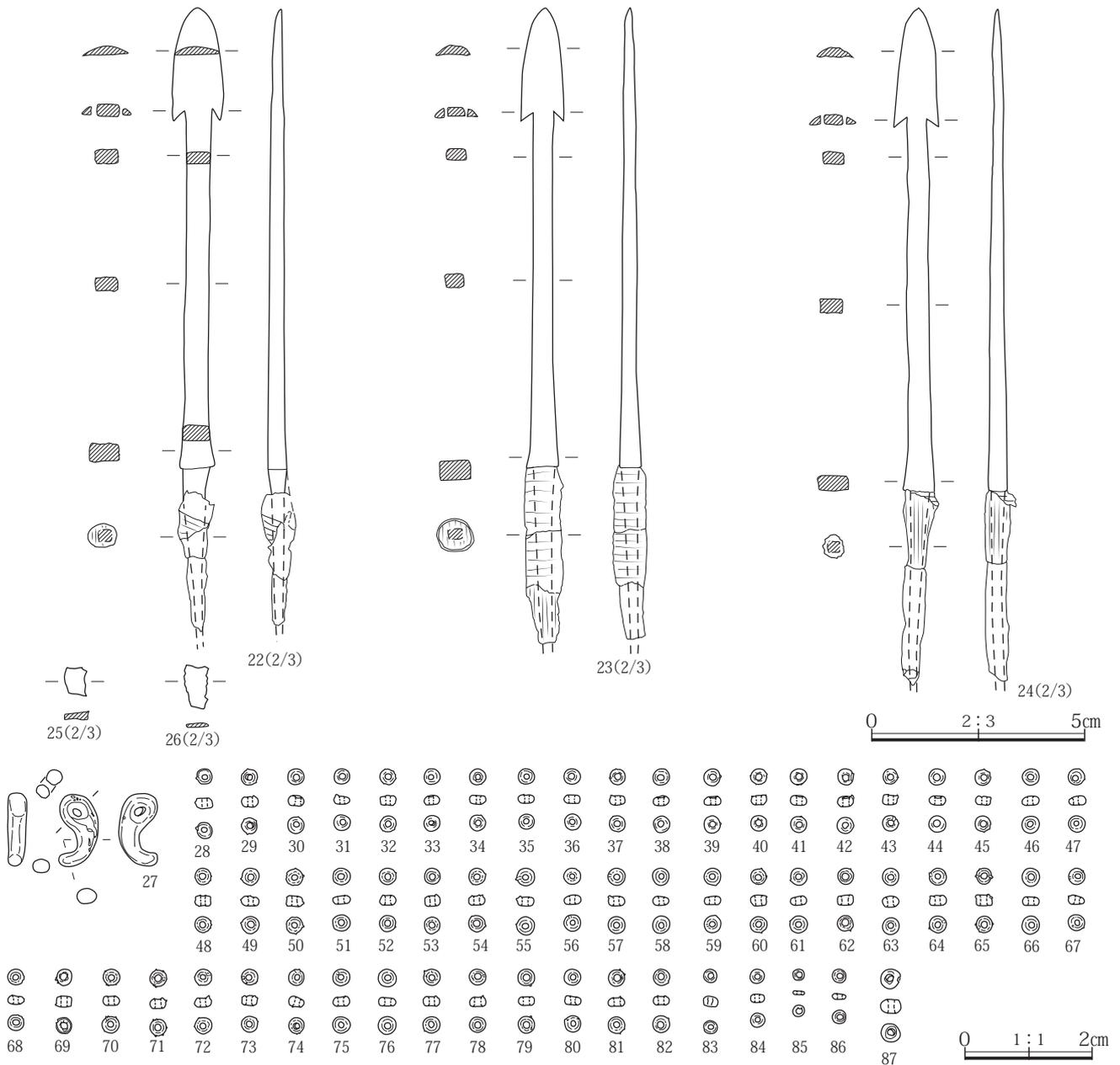
側石は1段が原則で、一部の側石に小さな礫の上に置く2段の例がある。短側壁には2段積み上げている。さらに、前述したように、両短側壁の石の上から木棺に向けて、立て掛けるような形で石が置かれていた。配石するような形の主体部は、日本にはほとんど類例がなく、朝鮮半島の伽耶の地域に類例があり、その地域からの影響を受けた可能性が高い。また、棺に短側壁から石を立て

てかけるような行為は、おそらく棺を封じ込めるような意図を持って行ったものと考えられる。その後、土を入れて被覆していくものと想定する。石材は、粗粒輝石安山岩を主体とし、1石ずつ、変質安山岩と石英閃緑岩が含まれている。

第1主体部の被葬者は、武器のみの副葬ということから男性である可能性が高い。また、素環頭大刀1、剣1



第35図 1号墳第1主体部出土鍬図



第36図 1号墳第1主体部出土長頸鉄鏃図・第2主体部出土ガラス勾玉・小玉図

という副葬品の構成は、遺跡地南西すぐの金井丸山古墳からの剣3振りの出土と同様この時期の古墳としては豊富な副葬品を持っており、この地での古墳の被葬者の地位・性格がある程度示すものである。

第2主体部 第1主体部が構築された後に構築されたものである。第1主体部の北側に主軸がやや南側に偏して構築されている。群馬県内で通有の小型竪穴系石室である。主体部構築の順番で説明する。墓坑をまず掘削する。掘削する際には、第1主体部を壊さないように配慮があるが、第1主体部を埋めた後の盛土を切る形で第2主体部が構築されたので、第1主体部より新しいということが分かる。長側長2.4m、短側長1.1～1.15m、深

さ75cmの墓坑である。主体部は、竪穴系小石室で、内壁長側長175cm、内壁短側東壁幅45cm、内壁短側西壁幅20cm、高さ18cmの内部主体である。内壁四周は、天井石との間に小石を挟む以外は、1段の石で構成されていた。石は、側壁側に広い面を見せて立てる平置きである。また、側壁の周りに小型の平たい石を置いて、側壁の高さのラインに合わせて、石敷面を形成している。床面からの深さなどを考えると遺体の年齢による大きさにもよるが、木棺の中に置かれていたというより、直接あるいは布にくるんで埋葬されてものと想定している。遺体は東頭位で置いた後、頭部付近にガラス製小型勾玉1、ガラス小玉60個が頭部周辺に出土している。出土状態から見

ると、おそらく首飾りか頭飾りが想定される。遺体安置後、天井石を5石被せ、隙間に小石を詰め、粘土を目地に詰めて、水の侵入を防ぎ、さらにその上から平石が置かれている。その後、土を被せているというように、厳重かつ丁寧に埋葬している。石材はすべてを同定できなかったが、天井石・側壁はすべて粗粒輝石安山岩であり、石敷石も粗粒輝石安山岩が主体であるが、変質安山岩と石英閃緑岩が数石入っている。

出土遺物 まず、第1主体部の南西部隅の墳頂部直下から小型甕BⅡ②(第32図6)が破砕した状況で出土した。さらに、杯AⅡの内斜口縁杯(第32図1・3)が、やはり破砕した状況で、第1主体部と第2主体部の間から出土している。先ほどの小型甕Bと杯Aは、破砕していることと、墳頂部上で一部土器が露出している状況で出土していることなどが特徴的である。提砥(第32図16)は、墳頂部北側上段墳丘の半ばの箇所より、火砕流に流されたような形で、出土している。同じように、鉄素材(第32図17)は、テラス面にやはり火砕流に流されたような形で出土している。いずれも、当時の金井東裏遺跡についての性格を良く示す遺物として重要である。提砥は、半島との関係を示し、鉄素材は、鉄器生産との関わりを示すものである。提砥は、長さ12.4cmで、石材が流紋岩である。頭端部に欠損があり、短側面を除いた4面に使用痕があり、かなり使い込んであるものである。鉄製品は、薄く1mmの厚みで、長方形に延びる薄板品である。おそらく鉄素材であると考えられる。他に、須恵器破片・土師器破片が墳丘各所より出ている。

第1主体部からは、素環頭大刀・剣・鏃といった武器のみが出土した。被葬者の性格を知る上で重要である。

素環頭大刀は、全長77.8cm+、茎長21.3cm、茎最大幅2.3cm、茎最大厚0.7cm、素環長径4.9cm、短径4.0cm、環幅0.9cm、環厚0.9cm、である。刃部長は、56.6cm+、刃元幅4.5cm、刃元厚0.7cmである。2連の貴金具を持つ。貴金具①は、長径4.6cm、短径3.1cmである。貴金具②は、長径4.1cm、短径3.2cmである。素環頭部は、基部が直線状で、外側がやや偏円系の円弧状を呈する。環部には布が被せられている痕跡がある。素環頭部は茎部から鉄板を引き伸ばして円弧状に茎部まで曲げて鍛接しているのが、保存処理の過程で確認できた。2連の貴金具の間には、小さな鉄製の目釘、頭部径0.4cm、頭部厚0.3cm、茎

長0.7cmが貴金具の間にある木質に打ち込まれている。茎も木質に覆われているので、茎柄は、木装であることが分かる。柄元に樹皮かあるいは、木質に漆を塗布したかと思われる装具がある。紐状の痕跡や、区画などが認められる。片関の所まで、木柄は装着されている。この片関部分まで長4.5cm、厚み1mmの薄い鉄製の円筒状装具で覆われている。さらに装具は革で覆われており、紐も観察できる。革を縛った可能性がある。この革の上に更に、布が被せられている。

刃部は木質により覆われ、刃先のほうにほんの一部鹿角の可能性のあるものがあり、検討を要する。また、鞘の一部に革かと思われるものが一部覆われている所があり、木鞘に革を被せていた可能性がある。なお、木鞘の材質は、樹種同定を行ったが、針葉樹と判断されるも属・種は不明との結果であった。

素環頭大刀は、考察編(徳江・高田)で記述されているように、国内でもある程度出土例があり、前期に出土するものと、中期～後期にかけて出土するものに分かれる。本例は当然、後者の例であり、県内からも数例類例がある。いずれも時期的には近い時期である。また、後章の高田の記述によれば、朝鮮半島からも多くの出土例があり、特に貴金具を有するような形態のものは日本国内で、岡山県押入西1号墳例以外には類例が無く、朝鮮半島の新羅・百濟・大加耶系などに類例が多いもので、朝鮮半島との関わりが想定される遺物である。

剣は被葬者の左手付近から出土した。全長51.6cm、刃長39.0cm、刃元幅3.6cm、刃元厚0.6cm、茎長12.6cm、茎元幅2.55cm、茎元厚0.5cmである。茎先端より1.5cmの所に径0.3cmの目釘孔がある。鉄芯部の残りは悪いが、一部は外形が有る程度残っている。弱い両鑄造である。

茎先端部から10cmの箇所より剣身部まで長さ5.5cmの装具が装着された痕跡がある。一部に鹿角の可能性のある痕跡が残り鹿角製装具の可能性もある。茎から10cmの箇所にある長1.2cmの装具の痕跡の下には、木柄が入り、その上から装具が被せられている。両関から剣身部基部にいたる中央部の長1.6cmの痕跡には、明瞭な装具のラインの痕跡が入る。その先に長7mmの狭い痕跡があり、さらに長2.0cmの円筒状の装具の痕跡が見られる。S最後の装具の下には木鞘が入り込んでおり、呑口式となっている。このように、複数の痕跡が残る装

具で構成されるものであるが、本来の形態については不明である。ただし、鹿角製装具である可能性は高い。

古墳時代の剣は、群馬県では50例以上出土している。長身化していくのが剣の型式変化の流れである。50cmを少し上回った大きさは、長さからすると、長剣には入るものの、同時期の剣に比べるとやや短い。

樹種同定の結果は、剣・鞘は、針葉樹の可能性があり、剣茎柄は、コナラ系コナラ亜属クヌギ節であると同定された。柄装具部分については、樹種同定は行っていない。

鉄鏃が5本主体部の被葬者の左腕南部付近の長側壁の上端部に切先を頭部方向に向けて出土している。長頸腸扶長三角形鏃が3本、無茎重扶長三角形鏃が2本の計5本である。無茎鏃は、重ね合せて置いてあり、長頸鏃は、1本は無茎鏃の左上に載せ、残り2本は無茎鏃の右下に置くようにしていた。長頸腸扶長三角形鏃は、全長15cmほどで、刃長2.2～2.8cm、刃幅1.0～1.1cm、刃元厚0.2cm、頸部長8.3～8.7cm、関幅0.7～0.8cm、関厚0.4cmである。刃部長は7cm以上あり、典型的な長頸鏃である。逆刺の長さは、0.2cmと短い。長頸鏃の矢柄は樹種同定の結果、タケ亜科と同定された。また、樹皮は判断できない。長頸鏃の茎付着ももう一例は、広葉樹と判断された。県内においては、長頸鏃のうち、初現的な短頸鏃系統は、赤堀茶臼山古墳や十二天古墳などの中期初頭の例があるが、典型的な長頸化した長頸鏃は、中期中頃の長瀬西古墳や鶴山古墳が初現である。それに続く安定した長頸鏃の例としてこの金井東裏遺跡1号墳例を呈示することができる。この類の逆刺を持つ長頸鏃は、既に出土している長瀬西古墳や鶴山古墳に引き続いて関東に多く分布し、当該時期の指標でもある。

薄手の重挟りの無茎の長三角形鏃の、重ね挟り自体は、前期中頃の前橋天神山古墳からも出土しており、群馬県外では、中期全般を通じて存続するものである。群馬県内では単挟りのものが中心で、重ね挟りの例はこの時期には少ない。中期初頭頃からやや多く出土するが、この時期まで少ないながらも継続して出土しているものである。この後の時期になると、重ね挟りは存続するものの出土数はかなり少なくなり、単挟りが中心となる。なお、無・短茎鏃と長頸鏃の組み合わせは、十二天古墳・長瀬西古墳・鶴山古墳と系統が続くが、6世紀近くになると県内では類例が少ないものである。

鏃群の中で、鞘の可能性のある木質が、鏃群の中央部に付着していた。あくまで小破片なので判断はつかないが、破片の樹種同定を行った所、針葉樹類と判断された。

第2主体部からは、ガラス勾玉1点・ガラス小玉61点が出土している。いずれも装身具のみで被葬者の性格を知りうる興味深い例である。

ガラス勾玉は、頭部付近から出土している。後章で記述されているガラス分析を依頼した田村朋美氏によると、勾玉の具体的な製作技法は不明であるが、グループSⅡAに帰属し、コバルト着色による紺色透明で、グループSⅡBのガラス小玉と共通の化学組成の特徴を有する。

ガラス小玉は、やはり、被葬者の頭部付近から集中して出土している。61点中59点が鋳型法によるもので、2点のみが引き伸ばし法である。古墳出土品の最大の特徴は、鋳型法によるガラス小玉の比率の高さである。ただし、3号人骨のガラス玉のように紺色のみでは無く、黄緑色や黄色を呈するものが少量出土している。

ガラス勾玉もガラス小玉も、通有のガラス玉類に比べて非常に小型であるのが特徴である。

この時期の同規模の古墳と比べると、極めて副葬品の質が高いことは明らかである。当該時期の5世紀後半を中心とする群集墳で、直径15m以上20m未満の古墳は、刀と刀子と鏃の組み合わせが多いが、いずれか一つが入っていない場合が多い(杉山2017)。しかし、当該古墳では、主体部が2基あるとともに、第1主体部では、武器が刀・剣・鏃と当時の主要武器3種が揃い、第2主体部でも、ガラス玉類の中で、あまり出土例の無いガラス勾玉を保有している。いずれも同時期・同規模の初期群集墳の古墳の副葬品に比べると非常に副葬品の内容が豊かであることが特徴である。すぐ近くにある金井丸山古墳からも剣3本と鑷子が出ており、同じように豊富な副葬品であり興味深い。

被葬者 第1主体部の被葬者は、副葬品が、刀・剣・鏃とすべて武器で、装身具類は無いので、男性と推定したが、第2主体部の被葬者の遺物は装身具のみなので、第1主体部の武器のみの副葬と対比して考えると、女性か子どもである可能性が高い。古墳築造の契機となったと思われる、第1主体部の被葬者の性格を示すものとして、副葬品の質量ともに同時期の古墳に比べて優れていることや、墳丘径が17.4mと、県内の同時期の古墳と比

較すると、中型クラスであり、2号墳の8.8mからすると約2倍の大きさであること、墳丘構造が、後述する2号墳が1段であるのに対して、2段築成であること、また、葺石・主体部の石材が、少し離れた吾妻川から採取した石を持ち運んだ可能性が高く、後述する2号墳が近辺の榛名山麓の河川からの石を使用したことなどからも、1号墳の第1主体部の被葬者が、県内でも上位階層に入り、少なくとも2号墳の被葬者に比べると上の階層に位置するものと考えられる。また、素環頭大刀や、配石状の石室などから朝鮮半島系の文化の影響を受けており、1・2号墳の被葬者とともに朝鮮半島との関連性のある人物であった可能性が高い。

年代 前述したように、周堀のHr-FAは周堀底より13～26cm程の堆積土の上から確認できており、Hr-FA降下前数年～数十年の築造と考えられる。また、第1主体部から出土の長頸鏃は、頸部の長頸化の状況を見ると5世紀末頃に比定して良い。

(2) 2号墳(第37～47図 PL. 7・20～28・262～264)

位置 調査地南側東端、1号墳の南15mにあり、1号墳と南北に並んでいる。

遺存状況 墳丘の東側端は調査区外で、調査面積は全体の2/3程である。

規模 墳丘径は周堀内側傾斜変換線から推定される墳丘立ち上がりから計測すると最大直径8m、周堀下面内側立ち上がりからすると直径8.8mである。現状の墳丘高さは、墳丘立ち上がりからすると、80cmほどである。周堀底からの高さは最大で1.6mとなる。

周堀 周堀は、上幅2.1～1.4m、底幅40～80cm、深さ60～80cmである。一定の長さで深く掘られており、5つの掘削の単位が分かった。1単位は3.3～4.8mの長さである。

埋土の状況 周堀は36～40cmとある程度土が堆積した段階で、Hr-FAが堆積しており、1号墳より少し古くなる可能性がある。墳頂部にも、S₁・S₃・S₇が堆積している。S₇による線状衝撃痕跡が多数西から東に向かって検出されているので、この葺石・墳丘を削った火砕流はS₇と想定している。古墳の墳丘は、1号墳と同じように西から東へ向かう火砕流により、葺石が吹き飛ばされてさらに、墳丘も削り取られて、主体部の石が一部むき出しにされている。かなりの衝撃があったことが分かる。

墳丘構造 墳丘の盛土の状況は、保存により、墳丘の断面観察ができないことと、火砕流の掘削で本来の墳丘の形態が損なわれているので難しいが、一部盛土をしているものと想定している。墳丘には平坦面が形成されておらず、1号墳の2段築成の古墳との差が出ている。

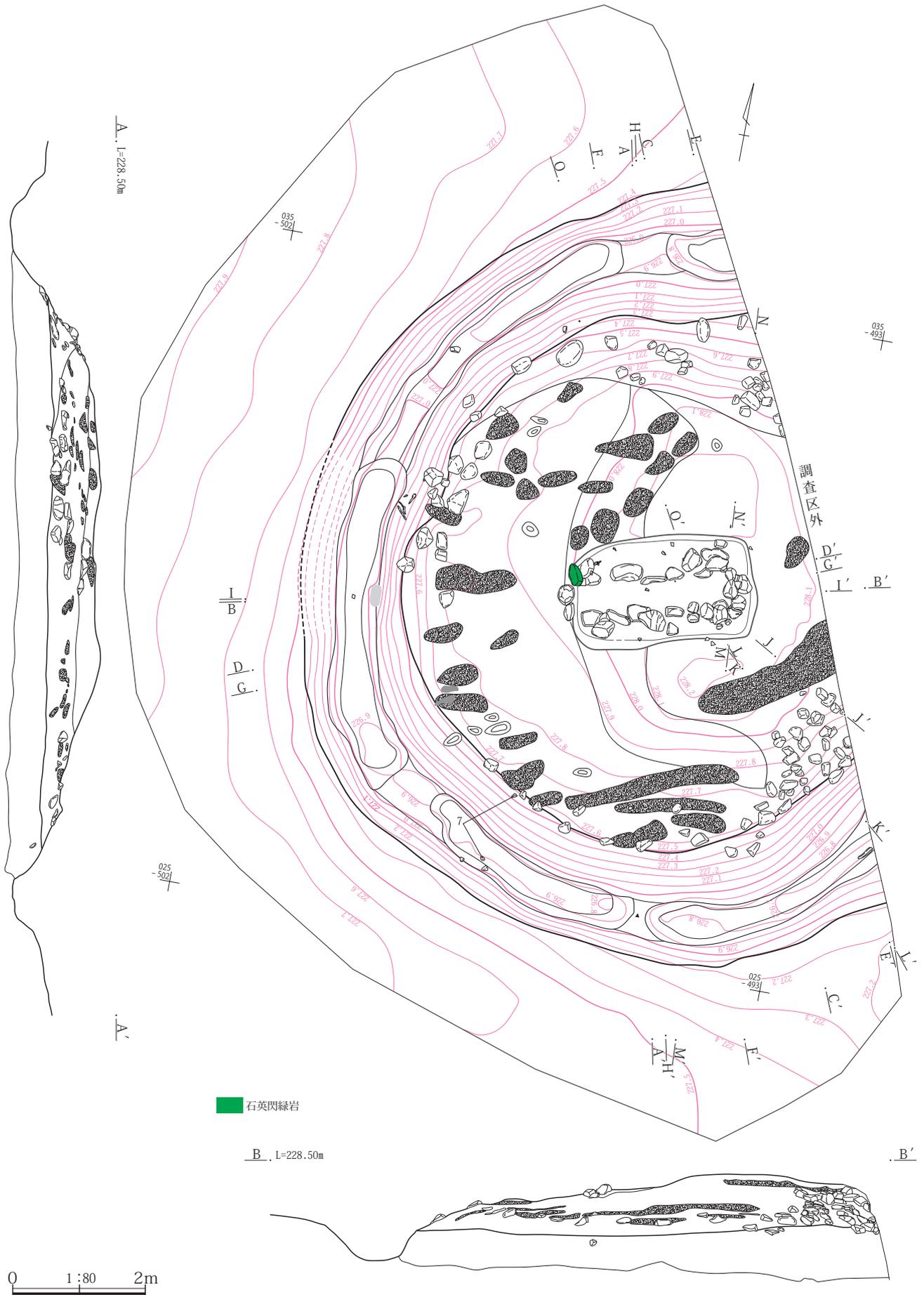
葺石 一部が南北に残存しており、特に南側では葺石を葺く様子が分かる単位が認められる。葺石の石材は、確認できたものはすべて粗粒輝石安山岩である。

墳頂部 主体部上に盛土をした後に、鉄鏃が3本置かれていた、火砕流により原位置は動いていたが、主体部の上に安置していた可能性がある。また、土師器の小壺・小甕・甕片などが墳丘から出土しており、何らかの祭儀に使用されたものである可能性が高い。

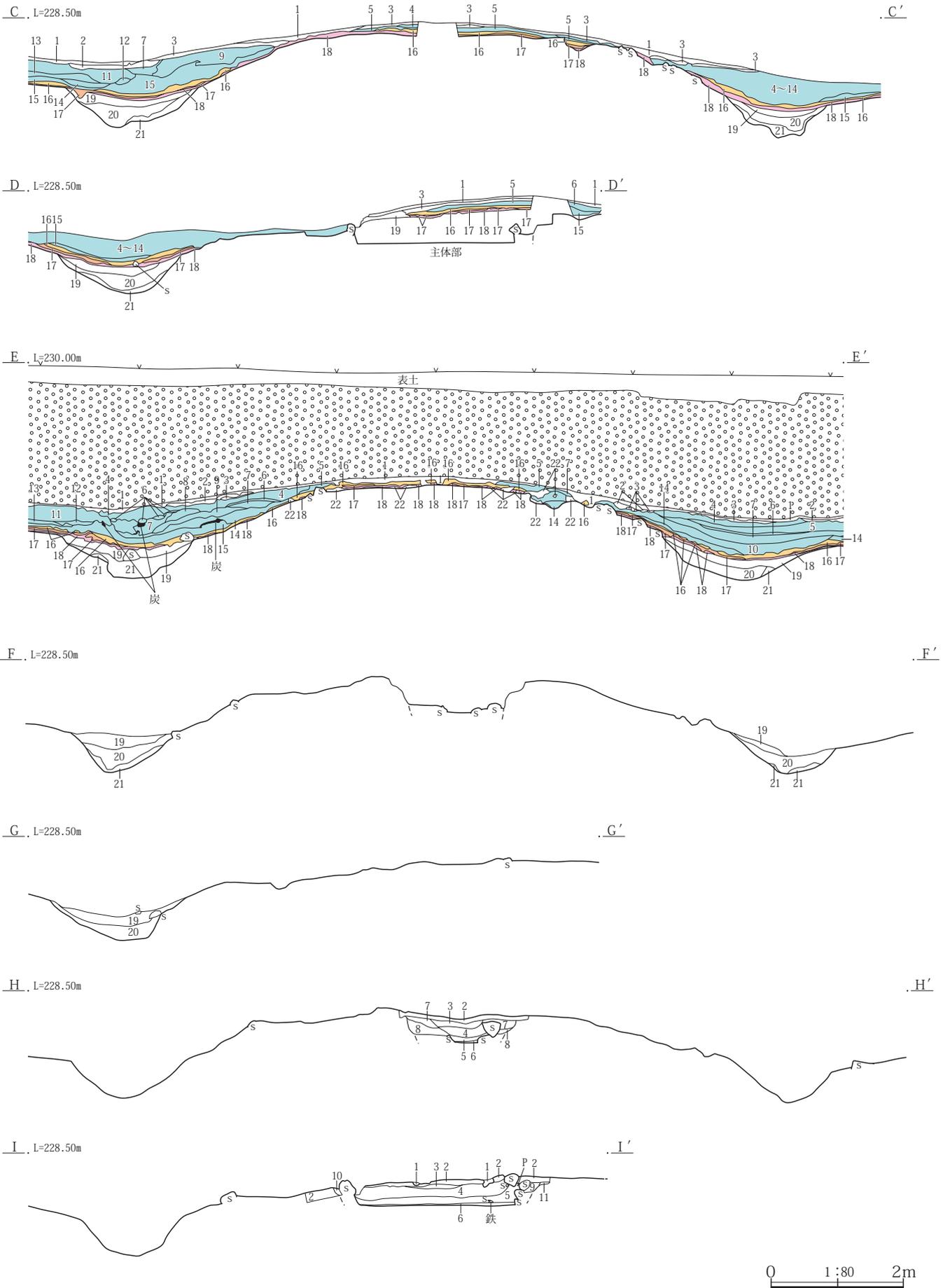
主体部 1号墳第1主体部と同様に石を配置している主体部である。墓坑は、長軸長2.8m、短軸長1.6m、深さ40cmである。内壁長側壁長2.4m、内壁短側東壁幅44cm、内壁短軸西壁幅38cmで、頭位は東にあることが分かる。この主体部も1号墳第1主体部と同様に、1段の石を四周に配石するように置いていくものである。また、頭位部の上にオーバーハンクしている石が置いてあり、1号墳第1主体部同様に、木棺が安置されていた上に石を立てかけたと推定しているが、配石の幅が狭いので、あるいは直接遺体を葬っていた可能性もある。遺体の頭部と推定される箇所から、刀子2本、刀子柄1片、袋状鉄斧1個、提碁1個、鉄片8個が出ている。工具中心の副葬である。木棺、あるいは遺体を安置した後に配石を行い、頭部上に石を置いた後、土を入れたものである。石材は、粗粒輝石安山岩が主体で、一石のみ石英閃緑岩を側壁に置いてある。

遺物集中地点他 墳丘西北裾端に、刀子、鑿、鉋2点がまとめて置かれていた。主体部同様、工具のみのセットである。墳丘西側南寄りには、焼土痕跡が認められており、火を焚いた可能性がある。

出土遺物(第43～47図 PL.262～264)墳頂部からは、土器と鉄鏃が出土している。土器は、杯AⅡ及び小型壺BⅢ②が破碎した状況で出土している。壺や小型壺・須恵器甕の小破片も出土しており、複数の器種が墳頂部に置かれていた可能性がある。線状衝撃痕により、動かされて本来の位置は不明である。また、鉄鏃が3本出土している。鉄鏃は線状衝撃痕の影響があるかと思われるが、



第37図 2号墳全体図・土層断面図



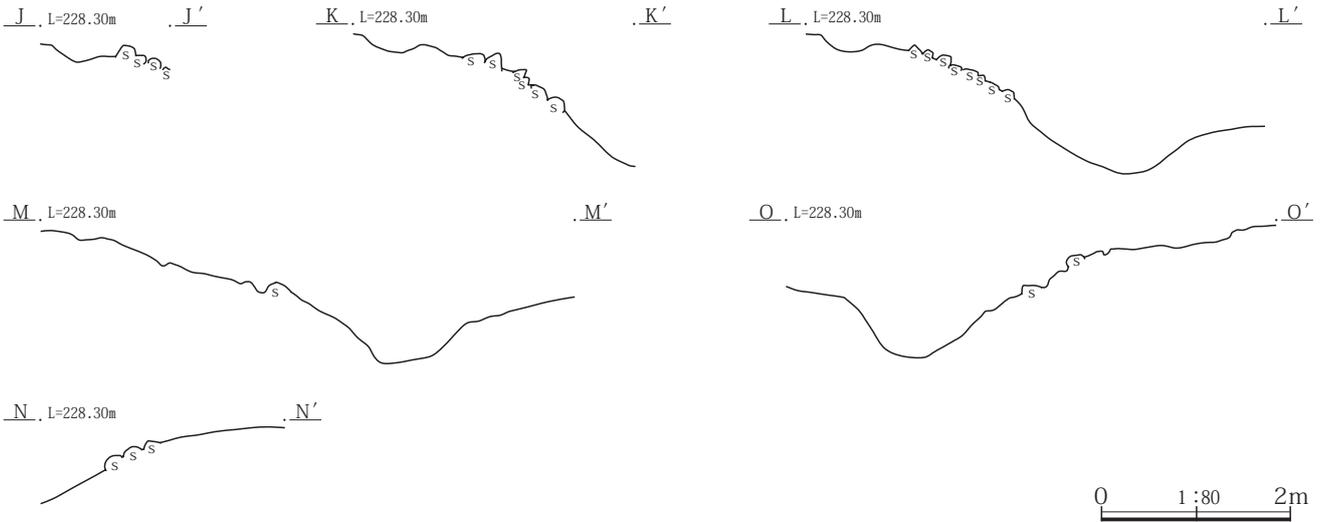
第38図 2号墳フク土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

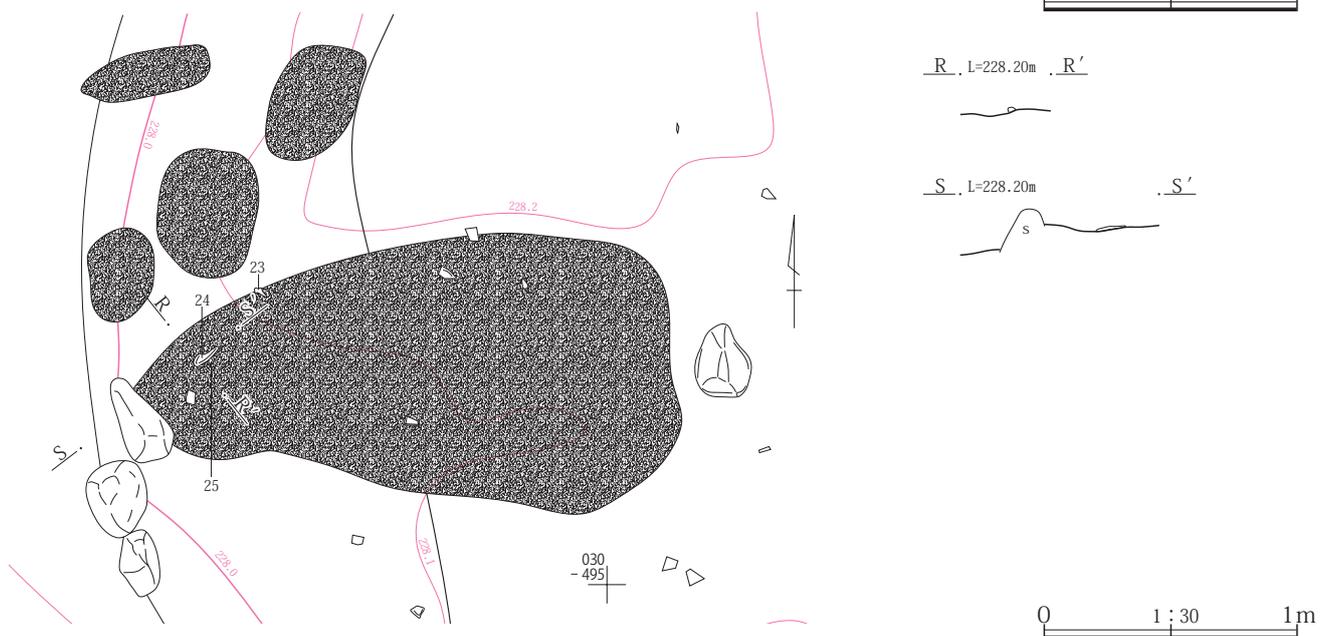
2号墳C-C' ~ I-I'・Q-Q'

1. FP下黒 褐灰色土(10YR4/1)、締まりやや弱。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/4) S₉締まりやや弱。
4. FA(S₇) 細砂。
5. FA(S₇) 細砂。上部に粗砂含。
6. FA(S₇) 灰黄色土(2.5Y6/2)シルト質。
7. FA(S₇) 細砂。互層に極細砂土含。
8. FA(S₇) やや粗砂含。
9. FA(S₇) 細砂。灰黄色土混じり含。
10. FA(S₇) 細砂。
11. FA(S₇) 細砂。シルト質土・灰黄色土混じり。
12. FA(S₇) 細砂。シルト質土・灰黄色土・炭化物極少量含。
13. FA(S₇) 細砂。

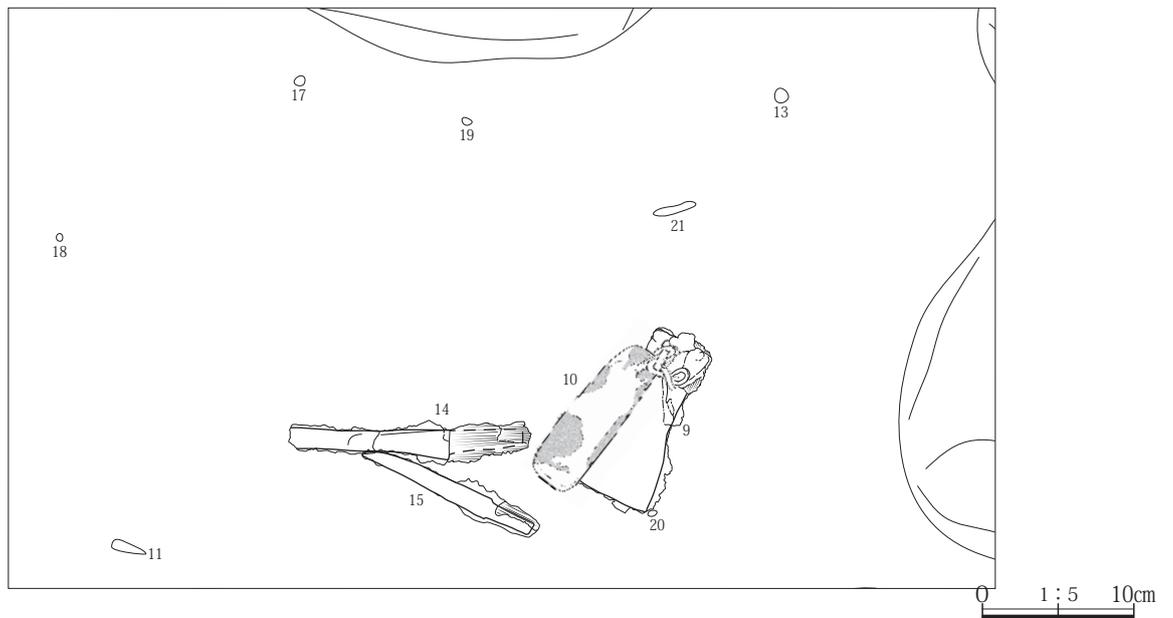
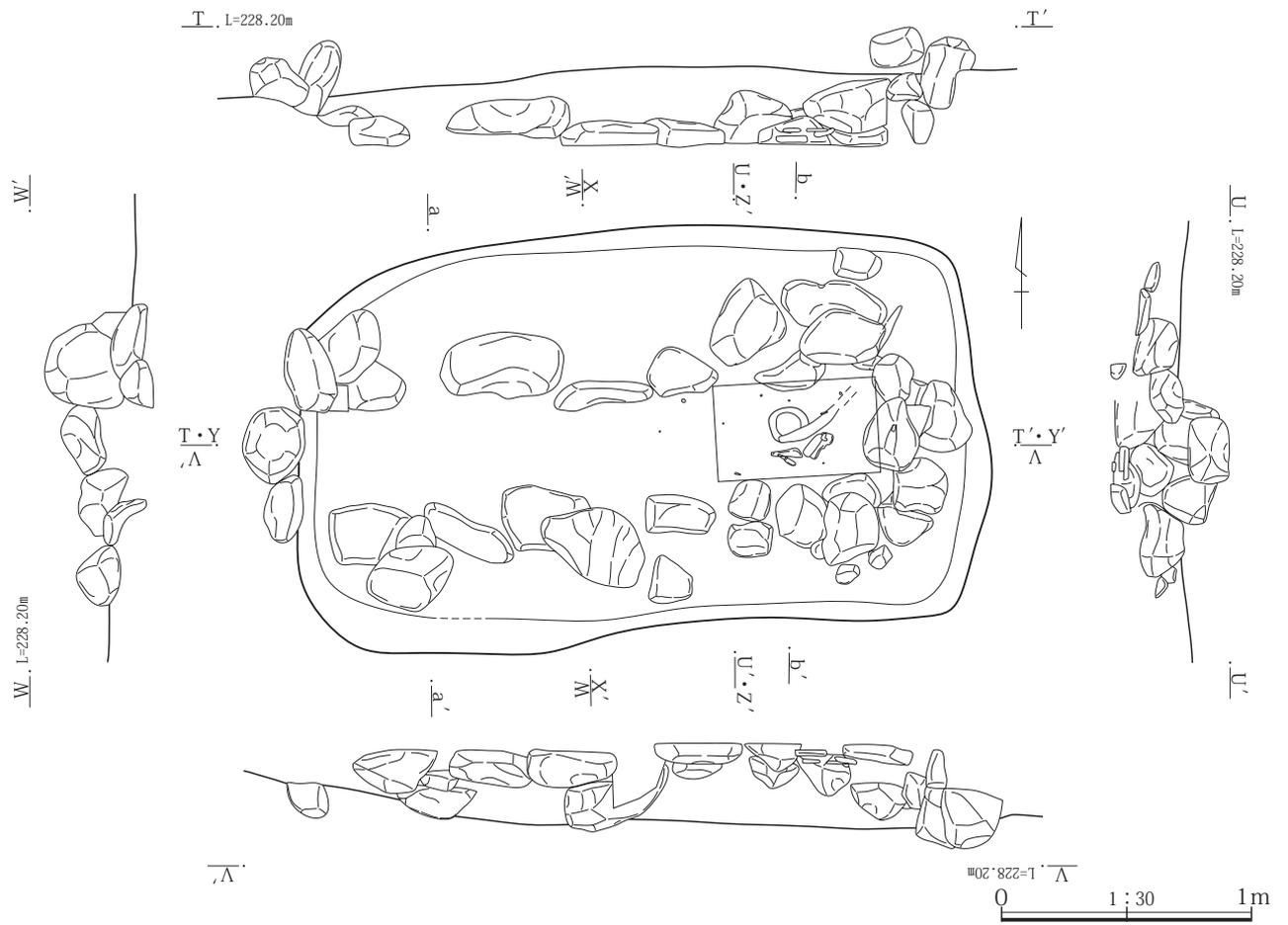
14. FA(S₇) 細砂。炭化物2%含。
15. FA(S₇) 細砂。一部粗砂含・炭化物1%含。
16. FA(S₃)上部
17. FA(S₃)下部
18. FA(S₁)
19. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒(φ1~3mm)1%、亜角礫(φ1~5cm)0.5%含、締まりやや弱。
20. 褐灰色土(10YR4/1) ローム土・亜角礫(φ1~5cm)1%含、締まりやや弱。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、亜角礫(φ1~10cm)1%含、締まりやや弱。
22. FA(S₁) 下黒褐色土(10YR3/2)



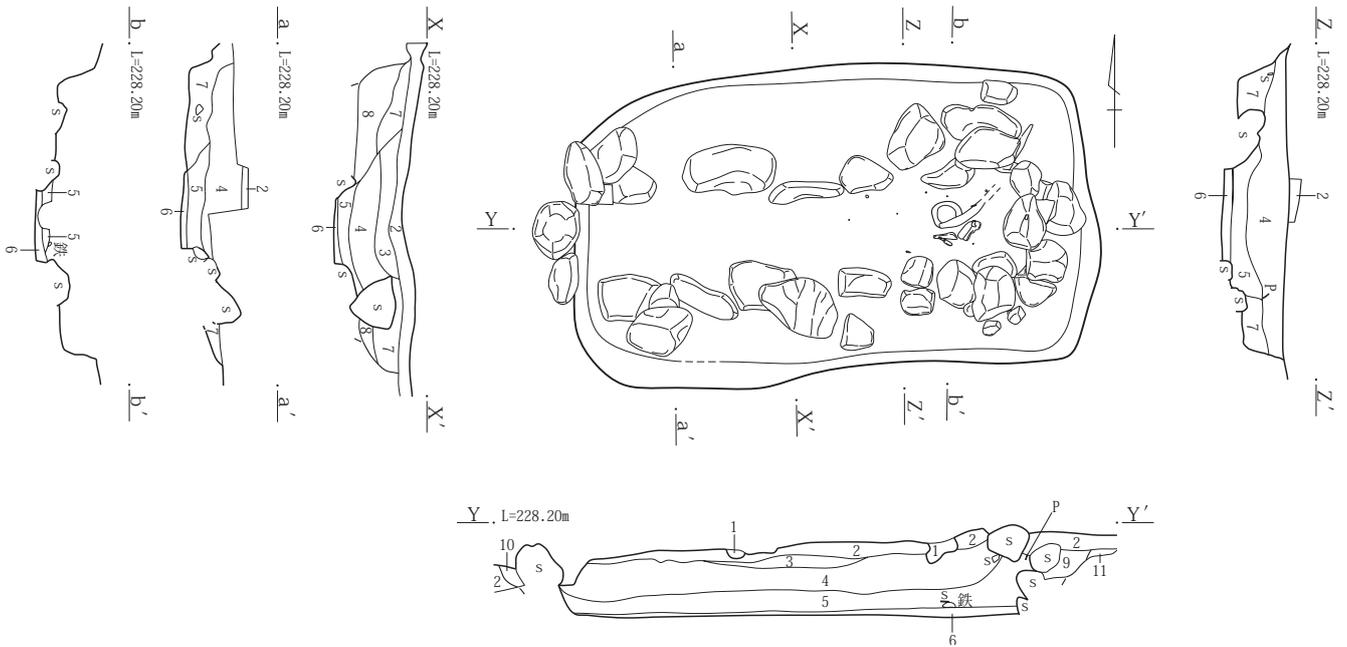
第39図 2号墳墓石断面図・墳丘裾遺物出土状況図



第40図 2号墳頂部遺物出土状況図・主体部付近遺物出土状況図

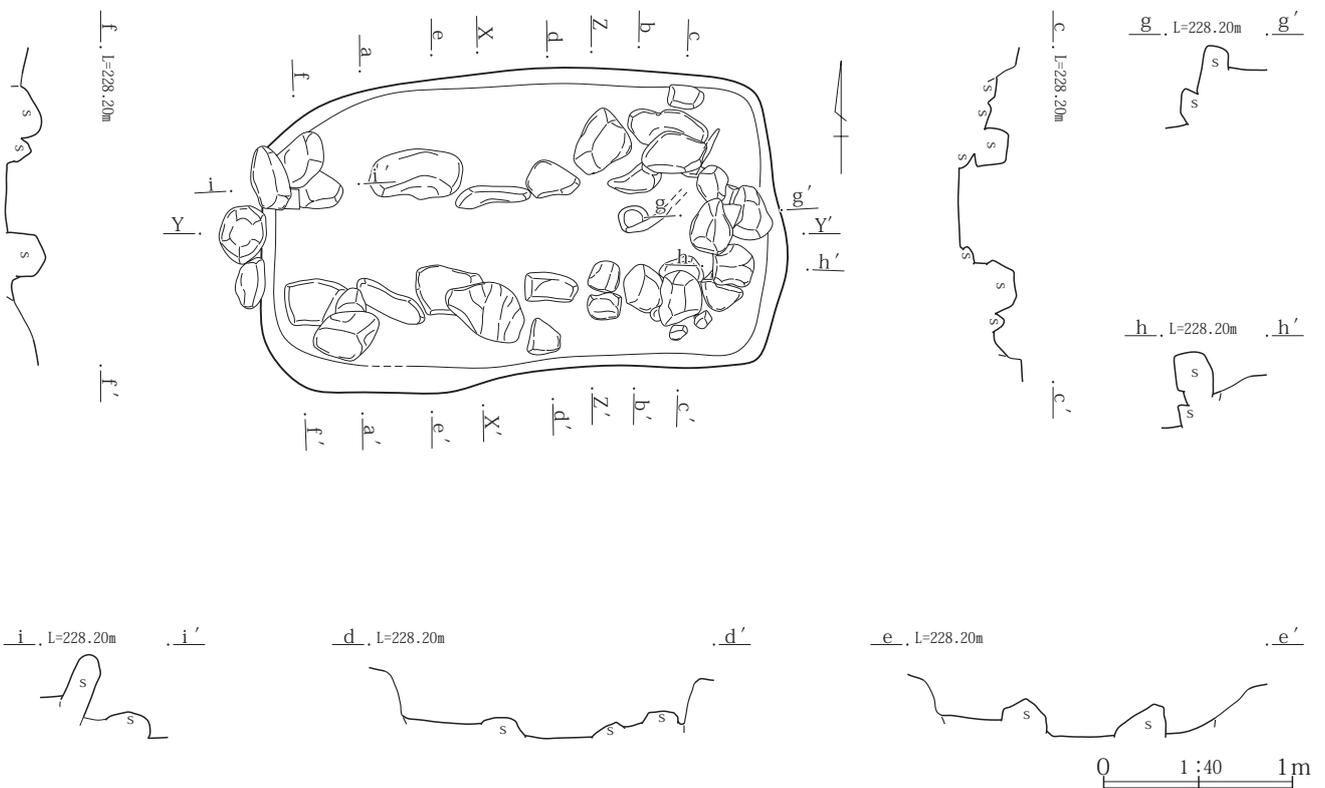


第41図 2号墳主体部内平面図・断面図・遺物出土状況図

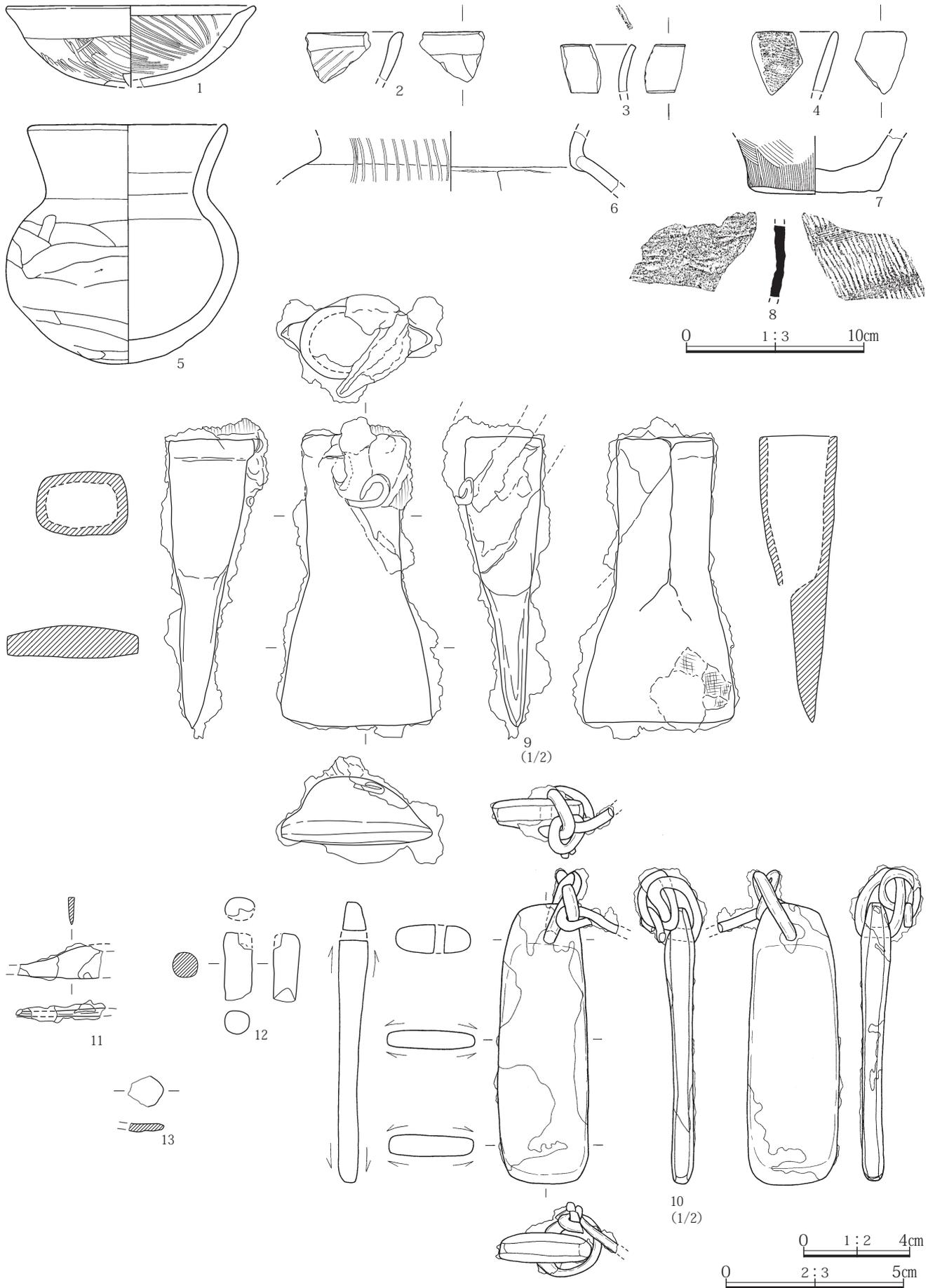


2号墳主体部

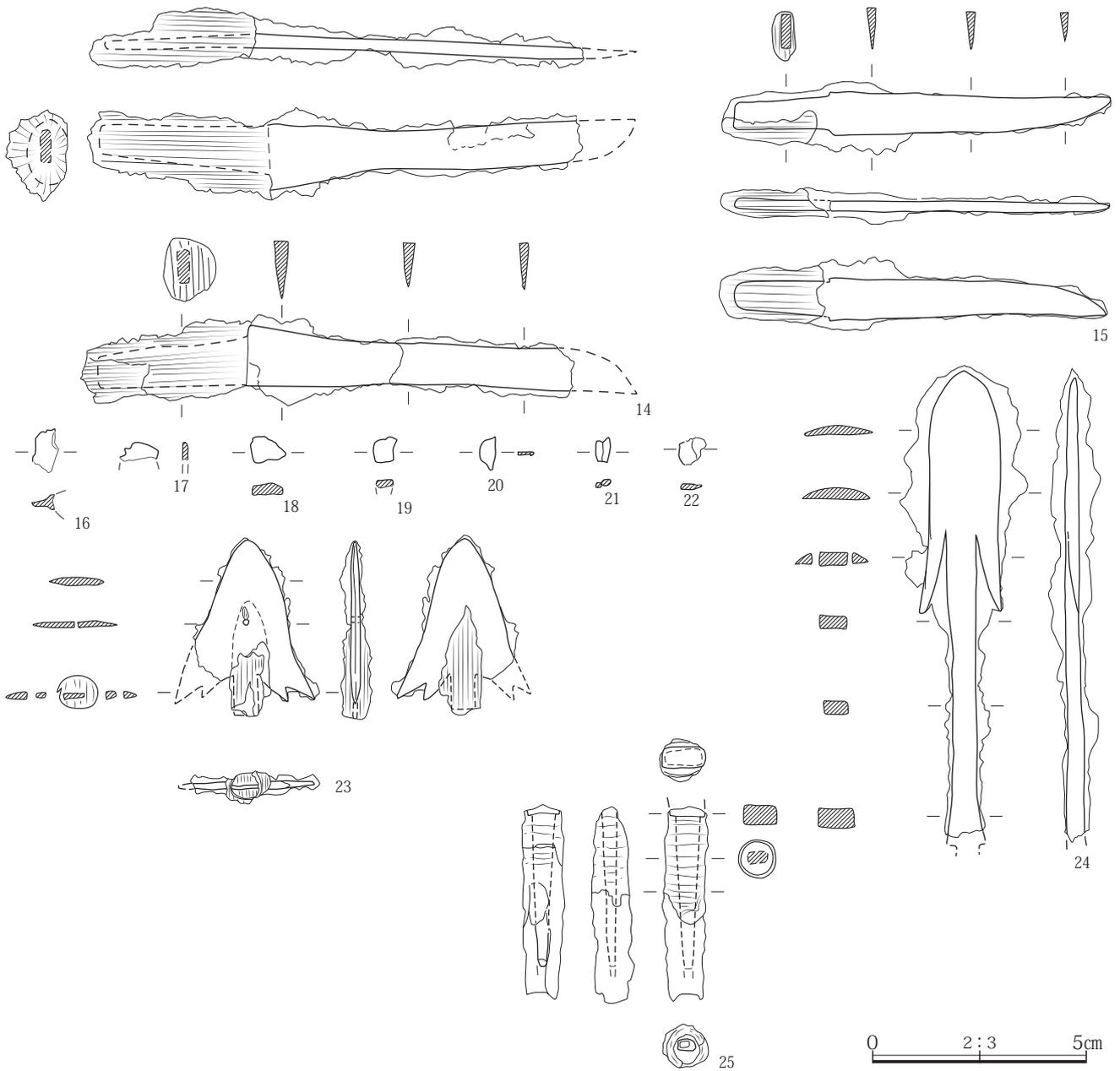
1. S_i混じり黒褐色土
2. 黒褐色土(10YR3/2) 灰白色粒(φ 1mm未満) 1%、黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%含、埋土。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム土 5%、灰白色土粒(φ 1mm未満)・黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%含、締まりやや弱、4層より締まりあり。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒・灰白色土粒(φ 1mm未満) 1%、黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%、小礫(φ 5~30mm)極少量含、締まりやや弱。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色土粒(φ 1mm未満)・黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%含、締まりやや弱。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色土粒(φ 1mm未満)・黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%含、5層よりやや締まりあり。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・灰白色土粒(φ 1mm未満) 1%、黄褐色土粒(φ 1mm未満) 1%含、土坑埋土、締まりやや弱。
8. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック(φ 3~20mm) 5%、小礫(φ 10~40mm)極少量含、土坑埋土、締まりややあり。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム(φ 1~3mm) 1%含、締まりやや弱。
10. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 2~5mm)極少量含。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム土20%含。



第42図 2号墳主体部平面図・土層断面図・断面図



第43図 2号墳頂部出土土器・主体部内副葬品図

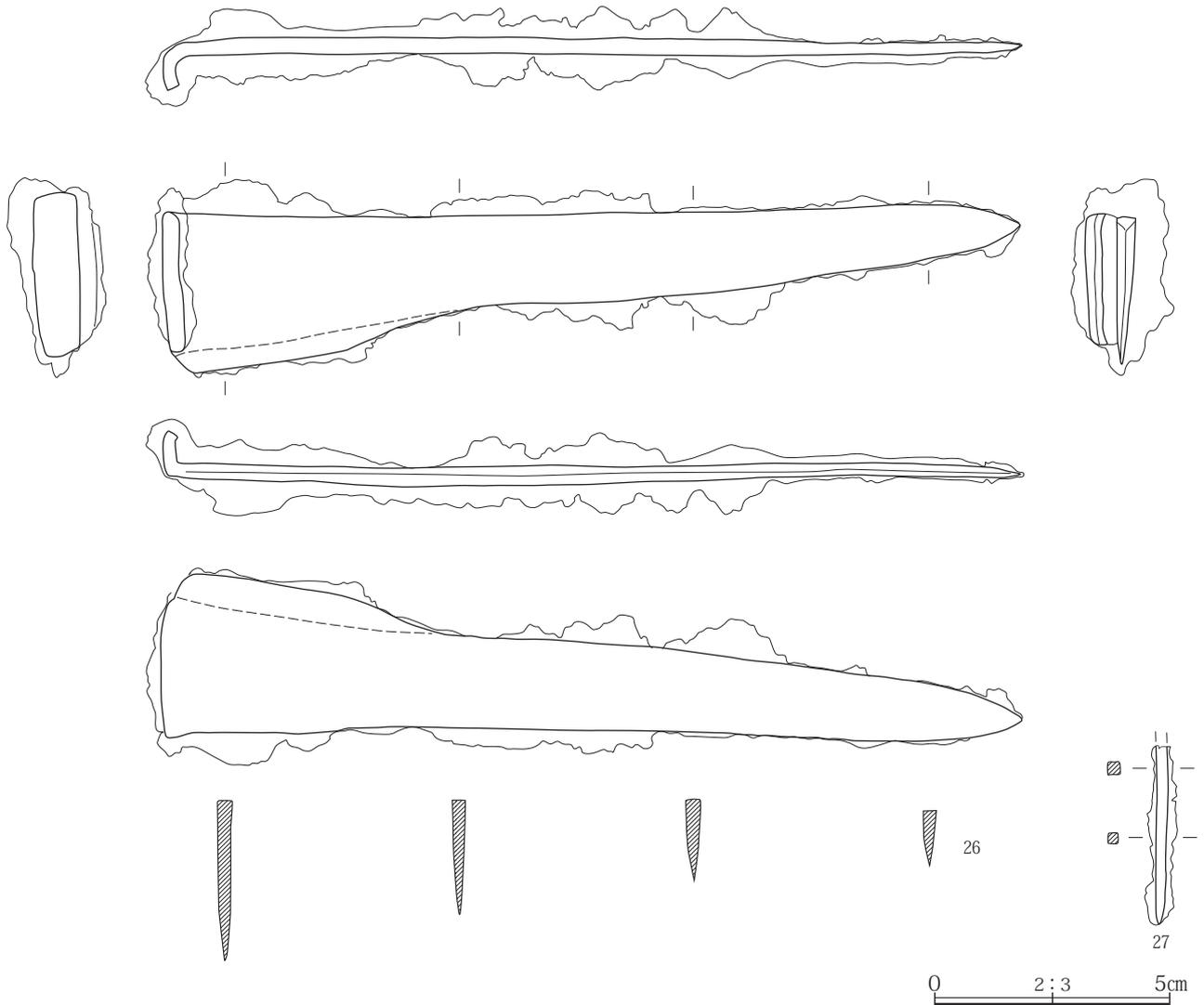


第44図 2号墳主体部内副葬品図2・墳頂部出土鉄器

いずれも主体部の西北部上からの出土である。この付近で鉄鍬をまとめて配置していた可能性も考えられる。鉄鍬は、短茎重抉長三角形(第44図23)と長頸平根腸抉長三角形鍬(第44図24)、茎(第44図25)がある。短茎鍬は小型で重抉のあるもので、1号墳第1主体部出土例にも重抉がある。共通性を感じるものである。単孔を有しており、根ばさみを緊縛するものであろう。長頸鍬でも、平根系の大型で片丸造の刃部を持つ鍬が出土しており、埼玉稲荷山古墳礫槨出土例と近似する。時期的にも近く系統は同じものであろう。

このように、主体部の近くで、鍬を墳丘頂部に置くことは興味深い。

主体部の副葬品で、袋状鉄斧は、緩やかな肩部を持つ形態のものである。袋部周辺に木質が付着しており、木柄に装着されていた可能性がある。また、刃部付近には織物の痕跡が付着していて、布に包まれていた可能性がある。この袋状鉄斧とセットになって砥石が出土している。提石は提砥で、使い込まれた扁平化したもので、表裏面使用されている。さらに孔には、極めて珍しい鉄製の吊金具が付いている。さらにそれが、隣にあった袋状鉄斧の本体に付着した有機質の紐に繋がると想定される。このように提砥の装着の形態が分かるものは珍しく、特に鉄製吊金具の存在は日本国内では類例を知らない。刀子は主体部内で並んで出てきている。2本出土してい

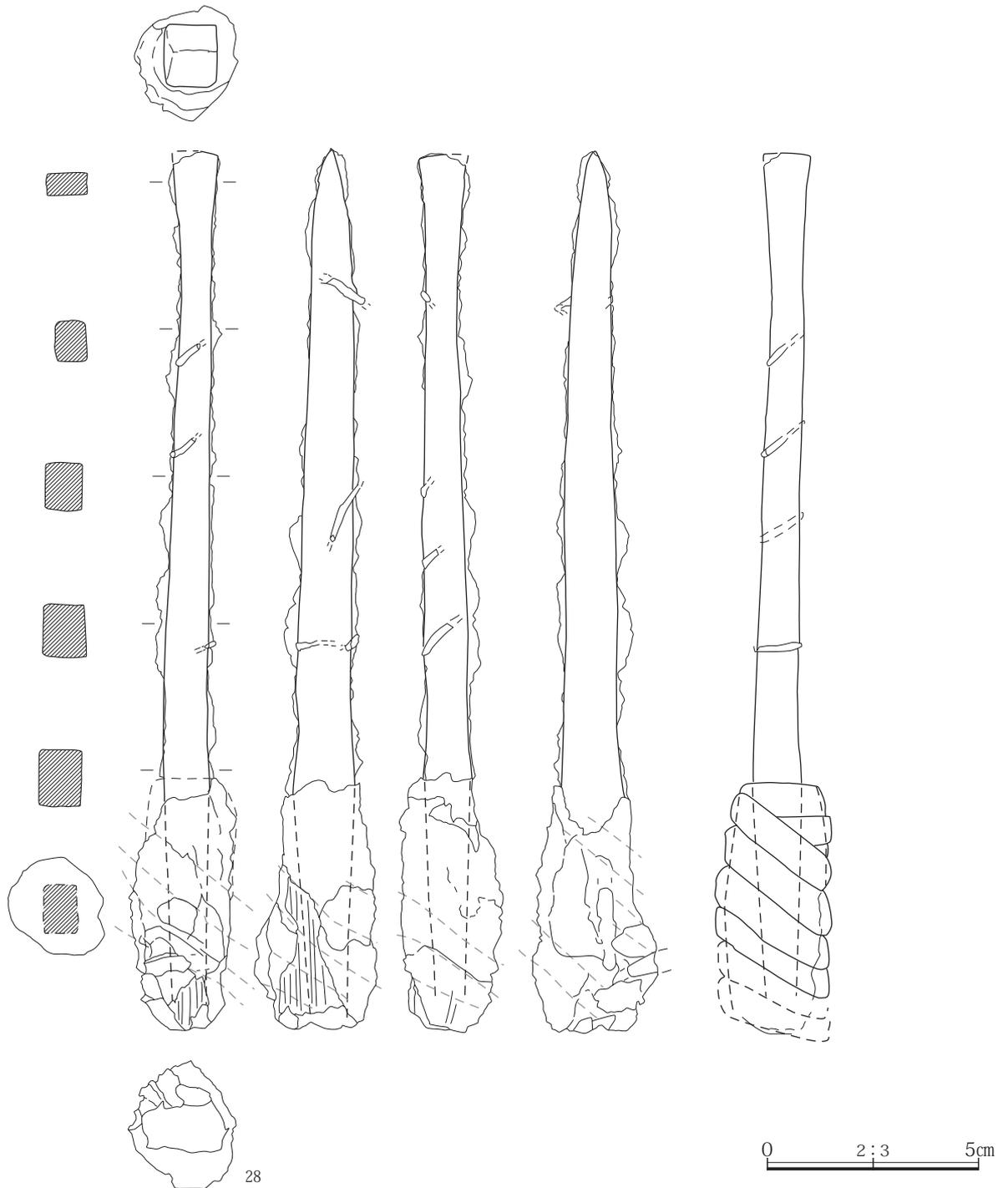


第45図 2号墳墳裾出土鎌図

る。大型のもの(第44図14)と、小型のもの(第44図15)がある。いずれも木装である。大型の刀子には研ぎ減りが認められ、片関の可能性が高い。小型の刀子は両関と思われる。もう1点刀子の茎片と思われるもの(第43図11)が、刀子のセットより西側へ15cm離れた箇所から出土した。鉄片(第43図13、第44図16～22)が8個出土している。主体部内の床面近くに散在して出てきている。これらの鉄片は、素材片の可能性が高い。この主体部では、農工具と素材の組み合わせの副葬品と考えている。

墳丘裾からは、鑿(第46図28)・鉈(第47図29・30)2・鎌(第45図26)・針(第45図27)の5点がまとまって置かれていた。鑿の装具は、木質の柄を装着した後に、樹皮かと思われる有機質を斜めに巻き付けているものである。さらに、刃部に続く鉄芯部にも斜めに紐状のものを巻き付けた痕跡があり、刃先近くまで巻き付けられている。

このような例は祭具に認められるもの(塚原2016)で、当例も普通の工具として置かれたのではなく、祭具として使用されたことを示すものであろう。鉈は大小の2形式があり、大型のものには柄に木質が付着しており、木装であったことが分かる。小型の鉈には、鑿と同じように、紐状の痕跡が残っており、柄端から少なくとも柄半ばまでは紐で巻かれていたものと想定される。その先には、編物の痕跡があり、布で覆われていた可能性が高い。鎌とした鉄器は、先端が尖っており、通有の鎌とは形態が異なる。また、刃先も屈曲せず直線状に延びている。柄元の折り返しは明瞭であるが、木質等の痕跡は認められない。刃は明瞭に造りだしてあり、片刃であることは間違いない。あるいは戈のような武器である可能性もあるが、一緒に出土したものがすべて農工具なので、鎌としておきたい。針かと推定している鉄器は、先端が欠損し



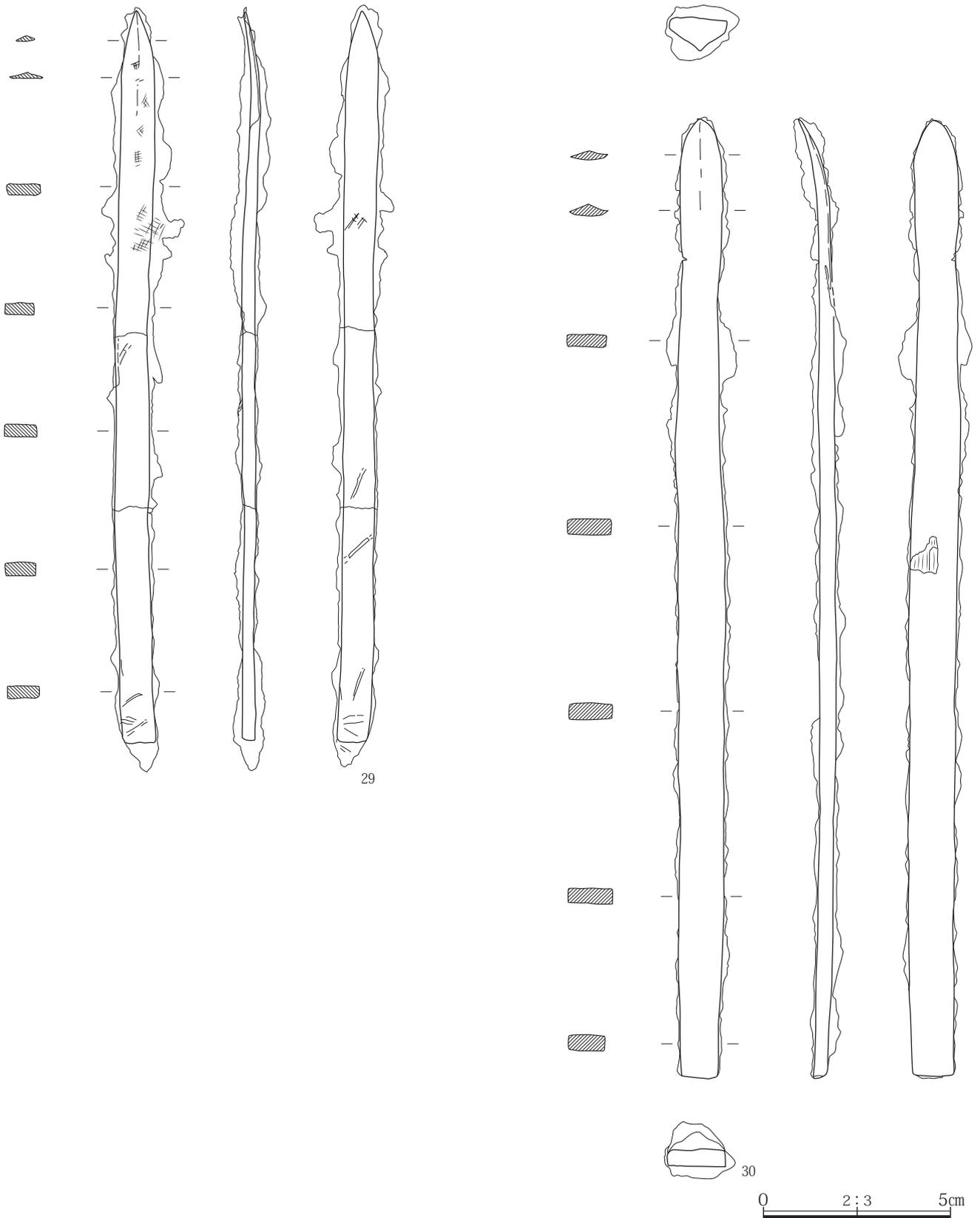
第46図 2号墳墳裾出土鑿図

ているために明瞭ではないが、恐らく針であろう。主体部だけでなく、墳丘裾の遺物集中地点でも、やはり農工具を中心にした組み合わせを示した鉄器を納めていることに注目したい。

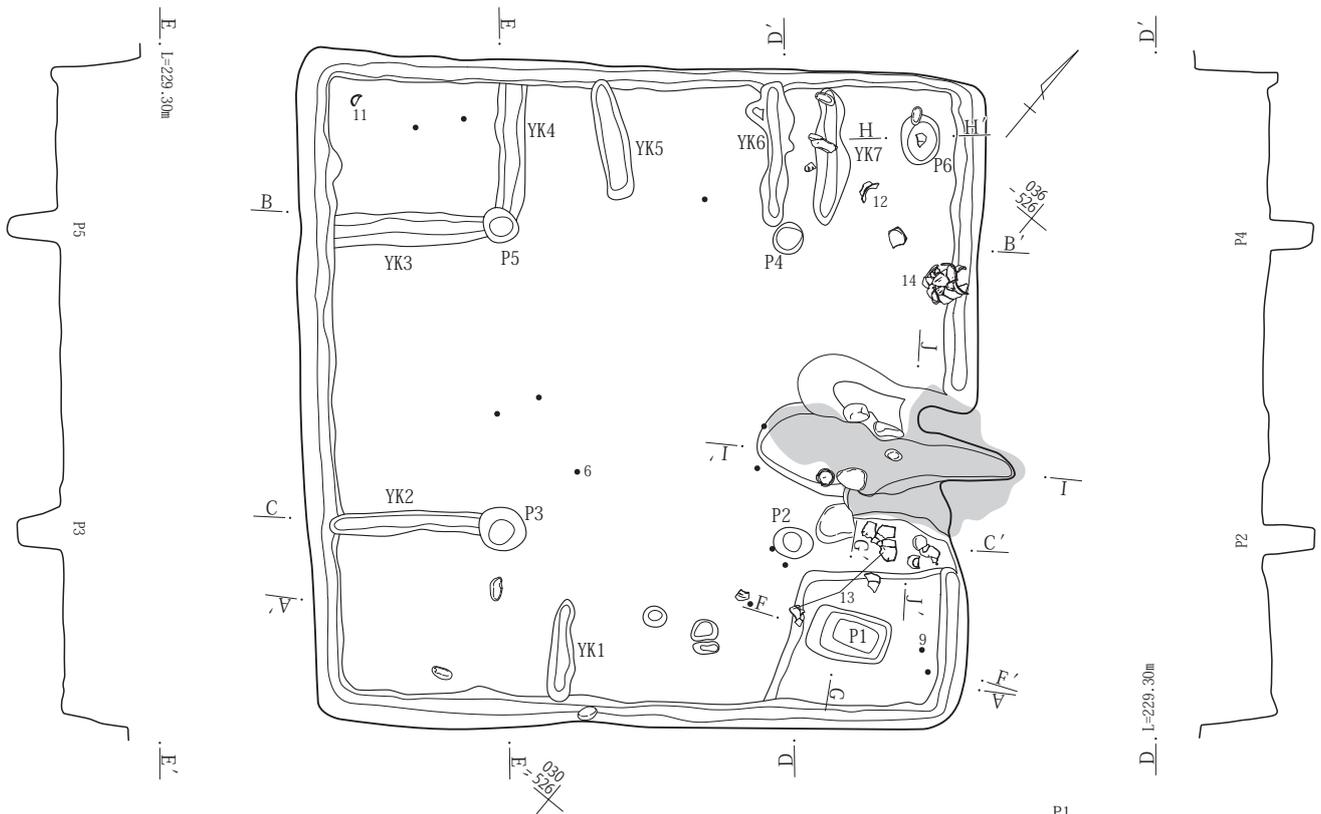
被葬者 主体部の副葬品が工具と素材の可能性がある鉄片、墳丘裾の遺物集中区での農工具のみのセットからすると、被葬者は手工業に関わる者で、手工業集団の統率者のような立場の人物であった可能性を考えたい。階層的には、墳丘の規模や墳丘構造、葺石の石材などか

ら1号墳より下位に位置するものと考えられる。また、1号墳同様に、提碁の存在や、配石状の石室などから朝鮮半島系の文化の影響を受けており、半島との関連性のある人物であった可能性が高い。

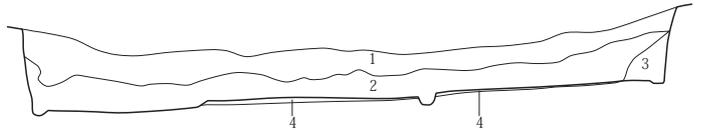
年代 周堀での、周堀底からの40cm程の堆積土の上のHr-FAの降下状況や、副葬品の農工具主体の組成、鉄鏃の中でも特に平根系で逆刺を持つ長頸の柳葉鏃などからすると、5世紀後半～末と想定される。



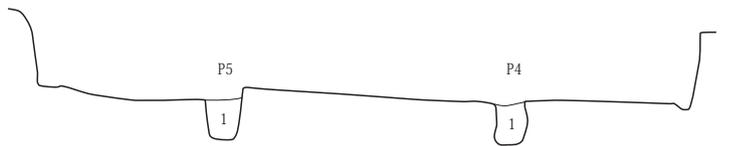
第47図 2号墳墳裾出土鉦図



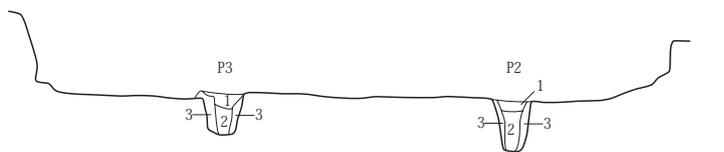
A. L=229.30m



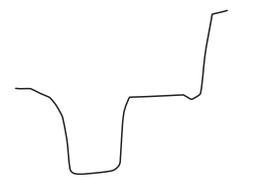
B. L=229.30m



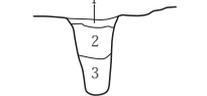
C. L=229.30m



F. L=229.20m



L=228.60m



43号竖穴建物 P 1

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・ブロックを多量含。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含。

L=228.50m



43号竖穴建物

1. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・ロームブロック・焼土を含、古墳時代の畝耕作土。
2. 褐色土(10YR3/1) ローム粒・炭化物を含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 白色軽石を微量含。
4. 貼床 黒色土・ローム混。

43号竖穴建物 P 2

1. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・炭化粒を多量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒少量含。
3. 黄褐色土(10YR5/6) ローム粒多量含、ローム主体、掘り方。

43号竖穴建物 P 3

1. 黒褐色土(10YR3/2) 白色・オレンジ軽石を含。
2. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒含。
3. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム粒・ブロック多量含。

43号竖穴建物 P 4

1. 暗褐色土(10YR3/3) 白色・オレンジ軽石を含。

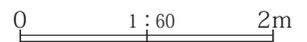
43号竖穴建物 P 5

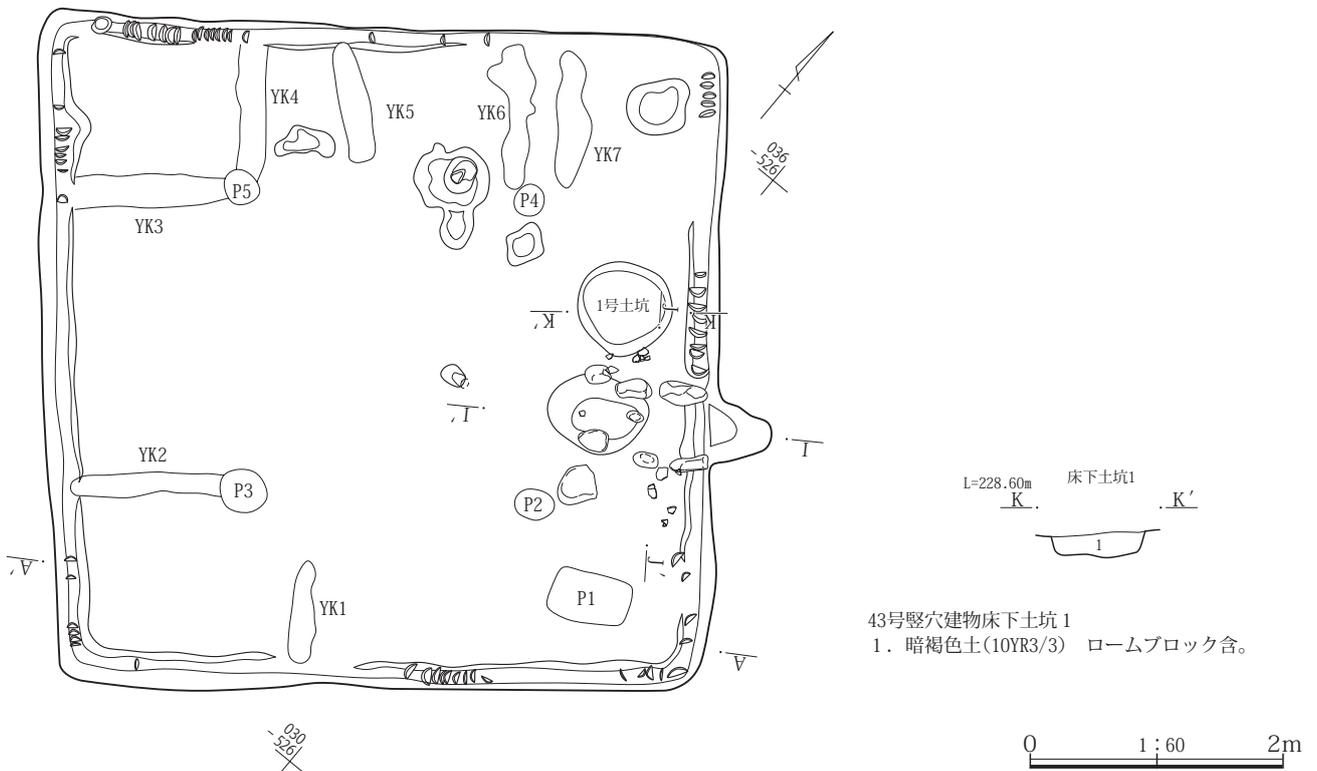
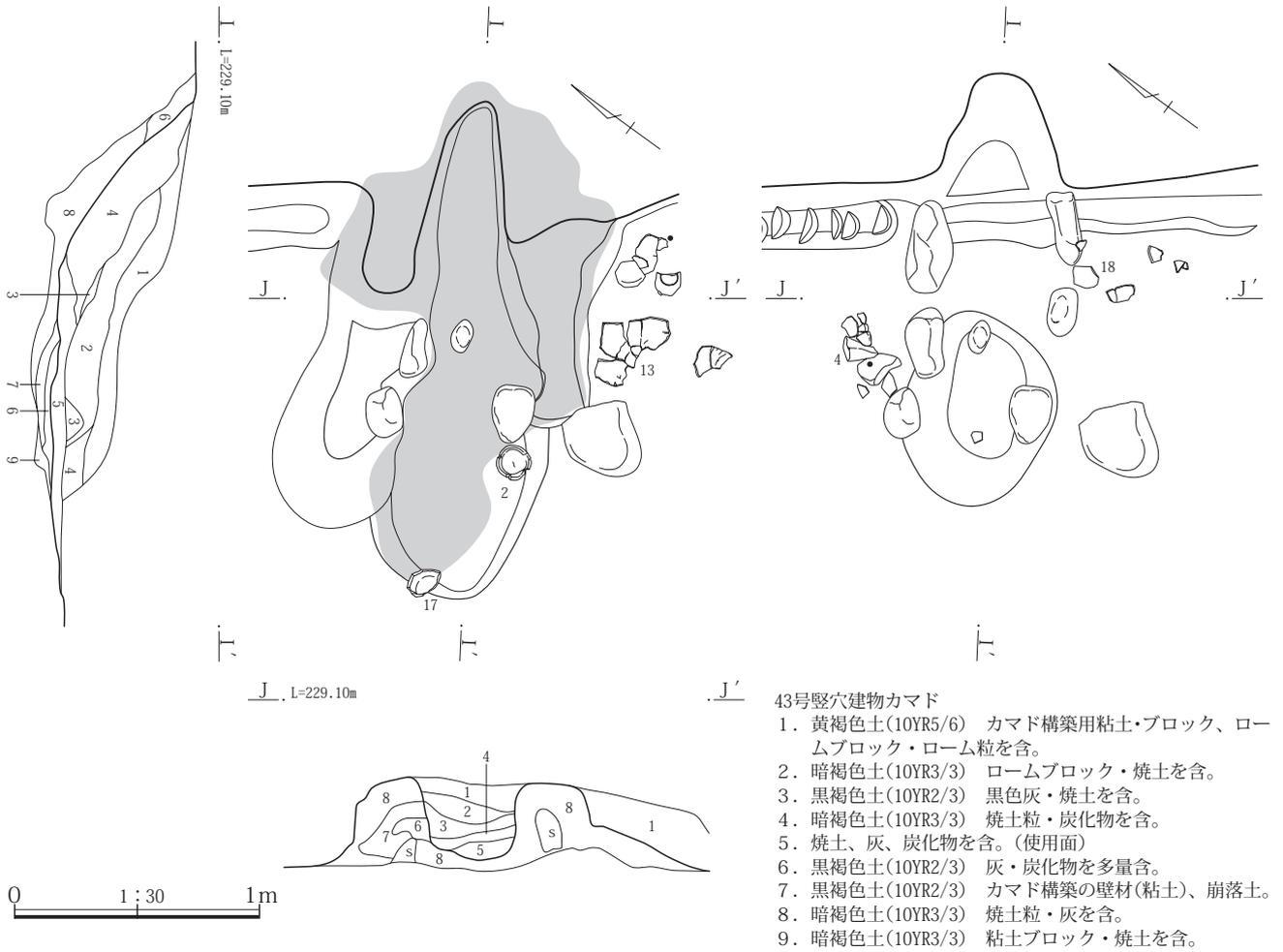
1. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土を少量含。

43号竖穴建物 P 6

1. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒含。

第48図 43号竖穴建物平面図・土層断面図・断面図



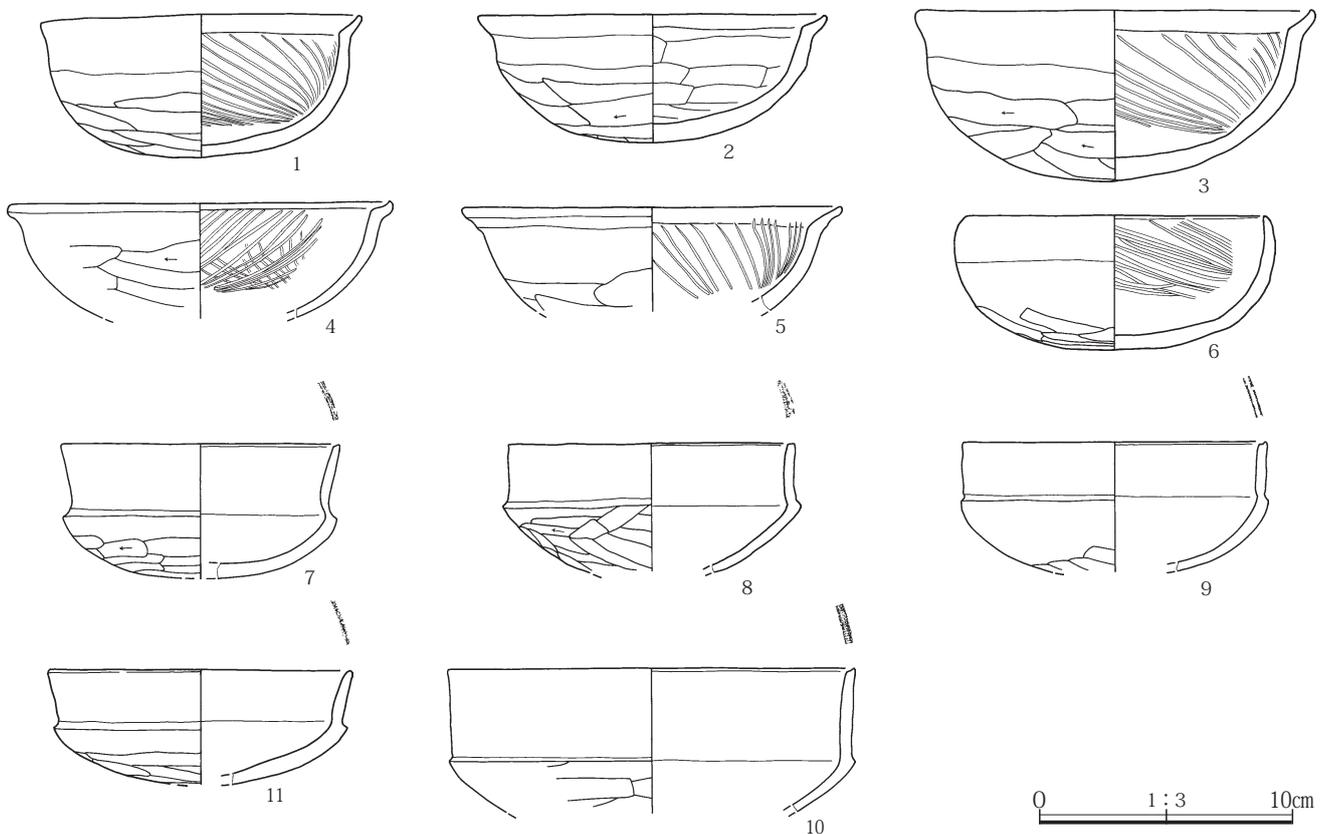


第49図 43号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図

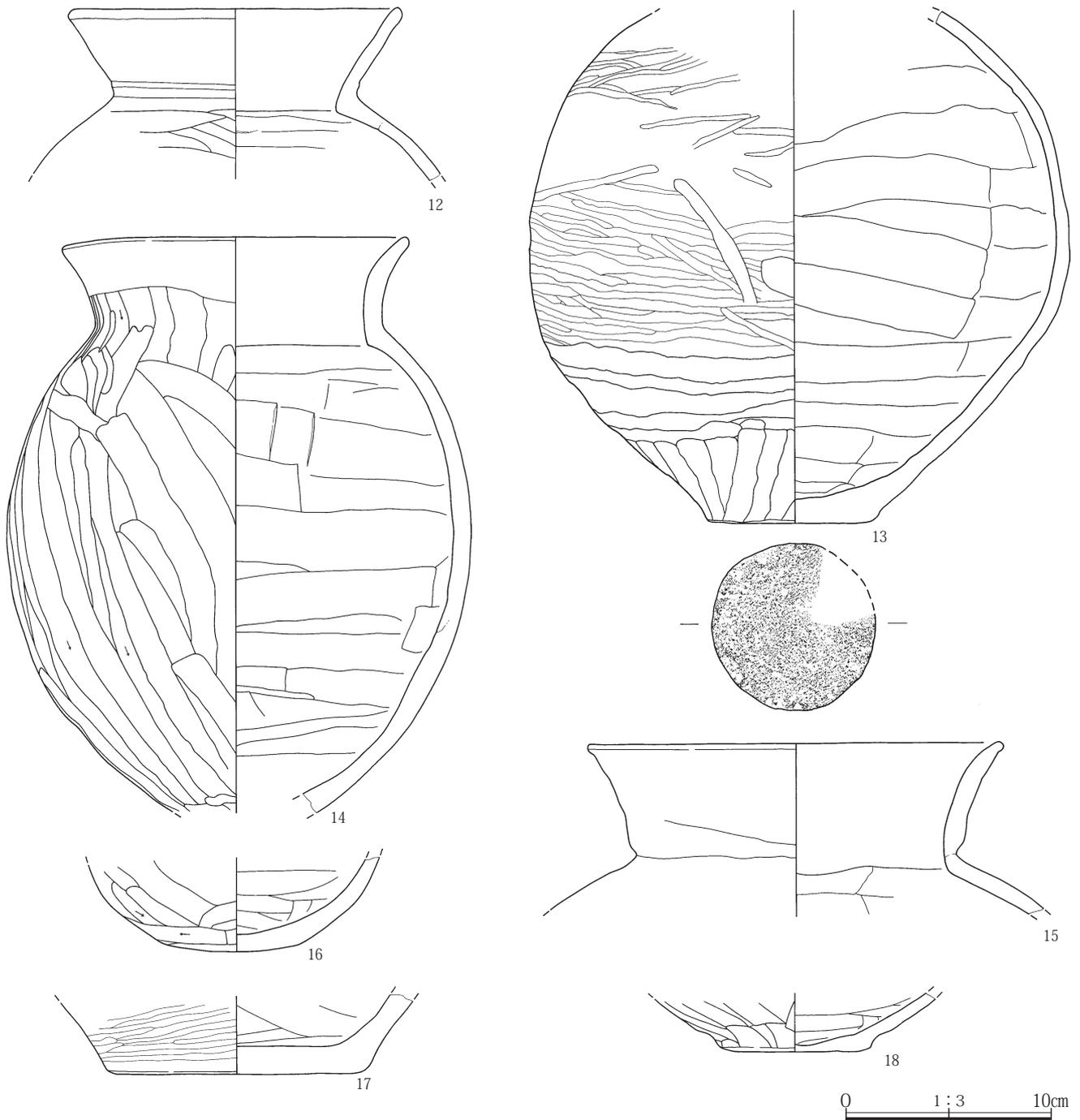
(3)43号竪穴建物(第48～51図 PL.30・31・264)

位置 調査区中央の橋脚部にある。**遺存状況** 竪穴部は完存、周堤痕跡は確認できず。**埋土状況** 廃棄後、ある程度埋まりながらも窪地となっている段階で、方形の畝を持つ畝が造られている。その上にHr-FAが堆積していた。**規模** 東西5.38m、南北5.42m、壁高57～66cm、床面積27.73㎡で、主軸方位は、N-51°-Eである。床面が東に向けてやや傾斜している。**掘方** U字形鍬鋤先によると推定される掘削痕跡が確認された。壁周溝の東壁カマド北側から、刃先を南にして、北側に後進して掘削し、東壁北端部は反対に刃先を北にして、南側に後進して掘削している。西壁南側は刃先が北で、南壁東側は刃先が西側で、南側から東側にかけて後進しているものと思われる。西壁北側は刃先が南で、北壁西側は刃先が西で、北側から東側にかけて後進しているものと思われる。また、床下土坑がカマド北側にある。**周堤痕跡**を確認できなかつた。**壁際溝** 幅10～20cm、深さ1～5cmで四周を巡っている。**柱穴(P 2～5)** 4本柱穴で、長径25～39cm、短径24～36cm、深さ36～43cmで、柱間は、2.3～2.4mである。**入口** 入口は、これまでの例からすると南側中央部にあると推定す

る。入口と推定される付近には2～3個の小ピットがあり、入口の梯子を据えるピットの可能性がある。**カマド** 袖の芯に石を入れて土を被せるもので、焚口～煙道長205cm、焚口幅70cmである。カマドに向かって左袖に3つ、右袖に3つの石を入れている。支柱石の可能性のある小礫が燃焼部やや奥にある。**貯蔵穴(P 1)** 東南隅にあり、長辺63cm、短辺40cm、深さ64cmの隅丸長方形の深い穴で、遺物は出土しなかつた。貯蔵穴と思われる穴のカマドを挿んで北東部の対応する位置に長径40cm、短径30cm、深さ9cmのピットP 6があり、その近くの床面小溝の存在とともに、この空間の使用目的が注目される。**床面小溝** 建物西側にP 3、P 5柱穴を起点にしてL字形に区画されており、北側P 4、P 5柱穴の柱間及びP 4の西側に南北方向に北壁に向かい3本の溝がある。基本的に寝床を区画するものと想定している。**出土遺物**(第50・51図 PL.30～31・264) カマド右袖の脇に長胴甕や壺が出土し、左袖からやや離れた東北壁に接して出土している。土器は、杯A・B・C、壺、甕Dがあり、杯の中では杯Cの比率が多い。須恵器の出土は無い。**年代** Hr-FA直下の畝の造成の前にある程度埋まっているが、杯Cの須恵器模倣杯が中心となる組成などから、5



第50図 43号竪穴建物出土遺物図1



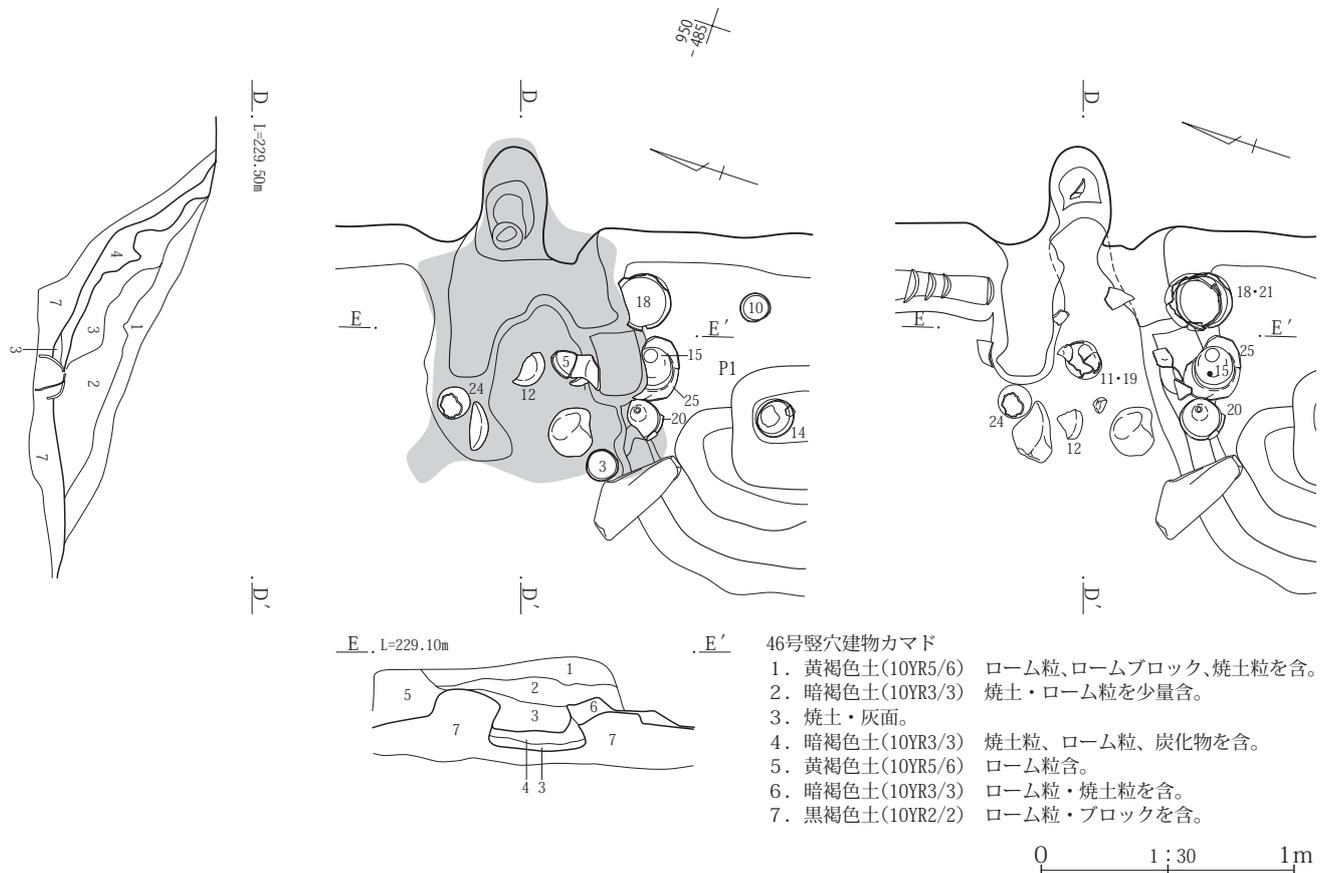
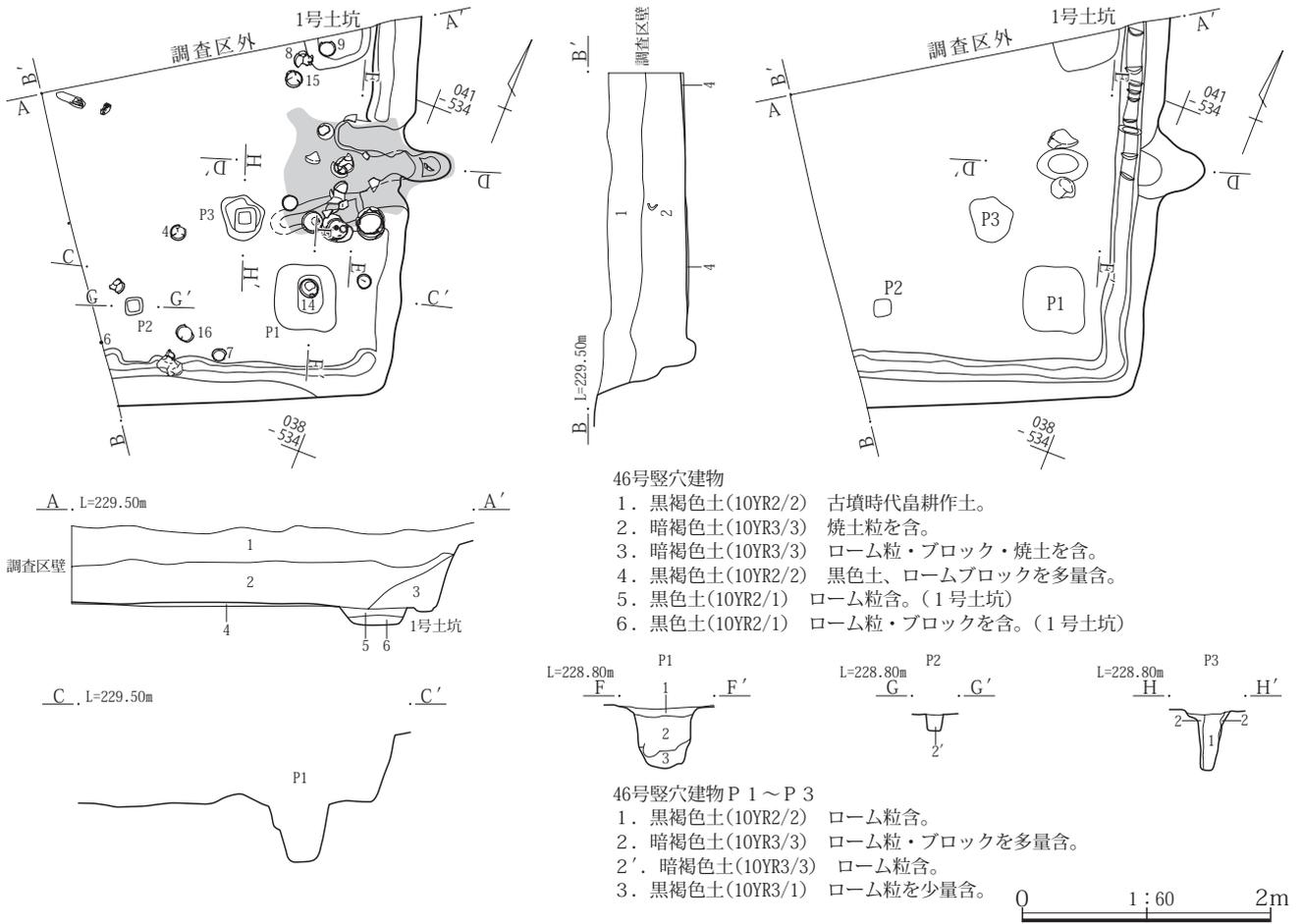
第51図 43号竪穴建物出土遺物図2

世紀後半～末に比定される。

(4) 46号竪穴建物(第52～54図 PL.32・33・265・266)

位置 調査区中央橋脚部北西部、43号竪穴建物の北西にある。**遺存状況** 建物の南東隅1/4程度を調査した。周堤痕跡は確認できなかった。**埋土状況** 廃棄後、ほぼ平坦になった状況で、上に方形畝が造られている。**規模** 残存辺長は、南北3.0m+、東西3.28m+、壁高48～60cm、主軸想定方位N-69°-Eである。**掘方** 43号竪穴建物同様、掘削痕跡が壁周溝付近に残り、U字形鋤鋤先

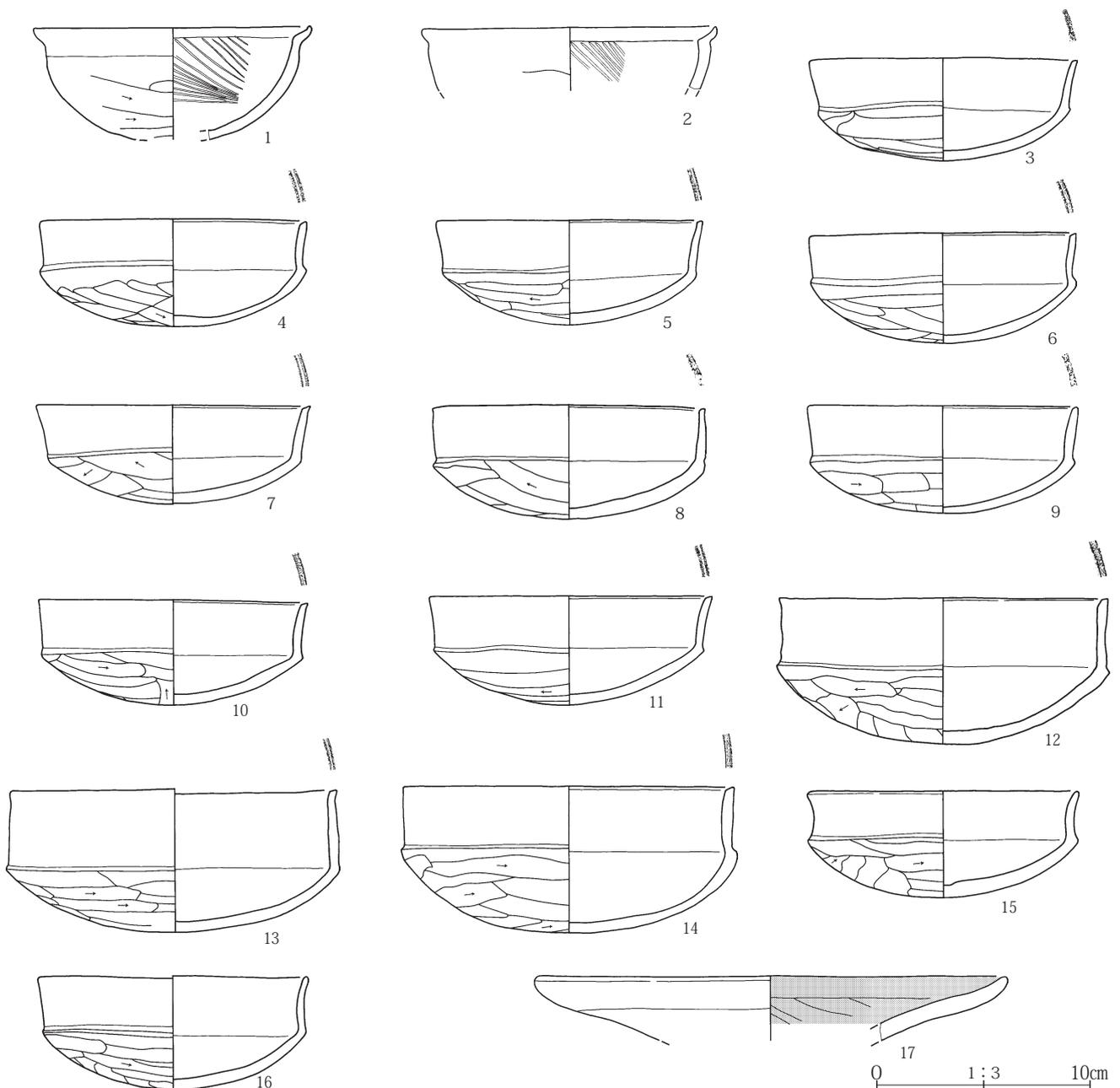
痕跡の刃先は南側を向き、東壁沿いに北側に後進しているものと思われる。床下土坑と想定される土坑の一部が、貯蔵穴のカマドを挟んで反対側から検出された。残存径54cm、深さ12cmの長方形と推定される穴である。46号竪穴建物に認められたような、カマドを挿んで、貯蔵穴に対峙した位置にある土坑としてその用途について検討する必要がある。**壁際溝** 幅18～30cm、深さ1～5cmで、現状で南壁とカマドより北の東壁にある。**柱穴** 1本確認され、柱穴P3は、径36cm、深さ48cmである。入



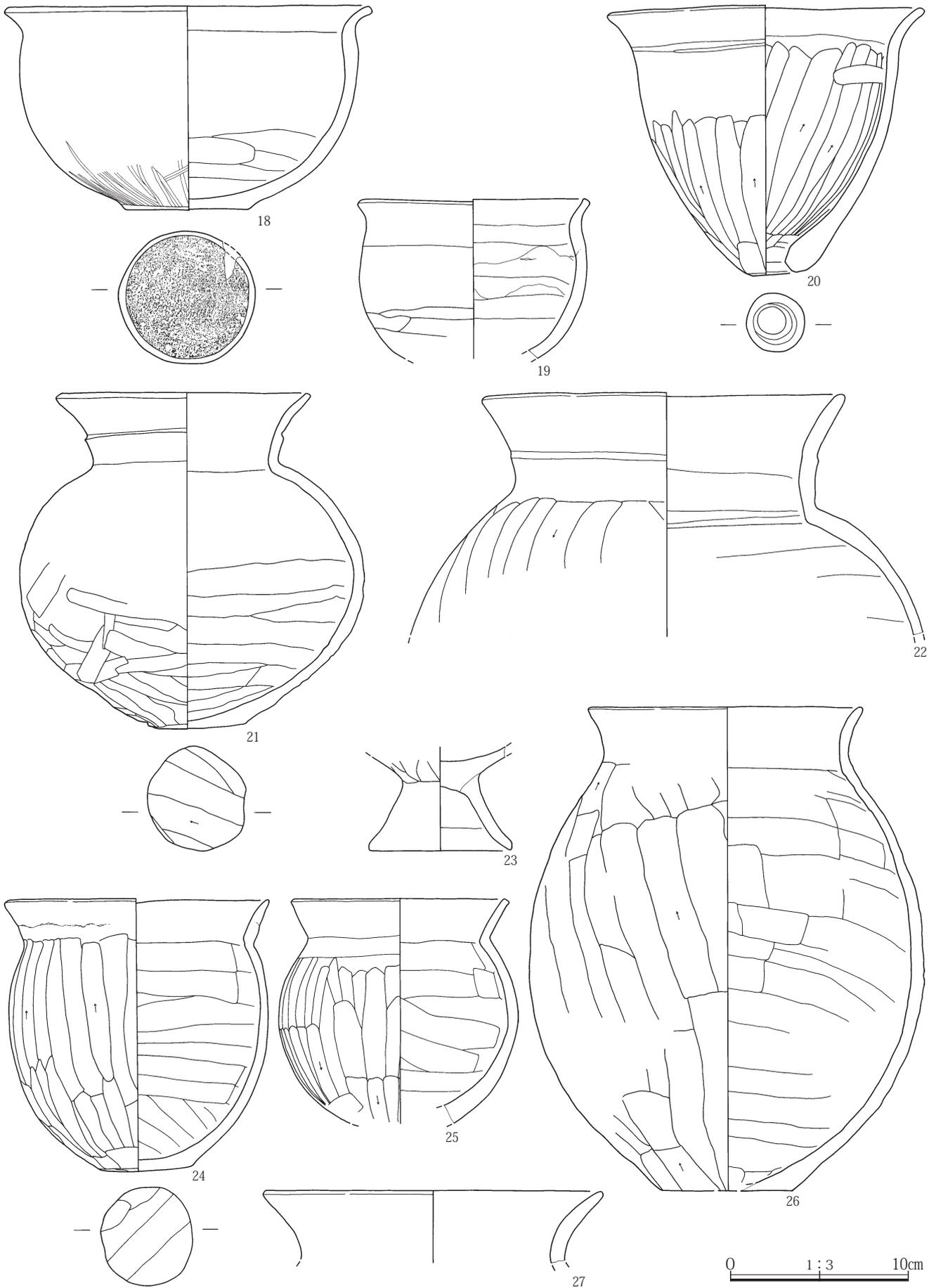
第52図 46号竪穴建物平面図・土層断面図・掘方図・カマド図他

□ 南側を想定している。想定入口付近には、径15cm、深さ13cmのP 2があり、入口に伴う梯子を据える穴と推定している。貯蔵穴(P 1) 貯蔵穴P 1は、長辺51cm、短辺48cm、深さ51cmの平面隅丸長方形である。カマドカマドは、焚口～煙道長120cm、焚口幅80cm新旧のカマドが確認できた。カマドの構築の段階を明らかにすることができた。土器を袖の芯に埋め込んで構築している。東の袖には、杯Cも入るが、小型壺・甌・椀・小型壺を埋め込んでいる。西袖には、袖先には小型甕を埋め込んでいる。東袖中央部には小型甕(第54図25 PL.266)の破砕した上に、坏CⅡ(第53図15 PL.265)が載せてあった。

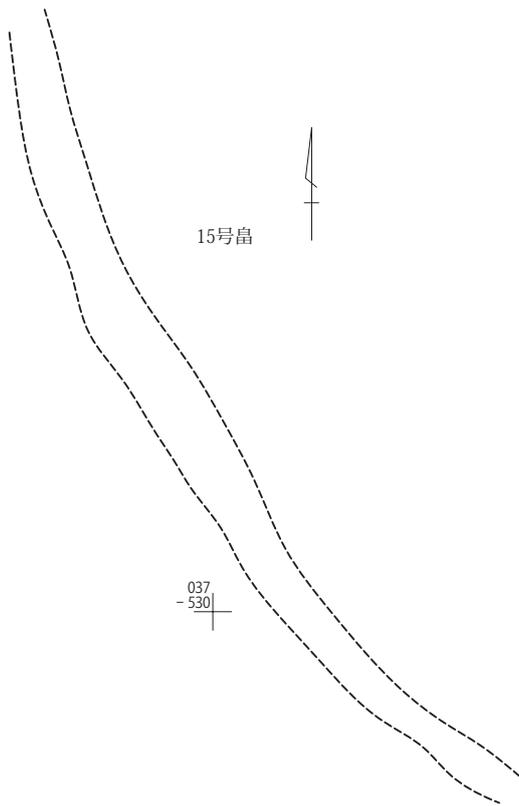
また、東袖奥には壺(第54図21 PL.266)の口辺に椀(第54図18 PL.266)を置いて、いずれも素の上から土を張り込んでいる。新しい段階のカマドは煙道を掘り替えて造られている。出土遺物(第53・54図 PL.265・266) 杯A少数と多数の杯Cがある。杯AはⅢ類が多く、杯CはⅡ類がやや多めである。椀FⅠ・甌A・小形壺B①・壺A①・小形甕B-Ⅰ①②・甕Dと多様な土器群が出土している。須恵器の出土は無い。年代 Hr-FA直下の畠の造成の前にはほぼ平坦になる形で埋まっているが、須恵器模倣杯が中心となる組成などから、5世紀後半～末に比定される。



第53図 46号竪穴建物出土遺物図1



第54図 46号竖穴建物出土遺物図2



(5) 畠・土坑・ピット

15号畠(第55図)

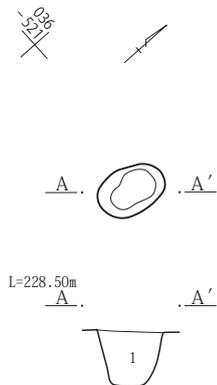
畝状の痕跡が認められたが、畠の畝の痕跡の可能性はあるという所で留めておく。幅20～36cm、高さはほんの少し盛り上がるのみで、現存長4.9m+である。

993号土坑(第55図 PL.34) 長径87cm、短径80cm、深さ18cmの平面楕円形の浅い土坑である。

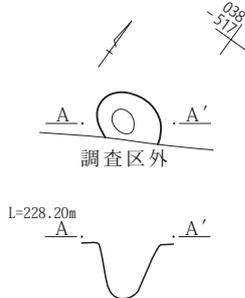
994号土坑(第55図 PL.34) 長径158cm、短径82cm+、深さ51cmの平面楕円形と想定される土坑で南側1/2を調査した。底面からの立ち上がりの急な土坑である。

603～608号ピット(第55図) これらのピット群の配置を検討した結果、掘立柱建物を復元することができなかった。ピットは、長径23～35cm、短径20～25cm、深さ19～58cmで、深さに関しては不統一である。

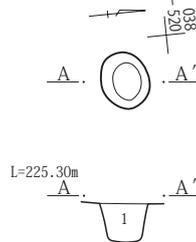
603号ピット



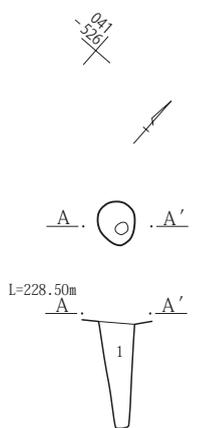
604号ピット



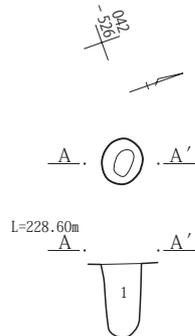
605号ピット



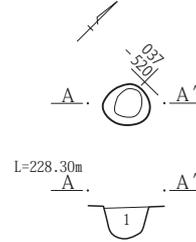
606号ピット



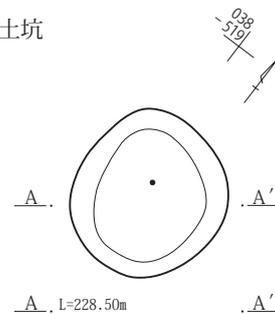
607号ピット



608号ピット

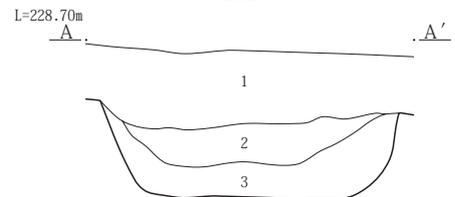
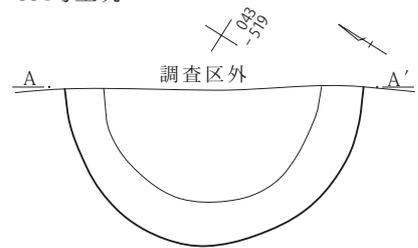


993号土坑



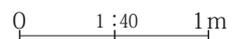
993号土坑
1. 黒褐色土(10YR2/3) 白色軽石含。

994号土坑



994号土坑
1. 古墳時代の畠耕作土。
2. 黒色土(10YR2/1) 白色軽石含。
3. 黒色土(10YR2/1) 白色・オレンジ軽石を含。
603号～608号ピット
1. 黒色土(10YR2/1) ローム粒・白色軽石を含。

第55図 畠・土坑・ピット平面図・土層断面図



(6) トレンチで確認した竪穴建物

(第56～58図 PL.29・34・35・266)

保存決定後、遺構確認のためのトレンチを10本設定調査し、結果4棟の竪穴建物が確認された。以下そのトレンチと建物の概要について述べる。

9区南部の屋敷地南部境界より南の傾斜地及び下の平坦面にある建物の埋没の可能性のある窪地を意識して、南北方向に西から1～5号トレンチ、東西方向に6～10号トレンチの計10トレンチを設定調査した。

48号竪穴建物(第56～59図 PL.29・34・266)

調査区南西端部、2・6・7号トレンチにより、存在が推定された。6号トレンチでは平面で遺構の北西部隅の可能性のあるラインが確認でき、2号トレンチで北壁の立ち上がりを断面で確認、7号トレンチで東壁のラインが平面確認できた。想定で、一辺が5m近い遺構である。出土遺物は、杯AⅡ・杯BⅢ・杯CⅡと、壺・甕、須恵器杯身、甕片が出土している。

47号竪穴建物(第56・57・59図 PL.34・35)

調査区南中央の3号トレンチで確認された。南側の壁の立ち上がりが断面で確認できている。辺の長さなどは未確認で推測である。甕が出土している。

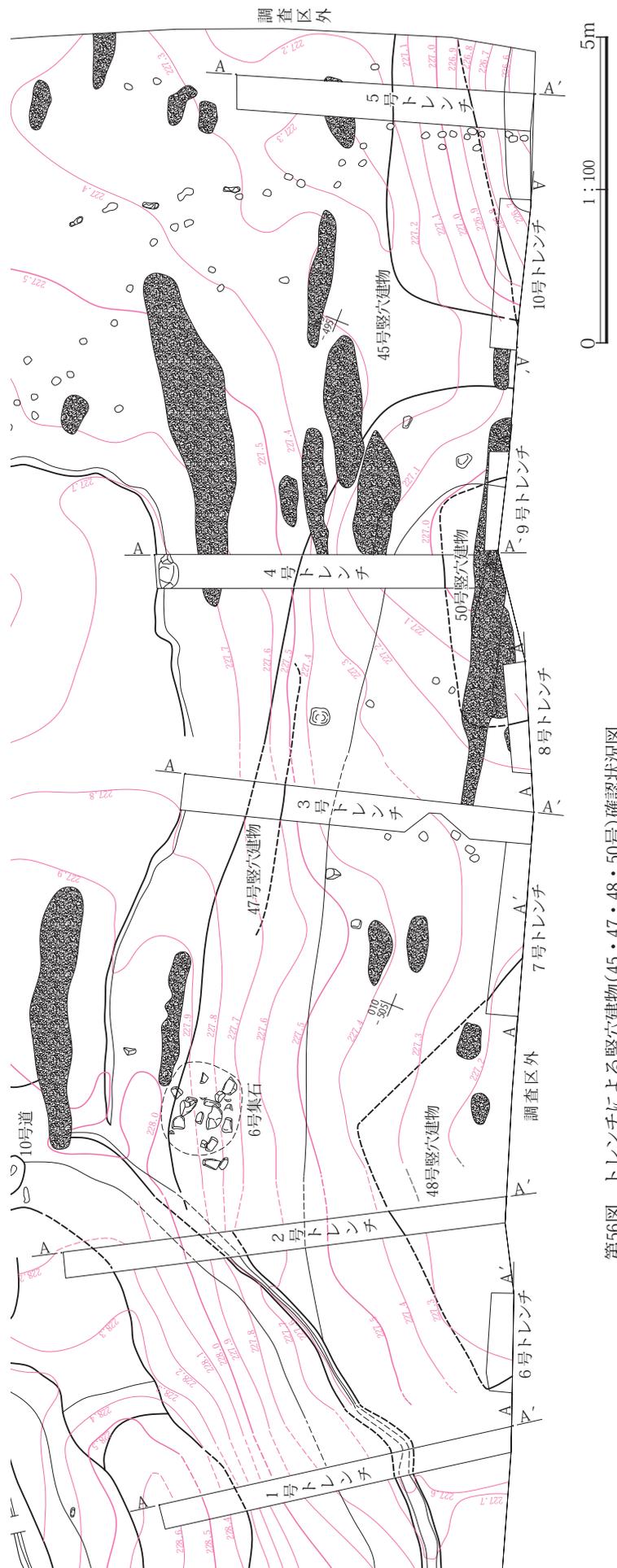
50号竪穴建物(第56・58・59図 PL.35・266)

調査区南端中央の4・8・9号トレンチで確認された。8号トレンチで、西側辺のラインを平面確認し、9号トレンチで、東側辺のラインを平面確認した。また、4号トレンチで、北壁の立ち上がりを断面で確認している。一辺が、推定4mとなる。杯BⅡと須恵器甕片が出土している。

45号竪穴建物(第56・58・59図 PL.35)

調査区南東端、5・10号トレンチで確認された。5号トレンチでは、北壁の立ち上がりを断面で確認し、10号トレンチで、西側辺のラインを平面で確認した。出土遺物は、土師器壺破片である。

以上の竪穴建物は、調査前よりある程度の窪みが見えていた。他の類例からすると、埋没竪穴建物があることが推定されたので、それぞれの推定埋没遺構がある箇所にトレンチを設定して確認したものである。それぞれの建物は、Hr-FAが、やや窪んだ状況で降下していることや、出土遺物の土師器・須恵器の様相から見て、5世紀後半を中心とした時期に比定される。



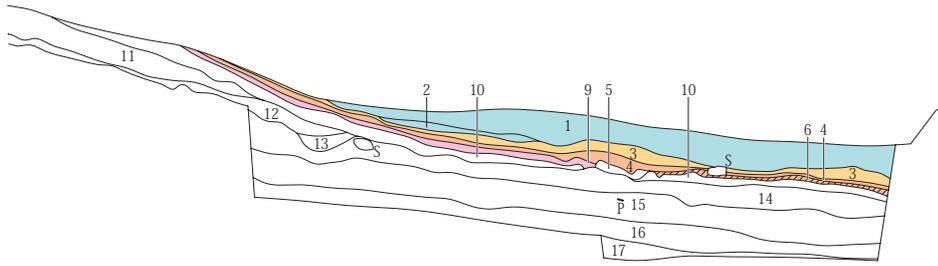
第56図 トレンチによる竪穴建物(45・47・48・50号)確認状況図

第三章 発見された遺構と遺物

1号トレンチ

A, L=228.80m

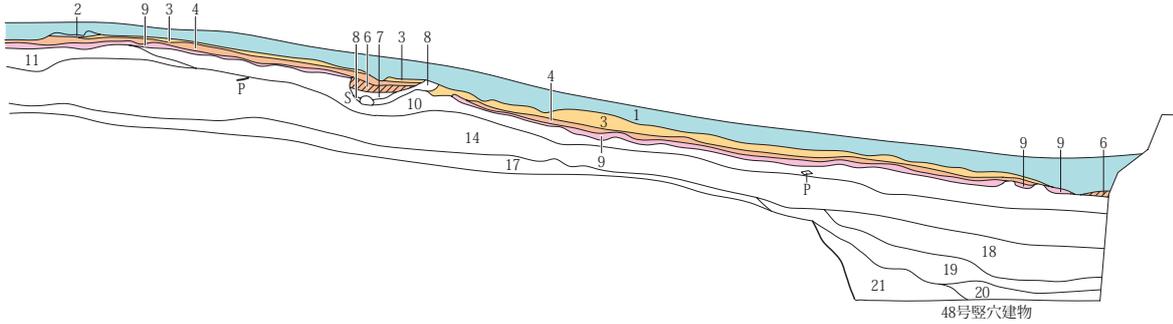
A'



2号トレンチ

A, L=228.50m

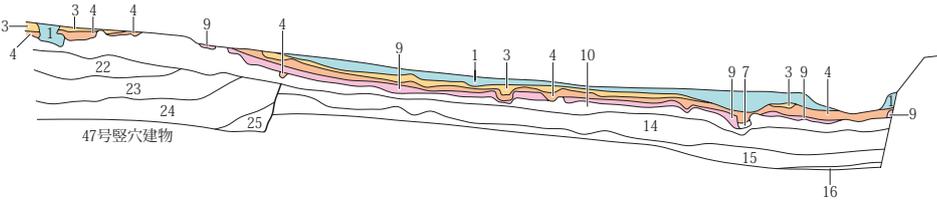
A'



3号トレンチ

A, L=228.00m

A'



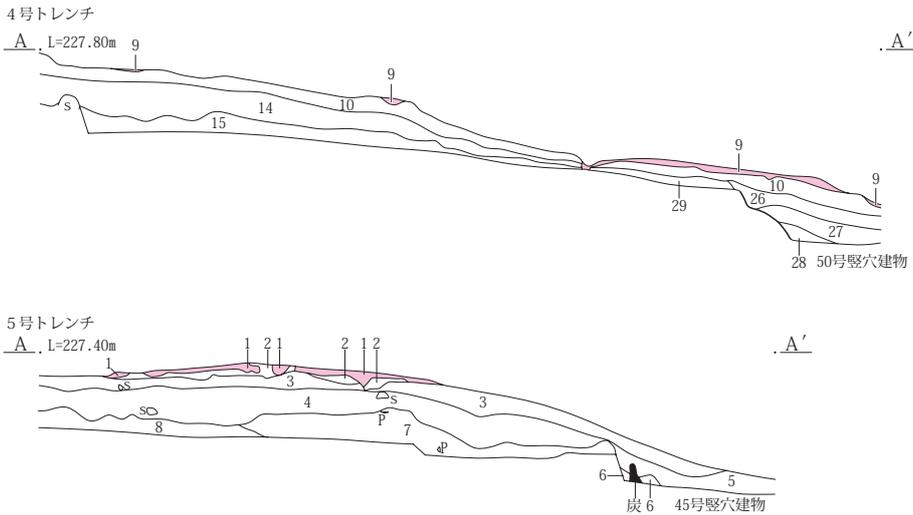
9区1～4号FA下遺構確認トレンチ

1. FA(S₇)
2. FA(S₇とS₃の混土)
3. FA(S₃上部)
4. FA(S₃下部)
5. 暗褐色土(10YR3/3)FA(S₃)を含む。炭化物微量。
6. FA(S₃上部と下部)
7. FA(S₃)、黒褐色土の混土。
8. 黒褐色土(10YR2/2)焼土粒・S₁を含む。しまり弱い。
9. FA(S₁)
10. 灰黄褐色土(10YR4/2)ローム粒・炭化物小片を含む。締まり弱い。4面確認面
11. 黒褐色土(10YR3/2)ローム1mm塊・ローム粒少量。42号竪穴建物周堤。
12. にぶい黄褐色土(10YR4/3)ローム3～5mm塊多量。
13. 黒褐色土(10YR3/1)ローム1cm塊多量。締まり弱い。42号竪穴建物周堤。
14. 黒褐色土(10YR3/2)黄褐色粒を少量含む。5面

15. 灰黄褐色土(10YR4/2)黒ボク土上部縄文面
16. 褐灰色土(10YR4/1)黒ボク土下部縄文面
17. にぶい黄褐色土(10YR4/3)ローム粒多量。ローム漸移層。
18. 黒褐色土(10YR3/2)締まりやや弱い。
19. 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒少量。締まりやや弱い。
20. 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒・塊・炭化物を含む。締まりあり。
21. 暗褐色土(10YR3/3)ローム塊を含む。18～21は48号竪穴建物
22. 黒褐色土ローム(10YR3/2)14層に類似、酸化鉄分を含む。炭化物を含む。締まりやや弱い。粘性あり。
23. 黒褐色土(10YR2/3)締まりやや弱く粘性あり。
24. 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒少量・黄褐色土粒5mm多量。締まりやや弱く粘性あり。
25. にぶい黄褐色土(10YR4/3)ローム粒少量・黄褐色土粒少量。炭化物を含む。締まり弱く粘性あり。
26. 黒褐色土(10YR3/1)褐色土小塊を含む。締まりやや弱い。
27. 暗褐色土(10YR3/3)ローム粒少量。小礫・炭化物を含む。締まり弱い。
28. にぶい黄褐色土(10YR4/3)ローム小塊・粒多量。締まり弱い。
29. 黒褐色土(10YR3/2)14層に類似小礫を含む。カマド煙道部の上か。締まりややあり。26～29は50号竪穴建物

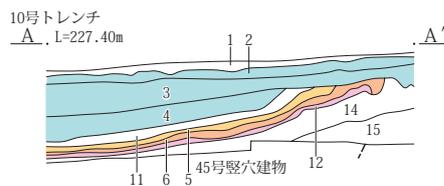
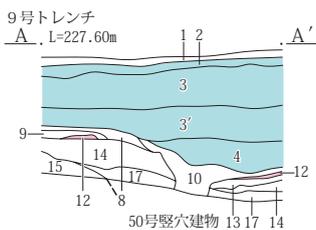
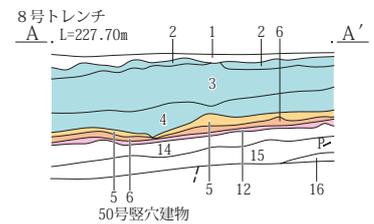
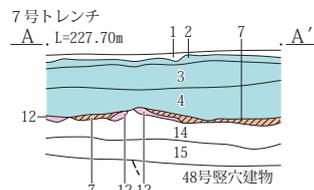
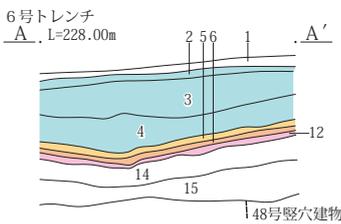
0 1:50 2m

第57図 1～3号トレンチ土層断面図



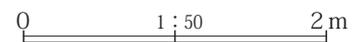
9区5号FA下遺構確認トレンチ

1. FA₁
2. 灰黄褐色土(10YR5/2)S₁と3層の灰黄褐色土のまじり。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)小円礫(φ 3～20mm) 2%含む。
4. 黒褐色土(10YR3/2)小円礫(φ 1～60mm) 2%含む。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2)ロームブロック(φ 1～10mm)極少量含む。
6. 暗灰黄色土(2.5Y5/2)ローム土中心。ロームブロック(φ 3～20mm) 5%含む。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) 8層に比べてやや黒味あり。弥生土器含む。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2)亜角礫(φ 3～10mm)極少量含む。淡クロ相当層



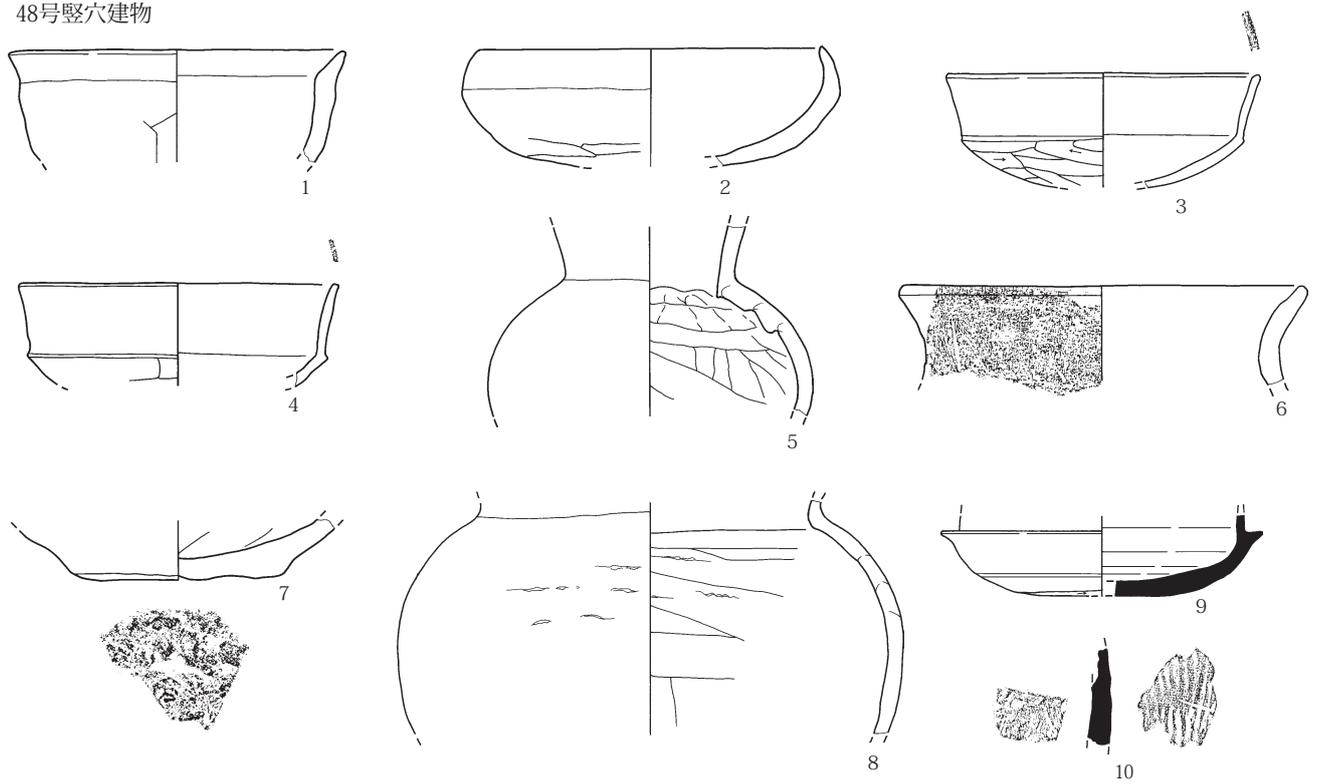
9区6～10号FA下遺構確認トレンチ

- | | |
|--|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土(10YR3/1)にぶい黄褐色土を含む。締まりあり。2面確認面 2. FA(S₉) 2次堆積層 3. FA(S₇)細粒 3'. FA細粒と粗粒 4. FA(S₇)粗粒、小礫を含む。 5. FA(S₃)上部 6. FA(S₃)下部 7. FA(S₃)上部と下部 8. FA(S₃)と黒褐色土を含む。 9. FA(S₃)とS₁ | <ol style="list-style-type: none"> 10. FA(S₇)黒褐色土を含む。 11. FA(S₇)とS₃ 12. FA(S₁) 13. FA(S₁)黒褐色土の混土 14. 黒褐色土(10YR2/2)炭化物少量、黄橙色粒を含む。4面確認面 15. 黒褐色土(10YR3/2)ローム小塊・粒を含む。5面 16. 灰黄褐色土(10YR4/2)黒ボク土上部縄文面 17. 暗褐色土(10YR3/3)ローム小塊少量、小礫・炭化物を含む。1～4号トレンチ27層 |
|--|--|



第58図 4～10号トレンチ土層断面図

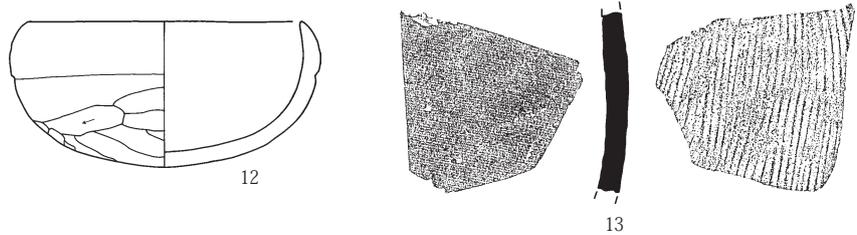
48号竪穴建物



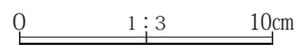
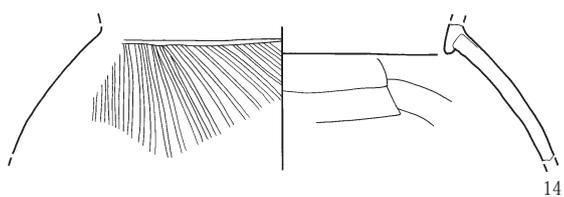
47号竪穴建物



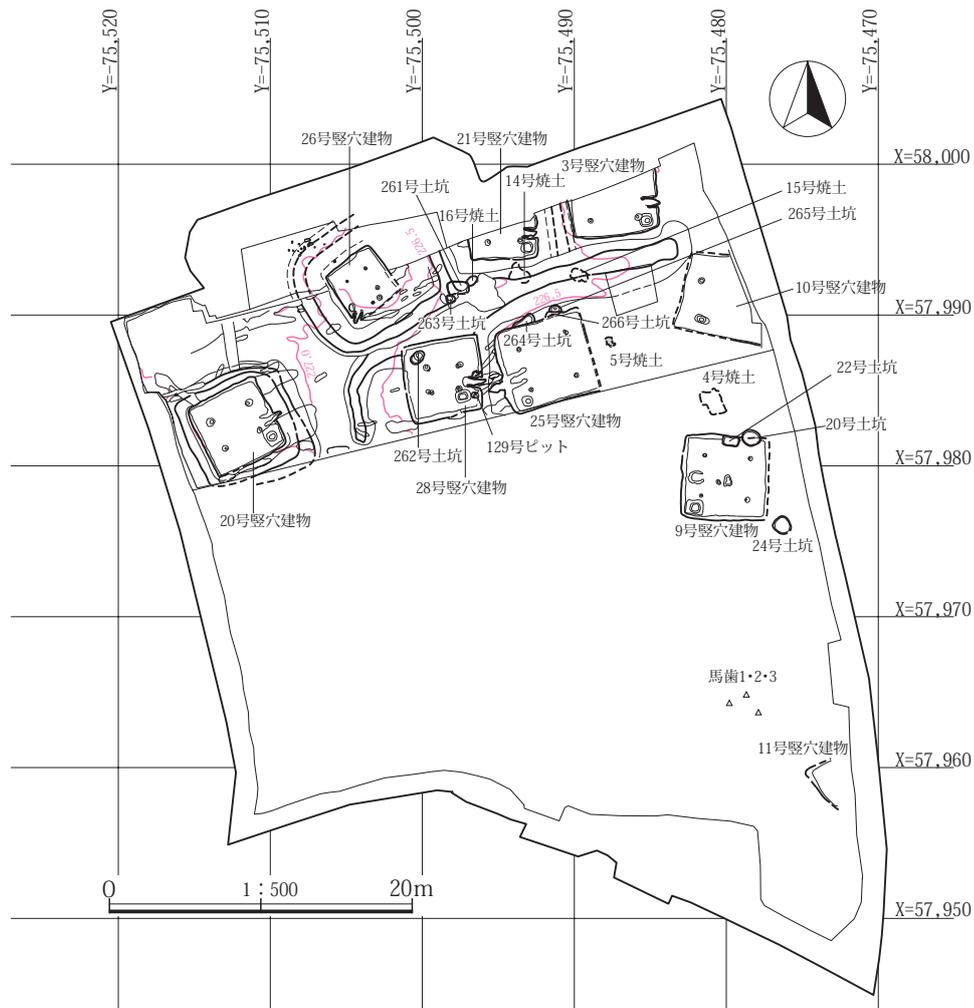
50号竪穴建物



45号竪穴建物



第59図 45・47・48・50号竪穴建物出土遺物図



第60図 4区5面遺構全体図

4 4区5面遺構(第60図 PL.36)

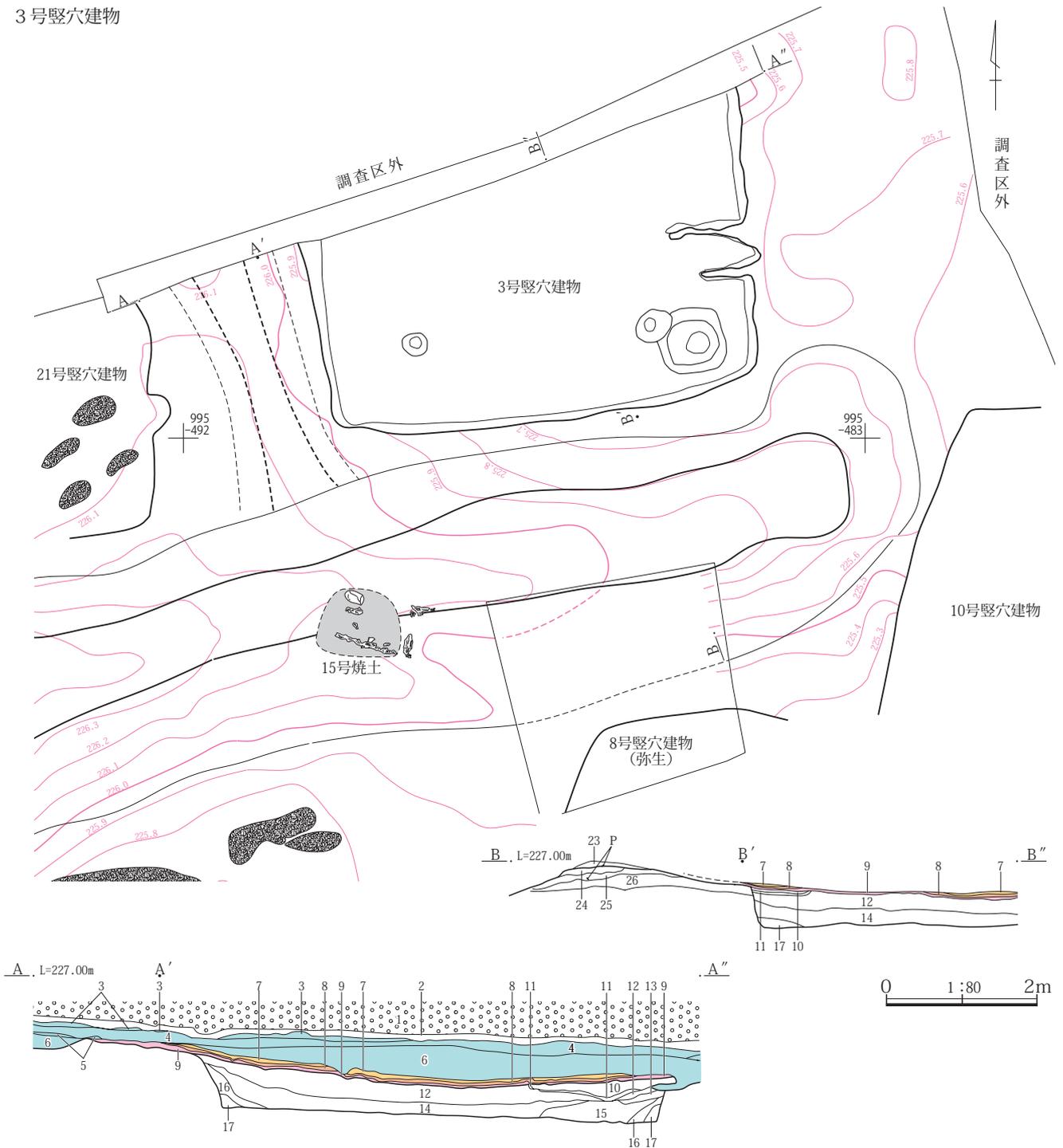
4区は、保存が決定する前に、北部端及び東部を調査しており、特に北部は旧石器時代まで調査を行った。限られた範囲の調査であるが、甲を着装した人物がいた地点の数年～数十年前の風景を知ることができる重要な情報を得ることができた。竪穴建物を9棟確認しているが、特に北部に7棟が集中し、大きな周堤を数棟の建物が共有する形で使用されている。それは、北端にある西から26・21・3号竪穴建物の東西方向の連なりに対峙するように、南側に、西から28・25号竪穴建物が並置されており、その2列の竪穴建物群の間に大型の周堤が東西方向に造成されている。島の耕作ではっきりしなくなった東端部を除き、東西方向に長さ29.4m、幅1.6～3.4m、高さ0.1～0.4mの周堤が最後南側に向けてL字形に屈曲する形で造られている。建物の中に入る堆積土の厚みから、Hr-FA降下前それほど遡らない20号竪穴建物が少し西に離れて独自の周堤を保有している。東側にも周堤を共有

する一群と少し離れて10号竪穴建物が、南側には、9号・11号竪穴建物が周堤などの痕跡を残さず検出された。ムラの中心は、調査区北部で竪穴建物が集中して建てられた箇所にあると考えている。

(1) 3号竪穴建物(第61～66図 PL.37・38・267・268)

位置 調査区の北端部東にある。21号竪穴建物が西に、周堤を挟んでやや南西に25号竪穴建物がある。**遺存状況** 南側1/2程調査している。**埋土状況** 廃棄後、やや窪みが残った状態でHr-FAが堆積している。**規模** 東西6.0m、残存南北辺4.1m+、壁高60～67cmで、主軸方位はN-83°-Eである。**掘方** カマド前に幅広く楕円形状に掘削した長径2.35cm、短径1.6cm、深さ1～6cmの床下土坑があり、湿気抜きで掘削したものと推定する。**周堤** 南側と西側に周堤痕跡がある。南側は、西隣の21・26号竪穴建物、南の25・28号竪穴建物と共有するもので、長8.8m+、幅2.6～3.4m、高さ10～40cmの周堤痕跡である。東西方向に延びていくもので、その一

3号竪穴建物



3号竪穴建物

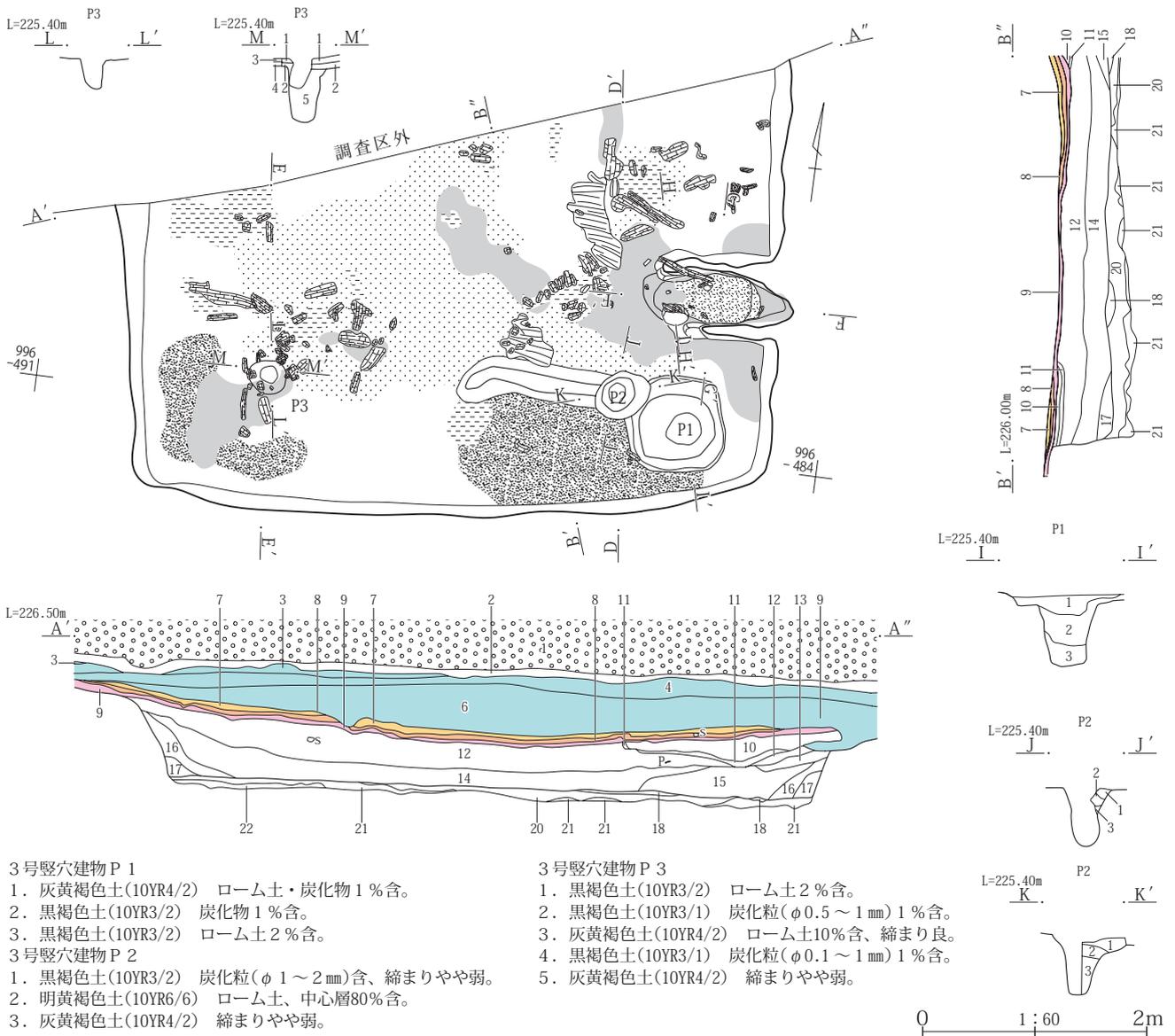
1. FP
2. 黒褐色土(7.5YR3/1) FAが土壌化した層、下半部はやや色調が淡。
3. FA(S₁₃)浅黄橙色土(7.5YR8/3)やや粘質。
4. FA(S₁₂)火碎流。
5. FA(S₇) 浅黄色土、火山灰粘性。
6. (FA) S₇明褐灰色土、火碎流。
7. FA(S₃)上部 火山灰、粘性。
8. FA(S₃) 火碎流。
9. FA(S₁) 火山灰、粘性。
10. 黒褐色土(7.5YR2/2) 灰褐色土粒僅、橙色土粒少量含。
11. 明褐色土(7.5YR5/6) 鉄分沈着層。
12. 黒褐色土(7.5YR2/2) 縮まりあり。
13. 暗褐色土(7.5YR3/3) 灰褐色土多量含。
14. 黒褐色土(7.5YR2/2) 灰褐色土粒少量、橙色土粒少量含、縮まりあり。

15. にぶい褐色土(7.5YR5/3) 灰褐色土粒多量、白色土粒僅含、橙色土粒少量含。
16. 黒色土(7.5YR2/1) 縮まり良。
17. 黒褐色土(7.5YR3/2) 灰褐色土粒少量含、縮まり良。
18. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土80%含、非常に縮まり良。
19. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm)含、縮まり良。
20. 黒褐色土(10YR3/2) 黒褐色土(10YR3/1)・ローム土ブロック状に含、白色土粒(φ 1mm) 2%含。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm) 1%含、黒褐色土(10YR3/2) ブロック状に含。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm)・ローム粒(φ 1mm)極少量含。
23. 黒褐色土(10YR3/2) 白色土粒(1%)、遺物含。
24. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ 1mm) 2%含。
25. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ 1~2mm) 2%含、遺物含。
26. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1mm) 1%含。

第61図 3号竪穴建物全体図・土層断面図

部を利用している。西側の21号竪穴建物との境には、幅1.6m、高さ8cmほどの少しの高まりがあり、周堤痕跡と推定する。東側は後の段階の畝の耕作により掘削されて、周堤の痕跡は残らなかったものと推定する。**壁際溝** 無い。**柱 穴** P2、P3が、長径34・50cm、短径30・40cm、深さ51・55cmで、南辺に東西に並ぶ。P2はP1(貯蔵穴)の肩部に位置している。**入 口** 南側と推定する。推定入口前付近から硬化面がある。**硬化面** 南側から中央部にかけて硬化面がある。**カマド** 焚口〜煙道長135cm、焚口幅22cmで、芯に石を置き、周りに粘土を被せて袖・天井を作る。天井石の一部が残っていた。**貯蔵穴** 一辺87cm、深さ67cmの隅丸方形のもので、内部より遺物は出土しなかった。この貯蔵穴の北西にある柱穴の脇から、土堤状の東西に延びる長さ1.4m、幅40cm、高

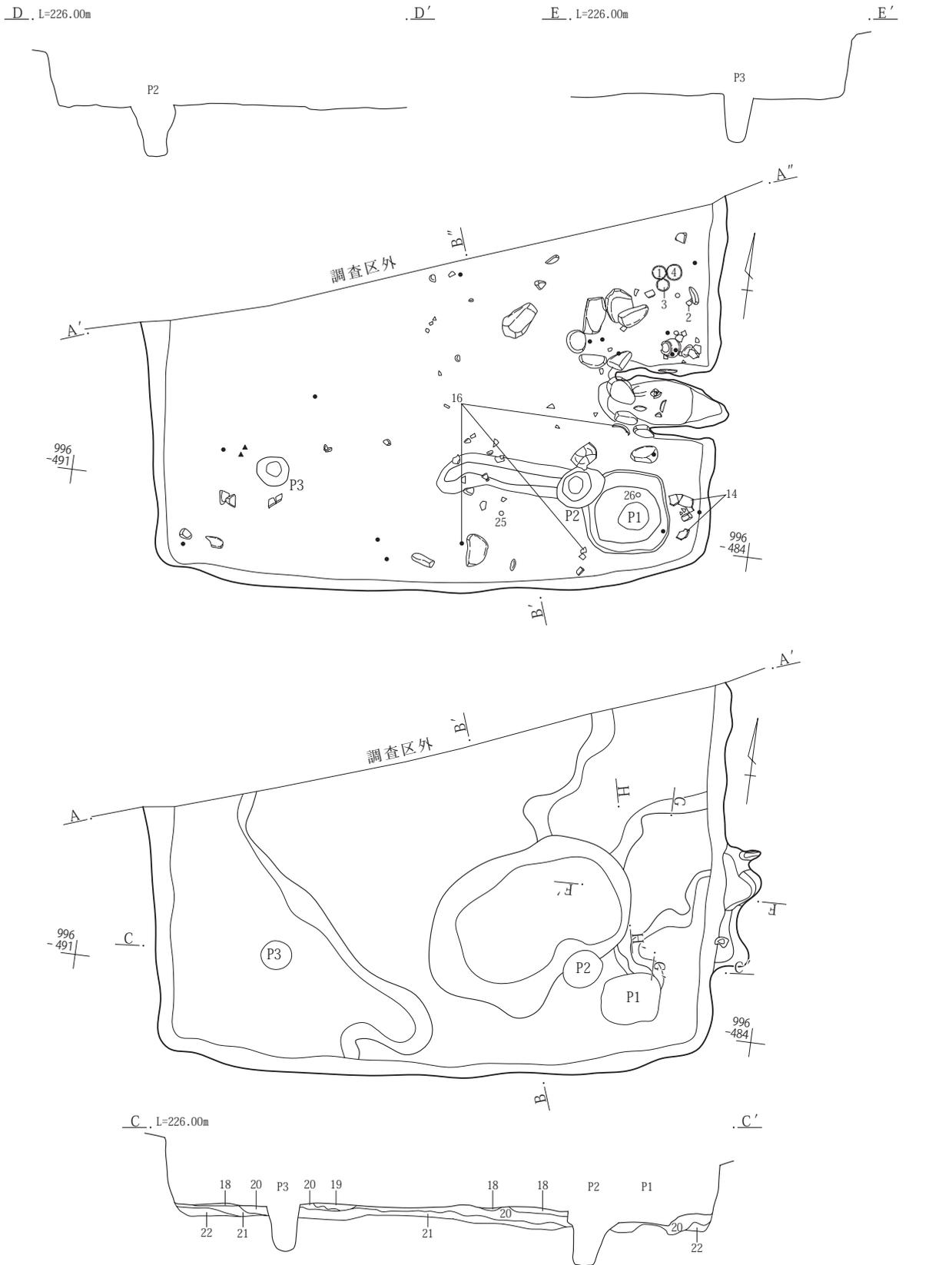
さ1〜4cmの堤状のものがあり、先端がやや南に屈曲している。貯蔵穴の西側、堤の南側から南壁に当たる範囲にローム土を貼り込んでいて、置台を意識して造作しているものと思われる。**炭化材** この建物で特に特徴的なのは、非常に多くの炭化材や有機物が出たことである。カマド周辺からは、多数の炭化材が、また西側中央にも多くの炭化材と炭が出ている。焼土は、カマド前面や、カマド左右袖部外側にある。炭化物はクリ2点、コナラ節3点、クヌギ節1点が確認されている。燃料木の可能性がある。カマド向かって左横には、コナラ2点があり、カマド前には茅と思われる草本類が焼土とともに出ている。燃料か屋根材であろう。南西側の柱穴P3の周りからは、多くのコナラ節が出ている。**種 実** カマド掘方よりムクロジの可能性のある種実が出土している。**赤色**



- 3号竪穴建物P1
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・炭化物1%含。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物1%含。
 3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。
- 3号竪穴建物P2
1. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒(φ1〜2mm)含、締まりやや弱。
 2. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム土、中心層80%含。
 3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱。

- 3号竪穴建物P3
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。
 2. 黒褐色土(10YR3/1) 炭化粒(φ0.5〜1mm)1%含。
 3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含、締まり良。
 4. 黒褐色土(10YR3/1) 炭化粒(φ0.1〜1mm)1%含。
 5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱。

第62図 3号竪穴建物炭化材等出土状況図・土層断面図



3号竪穴建物

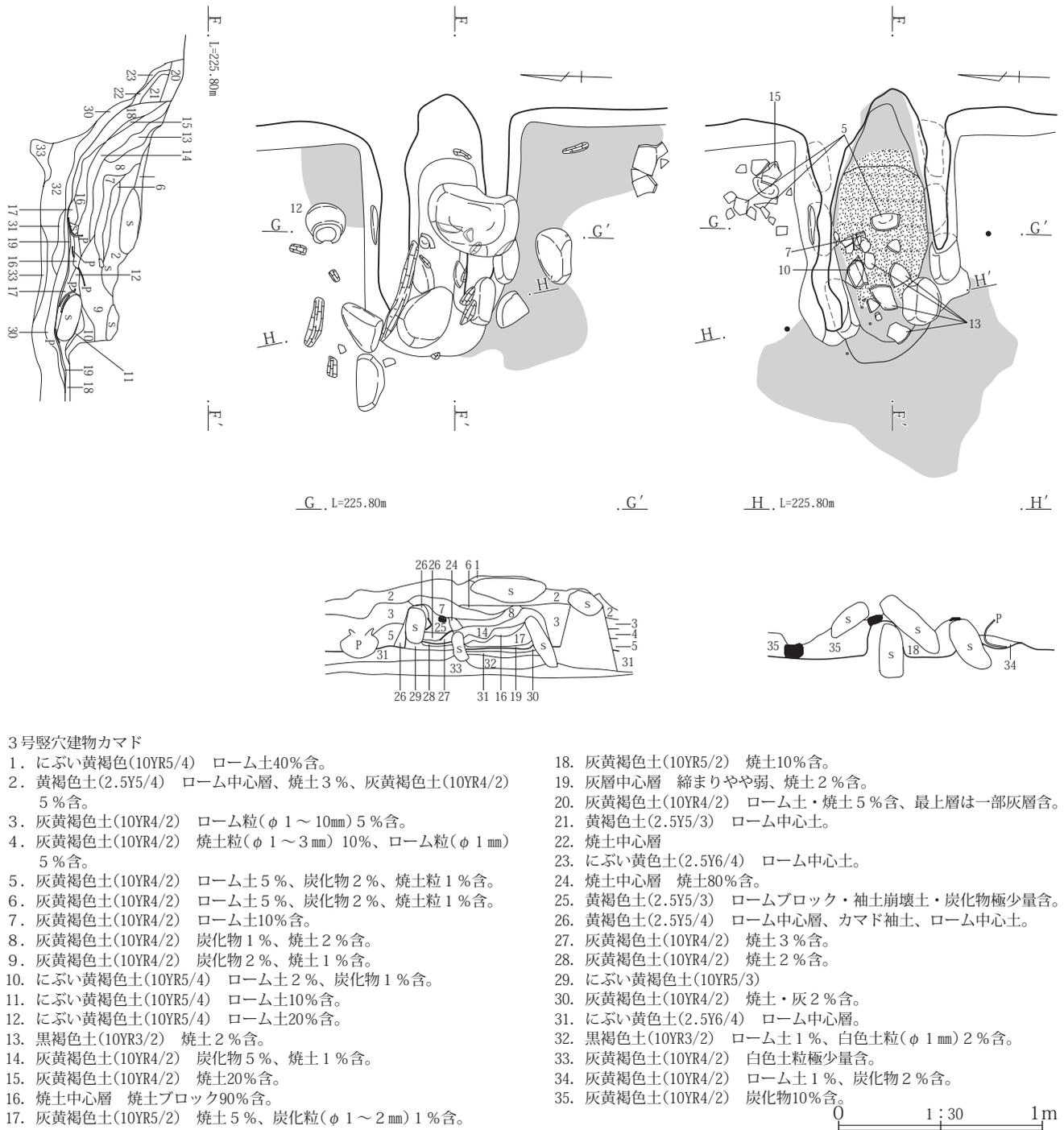
- 18. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土80%含、非常に締まり良。
- 19. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm)含、締まり良。
- 20. 黒褐色土(10YR3/2) 黒褐色土(10YR3/1)・ローム土・ブロック状に含、白色土粒(φ 1mm) 2%含。
- 21. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm) 1%含、黒褐色土(10YR3/2)ブロック状に含。
- 22. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒(φ 1mm)、ローム粒(φ 1mm)極少量含。

0 1:60 2m

第63図 3号竪穴建物平面図・掘方図・土層断面図・断面図

顔料 径3～5mm顆粒状のベンガラの可能性のあるものが建物西側P3の西から出た。分析の結果、赤土を主とする、非パイプ状ベンガラであった。**出土遺物**(第65・66図 PL.267・268) 土器は、カマド向かって左袖側に土師器杯BⅡ2個に杯AⅡの杯1個の計3個がまとめて置かれていた。さらに小型甕AⅠ②が袖ぎりぎりに沿うようにして置かれていた。おそらくカマドに置かれていたと考えられる甕D③が破碎されてカマドの左右の袖に分か

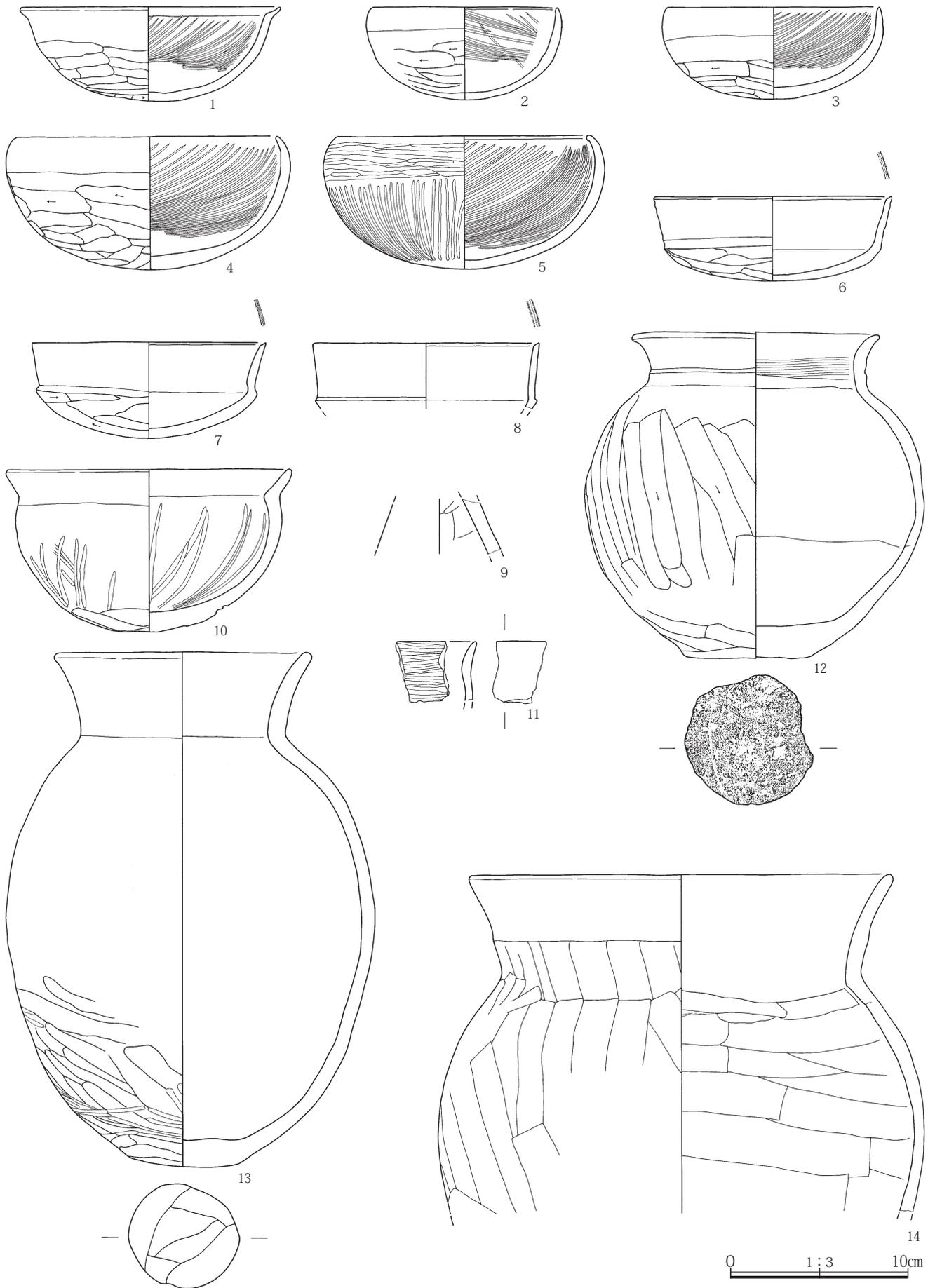
れて出土し、貯蔵穴の周りには、土師器大甕が破碎して出土している。杯Cも出ているが床直では無い。須恵器の甕片がいくつか出土している。滑石製白玉が2点出土している。**年代** 杯A・杯Bが主で、甕も少し古相を呈するので、5世紀後半と推定する。



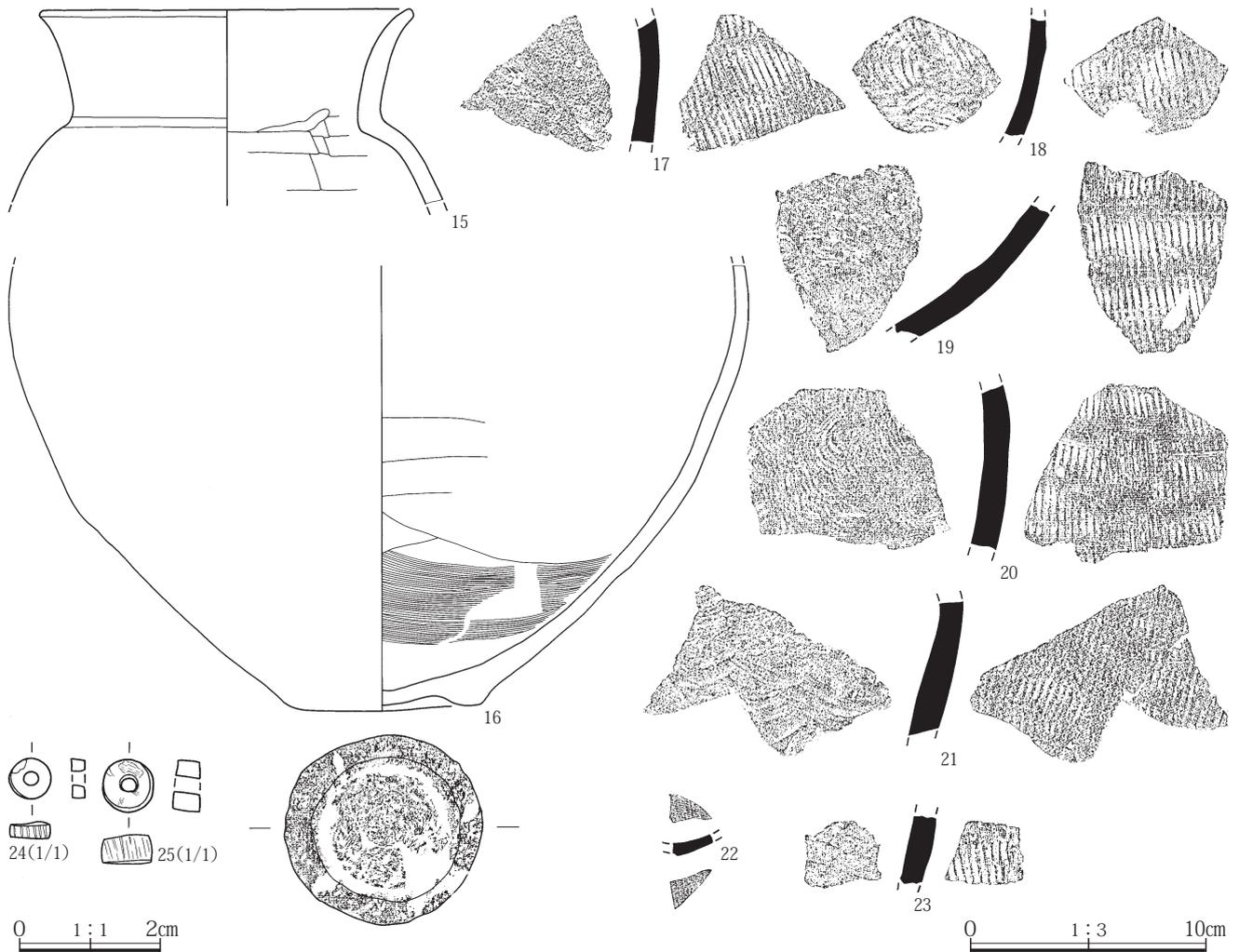
3号竪穴建物カマド

1. にぶい黄褐色(10YR5/4) ローム土40%含。
2. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム中心層、焼土3%、灰黄褐色土(10YR4/2) 5%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ1～10mm)5%含。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒(φ1～3mm)10%、ローム粒(φ1mm)5%含。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、炭化物2%、焼土粒1%含。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、炭化物2%、焼土粒1%含。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物1%、焼土2%含。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物2%、焼土1%含。
10. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土2%、炭化物1%含。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土10%含。
12. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土20%含。
13. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土2%含。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物5%、焼土1%含。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土20%含。
16. 焼土中心層 焼土ブロック90%含。
17. 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土5%、炭化粒(φ1～2mm)1%含。
18. 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土10%含。
19. 灰層中心層 縮まりやや弱、焼土2%含。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・焼土5%含、最上層は一部灰層含。
21. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム中心土。
22. 焼土中心層
23. にぶい黄色土(2.5Y6/4) ローム中心土。
24. 焼土中心層 焼土80%含。
25. 黄褐色土(2.5Y5/3) ロームブロック・袖土崩壊土・炭化物極少量含。
26. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム中心層、カマド袖土、ローム中心土。
27. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土3%含。
28. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土2%含。
29. にぶい黄褐色土(10YR5/3)
30. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・灰2%含。
31. にぶい黄色土(2.5Y6/4) ローム中心層。
32. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%、白色土粒(φ1mm)2%含。
33. 灰黄褐色土(10YR4/2) 白色土粒極少量含。
34. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土1%、炭化物2%含。
35. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物10%含。

第64図 3号竪穴建物カマド図・土層断面図



第65図 3号竪穴建物出土遺物図1



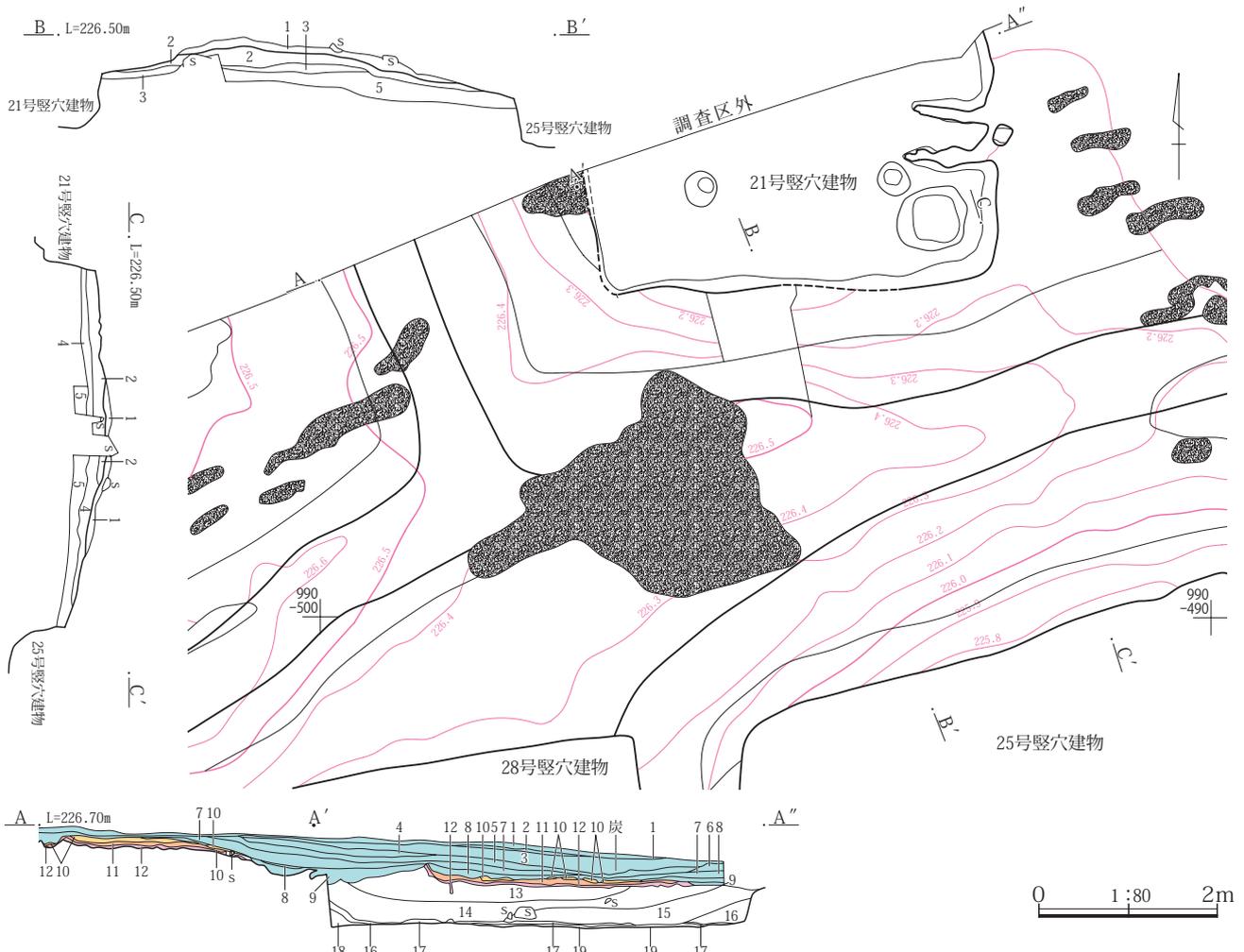
第66図 3号竪穴建物出土遺物図2

(2)21号竪穴建物(第67～70図 PL.39・40・268)

位置 調査区北端中央部で、東隣に周堤を共有する3号竪穴建物、西隣に後続する時期の26号竪穴建物がある。**遺存状況** 南側ほぼ半分を調査した。**埋土状況** 廃棄後、やや窪みが残った状態でHr-FAが降下している。埋没土西側の13層が山状に盛り上がるが緻密である。S₇に伴う線状衝撃によるものである。**規模** 東西4.6m、南北2.86m+、壁高55～59cmで、主軸方位はN-88°-Eである。**掘方** 西側を少し広く掘削している。**周堤** 東西方向は、3・26号竪穴建物と共有し、東の3号竪穴建物の間には、幅1.6m、高さ8cmほどの少しの高まりがあり、周堤痕跡と推定する。西側の26号竪穴建物との間には明瞭な周堤痕跡が確認できた。幅1.9m、高さ10cmほどである。**壁際溝** 無し。**柱穴** P2、P3の2本確認できた。長径39cm、短径33～37cm、深さ38～50cmである。**入口** 他の建物からの類推から南側と推定する。**硬化面** 柱間内部の空間とカマド付近に

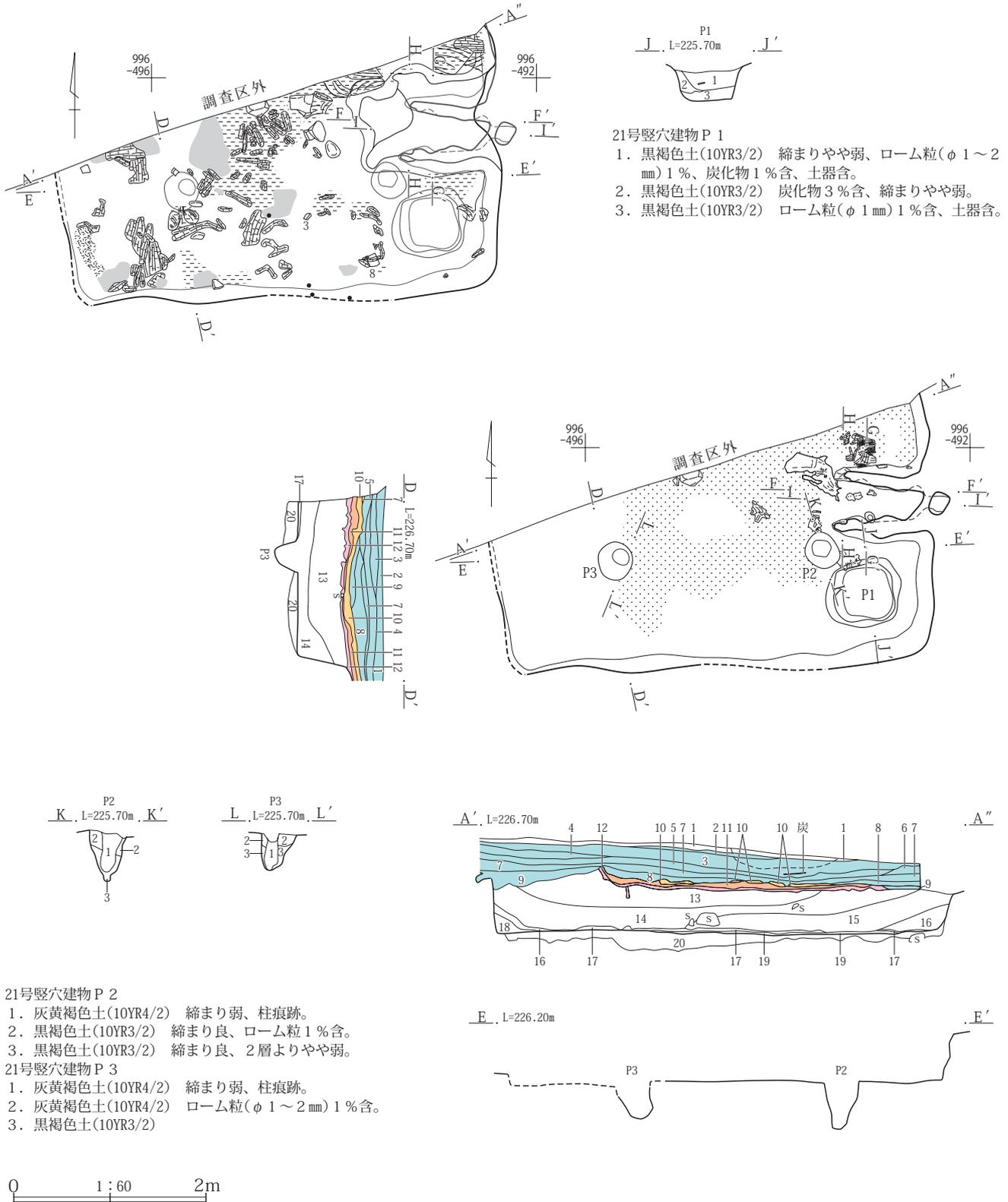
ある。**カマド** 焚口～煙道長165cm、焚口幅50cmで、カマド袖部芯に石をそれぞれ置いて、周りに土を被せている。カマドには甕(第70図6・7 PL.268)が並列して置かれていた。**貯蔵穴**(P1) 長辺88cm、短辺70cm、深さ61cmの隅丸長方形状である。**炭化材** 床面近くに多数出土していることから、焼けた建物と想定される。建物床面中央部から西辺部、カマド北袖付近などに多く出ている。樹種同定の結果、コナラを中心にクヌギ・クリが部材として使用され、屋根材などのカヤも出土している。**赤色顔料** 赤色顔料粒が1片出土している。**出土遺物**(第70図 PL.268) カマドにある甕は、甕D②2個と小型甕B①がある。杯AⅡ・杯CⅡの他、甕と、須恵器甕破片がある。杯A・CともにⅡ類で新しい様相を呈している。第70図7のように長胴化した甕もある。**年代** 杯AⅡ・BⅡや甕の長胴化の形態から5世紀後半でも新しい時期と推定する。

第三章 発見された遺構と遺物

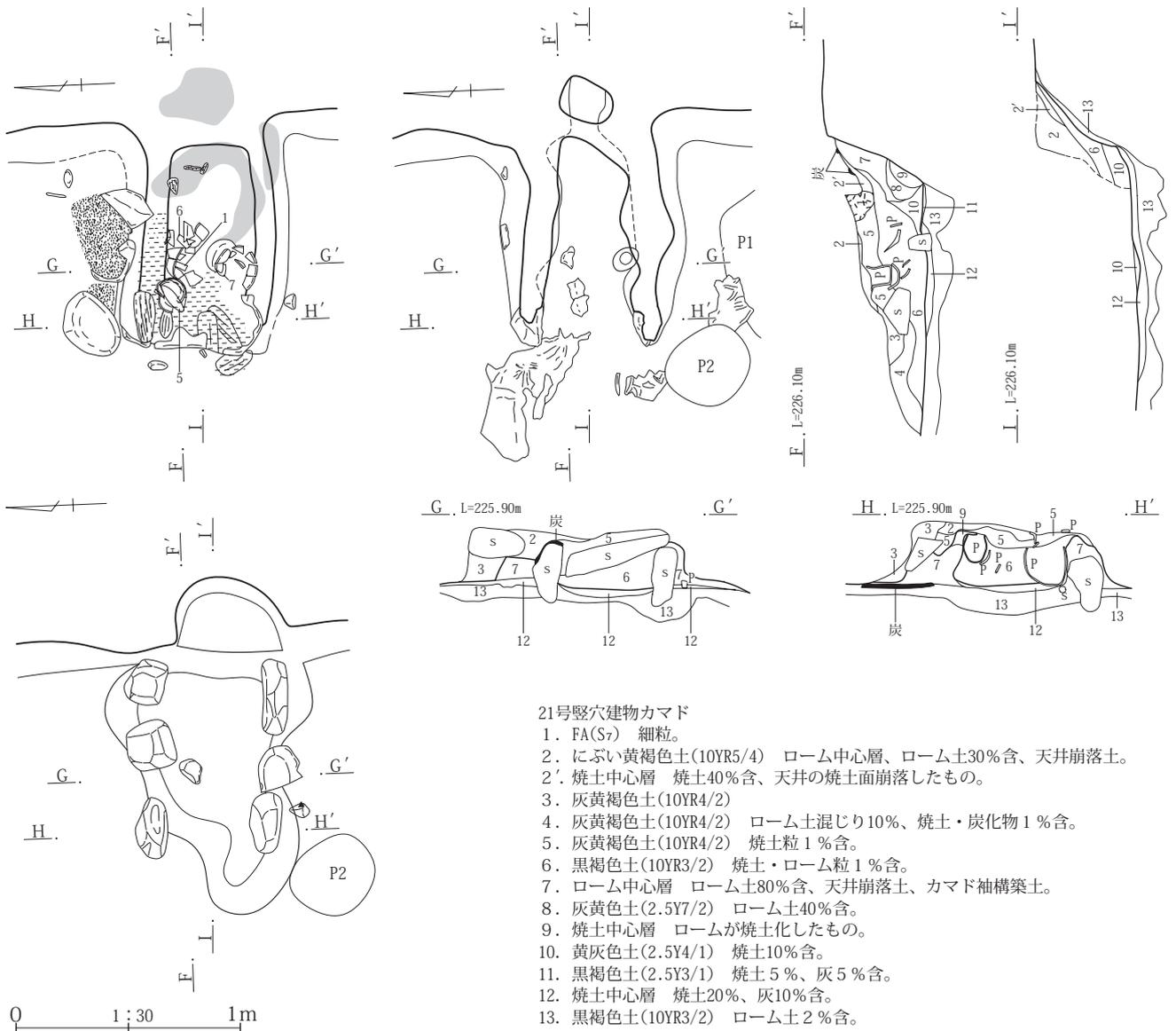


- 21号竪穴建物
1. FA(S₉) 2次堆積土。
 2. FA(S₇) φ 1～10mmラミナ状に堆積。
 3. FA(S₇) 細粒 φ 1～2mmラミナ状に堆積、炭化物含。
 4. FA(S₇) 細粒 φ 1～2mm含。
 5. FA(S₇) 粗粒 φ 1～15mm含。
 6. FA(S₇) 細粒 φ 1～2mm含。
 7. FA(S₇) 粗粒 φ 1～10mm不淘汰。
 8. 黄褐色土(2.5Y5/3) S₇により、S₃攪拌されたもの、S₇細粒多く含。
 9. 黄褐色土(2.5Y5/3) S₇により、S₃攪拌されたもの。灰黄色土混じる。
 10. FA(S₃)上部
 11. FA(S₃)下部
 12. FA(S₁)
 13. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒(φ 1～3mm)、炭化粒(φ 1～3mm) 1%含。
 14. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒(φ 1～20mm) 5%、炭化物・焼土 1%含。
 15. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土 2%、炭化物・焼土粒少量含。
 16. 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物・焼土10%含。
 17. 焼土・炭化物中心層
 18. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりややあり。
 19. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まり良、硬化面、床面。
 20. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱、焼土粒・ローム粒 1%含、床下フク土。
- 21号竪穴建物周堤
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ 1～2mm) 1%、白色土粒(φ 1～2mm) 1%、炭化物 2%、小礫(φ 1～10mm) 1%含。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1～2mm) 1%、白色土粒(φ 1～4mm) 1%含。
 3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ 1mm) 1%、焼土粒(φ 1～3mm) 3%、炭化物(φ 1～3mm) 1%含。
 4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒(φ 1mm)、ローム粒(φ 1～2mm) 2%含。
 5. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ 1～2mm)、焼土粒(φ 1～2mm) 1%含。

第67図 21号竪穴建物全体図・土層断面図

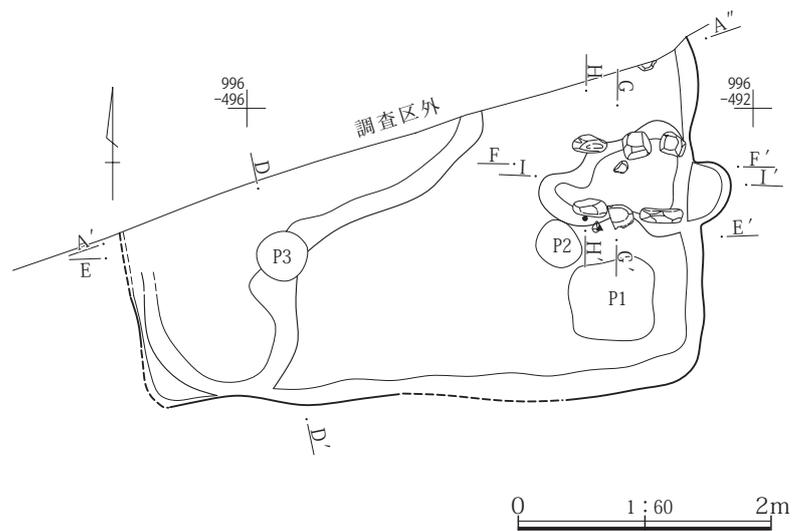


第68図 21号竪穴建物炭化材・遺物出土状況図・土層断面図

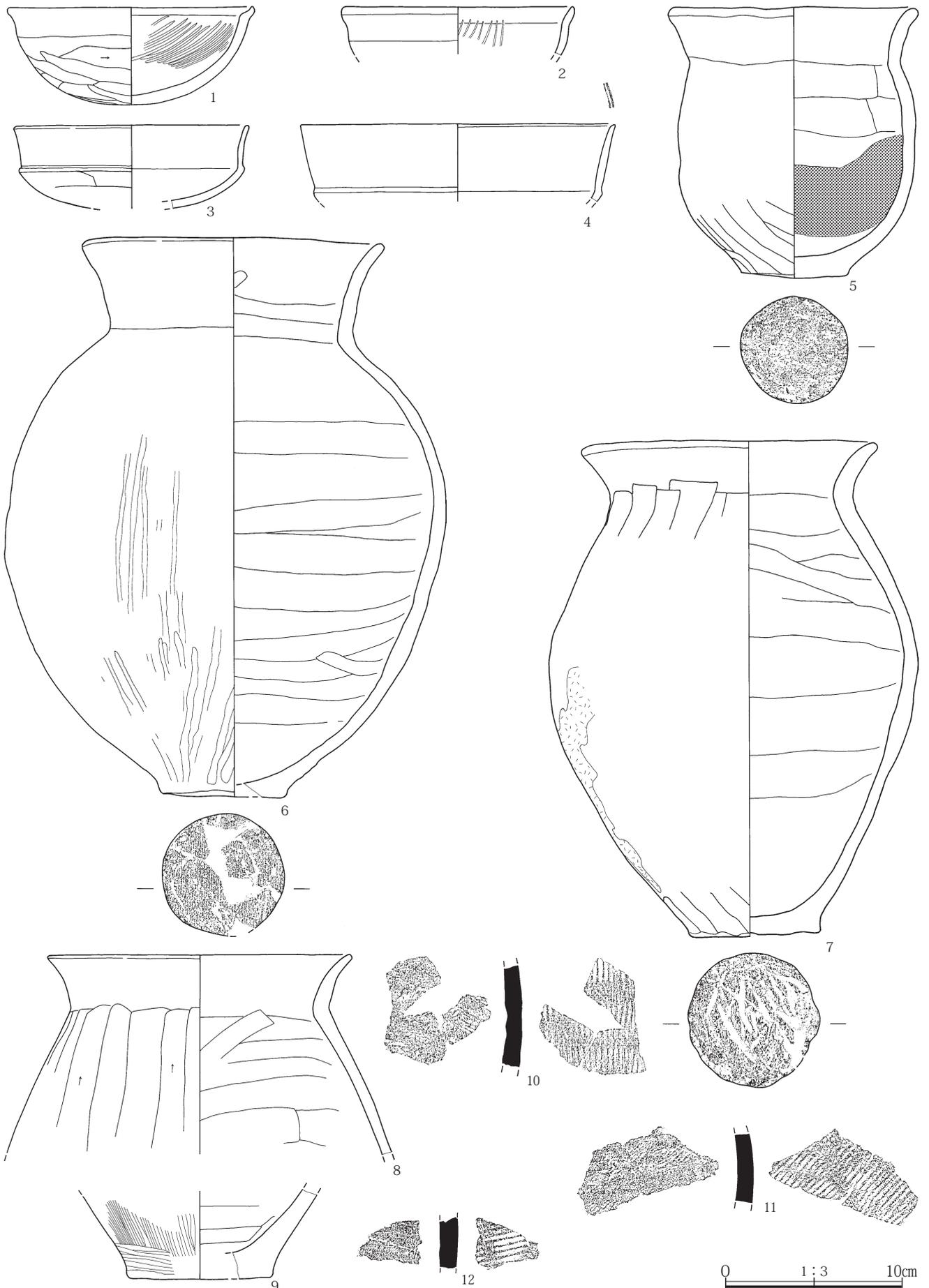


21号竖穴建物カマド

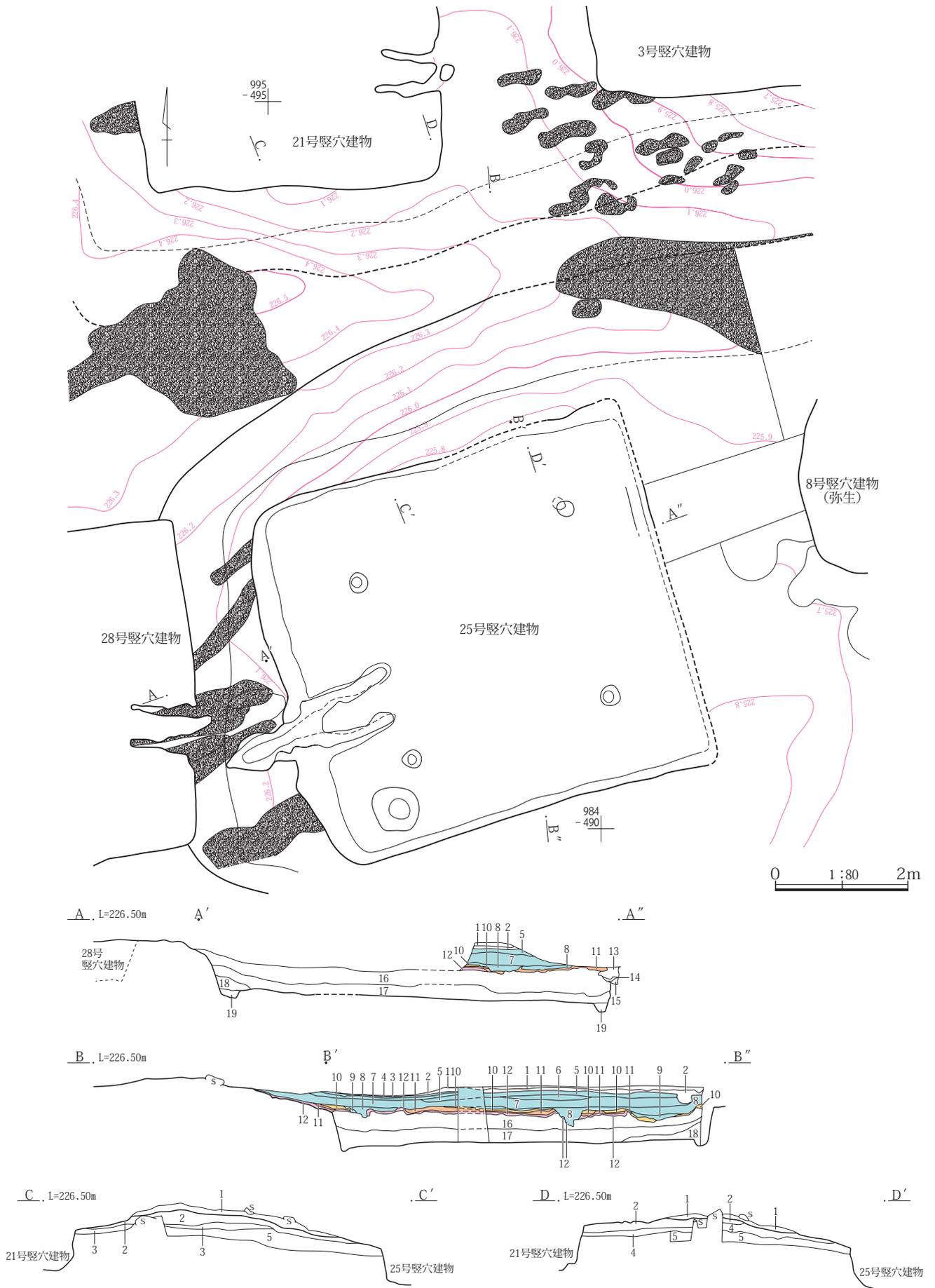
1. FA(S7) 細粒。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム中心層、ローム土30%含、天井崩落土。
- 2'. 焼土中心層 焼土40%含、天井の焼土面崩落したもの。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2)
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土混じり10%、焼土・炭化物1%含。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒1%含。
6. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土・ローム粒1%含。
7. ローム中心層 ローム土80%含、天井崩落土、カマド袖構築土。
8. 灰黄褐色土(2.5Y7/2) ローム土40%含。
9. 焼土中心層 ロームが焼土化したもの。
10. 黄灰色土(2.5Y4/1) 焼土10%含。
11. 黒褐色土(2.5Y3/1) 焼土5%、灰5%含。
12. 焼土中心層 焼土20%、灰10%含。
13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。



第69図 21号竖穴建物カマド図・竖穴建物掘方図・土層断面図



第70図 21号竖穴建物出土遺物図



第71図 25号竖穴建物全体図・土層断面図

(3) 25号竪穴建物(第71～78図 PL.41・42・269・270)

位置 調査区北端中央部南側にあり、東西に延びる共有周堤を挟んで北に3・21号竪穴建物、西隣に周堤の痕跡を残して28号竪穴建物がある。**重複** 28号竪穴建物とは、カマド同士が極めて近接しているので同時併存は難しく、東西方向の共有周堤から25号竪穴建物のほう

に南に屈折している痕跡が残っている所を見ると西隣の28号竪穴建物より新しい可能性が高い。**遺存状況** 竪穴部は完掘したが、周堤部南側は調査区外で調査できなかった。**埋土状況** 廃棄後、ほぼ水平の状態で、Hr-FAが降下している。**規模** 東西6.1m、南北5.7m、壁高53～65cmあり、床面積は34.34㎡で、主軸方位は、N

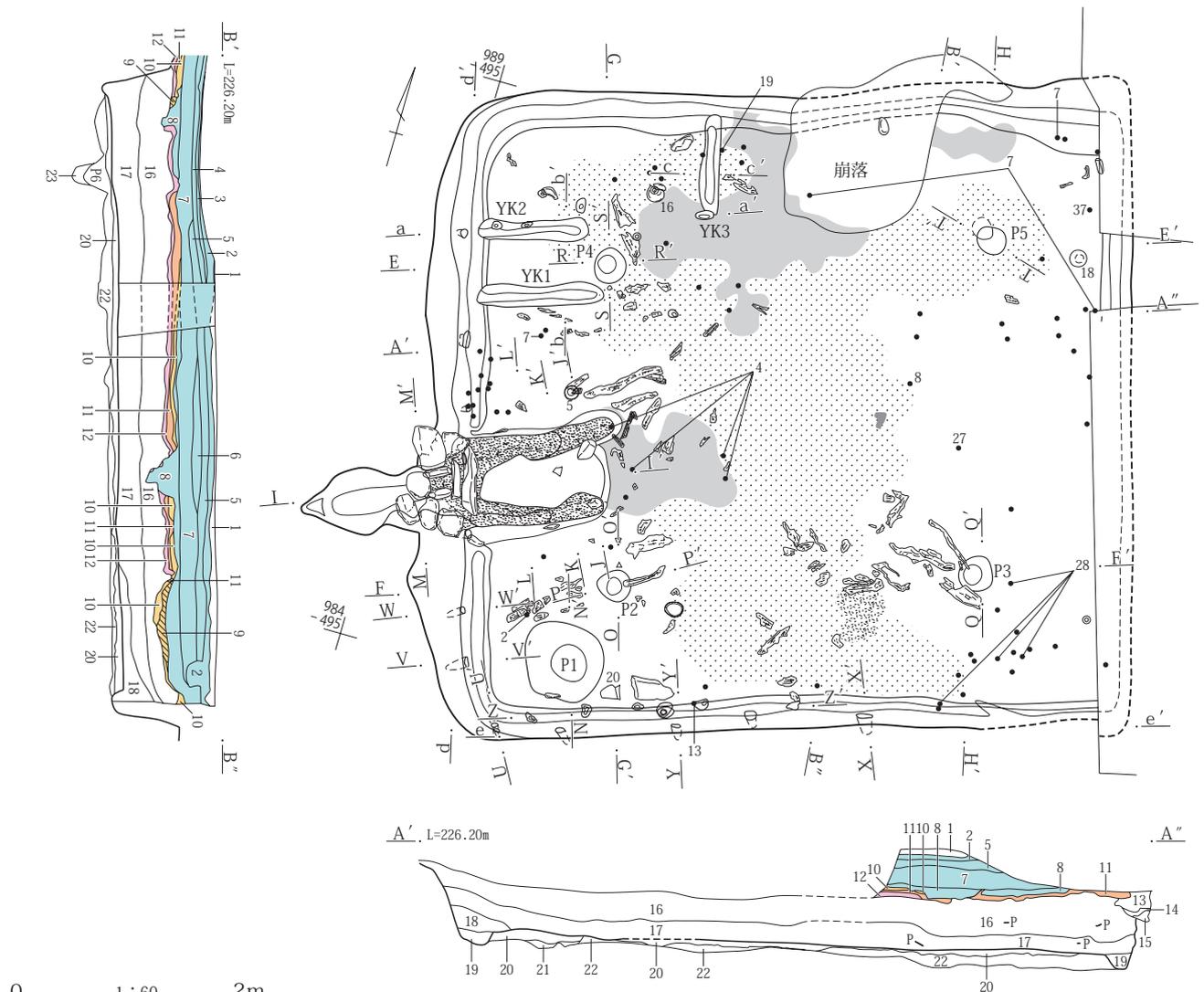
25号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下黒色土。
2. FA(S₉) 2次堆積土。
3. FA(S₇) 細砂質土。
4. FA(S₇) 細粒φ1～2mm含。
5. FA(S₇) 粗粒φ2～10mm含。
6. FA(S₇) 粗粒φ2～4mmと細粒、ラミナ状に堆積。
7. FA(S₇) 粗粒φ2～8mm含。
8. FA(S₇) 粗粒φ2～15mm不淘汰。
9. FA(S₃)上部とS₇の混じり。
10. FA(S₃)上部
11. FA(S₃)下部
12. FA(S₁)
13. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₇(20%)含。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₃(10%)含。
15. S₁中心層 S₁(40%)、灰黄褐色土(10YR4/2)含。

16. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒(φ1～2mm)、ローム粒(φ1～5mm)2%含。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒(φ1～3mm)3%、炭化物・ローム粒3%含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土が上層に10%程、炭化物5%含。
19. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱、壁周溝。
20. 黒褐色土((10YR3/2) ローム土10%含、床下フク土。
21. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム20%含、床下フク土。
22. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土30%ブロック状に含、床下フク土。
23. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱、P6埋土下層。

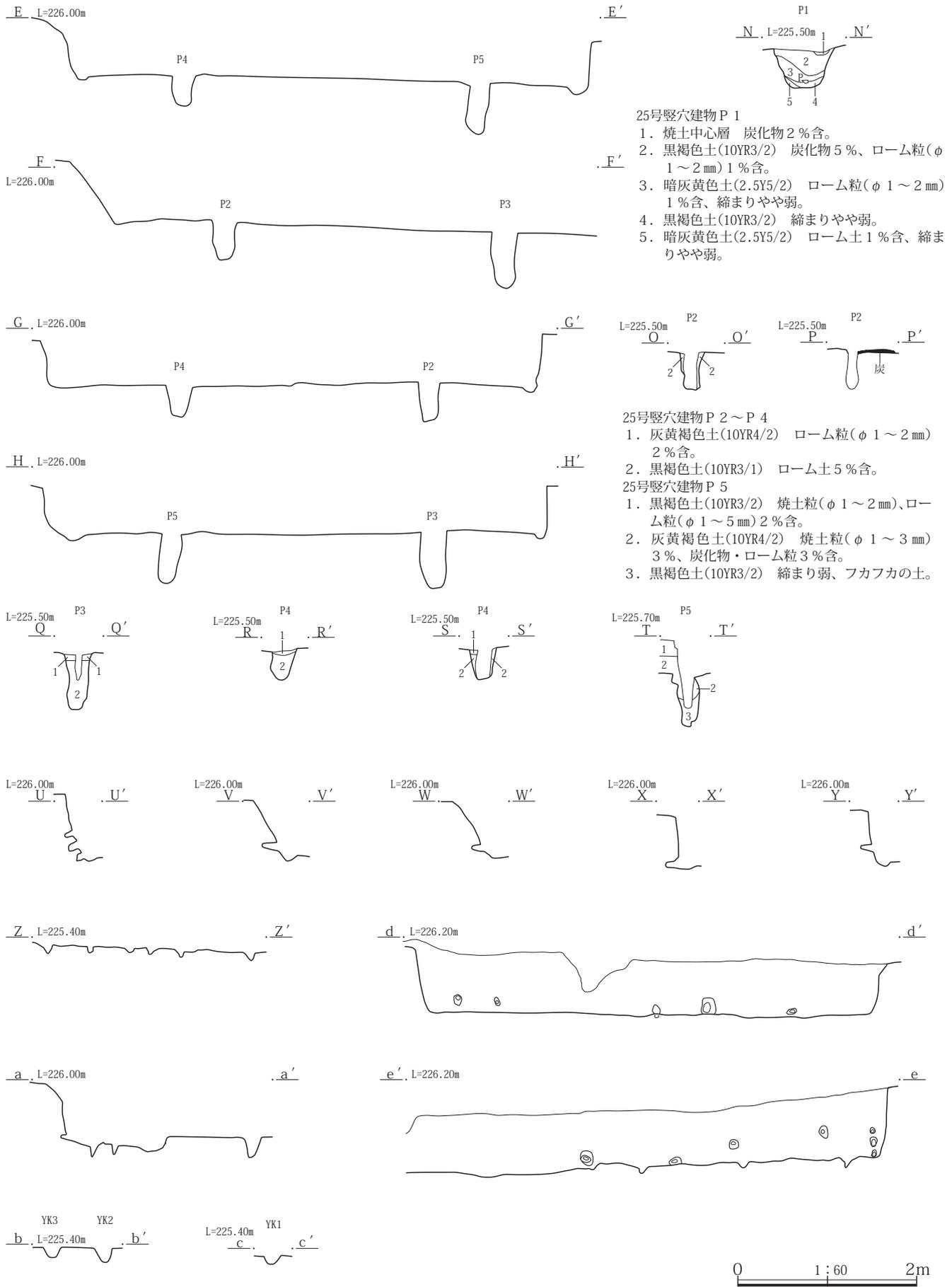
25号竪穴建物周堤

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ1～2mm)1%、白色土粒(φ1～2mm)1%、炭化物2%、小礫(φ1～10mm)1%含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ1～2mm)1%、白色土粒(φ1～4mm)1%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ1mm)1%、焼土粒(φ1～3mm)3%、炭化物(φ1～3mm)1%含。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒(φ1mm)、ローム粒(φ1～2mm)2%含。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ1～2mm)、焼土粒(φ1～2mm)1%含。

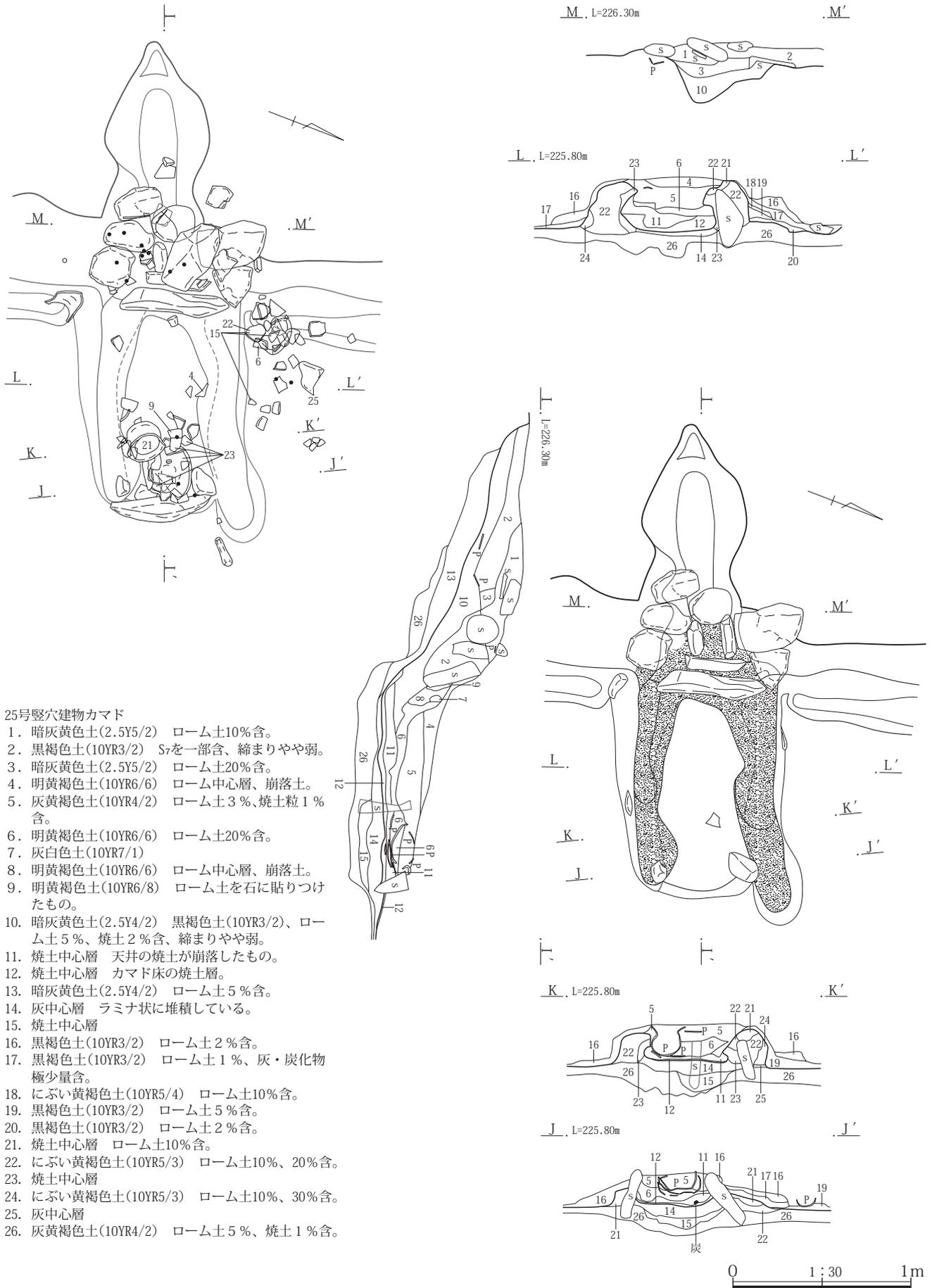


第72図 25号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



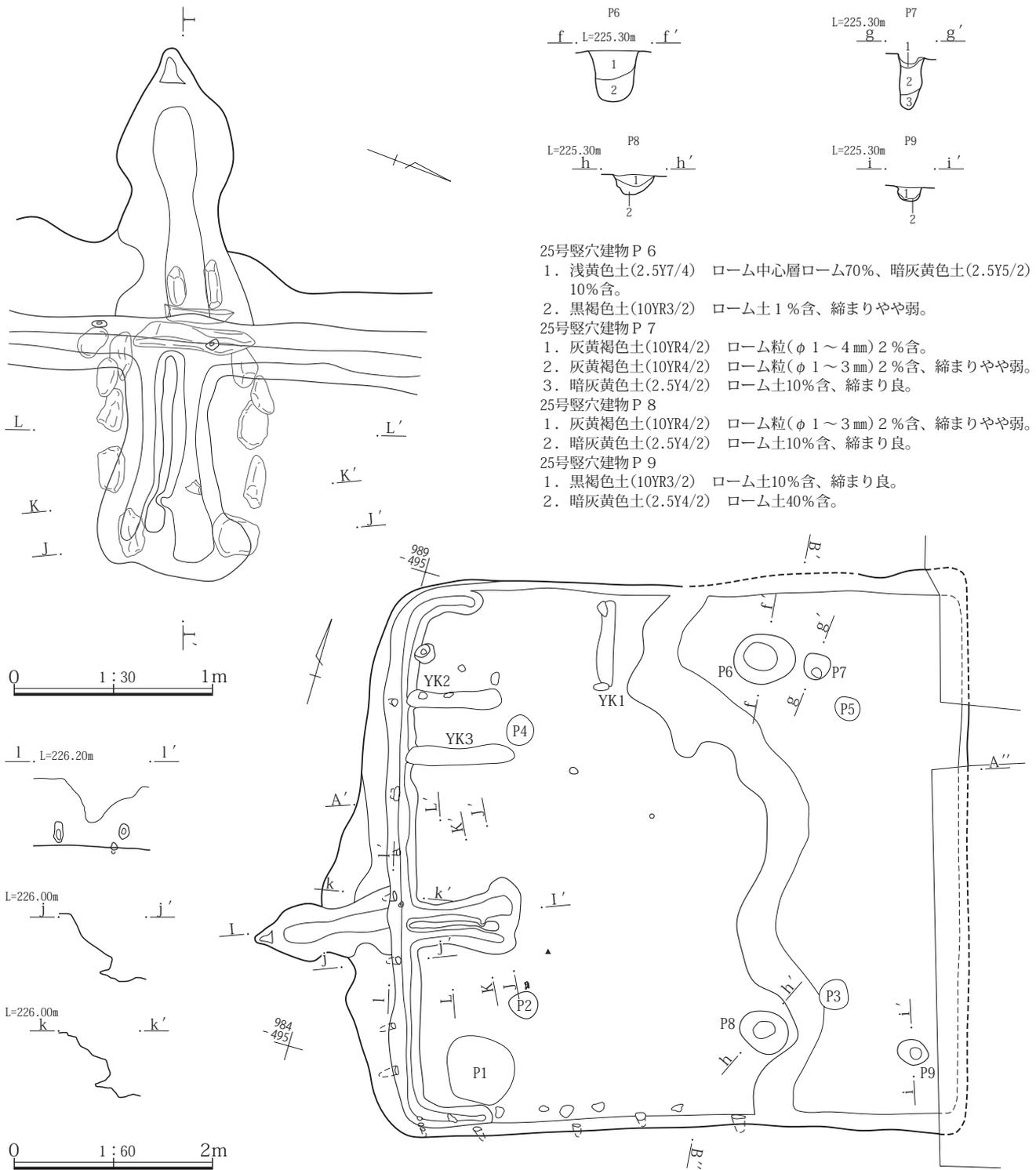
第73図 25号竪穴建物断面図・土層断面図



25号竪穴建物カマド

1. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土10%含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) S₇を一部含、締まりやや弱。
3. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土20%含。
4. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム中心層、崩落土。
5. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土3%、焼土粒1%含。
6. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム土20%含。
7. 灰白色土(10YR7/1)
8. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム中心層、崩落土。
9. 明黄褐色土(10YR6/8) ローム土を石に貼りつけたもの。
10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 黒褐色土(10YR3/2)、ローム土5%、焼土2%含、締まりやや弱。
11. 焼土中心層 天井の焼土が崩落したもの。
12. 焼土中心層 カマド床の焼土層。
13. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土5%含。
14. 灰中心層 ラミナ状に堆積している。
15. 焼土中心層
16. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。
17. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%、灰・炭化物極少量含。
18. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム土10%含。
19. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含。
20. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。
21. 焼土中心層 ローム土10%含。
22. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム土10%、20%含。
23. 焼土中心層
24. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム土10%、30%含。
25. 灰中心層
26. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、焼土1%含。

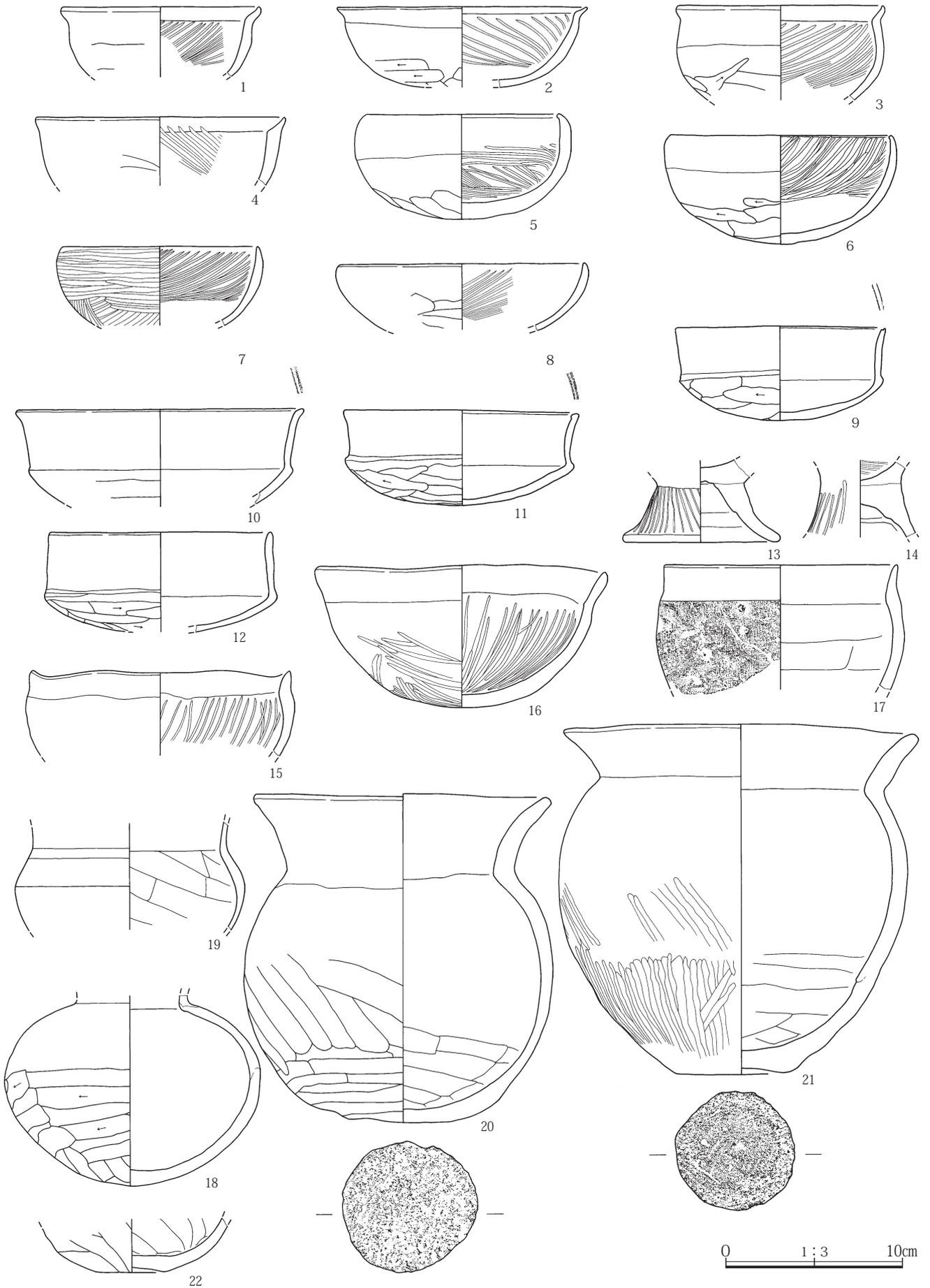
第74図 25号竪穴建物カマド図・土層断面図



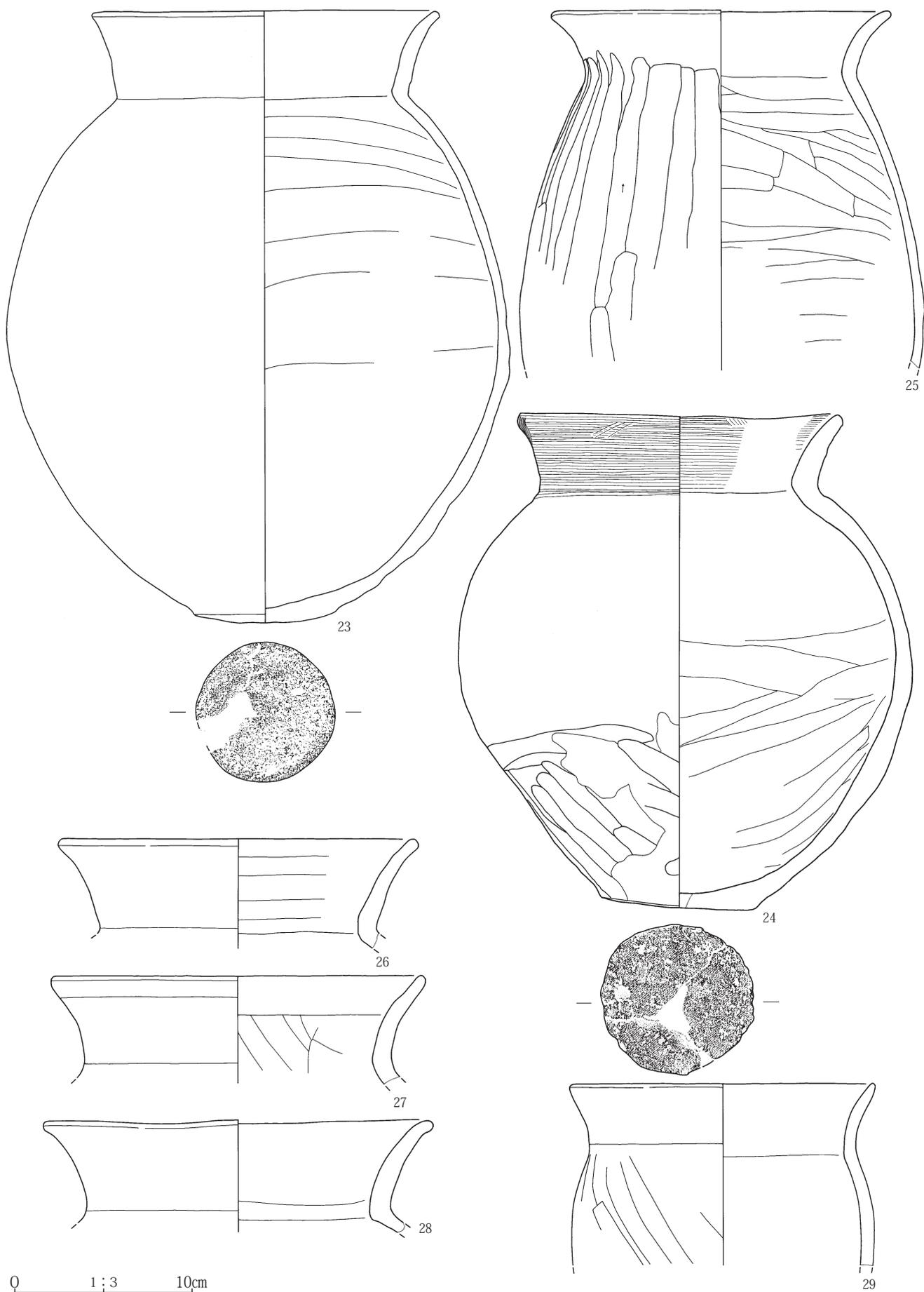
第75図 25号竪穴建物カマド掘方図・竪穴建物掘方図・土層断面図

-73°-Wである。掘方 東辺側全体にやや深めの掘削をしている。周堤 北側のみにあり、東側は無く、西側は28号竪穴建物との距離が近く確認できない。28号竪穴建物が周堤を壊して構築した可能性が高い。南側も調査区外で確認できない。北側の周堤痕跡は幅3m、高さ40cmほどである。壁際溝 幅17~28cm、深さ7~

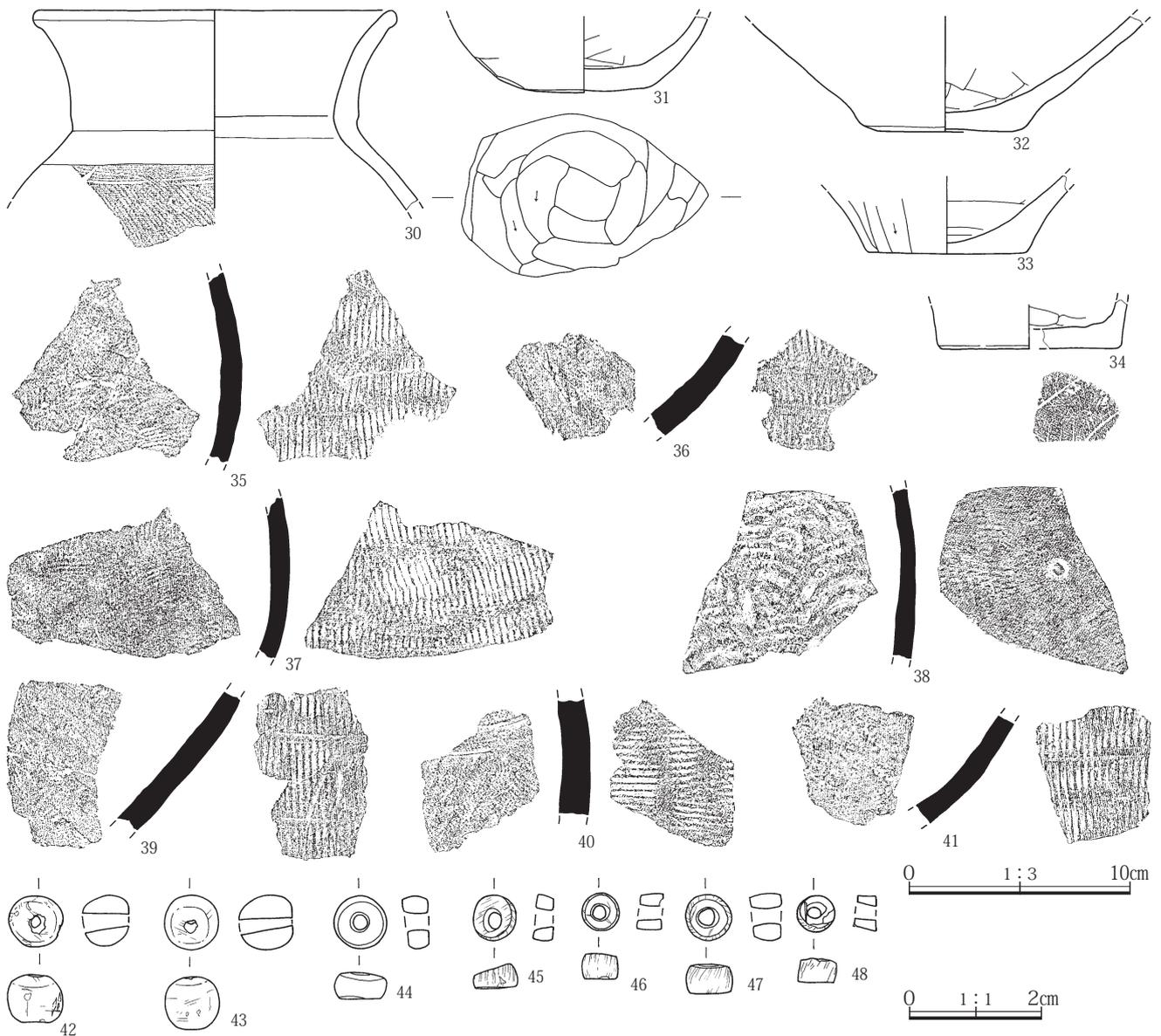
11cmで四周を巡る。柱穴 4本で、長径27~32cm、短径23~30cm、深さ35~60cmである。入口 他の建物からの類推から南側と推定する。硬化面 南側端から柱間内側中央部にある。カマド 本遺跡では珍しい西側壁に付設されたもので、焚口から煙道まで3.7m、焚口幅は95cmである。石の支脚がある。カマド煙道基部に



第76图 25号竖穴建物出土遺物图1



第77図 25号竪穴建物出土遺物図2



第78図 25号竪穴建物出土遺物図3

は、数個の石を置き、天井石を2石置いている。カマド袖部には、左右5個ずつの石を芯に入れて、周りを土で覆っている。大型の甕(第77図23 PL.270)と小型の甕(第77図21 PL.269)が並置されていた。貯蔵穴(P1) 長径70cm、短径64cm、深さ50cmの隅丸長方形形状である。床面小溝(P4) 北西部柱穴を起点に2条の溝が西壁に延びている。また、北辺西寄りに北壁に向けて1条の溝が延びている。小穴 南側の周溝に径4~8cm、6~10cmの小穴が6個ほどあり、さらに南壁に7個、径2~8cm、深さ10~16cmの穴が壁に直交か少し上向きに開けられていた。さらに、西壁に8個、径4~10cmの穴がほぼ直交して開いていた。これらの穴が、どのような用途になるのかははっきりしない。炭化材 カマド周辺及び南側から出土しているが、樹種同定の結果、ほとんどが

コナラで、一部にクヌギが入っていることが分かった。種実 モモ(核、食痕あり)が出土した。赤色顔料 粒状・層状のものが3片出土した。出土遺物(第76~78図 PL.269・270) 杯A・杯B・杯C、杯D IV鉢、椀D II、小型甕A II 2個、坩、甕C②、甕D、甕C①他がある。須恵器甕片と、滑石製白玉7個が出土した。杯AはII類とIV類が中心で、杯Bも、II類がある。杯Cについては、II・III類がある。甕も長胴化したものが多い。蛇紋岩製の丸玉2個と白玉が4個出土している。年代 杯AのII・IV類、杯BのII類、杯CのII・III類の存在などから、杯類においては、新しい時期の様相のものがあ、甕も長胴化するなど、新しい様相を示している。5世紀後半~末にかけてと推定する。

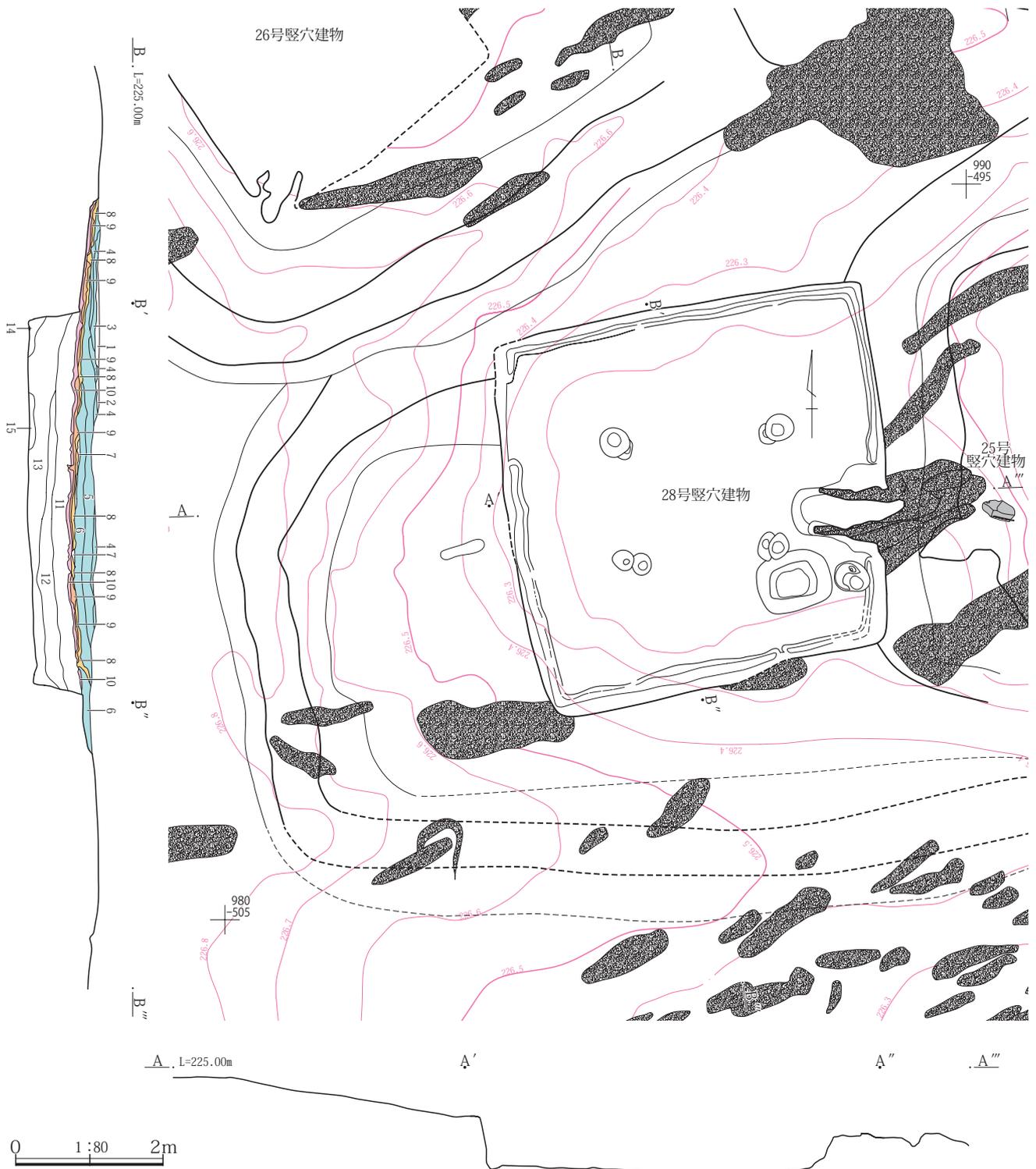
(4)28号竪穴建物(第79～83図 PL.43・44・271)

位置 26号竪穴建物の南、25号竪穴建物のすぐ西にある。**重複** 周堤の状況からすると、北の26号竪穴建物の周堤が残存している状況なので、26号竪穴建物のほうが新しい。25号竪穴建物とは、カマド同士が極めて近接しているので同時併存は難しいことや、東西方向の共同周堤から25号竪穴建物のほうに南に屈折している痕跡が残っている所を見ると28号竪穴建物のほうが古い建物である可能性がある。**遺存状況** 竪穴部は完存し、東側を除いた周堤は遺存している。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積し、やや窪地状になった所に、Hr-FAが降下している。**規模** 東西5.21m、南北5.23m、壁高58～77cm、床面積は23.26㎡で、主軸方位は、N-82°-Eである。**掘方** カマド周辺部、北東隅、中央部西辺近くを深く掘削している。湿気対策と想定される。**周堤** 北側は26号竪穴建物により占有されており、東側は25号竪穴建物が1mほどに近接して構築されており、25号竪穴建物の周堤の痕跡が認められる。周堤痕跡が確認できるのは、西部から南部にかけてである。幅1.6～2.5m、高さ30cmほどである。ただし、南側は、保存が決定したため、S₁を剥がしておらず、想定のものである。**壁際溝** 幅14～27cm、深さ4～7cmの壁周溝は、四周を巡るが、一部北西部では途切れている。**柱穴** 4本柱穴であるが、重複関係にある柱穴がそれぞれ2個ずつ掘られているので、建て直しをしているものと考えている。古い柱穴(P 2～5)は切りあいによる復元も含めて、長径27～38cm、短径15～26cm、深さ26～53cmで、新しい柱穴(P 6～9)は、長径36～44cm、短径20～40cm、深さ32～51cmである。**入口** 他の建物からの類推から南側と推定する。**カマド** 焚口～煙道まで153cm、焚口幅64cmで東向きである。袖の芯に石を、向かって右に6、左に5個入れており、土で覆うものである。**貯蔵穴** カマド南脇にあり、長径100cm、短径80cm、深さ21cmの隅丸長方形の落とし蓋を安置する段差があり、その下に長径52、短径48cm、深さ32cmの貯蔵穴がある。**床面小溝** 西辺の柱穴P 3・5・7・9を起点にそれぞれ2状の溝が、東西方向に西壁に向かい(YK 2・4～6)、南北方向の溝は、建物北辺のP 4・5・8・9柱穴近くを起点にして北壁に向かって2条(YK 7・8)と、南辺の柱穴P 3・7付近を起点として南壁に向かって1条(YK 1)、さらに西

辺の柱穴P 3・P 7と西壁の間に南北方向に向かって1状の溝(YK 3)がある。これらの溝は空間利用の際の何らかの施設と想定される。西壁に向かう東西方向の溝は柱の建て替えに応じて溝も造り直したものであろう。**小穴** 南壁沿いの壁周溝に、3ヶ所の小穴があり、さらに、南壁から80～90cm北側にほぼ並んで5ヶ所の小穴があり、南北方向の床面小溝(YK 3)付近にも小穴が4ヶ所ある。何らかの施設に伴うものと考えられる。**炭化材** カマド前を中心に多く出土しており、建築部材の検討が行えた。樹種同定により、ほとんどがクリ材で、ごく一部にコナラ材が入っている。他に茅がある。**種実** スモモ(核)が出土した。カマド燃焼部より、イネ(胚乳)・キク科(果実)が出土した。**赤色顔料** 19片顆粒状のものが出土している。**出土遺物**(第83図 PL.271) 杯A・杯B・杯C、椀C、小型甕A、甕C、須恵器杯身、甕破片、砥石、不明穿孔石製品、滑石製白玉3個が出土している。砥石は、当遺跡に多く出土する提砥では無い。砥石製である。両面に研ぎがあり研ぎ減りで上方がやや細くなっている。**年代** 杯I・II類、杯B I類、杯C II類の組み合わせで、甕の形態なども考慮すると、5世紀後半と推定する。

(5)26号竪穴建物(第84～87図 PL.45・271)

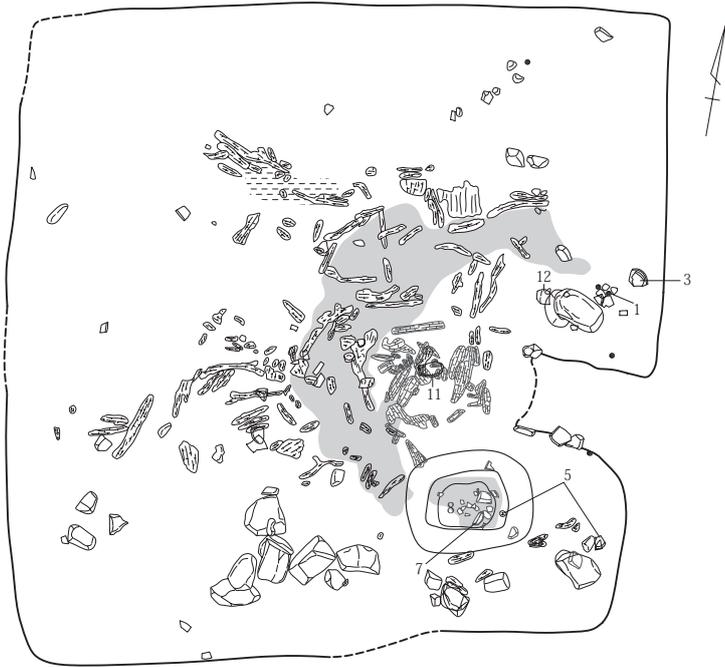
位置 調査区北側の北西隅にあるもので、東に21号竪穴建物、南に28号竪穴建物がある。**重複** 切りあいにはならないが、26号竪穴建物に伴う周堤が、21・28号竪穴建物の周堤上に覆うような形で確認されたので、21・28号竪穴建物よりは新しいと推定する。**遺存状況** 周堤の北東部が一部確認できなかった。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積し、やや窪地状になった所に、Hr-FAが降下している。**規模** 一部壁が確認できなかったため、復元長で、3.7m、壁高40～57cm、床面積は8.11㎡で、主軸方位は、S-33°-Wである。**掘方** 南西隅のカマド以外の北東部を中心にやや深く掘り下げている。長径78cm、短径54cm、深さ16cmの床下土坑が、入口ピットと推定される、P 5の下から確認された。**周堤** 幅2.1～2.4m、高さ30cmのものが四周にあった。**壁際溝** 無し。**柱穴** 4本柱穴で、長径15～32cm、短径15～25cm、深さ21～44cmである。**入口** 南側からと推定している。南辺壁よりも、径35・20cmで深さ28・26cmのP 5、6が並列して検出されており、入口のピットと推定され



28号竪穴建物

- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 黒褐色土(10YR3/2) FP粒(φ 1~2mm) 1%、S₉を2%含。 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₉を2%、炭化粒極少量含。 3. FA(S₉) にぶい黄橙色土(10YR7/2)、軽石粒(φ 1mm) 20%含。 4. FA(S₉) にぶい黄橙色土(10YR7/3)、シルト質土。 5. FA(S₇) やや粗粒(φ 1~5mm)含。 6. FA(S₇) 粗粒φ 1~10mm含。 7. 灰黄褐色土(10YR4/2) S₁とS₇の混じり土。 8. FA(S₃)上部 9. FA(S₃)下部 10. FA(S₁) 11. 黒褐色土(10YR3/2) FA粒(φ 1~2mm)極少量、炭化物1%含、締まりやや弱、土器含。 | <ol style="list-style-type: none"> 12. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%、焼土粒(φ 1~3mm) 1%含。 13. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒(φ 1~2mm) 1%、ローム土(φ 1~2mm) 1%含。 14. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%含。 15. 灰中心層 16. ローム中心層 カマド側壁部、ローム60%、焼土2%含。 17. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1~3mm) 2%含。 18. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含、締まり弱、壁周溝のフク土。 19. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム塊を含、締まりあり。 20. 明黄褐色土(10YR7/6) ローム塊を含、締まりあり。 21. 褐色土(10YR4/6) 焼土粒・炭化物多量含。 |
|---|--|

第79図 28号竪穴建物全体図・土層断面図

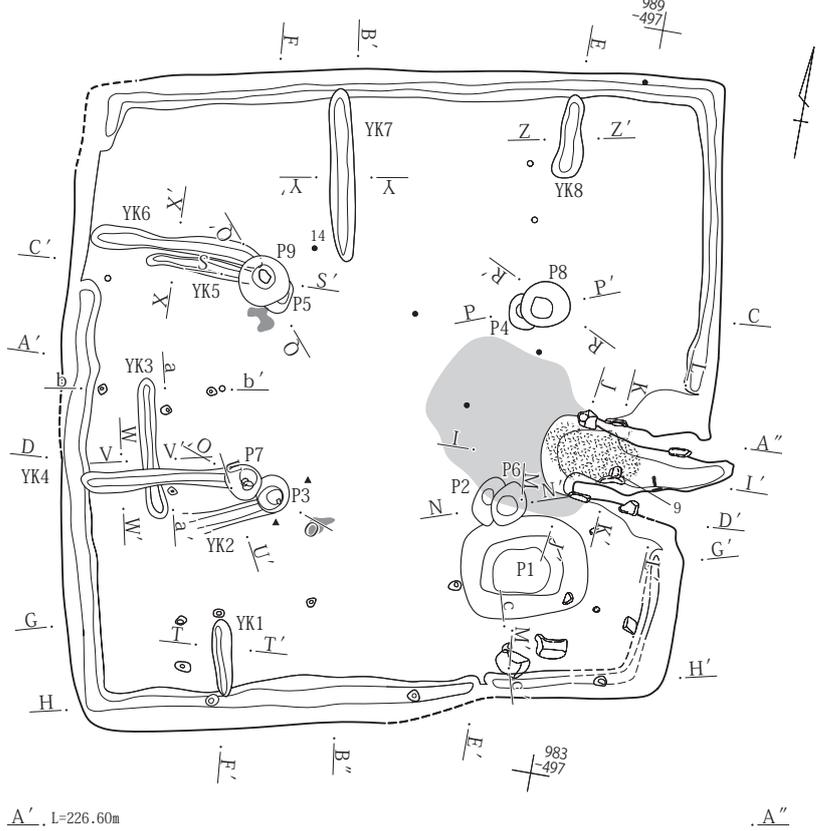
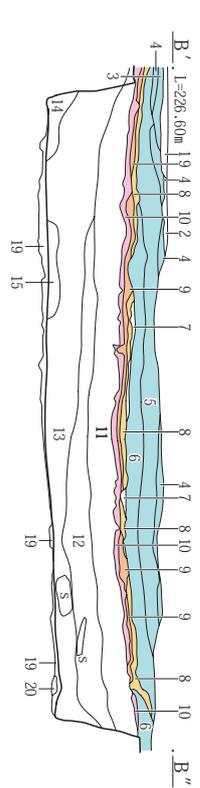
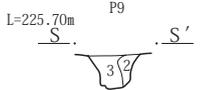
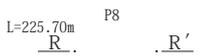
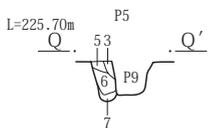
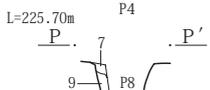
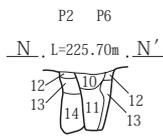
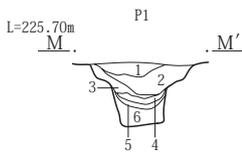


28号竪穴建物 P 1

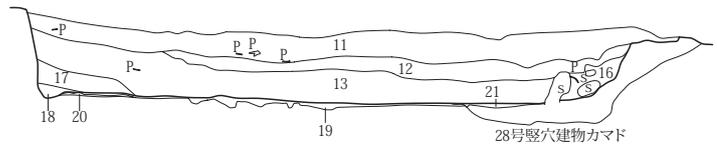
1. 橙色土(7.5YR7/6) 焼土。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム小・大塊を含、締まりやや弱。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物多量、焼土粒少量含、締まりややあり。
4. 橙色土(7.5YR7/6) 焼土含、締まり弱。
5. 黒色土(10YR2/1) 炭化物・焼土粒を含、締まり弱。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊多量含、締まりあり。

28号竪穴建物 P 2～P 9

1. 黒褐色土(10YR3/1) 締まり弱、柱痕。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム小・大塊を含、締まりやや弱。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を含、締まり弱。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量含、締まりやや弱。
5. 黒褐色土(10YR3/1) ローム塊・粒多量含、締まりやや弱。
6. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含。
7. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒多量含、締まりややあり。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量含、締まりやや弱。
9. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含。
10. 暗褐色土(10YR3/3) 炭化物多量、焼土粒少量含、締まりややあり。
11. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒少量含、崩れやすい、柱痕か。
12. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土小塊・灰・炭化物を含、締まりあり。
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊多量含、締まりあり。
14. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒多量、黒褐色土を含、締まりあり。

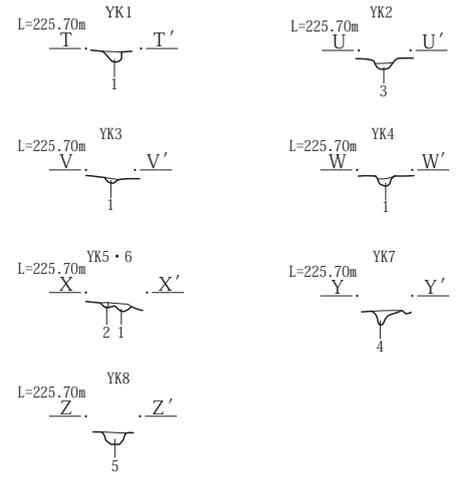
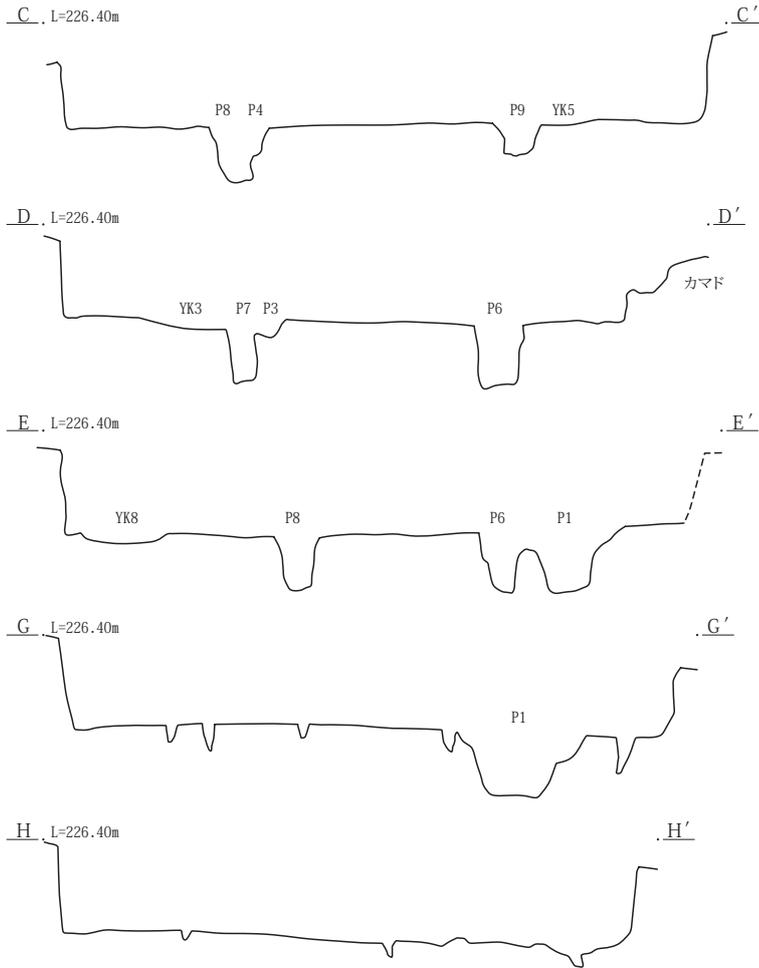


A', L=226.60m



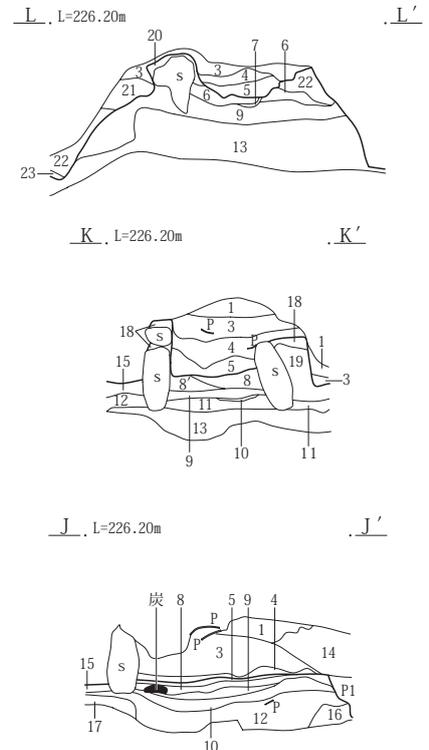
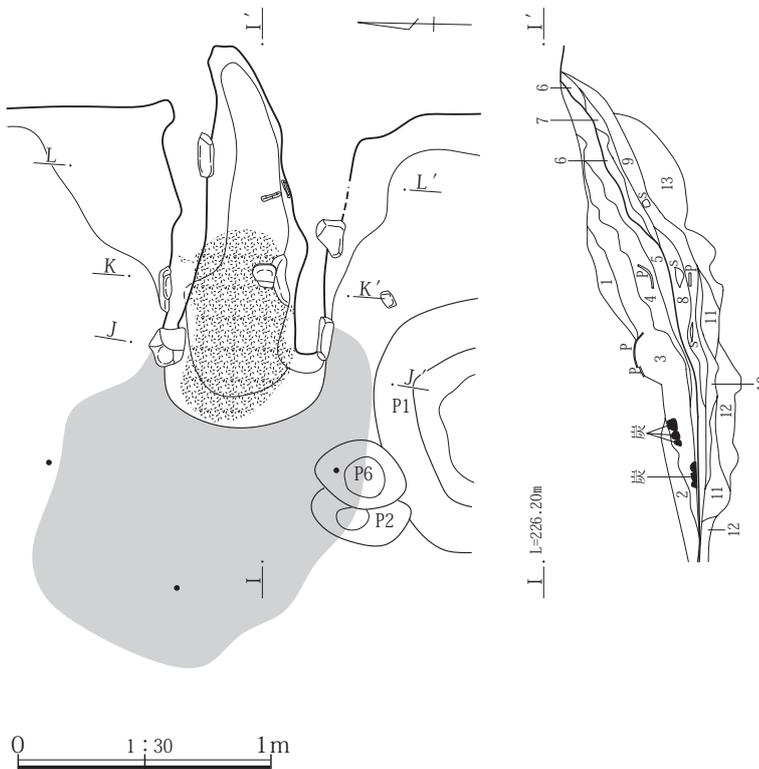
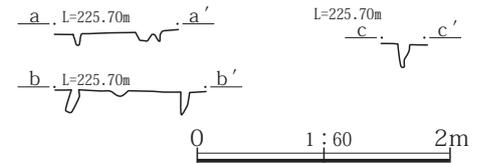
28号竪穴建物カマド

第80図 28号竪穴建物炭化材等出土状況図・遺物出土状況図・土層断面図



28号竪穴建物Y K 1～Y K 8

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒含、締まり弱。
2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム小塊を含、締まりあり。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム大塊多量含、締まりやや弱。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ローム大塊を含、締まりやや弱。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 礫・焼土粒・炭化物を含、締まりやや弱。



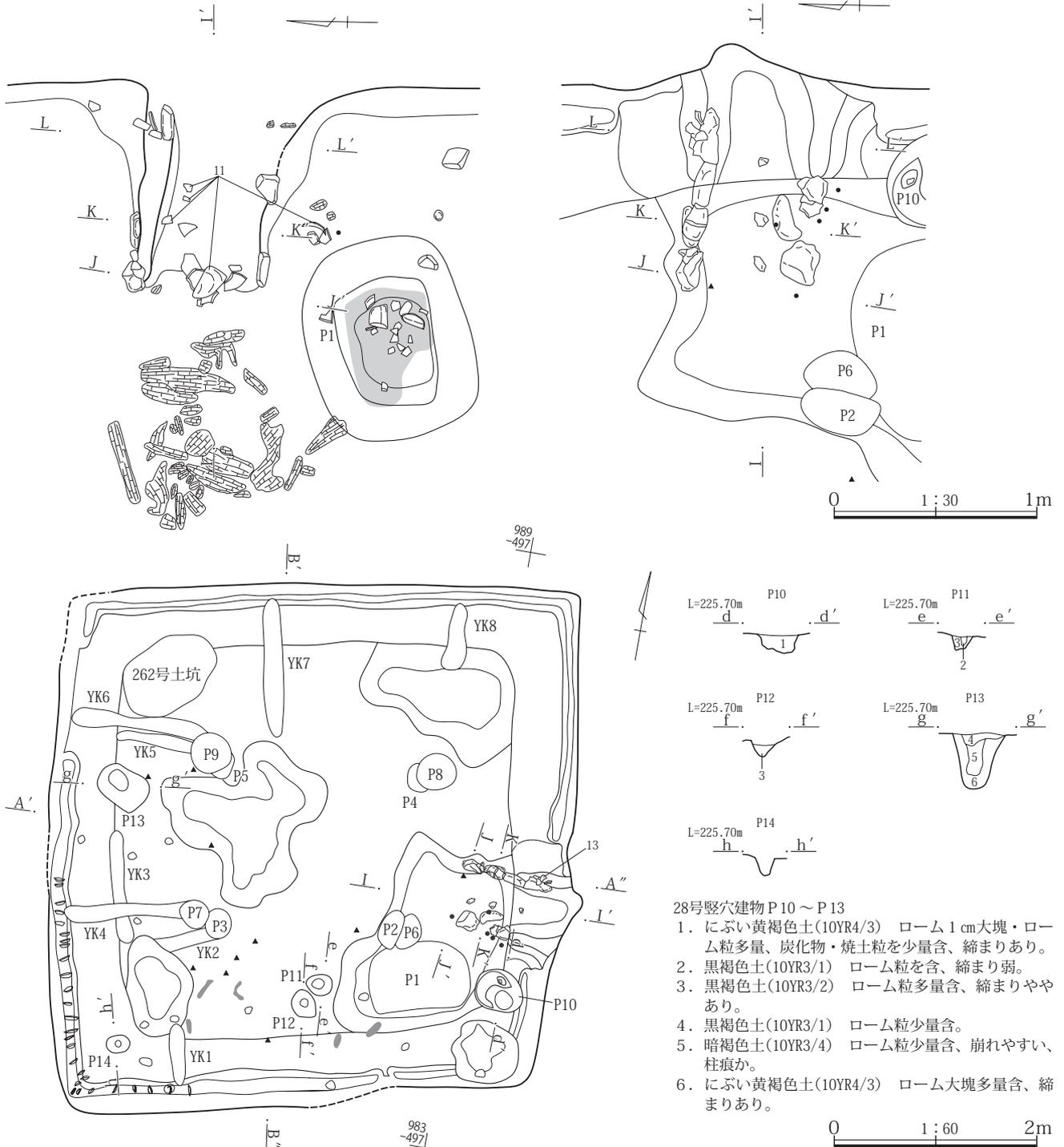
第81図 28号竪穴建物断面図・カマド図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

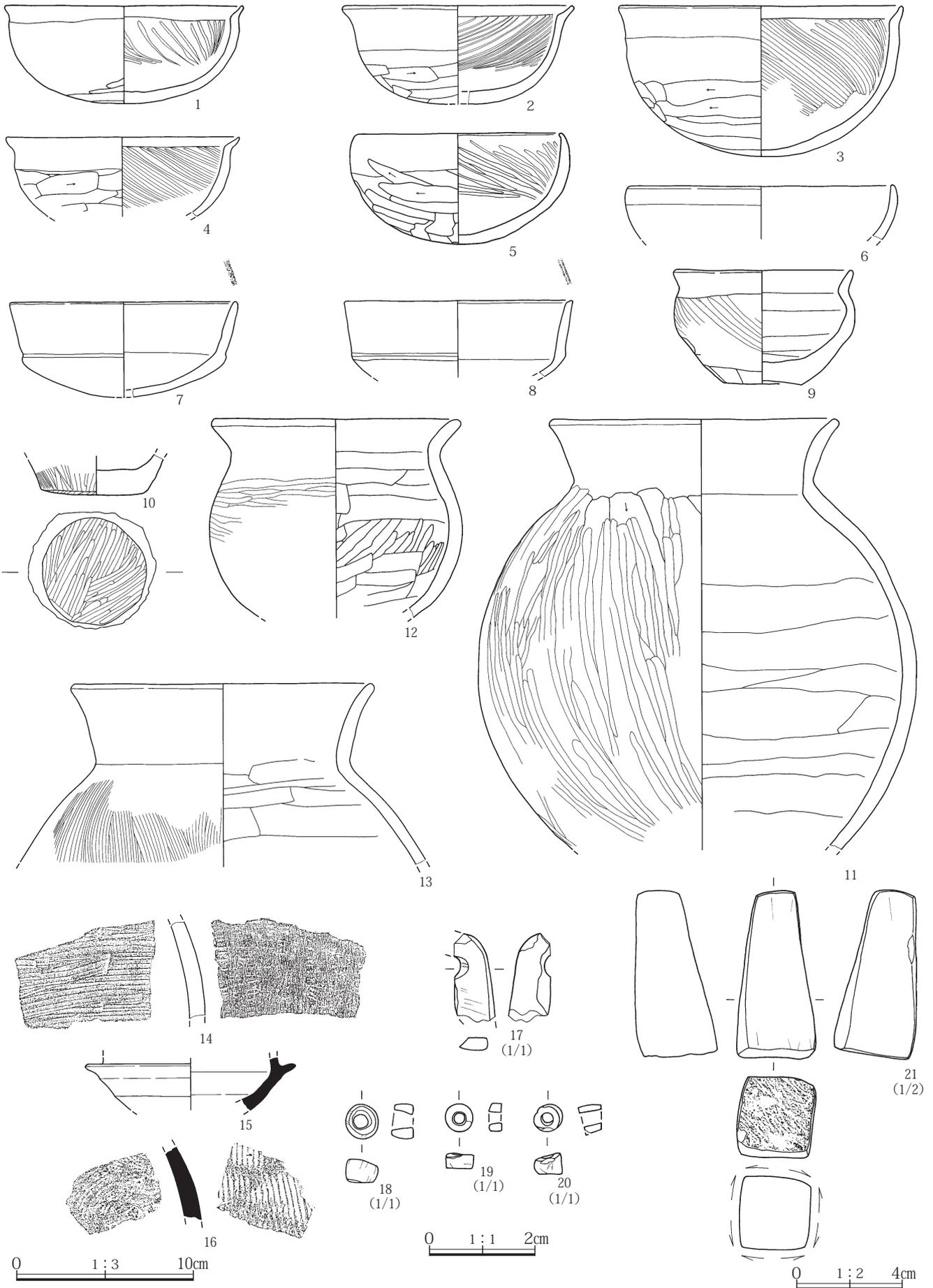
28号竪穴建物カマド

1. 明黄褐色粘質土 5cm大塊・粒を含、縮まり粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・炭化物少量含、縮まり粘性あり。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 明黄褐色土小塊・粒少量含。
4. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 焼土小塊・粒少量、赤褐色焼土少量含、天井崩落土、縮まりややあり。
5. 明赤褐色土(2.5YR5/6) 焼土1cm大塊・粒多量、縮まりやや弱、にぶい黄褐色土・黒褐色土を含。
6. にぶい橙色土(7.5YR6/4) 焼土小塊・粒多量、ローム塊・粒を含。
7. 黒褐色土(7.5YR3/1) 焼土粒を含、縮まりあり。
8. 褐灰色土(7.5YR4/1) 灰・炭化物多量、焼土粒含。
- 8'. 褐灰色土(7.5YR4/1) 8層よりやや灰・炭化物の量少ない。粘土粒含。
9. 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土粒微量含。
10. にぶい黄橙色土(10YR6/3) 焼土・灰多量、炭化物を含、縮まりあり。
11. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒含、縮まりあり。

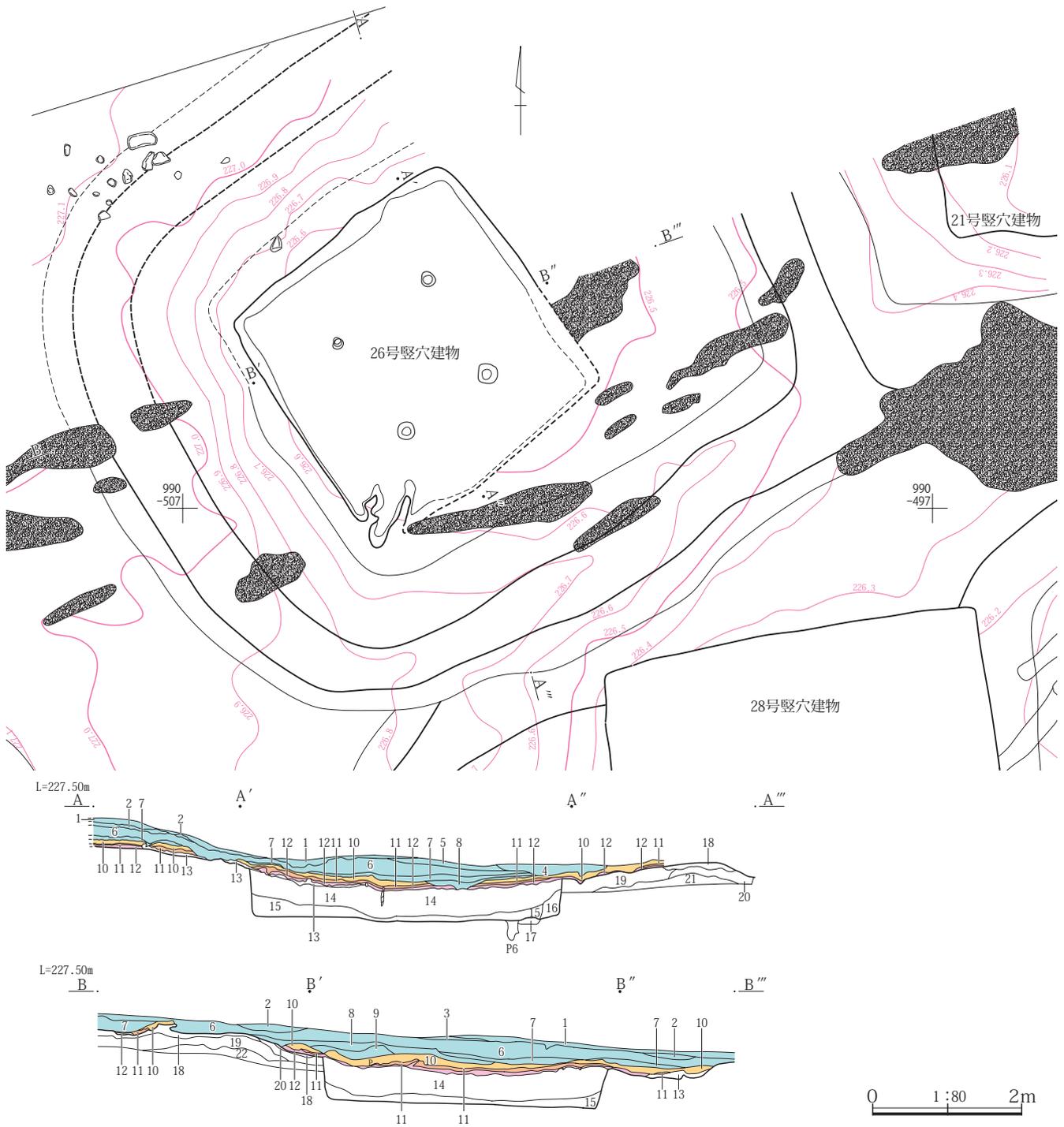
12. にぶい黄褐色土(10YR5/4) ローム5cm大塊を含、縮まりあり。
13. 褐色土(7.5YR4/3) ローム粒含、地山。
14. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム1cm大塊多量、炭化物・焼土粒を含、縮まりやや粘性あり。
15. 黒褐色土(7.5YR3/1) 明黄褐色ローム小塊を縞状に含、にぶい黄褐色土を含。
16. 明黄褐色土(10YR7/6) ローム大塊。
17. 灰黄褐色土(10YR6/2) 縮まりあり。
18. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 炭化物・ローム小塊を含。
19. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土小塊・炭化物を含。
20. 明黄褐色土(10YR6/6) 黒褐色土を含、硬化。
21. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を含、縮まり粘性あり。
22. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含、縮まり弱。
23. 暗褐色土(10YR3/3) 酸化鉄分を含、縮まりやや弱。



第82図 28号竪穴建物カマド遺物出土状況図・掘方図、竪穴建物掘方図・土層断面図



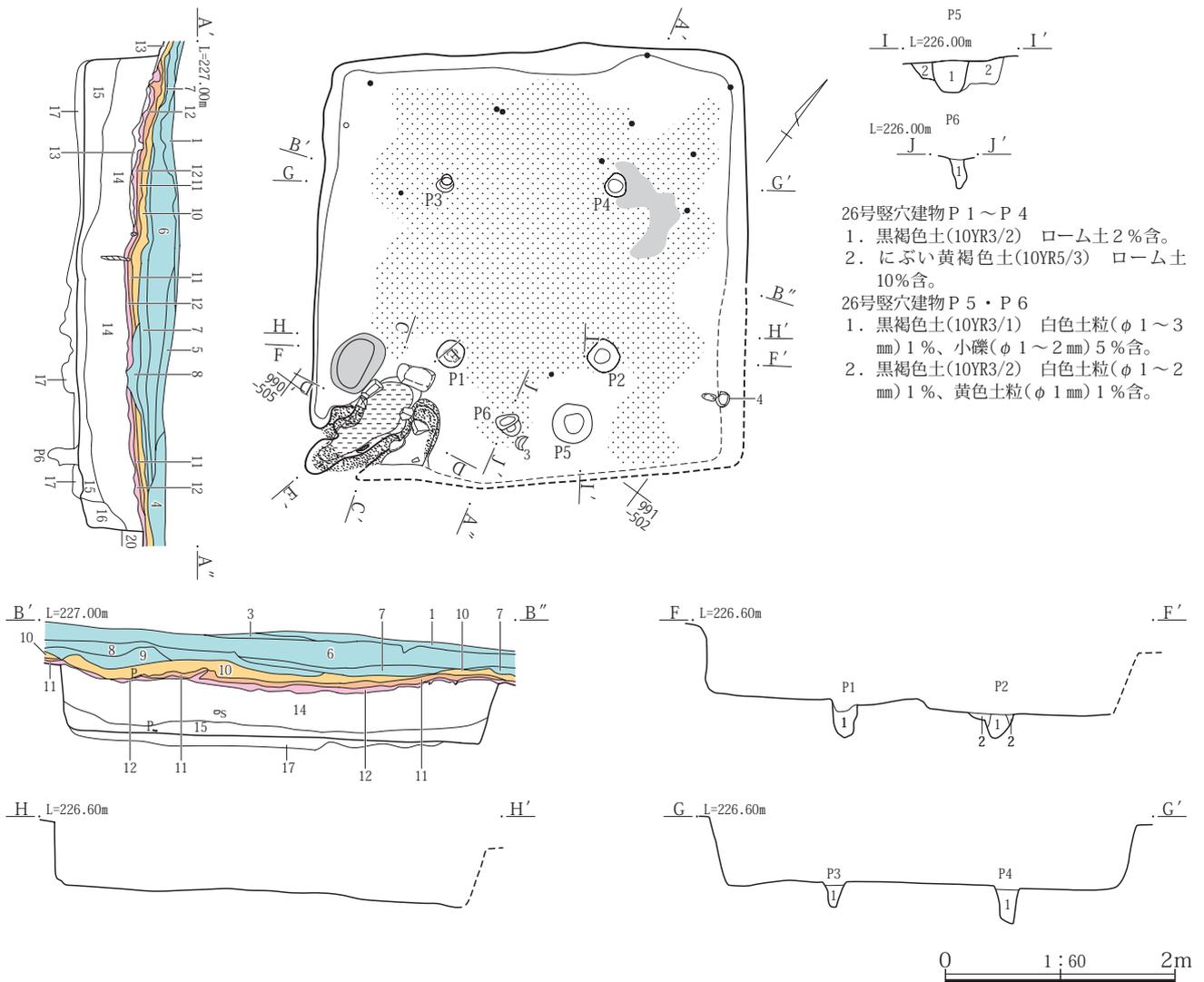
第83図 28号竖穴建物出土遺物図



4区5面26号竪穴建物

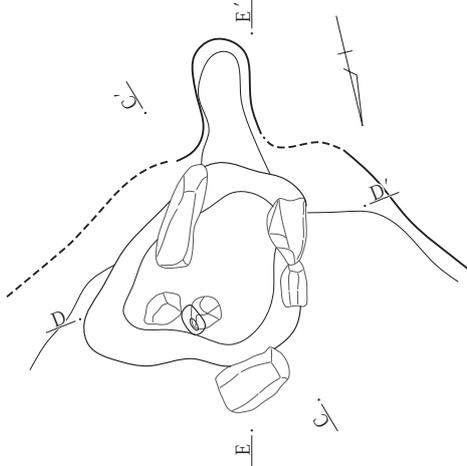
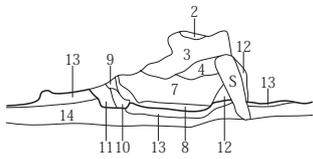
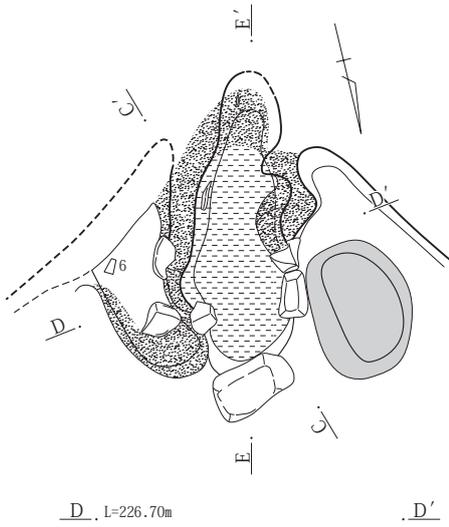
- | | |
|---|---|
| <p>1. FA(S₇) 灰黄褐色土(10YR6/2)シルト質土。
 2. FA(S₇) 細粒φ1~2mm含。
 3. FA(S₇) 細砂土中心層、灰黄褐色土(10YR6/2)。
 4. FA(S₇) 粗粒φ2~20mm含。
 5. FA(S₇) 粗粒φ1~4mm含。
 6. FA(S₇)粗粒(φ1~10mm)。
 7. FA(S₇)細砂(φ1~4mm)。
 8. 暗褐色砂質土(10YR3/3) 焼土粒・炭化物極少量含。
 9. 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 小礫(φ1~10mm)2%含。
 10. FA(S₃)上部
 11. FA(S₃)下部
 12. FA(S₁)</p> | <p>13. FA(S₁)と黒褐色土(10YR3/2)の混じり。
 14. 黒褐色土(10YR3/2) 縮まりやや弱、炭化物・焼土粒2%、ローム粒1%含、土器含。
 15. 黒褐色土(10YR3/1) 縮まりやや弱、焼土粒・炭化物1%、ローム粒1%含。
 16. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒・焼土粒1%含。
 17. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒(φ1~2mm)、炭化物2%含、縮まりやや弱。
 18. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含、縮まりやや弱。
 19. 黒褐色土(7.5YR3/2) FA(S₁)を含。
 20. 黒褐色土(7.5YR3/1) 黄橙色土粒少量、小礫・酸化鉄分を含、縮まり粘性あり。
 21. 黒褐色土(7.5YR3/1) 黄橙色土粒多量含、縮まり粘性あり。
 22. 黒褐色土(10YR3/1) ローム土小塊・粒を含、縮まりややあり、粘性あり。</p> |
|---|---|

第84図 26号竪穴建物全体図・土層断面図

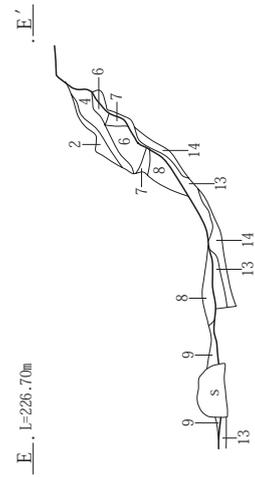
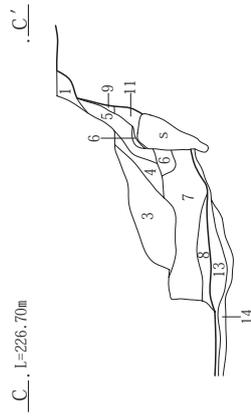


第85図 26号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図・断面図

るからである。**硬化面** 南側から中心部にかけて硬化面がある。**カマド** 西南隅で、煙道が隅角を斜めに立ち上がっている特異な形式である。焚口から煙道長115cm、焚口幅38cmで、袖の芯に石をそれぞれ2個、計4個入れて周りを土で覆うものである。カマドの正面左横には、焼土の集中しているやや窪んでいる地点がある。**貯蔵穴** 無し。**種実** カマド燃焼部掘方より、イネ(胚乳)11+、アワ・アワ類(胚乳)2が出土している。**出土遺物** (第87図 PL.271) 杯AⅡ、杯BⅡ、杯CⅠ・Ⅱ、壺底部、須恵器甕片が出土している。不整長方形で厚みが2.3mmもある鉄素材と推定される鉄製品が出土している。他に鉄器生産を示す遺物は認められないが、鉄素材の出土は、当遺跡の性格を示す遺物として重要である。**年代** 杯A・BともにⅡ類が中心で、杯CにおいてもⅡ類が優勢なので、時期的には新しい様相を示している。5世紀末と推定する。

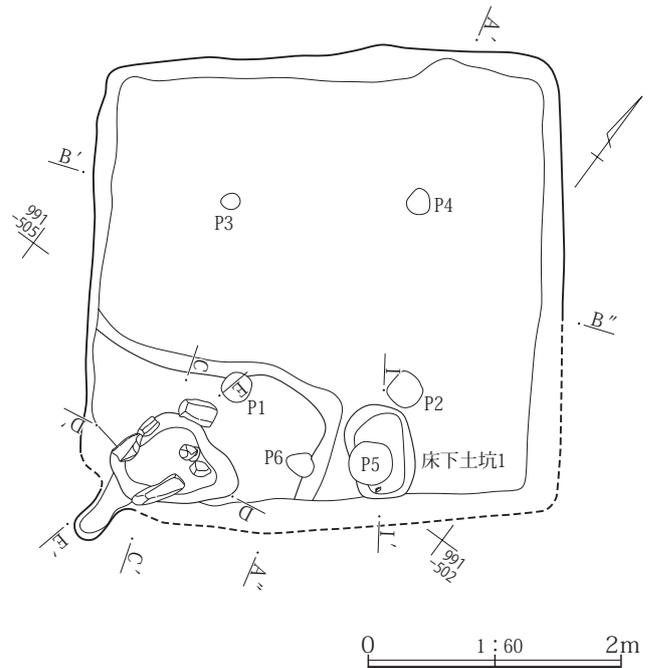


0 1:30 1m



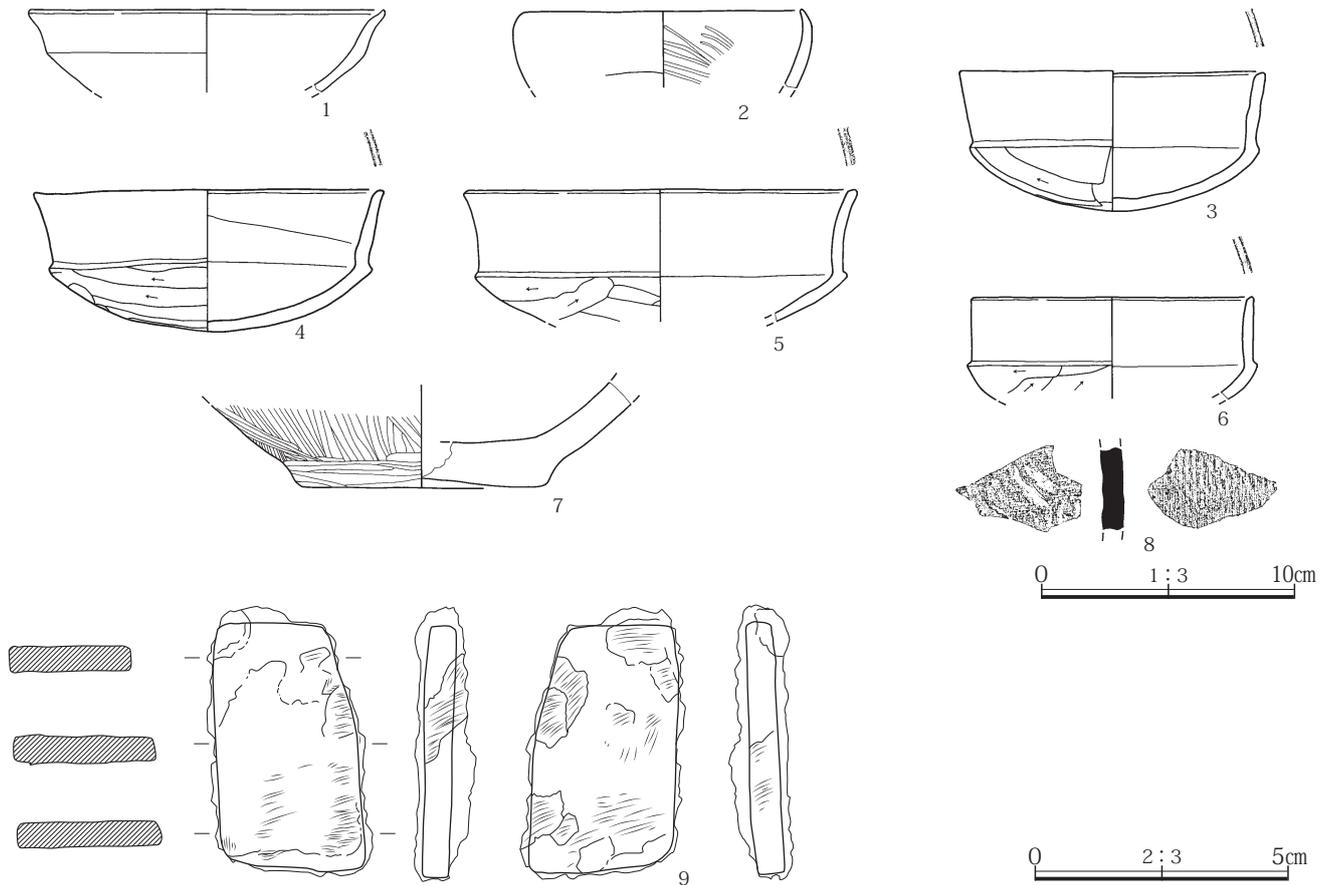
26号竪穴建物カマド

1. 灰黄褐色土(10YR4/2)
2. 焼土中心層
3. 黄褐色土(2.5Y5/4) ローム中心層、天井石崩落。
4. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土20%、焼土粒1%含。
5. 黄褐色土(2.5Y5/4) 天井崩落土、ローム中心層。
6. 焼土中心層
7. 黒褐色土(2.5Y3/2) ローム土5%、ローム粒(φ2~5mm)含。
8. 焼土中心層
9. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土混じり5%、一部ローム土3%含。
10. ローム土、焼土化したローム土混じりの層。
11. ローム中心層
12. ローム土40%含、袖構成土。
13. 灰中心層
14. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%混じり、縮まりやや良。



0 1:60 2m

第86図 26号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図



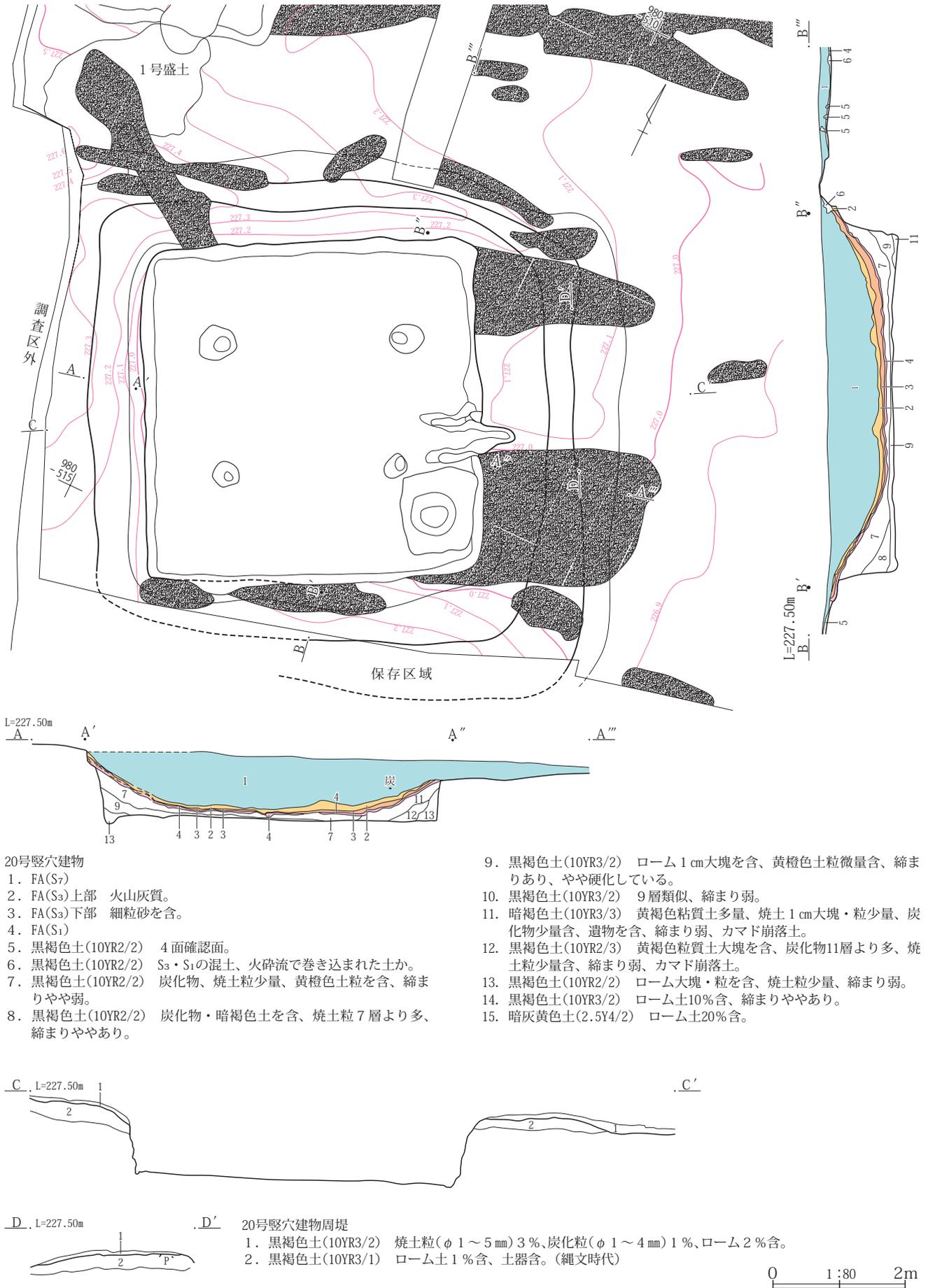
第87図 26号竪穴建物出土遺物図

(6) 20号竪穴建物(第88~99図 PL.46~48・272~276)

位置 調査区北西部の3号祭祀遺構のすぐ南にある。**遺存状況** 周堤西側の端と、南側周堤の大部分が保存区に入るため未調査となる。**埋土状況** 建物の廃棄は、Hr-FA降下のそれほど前ではない。それは、カマドにかけていたままの甕の口縁が、フク土に覆われずにいて、そこにHr-FAが降下してきているからである。フク土は三角堆積である。中央部の床面には、8cmほど土が堆積した後にS₁が堆積している。Hr-FA(S₁)降下時には上屋は無く、壁近くから中央に向かって、三角堆積状に土が積もっている状況であった。**規模** 東西5.3m、南北5.1m、壁高82~92cm、床面積は25.85㎡で、主軸方位は、N-65°-Eである。**掘方** 北側と、特にカマド及び入口付近を掘り下げている。西側には、ローム土が残っているので、地山を掘削したU字形鍬鋤先の刃先の痕跡が良く残っている。西辺北側には、刃先を北側に向け、後進して南向きに掘削した痕跡が16個ほどある。西南隅には、刃先を西に、後進して東向きに掘削した痕跡が20個ほどある。南に向けて後進した後、隅角部で、掘削方

向を変え東向きに後進した可能性がある。**周堤** 四周にあるが、調査が行えた東側は幅2m、高さ15cm、北側は、幅1.3m、高さ8cmほどである。**壁際溝** 幅30cm、深さ6~8cmで四周を廻っている。**柱穴** 4本柱穴で、長径36~52cm、短径30~51cm、深さ43~51cmである。**入口** 南と想定している。貯蔵穴西側の南辺中央に東西長1.5m、南北長1.3mの範囲で、ローム土が敷いてある。硬化している箇所があり、ここを入口と推定している。**硬化面** 先述したように、入口部と推定した箇所のローム土が硬化している。**カマド** カマドは、焚口から煙道長2.3m、焚口幅66cmで、カマドには3個の甕を並置していた。袖に石が2個ずつ計4個芯に置かれている。カマド横には鹿骨と想定されている骨片が多数出土している。**貯蔵穴(P1)** 長径132cm、短径120cm、深さ40~50cmの隅丸方形の落ち込みがあり、ここに蓋板を置いたものと考えられる。その下に、一辺66cmの隅丸方形で、深さ68cmの貯蔵穴がある。

小穴群他 貯蔵穴のすぐ西側、入口と想定している箇所の間に長86cm、幅60cm、高4cmの高まりがある。さら



20号竪穴建物

1. FA(S7)
2. FA(S3)上部 火山灰質。
3. FA(S3)下部 細粒砂を含。
4. FA(S1)
5. 黒褐色土(10YR2/2) 4面確認面。
6. 黒褐色土(10YR2/2) S3・S1の混土、火砕流で巻き込まれた土か。
7. 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物、焼土粒少量、黄橙色土粒を含、縮まりやや弱。
8. 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物・暗褐色土を含、焼土粒7層より多、縮まりややあり。

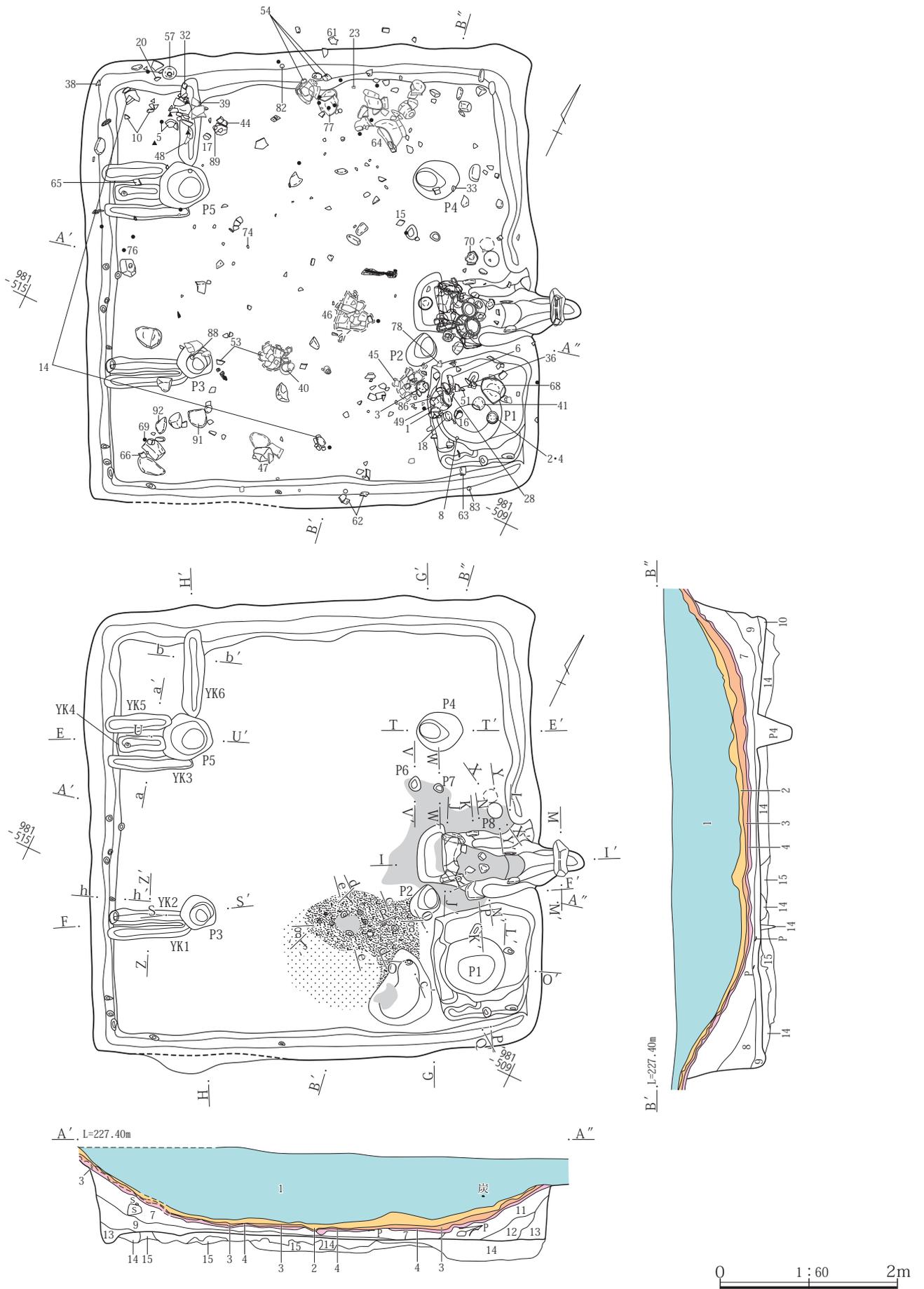
9. 黒褐色土(10YR3/2) ローム1cm大塊を含、黄橙色土粒微量含、縮まりあり、やや硬化している。
10. 黒褐色土(10YR3/2) 9層類似、縮まり弱。
11. 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色粘質土多量、焼土1cm大塊・粒少量、炭化物少量含、遺物を含、縮まり弱、カマド崩落土。
12. 黒褐色土(10YR2/3) 黄褐色粘質土大塊を含、炭化物11層より多、焼土粒少量含、縮まり弱、カマド崩落土。
13. 黒褐色土(10YR2/2) ローム大塊・粒を含、焼土粒少量、縮まり弱。
14. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土10%含、縮まりややあり。
15. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土20%含。

D, L=227.50m

D' 20号竪穴建物周堤

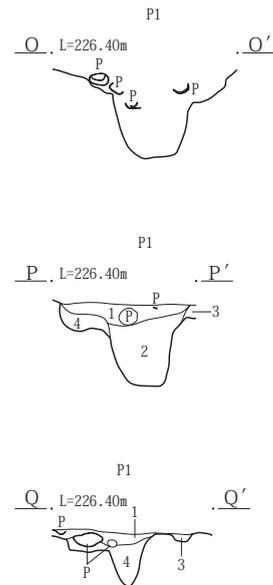
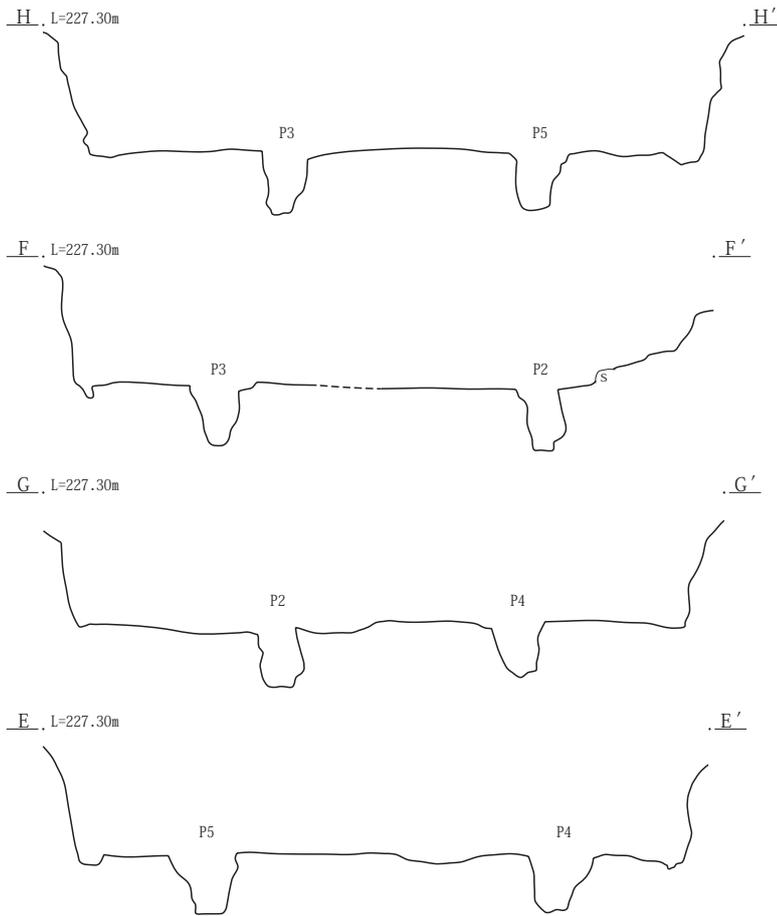
1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒(ϕ 1~5mm) 3%、炭化粒(ϕ 1~4mm) 1%、ローム2%含。
2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム土1%含、土器含。(縄文時代)

第88図 20号竪穴建物全体図・土層断面図



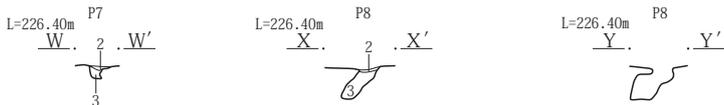
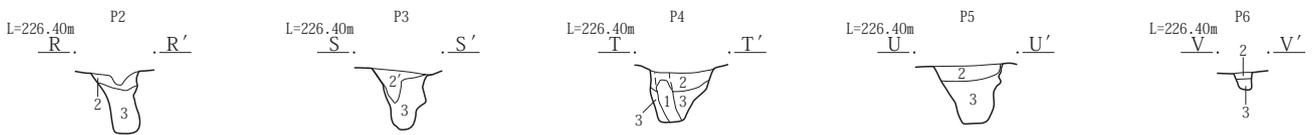
第89図 20号竪穴建物遺物出土状況図・平面図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



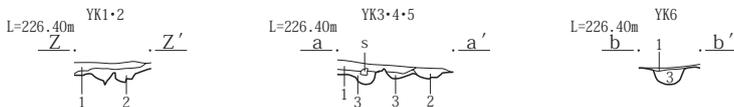
20号竪穴建物 P 1

1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒(φ 1 ~ 3 mm)、炭化粒(φ 1 ~ 2 mm) 1% 含、土器含。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒(φ 1 ~ 2 mm)、ローム粒(φ 1 ~ 2 mm) 極少量含、締まりやや弱。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒極少量含。
4. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒 1%、焼土粒(φ 1 ~ 3 mm) 極少量含。



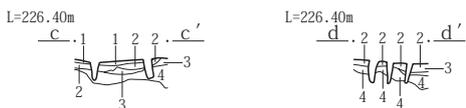
20号竪穴建物 P 2 ~ P 8

1. FA(S₃)下部 中心層フカフカ柱が遺存し腐朽した後にS₃下部に入り込む。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土 2%、焼土 1% 含。
- 2'. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土ブロック 20% 含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 締まり弱、フカフカ。



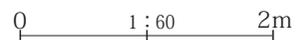
4区5面20号竪穴建物YK 1 ~ YK 6

1. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム 20% 含、締まりやや良。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム 5% 含、締まりやや良。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱。



20号竪穴建物小穴群

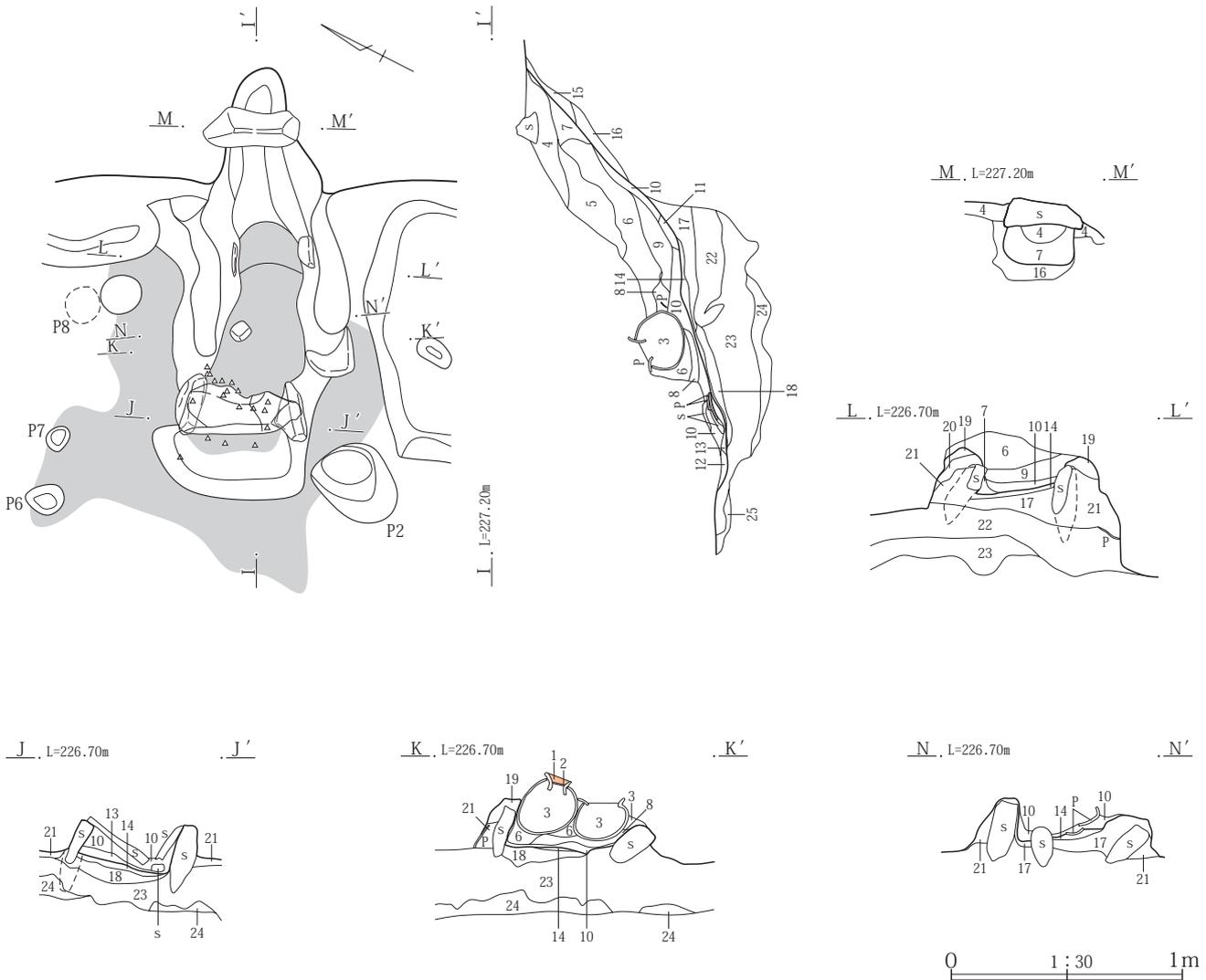
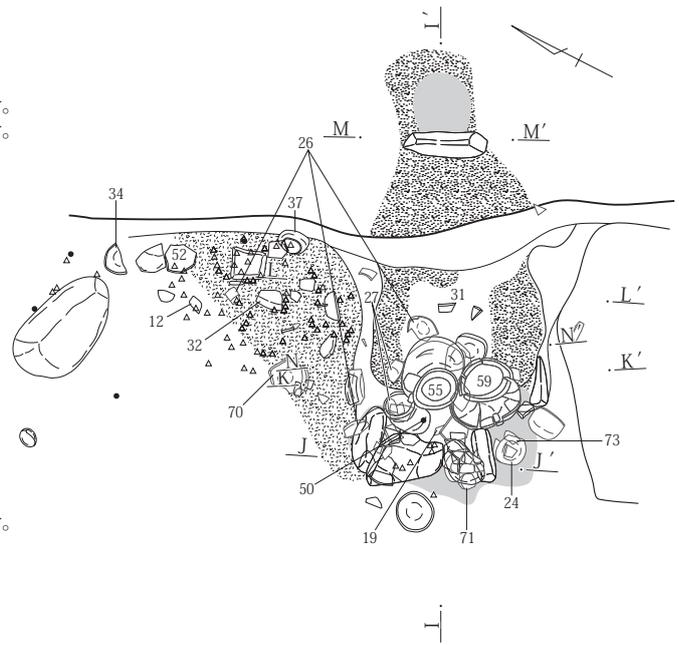
1. ローム土中心層 ローム土 60%、灰黄褐色土(10YR4/2) 40% 含、締まり良、床面。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土 5% 含。
3. ローム中心層 ローム土 80%、灰黄褐色土(10YR4/2) 20% 含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土 2% 含。



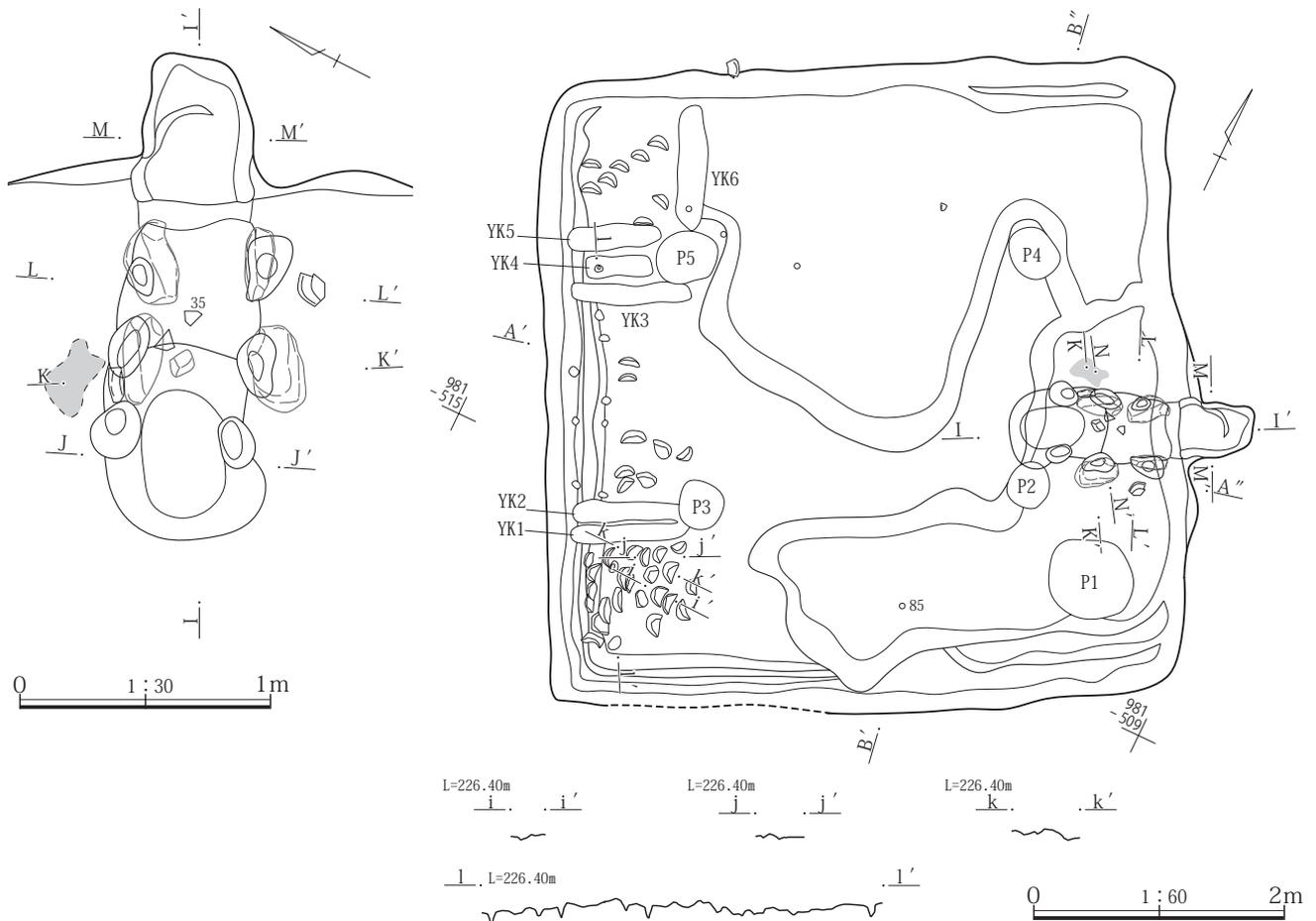
第90図 20号竪穴建物断面他図

20号竪穴建物カマド

1. FA(Ss)下部
2. FA(Si)
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物極少量含、やや締まり弱。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土(φ 1mm)、ローム土、炭化物極少量含。
5. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒(φ 1~2mm)、炭化粒(φ 1~2mm) 1%含。
6. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒(φ 1mm)極少量、ローム土 1%含。
7. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土 3%含。
8. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土多く30%含。
9. 褐色土(7.5YR4/4) 焼土 5%、黒褐色土(10YR3/2) 10%含。
10. 橙色土(7.5YR6/6) 焼土多く含。
11. 焼土中心層 灰 5%含。
12. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土50%含。
13. ローム土、焼土中心層 焼土化したロームを中心とする層。
14. 褐灰色土(10YR5/1) 灰中心層、焼土20%含、骨がいくつか出土。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土 1%含。
16. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム土、2%含。
17. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 焼土、灰 5%含。
18. 橙色土(7.5YR6/6) 焼土中心層。
19. 明黄褐色土(2.5Y7/6) ローム中心層、カマド袖土。
20. 黄褐色土(2.5Y5/3) 焼土、炭化物10%含。
21. 黄褐色土(2.5Y5/3) 袖、床の基礎土、焼土粒、炭化粒、ローム粒 2%含。
22. 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム土多く、灰、焼土、炭化物 2%含。
23. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土、焼土粒 1%含、締まりやや弱。
24. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒 2%含、締まり良。



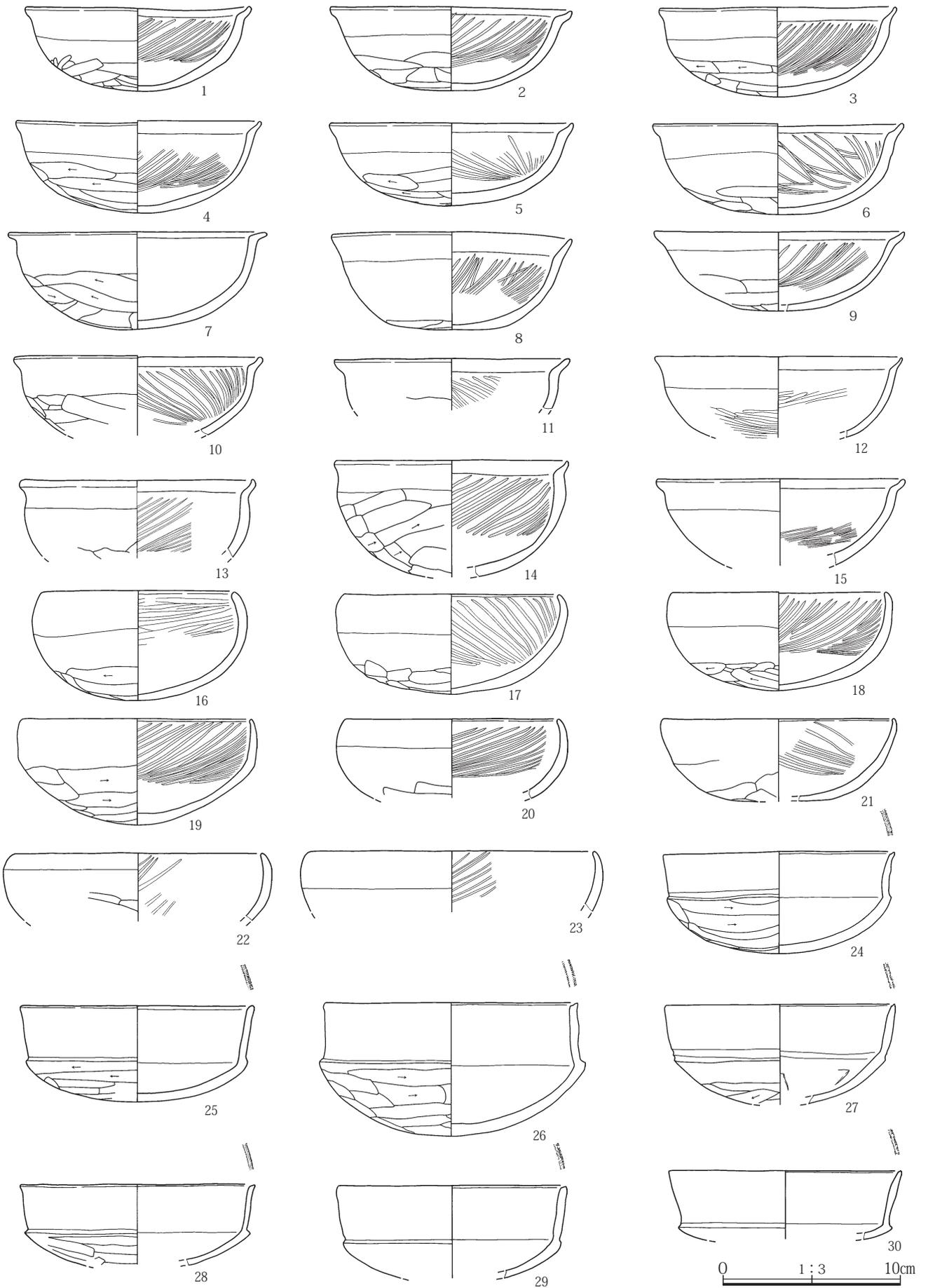
第91図 20号竪穴建物カマド図・土層断面図



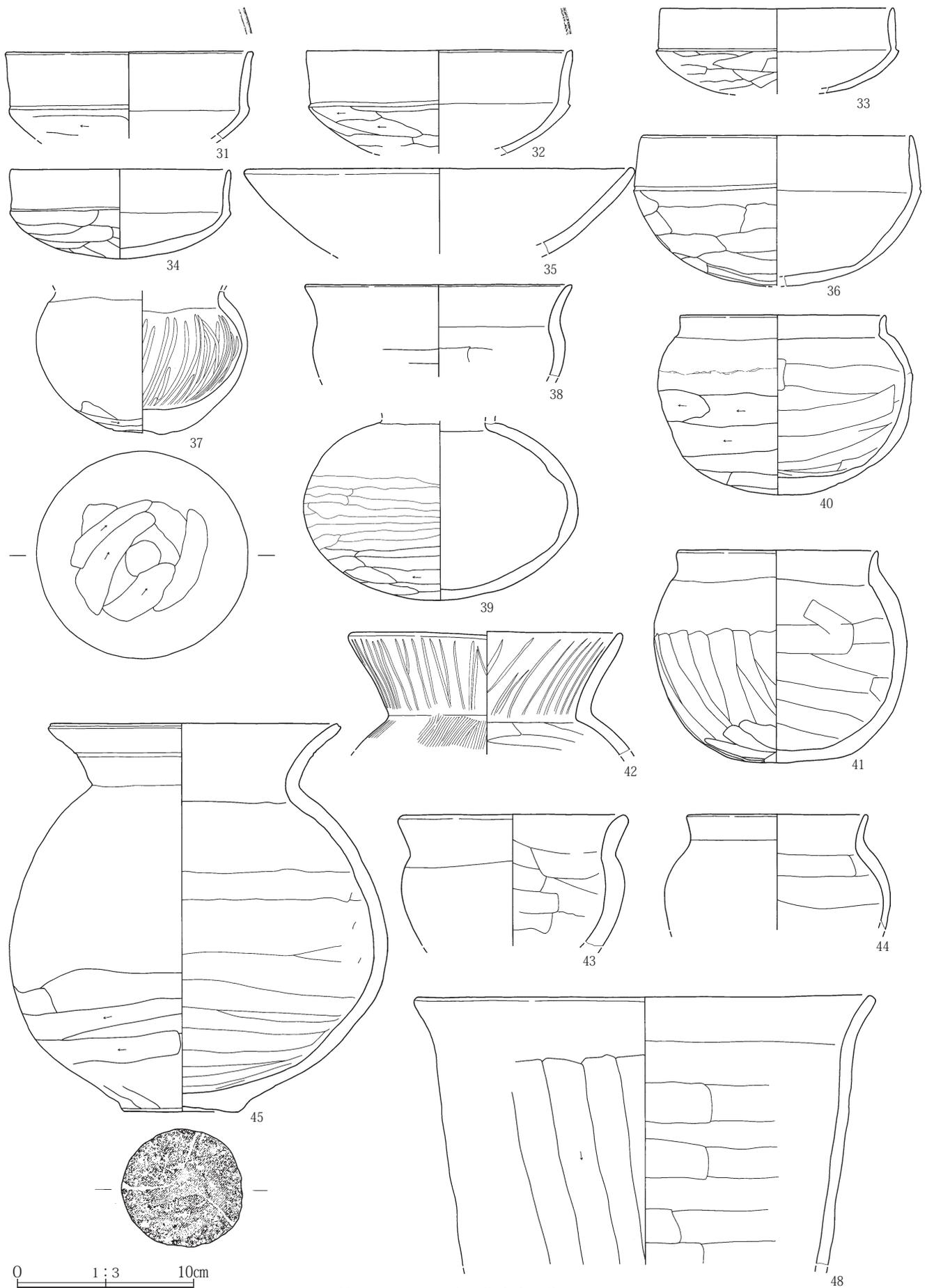
第92図 20号竪穴建物カマド掘方図・竪穴建物掘方図・断面図

に、この高まりの北側に東西方向に10個の小ピットがある。径が4～6cm、深さ16～18cmのものである。何か板状のものを置いた台座となるものかもしれない。**床面小溝** 西辺の柱穴2つを起点にして、それぞれに2～3の溝が西壁に向けてあり、さらに北西隅の柱穴を起点に北側へ溝がある。空間利用を示す施設であろう。**炭化材** 破片が多く同定困難であるが、コナラが1片確認された。**種実** カマド燃焼部よりイネ(胚乳)とアカザ属(種子)が出土した。**赤色顔料** 顆粒状のものが7片出土した。**骨** 鹿の骨片と同定されたものも含めて、骨小片がカマド左袖脇より多数出土した。**出土土器**(第93～99図 PL.271～276) 豊富な量があり、カマド、貯蔵穴周辺に集中して出土した。カマドには、小型甕BⅡ②(第95図50)、壺B②(第96図55)、甕A②(第96図59)が掛けである。甕は、カマド前や貯蔵穴周辺から出土しており、型式は、一孔持つB類と想定されるものが中心で合計4個体出土しており特徴的である。建物の北辺にもいくつか甕などが出土しているが、一部は、3号祭祀遺構外側の土器が火砕流で流された可能性もある。小型甕、埴、

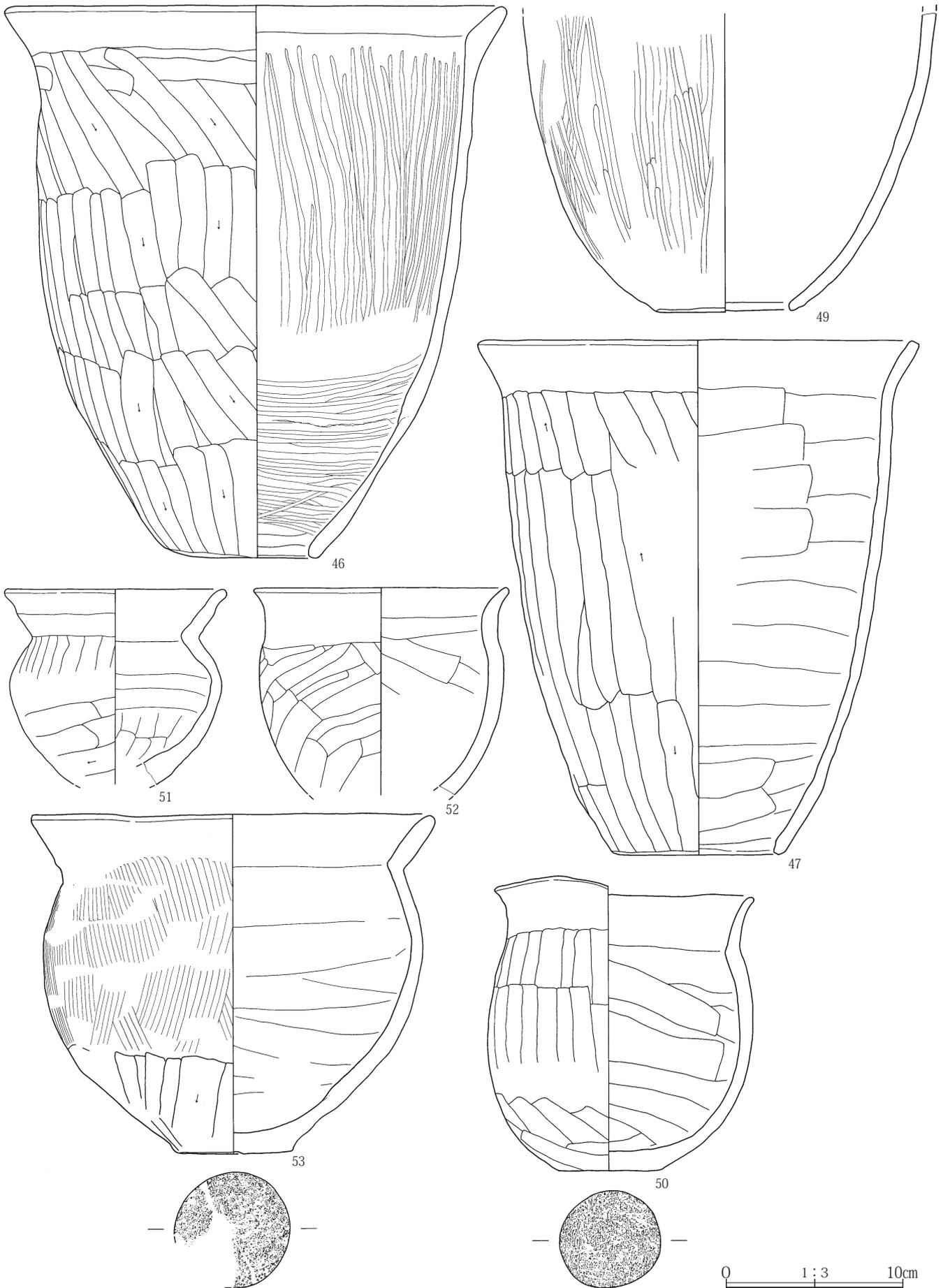
壺、甕、甕が多く出土した。須恵器も杯蓋、甕の破片が出土している。それ以外に、管玉4、滑石製白玉5、砥石2、鉄製錐かと推定される鉄製品3が出土した。カマドの中、及び袖から焼骨片が出土し、一部は鹿の骨ということが同定により分かっている。甕・甕の量の多さや、管玉・白玉の出土、及び、この建物のすぐ北にある3号祭祀とのことを考慮すると、この建物が、何らかの祭儀に係る建物である可能性も考えてよい。**年代** Hr-FA降下すぐ前の段階で廃棄されていることが分かる貴重な例。杯AはⅡ～Ⅳ類があり、杯Bは、Ⅱ類が多く、杯CもⅡ類が多い。杯Aと杯Cの新しい要素を持つ杯群が主要なセットであり、甕も長胴化を示すものがいくつか出土している。5世紀末と推定する。



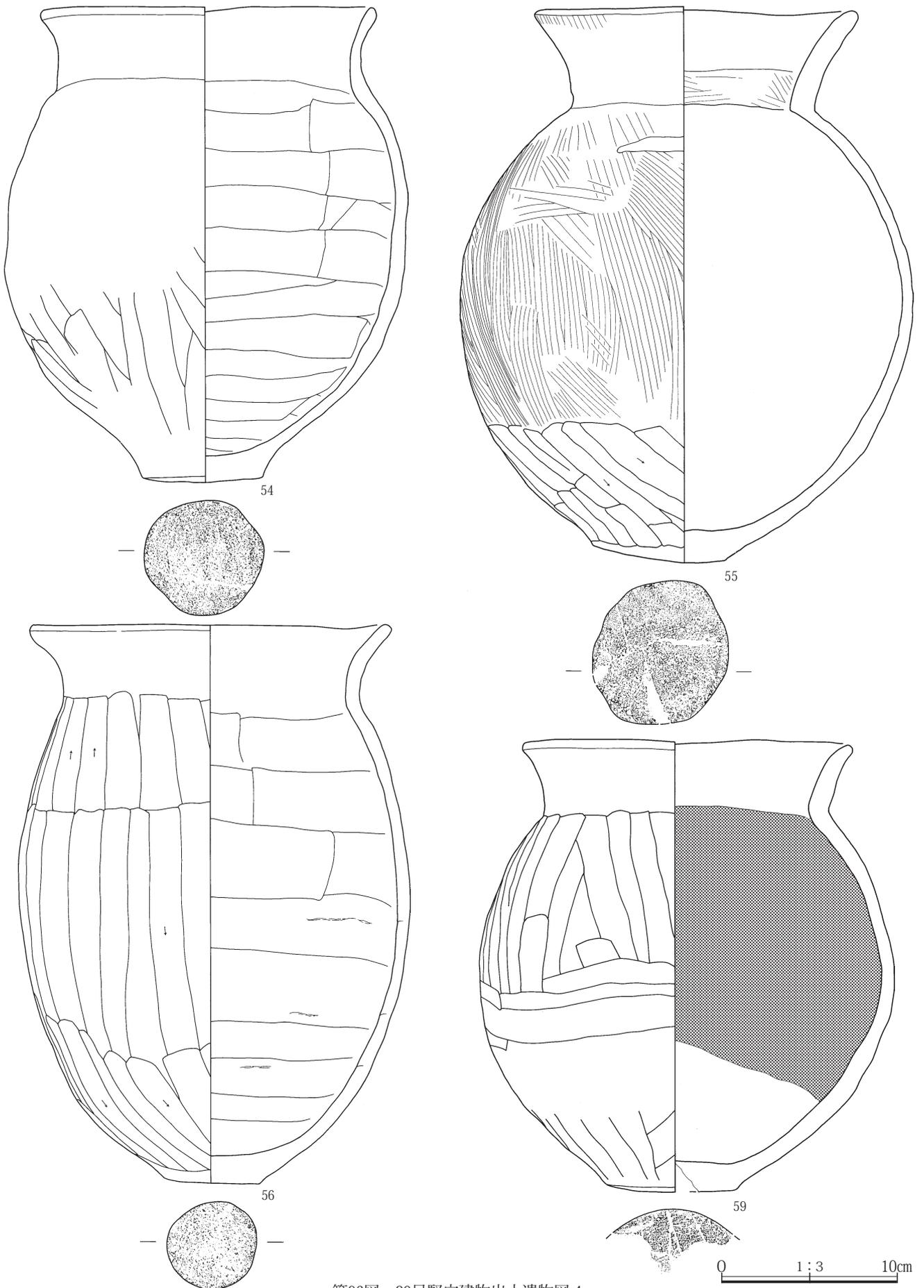
第93图 20号竖穴建物出土遺物图1



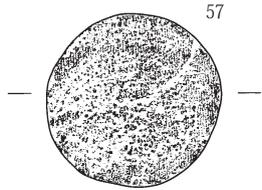
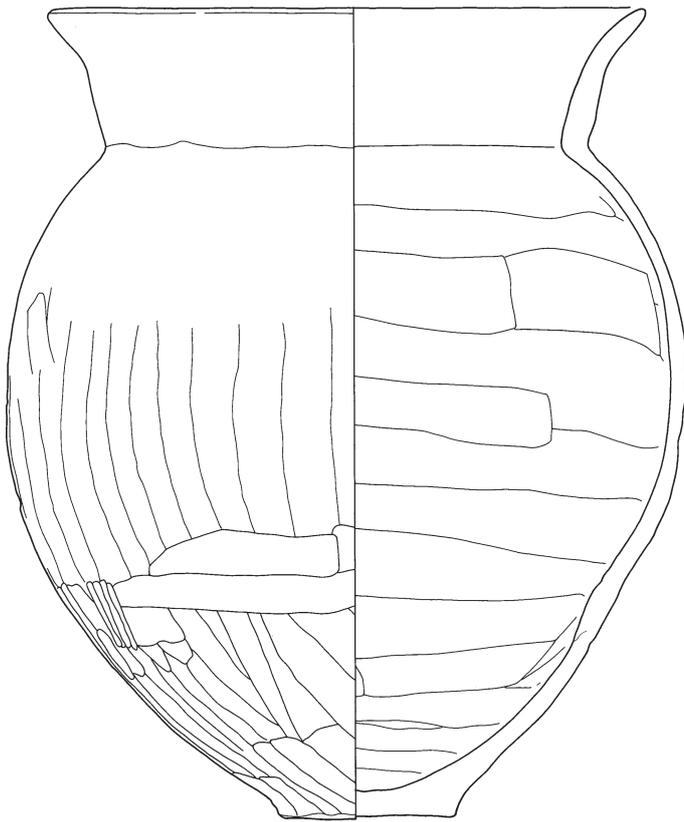
第94図 20号竪穴建物出土遺物図2



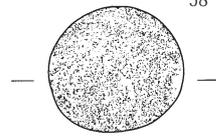
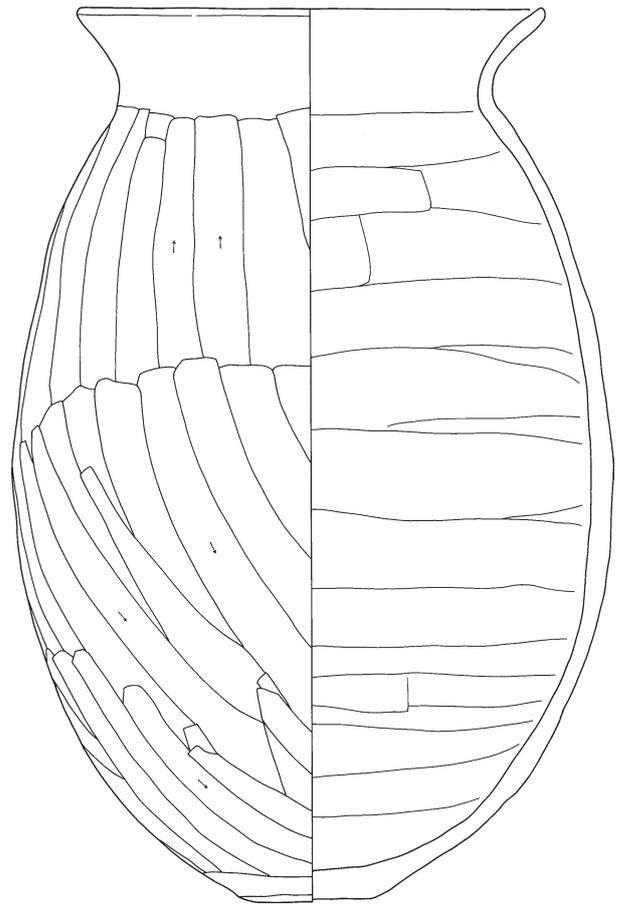
第95图 20号竖穴建物出土遺物图3



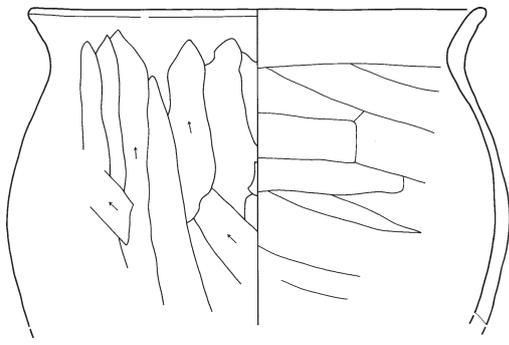
第96図 20号竪穴建物出土遺物図4



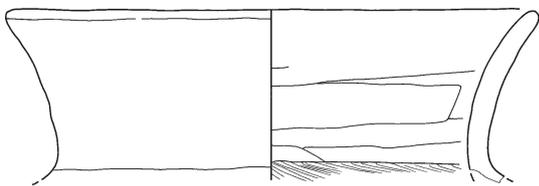
57



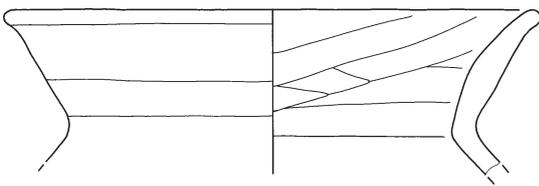
58



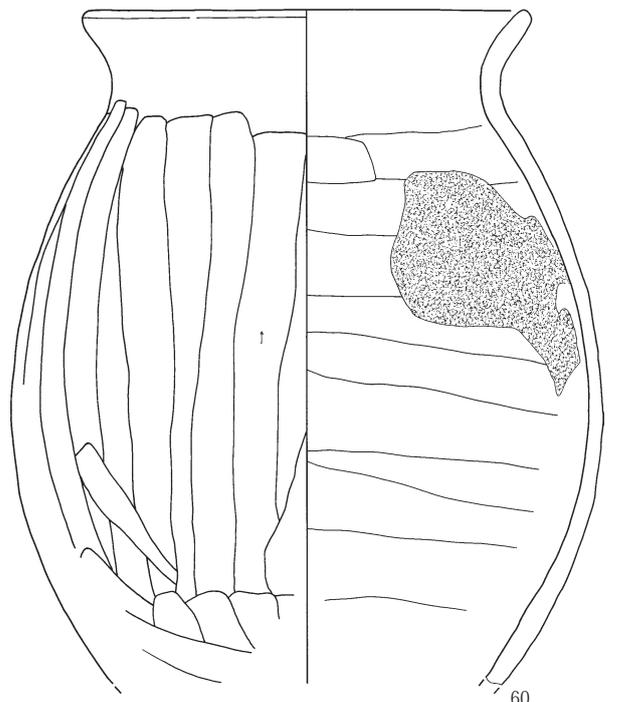
61



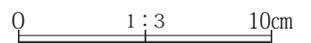
62



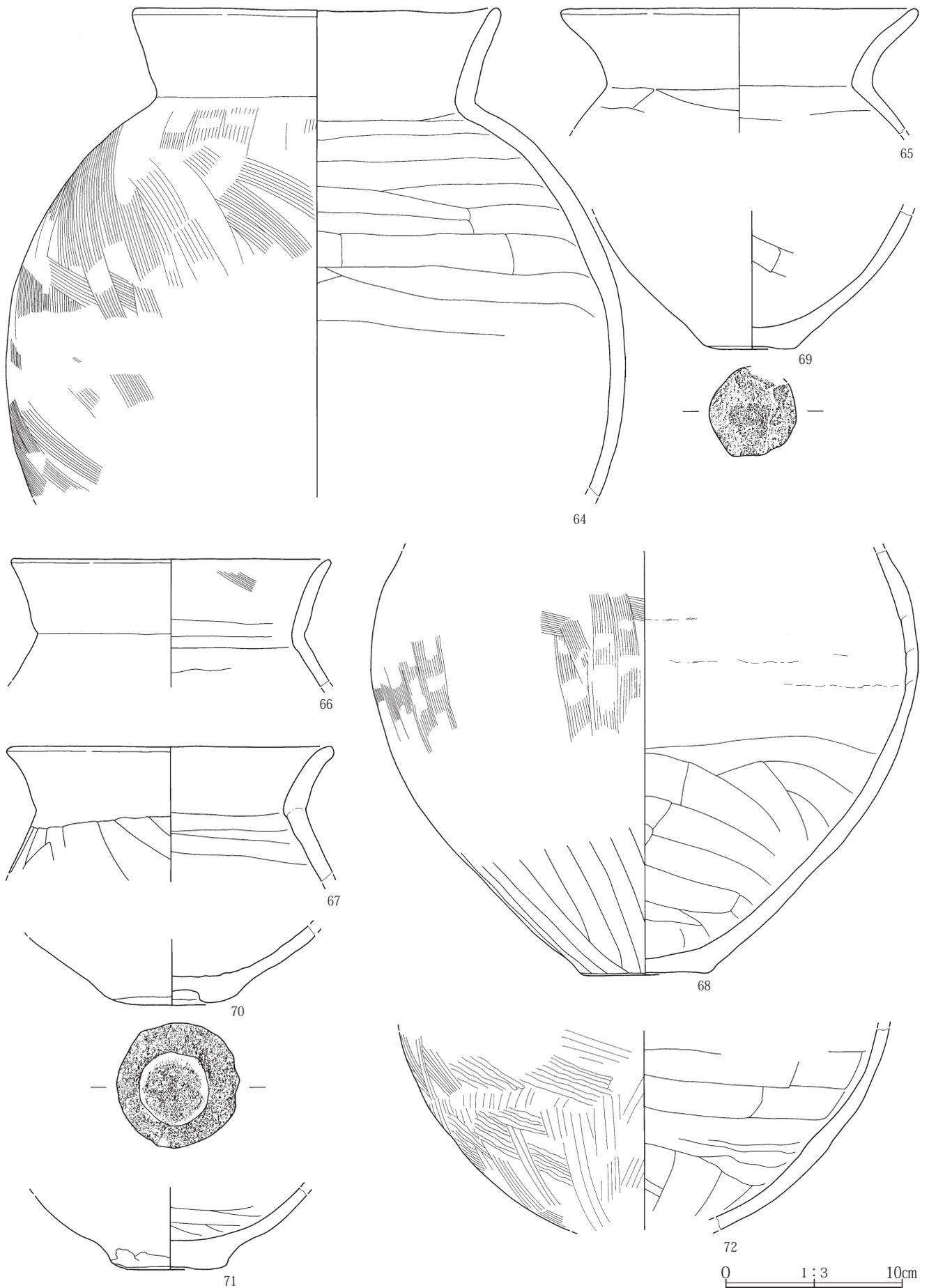
63



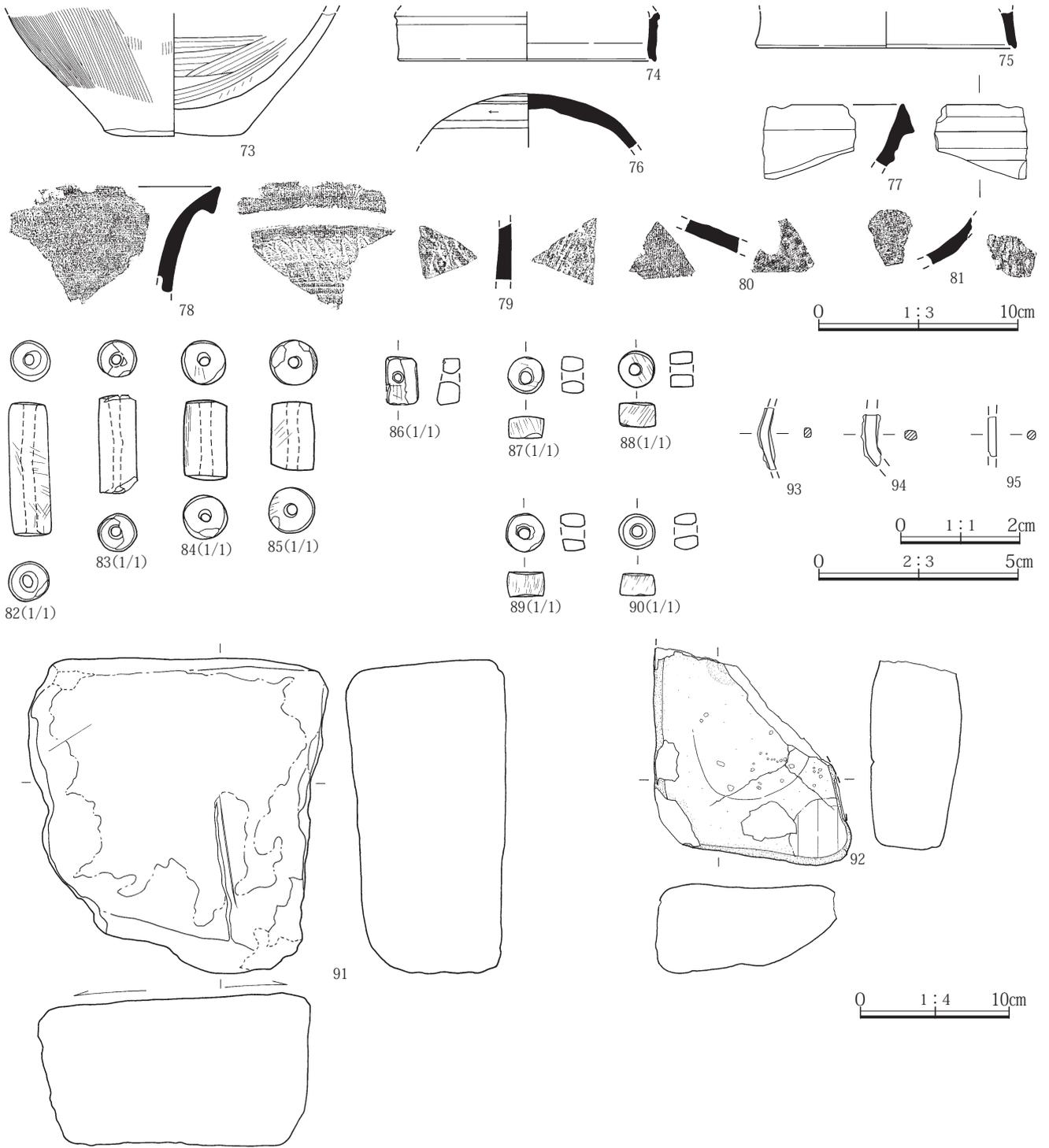
60



第97図 20号竖穴建物出土遺物図5



第98図 20号竪穴建物出土遺物図6

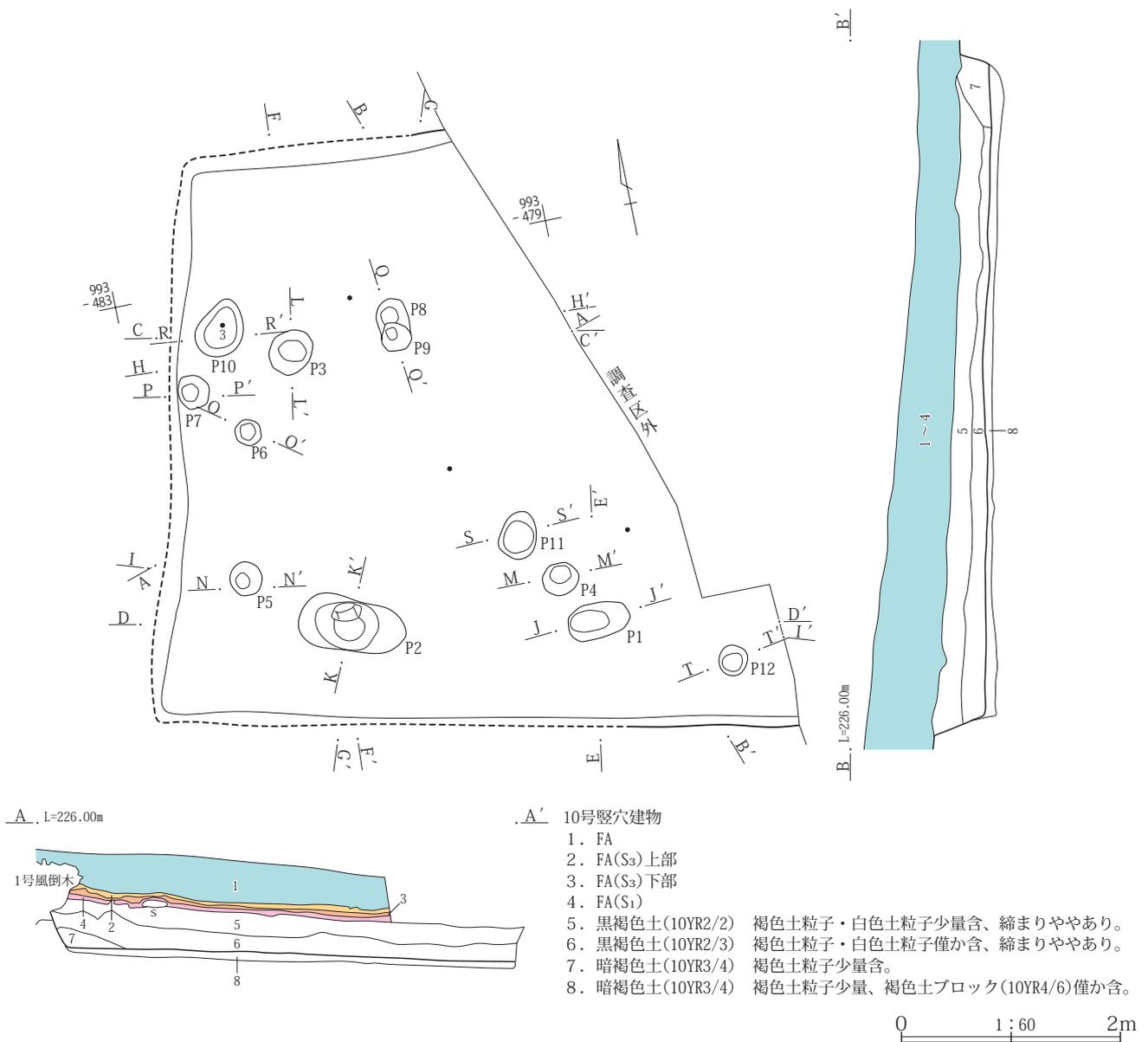


第99図 20号竖穴建物出土遺物図7

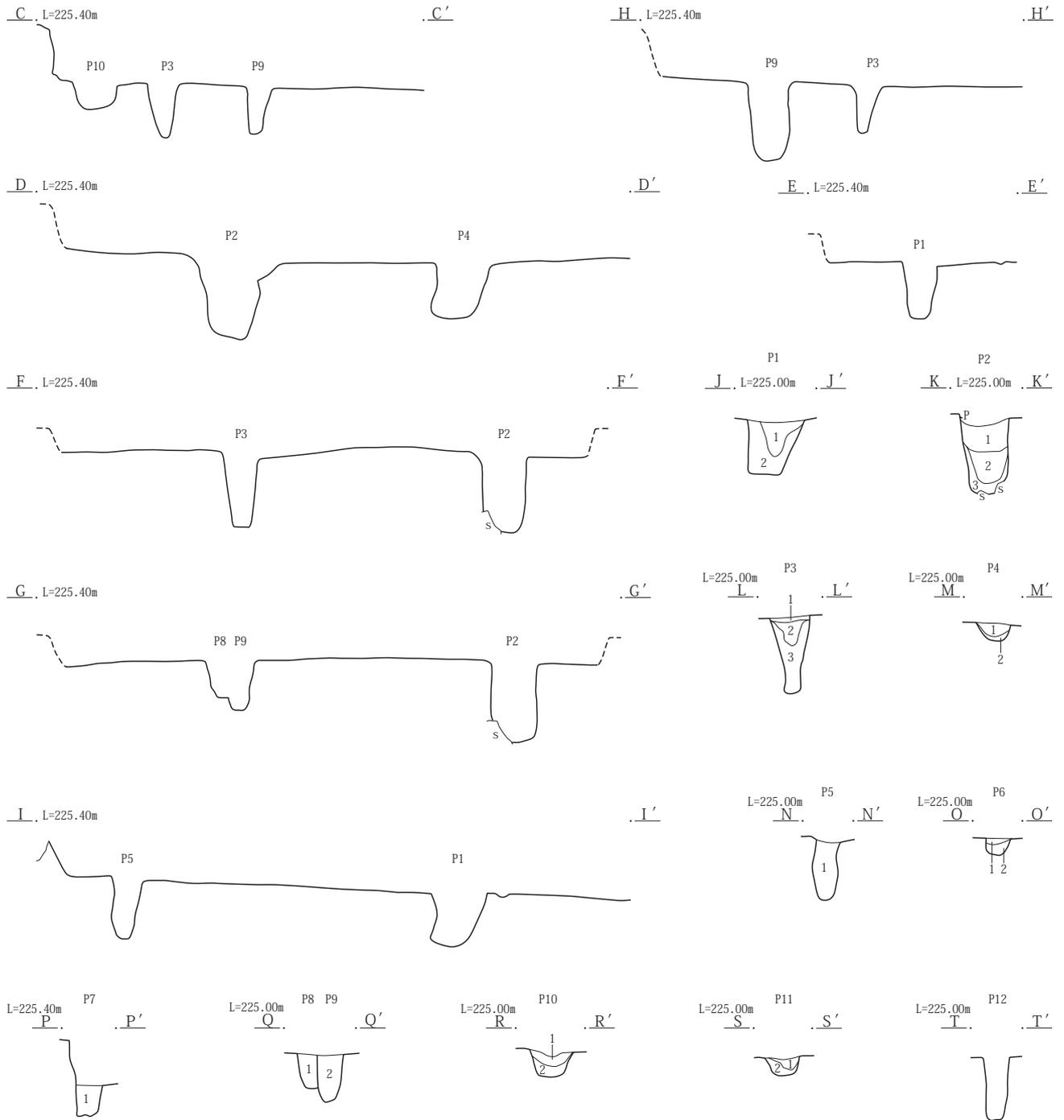
(7) 10号竪穴建物(第100～102図 PL.49・277)

位置 調査区北東部端にあるもので、28・25号竪穴建物に引き続いて東に延びる一連の建物群の東にあるものであるが周堤の状況からつながるものでは無い可能性が高い。**遺存状況** 建物の壁を確認するのが難しく、はっきり確認したのは、東壁断面においてである。東側が調査区外である。**埋土状況** 廃棄後、少し窪んだ状態でHr-FAが降下している。**規模** 復元であるが、南北辺5.25m、東西5.97m+、壁高35～45cm、現状の床面積22.8㎡で、主軸方位は、N-76°-Eである。**掘方** 全体に下げている。**周堤** 確認できなかった。**壁際溝** 無し。**柱穴** ピットがいくつか確認され、その中で、柱穴に該当するものを検出し、基本的には4本柱の

ものと考えている。柱穴は、長径44～99cm、短径33～49cm、深さ56～81cmである。**カマド** 確認できていない。**貯蔵穴** 確認できていない。**出土遺物**(第102図 PL.277) 杯B I、杯C IIや小型甕片及び須恵器甕片が出土しているのみである。**年代**(第132図 PL.277) 内杯BはI類で、杯CはII類であり、5世紀後半と推定する。



第100図 10号竪穴建物平面図・土層断面図



10号竖穴建物 P 1

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒(φ 1 ~ 3mm) 1% 含。
2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ 1 ~ 4mm) 2% 含。

10号竖穴建物 P 2

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱、炭化粒(φ 1 ~ 2cm)極少量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱、ローム粒(φ 1 ~ 2cm)極少量含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱、ローム土10%含、壁の崩泥土。

10号竖穴建物 P 3

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ 1 ~ 2mm) 2% 含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1 ~ 2mm) 2% 含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土(φ 1 ~ 8mm) 3% 含。

10号竖穴建物 P 4

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒(φ 1 ~ 4mm) 2% 含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒(φ 1cm) 1% 含。

10号竖穴建物 P 5

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒(φ 1 ~ 3mm) 1% 含。

10号竖穴建物 P 6

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1mm) 2% 含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒(φ 1cm) 1% 含。

10号竖穴建物 P 7

1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒(φ 1 ~ 3mm) 1% 含、締まりやや弱。

10号竖穴建物 P 8・P 9

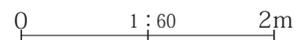
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1 ~ 2mm) 2% 含、締まりやや弱。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1 ~ 4mm) 3% 含、締まりやや弱。

10号竖穴建物 P 10

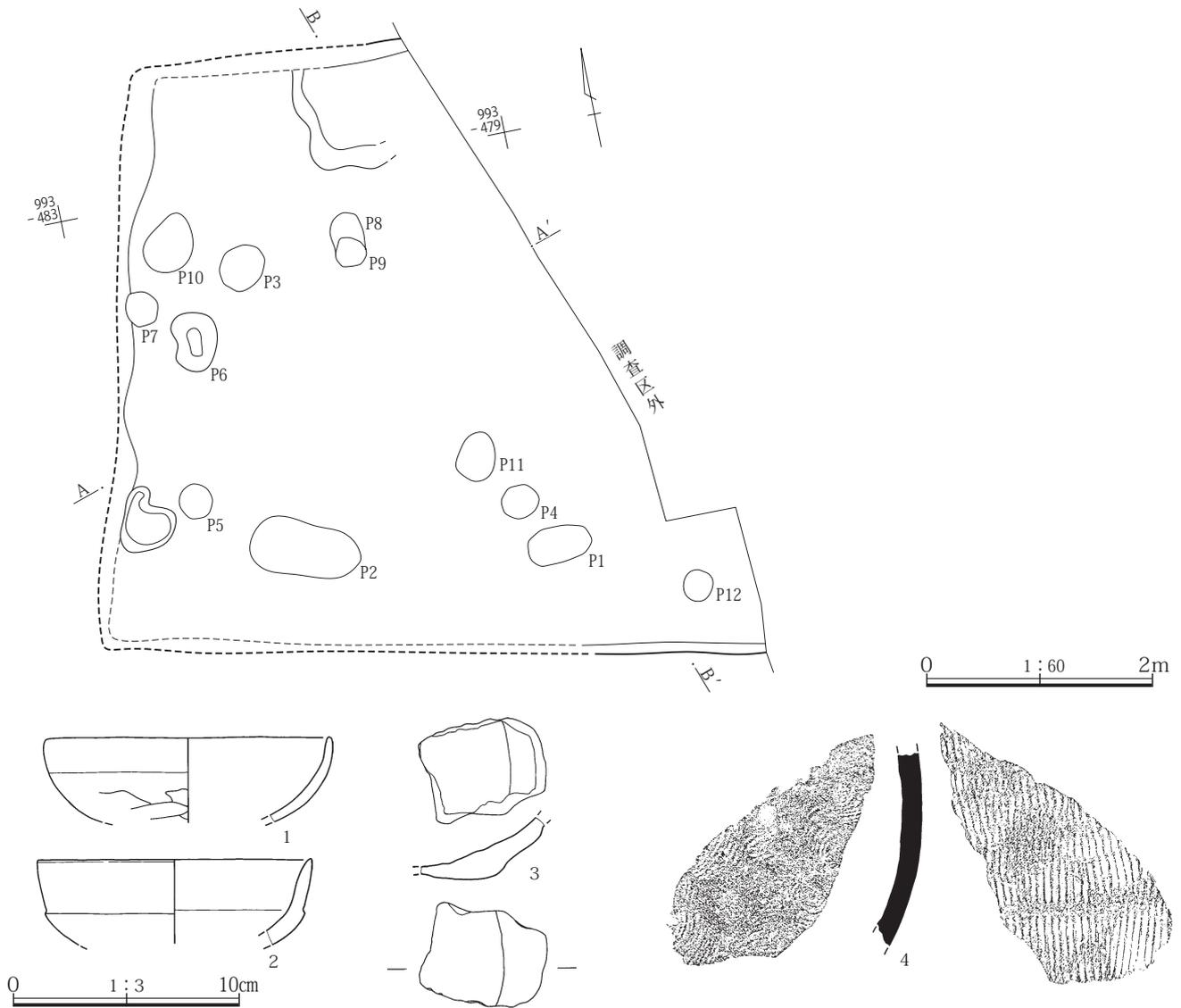
1. 黒褐色土(10YR3/1) 明黄褐色土(10YR6/8)粒(φ 1 ~ 2mm) 1% 含。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱、ローム粒(φ 1cm)極少量含。

10号竖穴建物 P 11

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ 1 ~ 2cm) 1% 含、締まりやや弱。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 締まりやや弱、ローム粒(φ 1cm)極少量含。



第101図 10号竖穴建物断面他図



第102図 10号竪穴建物掘方図・出土遺物図

(8) 9号竪穴建物(第103～110図 PL.50・51・277)

位置 この調査区での北側の建物群とはやや離れた、東部中央に位置している。**遺存状況** 竪穴部は完存しているが、周堤の痕跡は確認できない。**埋土状況** 廃棄後にやや窪みがある段階で、Hr-FAが降下している。**規模** 東西5.8m、南北5.8m、壁高11～38cmで、床面積は31.6㎡、主軸方位は、N-4°-Eである。**掘方** カマドのある箇所、東辺、南辺、炉の東側などに床下に土坑状のものを掘削している。いずれも湿気抜きと考えている。**壁際溝** 幅15～25cm、深さ8～15cmで四周を巡っている。**柱穴** 4本柱穴で長径23～35cm、短径22～30cm、深さ19～52cmである。

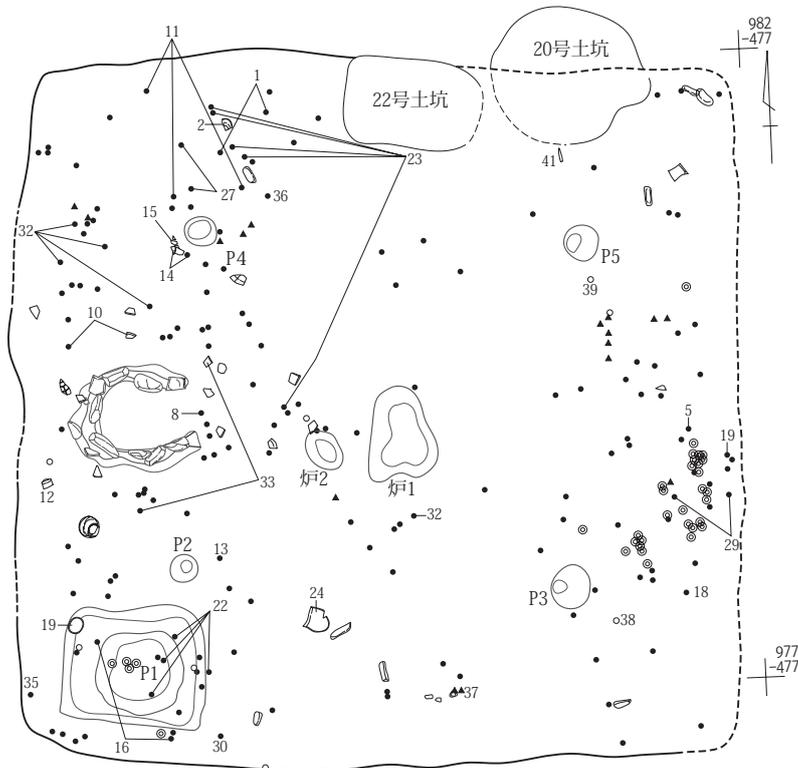
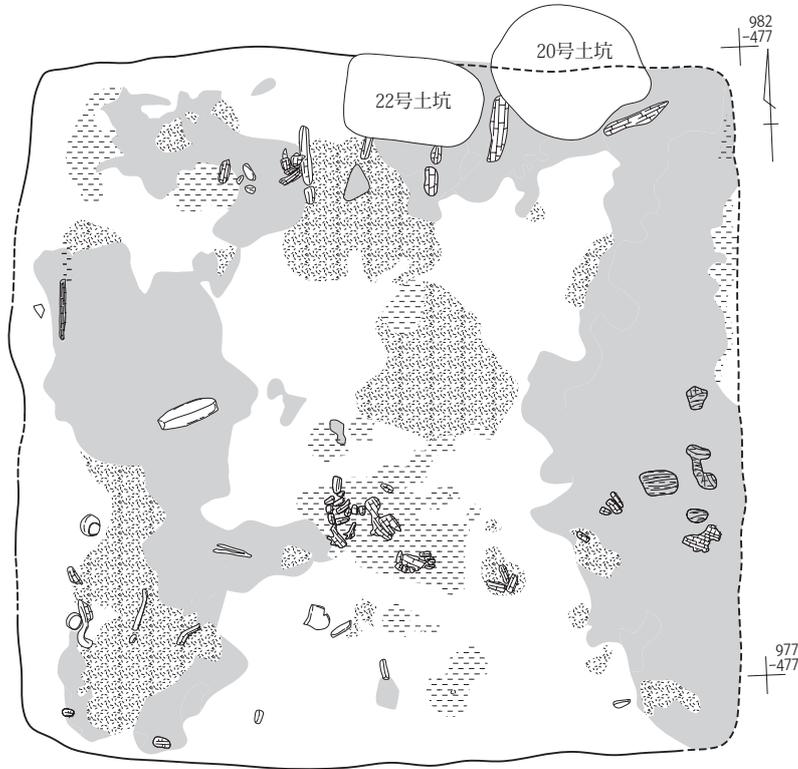
入口 他の建物の例から南側と推定する。**硬化面** カマド前中心に硬化している。**カマド** 焚口～煙道長88cm、焚口幅82cmの小型で煙道が壁まで確認できず、途

中で上がっているものである。袖に芯に石を埋めてあり、それを土で被せている。支柱石が燃焼部の中央にある。古い段階のカマドと想定される。大きな遺物の出土は無い。**炉** 炉1は、長径76cm、短径53cm、深さ5cmで、カマドの東側の建物中央に、炉2は長径35cm、短径25cm、深さ2cmの小型のものである。カマドと炉が併用されている。**貯蔵穴(P1)** 方形の段差が上面にあり、その下に隅丸方形の貯蔵穴が開いている。上面の方形の段差は、東西73cm、南北64cm、深さ5cmほどである。この段差状にクリ材の蓋板を載せるのである。この方形の段差の中央に、東西45cm、南北43cm、深さ15cmの浅めの貯蔵穴が造作されている。興味深いのは、貯蔵穴の周囲に小さな溝状の窪みが5つと小さなピットが9個ほどあり、貯蔵穴に伴うものと推定される。**床面小溝** 掘方を確認するために調査すると、東辺には柱穴に沿うように溝が

柱穴から壁に向かい東壁に延びる。西辺は、北部のみに柱穴から西壁にむかって伸びている。特徴的なのは北辺で、8条の溝が柱間線より内側から、それぞれ、北側東西の柱穴を起点にして、その内側に8本の溝が延びている。小 穴 壁周溝内部にも多くの小ピットが特に南北

東辺から多く検出されている。これもカヤなどの壁材を押しやるための施設ではないかと考えている。

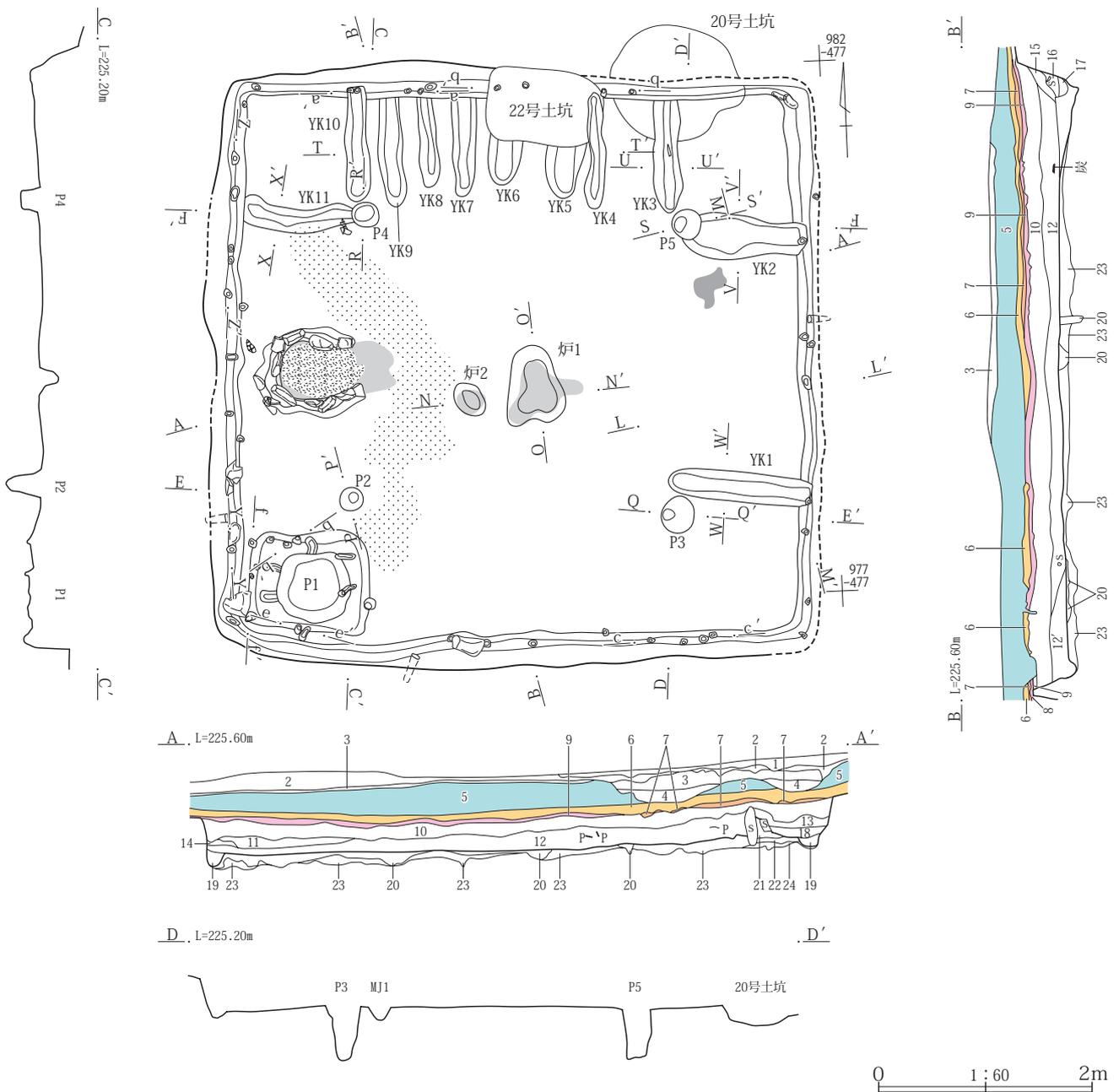
炭化材 3号竪穴建物と同じく炭化材及び有機質の遺存が良い。特徴的なのは、コナラ・クヌギ・クリが多いことは3号住と同じであるが、ヤマグワやタケなどが南



第103図 9号竪穴建物炭化材等出土状況図・遺物出土状況図

側から、北東隅からは、アサダが出土し、多様な材を利用した建物造りを行っている。さらに、先述したが、貯蔵穴の蓋板が残存しており、クリ材できていることが分かった。**種実** この建物は焼失建物と考えられるが、それらの建築部材が焼けて炭化した下面、及び貯蔵穴内に、モモが総計50個あり、そのうち、30個にネズミが齧った食傷痕跡があった。火を受ける前にネズミにより齧られた可能性がある。いずれにしてもこれだけの量のモモが一棟の建物から出るのは珍しいと思われる。このモモが大量に出た意味を検討する必要がある。**赤色顔料** 計17点に及ぶ赤色顔料粒が出土している。そのうちの1

点は赤玉である。いずれも、赤土を主材とした非パイプ状ベンガラであることが分かった。赤玉は、1号堀立柱建物から出土した赤玉群より、色味・縮まりともに良いもので、焼いている可能性もあるもの(ただ、この建物が焼失建物なので火災時に焼けた可能性も考える必要がある。)で、赤玉を赤色顔料の素材と考える場合の例として上げられる。**出土遺物**(第108～110図 PL.277・278) 杯AⅡ～Ⅳがあり、杯BⅡ、杯CⅠ～Ⅲがある。杯CはⅡ類が多い。杯A・Bが少なく、杯Cが多く出土している。椀FⅡも出土している。小型甕が多く出土しており、完形品に近いものでは、小型甕CⅡ①(第109図23)、AⅠ②(第

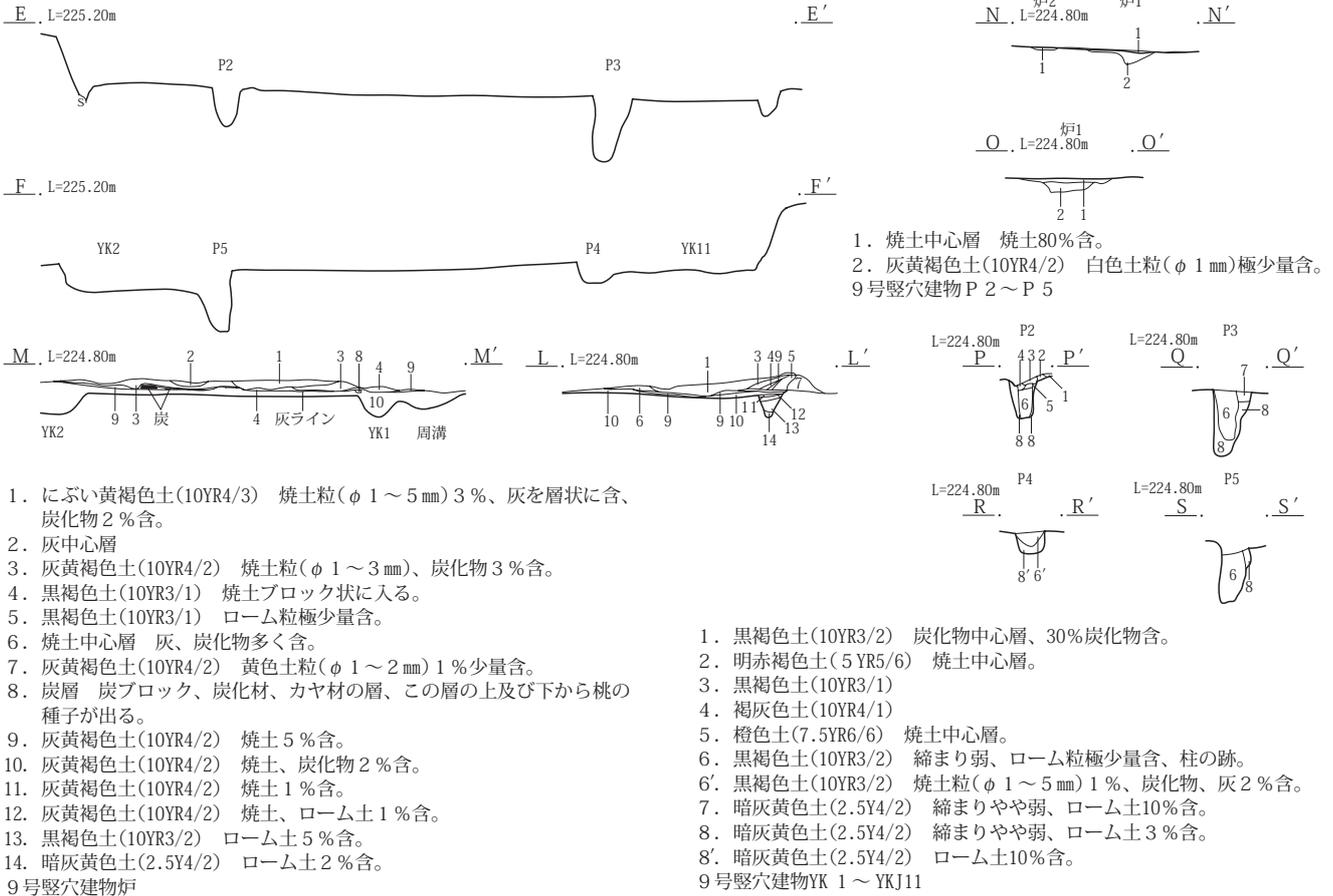


第104図 9号貯穴建物平面図・土層断面図

9号竪穴建物

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) FP粒直下の層。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色(2.5Y5/6)砂質土含、ブロック状に含。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/4) 砂質土含。
4. にぶい黄褐色土(10YR7/3) シルト質土。
5. FA(S₇)
6. FA(S₃)上部
7. FA(S₃)下部
8. FA(S₁) S₂に近い層。
9. FA(S₁)
10. 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物(φ 1~2mm)極少量、黄色土粒(φ 1~2mm)少量含。
11. 黒褐色土(10YR3/1) 黄色土粒(φ 1mm)少量含。
12. 暗褐色土(10YR3/3) 黄色土粒(φ 1mm)少量含。

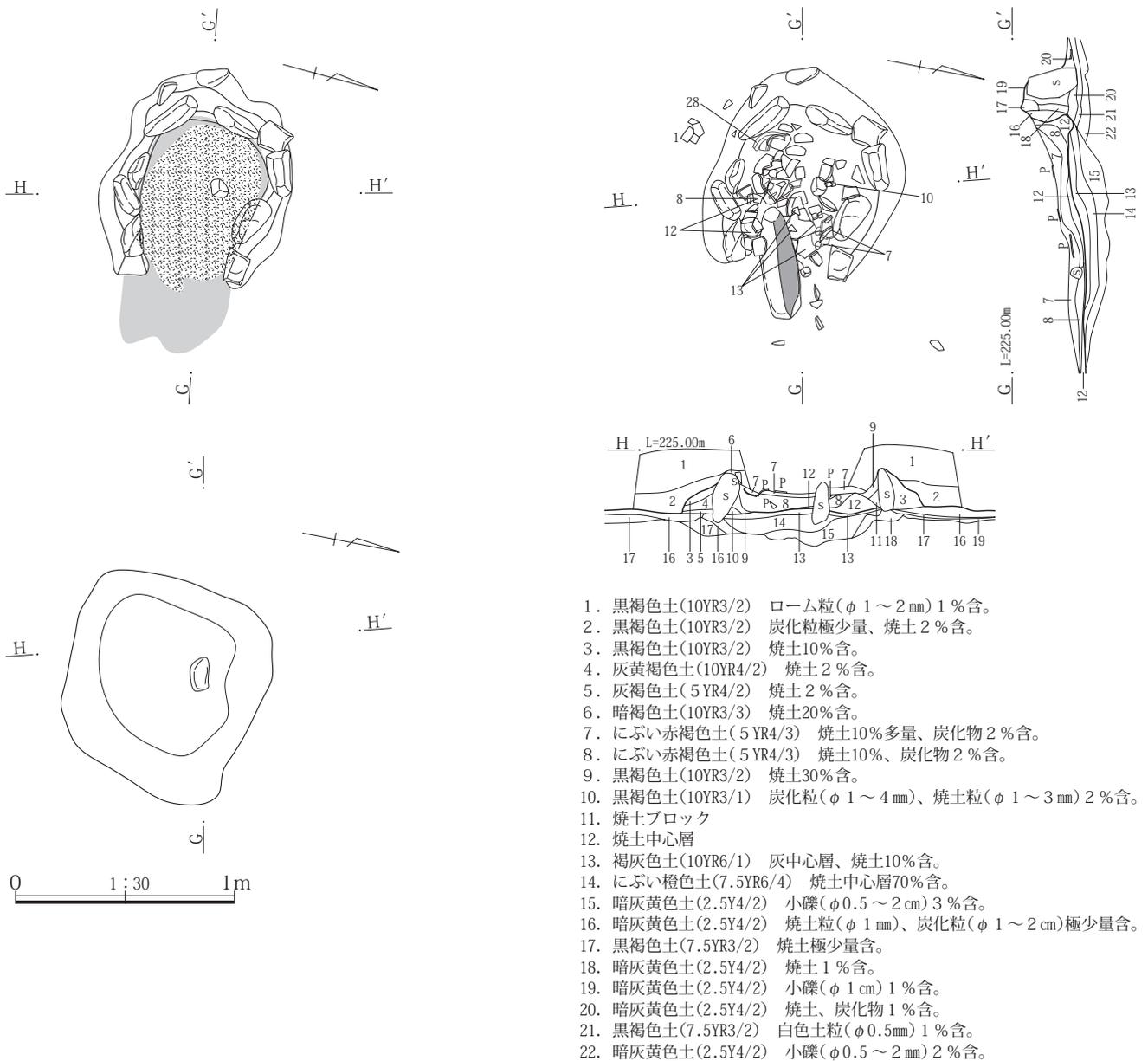
- 12'. 暗褐色土(10YR3/3) 黄色土粒(φ 1mm)含。
 13. 暗褐色土(10YR3/3) 黄色土粒(φ 1mm)極少量含。
 14. 黒褐色土(10YR3/1)
 15. 黒褐色土(10YR3/1) 黄色土粒(φ 1~2mm)極少量含。
 16. 黒褐色土(10YR3/1) φ 3cm 1個含。
 17. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土(10YR4/3)含。
 18. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 焼土粒(φ 1~2mm) 2%含。
 19. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
 20. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土10%、白色土粒(φ 1~3mm)極少量含。
 21. 焼土中心層
 22. 暗灰黄色土(2.5Y4/2)
 23. 黄褐色土(2.5Y5/3) 小円礫(φ 1~5mm)極少量含。
 24. 黄褐色土(2.5Y5/3) 小円礫(φ 1~3mm)極少量含。
- 9号竪穴建物土屋根



1. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土粒(φ 1~5mm) 3%、灰を層状に含、炭化物 2%含。
 2. 灰中心層
 3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒(φ 1~3mm)、炭化物 3%含。
 4. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土ブロック状に入る。
 5. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒極少量含。
 6. 焼土中心層 灰、炭化物多く含。
 7. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄色土粒(φ 1~2mm) 1%少量含。
 8. 炭層 炭ブロック、炭化材、カヤ材の層、この層の上及び下から桃の種子が出る。
 9. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土 5%含。
 10. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、炭化物 2%含。
 11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土 1%含。
 12. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、ローム土 1%含。
 13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土 5%含。
 14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土 2%含。
- 9号竪穴建物炉

1. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層、30%炭化物含。
 2. 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土中心層。
 3. 黒褐色土(10YR3/1)
 4. 褐灰色土(10YR4/1)
 5. 橙色土(7.5YR6/6) 焼土中心層。
 6. 黒褐色土(10YR3/2) 縮まり弱、ローム粒極少量含、柱の跡。
 - 6'. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒(φ 1~5mm) 1%、炭化物、灰 2%含。
 7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 縮まりやや弱、ローム土 10%含。
 8. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 縮まりやや弱、ローム土 3%含。
 - 8'. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土 10%含。
- 9号竪穴建物YK 1~YKJ11

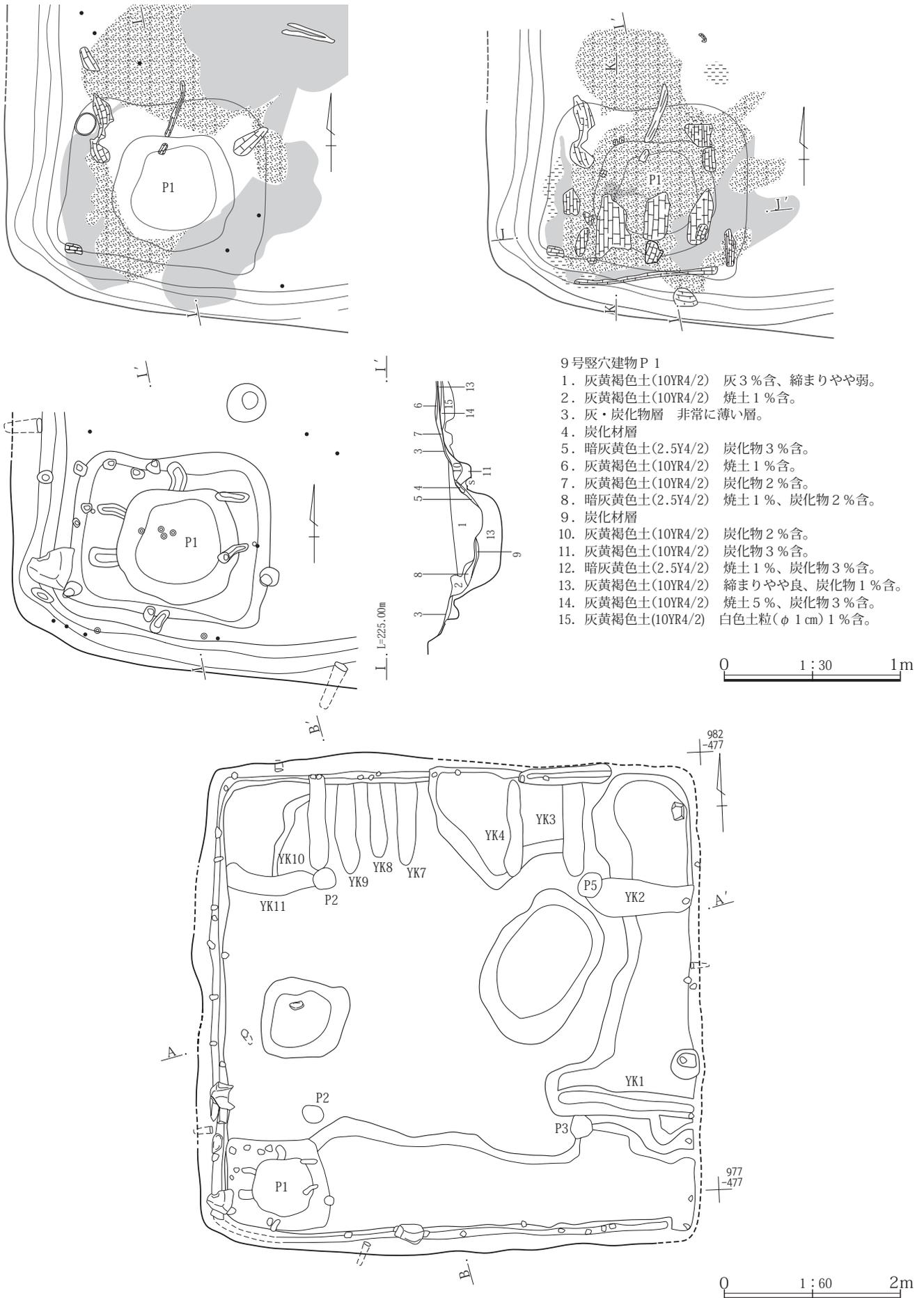
第105図 9号竪穴建物断面他図



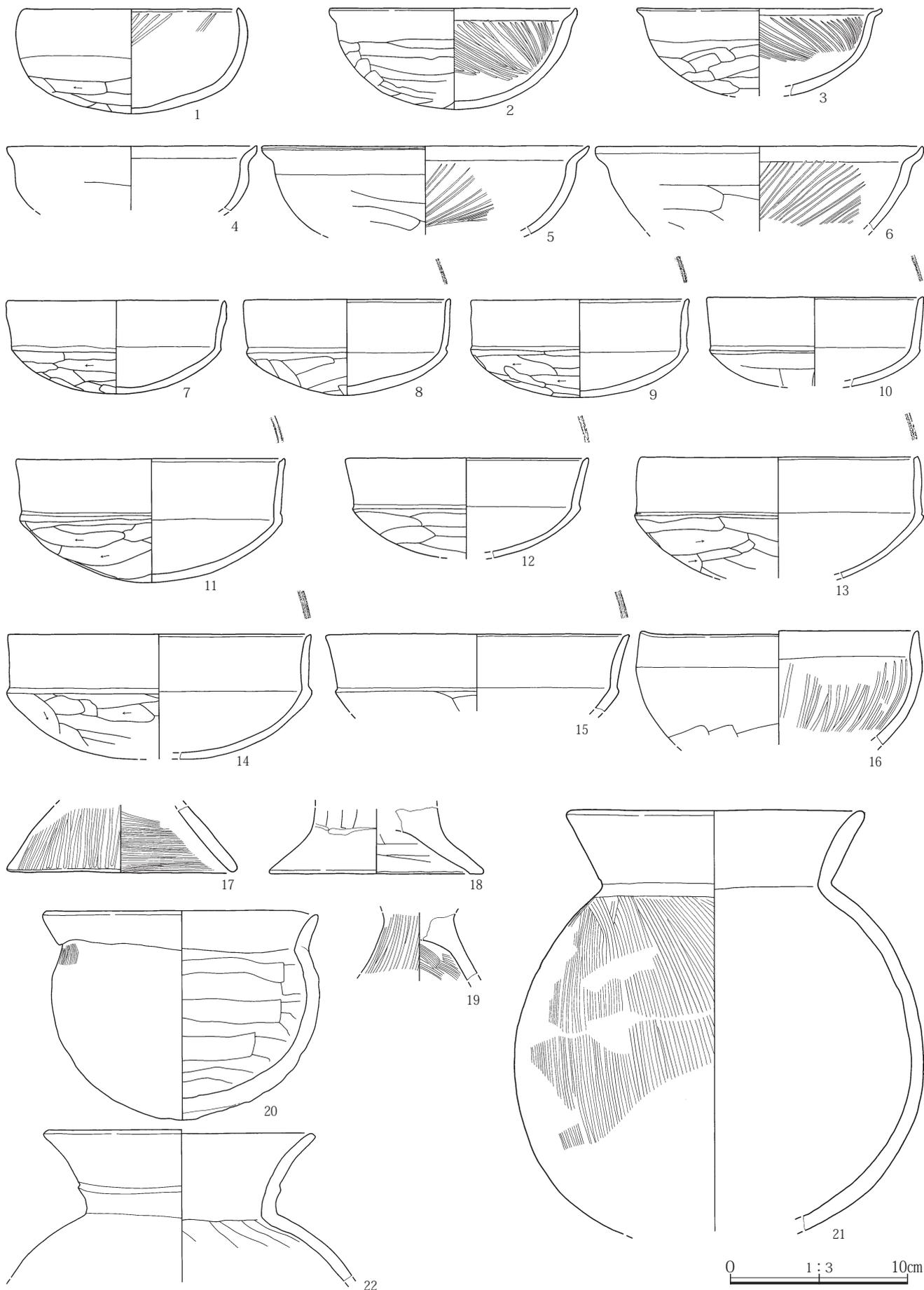
第106図 9号竪穴建物カマド図・土層断面図

109図24)がある。それ以外にも破片で多くの小型甕がある。壺もA類(第108図22)、B①(第108図21)がある。甕はやや大型の甕A②以外に、長胴化した甕D①もある。須恵器の出土は無い。管玉が2点出土している。先述したように赤玉の破片が南辺床面より出ており、1号掘立柱建物以外での明瞭な遺構出土の赤玉である。赤色顔料の素材としての使用が想定される。実用具の曲刃鎌が北東辺近くより出土している。管玉も2点出土している。置砥石も1点出土する。

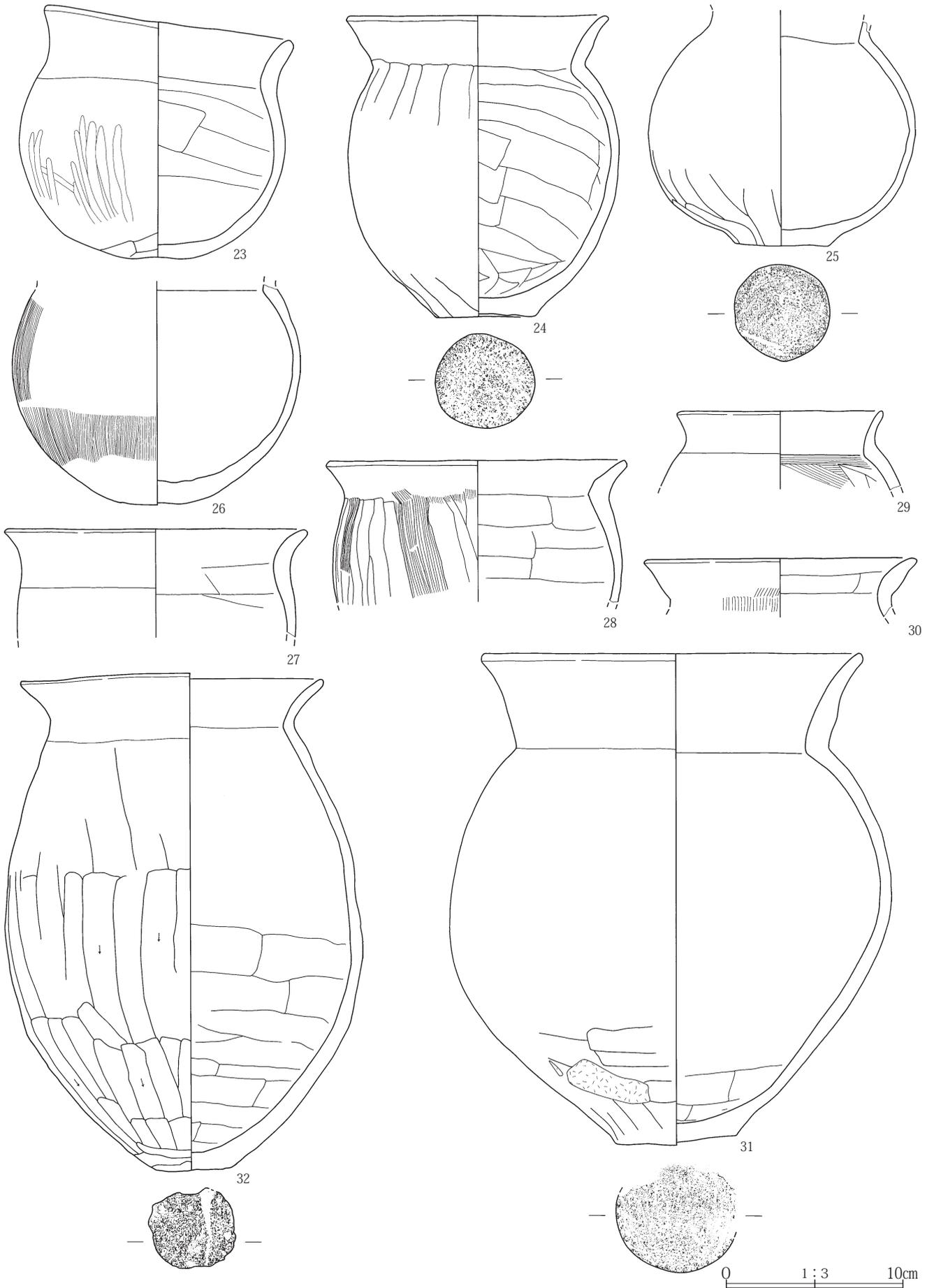
年代 カマド・炉共用で、しかもカマドの形態が初期の形態を示しているが、土器は杯Cの量が多いという、遺構と遺物の年代の齟齬がある竪穴建物である。5世紀後半としておく。



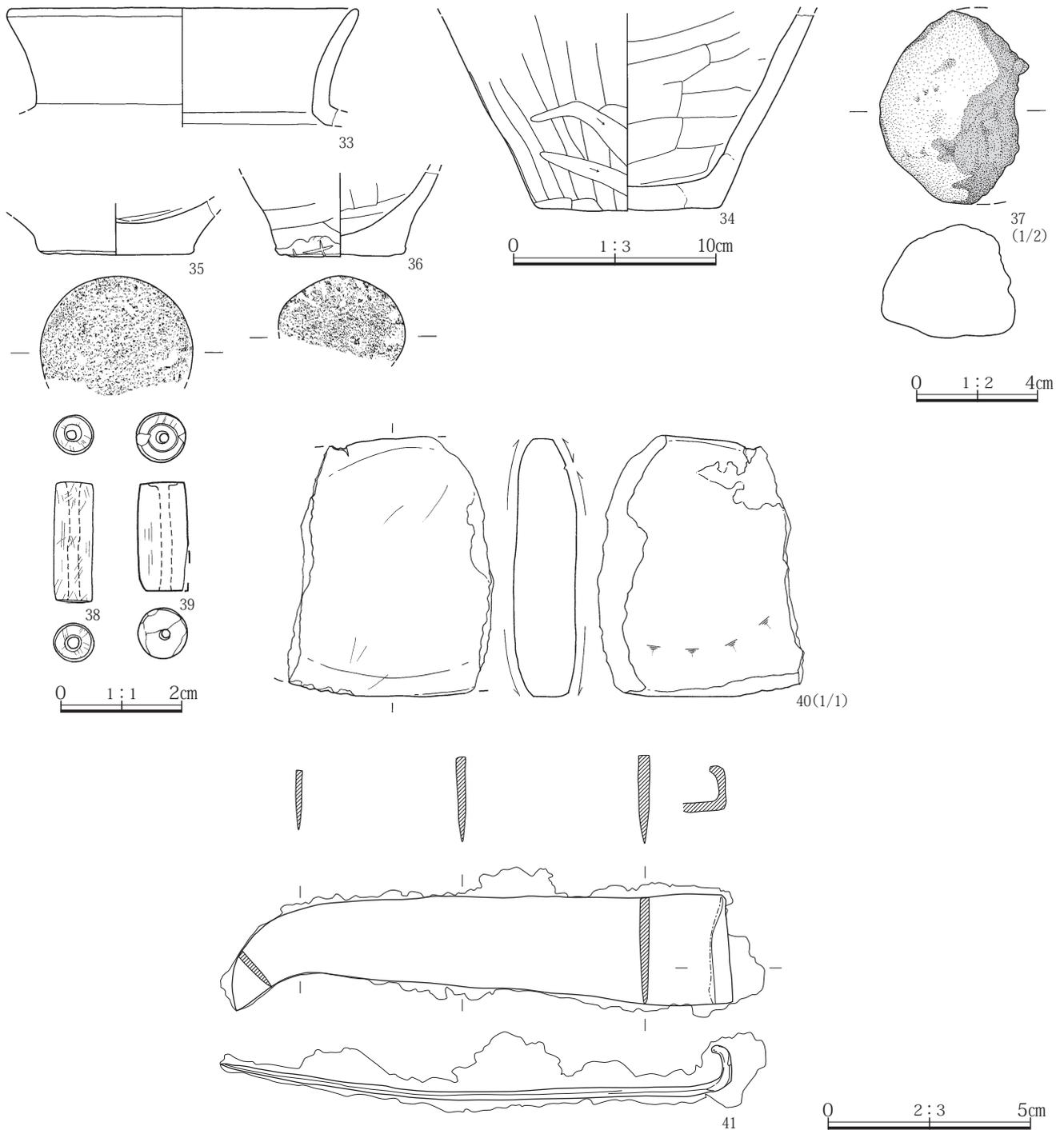
第107図 9号竪穴建物貯蔵穴・竪穴建物掘方図・土層断面図



第108図 9号竪穴建物出土遺物図1



第109図 9号竖穴建物出土遺物図2



第110図 9号竪穴建物出土遺物図3

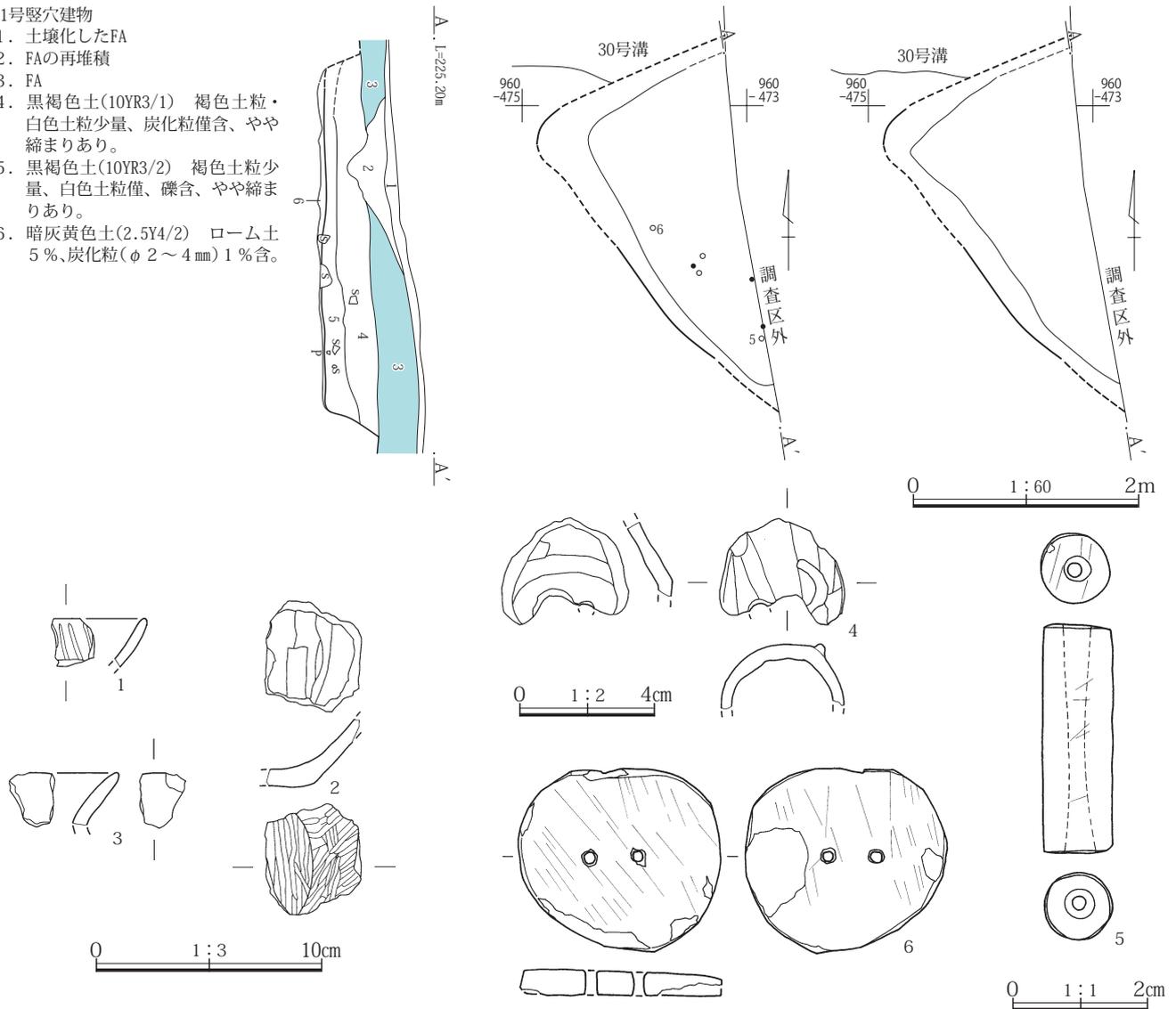
(9)11号竪穴建物(第111図 PL.52・279)

位置 北側の建物群とは離れた、調査区南東端にある。**遺存状況** 建物の北西部のコーナーが出た。周溝・周堤・柱穴・カマド・貯蔵穴いずれも確認できなかった。**埋土状況** 建物廃棄後、ほぼ、窪みが無くなりフク土が水平状になった段階で、Hr-FAが堆積している。**規模** 残存南北長3.2m+、東西長1.9m+、壁高50cmである。**出土遺物**(第111図 PL.279) 出土土器は小破片のみであ

る。杯・碗・甕と断面弧状を呈する土製品が出土している。滑石製模造品の蛇紋岩製の双孔の有孔円板と、珪質頁岩製の管玉が1点ずつ出土している。**年代** 破片は小さく年代を比定できるほどのものは無いが、火山灰の堆積状況、石製模造品の存在などから5世紀後半と推定している。

11号竪穴建物

1. 土壌化したFA
2. FAの再堆積
3. FA
4. 黒褐色土(10YR3/1) 褐色土粒・白色土粒少量、炭化粒僅含、やや縮まりあり。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土粒少量、白色土粒僅、礫含、やや縮まりあり。
6. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土5%、炭化粒(φ2~4mm)1%含。



第111図 11号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図

(10) 焼土・土坑群他

4号焼土(第112図 PL.53) 4号焼土は、9号竪穴建物の北側にあり、長径210cm、短径140cm、厚み8cmほどで薄く炭化物と混じりながら広がっているものである。近くから、須恵器模倣杯、柑、甕片が出土している。

5号焼土(第112図 PL.53) 5号焼土は、25号竪穴建物の東側から検出された。25号竪穴建物の周堤東側は確認できなかったのが、あるいは、5号焼土が25号竪穴建物に伴う焼土の可能性もある。長径72cm、短径53cm、厚み6cmである。

以下に述べる14～16号焼土は、連続する周堤上にあり、それぞれに近い建物に伴う可能性のあるものであるが、ここでは一括して扱った。

14号焼土(第112図 PL.53) 14号焼土は21号竪穴建物の南側、周堤上にあり、長径158cm、短径112cm、厚み8

cmほどである。21号竪穴建物に伴うものの可能性がある。

15号焼土(第112図 PL.53) 15号焼土は3号竪穴建物の南側、25号竪穴建物の北側の周堤上にあり、長径114cm、短径88cm、厚み8cmほどである。15号か25号竪穴建物に伴うものの可能性がある。

16号焼土(第113図 PL.53) 16号焼土は21号竪穴建物の南西側の周堤上にあり、長径126cm、短径106cm、深さ12cmの平面楕円形で、やや緩やかな立ち上がりを持つ。

20号土坑(第113図 PL.53)

長径120cm、短径105cm、深さ15cmの平面楕円形で、ごく浅いもので緩やかな立ち上がりを持つ土坑である。

22号土坑(第113図 PL.53) 長径110cm、短径106cm、深さ12cmの平面隅丸長方形で、急な立ち上がりを持つ土坑である。

24号土坑(第113図 PL.53) 長径118cm、短径108cm、

第三章 発見された遺構と遺物

深さ66cmの平面円形で、急な立ち上がりを持つ土坑である。

262号土坑(第113図 PL.53) 長径102cm、短径68cm、深さ12cmの平面楕円形で、緩やかな立ち上がりで、段を持つ土坑である。

261号土坑(第113図 PL.53) 長径144cm、短径92cm、深さ(62) cmの平面隅丸長方形で、急な立ち上がりを持つ土坑である。

263号土坑(第113図 PL.53) 長径58cm、短径54cm、深さ18cmの平面楕円形で、急な立ち上がりを持つ土坑である。弥生時代の27号竪穴建物のP7を切っている。

264号土坑(第113図 PL.53) 半分程調査している。長径154cm+、短径62cm、深さ40cmの平面隅丸長方形状で、

急な立ち上がりを持つ土坑である。25号竪穴建物に切られている。

265号土坑(第113図 PL.53) 長径78cm、短径46cm+、深さ38cmの平面円形で、やや緩やかな立ち上がりを持つ土坑である。266号土坑に切られている。

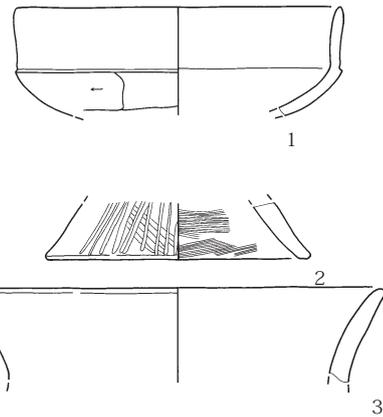
266号土坑(第113図 PL.53) 全体の1/3程度遺存していると推定される。長径114cm+、短径32cm+、深さ36cmの平面推定隅丸長方形円形で、やや緩やかな立ち上がりを持つ土坑である。265号土坑を切り、25号竪穴建物に切られている。

129号ピット(第113図 PL.53) 長径118cm、短径108cm、深さ66cmの平面円形で、急な立ち上がりを持つピットである。

4号焼土

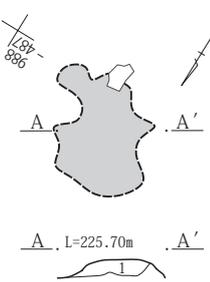


- 4号焼土
 1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土2%、炭化物1%含。
 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物2%含。
 3. 焼土中心層 焼土40%含。



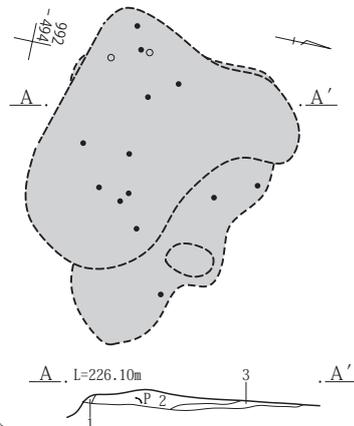
0 1:3 10cm

5号焼土



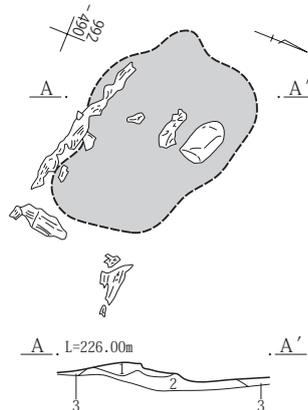
- 5号焼土
 1. 焼土中心層 焼土30%含。

14号焼土



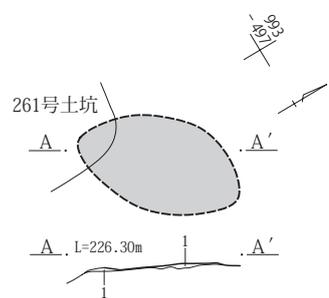
- 14号焼土
 1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒少量含、締まり弱。
 2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土小塊、ローム大塊を含、締まり弱。
 3. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒1層より少ない、締まりやや弱。

15号焼土



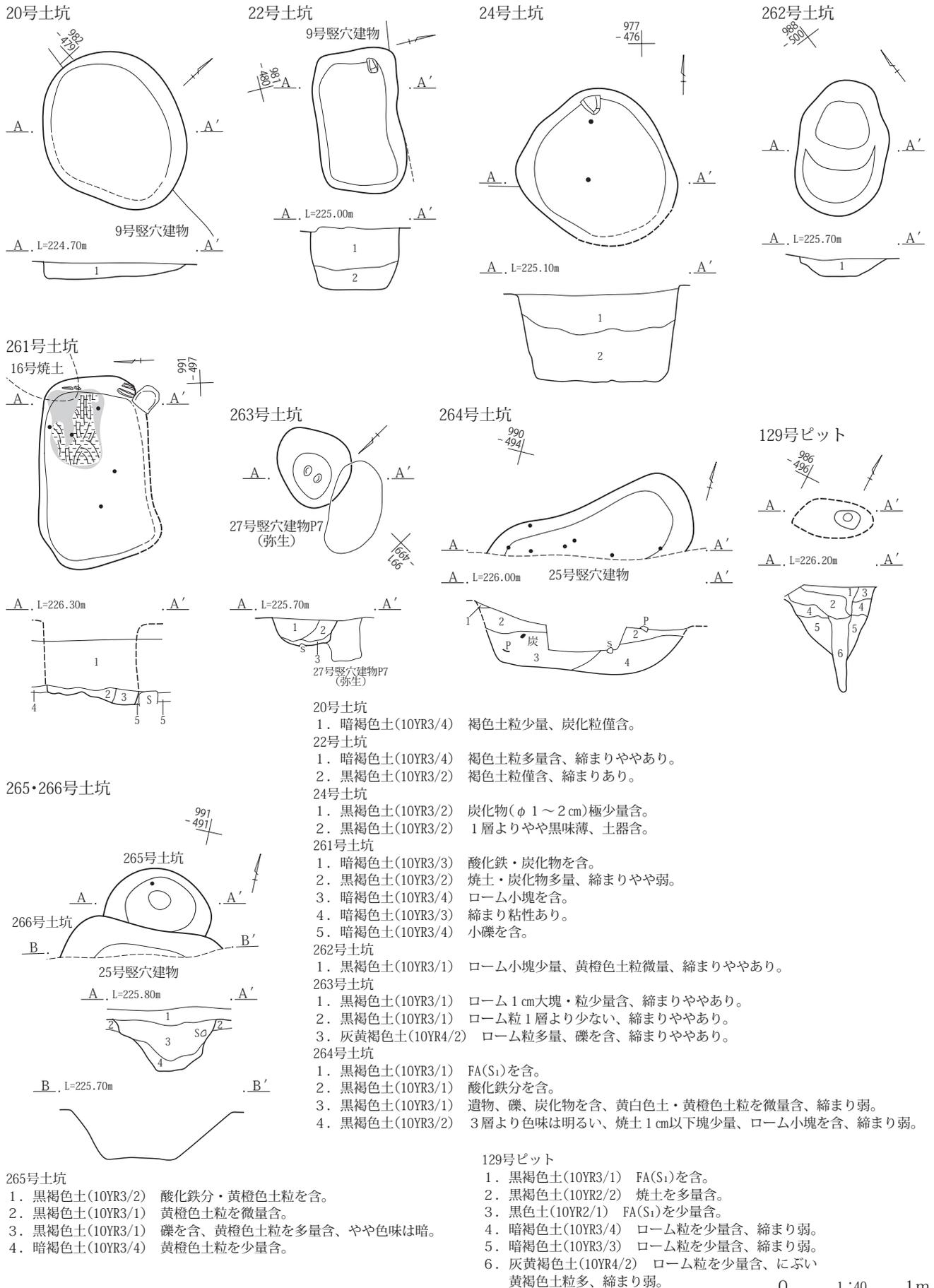
- 15号焼土
 1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム大塊、焼土小塊を含、硬化。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム1cm大塊を含、焼土粒微量含。
 3. 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土粒微量含、締まりあり。
 4区5面16号焼土SPA-A'
 1. 黒褐色土(10YR3/1) 橙色焼土塊を含、締まりあり。

16号焼土



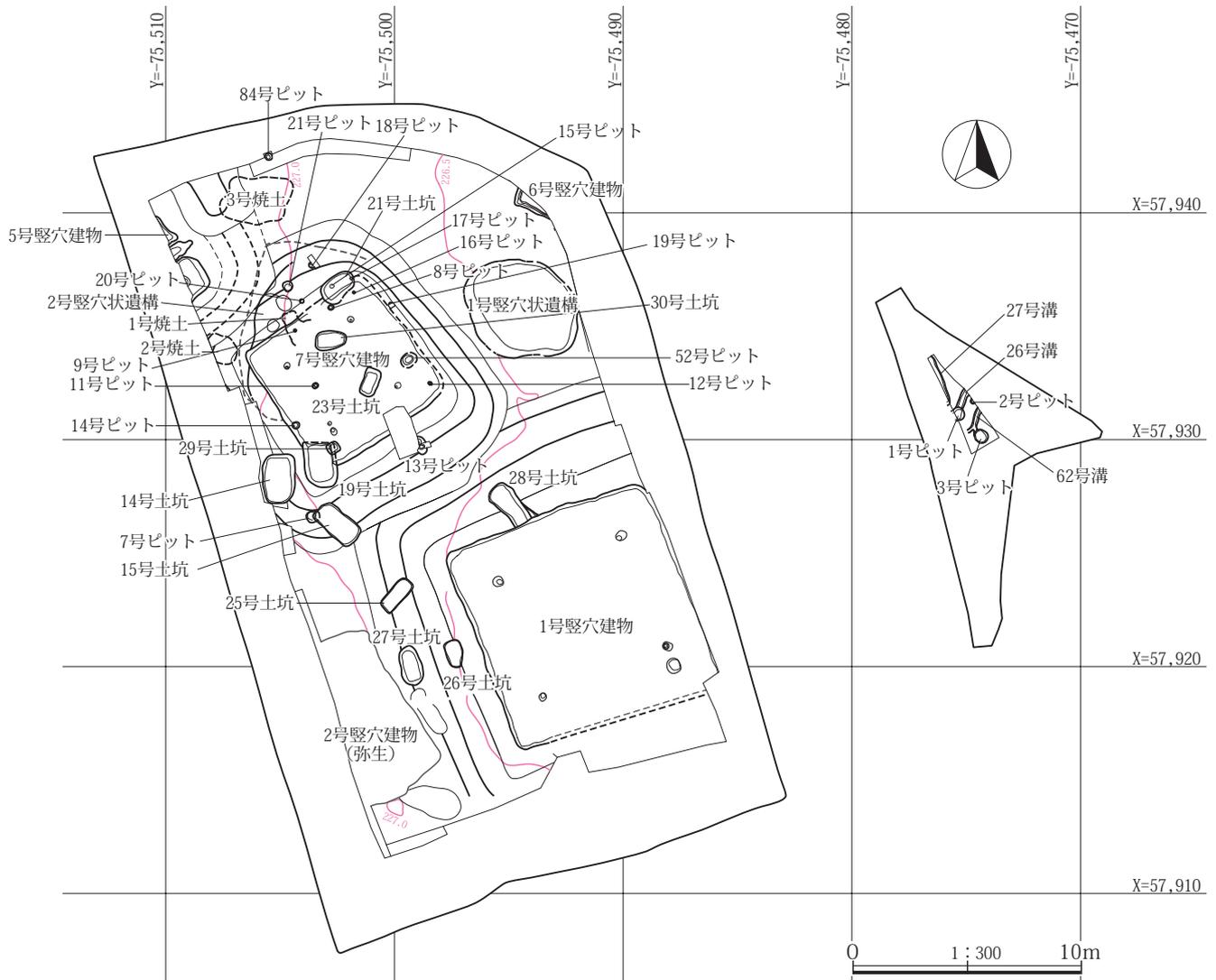
0 1:40 1m

第112図 4区焼土・土坑図・土層断面図・出土遺物図



第113図 4区土坑・ピット図・土層断面図

0 1:40 1m



第115図 2・3区5面遺構全体図

5 2区5面遺構(第115図 PL.55)

2区5面遺構は、南側のカマドを持たない1号竪穴建物が古く、その後に、北側に5号、7号竪穴建物、東側に6号竪穴建物、1号竪穴状遺構、そして、7号竪穴建物理土から2号竪穴状遺構が検出されている。他に土坑やピットがいくつか検出されており、4区に引き続いてのムラの中核地と考えられる。3区は、溝やピットが検出された。

(1) 1号竪穴建物

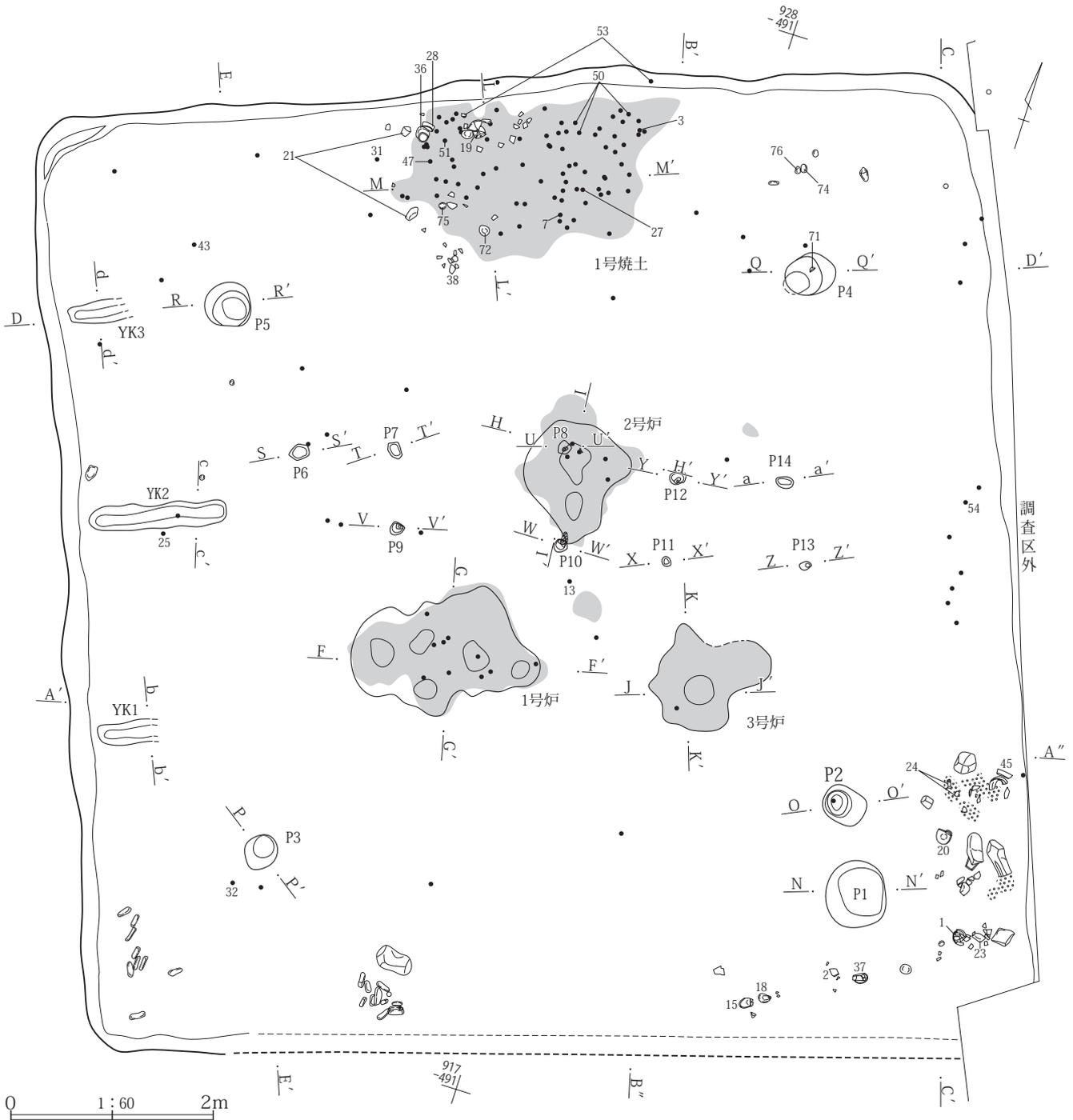
(第116～124図 PL.56・57・279～281)

位置 調査区南側に位置する。**遺存状況** 竪穴部はほぼ調査できたが、南及び東側の周堤部は調査区外である。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積してほんの少し窪んでいる状況でHr-FAが降下している。**規模** 東西9.4m、南北9.82m、壁高63～71cm、床面積は89.29㎡、主軸方

位はN-69°-Eの大形竪穴建物である。**掘方** 西辺西壁下に、刃先を南に向けて北進しながら掘削を行った鋤先の痕跡が確認された。痕跡から見ると、U字形鋤鋤先出現前の手打鋤による掘削の可能性が高く、類例が少なく重要な痕跡である。**周堤** 東側と南側は調査区外のために確認できず、北側と西側に、幅3.1～3.3m、高さ20cmの周堤の痕跡が巡っている。**壁際溝** 無い。**柱穴** 4本あり、長径37～50cm、短径32～43cm、深さ42～59cmである。**炉** 建物中央に3ヶ所ある。主炉で、長径180cm、短径120cm、深さ10cmの1号炉、長径140、短径105cm、深さ18cmの2号炉、長径135cm、短径110cm、深さ5cmの3号炉である。**貯蔵穴** P2柱穴の南すぐに長径66cm、短径59cm、深さ57cmのP1があり、貯蔵穴の可能性はある。**床面小溝** 西辺の柱穴P3～P5間の主軸線より西側に、東西方向に東壁に向かって溝があ

る。小 穴 建物の中央に東西方向に2列、長径10～20、短径7～15、深さ3～40cmの小穴が東西方向に並行して、北側に5個、南側に4個検出されており、何らかの施設である可能性が高い。炭化材 ケヤキの可能性のあるものとコナラが同定された。赤色顔料 北西隅から径2.5cmの顆粒状で出土している。出土遺物(第116～124図 PL.279～281) 中央炉近辺、北壁下中央部、東壁南部、南壁西部などにある程度まとまって出土している。古式の様相を示す杯DⅢ(第121図1・6)、杯DⅡ(第

121図15～17)が入り、杯AはⅡ～Ⅲがあり、杯BはⅠ・Ⅱ、杯CはⅡ～Ⅲである。高杯の出土が多く、高杯AのⅠ・Ⅱが破片も含めると9点が出土している。椀はCⅠ(第122図28)が出土し、他にも椀Cの出土が多い(第122図34・36)。壺Aが2点出土(第122図43～43)している。須恵器杯蓋、高杯、椀、甕、甕などの須恵器片が多く出土している。甕や杯の一部を円形状に打ち欠いて作成した二次利用品である円板状土製品が2点出土した。他に剣形石製模造品1、蛇紋岩製の石製紡輪1、粗粒輝石安

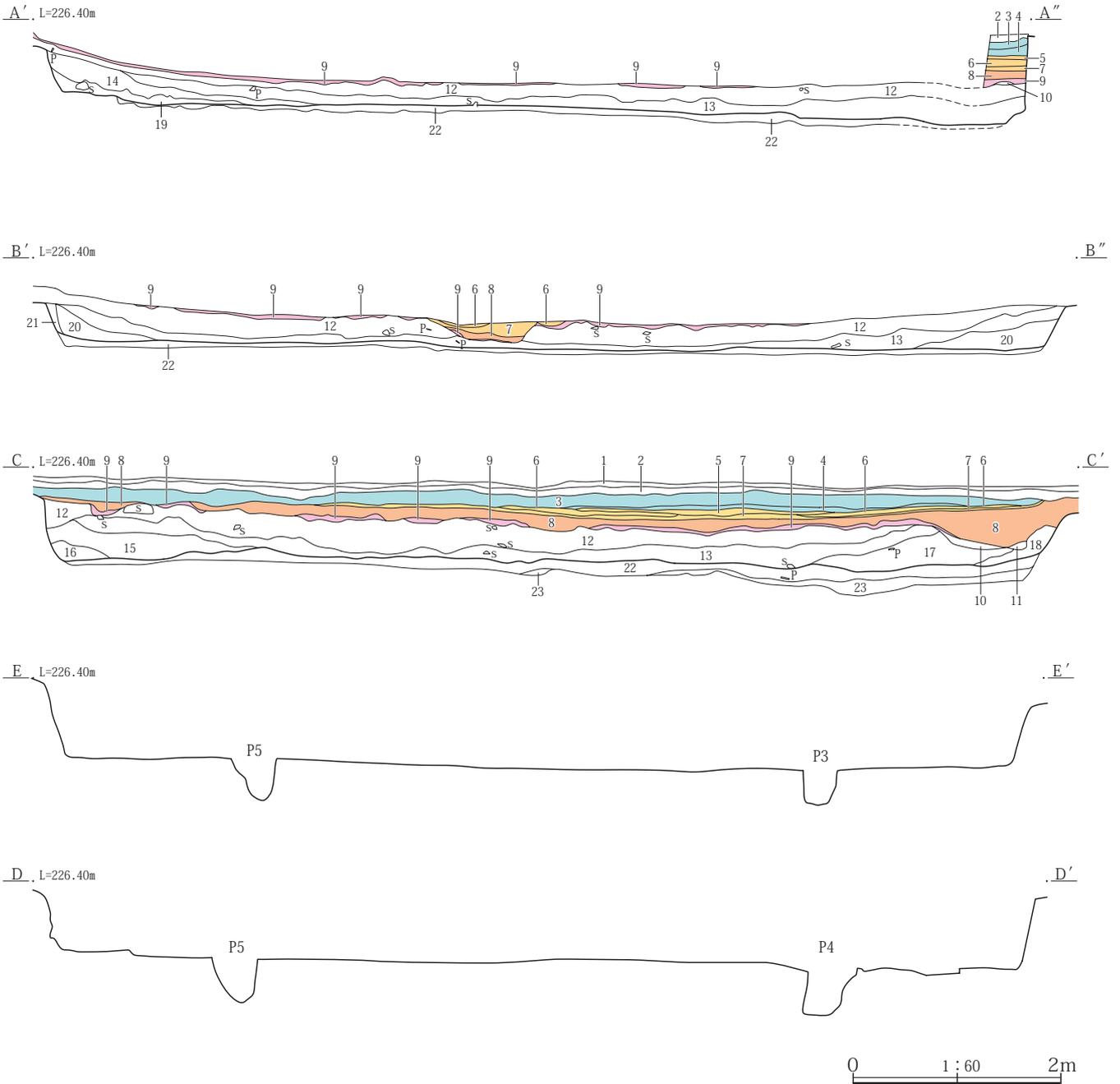


第117図 1号竪穴建物遺物出土状況図

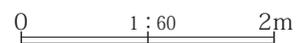
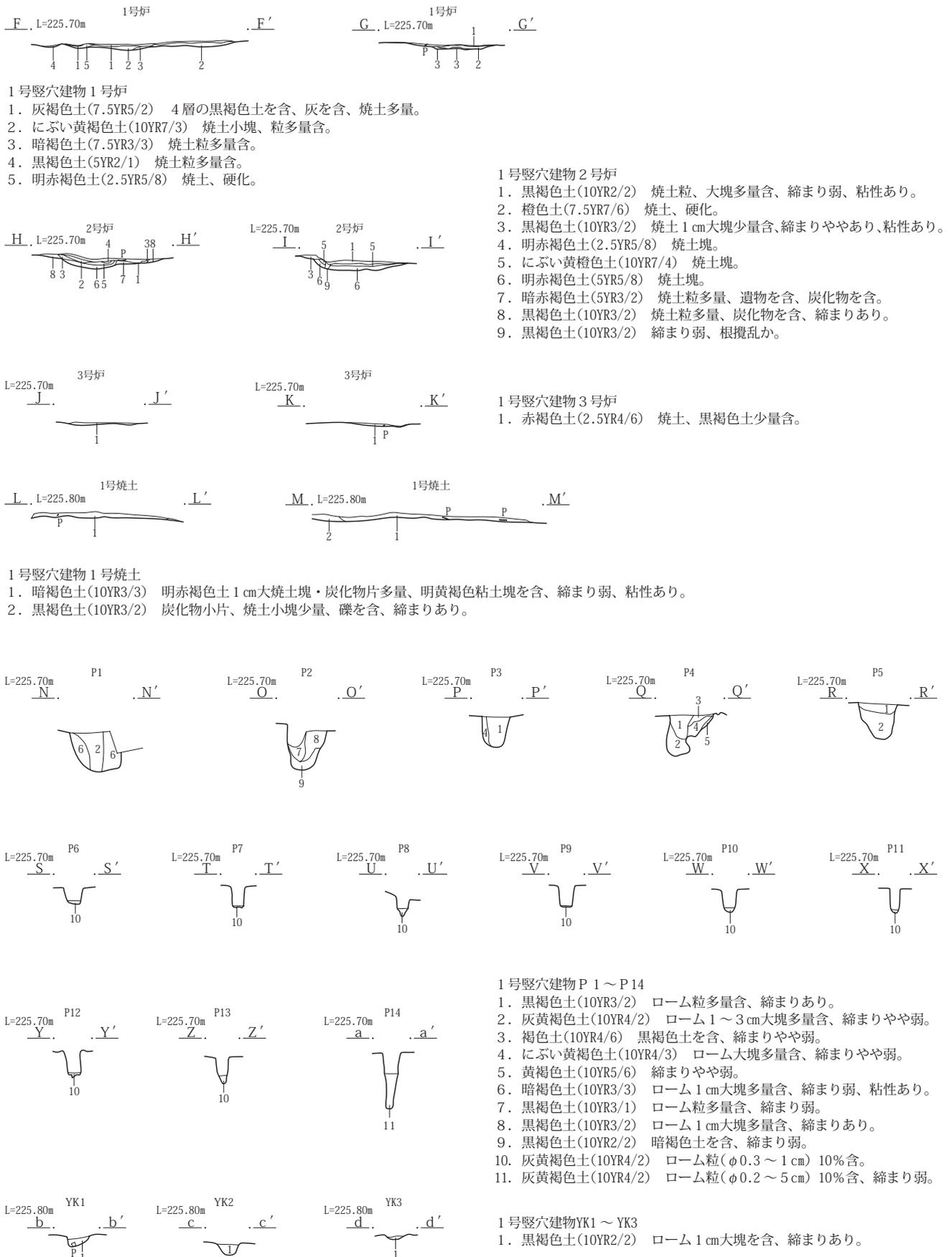
第三章 発見された遺構と遺物

1号竪穴建物

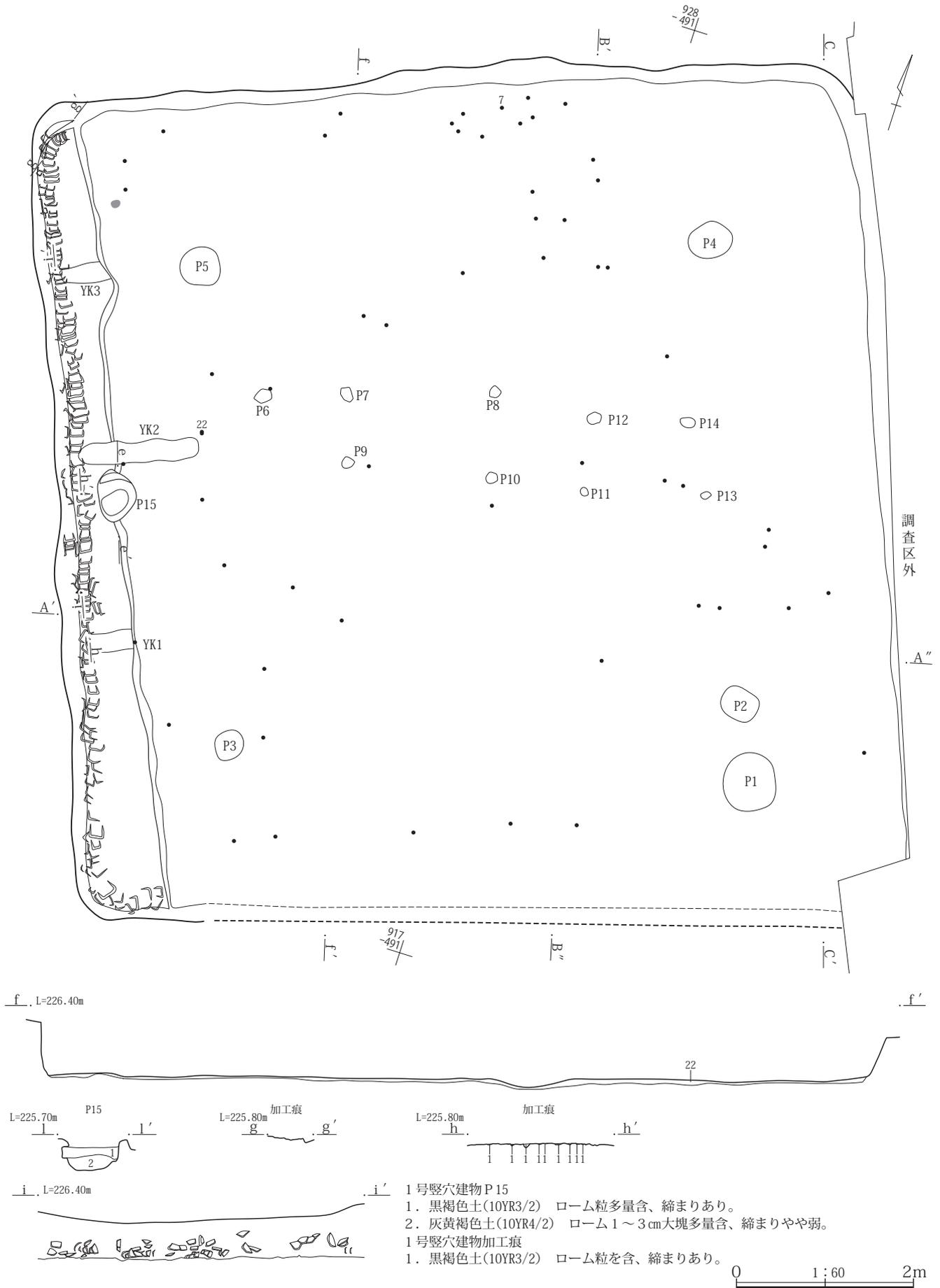
1. 黒褐色土(10YR2/2) 2面確認面
2. FA (S₁₃)の2次堆積か、1層の黒褐色土を含。
3. FA (S₇) 火砕流、粗粒含、縮まりやや弱。
4. FA (S₇) 縮まりあり。
5. FA (S₃) S₃上部に類似、縮まりあり。
6. FA (S₃) 下部に類似、細粒含、縮まりあり。
7. FA (S₃) S₃上部に類似、軽石を含。縮まりあり。
8. FA (S₃)上部と下部の混在、粗粒、縮まりあり。
9. FA (S₁) 縮まりややあり、粘性あり。
10. 黒褐色土(10YR3/1) S₁を多量に含、縮まりあり、粘性強。
11. 黒褐色土(10YR3/1) S₁を主体。
12. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土(酸化鉄か)帯状に、FA (S₁)含、炭化物小片微量含。
13. 褐色土(10YR4/4) ローム粒少量、20層ローム粒を微量含、縮まりややあり、粘性あり。
14. 黒褐色土(10YR3/1) ローム1cm大塊少量、粒多量含。
15. 黒褐色土(10YR2/3) ローム1cm大塊少量、炭化物を含、縮まりややあり、粘性あり。
16. 暗褐色土(10YR3/3) ローム1cm大塊粒多量含。
17. 黒褐色土(10YR3/1) ローム小塊、粒少量含、色味は暗。
18. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒、15層より多、ローム小塊多量含、縮まりややあり。
19. 黒褐色土(10YR3/2) 3~5cm大口ローム塊多量、礫を含。
20. 黒褐色土(10YR3/1) 1cmローム塊少量含。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土塊、FAを含、壁面の崩れか。
22. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒、小塊多量、橙色土粒多量含、貼床、硬化、下層は別竪穴建物のフク土。
23. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒を含。
24. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量含、やや縮まる、周堤盛土。
25. 褐灰色土(10YR4/1) 黄橙色土粒微量含、色味は暗、周堤盛土。
26. 黒褐色土(10YR3/1) ローム3~5cm大塊を含、やや縮まる。
27. 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土粒少量含、やや縮まる。
28. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒を含、縮まりあり、地山。
29. 黒褐色土(10YR3/2) 橙色土粒を含、やや色味は明るい。
30. 黒褐色土(10YR3/1) 白色細粒少量含。



第118図 1号竪穴建物土層断面図・断面図



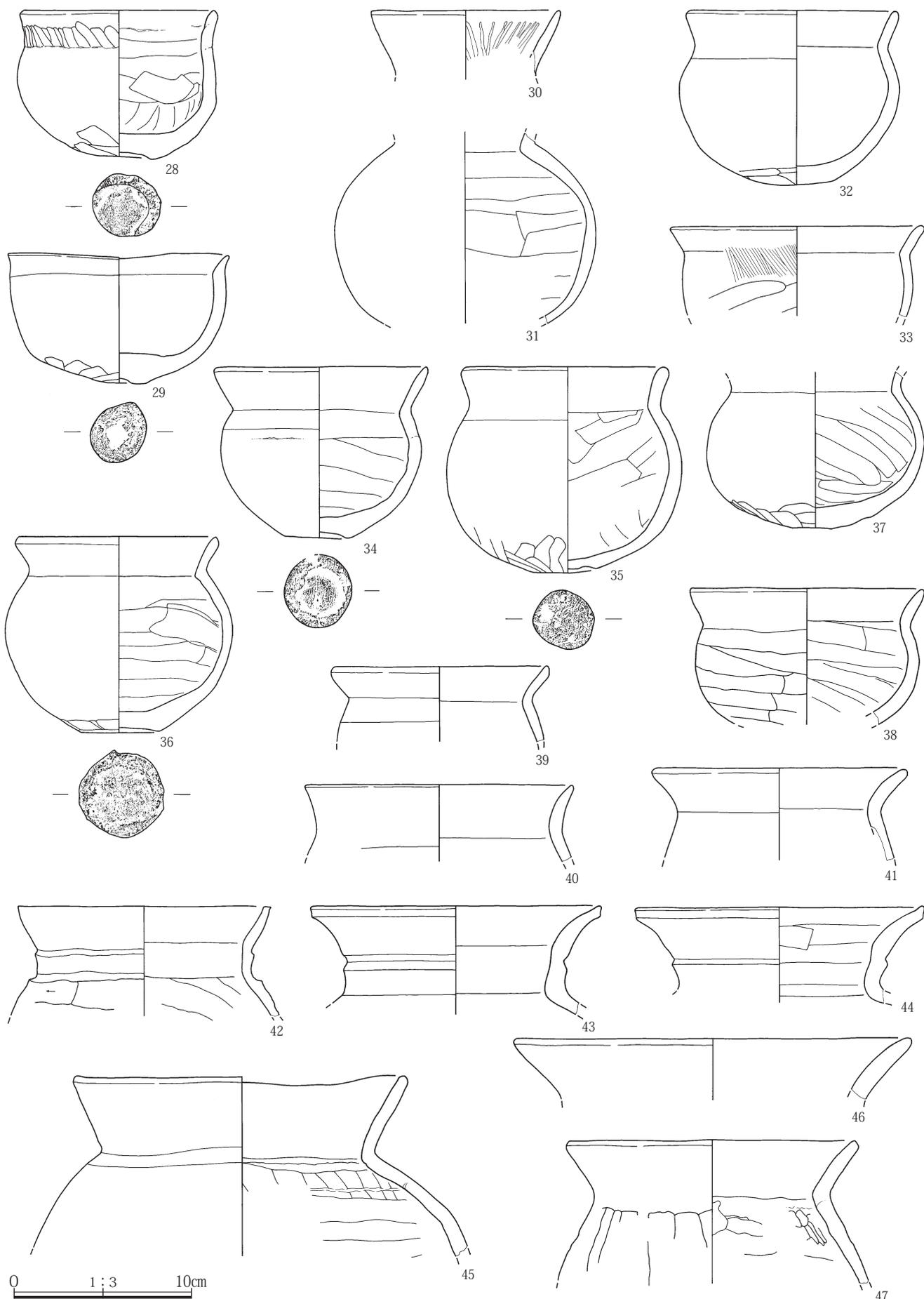
第119図 1号竪穴建物炉・柱穴等土層断面他図



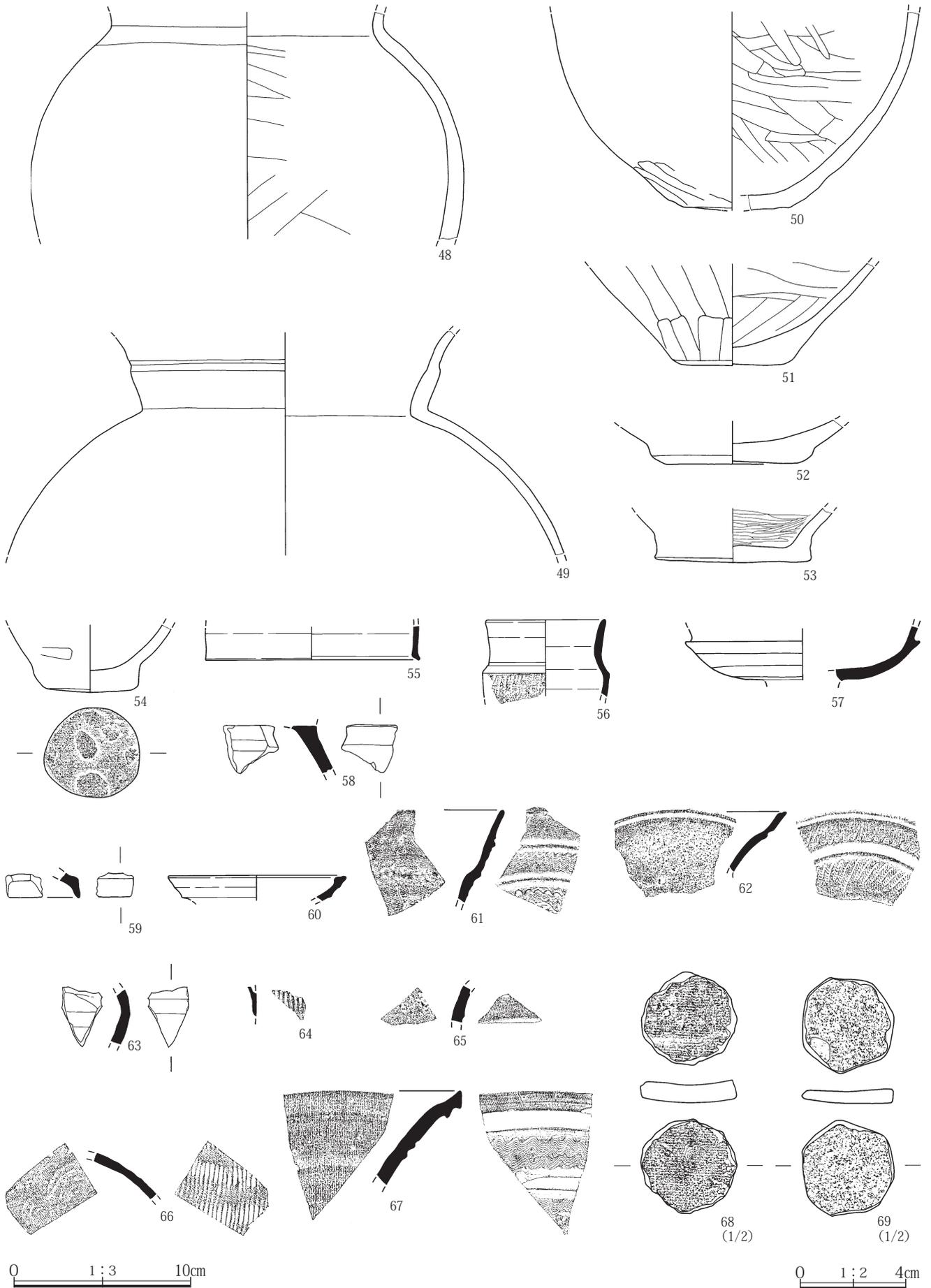
第120図 1号竪穴建物掘方図・土層断面図



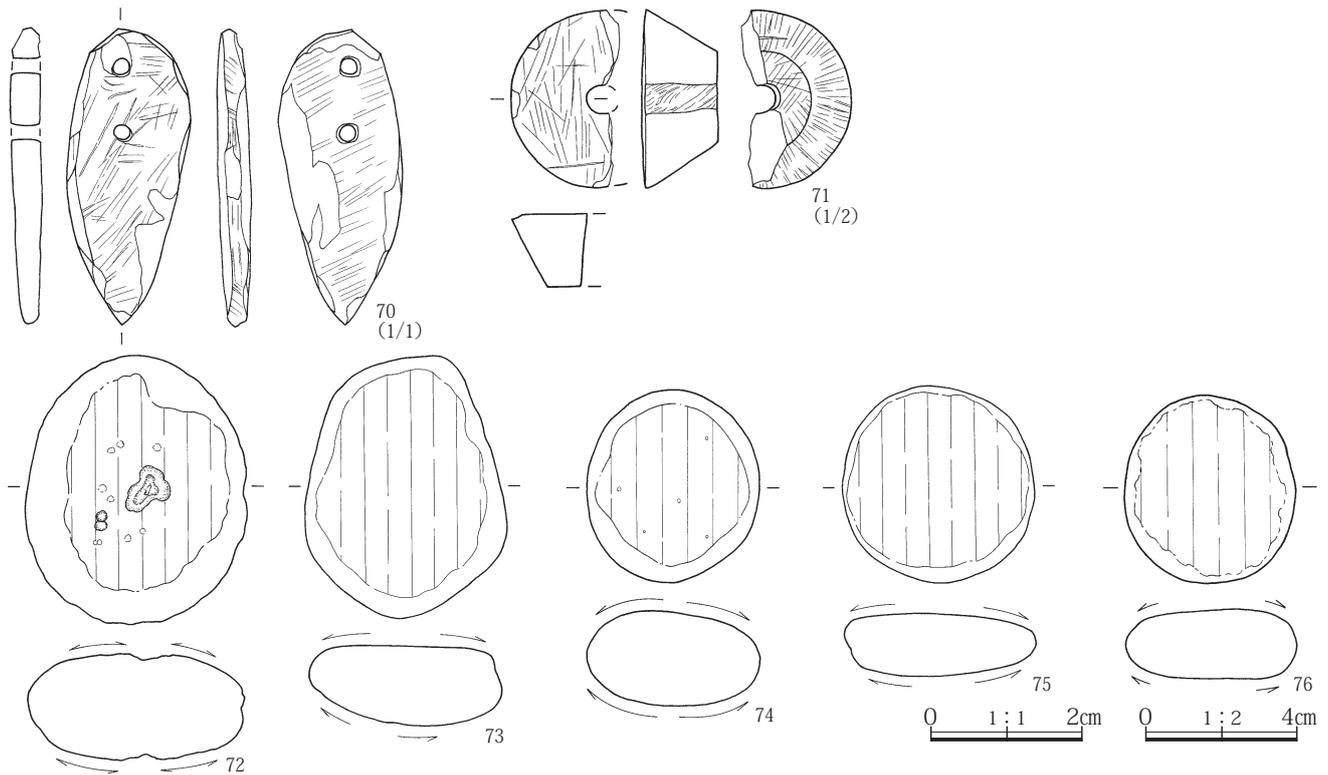
第121图 1号竖穴建物出土遺物图 1



第122図 1号竪穴建物出土遺物図2



第123图 1号竖穴建物出土遺物图3



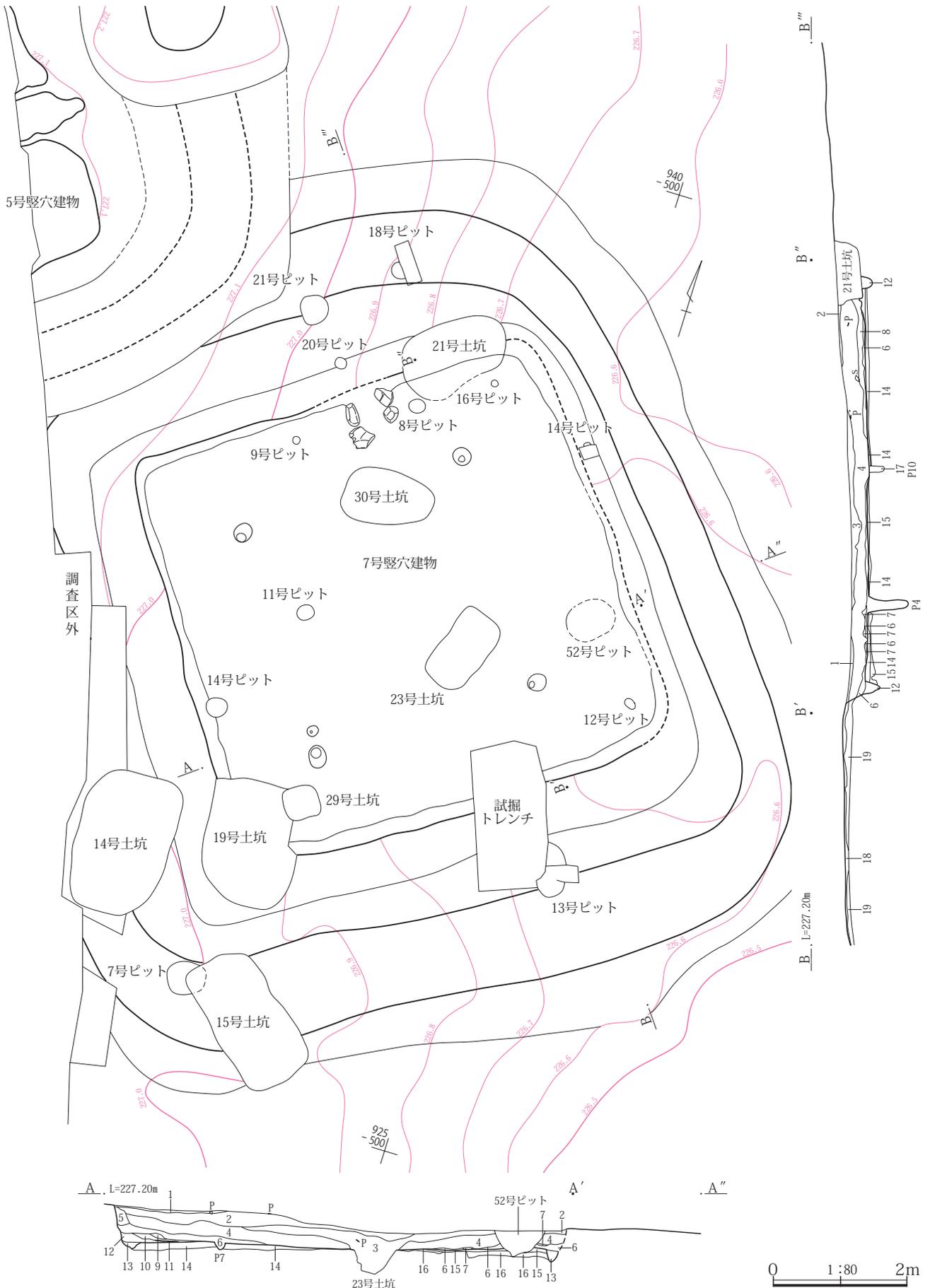
第124図 1号竪穴建物出土遺物図4

山岩・石英閃緑岩製の磨石5が出土している。表裏面ほぼ全面に磨面がある。年代 カマドが出現していないこと、古式の様相を持つ杯DⅢ、DⅡが多く含まれ、杯A・Bが一部を占めること、高杯がA類で古相を呈していることなどから、5世紀中頃でも前半に近い方と想定される。調査した中では、このムラでの初現となるであろう。

(2) 7号竪穴建物

(第125～132図 PL.58・59・281～283)

位置 調査区北部に位置する。**重複** 周堤が四周を巡るが、北西の5号竪穴建物により周堤が壊されているので、5号竪穴建物よりは古いものと推定する。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積してほんの少し窪んでいる状況でHr-FAが降下している。**規模** 東西6.89m、南北6.58m、壁高39～71cm、床面積42.40㎡、主軸方位はN-35°-Wである。**掘方** 南側と西側に深い掘削痕跡がある。**周堤** 幅1.4～2.8m、高さ5cmほどである。先述したように、5号竪穴建物の周堤により北西側が壊されている。**壁際溝** 幅14～20cm、深さ12～18cmの溝が四周を巡るが、北側は少し切れる。**柱穴** 4本で、長径28～35cm、短径25～26cm、深さ37～61cmである。**入口** 南側と推定する。P11が入口付近にあり、入口用のピットと考える。**硬化面** 南側入口付近、カマド北側にある。**カマド** 北西方向を向いており、当遺跡の中では珍しい。カマドはかなり壊されており、原形はあまりとどめていない。袖の中に石がそれぞれ4個含まれており、その周りに土が被せられていると想定している。**床面小溝** 西辺南のP1を起点に東西方向に西壁に



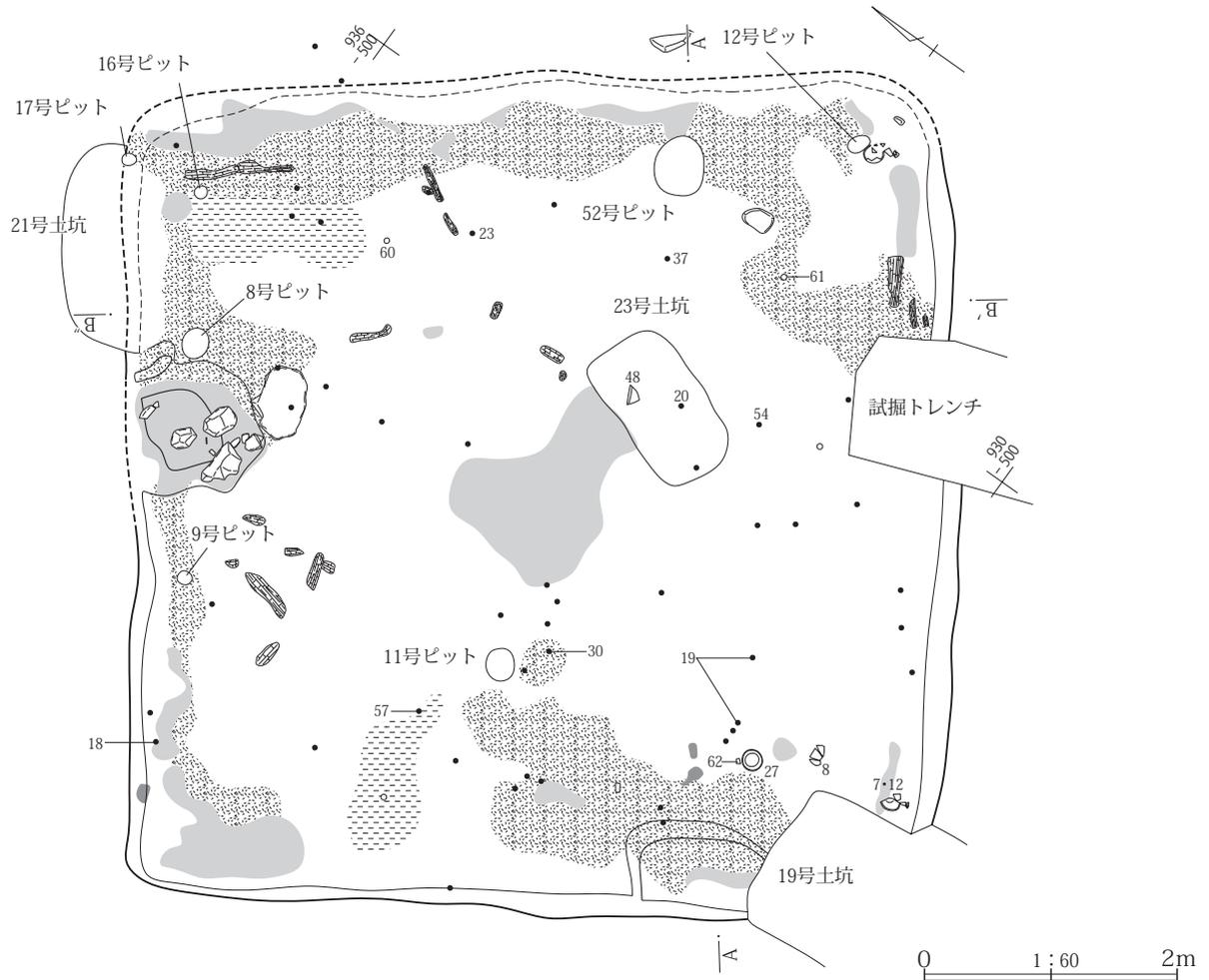
第125図 7号竪穴建物全体図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

7号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR3/2) FA(S_i)を含、締まりあり。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒1cm大塊少量、酸化鉄分を含、締まりやや弱。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム3～5cm大塊・ローム粒多量含、締まりややあり。
4. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含、締まり弱。
5. 褐色土(10YR4/4) ローム1cm大塊、ローム粒多量含、締まりあり。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム小塊多量、灰を含、やや締まりあり。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色灰主体、炭化物を含、締まりなし。
8. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒微量含。

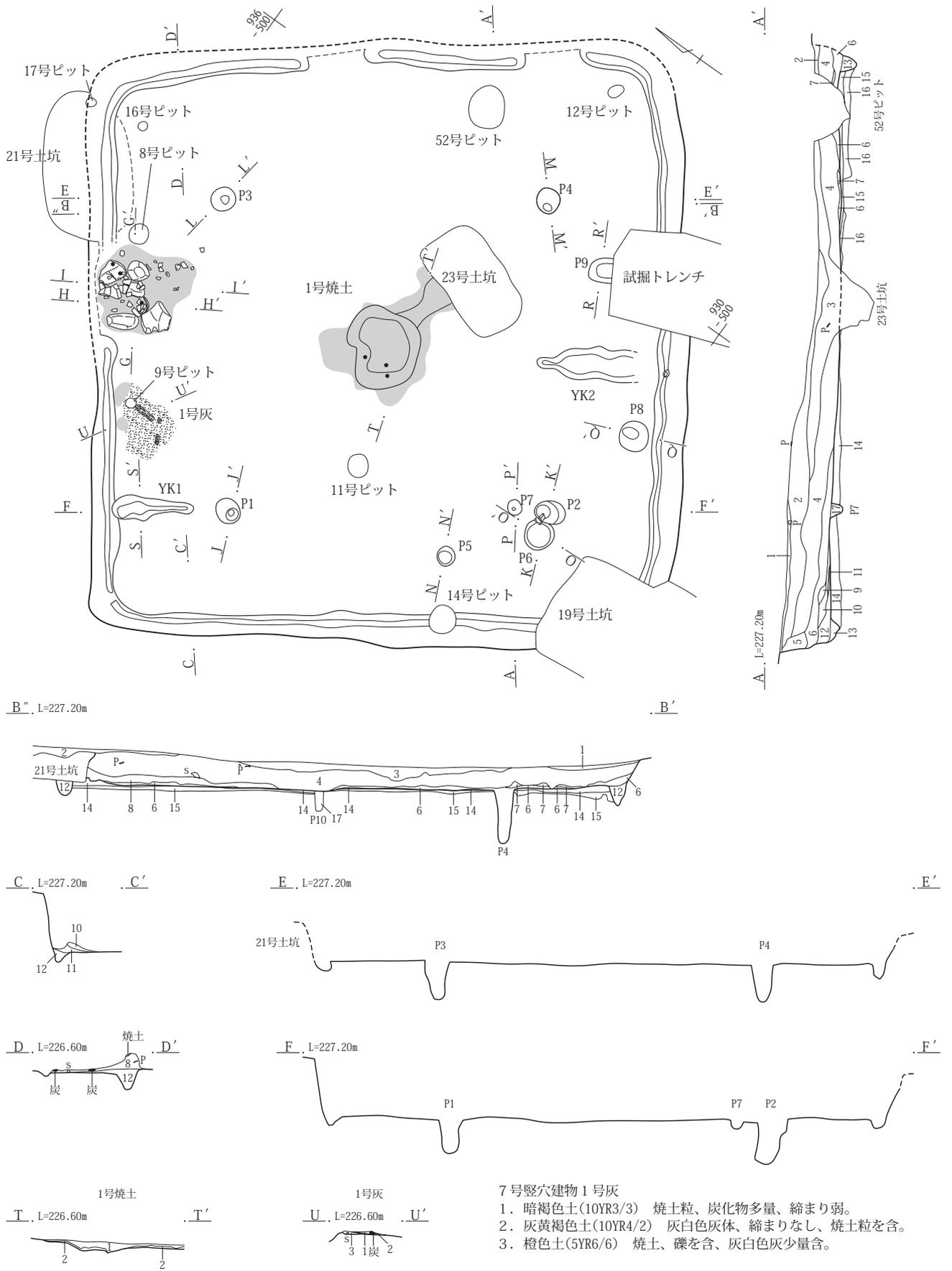
9. 黒褐色土(10YR2/2) ローム1cm大塊、炭化物を含、締まりやや弱。
10. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土塊・粒、灰多量、炭化物を含、締まり弱。
11. 黒色土(N2) 炭、締まりなし。
12. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒多量含。
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒多量、黒褐色土を含、締まり弱。
14. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム大塊多量含。
15. 黒褐色土(10YR3/1) ローム小塊を含、締まりあり、硬化。
16. 暗褐色土(10YR3/3) ローム小塊・粒多量含、締まりやや弱。
17. 黒褐色土(10YR3/1) 締まり弱、P7。
18. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒少量含。
19. 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物小片多量含。



第126図 7号竪穴建物遺物出土状況図

向かってあり、もう一つが、東辺のP2～P4の主軸線より東側に東西方向に東壁に向けてある。**炭化材** 建物北・西・南辺に有機質や炭化材が出土している。樹種同定によりコナラ・クリ・クヌギと同定された。**赤色顔料** 南西辺と北西隅から3点、径2～5mmの顆粒状で出土している。**出土遺物**(第129～131図 PL.281～283) 土師器は、杯AⅠ～Ⅲ、杯BⅠ、杯CⅠ・Ⅱ、杯DⅡ(第129図12)がある。杯Aが中心の組成である。他に手捏ね土器が1、高杯C(第130図15)、高杯Aの脚部破片があり、埴も出土している。小型甕はAⅠ②(第130図24)、甕はC①(第130図26)が完形品として出土しており、他に破片

で甕や小型甕が多く出土している。須恵器は、杯蓋・杯身・高杯・甕・器台など多数の須恵器が破片であるが出土している。他に剣形石製模造品、蛇紋岩製で、面取りされた体部側面に線刻で鋸歯文が施されている石製紡輪が出土した。鉄器生産を示す遺物として厚み1.5cmと薄手であるが、板状の鉄素材が出土している。**年代** 古式の様相を示す杯DⅡがあり、杯Aが中心の組成であることや、須恵器が型式並行で古いことから5世紀後半でも中頃に近い方と考える。

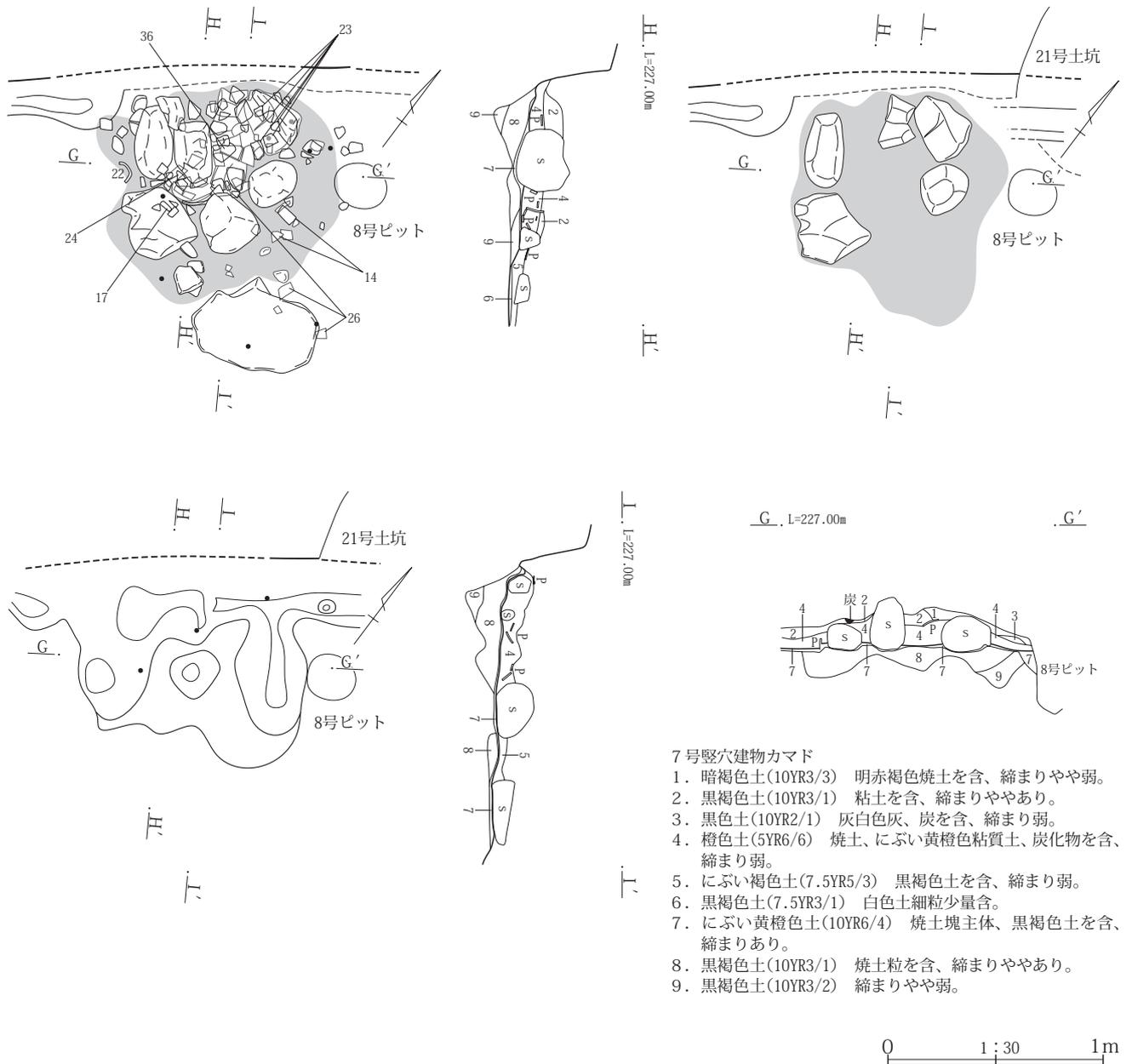
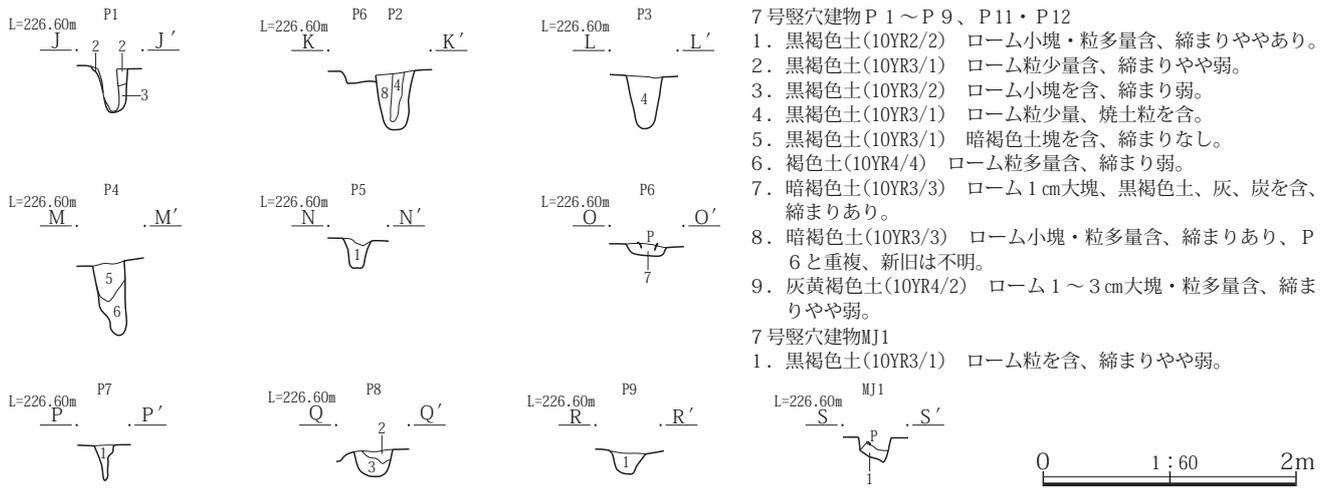


- 7号竪穴建物 1号焼土
1. 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土、灰白色灰を含、硬化。
 2. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒少量含、縮まりあり。

- 7号竪穴建物 1号灰
1. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒、炭化物多量、縮まり弱。
 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰白色灰体、縮まりなし、焼土粒を含。
 3. 橙色土(5YR6/6) 焼土、礫を含、灰白色灰少量含。

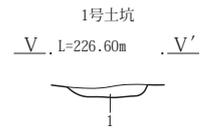
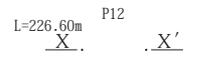
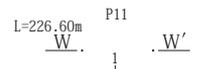
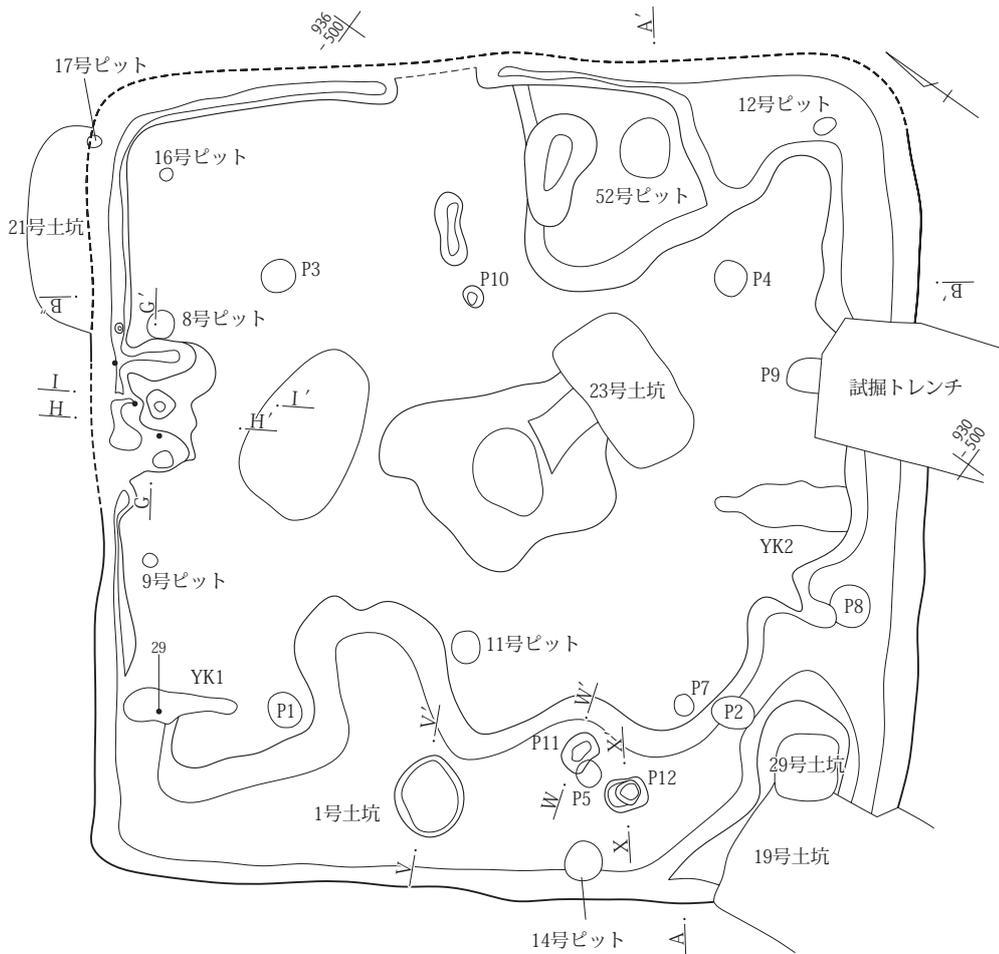
第127図 7号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図

第三章 発見された遺構と遺物



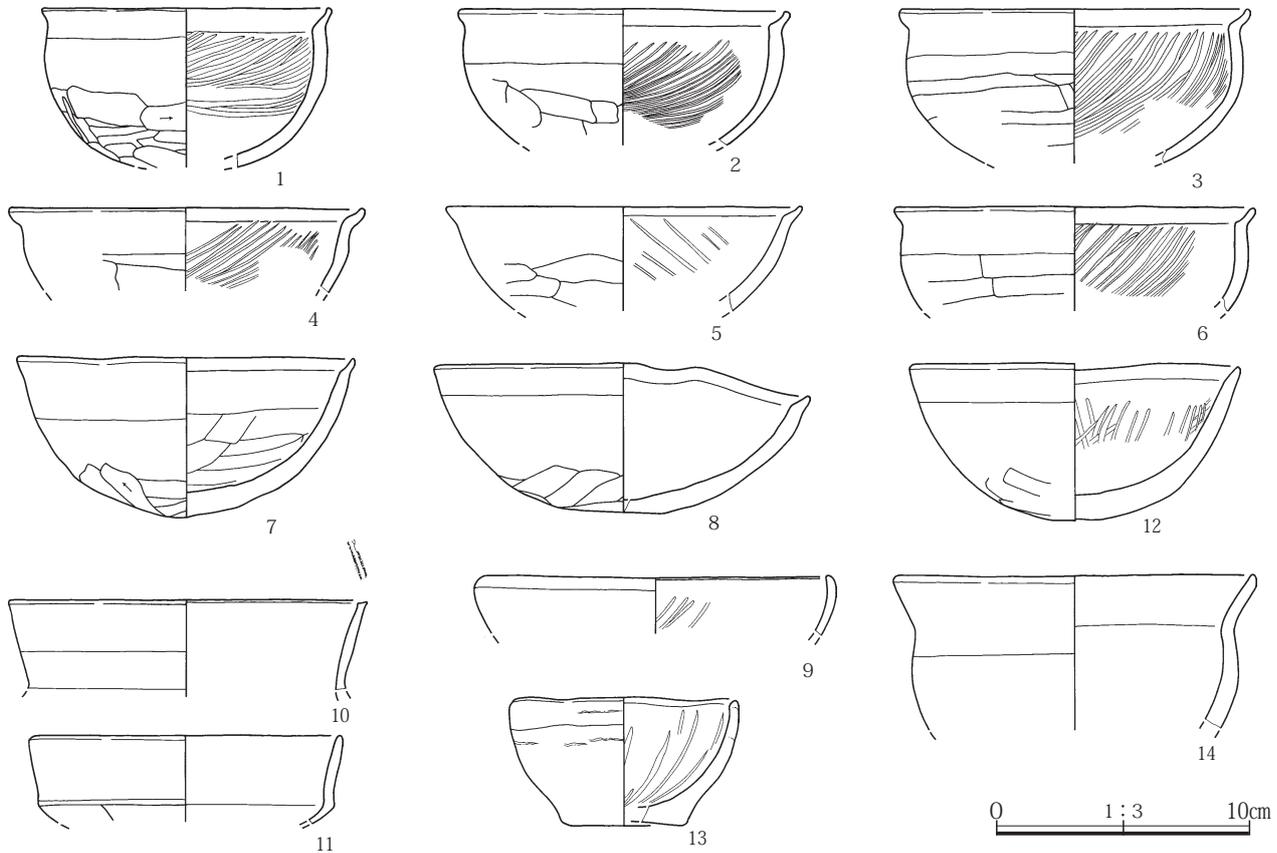
第128図 7号竪穴建物柱穴等断面図・カマド図・土層断面図

第1節 5面遺構

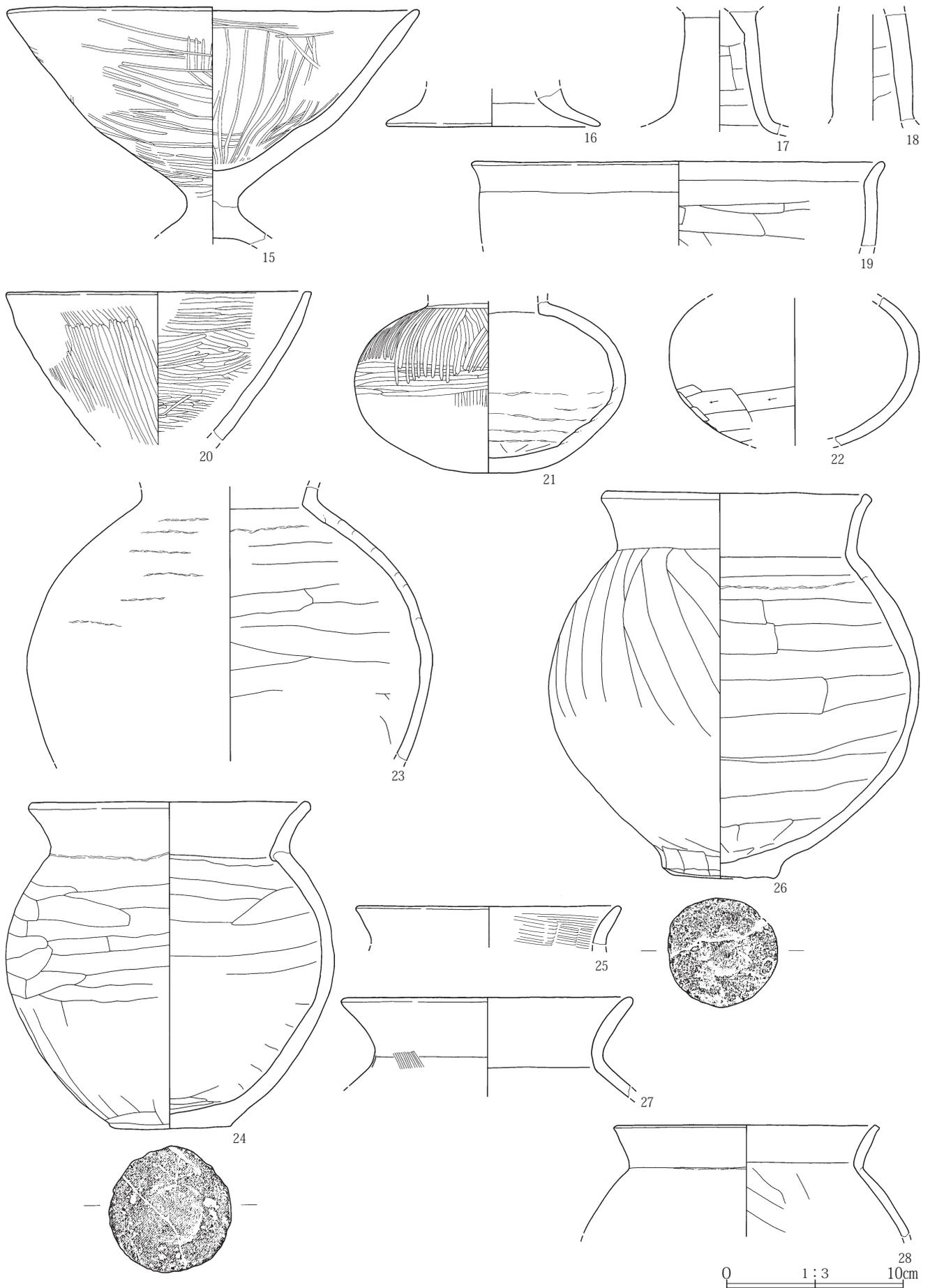


7号竪穴建物 1号土坑

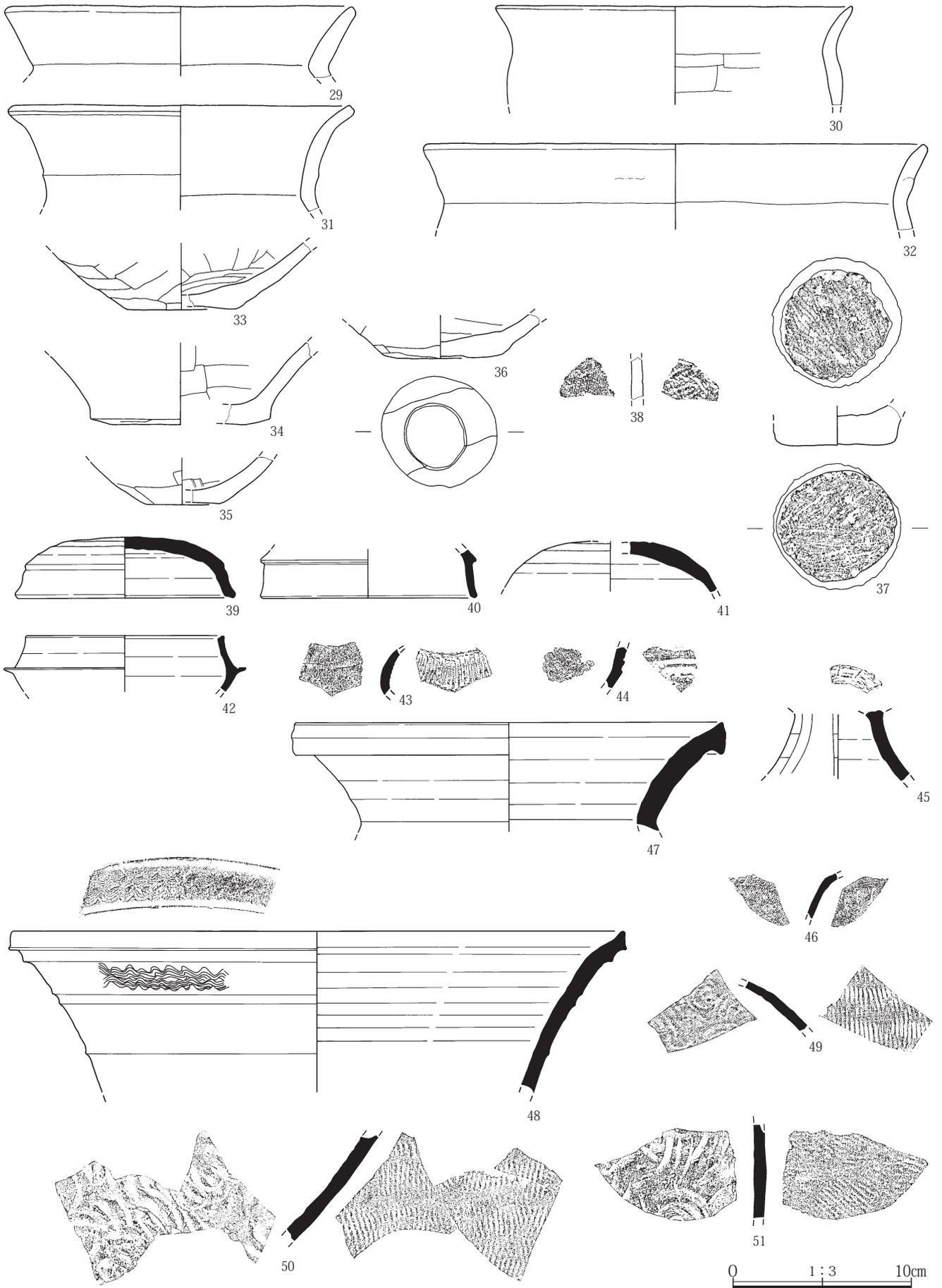
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒・塊を含、縮まりあり、硬化。



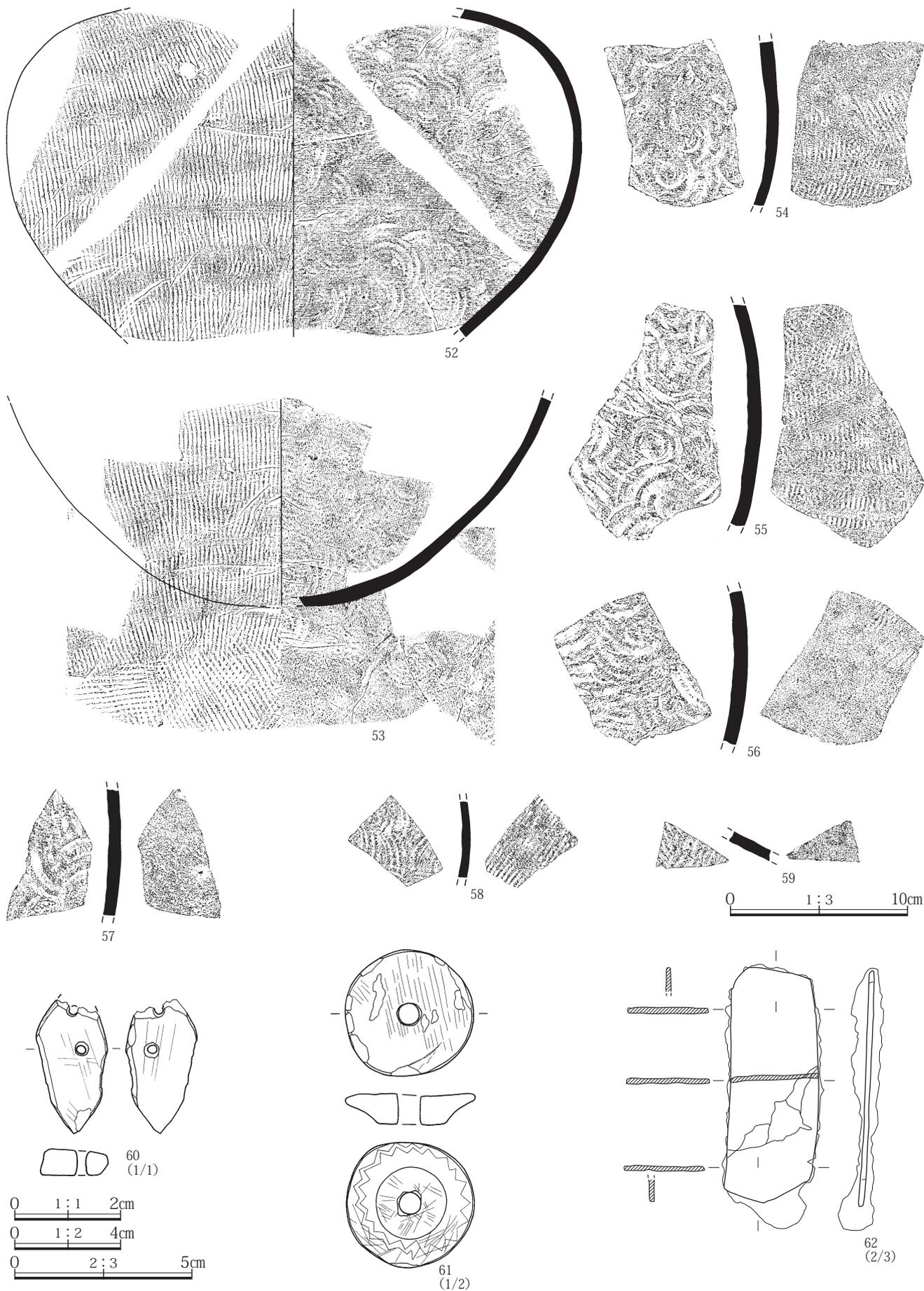
第129図 7号竪穴建物掘方他図・出土遺物図1



第130図 7号竪穴建物出土遺物図2



第131图 7号竖穴建物出土遺物图3

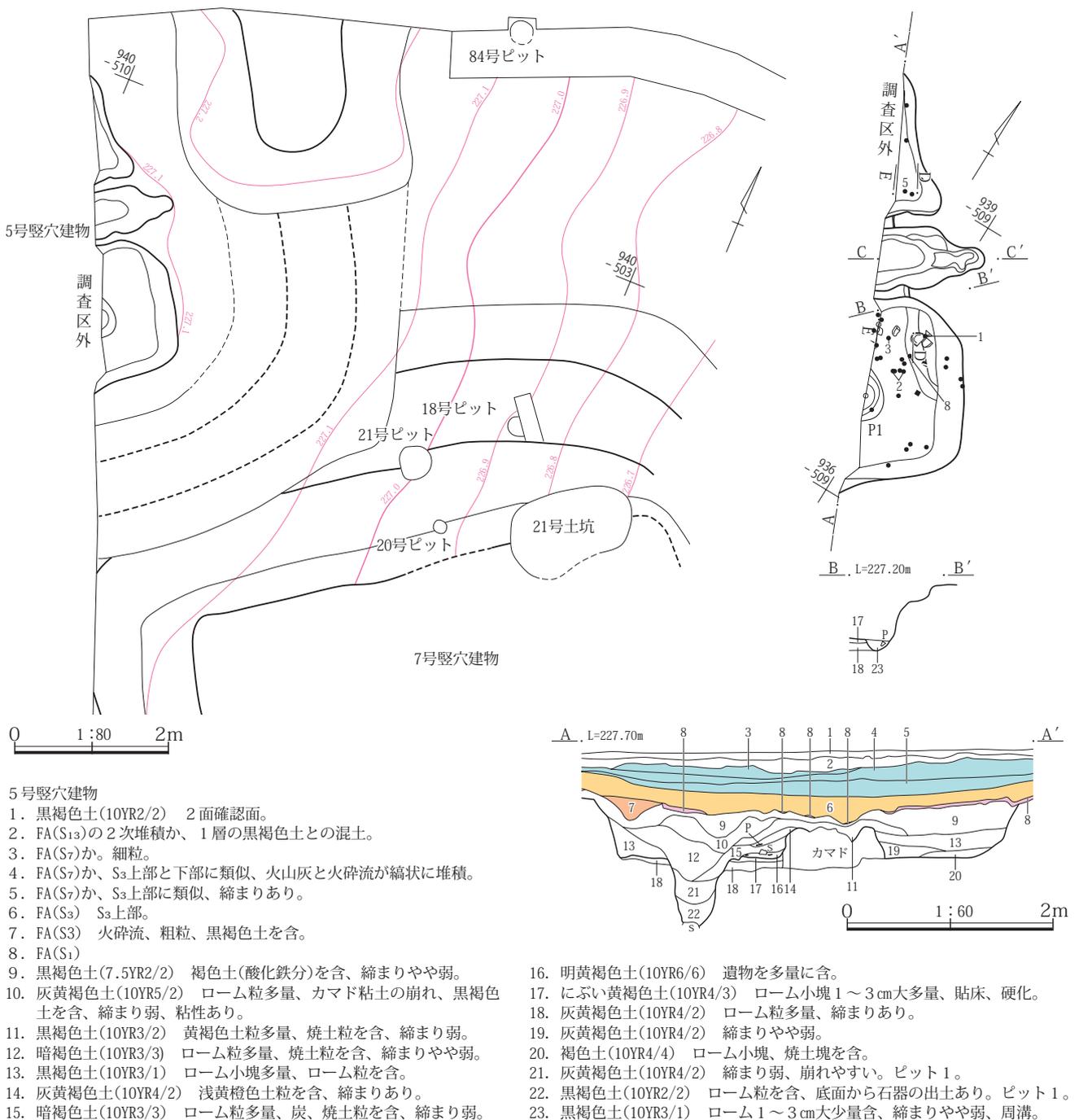


第132図 7号竖穴建物出土遺物図4

(3) 5号竪穴建物(第133～135図 PL.60・61・283)

位置 調査区北西端に位置する。**重複** 7号竪穴建物の周堤を覆っている可能性がある。**遺存状況** 東辺のカマドを含むごく一部が検出された。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して少し窪んでいる段階で、Hr-FAが降下している。**規模** 調査分は東西1.21m+、南北3.93m+、壁高は、67cmである。**周堤** 幅2.88m、高さ10cmで、東辺から南辺かけて痕跡があり、7号竪穴建物の周堤を切っている可能性がある。**カマド** 東向きで、新旧があ

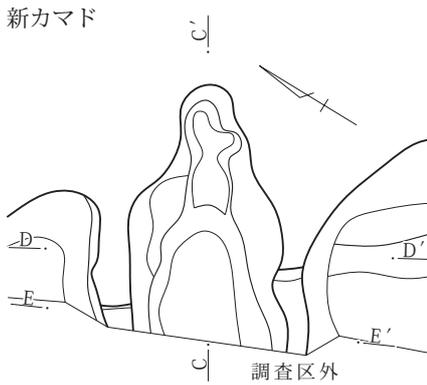
り、同じ場所で造り直しているものと想定される。いずれもカマド袖には石を置かず粘土のみで構築している。貯蔵穴と思われる穴が一部見えているが、調査区外のために調査できなかった。**出土遺物**(第135図 PL.283) 土師器は、杯Aが中心のそれもⅢ類が多い(第135図1～3)。杯BⅠと杯CⅡが少し出土している。他に甕がある。須恵器は甕、高杯片が出土している。**年代** 杯AⅢが中心で、杯Cも少量出土しているという様相から5世紀後半と推定される。



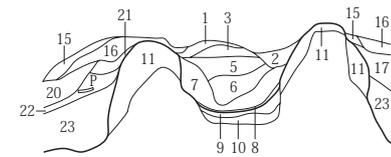
第133図 5号竪穴建物全体図・平面図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

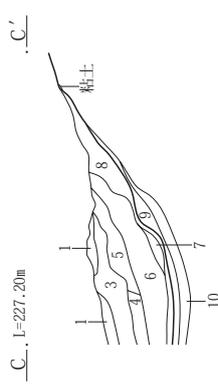
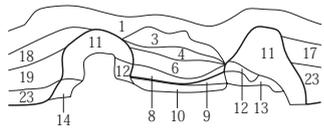
新カマド



D, L=227.20m D'

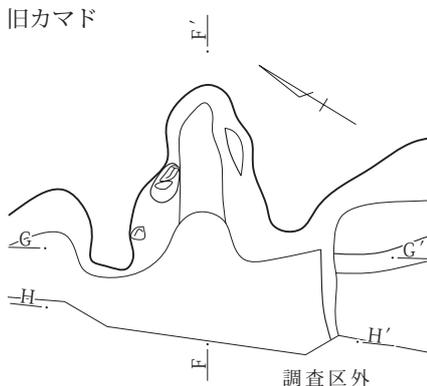


E, L=227.20m E'

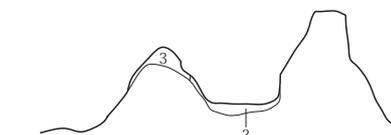


C, L=227.20m

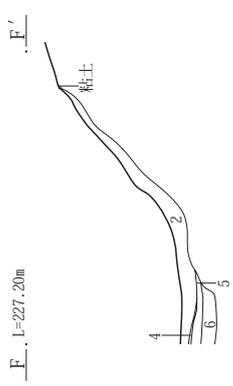
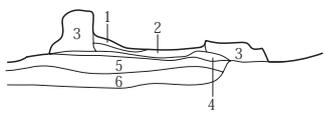
旧カマド



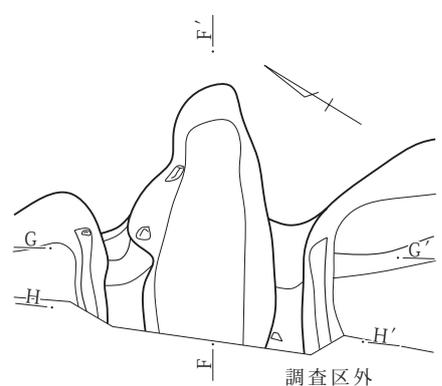
G, L=227.20m G'



H, L=227.20m H'



F, L=227.20m



F, L=227.20m

5号竪穴建物新カマド

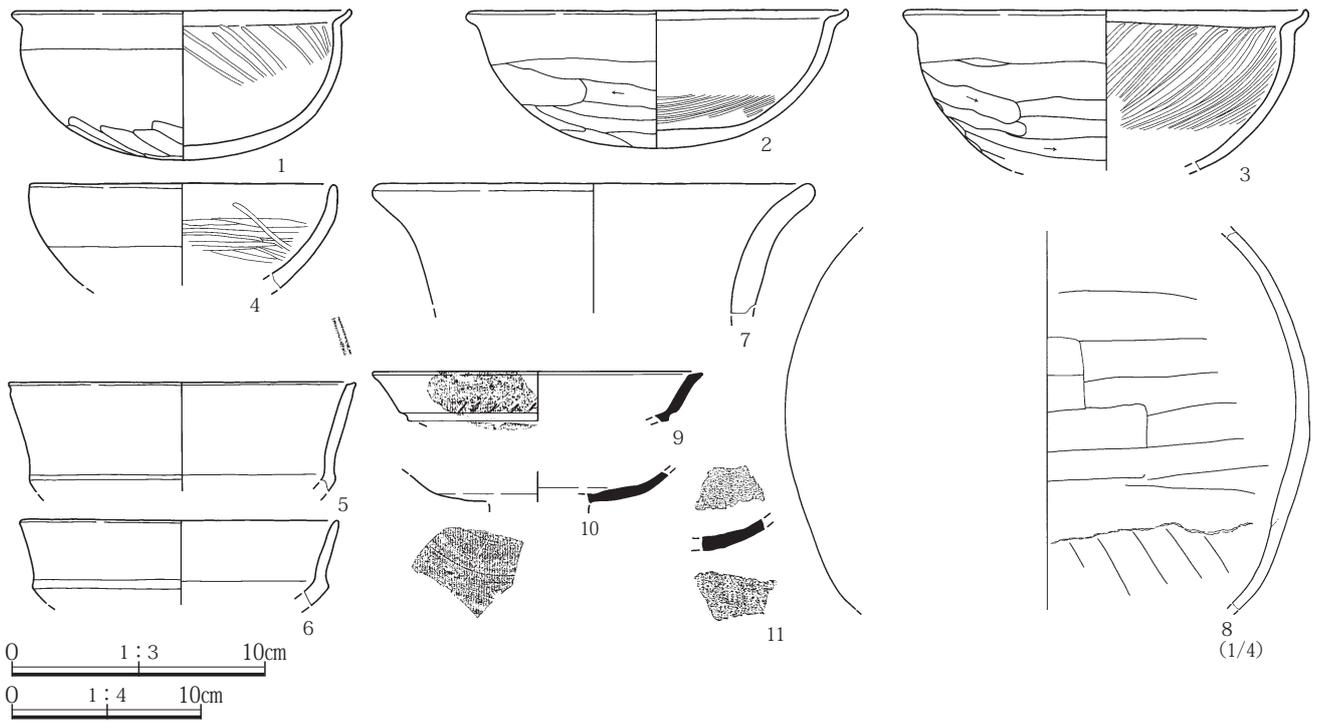
1. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム粒多量、カマド粘土の崩れ、黒褐色土を含、縮まり弱、粘性あり。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黄褐色土多量、縮まりやや弱。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 明黄褐色土1cm大塊多量、天井崩落土、縮まりややあり。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色土粒を含、硬化。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 焼土小塊・粒、灰を含、縮まりややあり。
6. 明赤褐色土(2.5YR5/8) 灰少量、焼土1cm大塊多量、縮まりややあり。
7. 明赤褐色土(2.5YR5/8) 焼土、灰、ローム塊を含、縮まりやや弱。
8. にぶい黄褐色土(10YR6/3) ローム小塊多量、焼土・灰含、縮まりやや弱。
9. 黒褐色土(5YR2/1) 灰、縮まり弱、焼土・灰含、新カマド使用面。
10. 褐灰色土(10YR4/1) 灰、明赤褐色焼土小塊・粒を含。
11. 明黄褐色土(10YR6/6) 粘質土、ローム、カマド袖部、硬化。
12. にぶい黄褐色土(10YR6/3) 8層より灰は少、焼土。
13. 暗赤灰色土(2.5Y3/1) ローム塊1~3cmを含、ややよごれたローム、焼土粒を含。
14. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を含、縮まりあり、11層を盛るために乗せたか。
15. 灰褐色土(7.5YR4/2) ローム粒多量、カマドの崩れ、縮まり弱、粘性強。
16. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 粘質土、カマドの崩れ、縮まりあり。
17. 黒褐色土(10YR3/1) ローム小塊多量、ローム粒を含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅黄褐色土粒を含、縮まりあり。
19. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒多量、炭、焼土粒を含、縮まり弱。
20. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒多量、炭、焼土粒を含、縮まり弱。
21. 黒褐色土(10YR2/2) 灰、炭、焼土を含、縮まりやや弱。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量、焼土粒を含、遺物を多量含、縮まり弱。
23. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 遺物を多量に含。

5号竪穴建物旧カマド

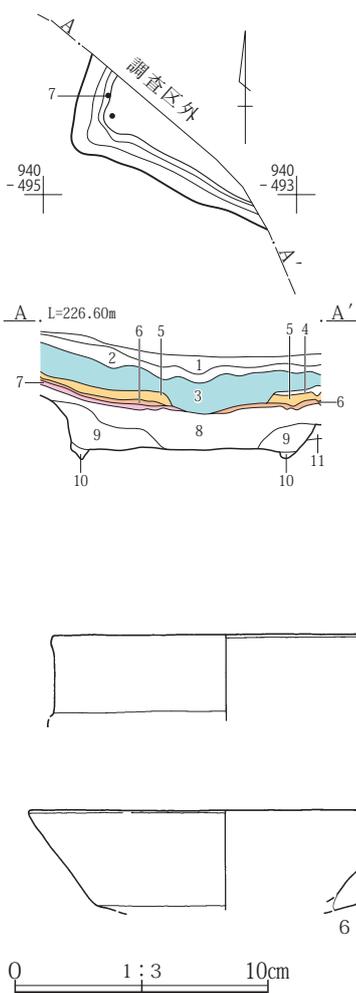
1. 旧カマド使用面
2. 明黄褐色土(10YR6/8) 粘質土、ローム。
3. 灰褐色土(5YR5/2) 焼土粒多量、黒褐色土少量、旧カマド構築材。
4. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒微量。
5. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊1~3cm多量、貼床、硬化。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒多量、縮まりあり、竪穴建物掘り方。

0 1:30 1m

第134図 5号竪穴建物カマド図・土層断面図



第135図 5号竪穴建物出土遺物図



6号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR2/2) 4面確認面。
2. 灰褐色土(7.5YR4/2) S₁₃の2次堆積。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2) FA(S₇)、粗粒。
4. 褐灰色土(7.5YR6/1) 暗褐色土を含、締まりやや弱。
5. 褐灰色土(7.5YR6/1) FA (S₃上部)、締まりあり。
6. 褐灰色土(10YR6/1) FA (S₃下部)、細粒、締まりあり。
7. にぶい褐色土(7.5YR6/3) FA(S₁)、締まりあり。
8. 黒褐色土(10YR2/2) 褐色土(酸化鉄か)を含、炭化物小片少量含。
9. 黒褐色土(10YR3/1) 橙色土粒1mm少量、ローム粒少量含、締まりやや弱。
10. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒多量、ローム小塊少量含、締まりやや弱、粘性あり、周溝。
11. 暗褐色土(10YR3/4) 白色土粒1mm以下少量含、締まりあり。

第136図 6号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図

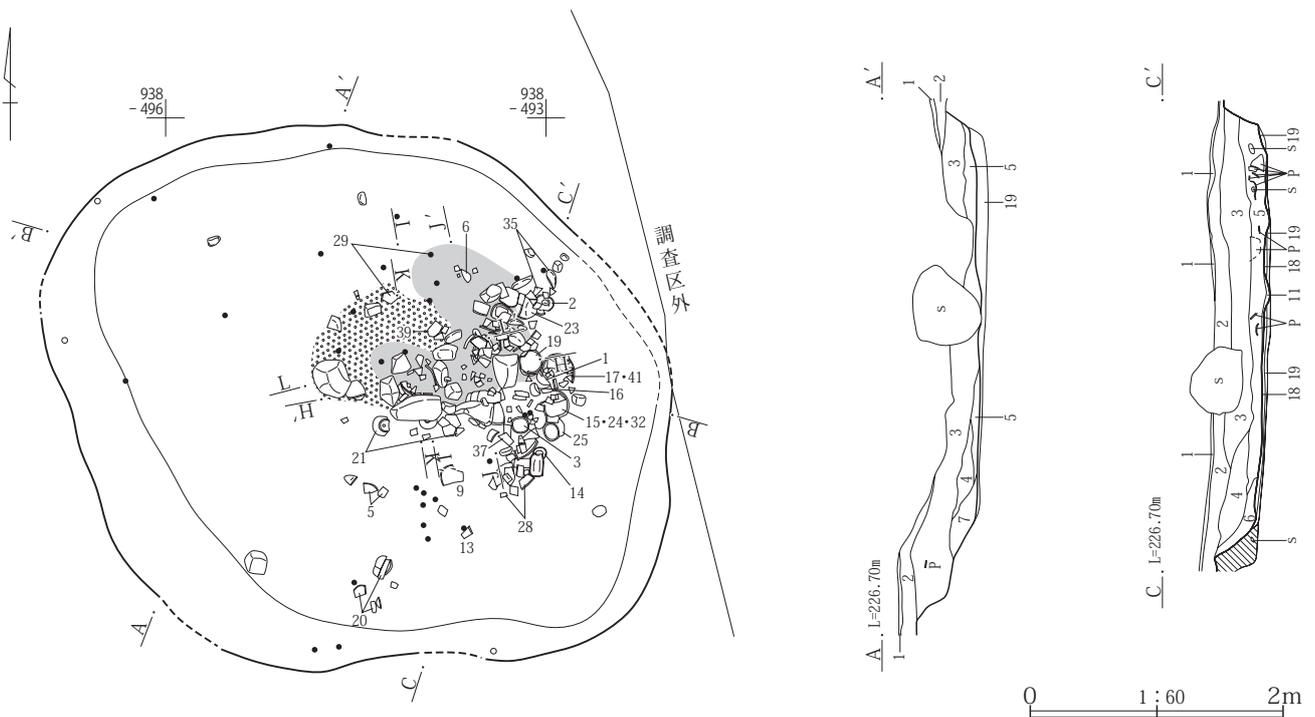
(4) 6号竪穴建物(第136図 PL.61)

位置 調査区北東端に南西隅を検出。カマド・柱穴ともに未確認である。**規模** 調査分は東西1.48m+、南北0.77m+、壁高は、40cmである。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して少し窪んでいる段階で、Hr-FAが降下している。**出土遺物**(第136図 PL.61) 杯AのⅡ類(第136図1~3)が中心で、杯CⅠが少し入る。他に、埴、高杯、甕片及び須恵器甕小片が出土している。**年代** 杯AⅡが中心で、杯CⅠが少し入ることから5世紀後半と推定される。

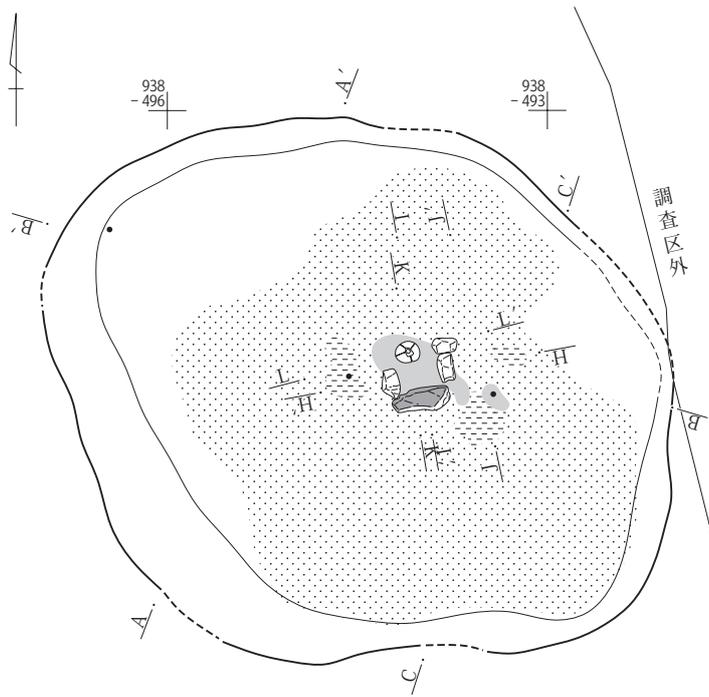
(5) 1号竪穴状遺構(第137~143図 PL.62・283~287)

位置 調査区北東側、7号竪穴建物の東、6号竪穴建物の南に位置している。**規模** 長径4.8m、短径4.3m、深さ30cmの竪穴状遺構で、中央に炉がある。大小の礫が炉の周りから出土している。**炉** 大形の石を5つコの字状に配置しており、高杯の脚を倒立して支脚にしている。その上に甕が置かれていた。焼土集中は、炉の北東側にもある。**小穴** 3個の長径36~35cm、短径33~43cm、深さ11~59cmの小穴が炉をまたいで、南北方向に並ぶように検出されている。**種実** 炉内南東部より、タデ属(果実)1が、モモ核片1が出土している。**出土遺物**(第139~143図 PL.283~287) 杯AのⅡ

類が中心で、杯DⅡ(第140図5・6・14)杯DⅢ(第140図7・15)杯DX(第140図16)などの古相の杯が入る。高杯はA類が中心で、それに当遺跡で唯一の高杯B類が含まれる。碗もBⅡ(第140図18)・FⅠ(第140図19)とボウル状の特徴的なH類(第140図19)が出土している。埴も含まれる。さらに小型壺AⅠ②(第140図20)が1点と、多くの小型甕CⅡ①(第140図23~第140図25)が出土している。甕は、D類と把手を持つC類が2個出土している。甕はA類が1例(第142図32)有る以外は、すべて甕C①(第141図30・第142図31・33~第143図35)である。須恵器は、杯蓋2、甕1が破片で出土している。土師器は、杯・高杯・碗・小型甕・小型壺・甕・甕といった組成となる。杯・高杯・甕の比率が多い。**性格** 壁の立ち上がりや、外形線もはっきりしていないが、炉跡やそこで使用した甕・甕など煮沸具などの出土があることから、煮炊きをしたことは確実である。上屋の有無は不明である。祭祀遺構の可能性もある。**年代** 古相を示す杯D類が多く、また杯AⅡ類が中心で杯Cが認められない。高杯もA類が中心であることなどから、5世紀中頃と想定される。

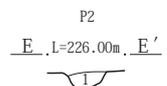
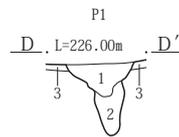
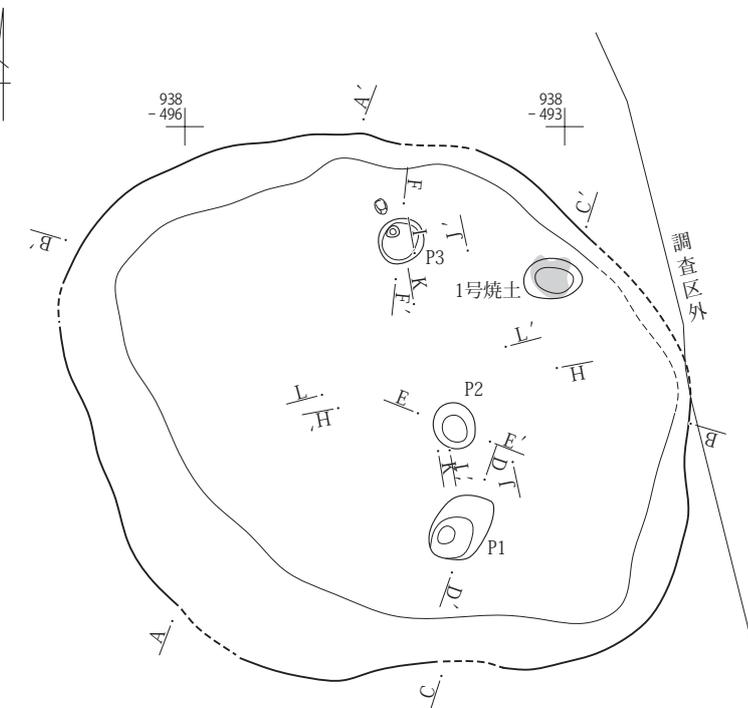
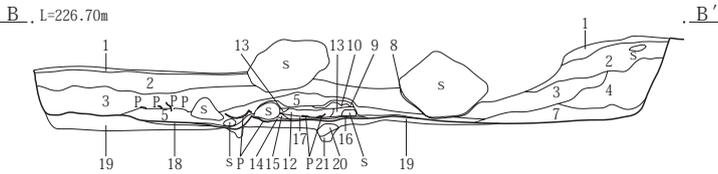


第137図 1号竪穴状遺構遺物出土状況図・土層断面図



1号竖穴状遺構

1. 黒褐色土(10YR2/2) FA(Si)を含、縮まりあり。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土(酸化鉄)を含、炭化物をやや多く含。
3. 黒褐色土(10YR2/3) 橙色土粒2層より多、炭化物少量、遺物を多量に含、縮まりやや弱。
4. 黒褐色土(10YR2/3) 縮まり弱。
5. 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物小片、焼土粒多量、遺物多量を含。
6. 黒色土(10YR2/1) 橙色土粒少量、炭化物を含、硬化。
7. 暗褐色土(10YR3/4) ローム粒少量、縮まりややあり。
8. にぶい橙色土(5YR6/3) FA(Si)火山灰、根攪乱等によって入り込んだか。
9. 黒褐色土(10YR3/1) 粘土少量含、縮まり弱。
10. 明黄褐色土(10YR7/6) 粘土、縮まりやや弱。
11. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒含、縮まりあり。
12. にぶい黄橙色土(10YR6/4) 粘質土、焼土粒を多量、灰を含。
13. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒多量、ローム粒を含、縮まりなし。
14. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒少量含、縮まり弱。
15. 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土、褐色土の混土、炭化物を含。
16. 明黄褐色土(10YR7/6) 粘土。
17. にぶい黄橙色土(10YR6/4) 焼土小塊・粒、灰を多量含。
18. 黒色土(10YR2/1) 炭化物を含、硬化。
19. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒を含、縮まりやや弱。
20. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒多量含、縮まり弱。
21. 黒褐色土(10YR2/3) 縮まり弱。

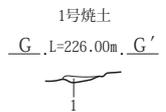
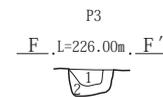


1号竖穴状遺構 P 1

1. 黒褐色土(10YR3/1) 縮まりやや弱。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を含、縮まり弱。
3. 黒褐色土(10YR3/1) 硬化。

1号竖穴状遺構 P 2

1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒微量含、縮まりやや弱。

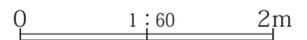


1号竖穴状遺構 P 3

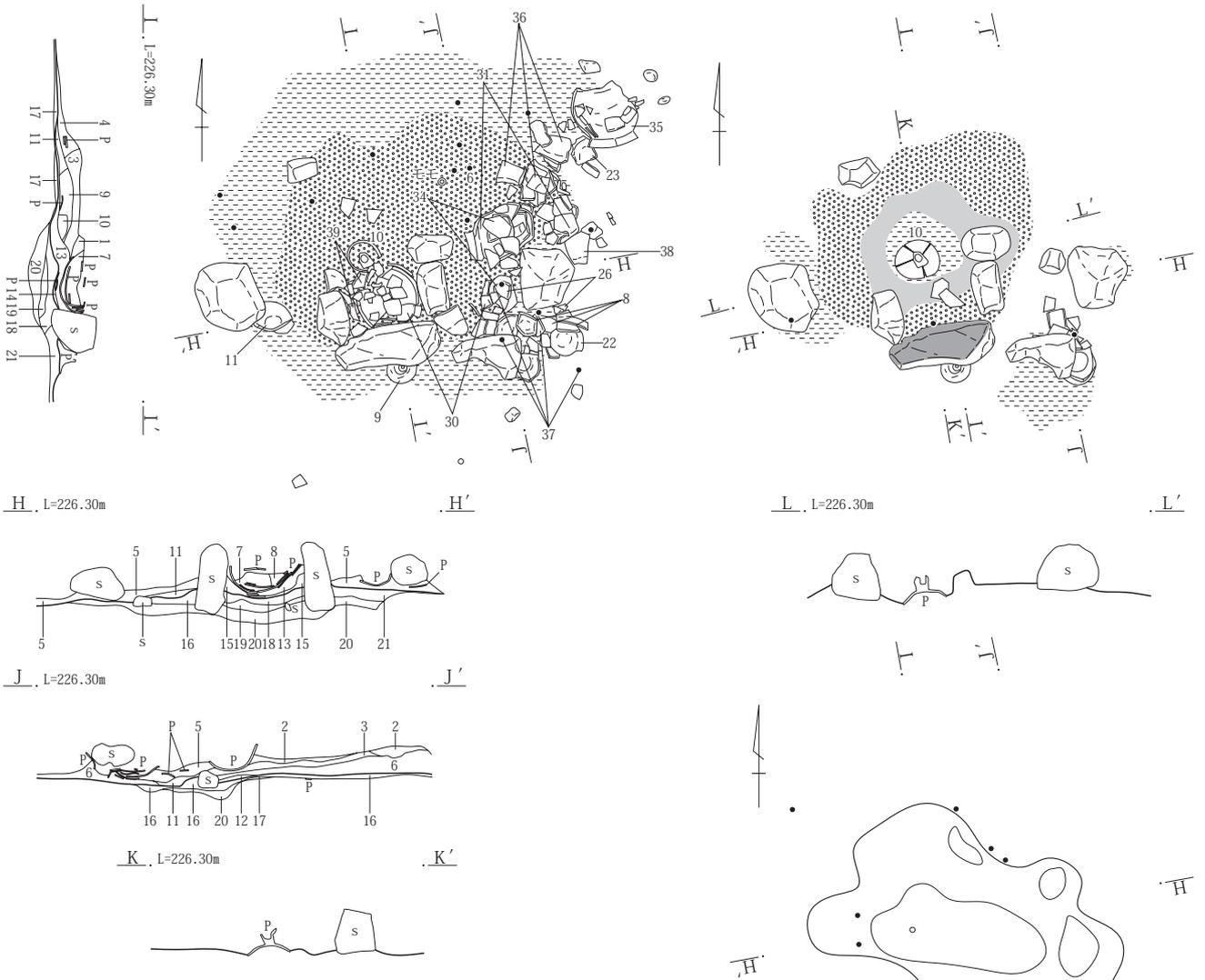
1. 黒褐色土(10YR3/1) 縮まりあり。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 縮まりやや弱。

1号竖穴状遺構 1号焼土

1. 暗褐色土(10YR3/3) 明赤褐色焼土塊を多量含、縮まり弱。

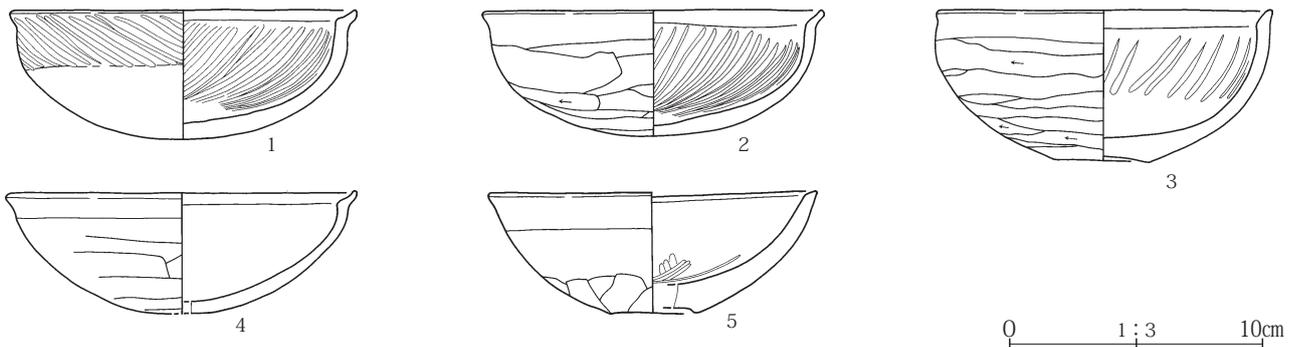


第138図 1号竖穴状遺構平面図・土層断面図

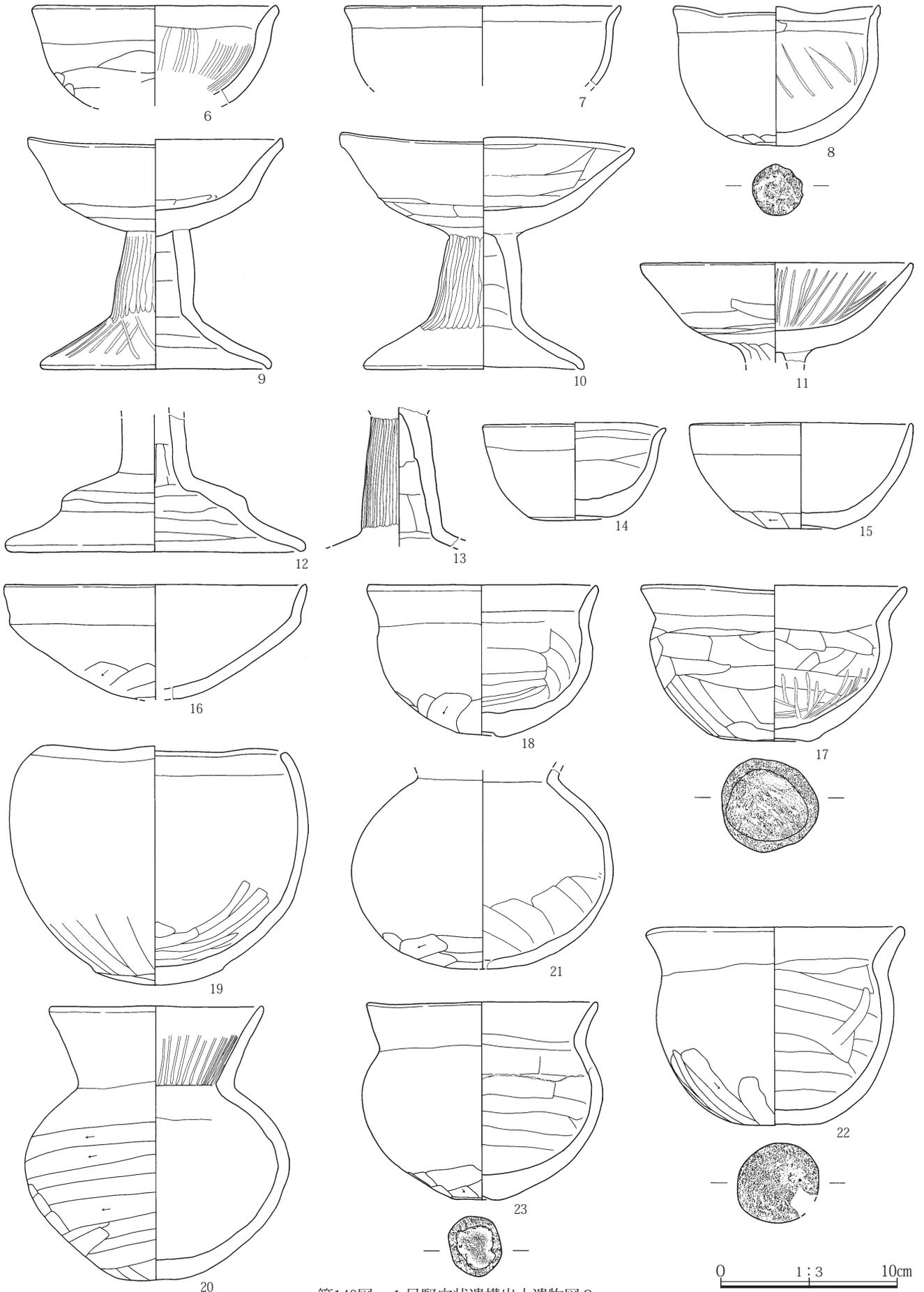


1号竪穴状遺構炉

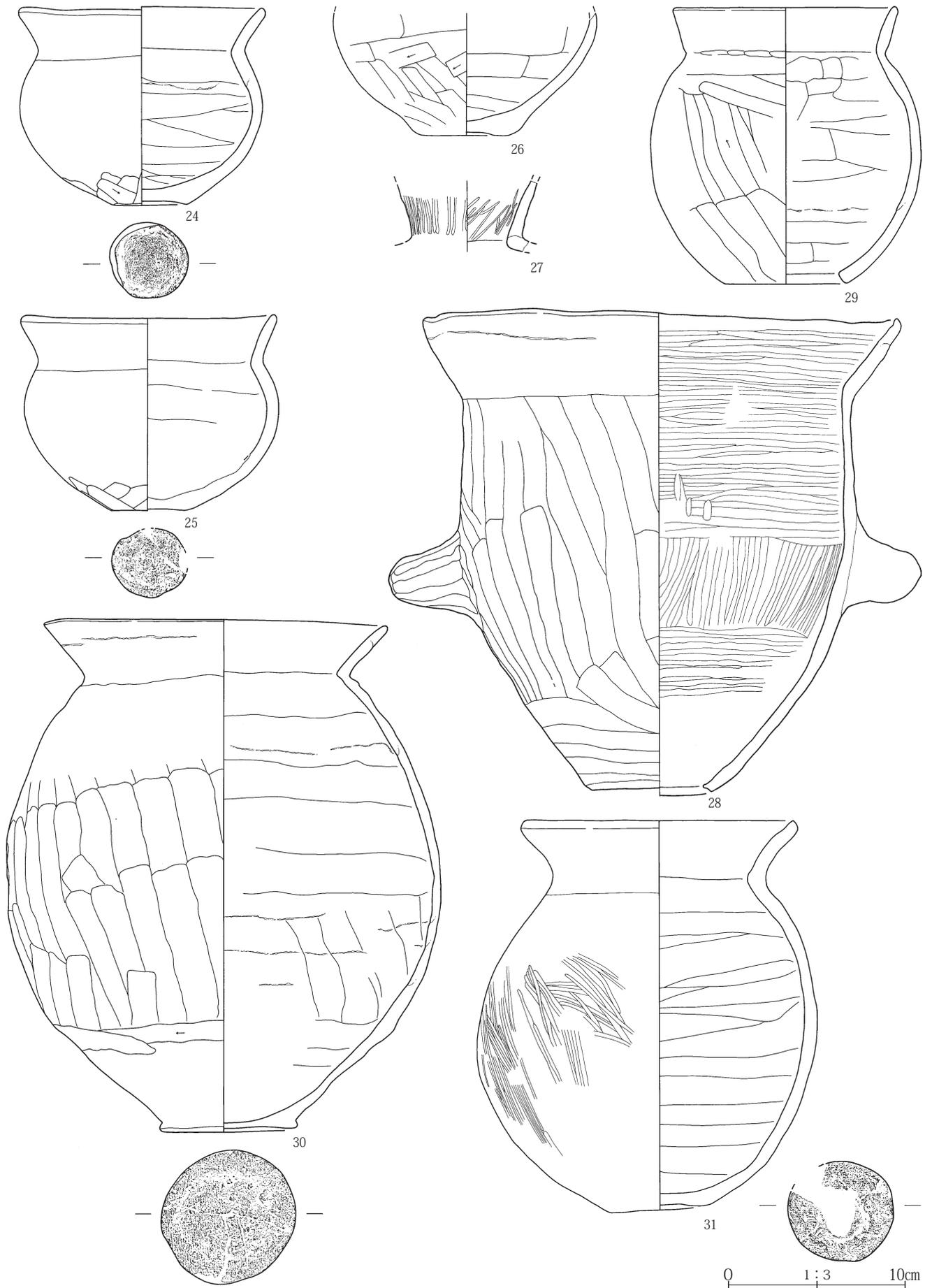
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) 明赤褐色焼土塊・粒を多量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒、炭、粘土小塊を多量含、縮まりやや弱。
3. 明黄褐色土(10YR7/6) 粘土、焼土を含、縮まりやや弱。
4. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土粒、炭化粒を多量含。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒含、縮まり弱。
6. 黒褐色土(10YR3/1) 硬化、焼土微量含。
7. 黒褐色土(10YR3/1) 高杯内部埋土、縮まりややあり。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒、ローム粒を含、縮まり弱、遺物含。
9. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 粘土、焼土塊・粒を多量、灰を含。
10. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒多量、小塊を少量含、縮まりやや弱。
11. 灰黄褐色土(10YR4/2) 8層に類似、黒褐色土を含、縮まりやや弱。
12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒縞状、焼土含。
13. 明赤褐色土(2.5YR5/6) 焼土、明黄褐色土、灰を含。
14. 暗赤褐色土(5YR3/2) 焼土粒少量、炭、灰を含。
15. 明赤褐色土(5YR3/2) にぶい黄褐色粘土、焼土小塊を含。
16. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒少量、炭多量含、縮まり弱。
17. 暗褐色土(10YR3/3) 縮まりあり。
18. 明褐灰色土(7.5YR7/2) 灰、褐色土、黒褐色土を含。
19. 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土、硬化。
20. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒、16層より多、縮まり弱。
21. 黒色土(10YR2/1) 焼土塊縞状に含、炭化物多量含。



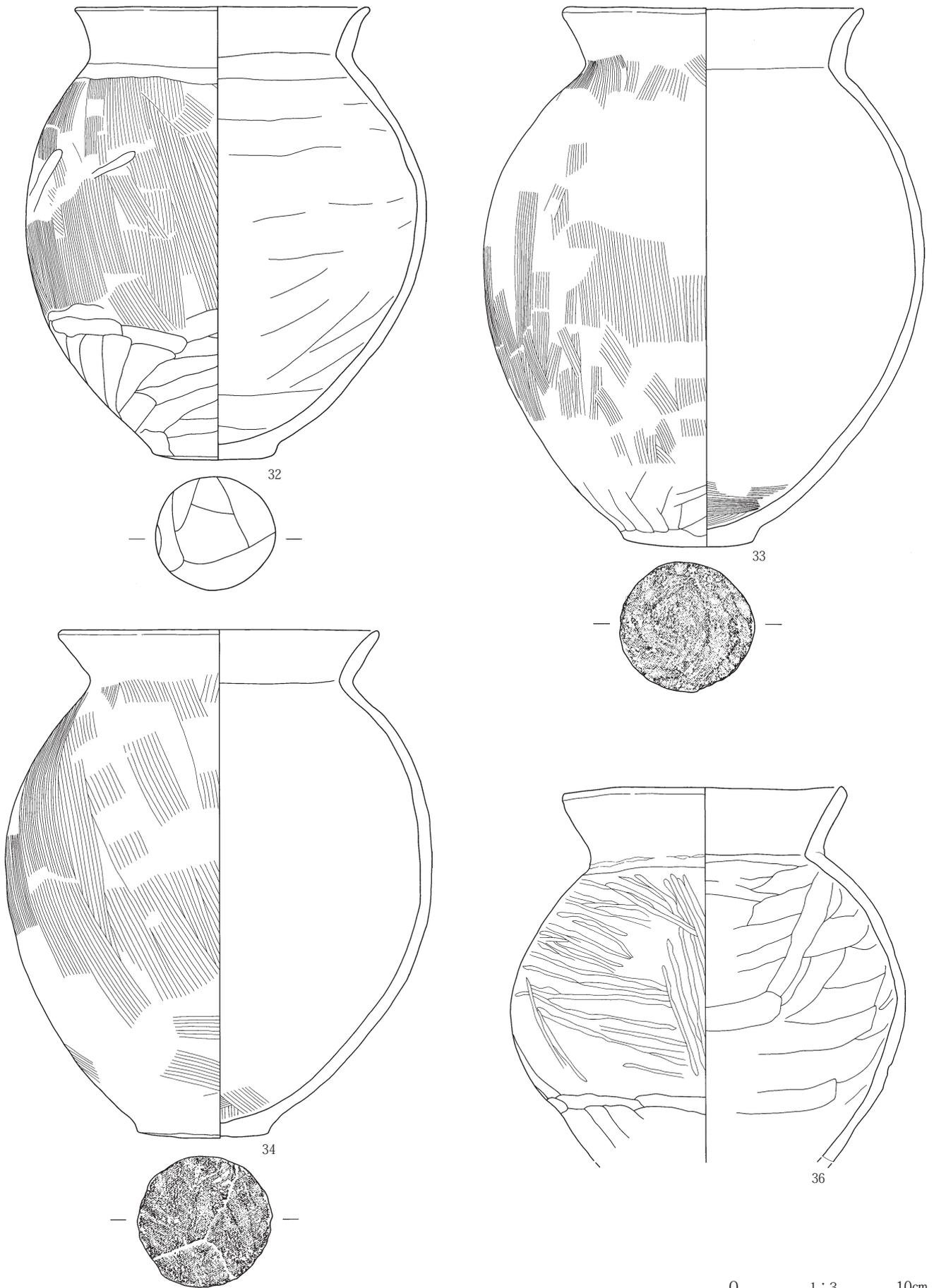
第139図 1号竪穴状遺構炉平面図・断面図・出土遺物図1



第140图 1号竖穴状遺構出土遺物图2

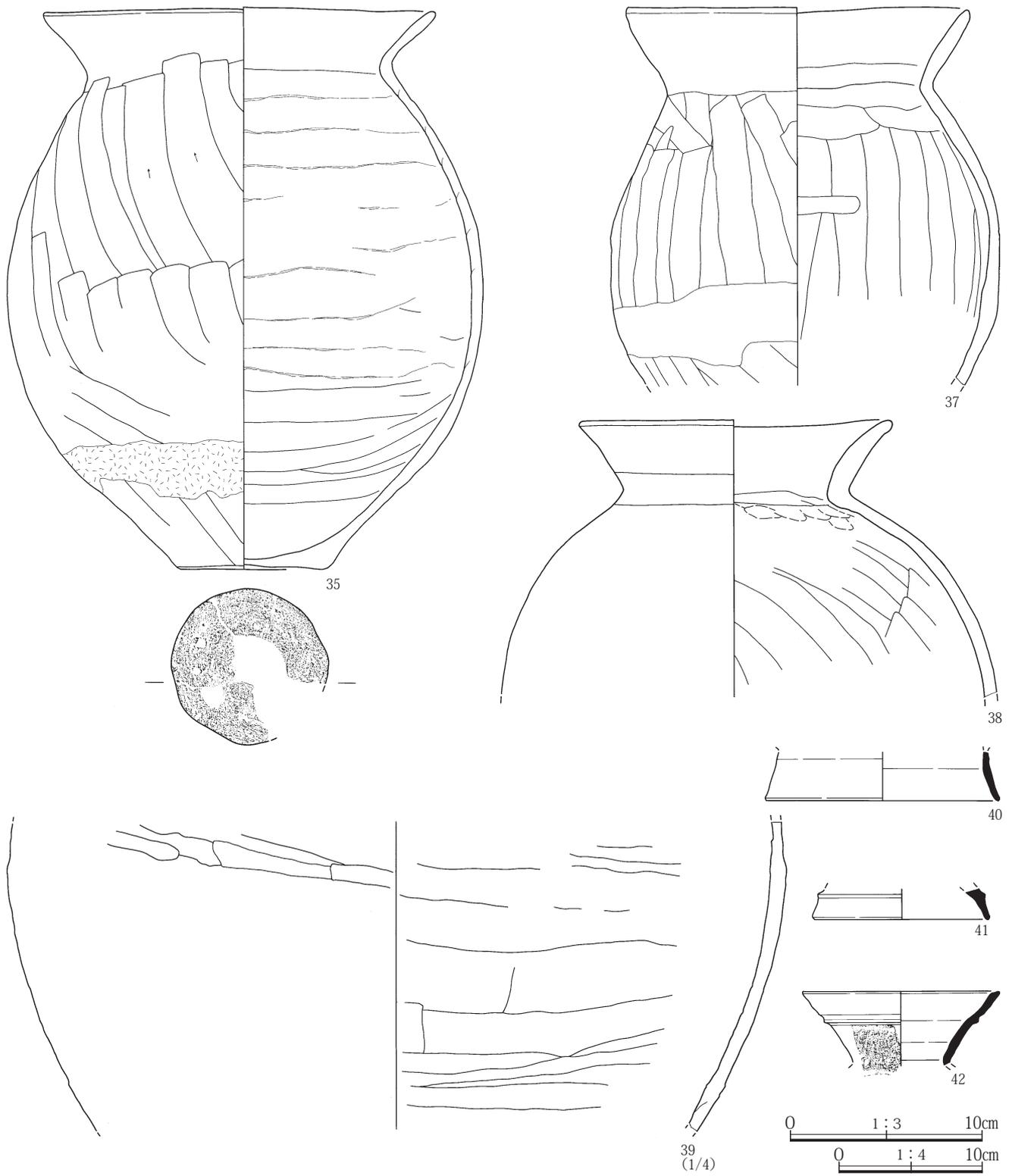


第141図 1号竪穴状遺構出土遺物図3



第142図 1号豎穴状遺構出土遺物図4

0 1:3 10cm

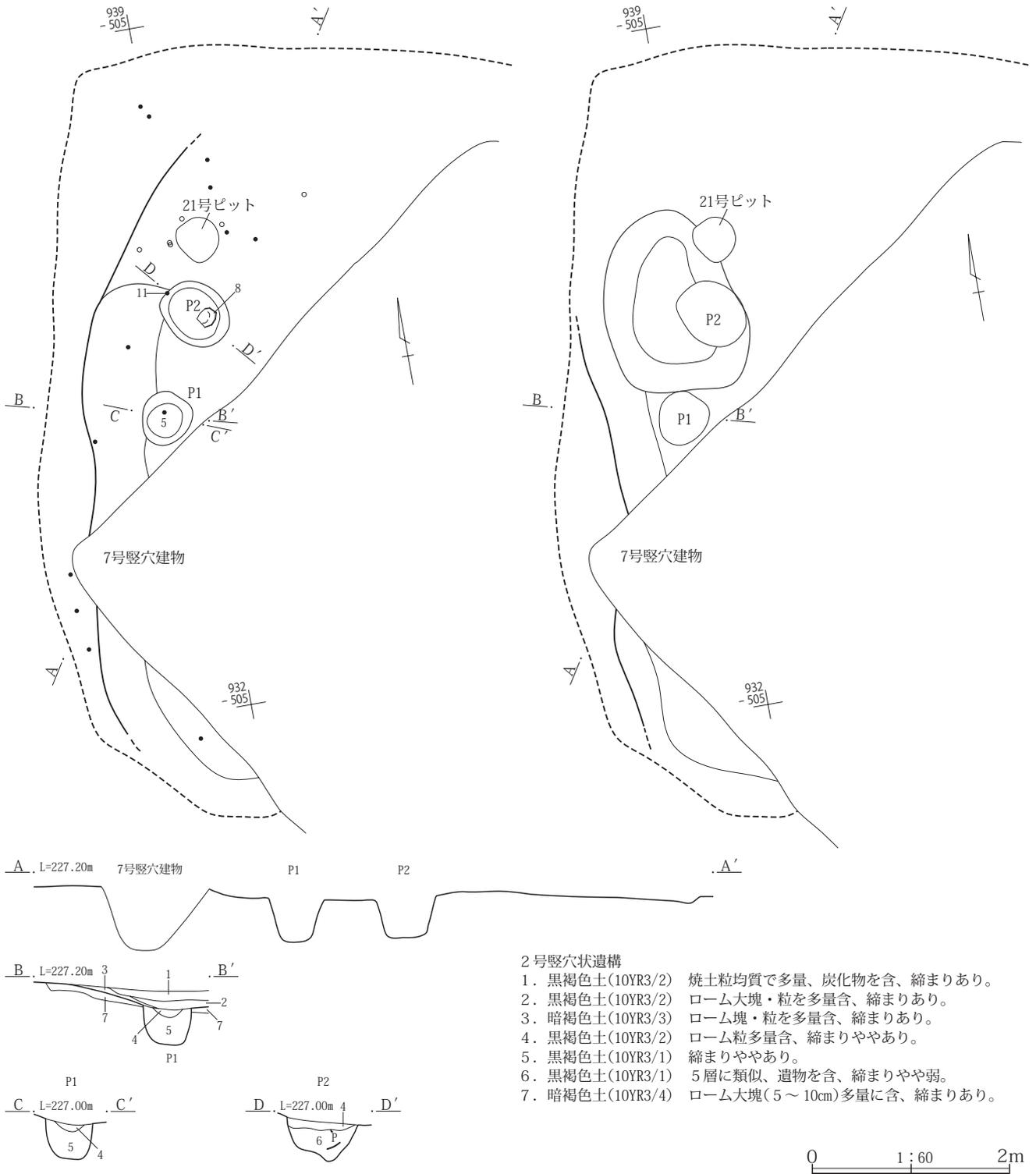


第143図 1号竪穴状遺構出土遺物図5

(6) 2号竪穴状遺構(第144・145図 PL.63・287)

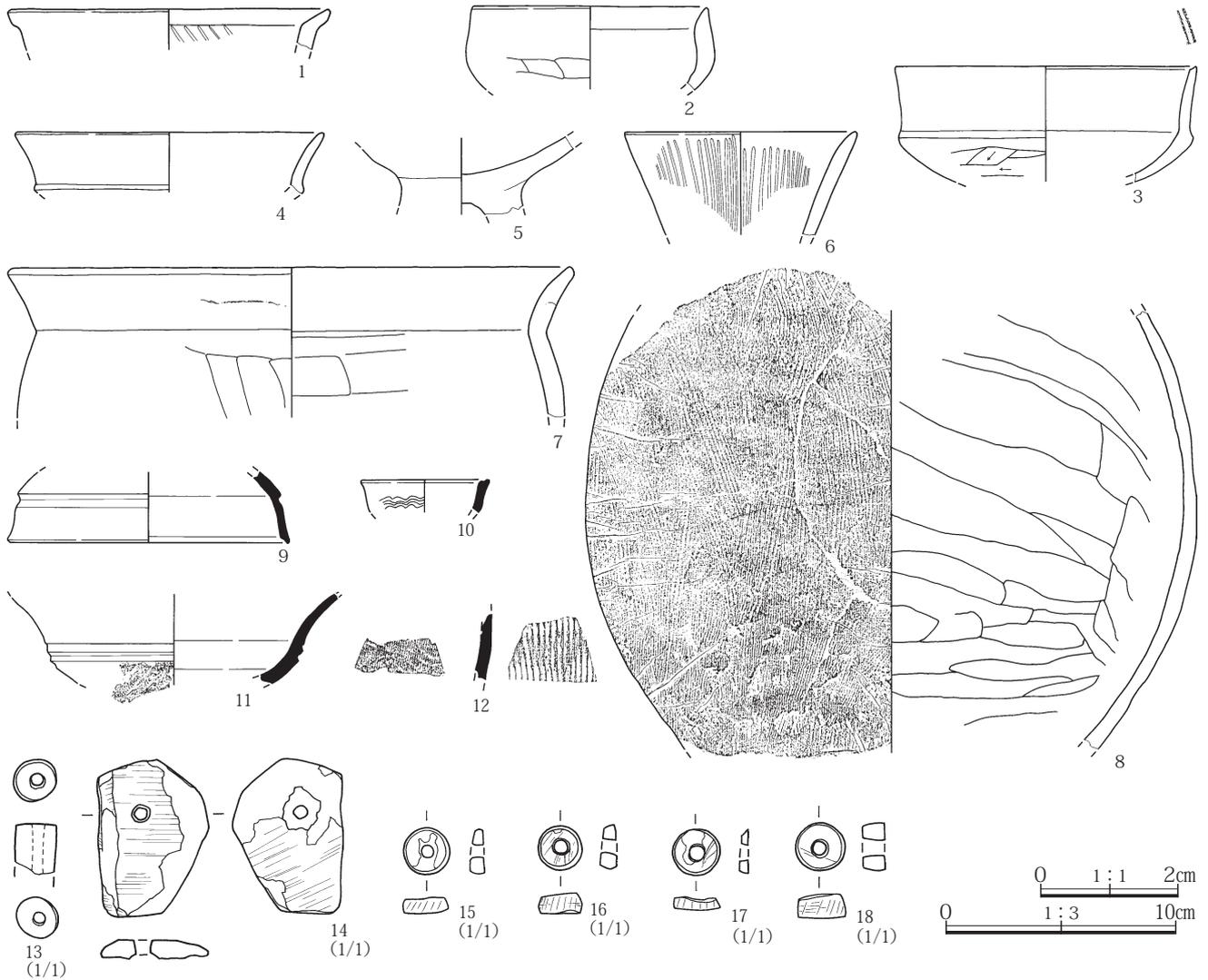
位置 調査区北西側7号竪穴建物と重複する。**重複** 7号竪穴建物とほぼ重複し、切られて一部が北部に残るものである。緩やかな傾斜で西側に立ち上がり、明瞭な壁は無い。**小穴** 小穴が2個南北方向に並んでいる。**出土遺物**(第145図 PL.287) 杯A II、杯C II、杯D IIが出土している。埴・高杯・甕も出土している。須恵

器は杯蓋、椀、高杯、甕片がある。須恵器の出土量が多い。他に、当遺跡で特徴的な石材である葉ろう石製の管玉1点、半円形の石製模造品1点、滑石製白玉4点が出土している。**性格** 残存遺構が少なく、遺構の性格は不明である。**年代** 杯A・C類中心の組成であることから5世紀後半と推定される。



第144図 2号竪穴状遺構平面図・土層断面図

0 1:60 2m



第145図 2号竪穴状遺構出土遺物図

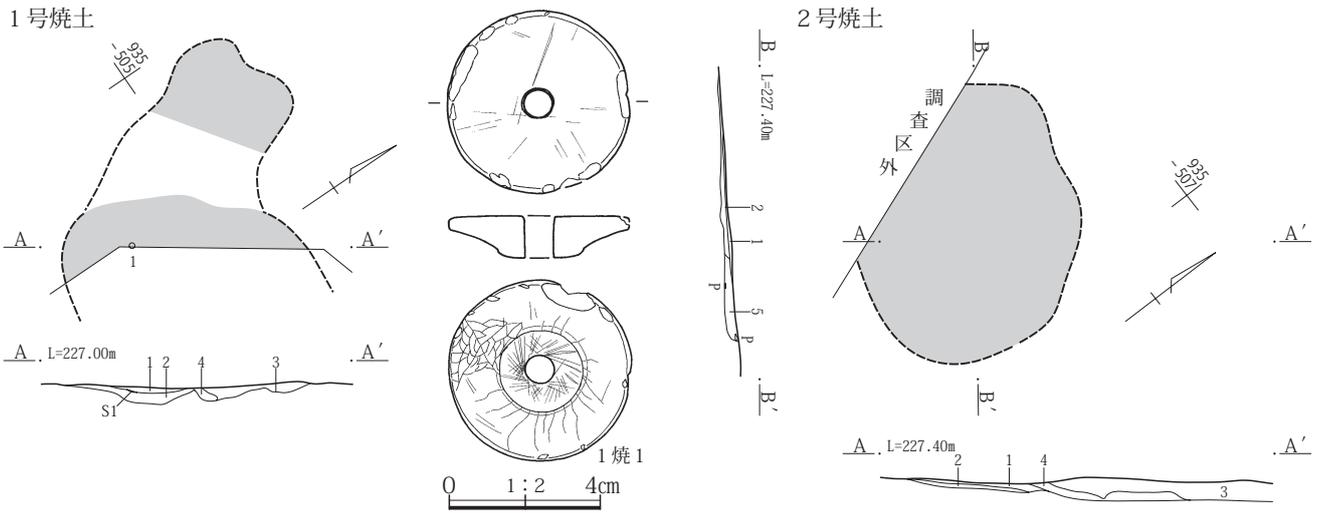
(7) 焼土・土坑・ピット群

焼土群(第146図) 調査区北部7・5号竪穴建物の周堤付近にある。あるいは、周堤上での何らかの行為を示すものの可能性も考えられる。

1号焼土(第146図 PL.64・287) 7号竪穴建物の北側周堤上にある、長径112cm+、短径128cm、厚さ8cmで平面不整楕円形である。南側は未確認である。直弧文の線刻を施す紡輪が出土している。

2号焼土(第146図 PL.64) 7号竪穴建物の周堤北西の少し内側の地点に、長径150cm、短径120cm、厚さ6cmの北西部を欠いている平面楕円形である。

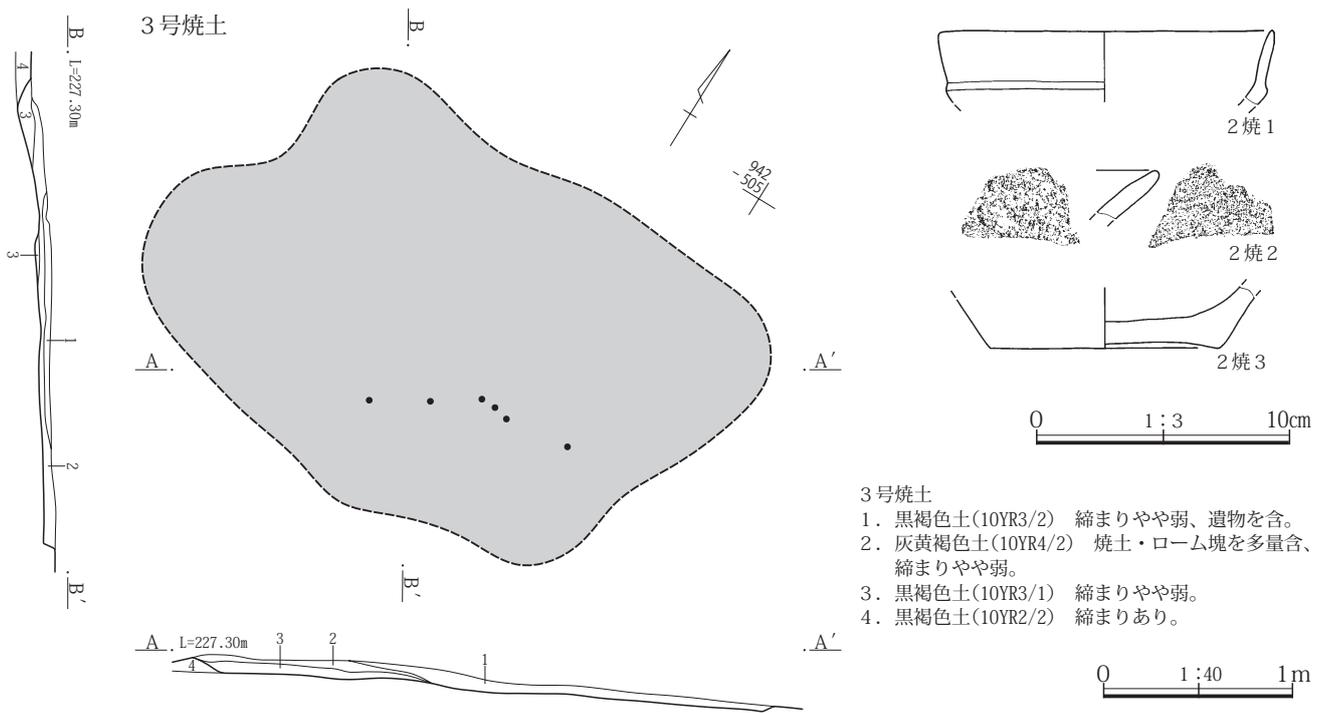
3号焼土(第146図 PL.64) 5号竪穴建物の周堤東側上に、長径320cm、短径210cm、厚み4cmで平面不整長方形の焼土集中である。土師器の内斜口縁・須恵器模倣杯、甕片が出土している。



- 1号焼土
1. にぶい黄橙色土(10YR6/3) 焼土粒多量含。
 2. にぶい橙色土(7.5YR7/3) 焼土塊、地山の焼土化、遺物を含。
 3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土粒多量含。
 4. にぶい黄橙色土(10YR6/3) 明赤褐色焼土塊主体。

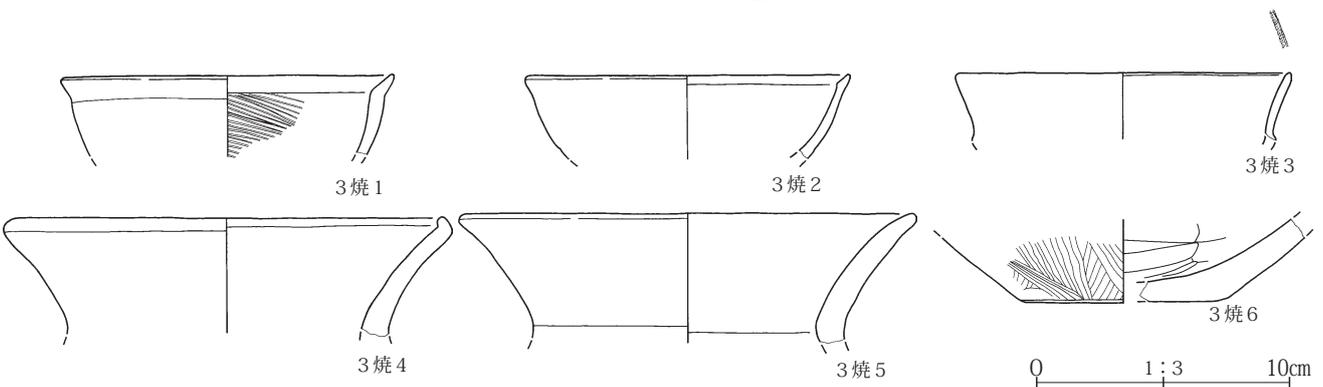
0 1:40 1m

- 2号焼土
1. 灰黄褐色土(10YR6/2) 灰、焼土粒を含、締まりあり。
 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土、灰、炭を含、締まり弱。
 3. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土を含、焼土粒を微量含。
 4. 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊・粒を含。
 5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) にぶい黄橙色土粒、焼土小塊を含。



- 3号焼土
1. 黒褐色土(10YR3/2) 締まりやや弱、遺物を含。
 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・ローム塊を多量含、締まりやや弱。
 3. 黒褐色土(10YR3/1) 締まりやや弱。
 4. 黒褐色土(10YR2/2) 締まりあり。

0 1:40 1m



第146図 2区焼土平面図・出土遺物図・土層断面図

土坑群(第147～149図)

14号土坑(第147図 PL.64) 7号竪穴建物の周堤南西を切る形の、長径216cm、短径142cm、深さ65cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。フク土に炭化物小片を含む。

15号土坑(第147図 PL.64) 7号竪穴建物の周堤南西隅を切る形の、長径213cm、短径113cm、深さ56cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。フク土に炭化物小片を含む。

19号土坑(第148図 PL.64) 7号竪穴建物の周堤南西内側を切る形の、長径192cm、短径142cm、深さ71cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。フク土に炭化物小片を含む。

21号土坑(第148図) 7号竪穴建物の周堤北側を切る形の、長径163cm、短径98cm、深さ43cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。

23号土坑(第148図 PL.64) 7号竪穴建物の埋土を切る形で築造された、長径125cm、短径70cm、深さ40cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。

25号土坑(第148図 PL.64) 1号竪穴建物の周堤西北側平坦面を切る形の、長径167cm、短径72cm、深さ23cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりは急でしっかりとしている。モモの破片が数個出土している。

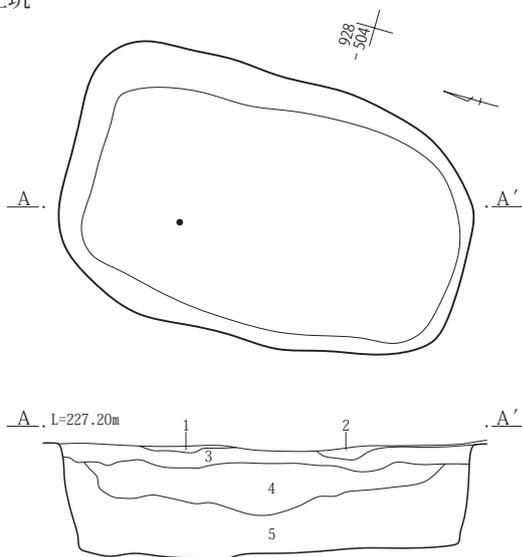
26号土坑(第148図 PL.64) 1号竪穴建物の周堤西側を切る形で築造された、長径122cm、短径75cm、深さ25cmの平面不整長方形の土坑である。立ち上がりはやや緩やかである。

27号土坑(第148図 PL.64) 1号竪穴建物の周堤西側を切る。長径175cm、短径96cm、深さ38cmの平面不整長方形の土坑である。立ち上がりはやや緩やかである。

28号土坑(第149図 PL.64) 1号竪穴建物の周堤北側にあり、1号竪穴建物に切られる形で、長径210cm+、短径104cm、深さ50cmの平面長方形の土坑である。立ち上がりはやや緩やかである。

29号土坑(第149図 PL.64) 7号竪穴建物の南西側埋土中にあり、7号竪穴建物を切っている19号土坑を切って造られた、長径54cm、短径50cm、深さ34cmの平面方形の土坑である。立ち上がりは急である。

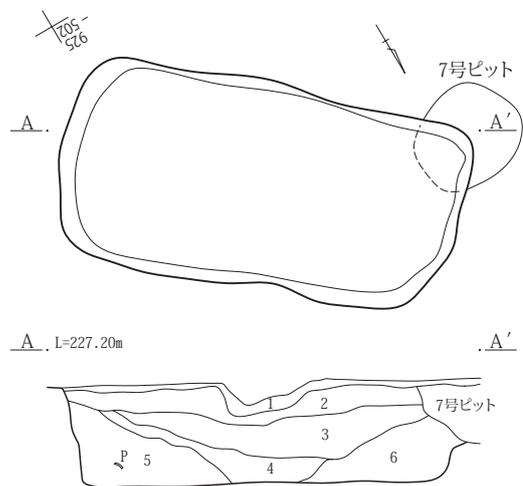
14号土坑



14号土坑

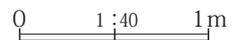
1. 黒褐色土(7.5YR3/2) FA(S1)を含。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 帯状に、褐色土の酸化鉄分を含。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 橙色土粒1mm以下少量を含。
4. 暗褐色土(10YR3/3) ローム小塊・粒少量、炭化物小片、黒褐色土を縞状に含、縮まりやや弱。
5. 黒褐色土(10YR2/2) ローム3～5cm大塊を多量含、人為的な埋没土か、縮まりやや弱。

15号土坑



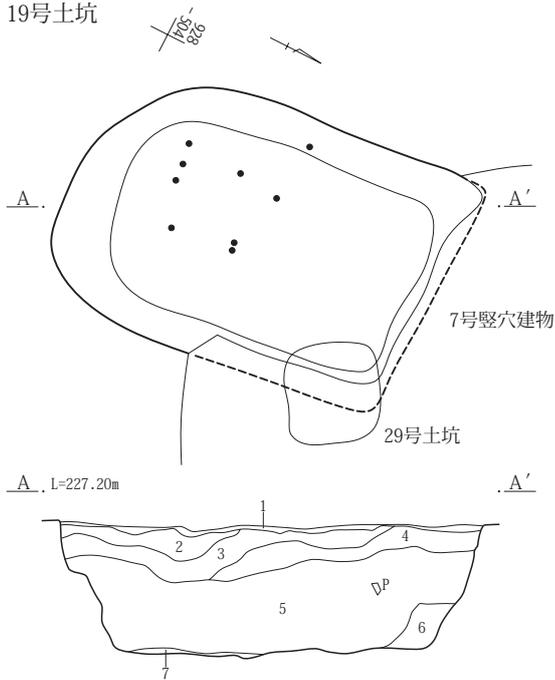
15号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土の酸化鉄か、FA(S1)を含、縮まり弱、粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土・ローム1cm以下粒を多量含、縮まり弱、粘性あり。
3. 黒色土(10YR2/1) ローム1cm大塊を少量含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム小塊多量、炭化物を含、3層より多、縮まり弱、粘性あり。
5. 黒色土(10YR2/1) ローム小塊多量含、3層に類似、縮まり弱、粘性あり。
6. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒多量、ローム1cm大塊を少量含、縮まりやや弱、粘性あり。



第147図 2区土坑図1・土層断面図

19号土坑



19号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2) FA(Si)を含。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 焼土10cm大塊を含。
3. 暗褐色土(10YR3/3) 褐色土の酸化鉄分を含。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 橙色土粒少量、炭化物を含。
5. 黒褐色土(10YR2/3) ローム1~5cm大塊多量含、縮まり弱。
6. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒多量含、縮まり弱。
7. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊を含、縮まり弱。

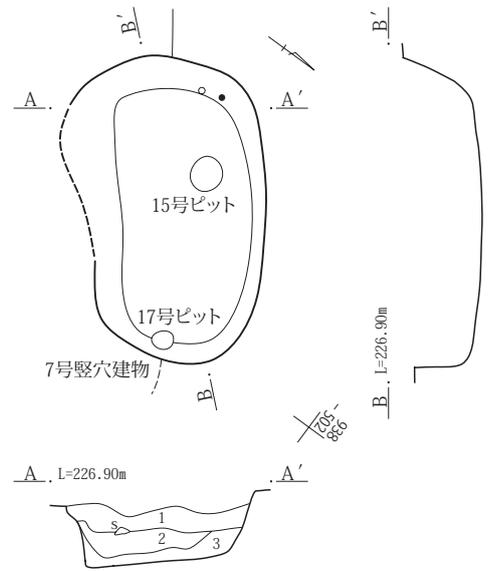
21号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒微量、灰白色粒を少量含。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒少量含。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒少量含。

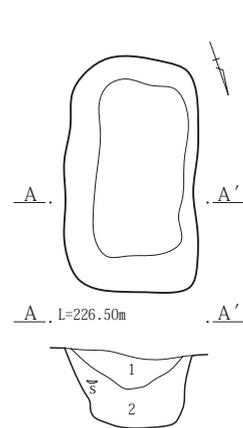
23号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム1cm大塊・粒・焼土粒を多量含、縮まりやや弱。
2. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒微量、礫を含、縮まりやや弱。

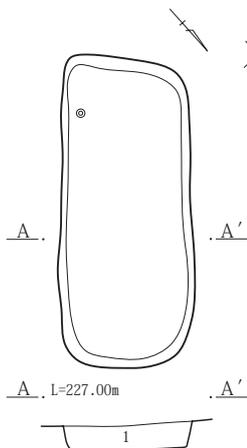
21号土坑



23号土坑



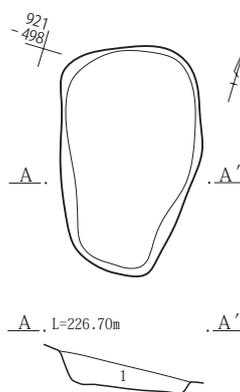
25号土坑



25号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム1~5cm大塊・ローム粒を多量含、縮まりややあり。

26号土坑



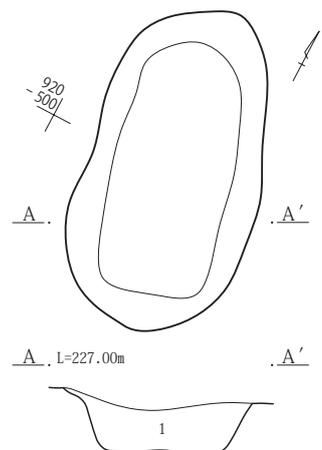
26号土坑

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒、少量、少塊少量含、縮まりややあり。

27号土坑

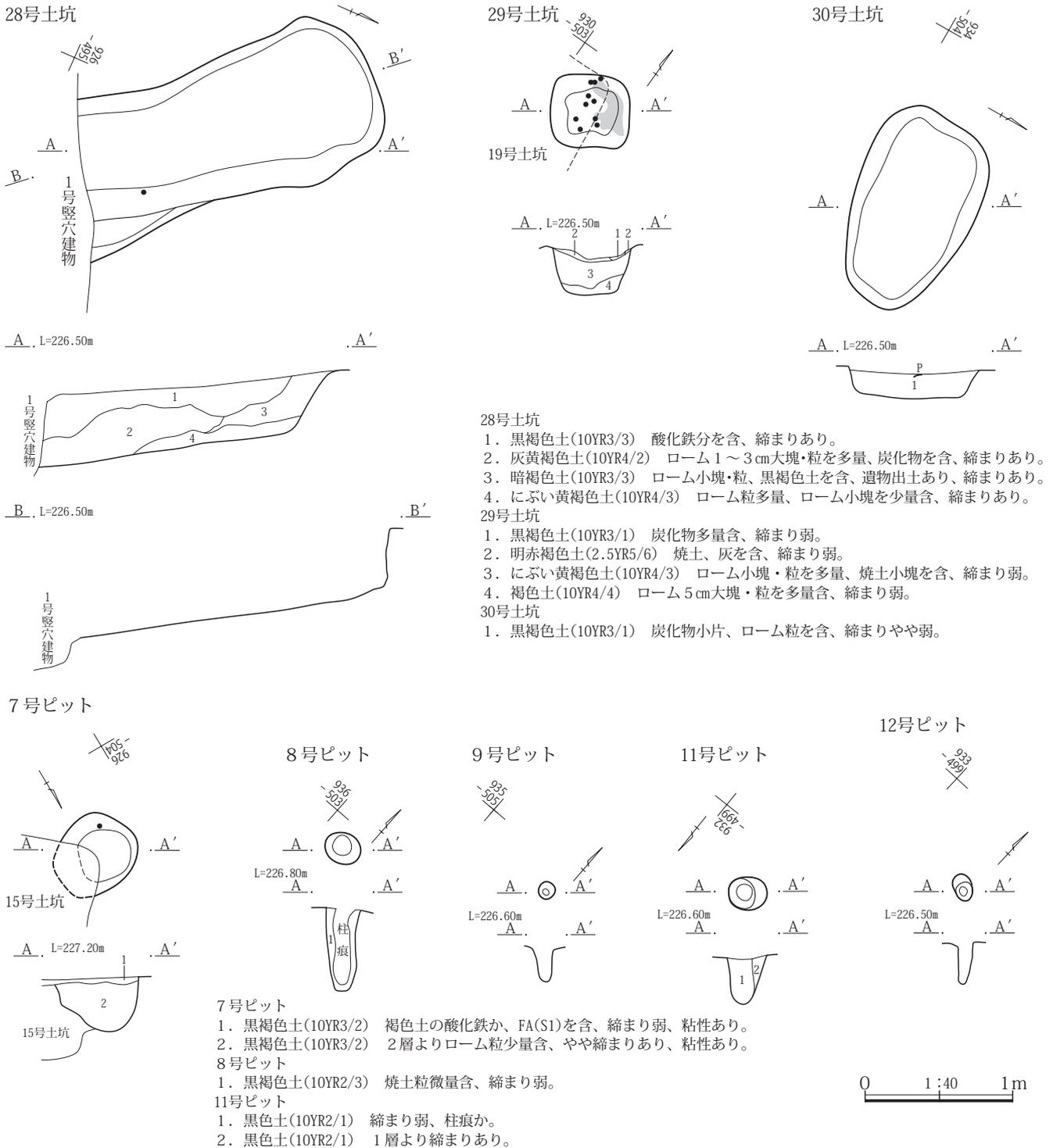
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム1~5cm大塊を多量含。

27号土坑



第148図 2区土坑図2・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



第149図 2区土坑図3・ピット図1・土層断面図

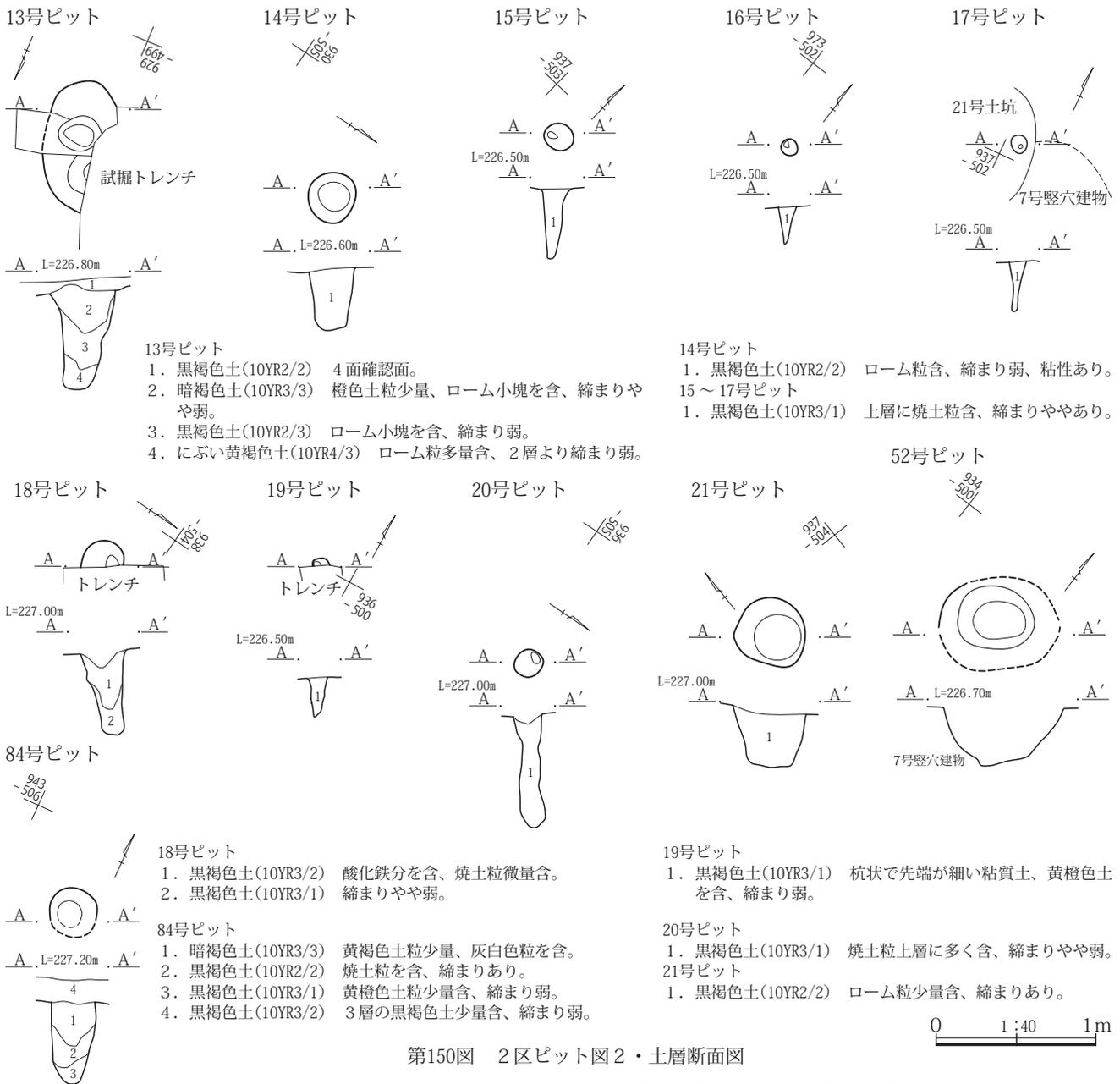
30号土坑(第149図 PL.64) 7号竪穴建物の中央やや南側の床下から検出された長径133cm、短径84cm、深さ23cmの平面不整長方形の土坑である。立ち上がりはやや緩やかである。

ピット群(第149・150図 PL.65)

ピットは7~9・11~21・52・84号の16基検出した。7号竪穴建物の周堤や床面から検出されているが、長

径11~60cm、短径11~42cm、深さ24~94cmになり、掘立柱建物は建たない。

また、いくつかの平面長方形の土坑があり、墓である可能性もある。7号竪穴建物の土器様相からすると5世紀中ごろに近いので、この建物の廃棄後、造られたものと想定している。



第150図 2区ピット図2・土層断面図

6 3区5面遺構(第151図 PL.66)

3区5面遺構は、南北方向の溝が1条、東西方向の溝2条が検出され、さらに3基のピットが検出された。

(1) 溝・ピット群

26号溝(第151図 PL.66) 方向は、N-23°-Eで、長さ92cm+、上場幅30～32cm、下場幅13～16cm、深さ8～11cmである。最大高低差は2cmで、勾配率は2.17%である。

27号溝(第151図 PL.66) 方向は、N-28°-Wで、長さ225cm+、上場幅25cm+、下場幅13～16cm+、深さ13～29cmである。最大高低差は8cmで、勾配率は3.55%である。

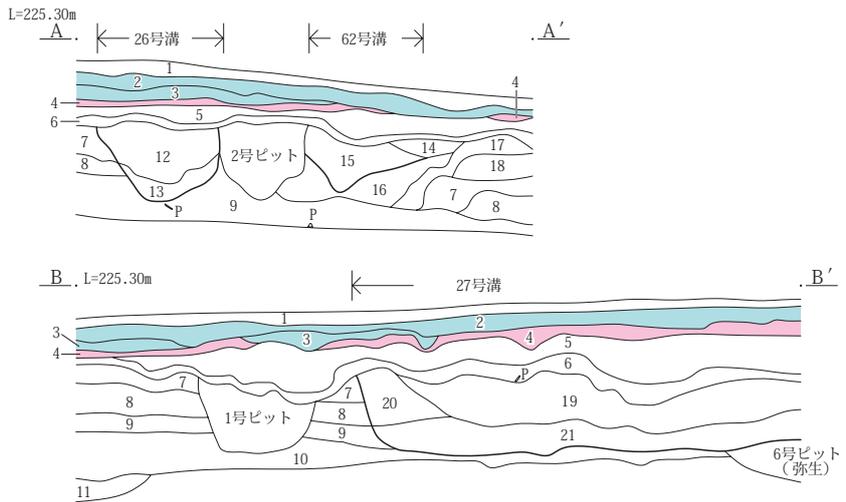
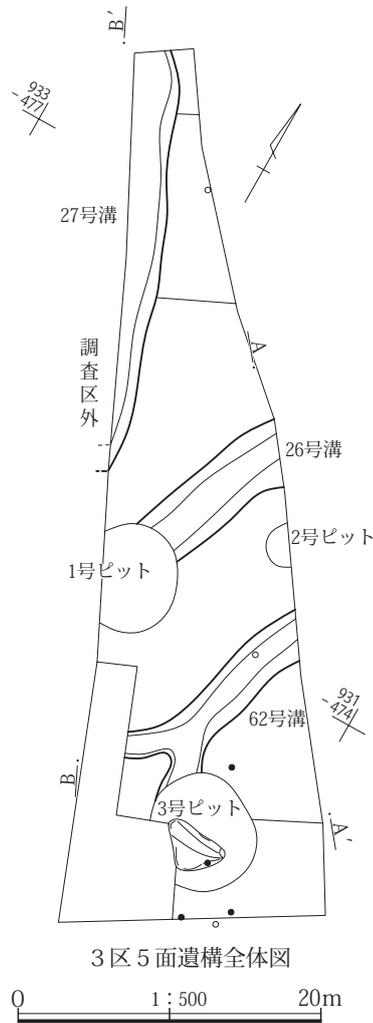
62号溝(第151図 PL.66) 方向は、N-26°-Eで、長さ120cm+、上場幅15～25cm、下場幅8～10cm、深さ4～6cmである。最大高低差は2cmで、勾配率は1.66%である。

1号ピット(第151図 PL.66) 26号溝を切る形で、長径56cm、短径47cm+、深さ12cmの平面不整円形のピットである。立ち上がりはやや緩やかである。

2号ピット(第151図 PL.66) 長径23cm、短径12cm+、深さ8cmの平面推定で円形のピットである。立ち上がりはやや緩やかである。

3号ピット(第151図 PL.66) 62号溝を切る形で、長径62cm、短径51cm+、深さ21cmの平面不整円形のピットである。立ち上がりはやや緩やかである。

26号・27号・62号溝



26号・27号・62号溝

1. 暗褐色土(10YR3/3) FAを含、2面遺構確認面。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) FA、火山灰層、細粒、にぶい黄褐色土、粘質土を含、ザラつきあり。
3. 灰褐色土(7.5YR6/2) FA、火山灰層、細粒、ザラつき強。
4. にぶい赤褐色土(5YR5/3) FA火山灰層、Si。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 橙色土粒φ1mm以下少量、炭化物を含、締まり粘性あり。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 酸化鉄分多量、色味暗い。
7. 黒褐色土(10YR2/2) 酸化鉄分少量、炭化物やや多く含、橙色土粒φ1mm以下5層より多、締まり粘性ややあり。
8. 黒褐色土(10YR2/3) ローム粒少量含、橙色土粒7層より多、締まりややあり、粘性あり。
9. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒小塊少量含。
10. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒・小塊多量含、5面遺構確認面。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム漸移層。
12. 黒褐色土(10YR2/2) φ1mm橙色土粒多量、締まりやや弱。(26号溝)
13. 暗褐色土(10YR3/3) 12層より橙色土粒少量、褐色土を含。(26号溝)
14. 黒褐色土(10YR3/2) 酸化鉄・橙色土粒少量含、褐色土を含、締まり粘性あり。
15. 暗褐色土(10YR3/3) 黄褐色土塊少量含、締まりややあり、粘性あり。(62号溝)
16. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰褐色土を含、締まりやや弱。
17. 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰褐色土多量、橙色土粒φ1mm以下少量含、締まり弱粘性あり。
18. 黒褐色土(10YR2/2) 酸化鉄分・橙色土粒を少量含。
19. 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土塊φ1cmを含、橙色土粒少量含。(27号溝)
20. 暗褐色土(10YR3/3) 明黄褐色土粒少量含、締まり粘性あり。(27号溝)
21. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒、3~5cmローム塊を多量含、締まりややあり、粘性あり。(27号溝)

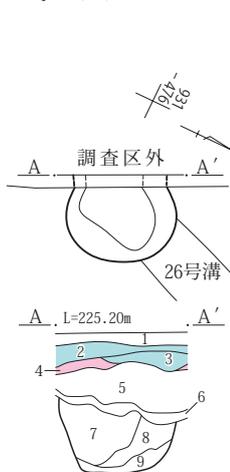
1号・2号ピット

1. 暗褐色土(10YR3/3) FAを含、2面遺構確認面。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) FA、火山灰層、細粒、にぶい黄褐色土、粘質土を含、ザラつきあり。
3. 灰褐色土(7.5YR6/2) FA、火山灰層、細粒を含、ザラつき強。
4. にぶい赤褐色土(5YR5/3) FA、火山灰層、Si含。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 橙色土粒φ1mm以下少量、炭化物を含、締まり粘性あり。
6. 暗褐色土(10YR3/3) 酸化鉄分多量含、色味は暗。
7. 黒褐色土(10YR2/2) 白色土小粒、FAを含、締まりややあり、粘性あり。
- 7'. 黒褐色土(10YR2/2) 褐色土粒、黄褐色土塊、橙色土粒を含。
8. 暗褐色土(10YR3/3) 橙色土粒φ1mm以下少量含。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2) 暗褐色土を含、締まり粘性あり。

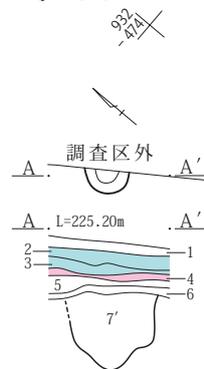
3号ピット

1. 黒褐色土(10YR2/2) 黄褐色土粒φ1mm少量含、締まり弱粘性あり。
2. 黒褐色土(10YR2/3) 黄褐色土粒φ1mm以下少量均質に含、締まり弱粘性あり。

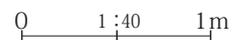
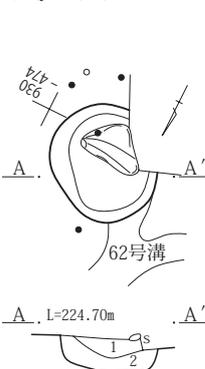
1号ピット



2号ピット



3号ピット



第151図 3区溝・ピット図・土層断面図

7 1区5面遺構(第152図)

1区5面遺構は、ごく少数の土坑及びピットから構成される。これらのピットからは、掘立柱建物を復元することはできなかった。9区～2区までは、居住域として連続していたが、次に建物が出てくる7区を中心とした8～5区と連なるの南のムラとの境界であり、5世紀後半当時は空閑地であった可能性が高い。

土坑は、調査区に北部と南部にいくつか分布する。

(1)土坑群・ピット群(第152図)

176号土坑(第153図 PL.67) 調査区北端、177号土坑の南西側にある。長径76cm、短径65cm、深さ27cmの平面円形で、緩い立ち上がりを有する。

177号土坑(第153図 PL.67) 調査区北端176号土坑の東側にある。長径90cm、短径82cm、深さ30cmの平面楕円形で、緩い立ち上がりを有する。

192号土坑(第154図 PL.67) 調査区北部、621号ピットの中央にある。長径69cm、短径59cm、深さ31cmの平面不整楕円形で、立ち上がりは急である。

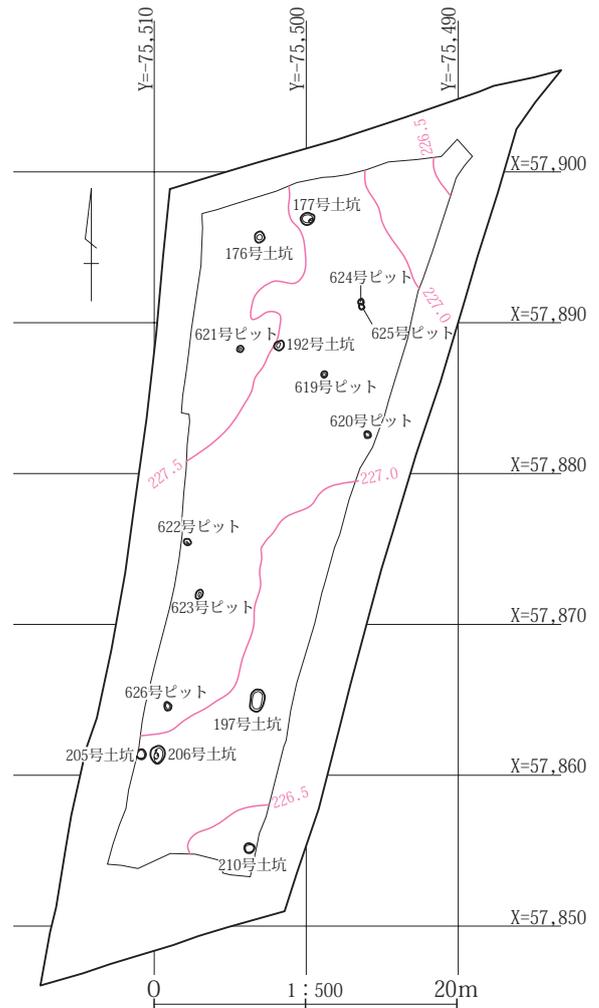
197号土坑(第154図 PL.67) 調査区南部、206号土坑の北東にある。長径148cm、短径98cm、深さ31cmの平面隅丸長方形で、立ち上がりは急である。

205号土坑(第154図 PL.67) 調査区南部、206号土坑の西隣にある。長径65cm、短径63cm、深さ25cmの平面楕円形で、立ち上がりは急である。

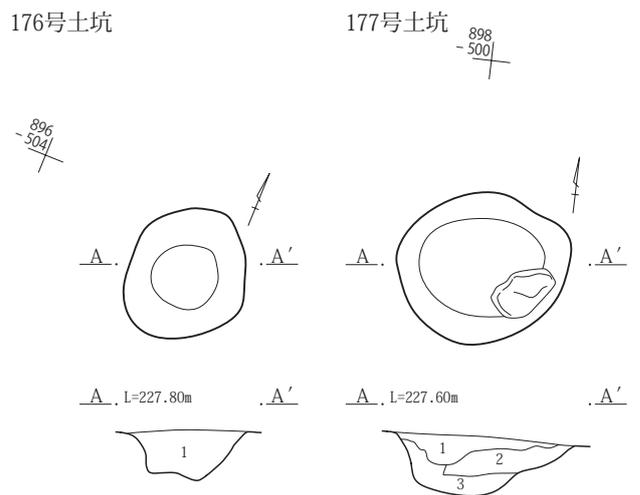
206号土坑(第154図 PL.67) 調査区南部、205号土坑の東隣にある。長径121cm、短径95cm、深さ22cmの平面楕円形で、立ち上がりはやや緩やかである。

210号土坑(第154図 PL.67) 調査区南東端、206号土坑の南東にある。長径76cm、短径67cm、深さ26cmの平面楕円形で、立ち上がりはやや緩やかである。

ピット群(第152・154図 PL.67) 北部を中心に、一部中央から南部にかけて8個分布する。径40～60cm、深さ20～28cmのやや浅めのピットである。619～626ピットのデータは観察表の中に入れてある。

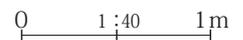


第152図 1区5面遺構全体図



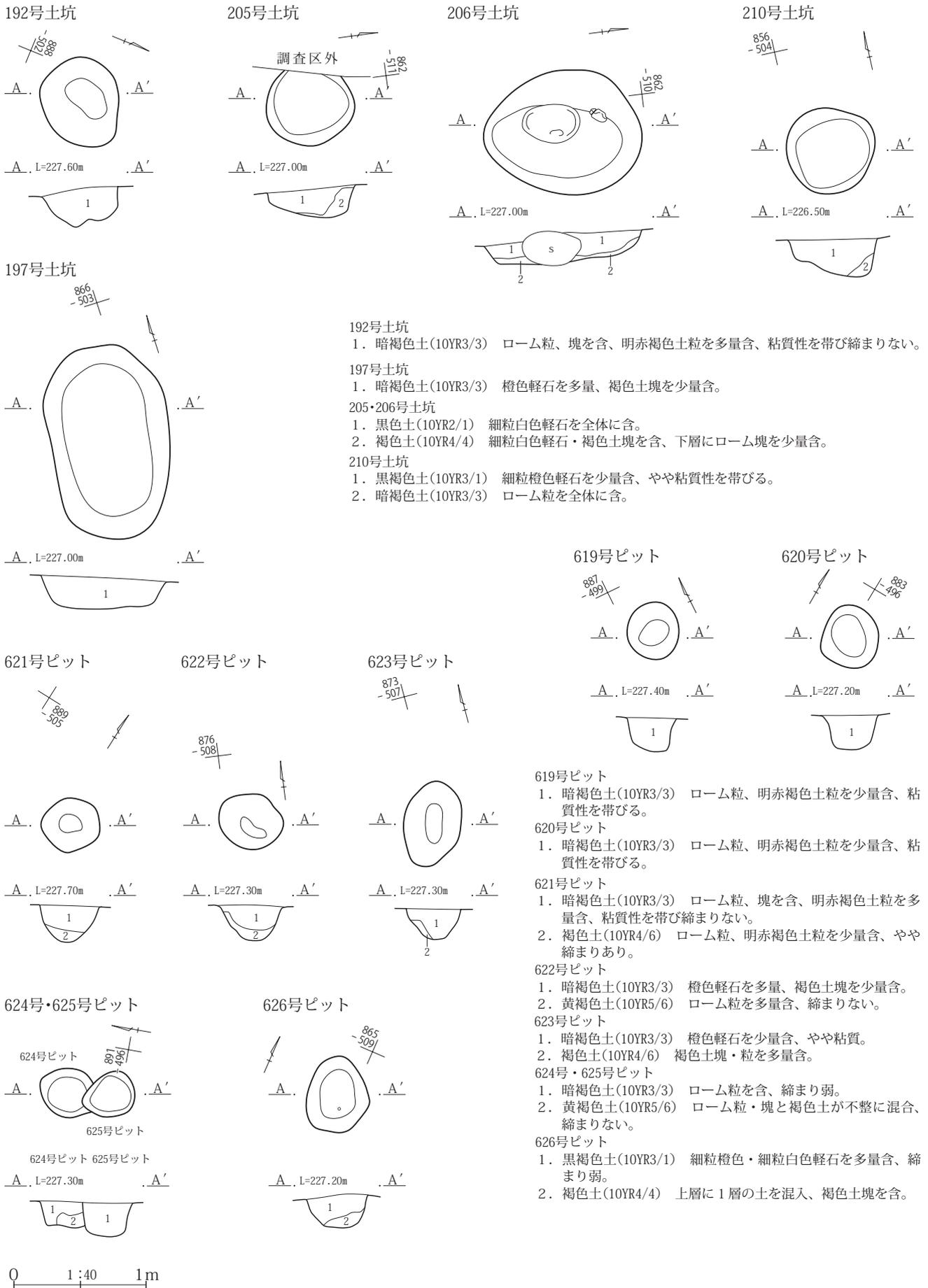
176号・177号土坑

1. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒、塊を含、明赤褐色土粒を多量に含、粘質性を帯び締まりない。
2. 褐色土(10YR4/6) ローム粒、明赤褐色土粒を少量含、やや締まりあり。
3. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒を多量、ローム塊を含。



第153図 1区土坑図1・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



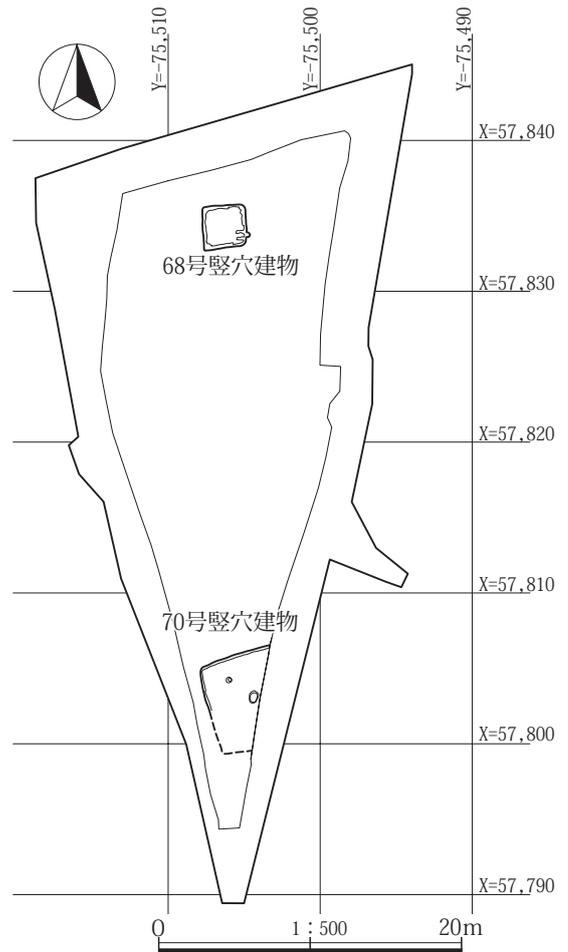
第154図 1区土坑図2・ピット図・土層断面図

8 8区5面遺構(第155図 PL.68)

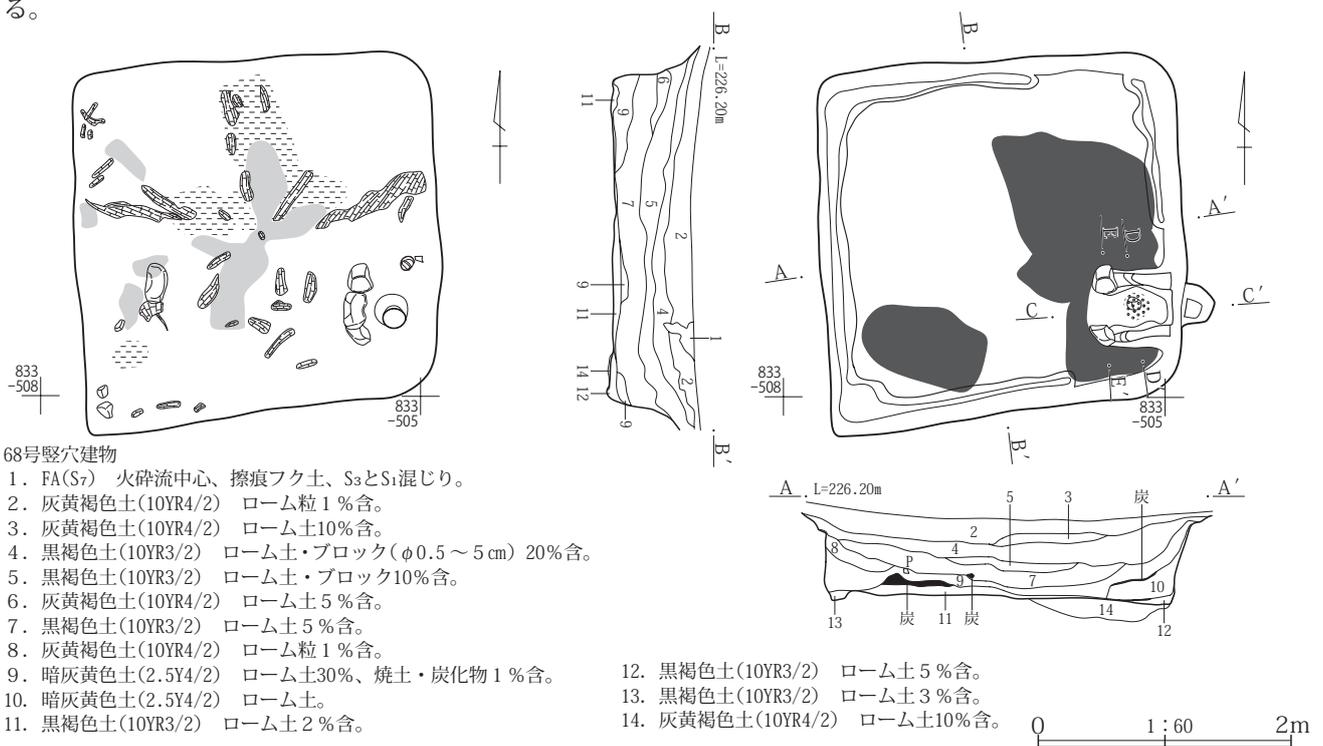
8区5面遺構は、竪穴建物が2棟検出されたのみである。北側が68号竪穴建物、南側に70号竪穴建物である。

(1) 68号竪穴建物(第156・157図 PL.69・288)

位置 調査区の北端にある。**遺存状況** 完存である。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して、少し窪地が残っている段階で、Hr-FAが降下したものである。**規模** 東西2.4m、南北2.95m、壁高70～73cm、床面積7.97㎡、主軸方位はN-88°-Eである。**掘方** カマド周辺にあり、また、カマド北側に床下土坑がある。**周堤** 確認できない。**壁際溝** 幅12～23cm、深さ5～6cmの溝が四周を巡るが、北東部は途切れる。**柱穴** 床面からは確認できず。小型の為、垂木で覆うようにして屋根を形成したものと考えている。**入口** 南と推定する。**カマド** 南東隅から検出された。袖の先端に石が組み込まれており、天井石も一石入口部に架け渡してある。甕が1個カマド燃焼部に置かれたままになっていた。**炭化物** カマドの周辺から北部と、南西部にかけて炭化した面が形成されている。炭化材がいくつか検出され、コナラが確認されている。**出土遺物**(第157図 PL.288) 杯B Iが1点、壺B ①が1点出土している。小さい建物のためか、遺物の出土量も極めて少ない。**年代** 杯B Iとやや古相の形態の壺①から5世紀後半でも中頃に近い方と推定する。



第155図 8区5面遺構全体図



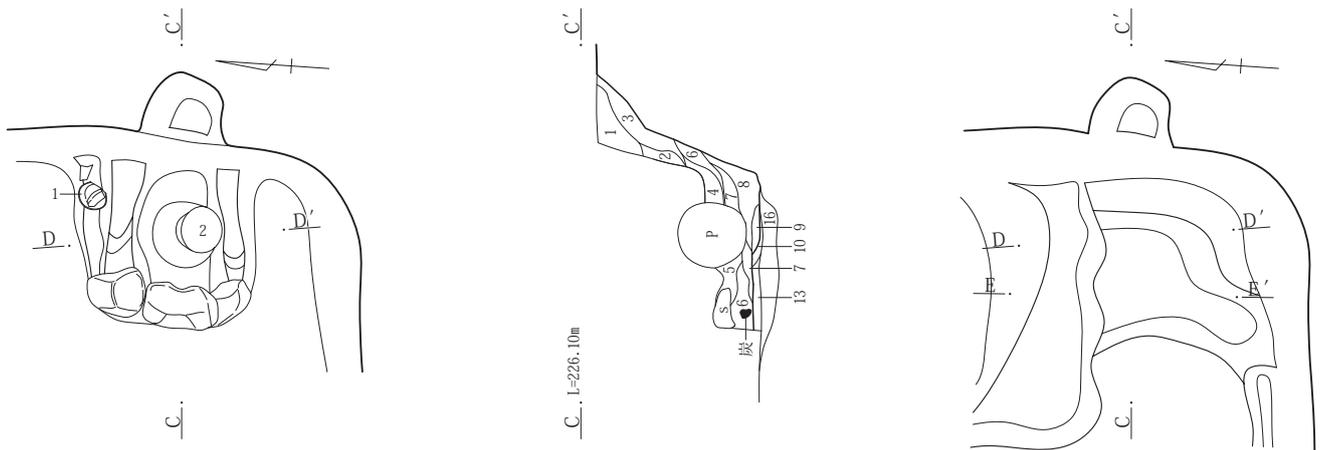
68号竪穴建物

1. FA(S₇) 火砕流中心、擦痕フク土、S₃とS₁混じり。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒1%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・ブロック(φ0.5～5cm) 20%含。
5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・ブロック10%含。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%含。
7. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含。
8. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒1%含。
9. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土30%、焼土・炭化物1%含。
10. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土。
11. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含。

12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含。
13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土3%含。
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含。

第156図 68号竪穴建物遺物出土状況図・平面図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



D. L=226.10m

D'

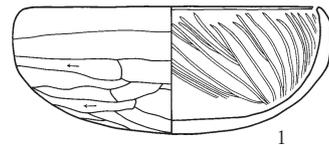
68号竪穴建物カマド

1. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム土10%含。
2. 浅黄色土(2.5Y7/4) ローム土、天井崩落土、下端面に焼土面蜜。
3. にぶい黄色土(2.5Y6/4) ローム土40%含、天井崩落土。
4. 灰黄褐色土(10YR5/2)
5. 焼土中心層 焼土30%含。
6. 黒褐色土(10YR3/2)
7. 焼土中心層 焼土60%含。
8. 灰黄褐色土(10YR5/2) 焼土10%、ローム土5%含。
9. 灰黄褐色土(10YR4/2)
10. ローム中心層 やや粘性あり。
11. 灰層

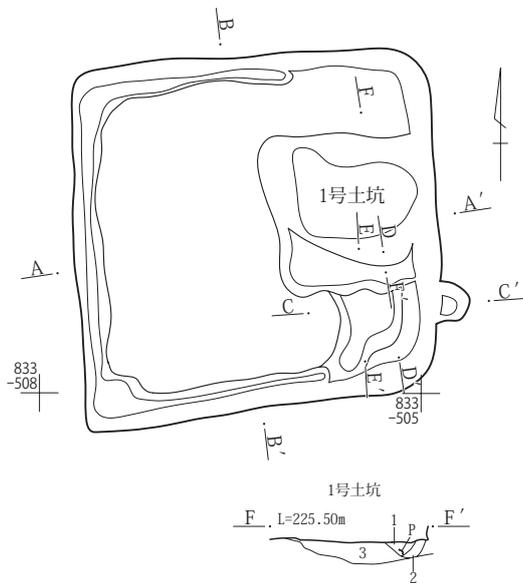
E. L=225.60m

E'

12. 浅黄色土(2.5Y7/4) やや粘性のある土、カマドの袖土。
- 12'. 熱を受け焼土化した層。
13. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒5%含。
14. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土60%含。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%含。
16. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土20%含。



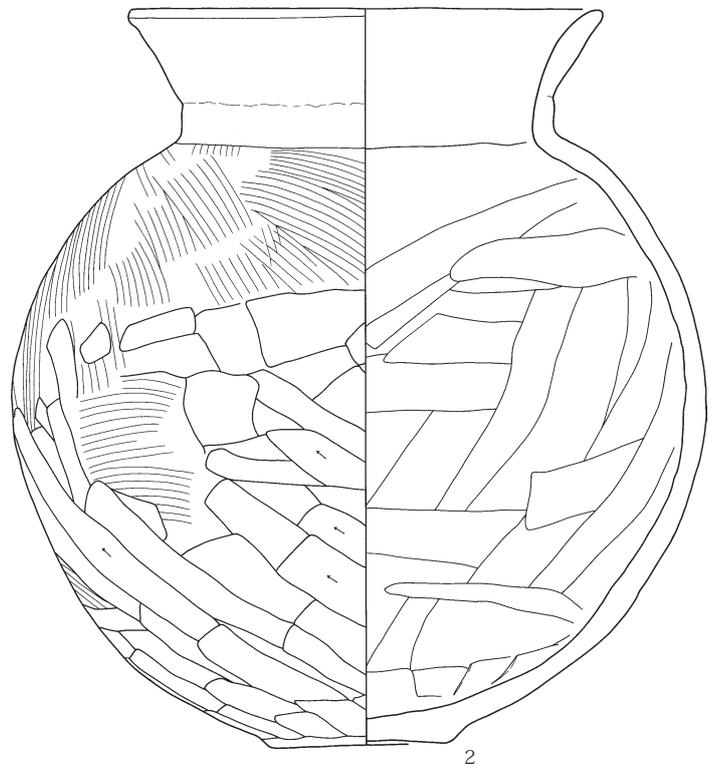
0 1:30 1m



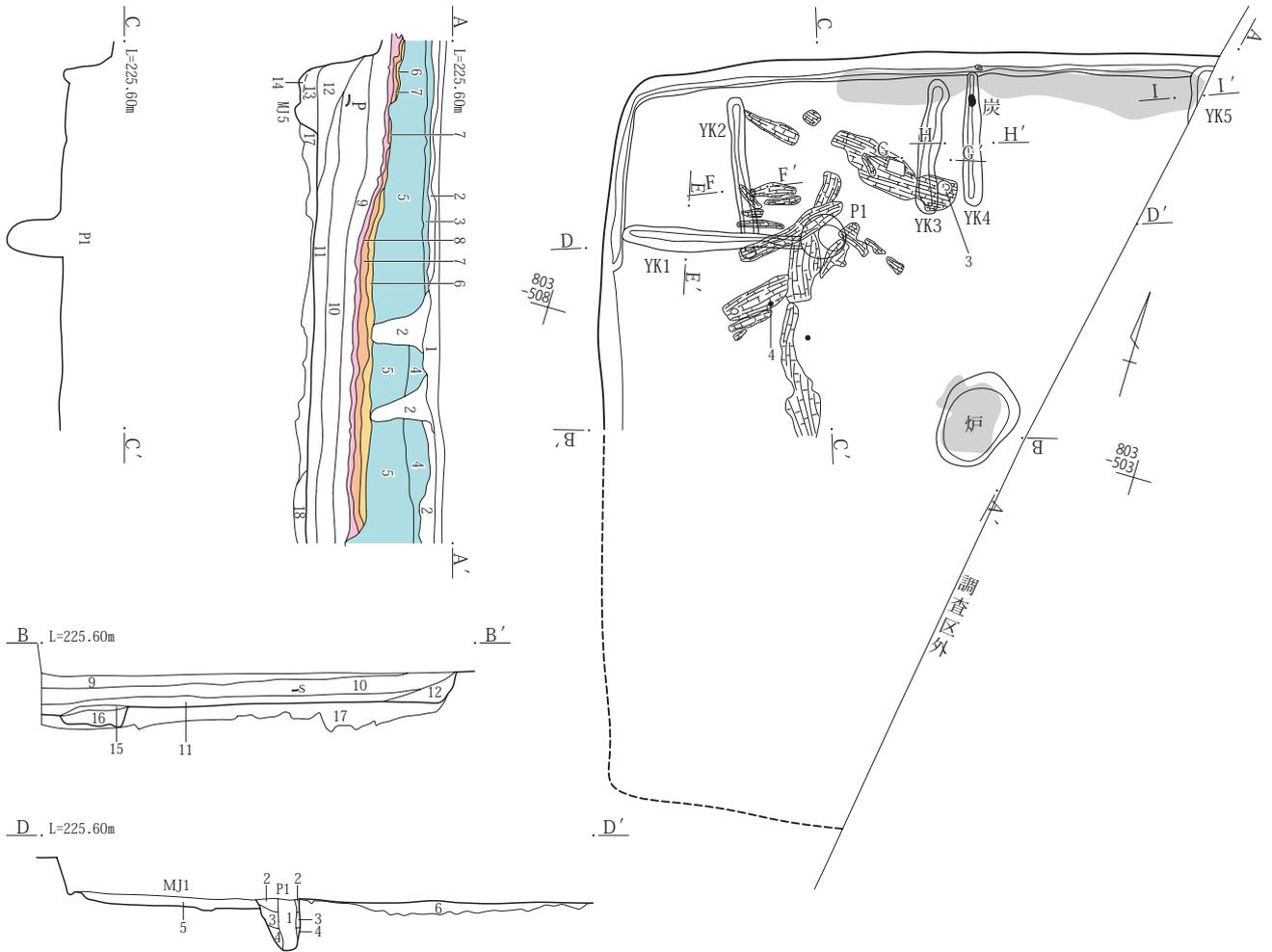
68号竪穴建物 1号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒5%含。
2. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土60%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%含。

0 1:60 2m

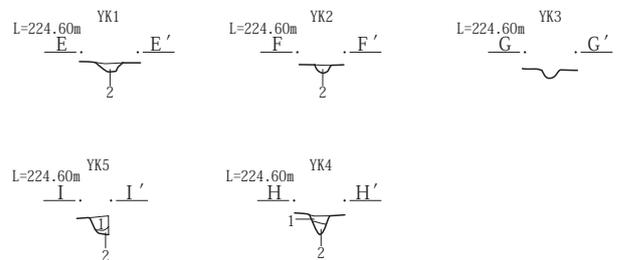


第157図 68号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図



70号竪穴建物

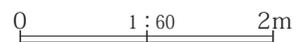
1. 黒褐色土(10YR3/1) FA上黒。
2. FA上黒 FA(S₉)含。
3. FA(S₉)
4. FA(S₉)とS7
5. FA(S₇)
6. FA(S₃)上部
7. FA(S₃)下部
8. FA(S₁)
9. 黒褐色土(10YR3/2) 粘質土、FA(S₁)含、フク土。
10. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含、粘質土、白色軽石、フク土。
11. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土少量含、フク土。
12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム斑に混入、フク土。
13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム多量含。
14. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、ローム土少量含。
15. 赤褐色土(焼土) 炭化物、暗褐色土。
16. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック、ローム土少量含。
17. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックの混土、掘り方。
18. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックの混土、掘り込み。



70号竪穴建物D-D'

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) フカフカ柱痕。
 2. 灰赤黄色土(2.5YR4/2) ローム土10%、炭化粒2%含。
 3. 灰赤黄色土(2.5Y4/2) ローム土5%含。
 4. 黒褐色土(10YR3/2) 縮まり良好。
 5. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック。
 6. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックの混土、掘り方。
- 70号竪穴建物YK1 ~ YK5
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム多量含。
 2. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック。

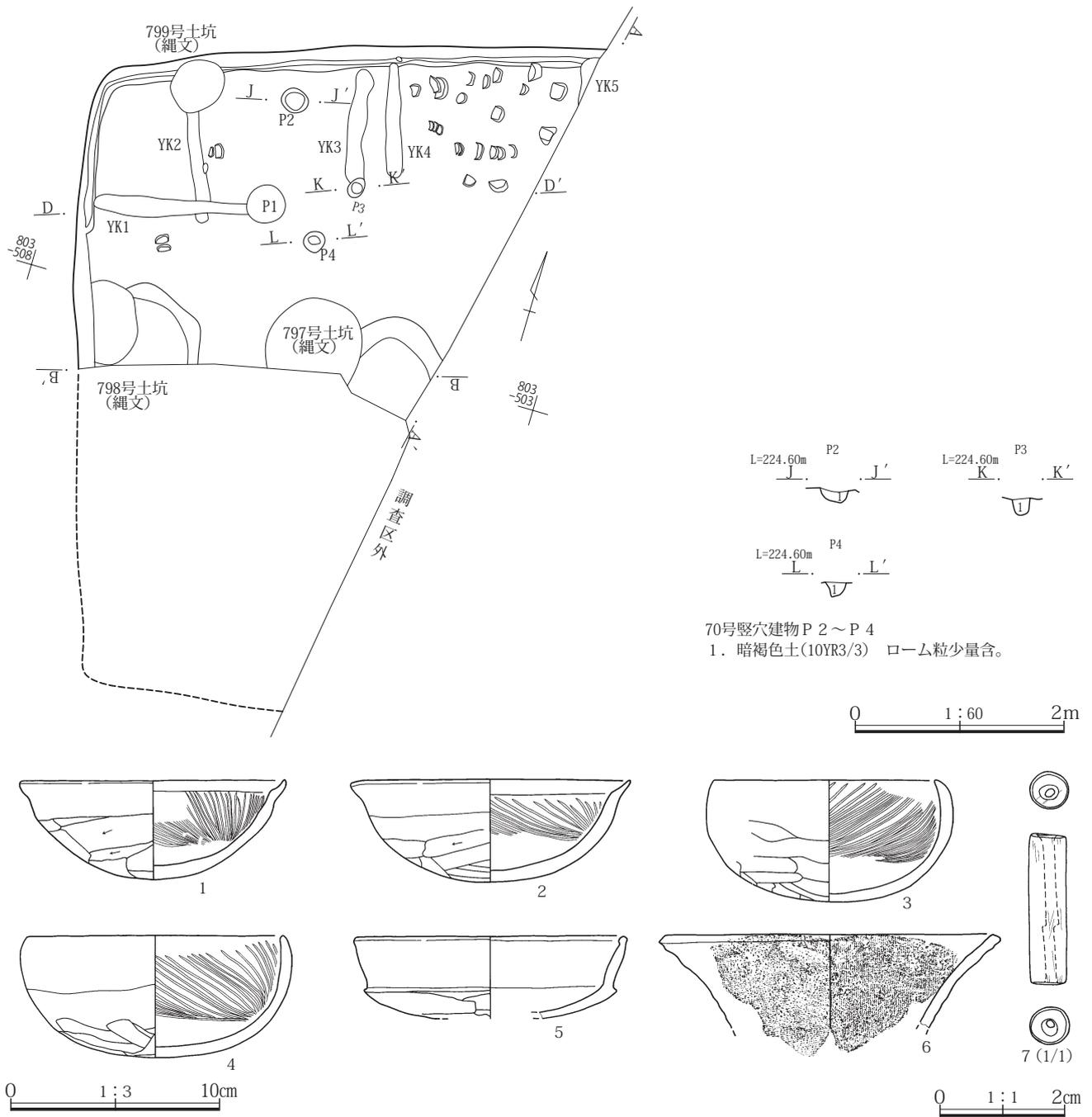
第158図 70号竪穴建物平面図・土層断面図



(2) 70号竪穴建物(第158・159図 PL.70・288)

位置 調査区南端に位置する。**遺存状況** 全体の西半について調査できた。南側は建物の壁が低く、削られてしまい、確認できなかった。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して、少し窪地が残っている段階で、Hr-FAが降下したものである。**規模** 残存長は、東西5.03m+、南北6.1m、壁高34～41cmである。**掘方** 掘方は炉の下を掘削しており湿気対策であろう。また、北東部を中心にU字形鋤先掘削痕跡が刃先を主に東に向けて26個確認された。**周堤** 確認できない。**壁際溝** 北辺と西辺

北部のみに幅10～11cm、深さ2～8cmの溝が確認できた。**柱穴** 1個のみ北西から径37cm、深さ45cmのP1が確認できた。**炉** 長径81cm、短径60cm、深さ15cmの炉跡が中央部から出ている。**床面小溝** P1を起点に東西方向で西壁に向かい1条、北側に南北方向へ4条の溝が検出された。**炭化材** 北端部を中心に検出され、クリ材であることが確認された。**出土遺物**(第159図 PL.288) 杯AⅡ、杯BⅠ・Ⅱ、杯CⅡ、壺片が出土している。滑石製の管玉が1点出土している。**年代** 杯Aと杯Bが中心で5世紀中頃でも後半に近い方と推定する。



第159図 70号竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図

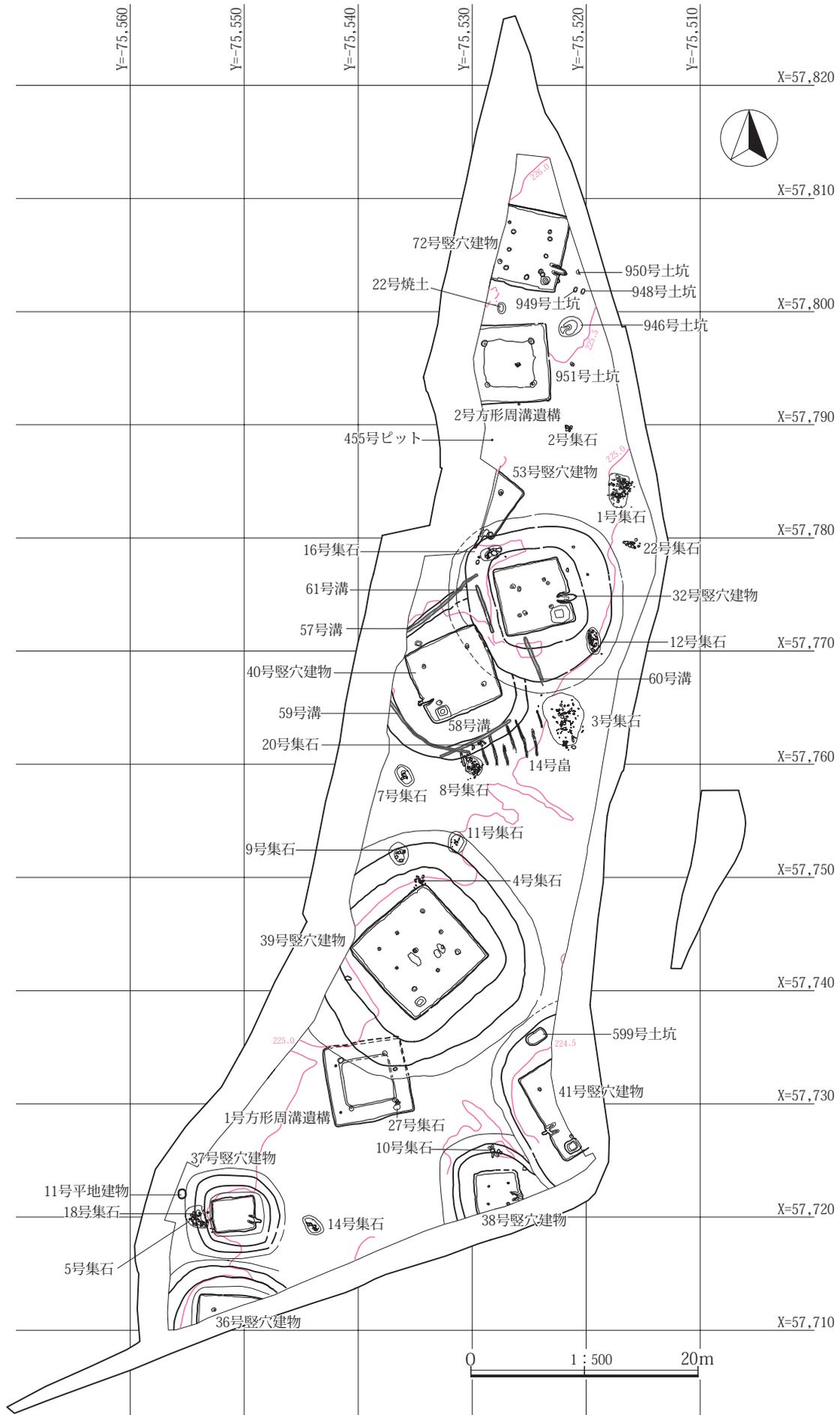
9 7区5面遺構(第160図 PL.71)

7区5面遺構は、建物の密集地で、9・4～2区の建物集中区に次ぐもので、ムラの中心地であったと推定する。北から南へ万遍なく建物があるが、39号竪穴建物がカマドの無い炉使用の建物で、時期的に遡り、ここを起点に南北に建物の集中箇所が分かれるものと推定する。また、いくつかの集石遺構が周堤内を中心に検出され、建物掘削に伴う出土礫を埋納したものと想定している。他に数基の土坑が検出されている。

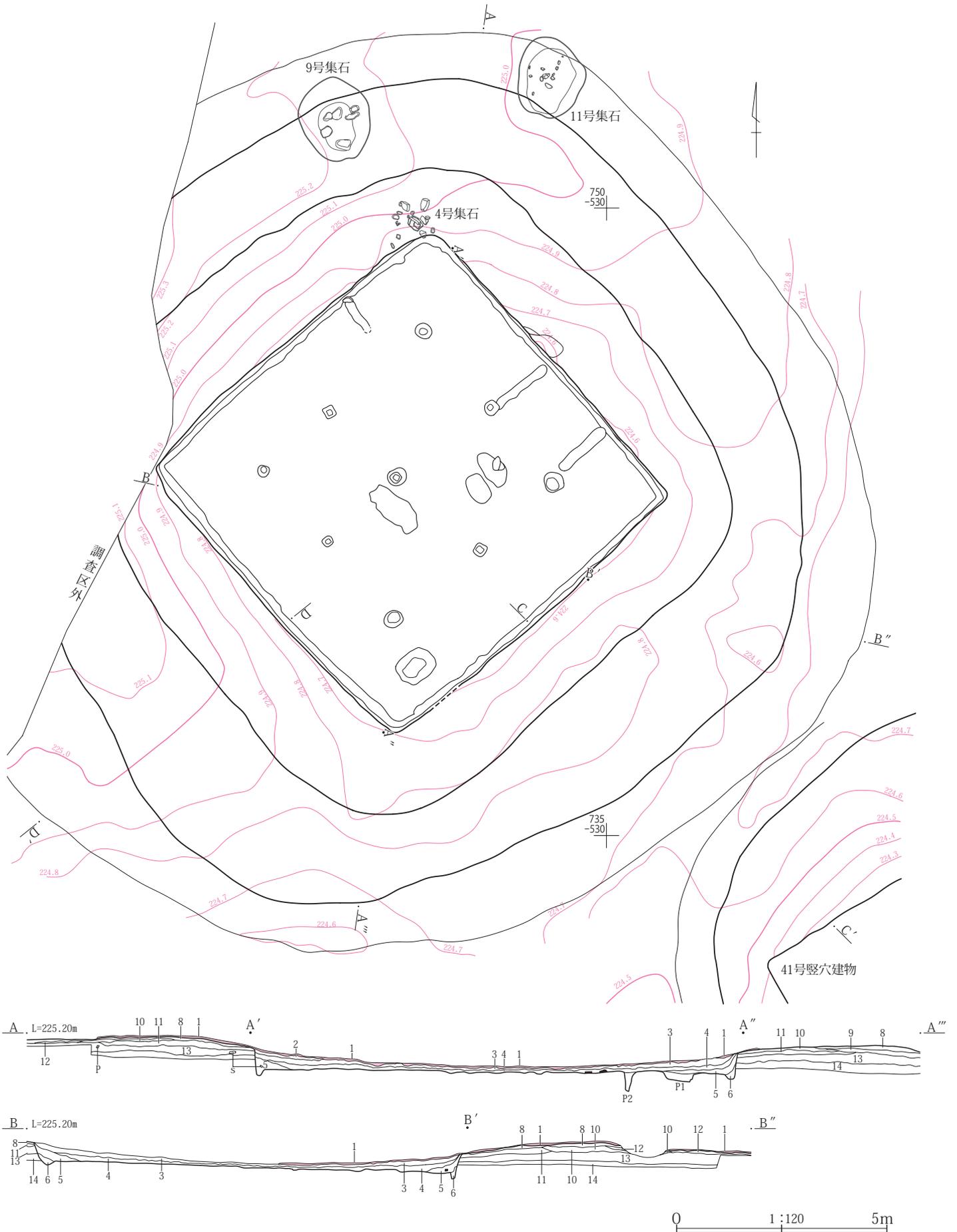
(1) 39号竪穴建物(第161～168図 PL.72～74・288・289)

位置 調査区の中央部に位置するこのムラの開始期の竪穴建物である。**遺存状況** 完存している。**埋土状況** 廃棄後、炭化物混じりのフク土が堆積して少し窪みが残っている段階でHr-FAが降下している。**規模** 東西8.98m、南北9.00m、壁高46～55cm、床面積78.48㎡、主軸方位はN-50°-Eである。柱穴は9本ある。**掘方** U字形鋤鋤先の掘削痕跡が全面に確認できたことでかなり具体的に分かった。四周の周溝の掘削は、起点がどこから始まるか不明であるが、大型の刃先は、東辺で南側に向いており、後進して掘削すると、反時計回りに一周廻ったと想定される。床の掘方では、南北方向、東西方向、斜め方向に大小のU字形鋤鋤先痕が連続して確認できた。南側は、東西方向に小さな刃先が西に向かい、後進して東方向に掘削している。東辺中央部は、大きめの刃先が南にあり、後進して北方向に掘削している。他にもいくつかまとまりが認められる箇所があるが、掘削方向、刃先の大きさの違いなどから複数の刃先を持つ道具を使用していることが想定される。**周堤** 痕跡が、四周に幅4.2～5.4m、高さ5～10cmでめぐらされる。**集石** 建物の周堤から検出された3ヶ所で4号・9号・11号の集石がある。4号集石は、周堤北部隅建物壁際立ち上がり近くから検出され、長径140cm、短径120cm、深さ10cmの浅い窪み状のものである。5～30cm大の石が20個程まとまっていた。中には、弥生時代の石鋤と縄文時代の石皿が含まれている。9号集石は、周堤北部端やや西から検出され、長径200cm、短径168cm、深さ18cmの不整楕円形状の穴に、長さ22～36cmの石が6個埋められている。11号集石は、周堤北部隅から、長径198cm、短径158cm、深さ8cmの穴に、3～10cmの小礫が12個埋められていた。これら3つの集石は、竪穴建物を構築する際に

出土した礫をまとめたものと想定している。そのため弥生時代の石器も混じっていたものと考えている。**壁際溝** 上幅18～26cm、深さ13～23cmの周溝が四周をめぐっている。**柱穴** 長径28～46cm、短径23～45cm、深さ28～62cmのものが1列3本で3列の9本あり、このムラの中では柱穴数が多く大型建物の例となる。**入口** 南側と推定している。**硬化面** 中央部から四周壁際を除き、全体に硬化面が広がっている。**炉** 3ヶ所あり、うち中央部にある3号炉は長径135cm、短径67cm、深さ13cmで、主炉である。北側に長径73cm、短径46cm、深さ8cmのやや小さい1号炉、北側やや東に長径90cm、短径47cm、深さ7cmの2号炉が並行してある。**貯蔵穴** 南東隅にあり、長径236cm、短径178cm、深さ20cmの隅丸長方形の落とし蓋を安置する段差があり、その下に長径90cm、短径72cm、深さ64cmの貯蔵穴がある。**床面小溝** 西辺の北部P7とP10の間で東西方向に西壁まで延びる1条、北辺の中央P6を起点に北壁に向けて1条、P5を起点に北壁に向けて1条ある。**炭化材** 貯蔵穴周辺と北辺、西辺に出土した。炭化材の樹種は、コナラが中心で一部クリが入っている。**赤色顔料** 径1～5mmほどの顆粒状で北部の床面より出土しており、分析により、赤土を中心とする非パイプ状ベンガラである。**出土遺物**(第167・168図 PL.288・289) 杯AⅠ、杯BⅢ、杯CⅠが少数出ているが、主体は貯蔵穴西にまとまって出土した椀類で、椀A(第167図6 PL.288)、椀C(第167図7・第168図9 PL.288)、椀D(第168図8 PL.288)がある。他にも破片の椀もあり、主体を成していたことが分かる。高杯はAⅡ類(第167図4 PL.288)で、甕や小型甕も出土している。須恵器は甕小破片が出土している。**年代** カマドが無く炉のみであり、杯A～Cはごく少量で、椀を主体となし、高杯もA類であるが脚部がやや短脚化している点などから5世紀中頃とする。

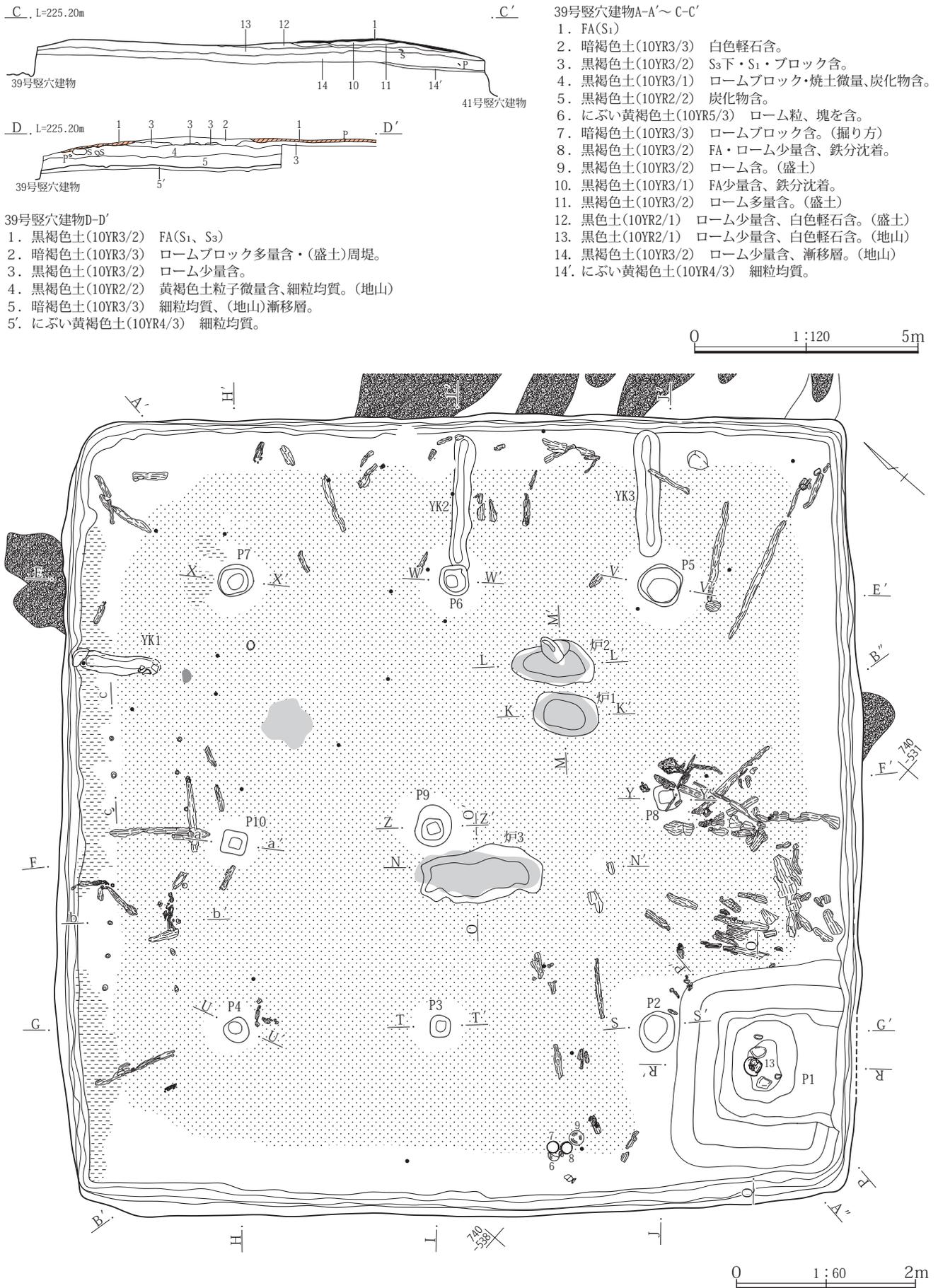


第160図 7区5面遺構全体図

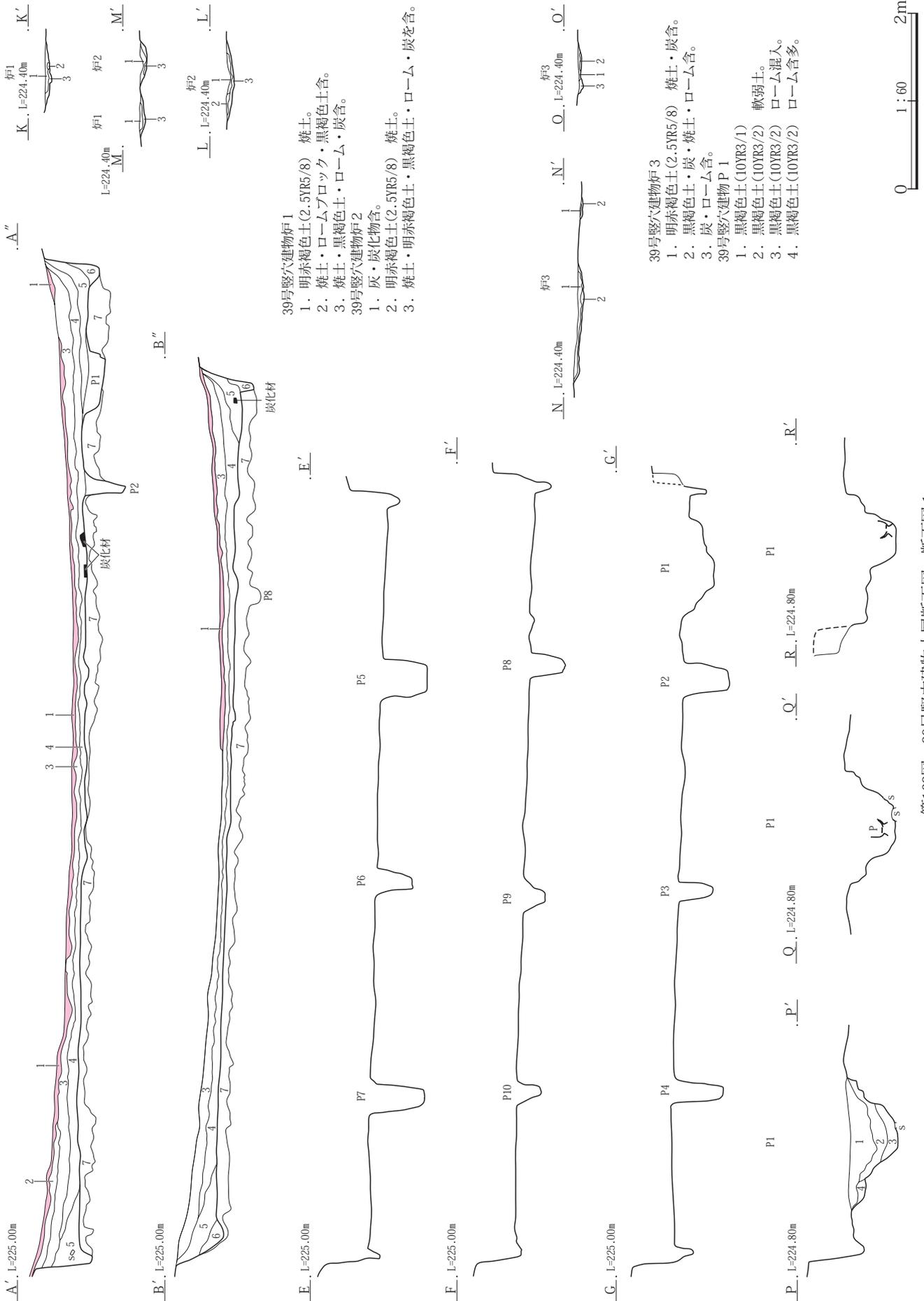


第161图 39号竖穴建物全体图・土層断面图

第三章 発見された遺構と遺物

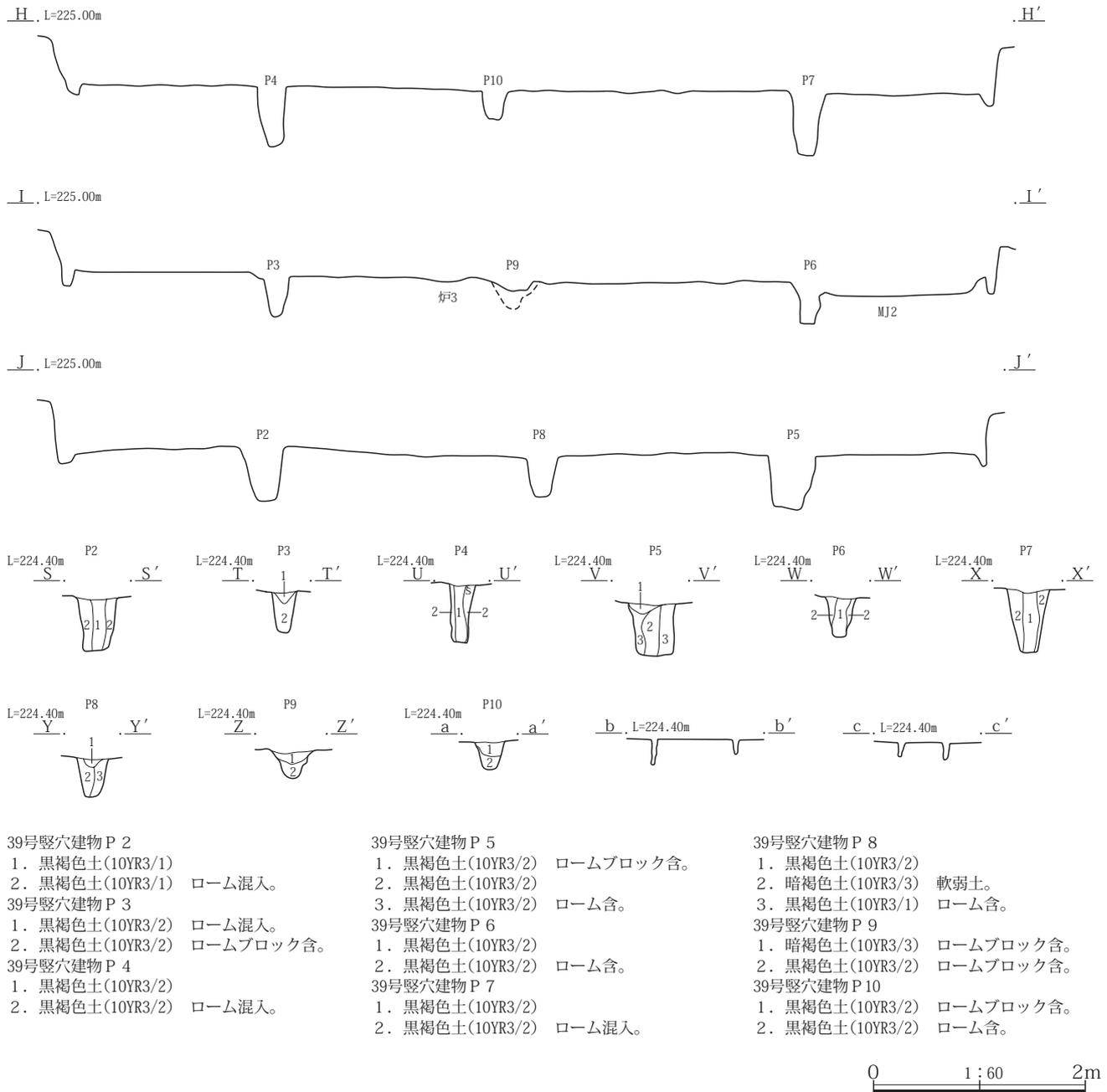


第162図 39号豎穴建物周堤断面図・豎穴建物遺物出土状況図・土層断面図



第163図 39号竪穴建物土層断面図・断面図 1

第三章 発見された遺構と遺物

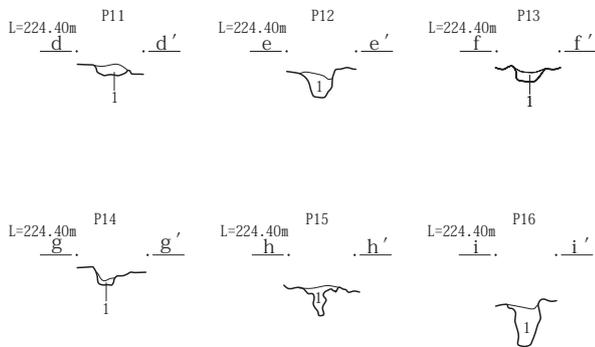
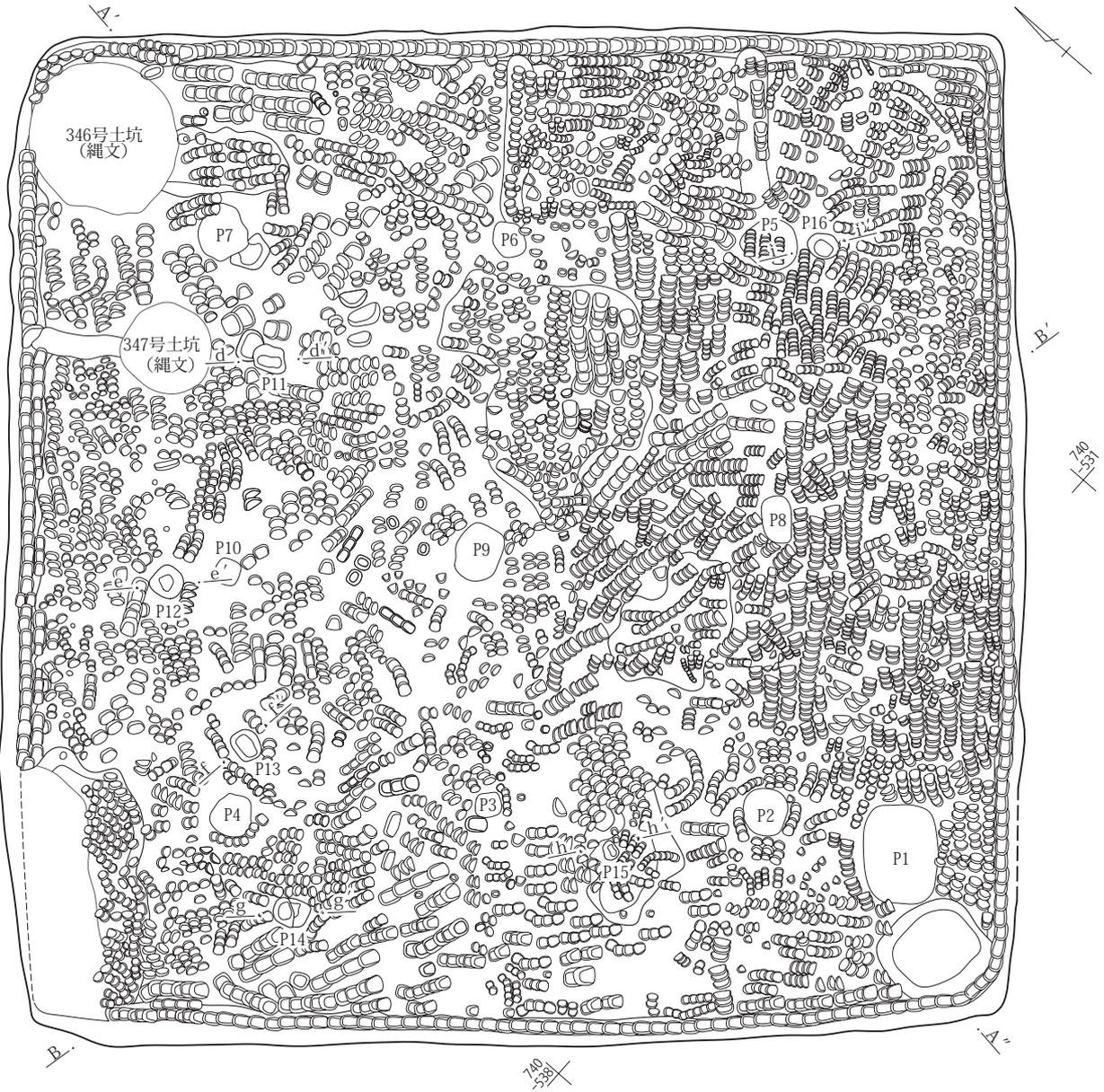


- 39号竪穴建物 P 2
1. 黒褐色土(10YR3/1)
 2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム混入。
- 39号竪穴建物 P 3
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム混入。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック含。
- 39号竪穴建物 P 4
1. 黒褐色土(10YR3/2)
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム混入。

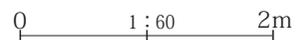
- 39号竪穴建物 P 5
1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック含。
 2. 黒褐色土(10YR3/2)
 3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム含。
- 39号竪穴建物 P 6
1. 黒褐色土(10YR3/2)
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム含。
- 39号竪穴建物 P 7
1. 黒褐色土(10YR3/2)
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム混入。

- 39号竪穴建物 P 8
1. 黒褐色土(10YR3/2)
 2. 暗褐色土(10YR3/3) 軟弱土。
 3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム含。
- 39号竪穴建物 P 9
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック含。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック含。
- 39号竪穴建物 P 10
1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック含。
 2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム含。

第164図 39号竪穴建物土層断面図・断面図2



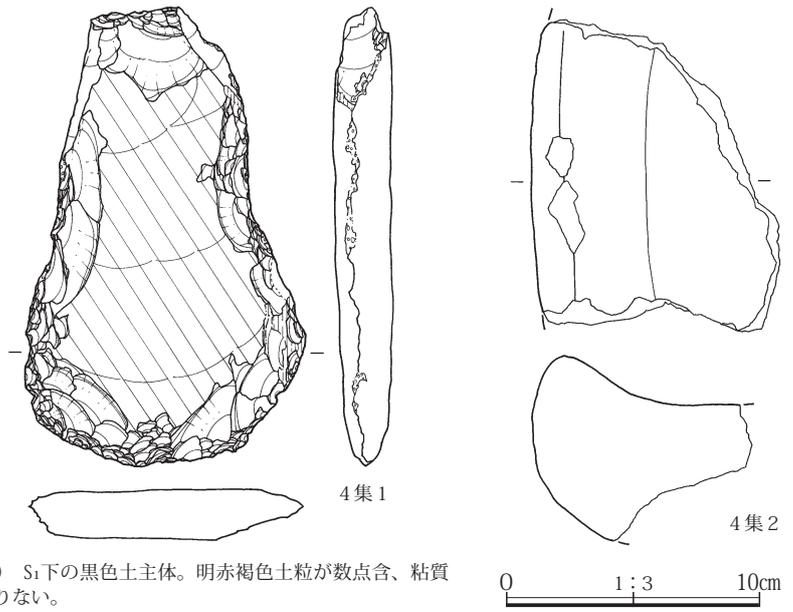
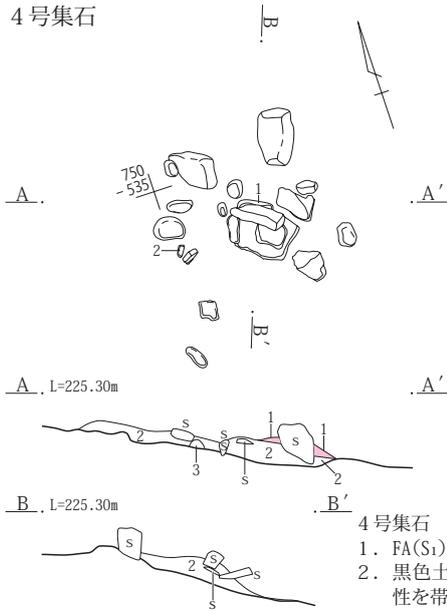
- 39号竪穴建物 P 11
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロック含。
- 39号竪穴建物 P 12
1. 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロック含。
- 39号竪穴建物 P 13
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム含。
- 39号竪穴建物 P 14
1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック含。
- 39号竪穴建物 P 1
1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム均質。
- 39号竪穴建物 P 16
1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム少量含、均質。



第165図 39号竪穴建物掘方図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

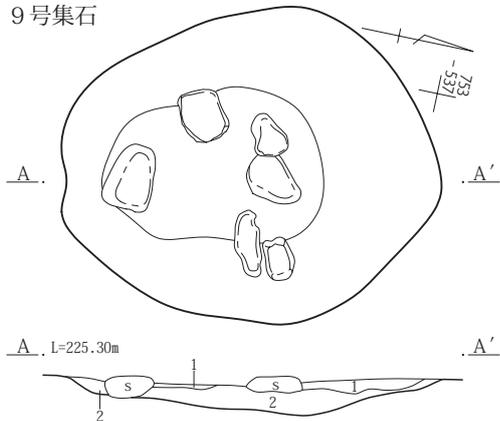
4号集石



4号集石

1. FA(S_i)
2. 黒色土(10YR2/1) S_i下の黒色土主体。明赤褐色土粒が数点含、粘質性を帯び、縮まりない。
3. 褐灰色土(10YR4/1) 粒子粗い砂質土主体。

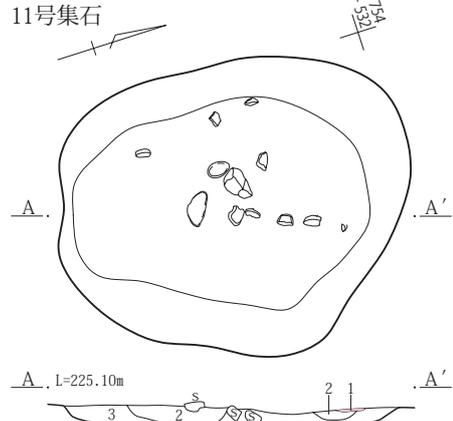
9号集石



9号集石

1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・褐色土粒を含。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒を少量含。

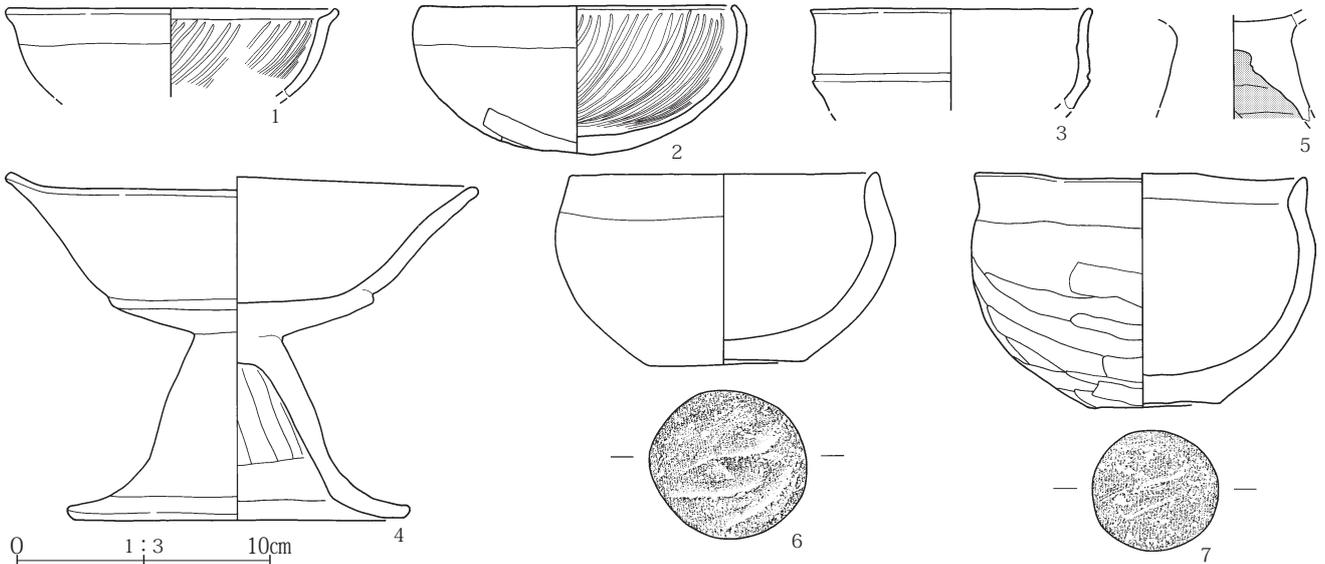
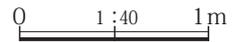
11号集石



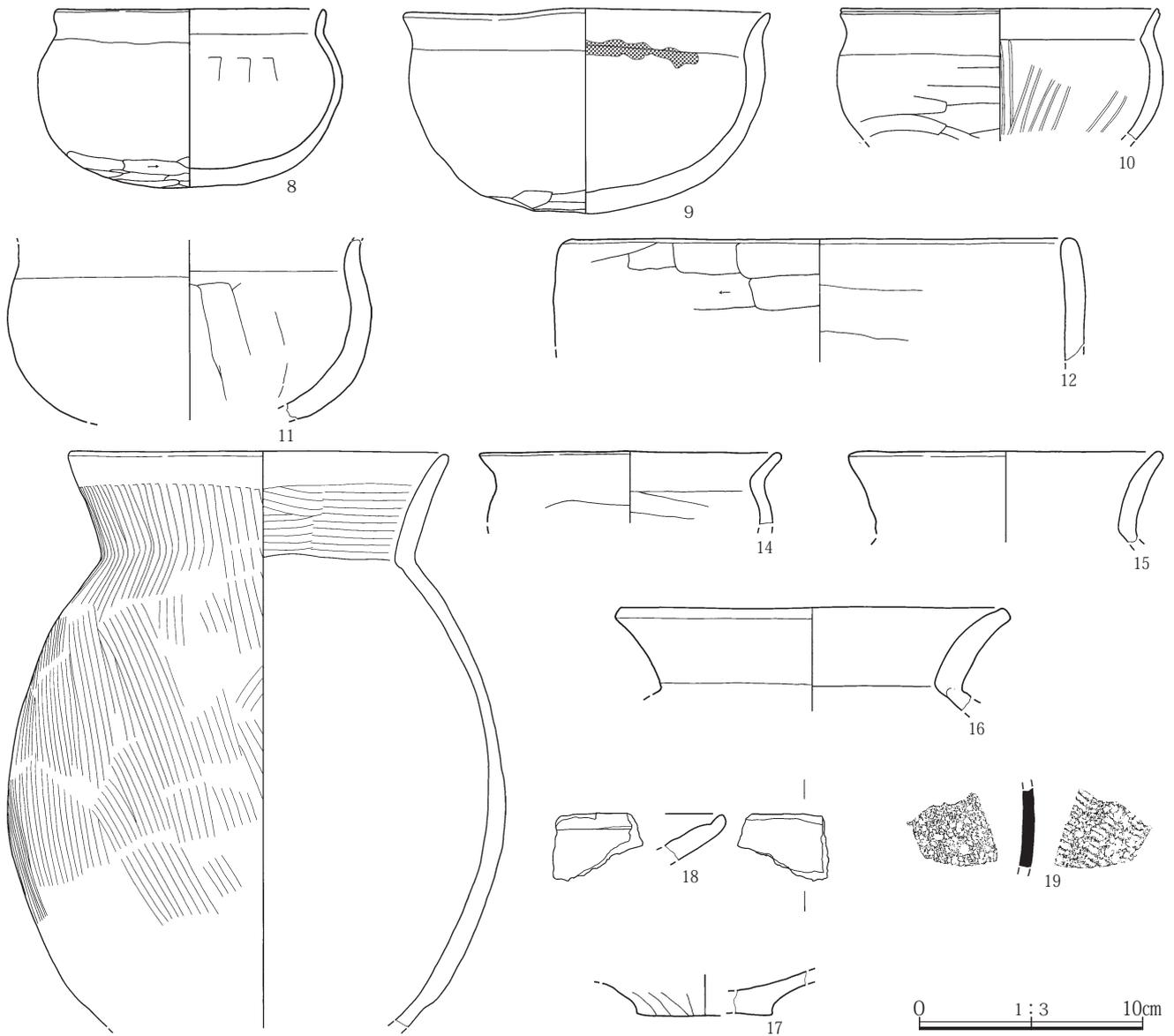
11号集石

1. FA(S_i)
2. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ロ-ム粒・褐色土塊を含、粘質土。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石・ロ-ム粒を含、明赤褐色土粒を少量含。

第166図 39号竪穴建物集石図・土層断面図・出土遺物図



第167図 39号竪穴建物出土遺物図1

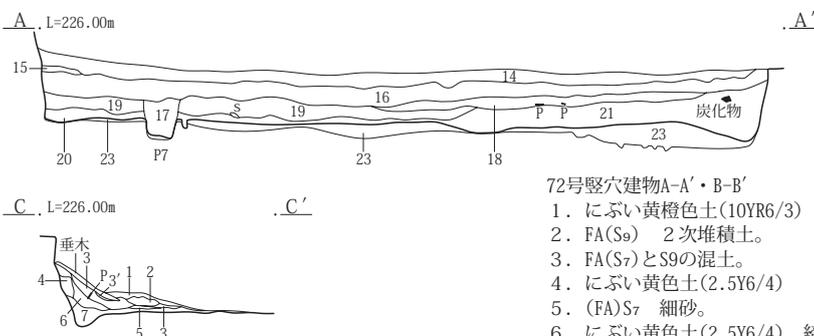
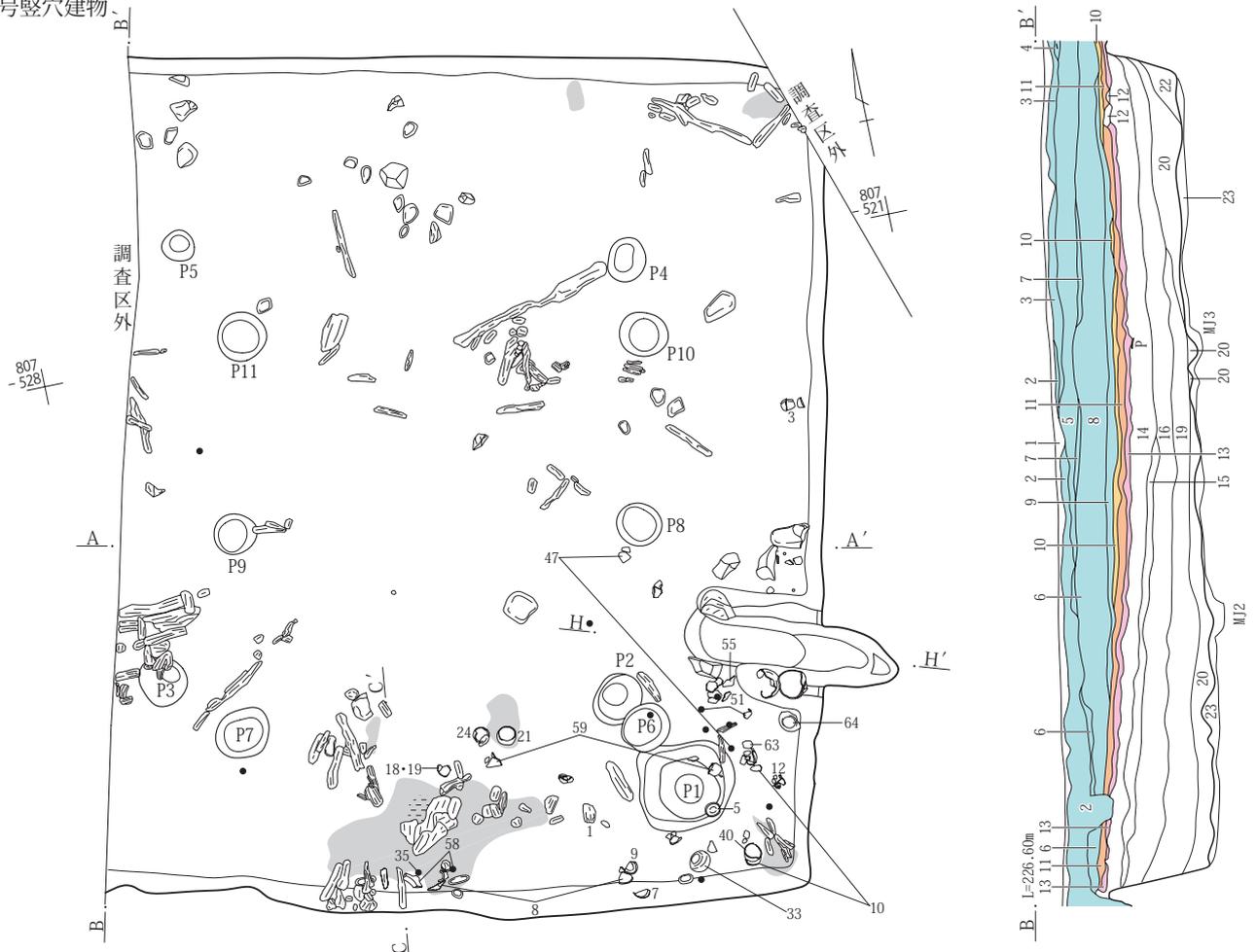


第168図 39号竪穴建物出土遺物図2

(2)72号竪穴建物(第169~177図 PL.75・76・289~292)
位置 調査区の北端で2号方形周溝遺構のすぐ北側にある。**遺存状況** 西辺と、北東隅の一部が調査区外となる。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して、少し窪地が残っている段階で、Hr-FAが降下したものである。**規模** 東西長5.72m+、南北長7.04m+、壁高54~60cm、床面積38.47㎡+で、主軸方位はS-78°-Eである。**掘方** 東辺及び南辺をL字形に深く掘削し、U字形鍬鋤先の掘削痕跡が、南辺では、刃先を西側にして、東辺では、刃先を南側にして、後進して掘削すると、東から北に向かい掘削していることが分かる。**周堤** 南側で一部残っていたが、全体的としてほとんど痕跡は認められなかった。**壁際溝** 上幅20~23cm、深さ5~9cmで南北辺中央部にあり、東辺には無い。**柱穴** 柱は建て替えをし

ており、新古関係があり、古い柱穴は4本柱穴(P2~P5)で、新しい柱穴は6本柱穴である(P6~P11)。P2とP6の切りあいを確認した。古い柱穴は、長径27~43cm、短径25~39cm、深さ30~50cmである。その後、柱を建て替えた段階で、柱の本数も変えて、東西3本ずつ計6本の柱穴(P6~P11)がある。長径33~45cm、短径31~40cm、深さ17~29cmである。古い柱穴群に比べてやや浅めの掘方である。**入口** 南側と考えている。入口近くに、長径47cm、短径35cm、深さ13cmのP12があり、入口のピットと考えている。**硬化面** 南側付近とカマド前にある。硬化面の存在も入口と考える証左の一つである。**カマド** 東向きで、焚口~煙道長180cm、焚口幅33cmである。カマドの袖には、南袖に2個、北袖に3個の土師器甕が埋置されており、さらに、

72号竪穴建物

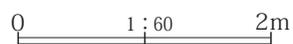


72号竪穴建物C-C'

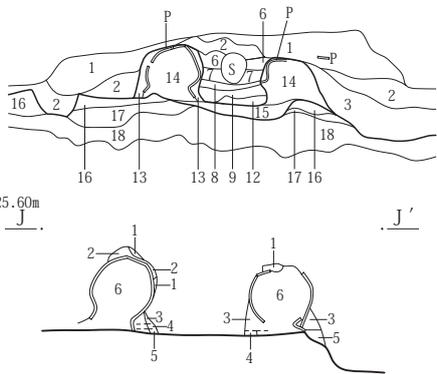
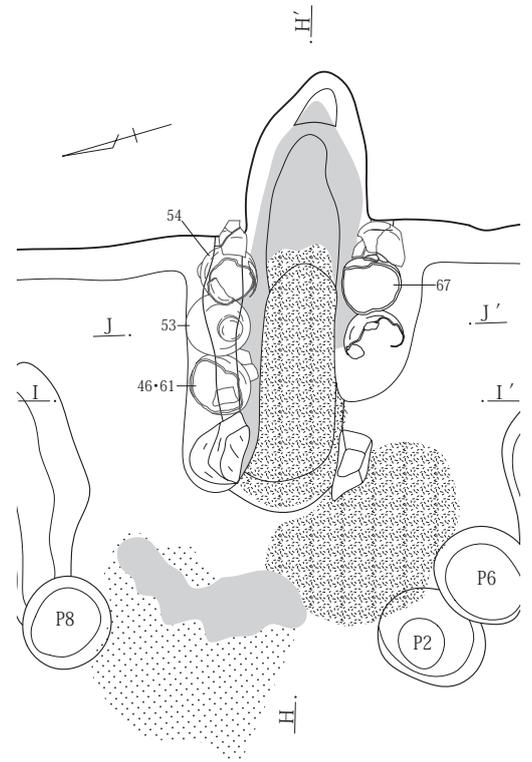
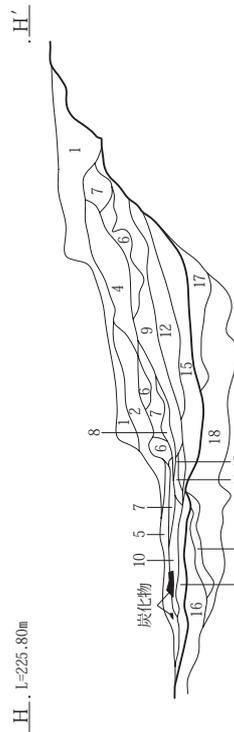
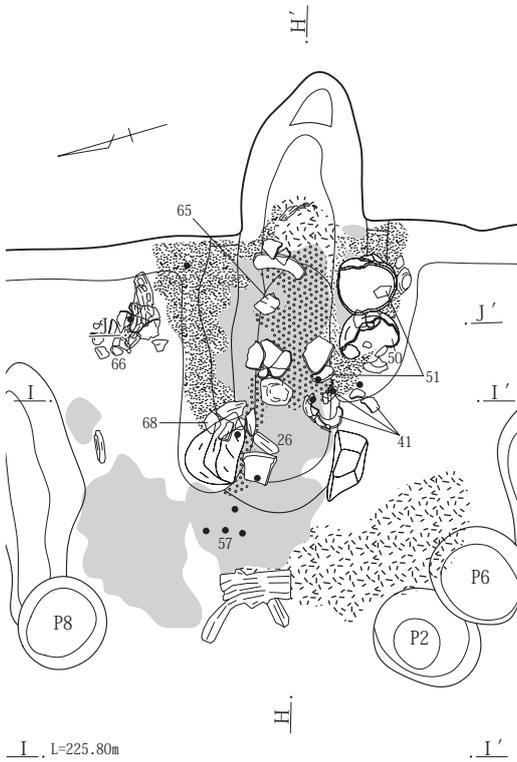
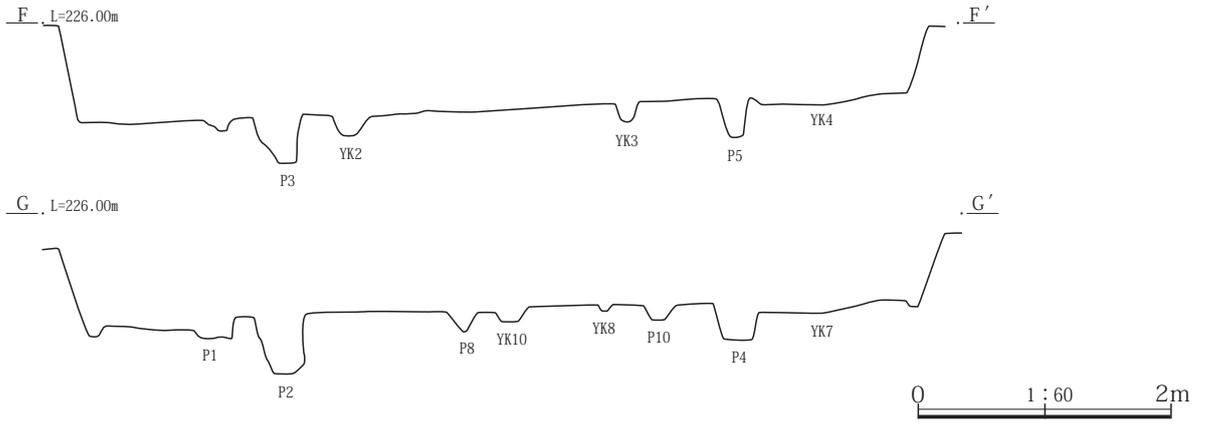
1. 焼土中心90%。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物40%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化粒5%・焼土1%含。
- 3'. 焼土化した層。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) 地山崩壊土。
5. 焼土中心層
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) 小礫(粒φ3cm)・焼土粒1%含。
7. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土2%含。

72号竪穴建物A-A'・B-B'

1. にぶい黄橙色土(10YR6/3)
2. FA(S₉) 2次堆積土。
3. FA(S₇)とS₉の混土。
4. にぶい黄色土(2.5Y6/4)
5. (FA)S₇ 細砂。
6. にぶい黄色土(2.5Y6/4) 締めり良。
7. FA(S₇) 小礫(粒φ2~14mm)含。
8. FA(S₇) 粗砂含。
9. FA(S₇) 細砂含。
10. FA(S₃)上部
11. FA(S₃)下部
12. FA(S₁)混じり。
13. FA(S₁)
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土1%含。
15. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土30%含。
16. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土1・炭化粒1%含。
17. ローム土40%含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、炭化粒・焼土1%含。
19. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%、炭化粒1%含。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%含。
21. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物・ローム土3%、焼土粒2%含。
22. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土30%含。
23. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土40%含。



第169図 72号竪穴建物出土図・土層断面図



72号竪穴建物カマドJ-J'

1. 焼土中心層
2. ローム土中心層 炭化粒・焼土1%含、カマド袖土。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%、炭化粒・焼土1%含。
4. 灰層
5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%、炭化粒・焼土1%含。
6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%、炭化粒・焼土1%含、土師器甕内部に入れてある土。

72号竪穴建物カマドH-H'・I-I'

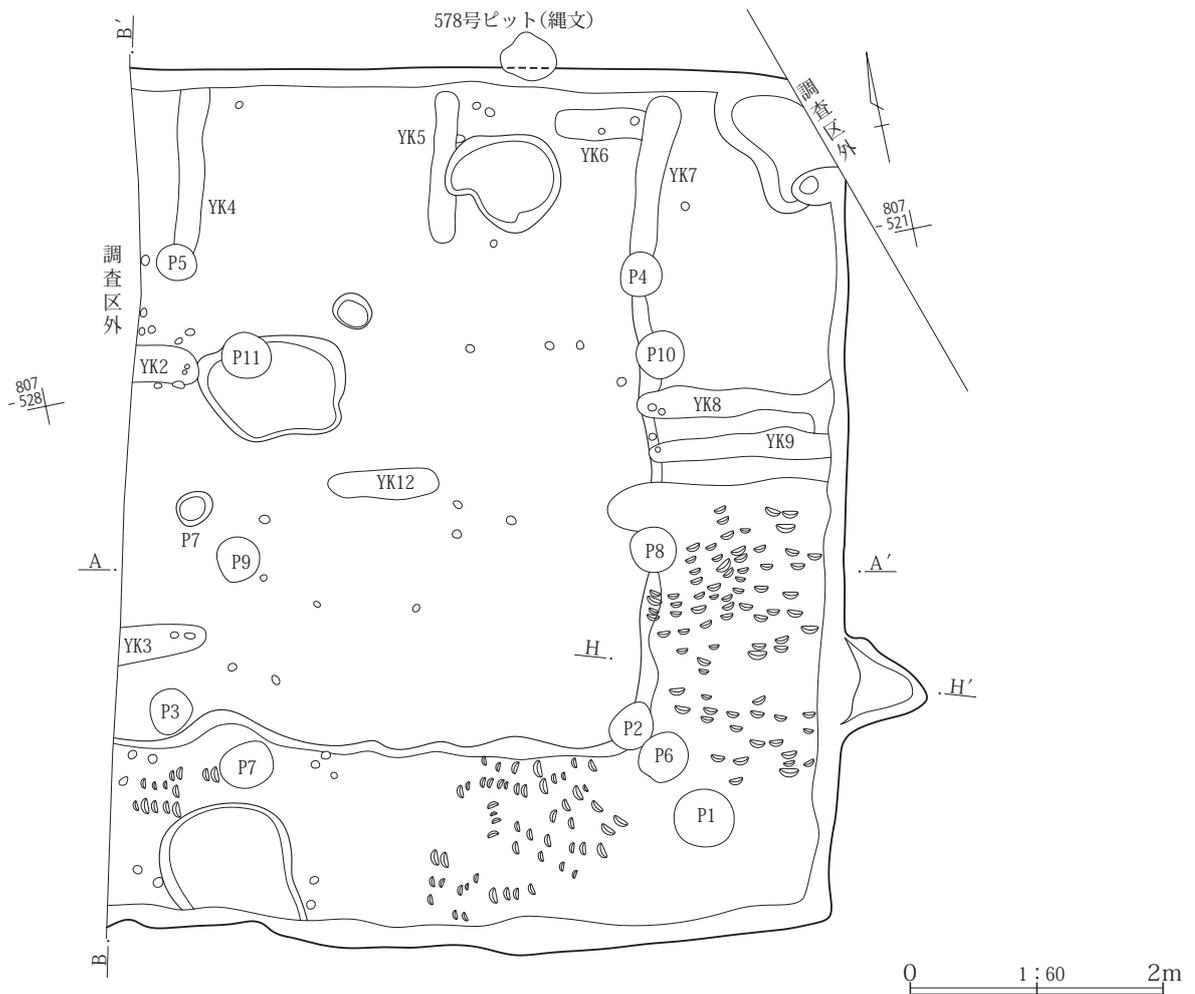
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土20%、炭化粒・焼土5%含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%、炭化粒・焼土1%含。
3. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土5%、炭化粒・焼土2%含。
4. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%、焼土5%、炭化物2%含。
5. 褐色土(10YR4/4) ローム塊少量、ローム粒多量含、締めりやや弱。
6. 焼土中心層 80%含。
7. ローム土中心層 80%含、天井の崩落土と考えられる。
8. 灰層
9. 焼土中心層 80%含。
10. 黒褐色土(10YR3/2) 炭化粒2%、焼土3%含。
11. ローム土中心層 60%含
12. 焼土中心層 灰・ローム土混じり。
13. ローム土中心層 30%含、焼土・炭化物5%含。(カマド袖土)
14. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%、炭化粒・焼土1%含、土師器甕内部に入れてある土。
15. 灰中心層
16. ローム土30%含む、ブロック(粒φ1~5cm)含。
17. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック(粒φ1~3cm)5%含。
18. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ロームブロック(粒φ1~8cm)40%含。(カマド下の基礎土)

第171図 72号竪穴建物断面図・カマド図・土層断面図

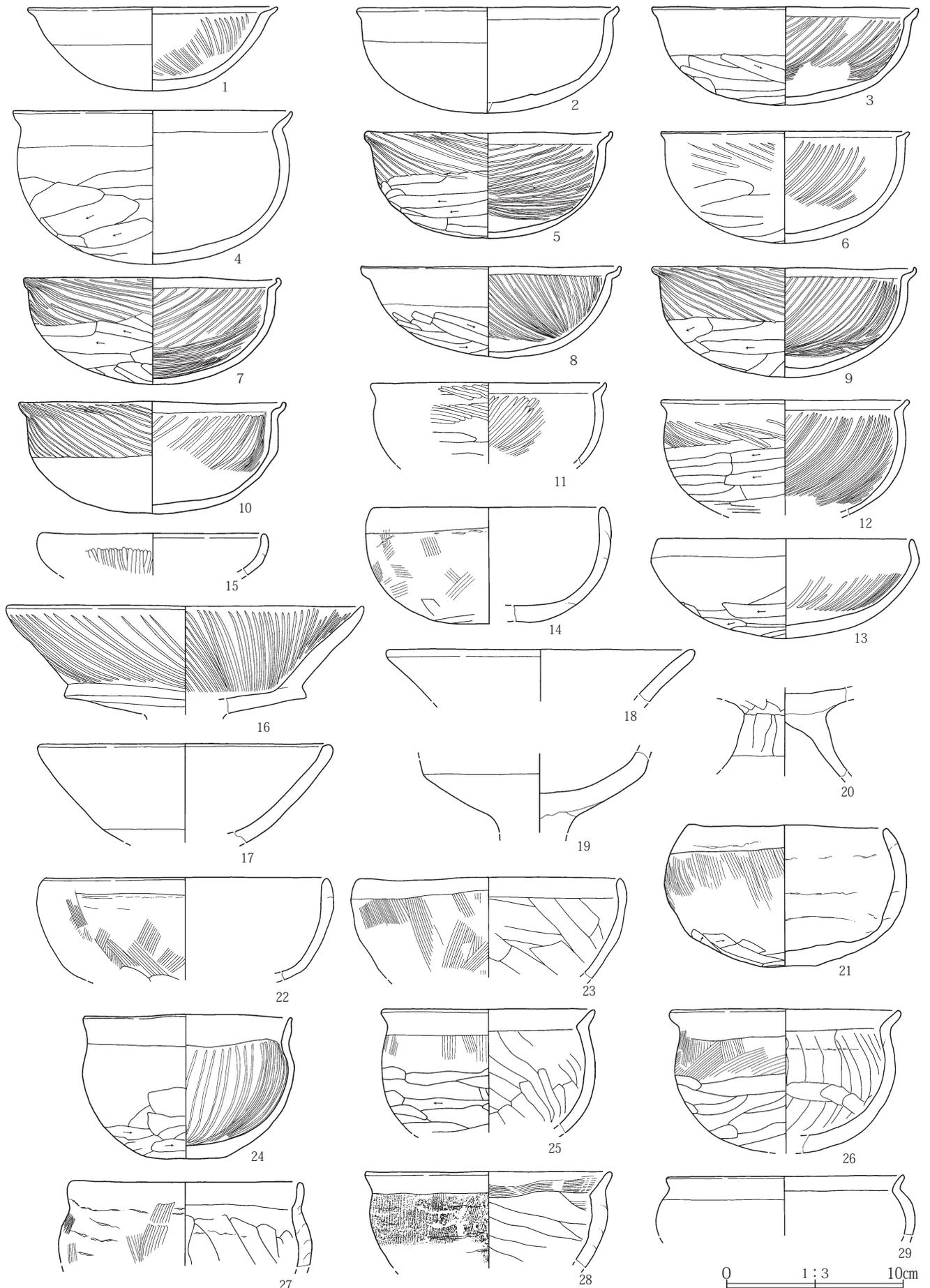


袖の先端部には石がそれぞれの袖頭に埋め込まれている興味深い例である。**貯蔵穴(P1)** カマド横南側に長径78cm、短径74cm、深さ20cmの隅丸長形状の落し蓋用の段差があり、その下に一辺50cm、深さ30cmの隅丸長方形の貯蔵穴がある。**床面小溝** 四周と中央から多数確認された。南辺中央の入口西側を起点にして、南北方向へ南壁に向かって1条、西辺は、新しい柱穴のP7とP9の柱間と、P11を起点にして東西方向に西壁に向かって2条、古い柱穴P4とP5をそれぞれ起点にして、南北方向で北壁に向かって2条、P4とP5の柱間から南北方向で北壁に向かって1条、東辺、新しい柱穴P10とP8の柱間3条と、P8を起点にして1条、東西方向で東壁に向かっている。中央には、窪みがある箇所東西方向に1条の溝がある。これだけ多くの床面小溝があるのも珍しいが、新古の柱穴に伴う溝が分かれるものと思われる。**小ピット** 床面にかなり多くの小ピットが確認された。北東部、入口付近西側、中央部などに特に多く確認されている。いずれも、径5～10cm、深さ7～12cmの

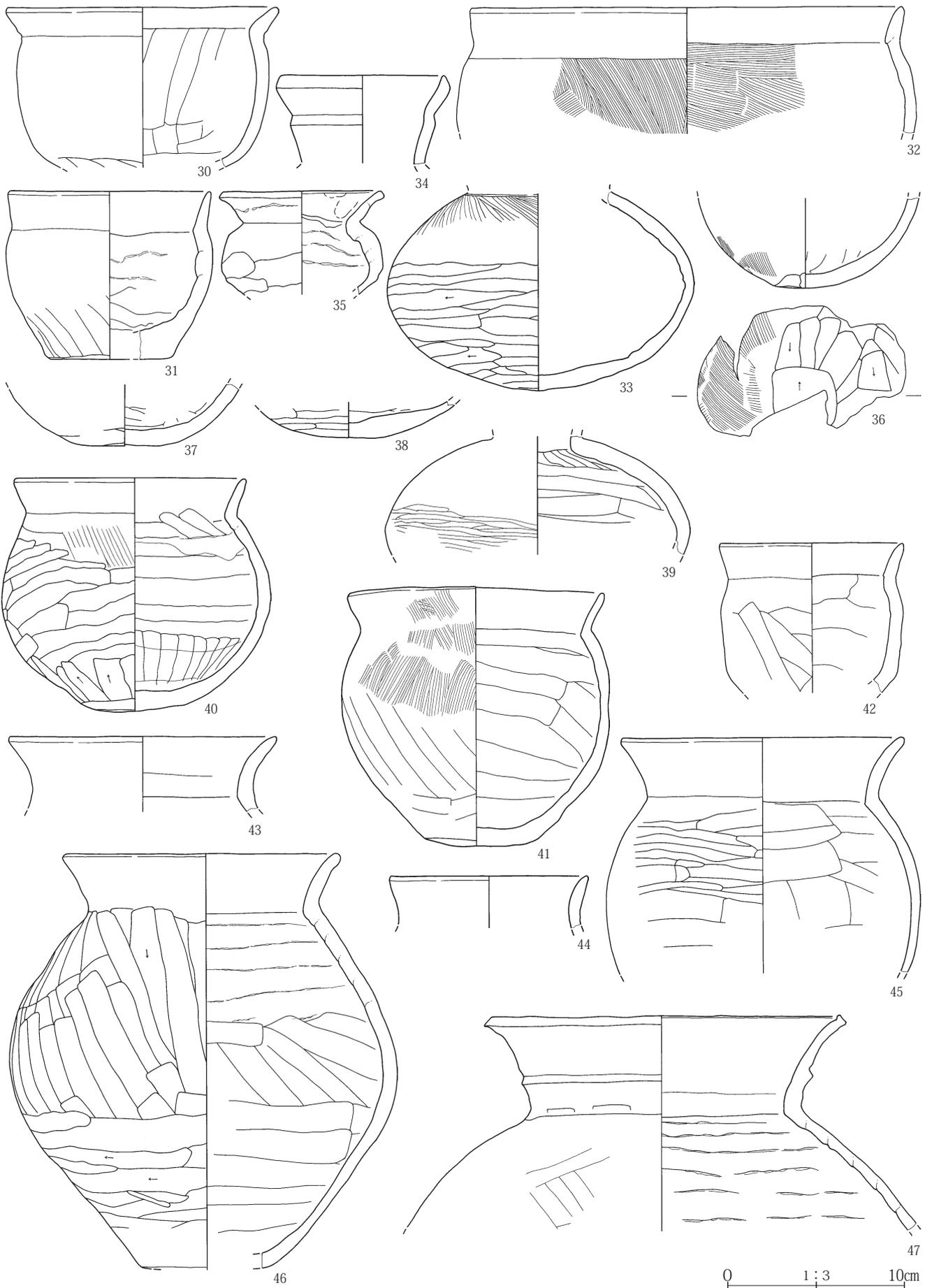
小穴である。性格は不明だが、穴の状況からみて木根跡穴などの自然の穴ではなく、その用途について今後検討する必要がある。**炭化材** 全体から数は少ないが、垂木の状況を示すような形で出土している。樹種同定によるとコナラ・クヌギから構成されている。**出土遺物**(第173～177図 PL.289～292) 多量の土器が出土している。杯AはI～IV類まで出ており、出土数も多い。杯Bは、I類のみである。杯Cは確認できなかった。杯DⅧ類(第173・174図13 PL.289)がある、高杯はA類とD類が認められる。椀の出土量が多く、椀B～C、E・F類が出土している(第173図22～29 PL.289・290)。罎や小型壺もあり、小型甕がC類を中心に多く出土する。壺はA・C類が出ており、甕はC・D類が多く出ている。手捏ね土器(第177図69)も出土している。須恵器臚片、滑石製白玉が1点出ている。**年代** 杯A・Bのみで、杯Cを欠き、杯Aが中心となる構成である。多様な椀が多く出ており古相を呈する。高杯もA類があることなど、時期的に遡り5世紀中頃に近いものと推定する。



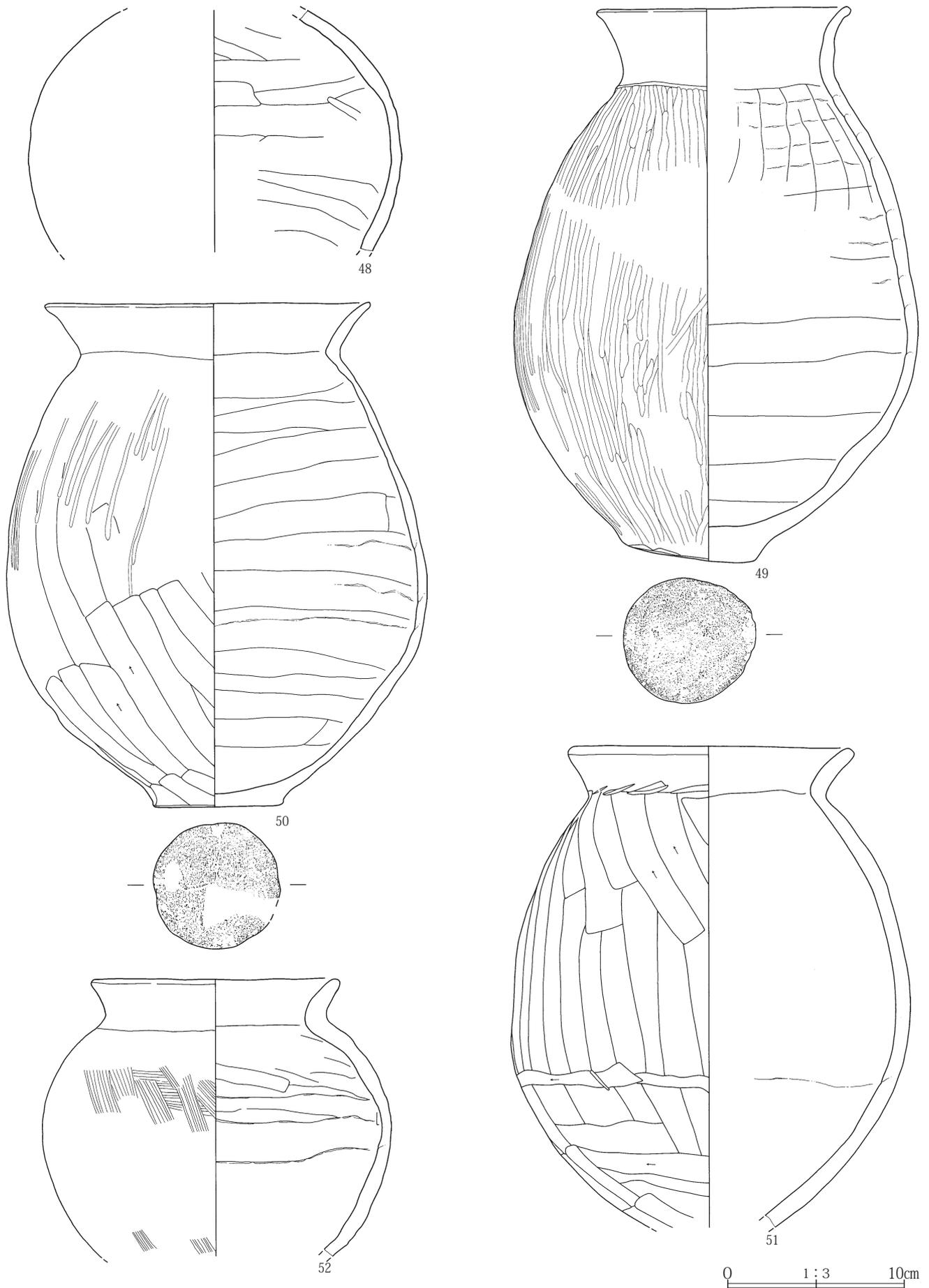
第172図 72号竪穴建物掘方図



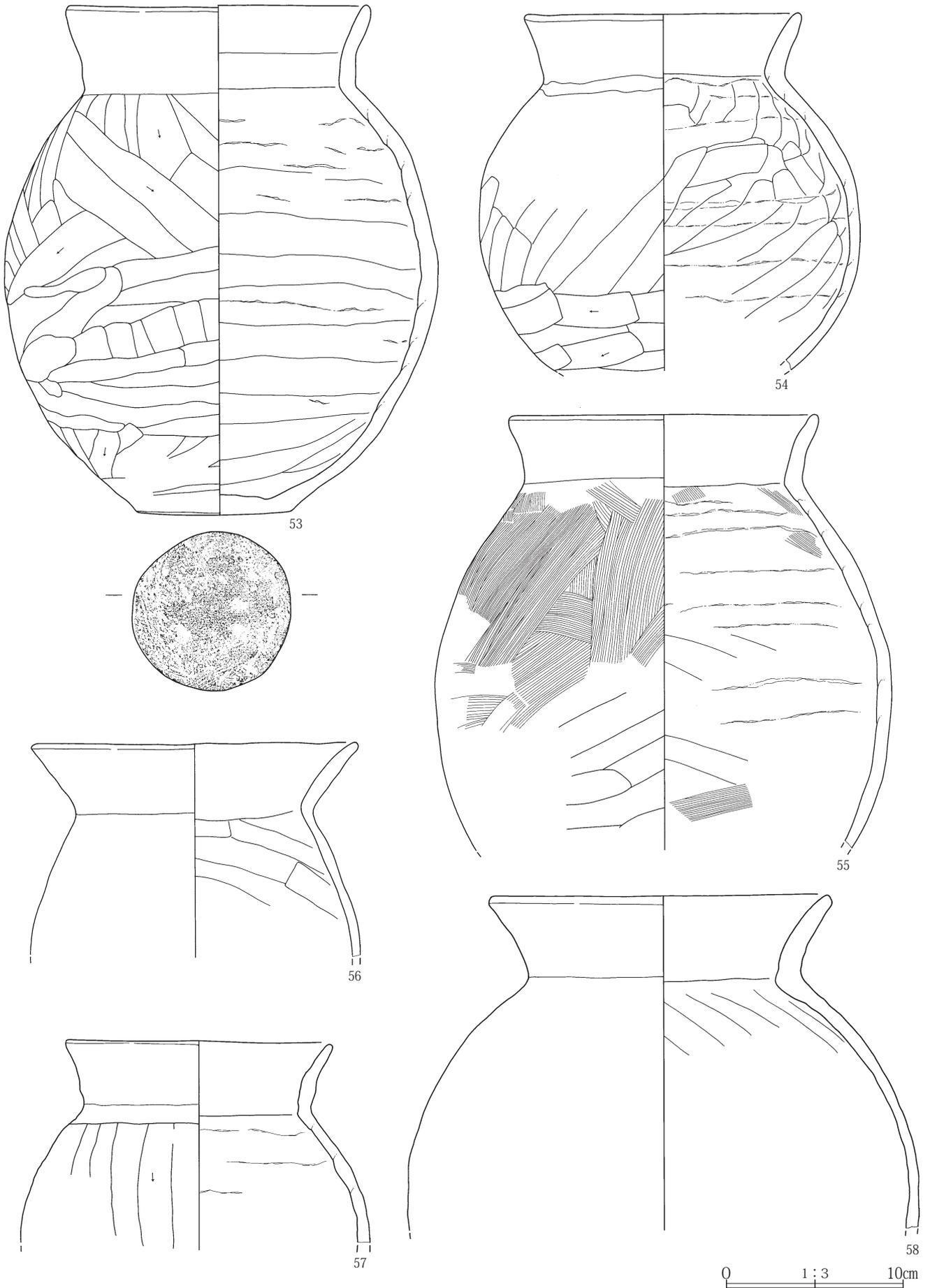
第173図 72号竪穴建物出土遺物図 1



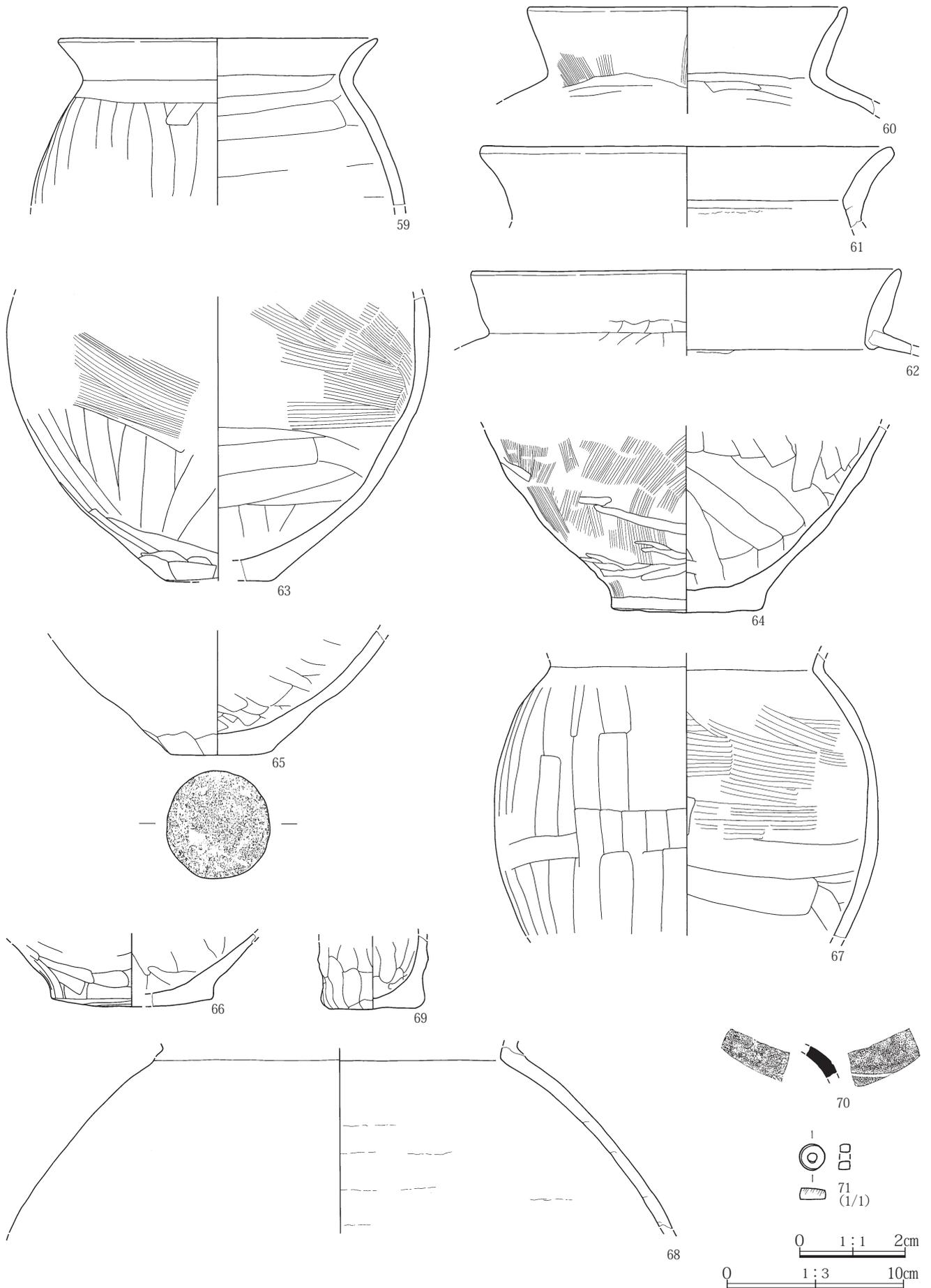
第174図 72号竖穴建物出土遺物図2



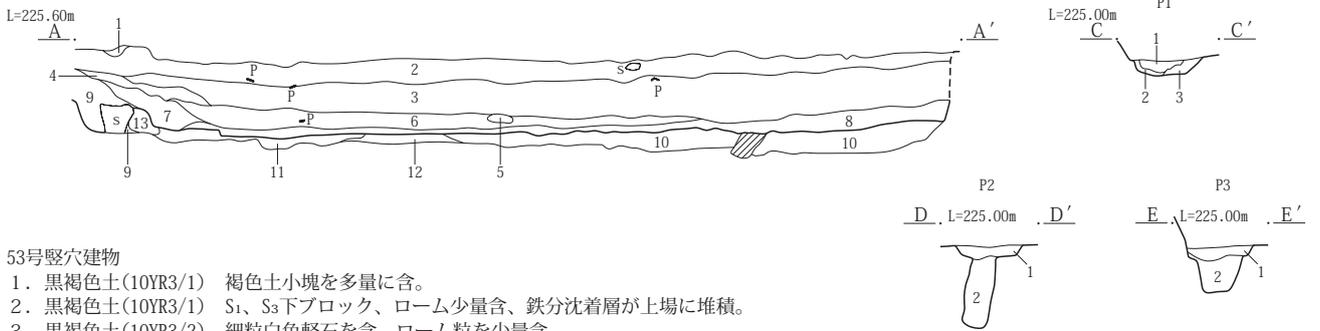
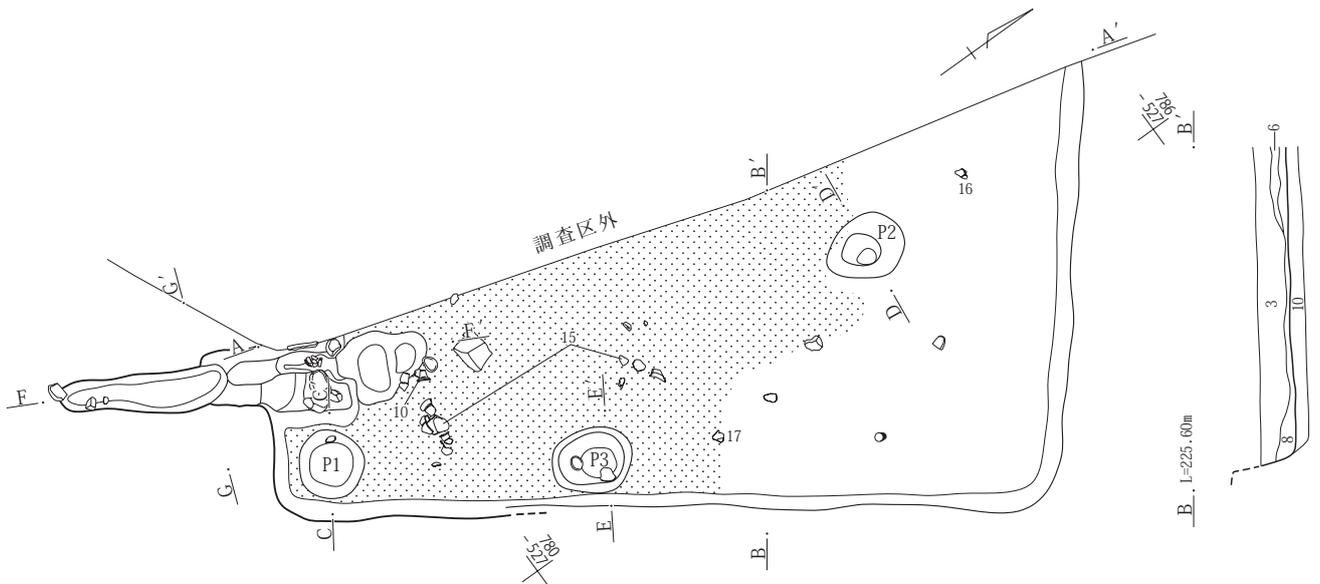
第175図 72号竪穴建物出土遺物図3



第176図 72号竖穴建物出土遺物図4



第177図 72号竪穴建物出土遺物図5



53号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR3/1) 褐色土小塊を多量に含。
2. 黒褐色土(10YR3/1) S₁、S₃下ブロック、ローム少量含、鉄分沈着層が上場に堆積。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石を含。ローム粒を少量含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・小塊を少量含。
5. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒・塊を含。
6. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・塊を含、細粒白色軽石・明赤褐色土細粒を少量含。
7. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・塊を多量に含、焼土粒を少量含。
8. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・明赤褐色土細粒含、褐色土塊を少量含、締まる。
9. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土塊を上層に含。
10. 黄褐色土(10YR5/8) ローム塊・粒を多量に含。(掘り方)
11. 黄橙色土(10YR8/8) ローム塊主体、褐色土塊を含。(掘り方)
12. 黒褐色土(10YR3/2) ロームと黒色土の混土。(掘り方)
13. にぶい黄褐色土(10YR4/3) カマド袖構築材ローム塊。

53号竪穴建物 P 1

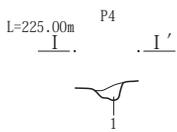
1. 黒褐色土(10YR3/1) ロームとの混土。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム混入。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ロームブロック30%含。

53号竪穴建物 P 2

1. 黒色土(10YR2/1) ローム粒少量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロック中量含。

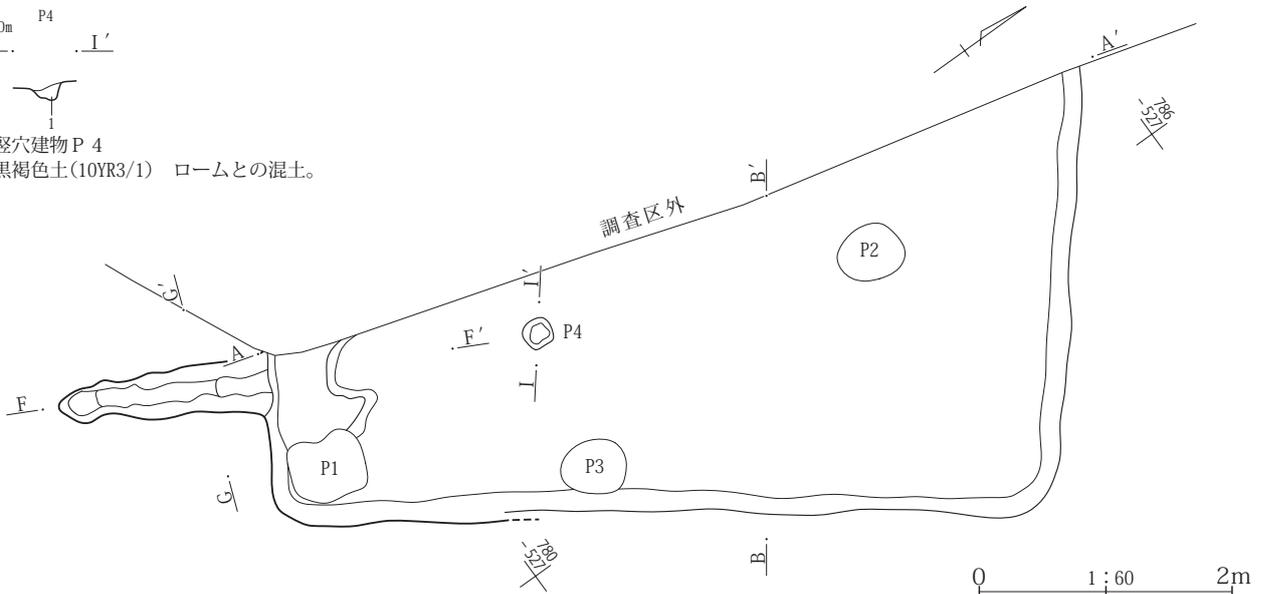
53号竪穴建物 P 3

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒少量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 暗褐色土とロームの混土。



53号竪穴建物 P 4

1. 黒褐色土(10YR3/1) ロームとの混土。

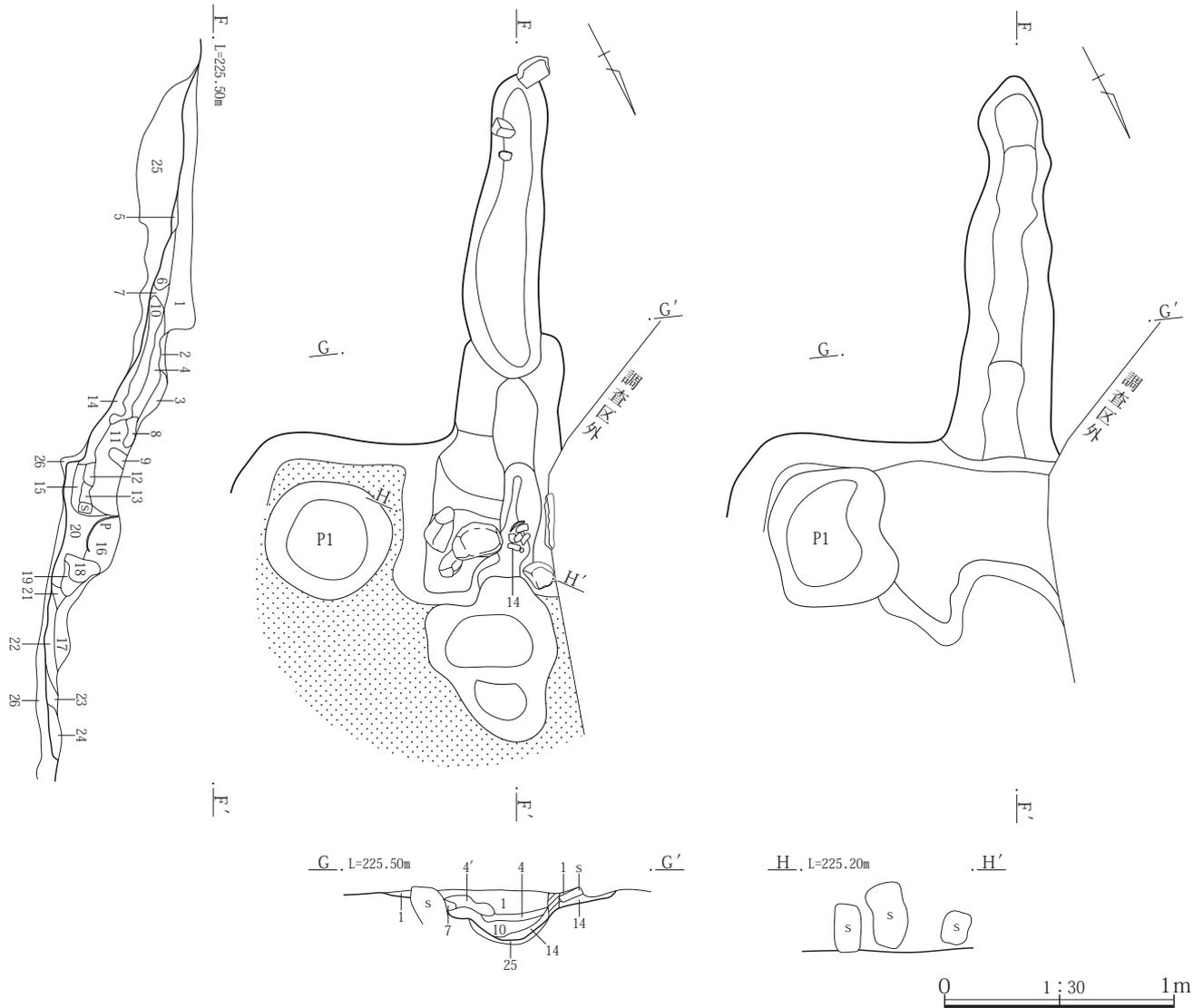


第178図 53号竪穴建物平面図・土層断面図・掘方図

(3) 53号竪穴建物(第178～180図 PL.77・293)

位置 調査地北部32号竪穴建物の北西側にある。**重複** 南西の32号竪穴建物の周堤痕跡により建物の一部が覆われているので、32号竪穴建物より古い建物と推定される。**遺存状況** 全体の1/3程南辺を中心に検出され

ている。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して、ほんの少し窪地が残っている段階で、Hr-FAが降下したものである。**規模** 東西6.3m、南北3.1m+、壁高33～48cmで、床面積は15.37㎡+、主軸方位は、N-35°-Eである。**掘方** カマド周辺を少し深く掘削している。**周堤痕跡** は無い。

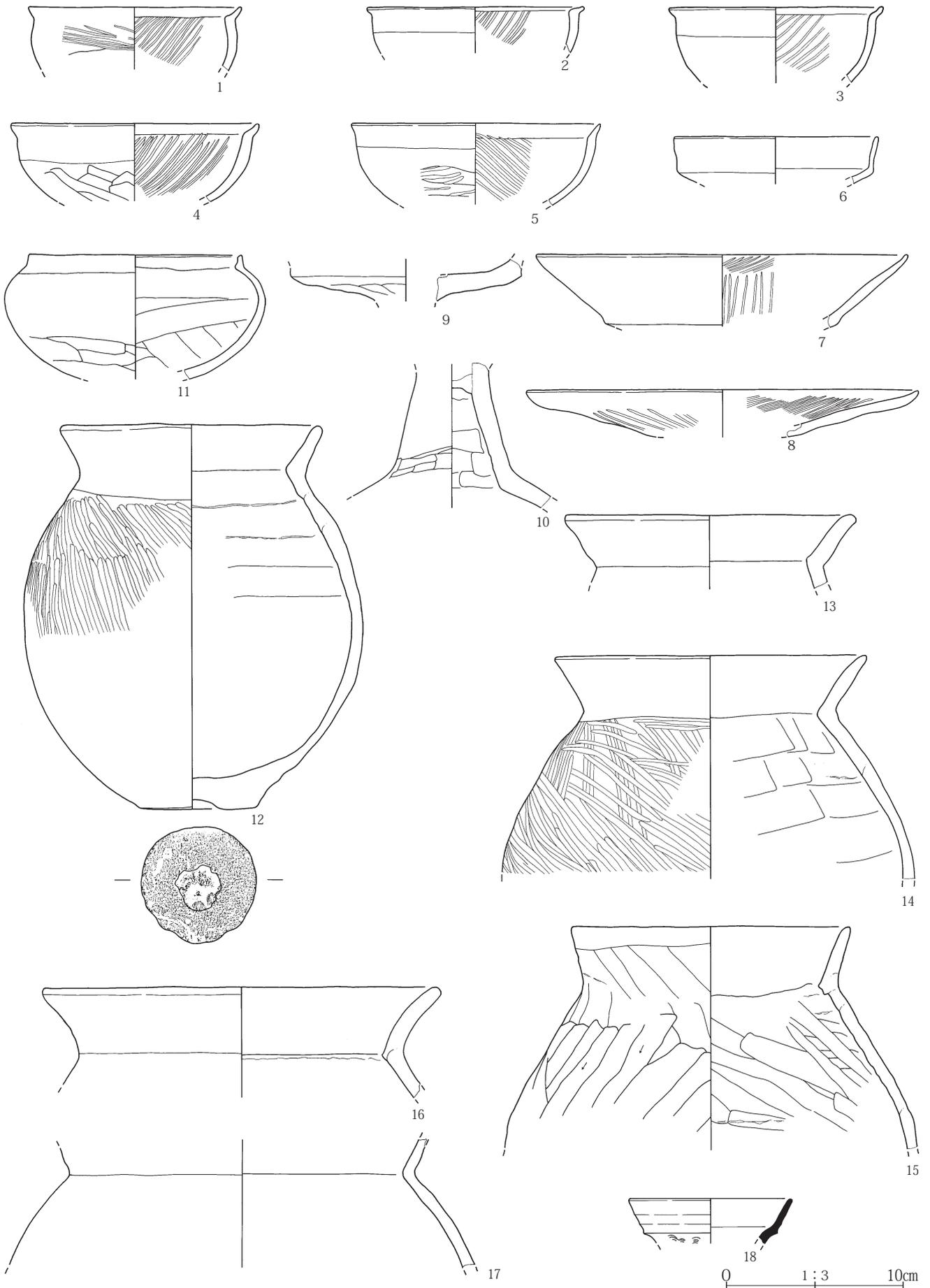


53号竪穴建物カマド

1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石を含、ローム粒を少量含。
2. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒・ローム粒を少量含。
3. 橙色土(2.5YR6/8) 焼土主体、ローム塊を含、筋状含。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・焼土粒を少量含。
- 4'. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・焼土粒を多量に含。
5. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・焼土を僅かに含。
6. にぶい橙色土(7.5YR7/4) 焼土(橙色土)塊を多量、黒色土塊を少量含。
7. 黒褐色土(10YR3/1) 上層に焼土粒を僅かに含。
8. 赤色土(10R5/6) 焼土塊と黄橙色土塊が混合。
9. 浅黄橙色土(7.5YR8/4) 黄橙色土塊主体、黒色土を少量含。
10. 灰赤色土(2.5YR6/2) 灰赤色土塊を多量、細粒白色軽石を少量含。
11. 黒褐色土(10YR3/2) 褐色土塊、焼土粒・塊を少量含。
12. にぶい橙色土(7.5YR7/4) にぶい橙色土塊主体、粘質。

13. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒・塊を含、細粒白色軽石を少量含。
14. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・細粒白色軽石を少量含。
15. 褐灰色土(10YR4/1) 灰層を含、焼土粒を少量含。
16. 明黄褐色土(10YR7/6) 黄褐色土粘質土(袖構築材)主体。
17. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石・ローム塊を含、細粒焼土を少量含。
18. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石を含、焼土粒を僅かに含。
19. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・焼土粒を少量含。
20. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒、灰とローム粒の混土。
21. 褐色土(10YR4/4) 細粒焼土を含、ローム塊を少量含。
22. 灰黄褐色土(10YR5/2) 白色軽石・ローム塊を少量含。
23. にぶい橙色土(7.5YR7/4) ローム塊・黒色土小塊を少量含。
24. 灰黄褐色土(10YR5/2) 白色軽石・ローム塊を少量含。
25. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・ローム粒を少量含。(掘り方)
26. 黒色土(10YR2/1) 褐色土塊、ローム粒・塊を含。(掘り方)

第179図 53号竪穴建物カマド図・土層断面図

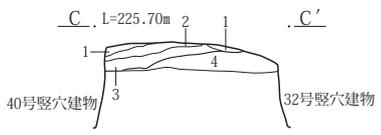
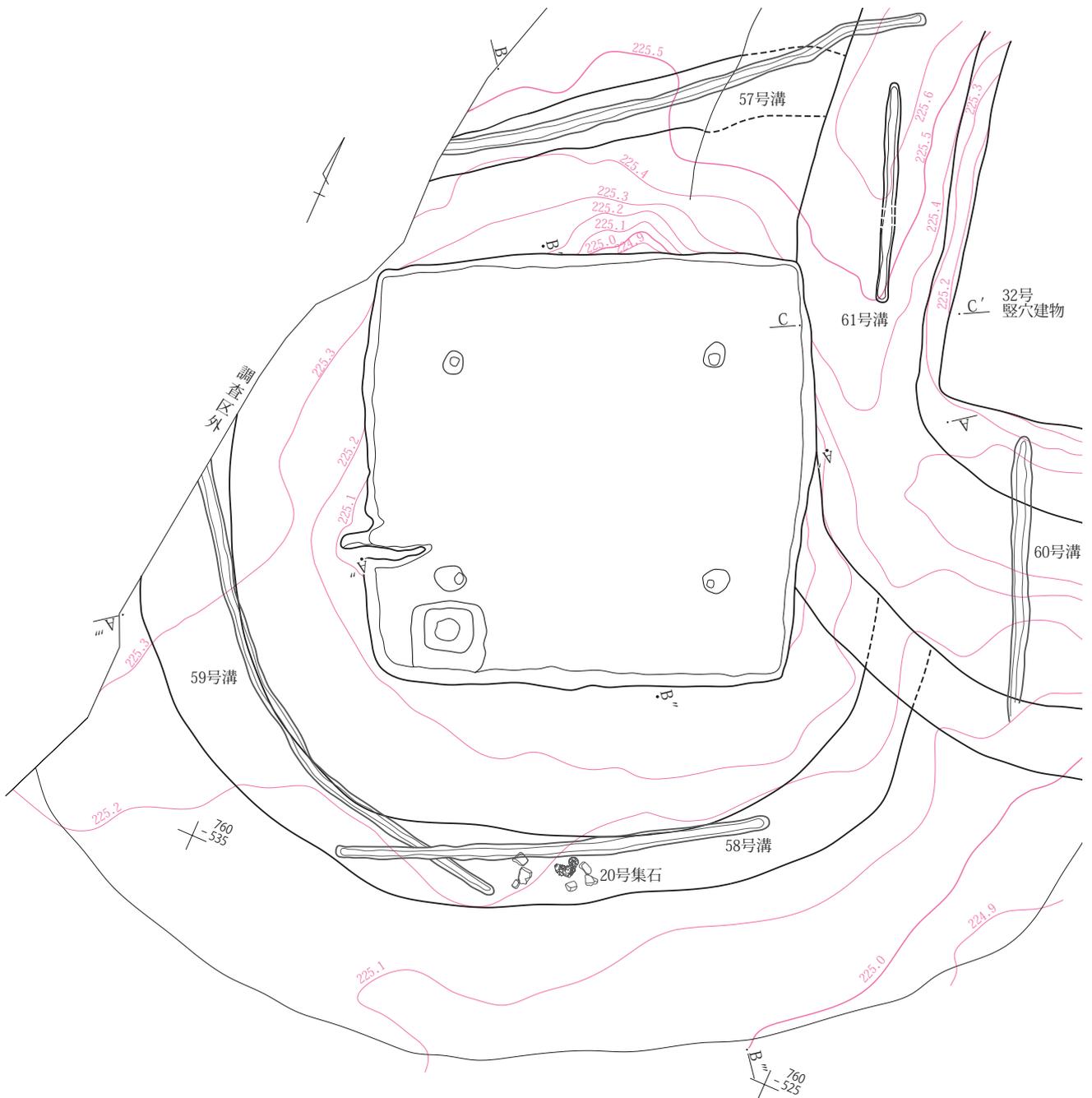


第180图 53号竖穴建物出土遺物图

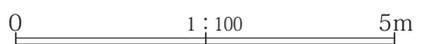
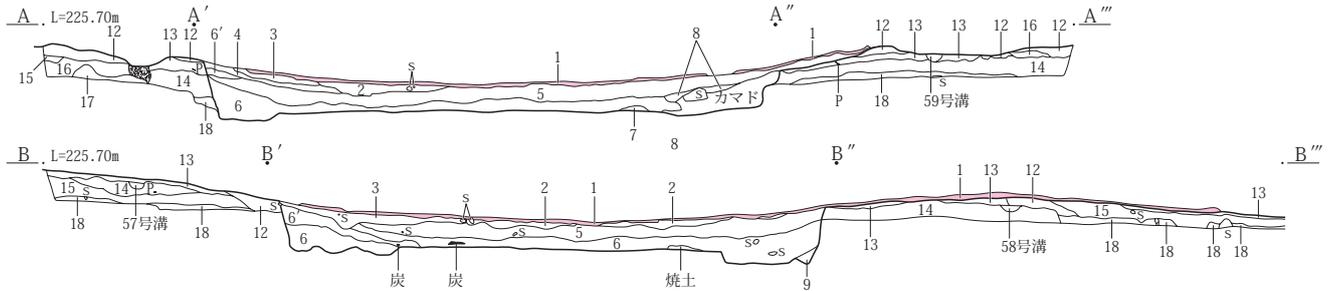
壁際溝 無い。**柱 穴** 北部隅の長径65cm、短径54cm、深さ39cmのP 2が該当する。**入 口** P 3(長径65cm、短径54cm、深さ39cm)を入口と考える。というのは、のを入口のピットと想定し南入口と考える。**硬化面** 入口部付近から北側全体に、壁際を除いてある。**カマド** このムラでは珍しい西向きで、焚口～煙道長294cm、焚口幅143cm+である。煙道が長い。カマドは壊されていたが、袖に一部石が埋め込まれていて、粘土で周りを覆うものである。支柱石が配置されている。**貯蔵穴(P 1)** P 1は長径55cm、短径50cm、深さ15cmで小さいが、カマドの脇に位置していることから貯蔵穴と推定した。**出土遺物**(第180図 PL.293) 杯AⅡ～Ⅳが中心で、杯CⅡが一部含まれる。椀D、高杯A、甕Aがある。須恵器臙片が出ている。**年 代** 周堤の重複関係から32号竪穴建物より古く、出土遺物の杯Aの多さや高杯Aの存在、甕が古式を呈している、5世紀中頃に近い後半と推定する。

(4)40号竪穴建物(第183～193図 PL.78～80・293～296)
位 置 調査区中央部北側の32号竪穴建物の南西にある。**重 複** 周堤の一部が32号竪穴建物の周堤に切られているので、32号竪穴建物より古い建物と考えられる。**遺存状況** 北西部の周堤は調査区外であるが、竪穴部分は完存している。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積して少し窪みが残っている段階でHr-FAが降下している。**規 模** 東西7.24m、南北7.06m、壁高69～87cm、床面積47.99㎡、主軸方位はN-65°-Eである。**掘 方** 床面全面にU字形鋤鋤先の掘削痕跡が残っている。四周の周溝の掘削は、起点がどこから始まるか不明であるが、大形の刃先は、東辺で南側、北辺で東側、西辺で北側、南辺で西側に向いており、後進して掘削すると、反時計まわりに一周廻ったと想定される。北辺には南北方向で、北側に刃先痕がある箇所が多く、後進して南側に向けて掘削している。南側は、東西方向に小さな刃先痕が西に向かい、後進して東側に掘削すると想定している。その他、南北方向、東西方向、斜め方向に大小のU字形鋤鋤先掘削痕が連続して確認できた。掘削方向、刃先の大きさの違いなどから複数の刃先を持つ道具を使用していることが分かる。**周 堤** 幅約3m、高さ10cmのものが、西辺から南辺で確認されている。**集 石** 周堤の上から20号集石が検出された。長径120cm、短径48cmの範囲に、14～28cmの大きさの石が出土する。また、小型甕と有孔

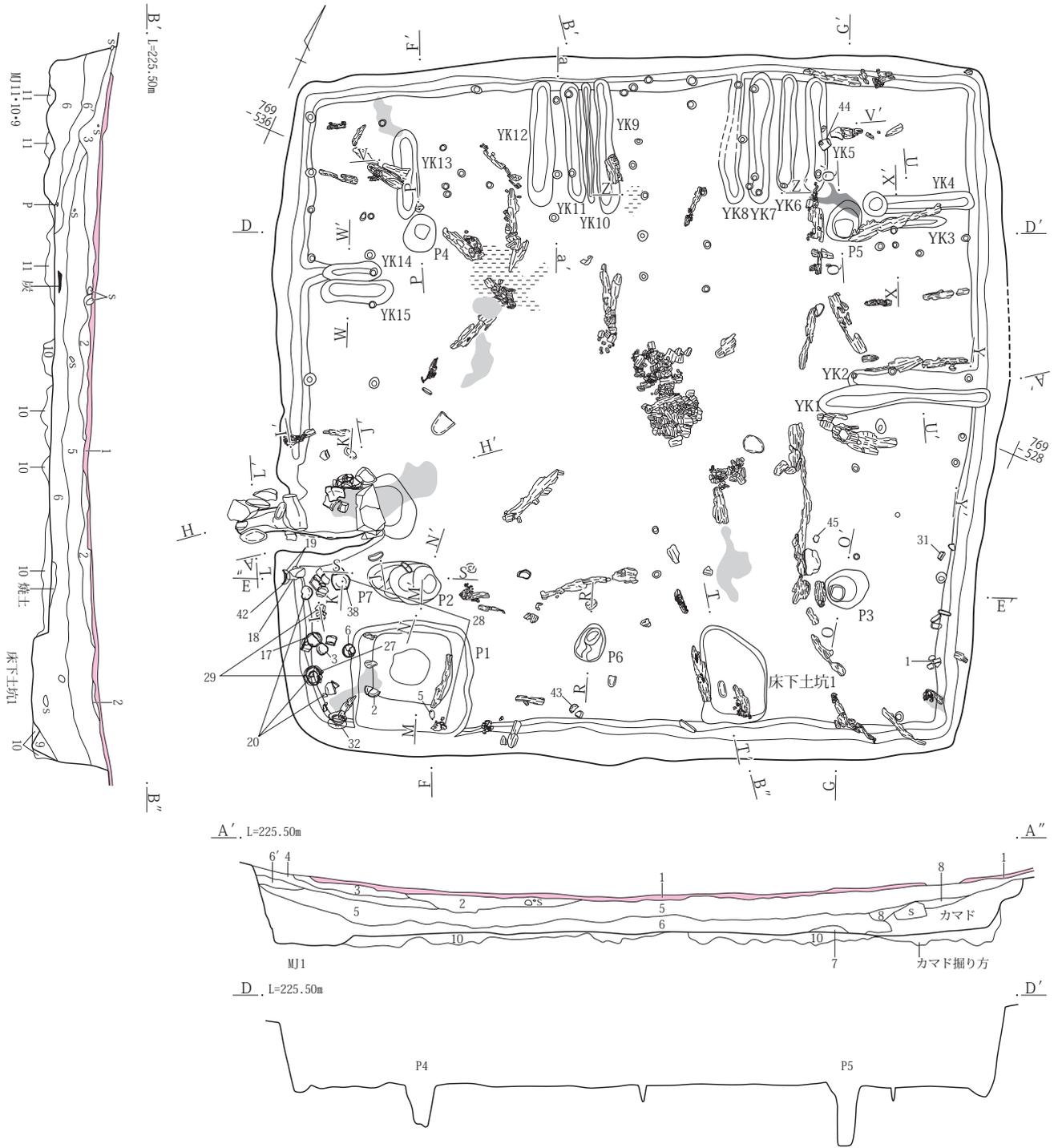
鉢が2個出土しており、焼土等は確認できていないが、ここで煮炊きを行った可能性がある。**溝** 周堤下から5条の溝が確認された。57号溝は建物北側周堤下にある東西方向の溝で西南端は調査区外である。長8.04m+、上幅16～29cm、下幅4～15cm、深さ6～8cm、高低差1cm、西から東に向かってやや降る。建物の南側周堤下から東西方向に建物に並行に58号溝がある。長6.96m、上幅17～29cm、下幅5～16cm、深さ3～6cm、高低差1cm、東から西に向かってやや降る。59号溝を切っている。建物西側の周堤下に南北方向やや東側に弧状を呈する59号溝がある。北端は調査区外となる。長8.72m+、上幅18～25cm、下幅6～15cm、深さ2～6cm、高低差17cm、北から南に向かって降る。58号溝に切られる。建物東側の周堤下の南北方向に建物と並行に60号溝がある。長4.62m+、上幅20～34cm、下幅7～16cm、深さ1～5cm、高低差15cm、北から南に向かって降る。建物の北東側、周堤下から南北方向に61号溝がある。長3.54m、上幅17～22cm、下幅7～15cm、深さ3～5cm、高低差12cmで、北から南にやや降る。これらの溝を見ると40号竪穴建物の四周を廻るように、溝が廻っておりこの建物を構築する際に目安として掘削した可能性がある。**壁際溝** 幅19～22cm、深さ10cmの溝が四周を巡る。**柱 穴** 4本で、長径35～43cm、短径28～39cm、深さ41～59cmである。**入 口** 南と推定している。南辺入口中央部にある長径38cm、短径28cm、深さ24cmのP 6を入り口ピットと考えている。**硬化面** 全体に硬化した面を持つ。**カマド** 焚口～煙道まで173cm、焚口幅は75cmである。煙道の内側部や袖に石を埋め込んでおり上から粘土を被せている。**貯蔵穴(P 1)** 南西隅にあり、長径236cm、短径178、深さ20cmの隅丸長方形の落とし蓋を設置する段差があり、その下に長径90cm、短径72cm、深さ64cmの貯蔵穴がある。**小 穴** 東・北・西壁の周溝沿いに小穴が、複数個開いている。径は5～8cm、深さ10～24cmほどであるが、壁材押え等の役割のあるものと想定している。**床面小溝** 東・北・西辺にある。東辺は、柱穴P 3・P 5の中央部柱間より東西方向で東壁に2条延びている。また北東の柱穴P 5を起点にして、2条の溝が東西方向東壁に向かって延びている。北辺は、北東部P 5の柱穴を起点に、4条の溝が、南北方向で北壁に延びている。P 5とP 4の柱間やや西寄りから、南北方向北壁に向け



- 40号竖穴建物周堤
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土・ロームを多量含。
 2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム・白色軽石を微量含。
 3. 灰黄褐色土(10YR5/2) ロームを多量含。
 4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム・白色軽石を微量含。



第181図 40号竖穴建物全体図・土層断面図

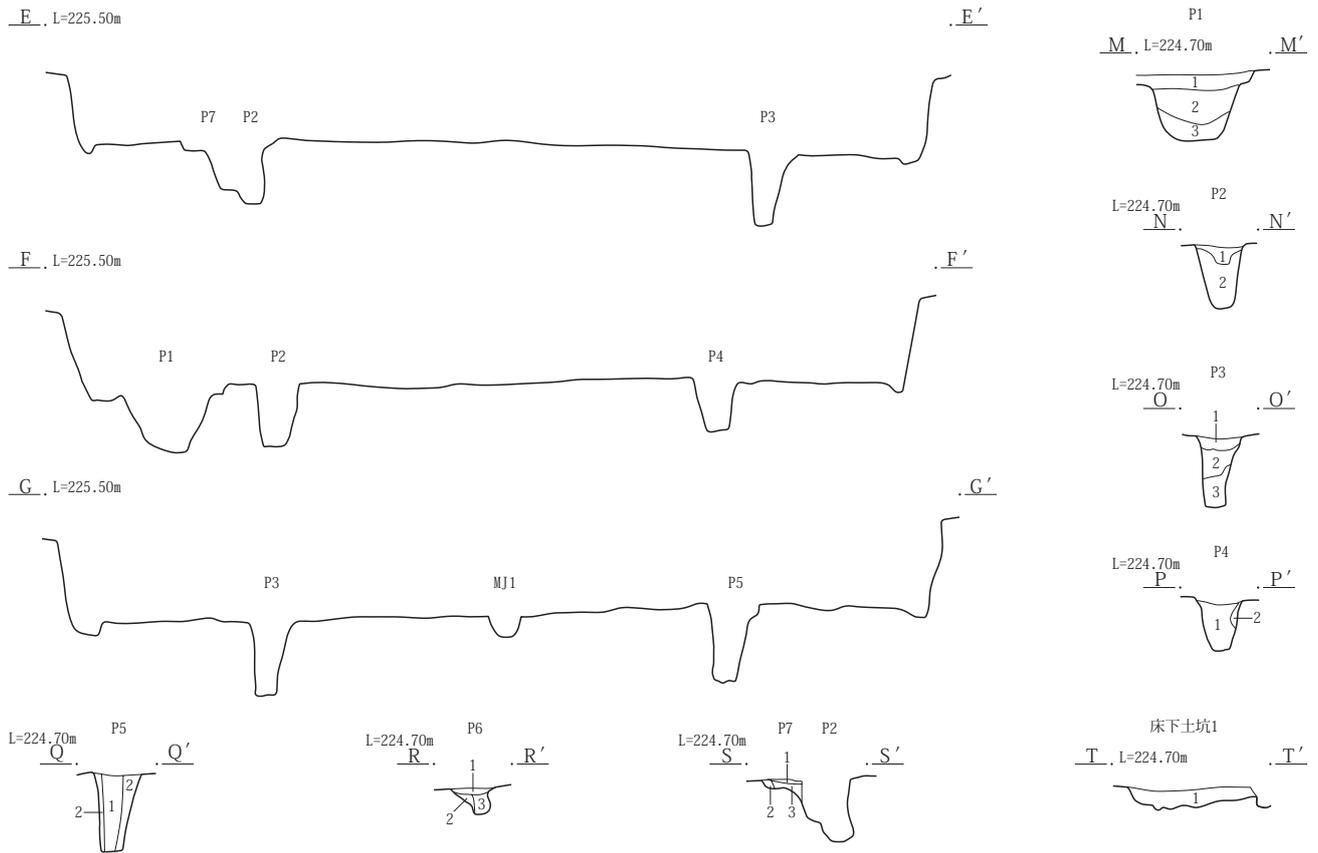


40号竪穴建物

- | | |
|---|--|
| <p>1. FA(S₁)</p> <p>2. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・ローム粒を含、鉄分沈着塊を少量含。</p> <p>3. 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊を多量に、細粒白色軽石を少量含。</p> <p>4. 褐色土(10YR4/6) 細粒白色軽石、ローム粒・塊含。</p> <p>5. 黒色土(10YR2/1) ローム粒・塊、細粒白色軽石を含、やや粘質性を帯びる。</p> <p>6. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊、細粒白色軽石を多量含、人為的埋没土。</p> <p>6'. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・ローム粒含、鉄分沈着塊を少量含。</p> <p>7. 焼土塊主体</p> <p>8. 焼土粒とローム塊の混合土。</p> | <p>9. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 黒色土塊含、ローム粒・細粒白色軽石少量含。(周溝)</p> <p>10. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊を多量含。(掘り方)</p> <p>11. 暗褐色土(10YR3/3) 明赤褐色土粒を多量に、褐色土塊を含。</p> <p>12. 暗褐色土(10YR3/3) 明赤褐色土粒多量、褐色土塊含。(周堤)</p> <p>13. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒を少量含。</p> <p>14. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石を多量、明赤褐色土粒を少量含、縮まりあり。</p> <p>15. 明黄褐色土(10YR6/6) ローム粒・塊を多量含。</p> <p>16. 黒褐色土(10YR3/1) 黄橙色軽石を含、細粒白色軽石を少量含。</p> <p>17. 黒色土(10YR2/1) ローム・黒褐色土を含。</p> <p>18. 黒褐色土(10YR3/2) 黄橙色軽石・細粒白色軽石を少量含。</p> |
|---|--|

0 1:60 2m

第182図 40号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図



40号竪穴建物 P 1

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒を多量、焼土粒・炭化物を少量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を含、炭化物を少量含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・炭化物を少量含、縮まりない。

40号竪穴建物 P 2

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロックを少量、焼土・炭化物を微量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを微量含。

40号竪穴建物 P 3

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒、炭化物を少量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を含、炭化物を少量含、縮まりない。
3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含。

40号竪穴建物 P 4

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・炭化物を少量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を多量含、縮まりない。

40号竪穴建物 P 5

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームを微量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ロームブロックを少量含。

40号竪穴建物 P 6

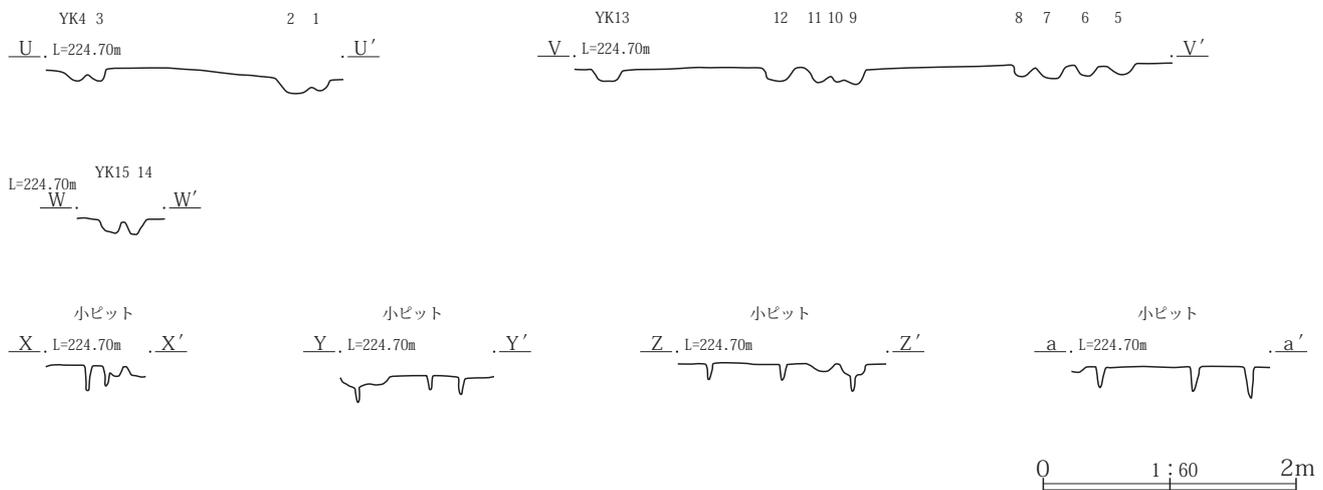
1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土多く含。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土多量含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含。

40号竪穴建物 P 7

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化物を少量含。
3. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒を含、炭化物を少量含。

40号竪穴建物床下土坑 1

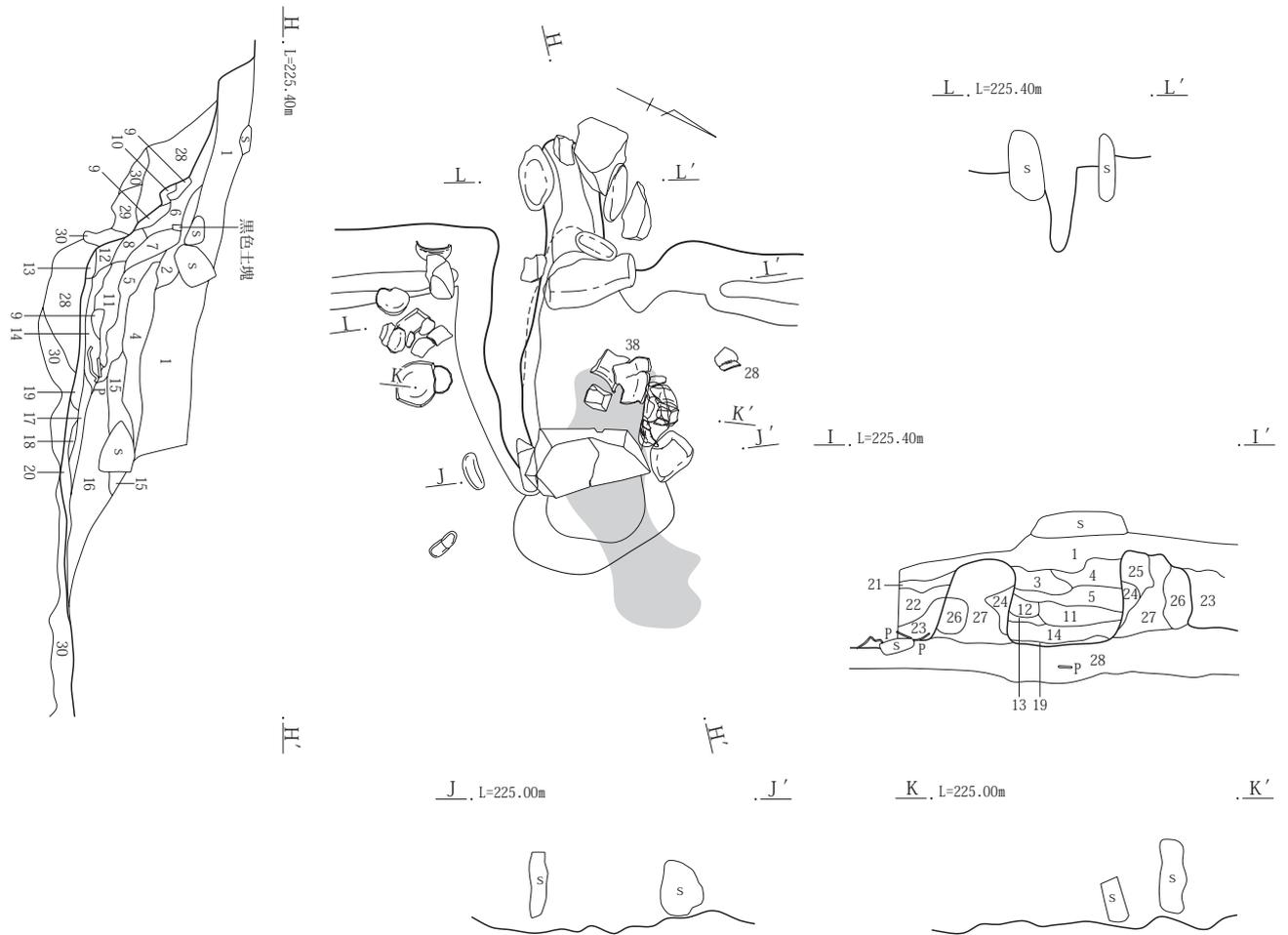
1. 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊・粒を多量含、炭化物を少量含、人為的埋没土。



第183図 40号竪穴建物断面他図

てやはり4条の溝があり、さらに北西部P4の柱穴を起点に南北方向で北壁に向かう溝が1条ある。西辺では、同じ北西部柱穴P4のやや南側を起点に東西方向西壁に向かい2条の溝が伸びている。北辺の4条の溝が2列対応して検出されているのは、それぞれ対応する溝があり新旧関係にある可能性がある。**炭化材** 中央部や各辺に一部遺存している。垂木の遺存を示すような出土状況を示すものがあるが、明瞭に確認できない。樹種同定によ

るとコナラとクリが半々である。**赤色顔料** 北東隅、P5の付近から層状に出土しており、分析の結果、赤土を起源とする非パイプ状ベンガラであることが分かった。**出土遺物**(第187～191図 PL.293～296) 周堤上の20号集石からは、小型甕CⅡ①(第187図1 PL.296)と甕Aが2個(第187図2・3 PL.296)出土している。甕2個が小型甕とのセットでこの集石遺構から出土したことは興味深い。杯AはⅡ・Ⅳ類が主体、杯Bは、Ⅰ類を中心にして



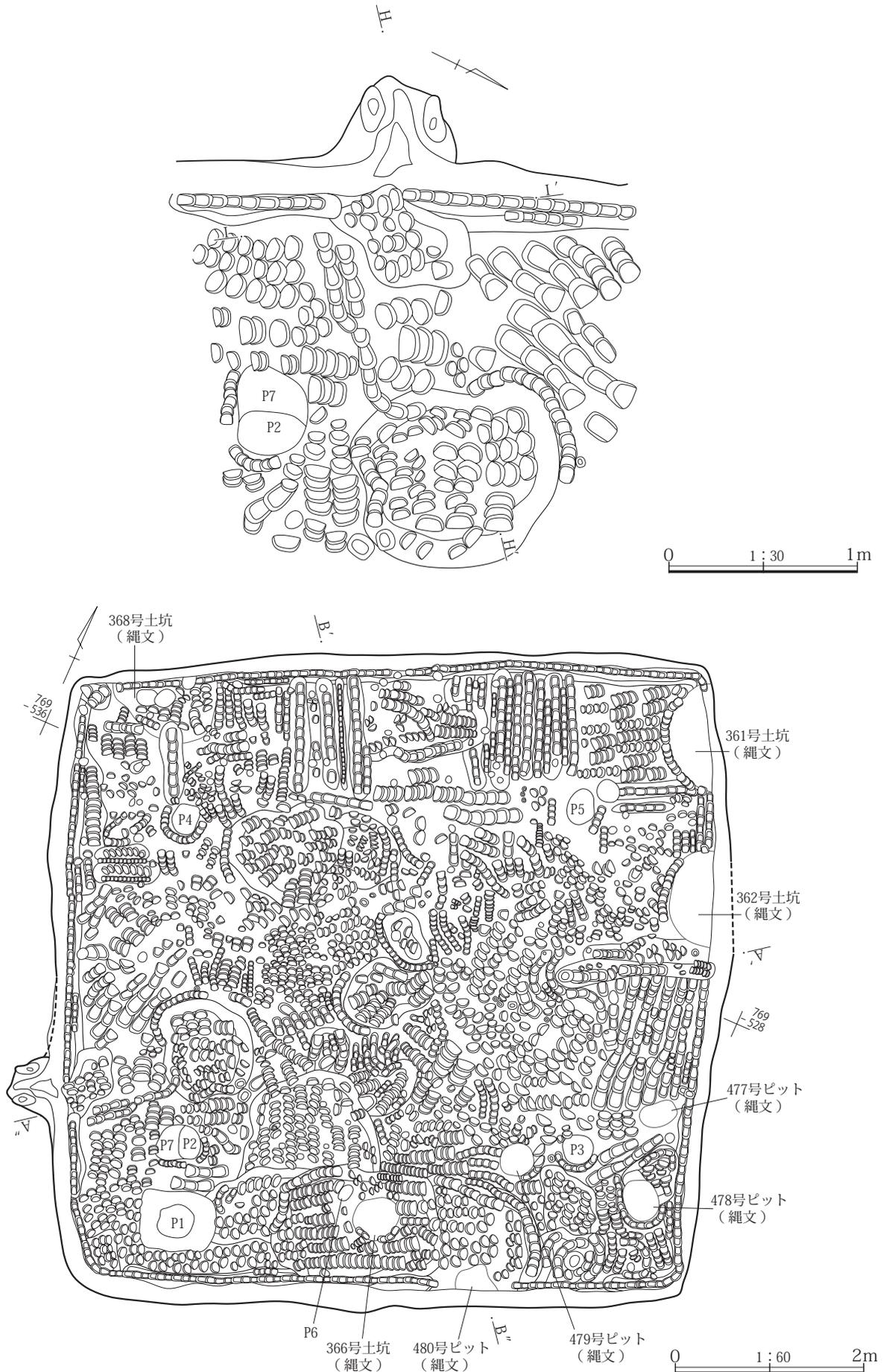
40号竪穴建物カマド

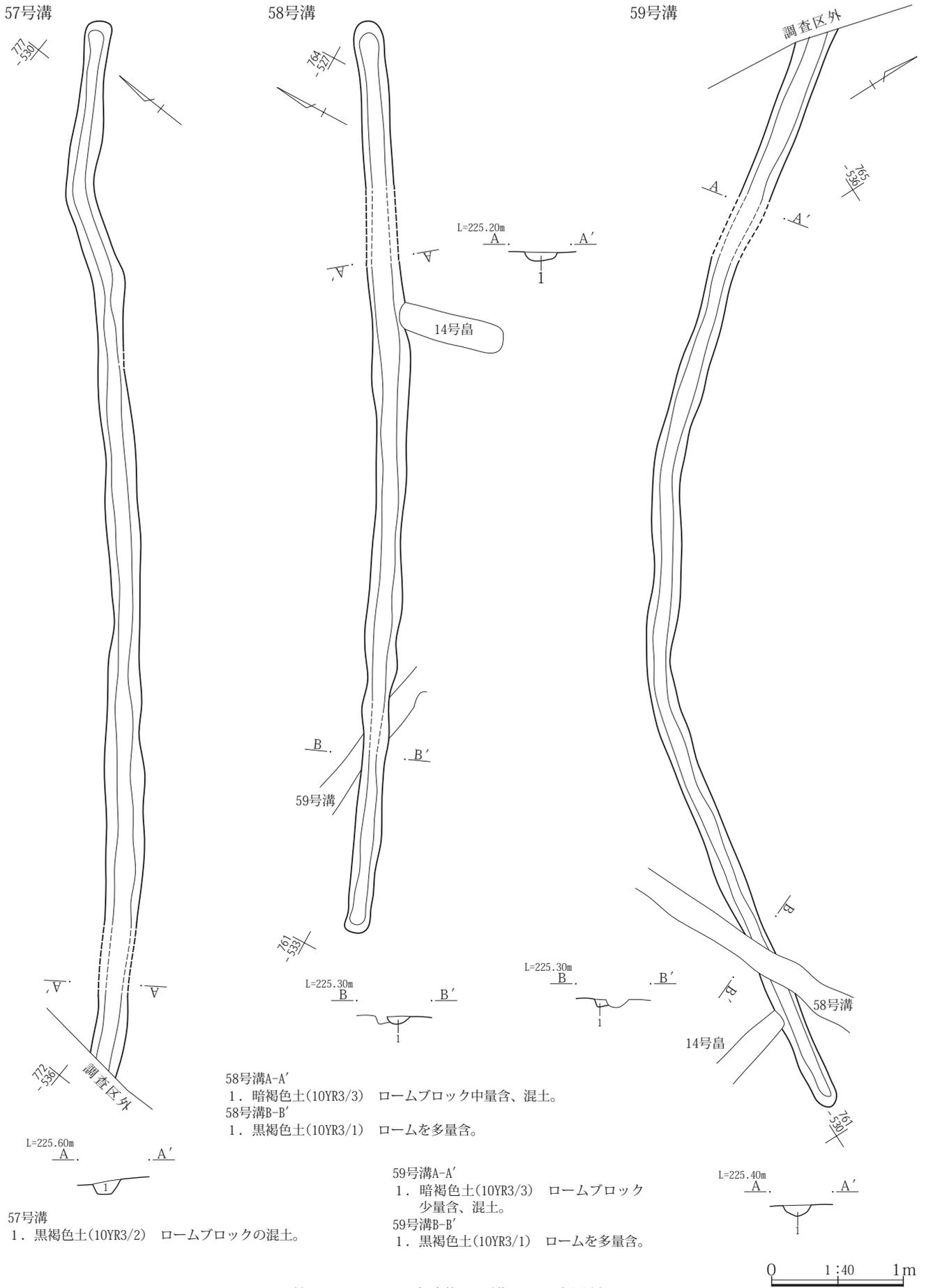
1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石、ローム粒含。
2. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒・細粒白色軽石を少量含。
3. 黄褐色土(10YR5/8) ローム土主体、天井石崩落土。
4. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・塊、ローム塊を多量含。
5. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・塊を含、炭化物を少量含。
6. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒・焼土粒・細粒白色軽石を含。
7. 浅黄橙色土(10YR8/4) ローム塊主体、黒色土・焼土粒を少量含。
8. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石を含、焼土粒を僅かに含。
9. 灰赤色土(2.5YR6/2) 灰赤色土塊主体。
10. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒を少量含。
11. 浅黄橙色土(10YR8/4) ローム粒・塊を多量含、焼土粒を下層に僅かに含。
12. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒を少量含、粘質性を帯びる。
13. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・塊を多量含。
14. 褐灰色土(10YR4/1) 灰層主体、焼土塊を含。
15. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒・塊を多量含、灰塊を少量含。
16. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・塊を含、炭化物を僅かに含。

17. 褐灰色土灰層主体。
18. 灰赤色土(2.5YR6/2) 灰赤色土塊主体。
19. 暗褐色土(10YR3/3) 焼土粒・灰塊を多量含、粘質。
20. 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊を多量含、焼土粒を少量含。
21. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊を含。
22. 黒色土(10YR2/1) ローム粒、炭化物を少量含。
23. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・塊を多量含。
24. 赤褐色土(2.5YR4/6) 25層が焼土化した壁。
25. 明黄褐色土(10YR7/6) ローム主体。(カマド袖構築材崩れ)
26. 黄褐色土(10YR5/6) ローム土ブロック状に40%含。
27. 黄褐色土(10YR5/8) ローム主体、黒色土小塊を少量含。(カマド袖構築材)
28. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石・ローム粒を少量含。
29. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石・焼土粒を少量含。
30. にぶい橙色土(7.5YR7/4) ローム粒・塊を少量含。

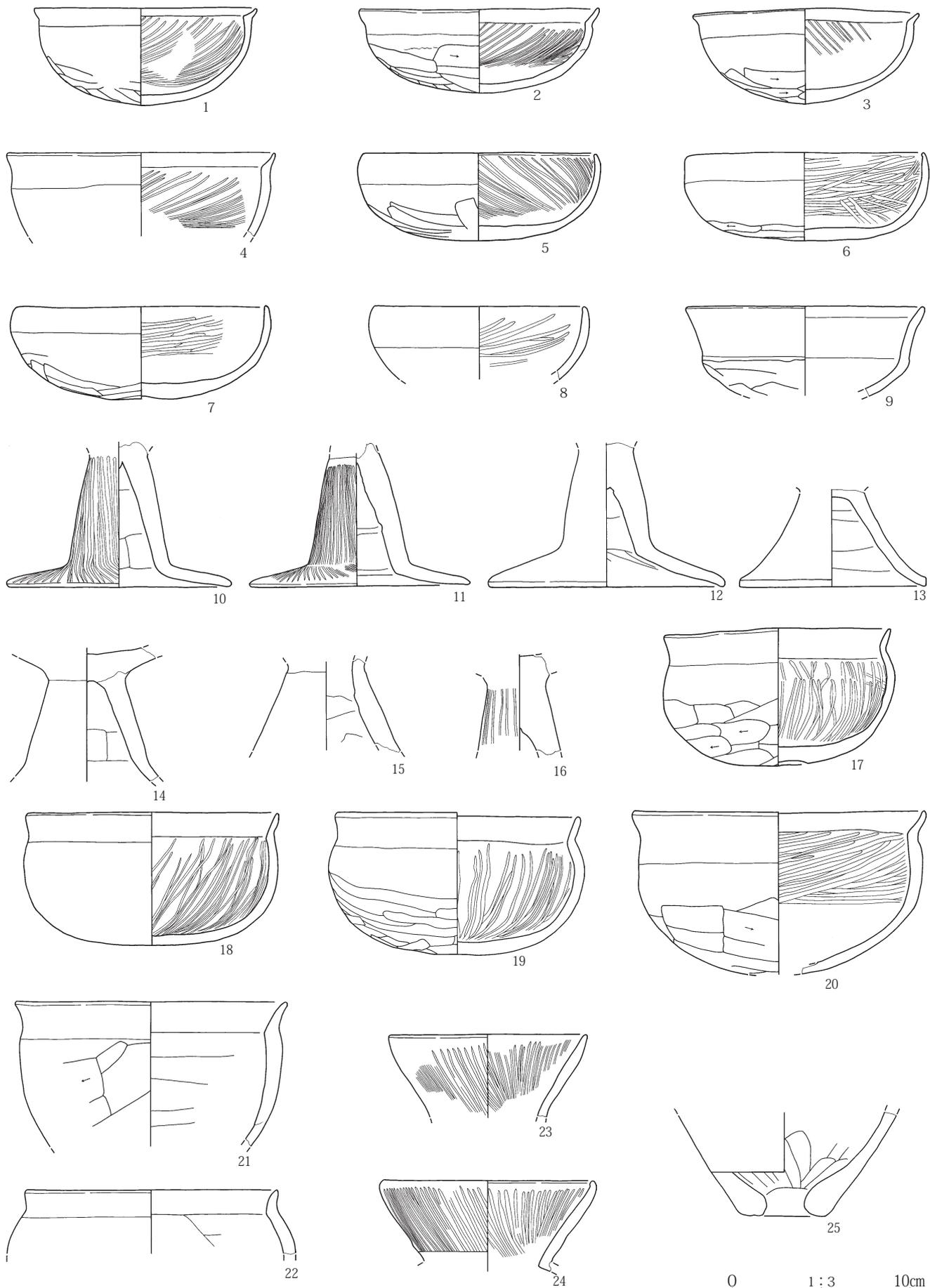
第184図 40号竪穴建物カマド図・土層断面図

0 1:30 1m

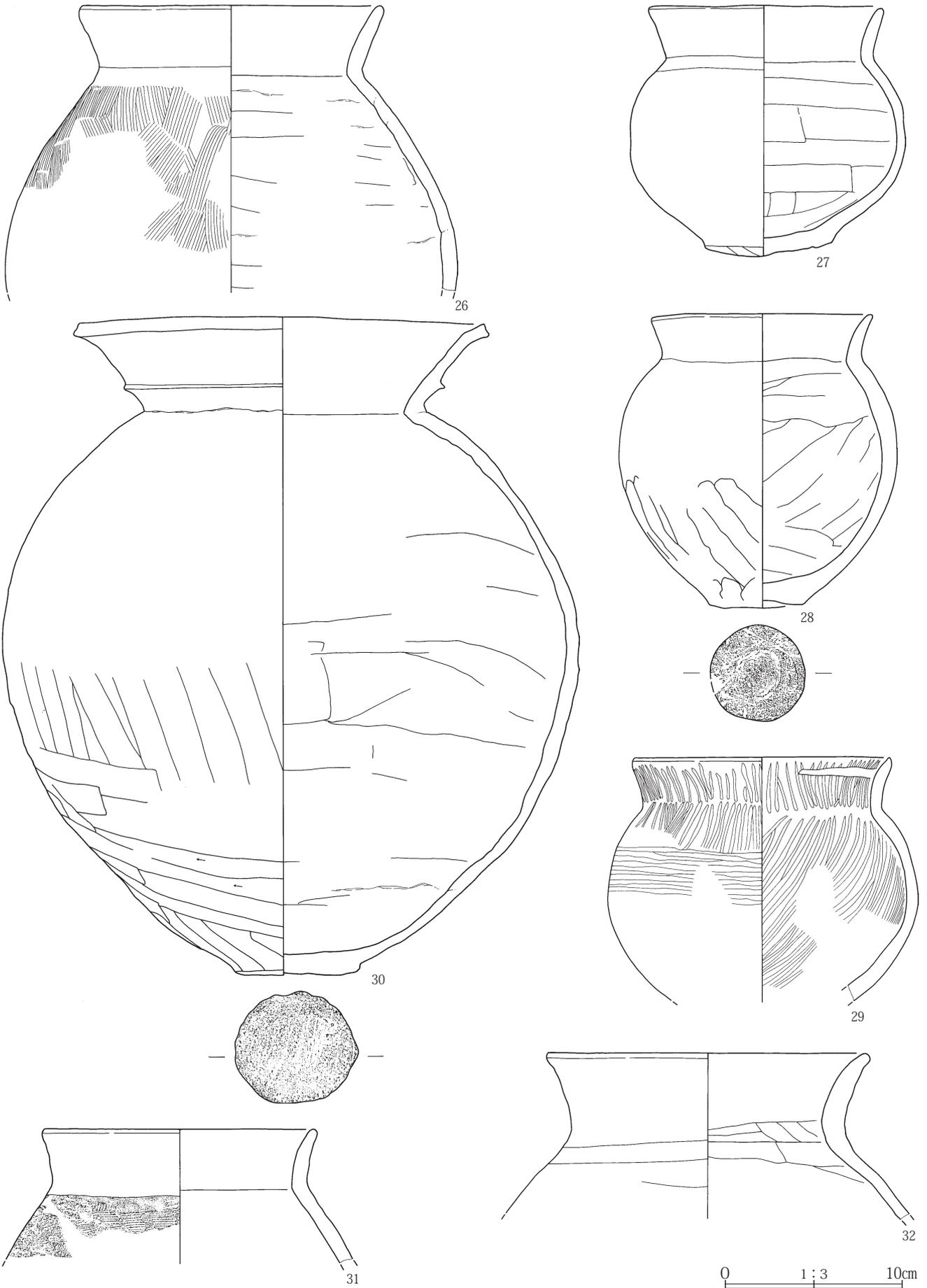




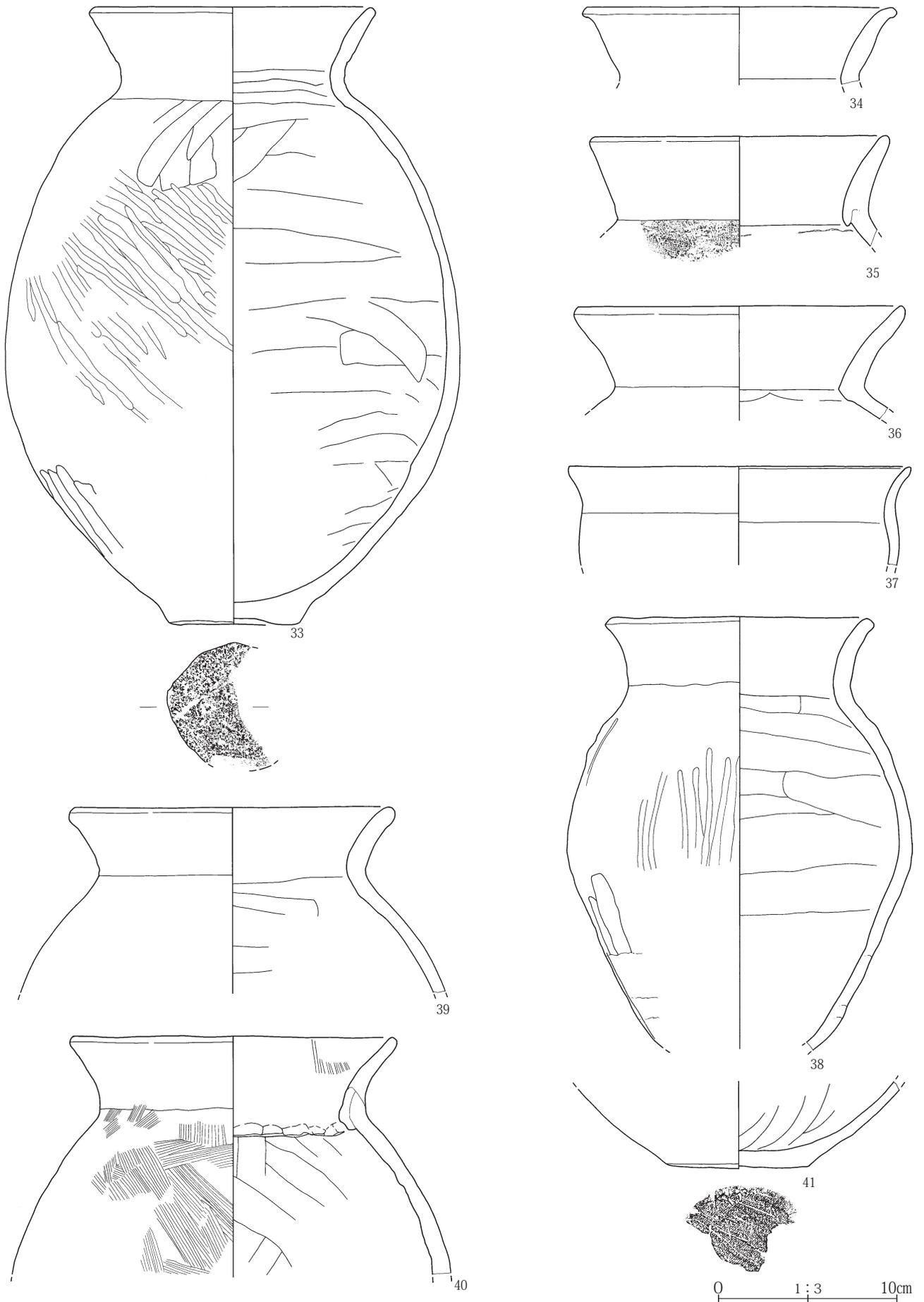
第186図 40号竪穴建物周辺溝図1・土層断面図



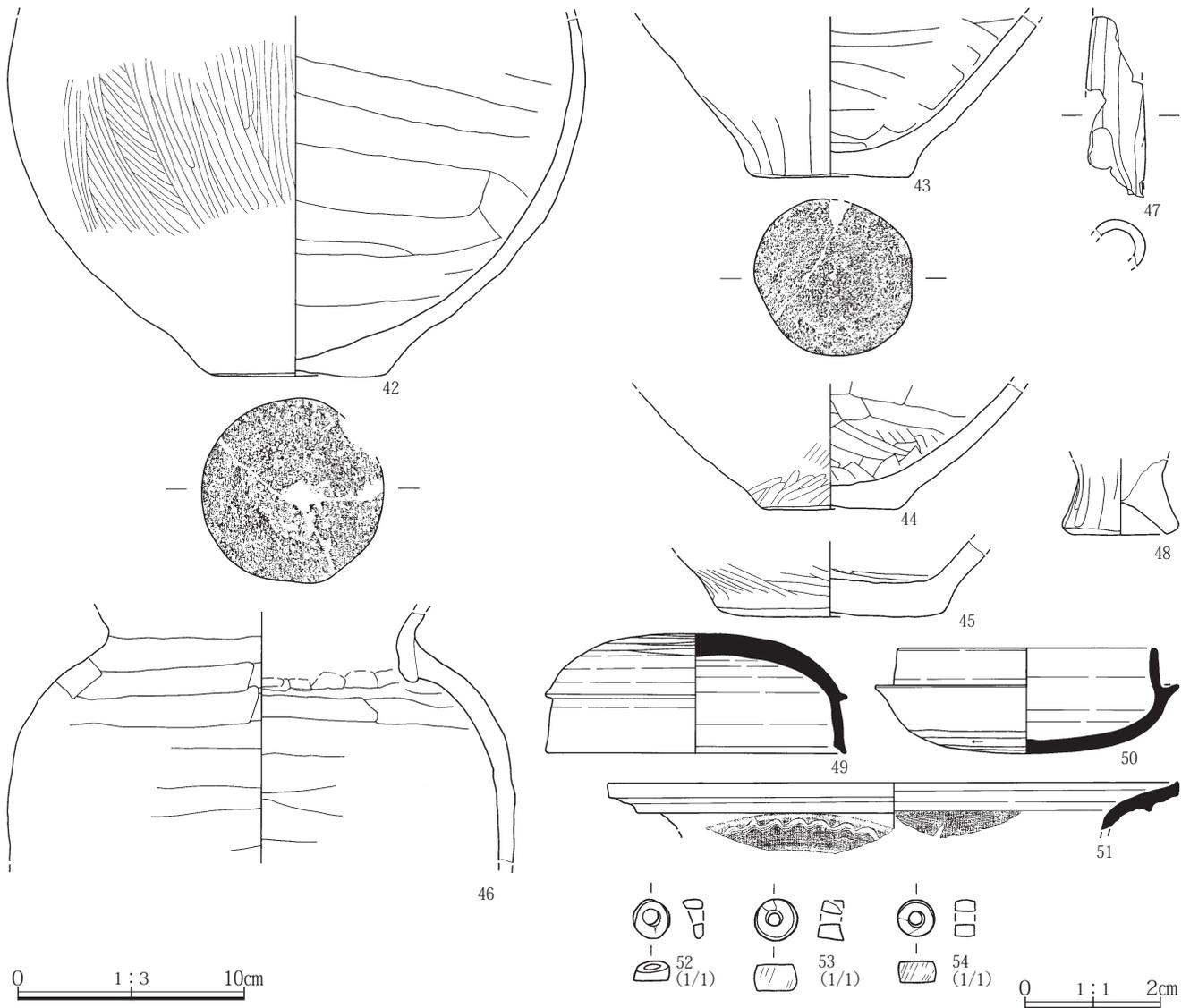
第188図 40号竪穴建物出土遺物図 1



第189図 40号竖穴建物出土遺物図2



第190図 40号竪穴建物出土遺物図3



第191図 40号竪穴建物出土遺物図4

(5) 32号竪穴建物(第192~202図 PL.81・82・297~299)

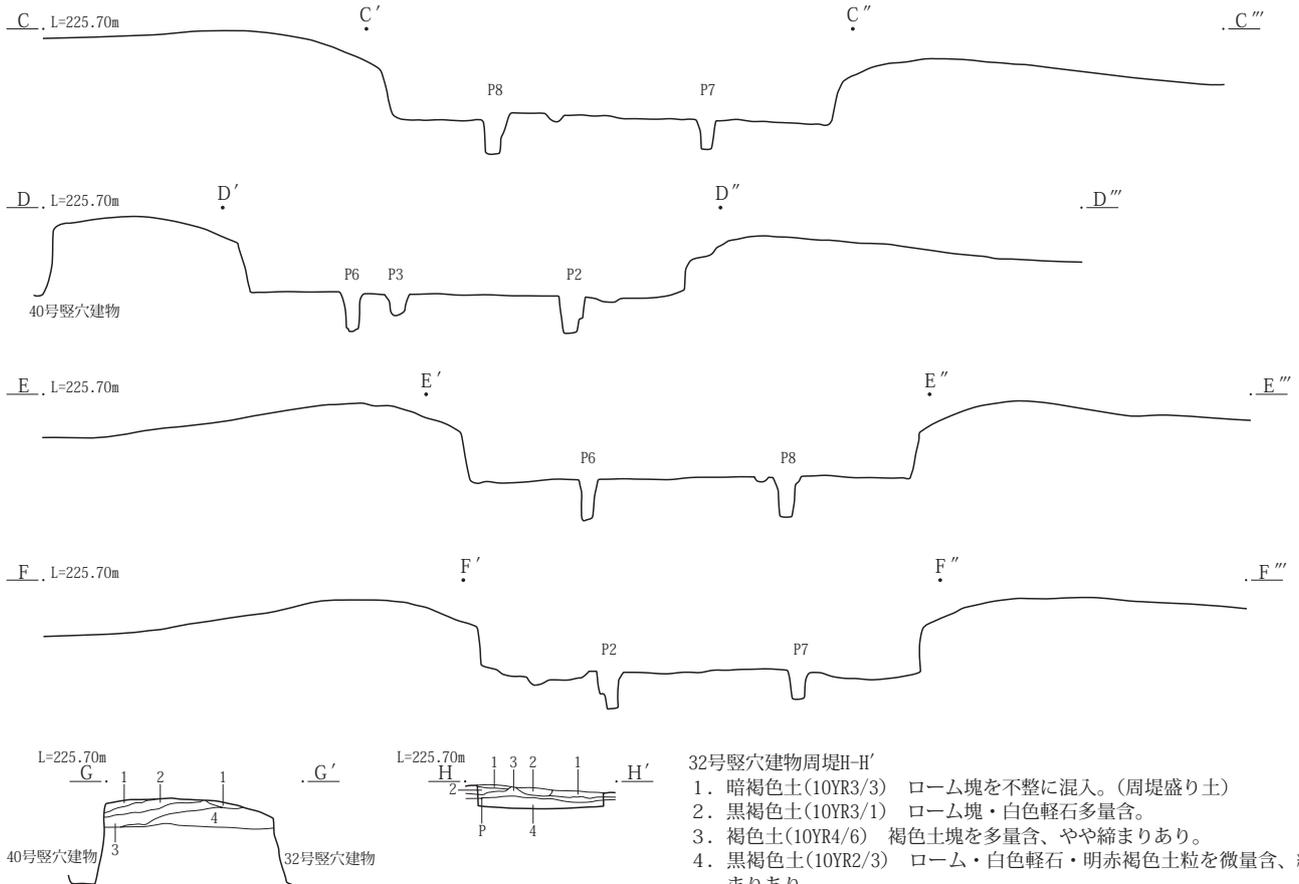
位置 調査区中央部やや北側、40号竪穴建物のすぐ北東にある。**重複** 南西部の40号竪穴建物の周堤を切って構築しており、40号竪穴建物より新しいものである。**遺存状況** 完存している。**埋土状況** 廃棄後、三角堆積で埋まりはじめてからあまり時を経ずにHr-FAが降下したものと考える。というのは、建物の床面より、4~15cmほどでS₁が降下しているからである。时期的にはHr-FA降下時期に近いものである。**規模** 東西6.3m、南北6.1m、壁高67~74cm、床面積36.61㎡、主軸方位はN-76°-Eである。**掘方** 壁周溝沿いに小型の刃先を北に向けて後進して時計回りに細かく掘削している。**床面小溝** やや大型の刃先が壁際に向いていて、壁際で掘削を開始し、後ろに移動して掘削していると考えて良いもの(YK 3・4・7・9)と、柱間から、壁際に向かっ

て後進して掘削するもの(YK 1・5・6・10・11)の2者がある。他にも大小の刃先が東西・南北・斜め方向に連続した掘削の痕跡があり、複数の刃先で、この建物の掘削を行ったことが分かる。カマド・貯蔵穴付近は幅広く掘削していることが分かる。湿気対策であろう。**周堤** 四周を巡るもので、南西部の40号竪穴建物の周堤を切って構築している。周堤の痕跡が、幅3.5~5m、高さ20~40cmで四周を巡っている。**集石** 周堤南東部隅下から、長径238cm、短径122cm、深さ18cmの穴に4~26cm大の石を50個程埋めている12号集石が検出された。弥生時代の石鍬を伴う。周堤北西部隅下から、長径198cm、短径112cm、深さ6cmの穴に6~54cm大の石を15個程埋めている16号集石が検出された。土師器甕片が出土している。いずれも32号竪穴建物掘削の際に出土した礫を埋めたものであろう。**壁際溝** 幅18~24cm、深さ1~

32号竪穴建物

1. FP下黒(黒褐色土10YR3/1)。
- 1'. 黒褐色土(10YR3/1)とS₉の混じり。
2. FA(S₉)
3. FA(S₉)・FP下黒(黒褐色土10YR3/1)混土。
4. FA(S₉)・S₇(にぶい橙色土5YR6/4)混土。
5. FA(S₇)にぶい橙色土(5YR6/4)。
6. FA(S₉)・S₇の混土。
7. FA(S₇)
8. FA(S₉)上部
9. FA(S₉)下部
10. FA(S₁) FA下黒(黒褐色土10YR3/2)混土。
11. FA(S₁)
12. FA下黒、黒褐色土(10YR3/2)。
13. FA(S₁)・S₇の混合。
14. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を少量含。
15. 灰黄褐色土(10YR5/2) ロームを多量、焼土・炭化物を微量含。

16. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・炭化物を多量含。
17. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・ブロックを多量含。
18. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム粒を多量、焼土・炭化物を微量含。
19. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒微量含。
20. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・ブロックを微量含。
21. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・焼土・炭化物を少量含。
22. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量含。
23. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を微量含。
24. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム・焼土・炭化物を少量含。
25. 黒褐色土(10YR3/2) S₁ブロックを少量、ロームを微量含。
26. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土・ロームを多量含。
27. 灰黄褐色土(10YR5/2) 黒褐色土・ロームを少量含。
28. 黒褐色土(2.5Y3/1) ローム粒・白色軽石を微量含、一部鉄分の沈着と思われる黄褐色の変色が見られる。
29. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・白色軽石を微量含。
30. 暗褐色土(10YR3/3) ローム漸移層。
31. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒を微量含。



32号竪穴建物周堤G-G'

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土・ロームを多量含。
2. 黒褐色土(2.5Y3/1) ローム・白色軽石を微量含。
3. 灰黄褐色土(10YR5/2) ロームを多量含。
4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム・白色軽石を微量含。

32号竪穴建物周堤H-H'

1. 暗褐色土(10YR3/3) ローム塊を不整に混入。(周堤盛り土)
2. 黒褐色土(10YR3/1) ローム塊・白色軽石多量含。
3. 褐色土(10YR4/6) 褐色土塊を多量含、やや締まりあり。
4. 黒褐色土(10YR2/3) ローム・白色軽石・明赤褐色土粒を微量含、締まりあり。

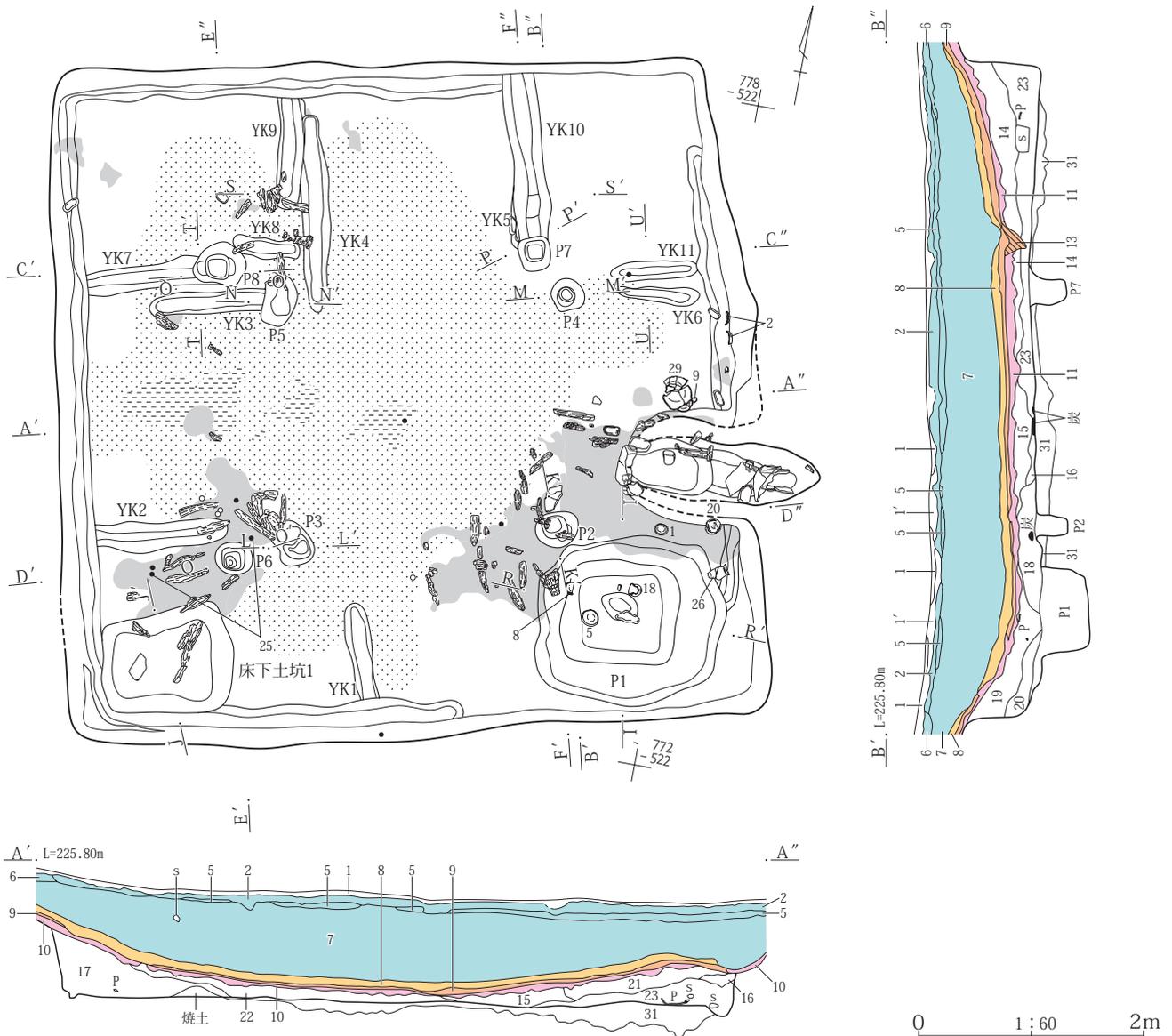
第193図 32号竪穴建物全体断面他図

7cmで四周を巡るが、北東・南東隅は途切れる。柱 穴 新古関係があり、P 2～P 4が古く、P 2は再利用して、それ以外は、少し場所を西にずらして新しくP 6～P 8を掘削した。最初の3基のピットは、長径31～45cm、短径29～33cm、深さ29～32cmである。次に掘削した4本は、長径30～48cm、短径28～40cm、深さ39～55cmである。新しい柱穴のほうが大きく深い。入 口 南と推定する。硬化面 中央部及び西側にかけてある。カマ

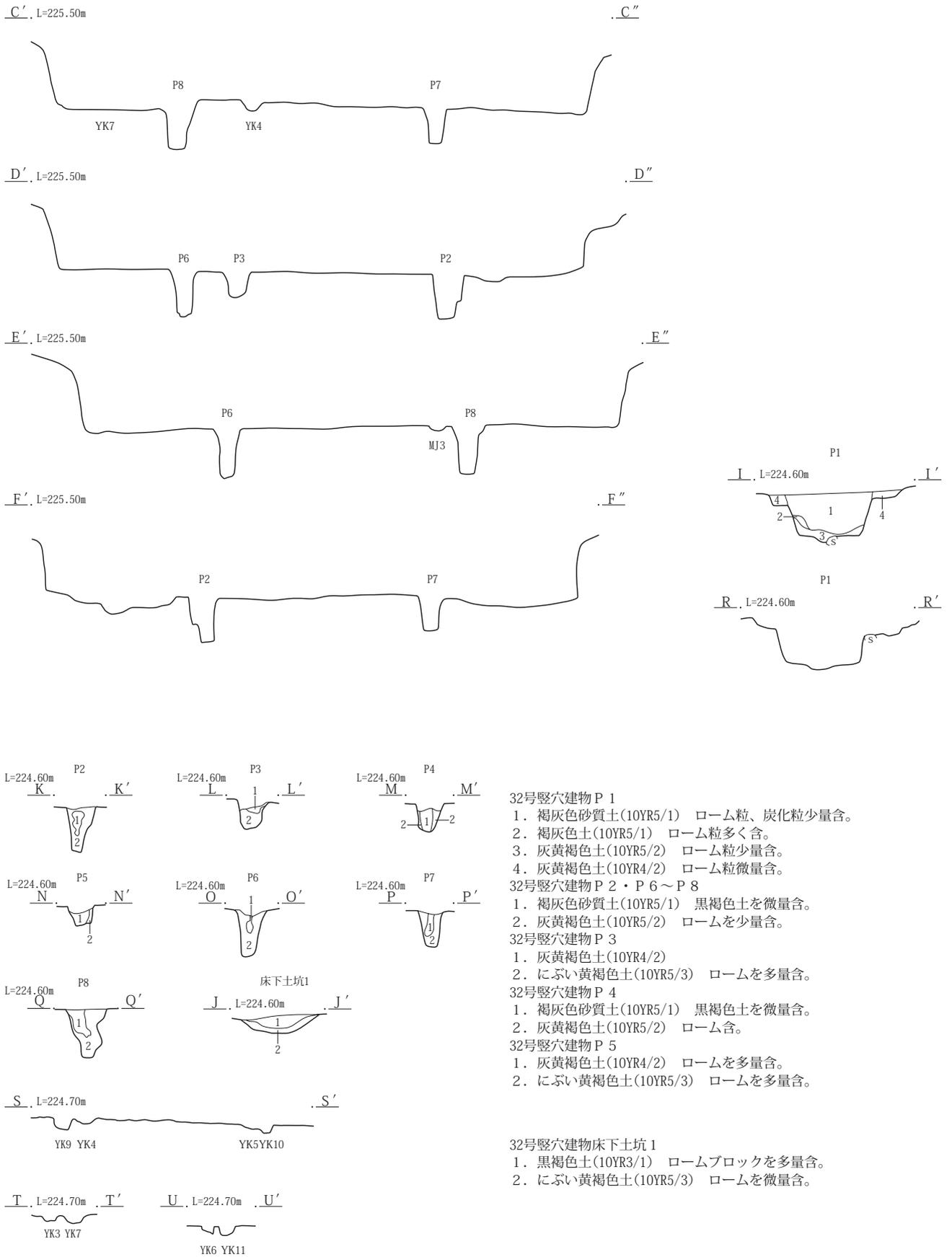
ド 破壊が激しく、袖部は不明瞭であるが、焚口～煙道まで180cm、焚口幅50cmである。煙道の両側には薄い石材が立てかけられている。カマドには甕がかけられている。貯蔵穴(P 1) 長径169cm、短径155cm、深さ10cmの落とし蓋安置の隅丸長形状の段差の中央に、一辺95、深さ59cmの方形状の貯蔵穴がある。床面小溝 北西の柱穴P 5から2条、及び新しい柱穴P 8を起点に東西方向に西壁に向かって1条、P 8付近から、南北方向で、北壁

に向かって2条延びている。さらに、北東の新しい柱穴P7から南北方向北壁に向かって2条、P4から東西方向、東壁に向かって2条、南西の新しい柱穴P6を起点に東西方向東壁に向かい1条、P3の近くから南北方向南壁に向かって1条の床面小溝計11が検出された。柱を建て替えた後に、間仕切り溝も再度造り直したものと推定する。**炭化材** カマド周辺及び南側を中心に出土した。炭化材の残りが悪く樹種同定は行わなかったので樹種の検討はできなかった。**出土遺物**(第198~202図 PL.297~299) 杯A I~III類と杯C II類が中心で、杯B Iが少量ある。高杯は、短脚化したE類が多く出ている。小型甕は、A~C類と多く出土する。A I ①(第201図21・23 PL.297)、B I ②(第200図19 PL.297)、C II ①(第201図22 PL.297)、C III ①(第200図18・第201図20 PL.297)

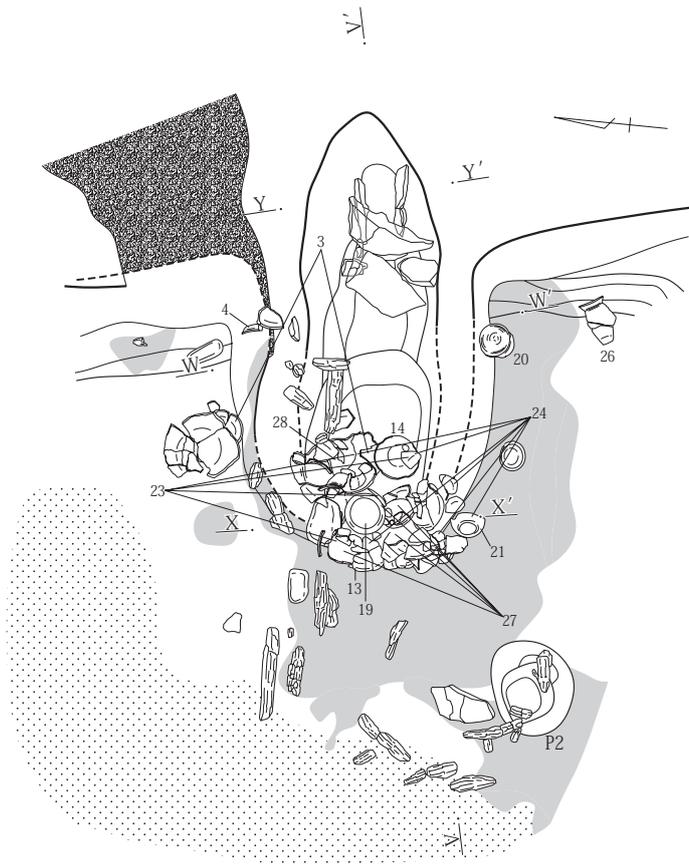
と多様な小型甕が出土している。甕は、B・D類が出土しており、特にD類の長胴甕(第201図24、第202図28 PL.298)が出土しているのが特徴である。壺もB類(第201図25 PL.298)が出土している。須恵器壺、甕、甕破片などが出土した。土師器杯で、方形の穿孔がある破片(第202図30)が出土しており、興味深い。他に使い込まれた砂岩製の砥石片、蛇紋岩製の管玉1点、滑石製白玉4点が出土した。**年代** 周堤の重複から40号竪穴建物より新しく、床面近くまでS₁が降下していることから、廃棄後あまり期間を経ずにHr-FAが降下したものである。土器の様相を見ても、杯Aと杯C類が中心で、高杯が短脚化したE類が多く出土し、甕も長胴化したD類が多いので5世紀後半でも末に近いものと想定する。



第194図 32号竪穴建物遺物出土状況図・土層断面図

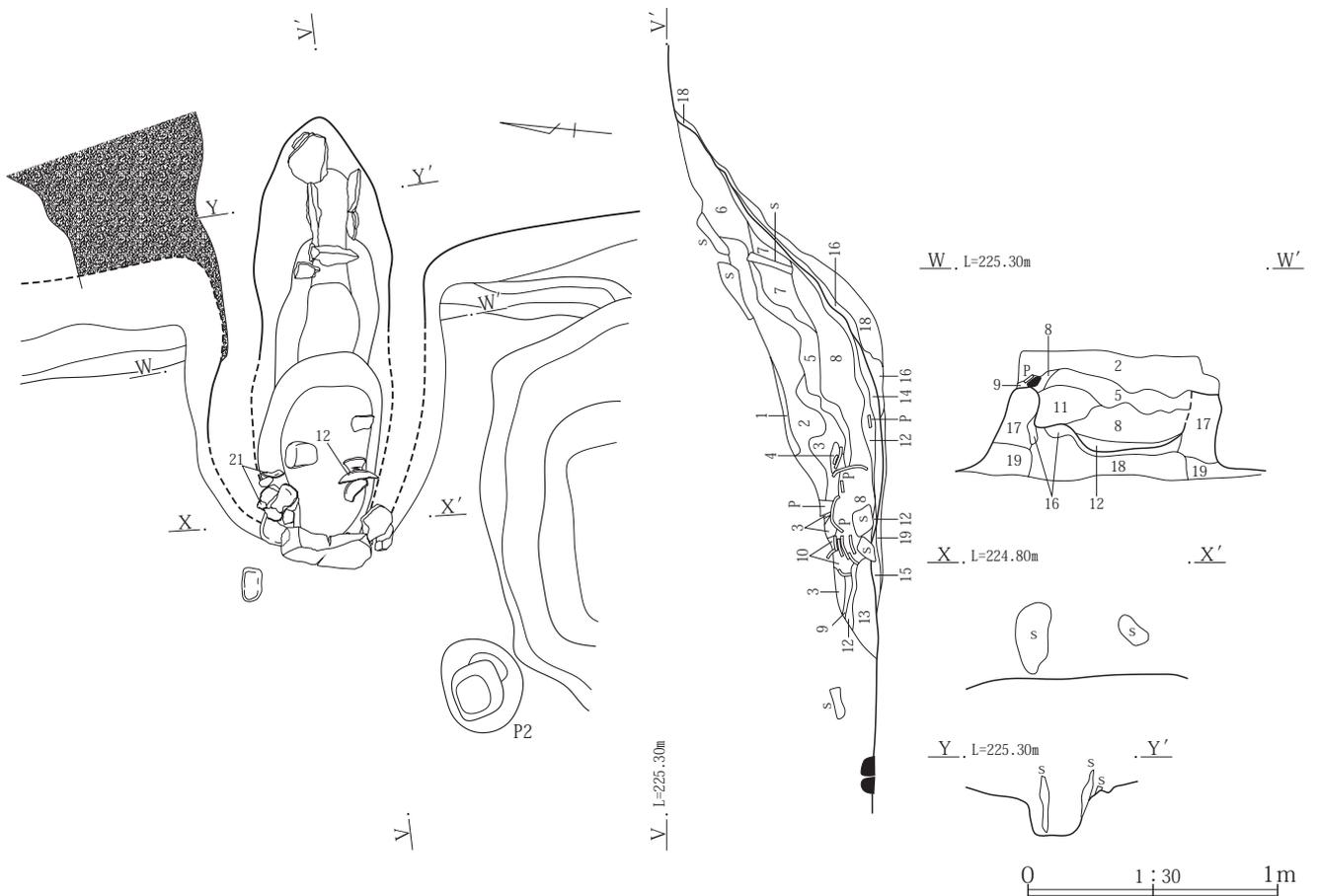


第195図 32号竪穴建物断面他図

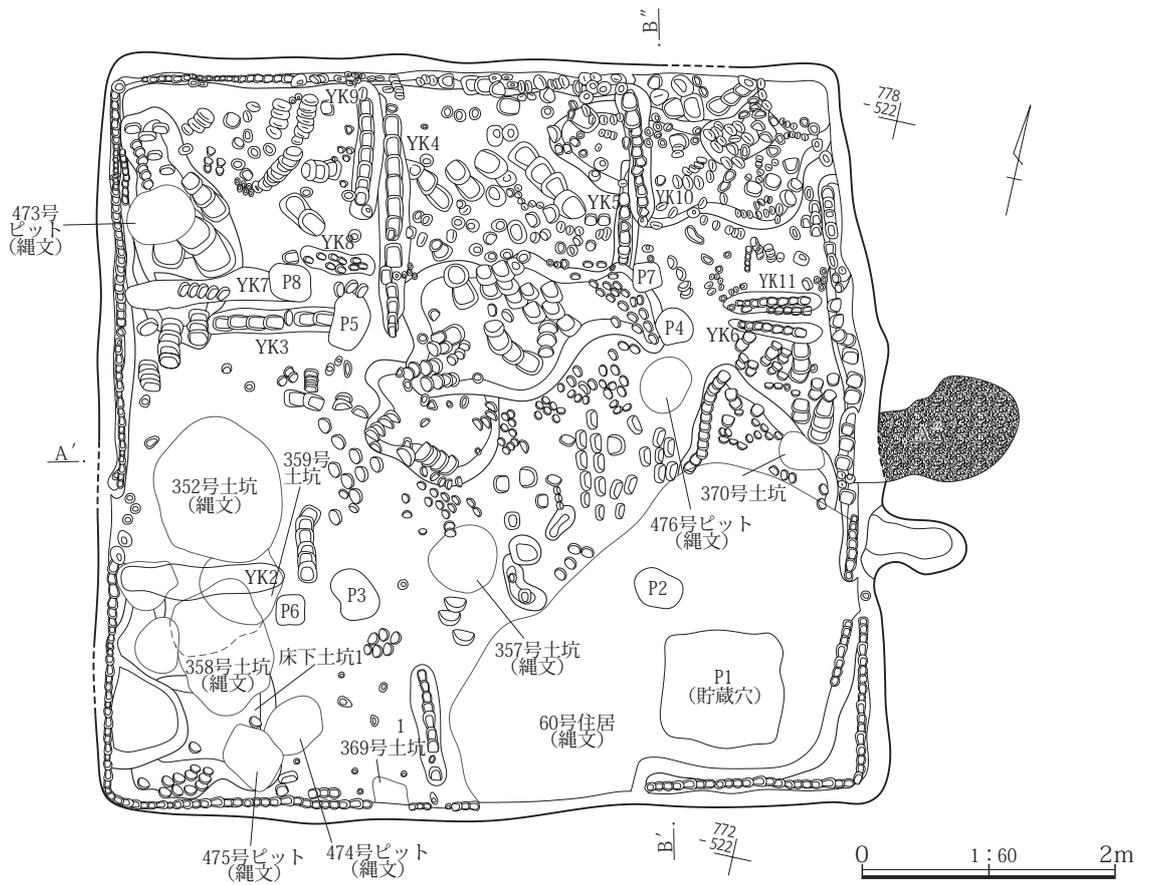


32号竪穴建物カマド

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土・ローム粒を微量含。
2. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土・炭化物を微量含。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土・炭化物を少量含。
4. にぶい黄褐色土(10YR6/4) 土器片を含。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土・ローム粒を微量含。
6. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 焼土を多量に含。
7. 褐色土(10YR4/4) 焼土を微量含。
8. 明赤褐色土(2.5YR5/8) 焼土・にぶい黄褐色土を少量、炭化物を微量含。
9. 浅黄褐色土(7.5YR8/6) 焼土含。
10. 橙色焼土(7.5YR6/6)
11. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土・ローム粒を微量含。
12. 褐灰色土(10YR5/1) 灰含。
13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒を少量含。
14. 明赤褐色焼土(2.5YR5/8) 炭化物を微量含。
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土を微量含。
16. 褐灰色土(10YR4/1) 灰・焼土を多量含。
17. にぶい黄褐色土(10YR5/3) 焼土・炭化物を微量含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) 焼土を少量、ローム粒を微量含。
19. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土・炭化物を少量、ローム粒を微量含。

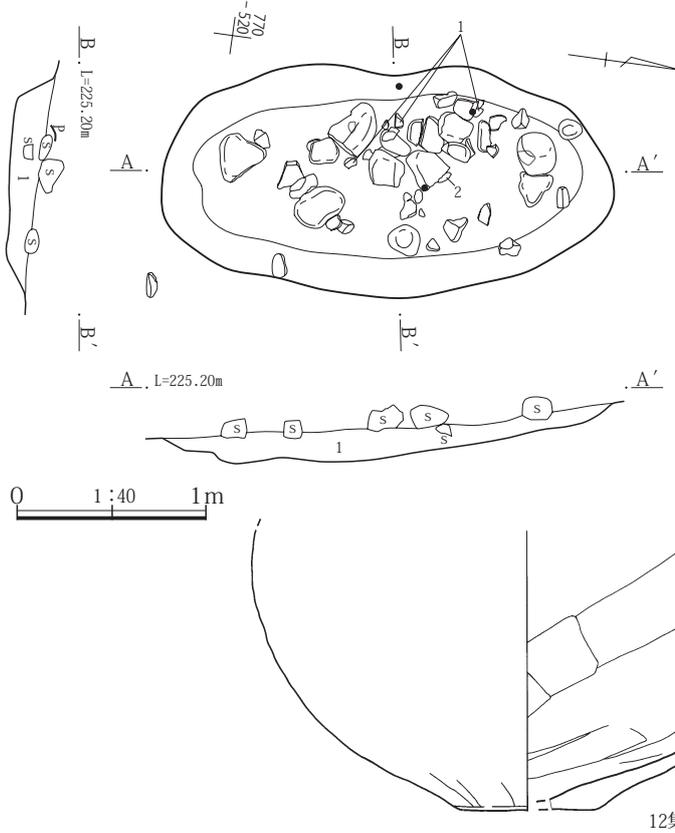


第196図 32号竪穴建物カマド図・土層断面図



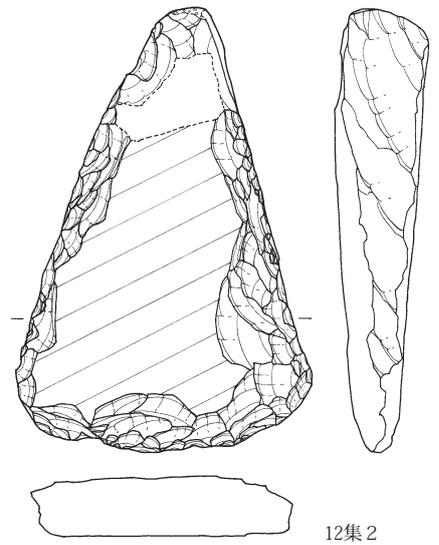
第197図 32号竪穴建物掘方図

12号集石



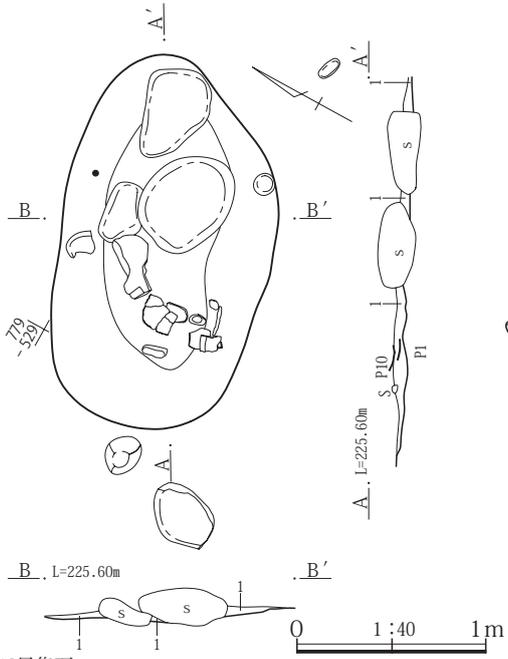
12号集石

1. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を微量含。



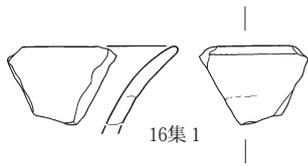
第198図 32号竪穴建物集石図・集石出土遺物図1

16号集石

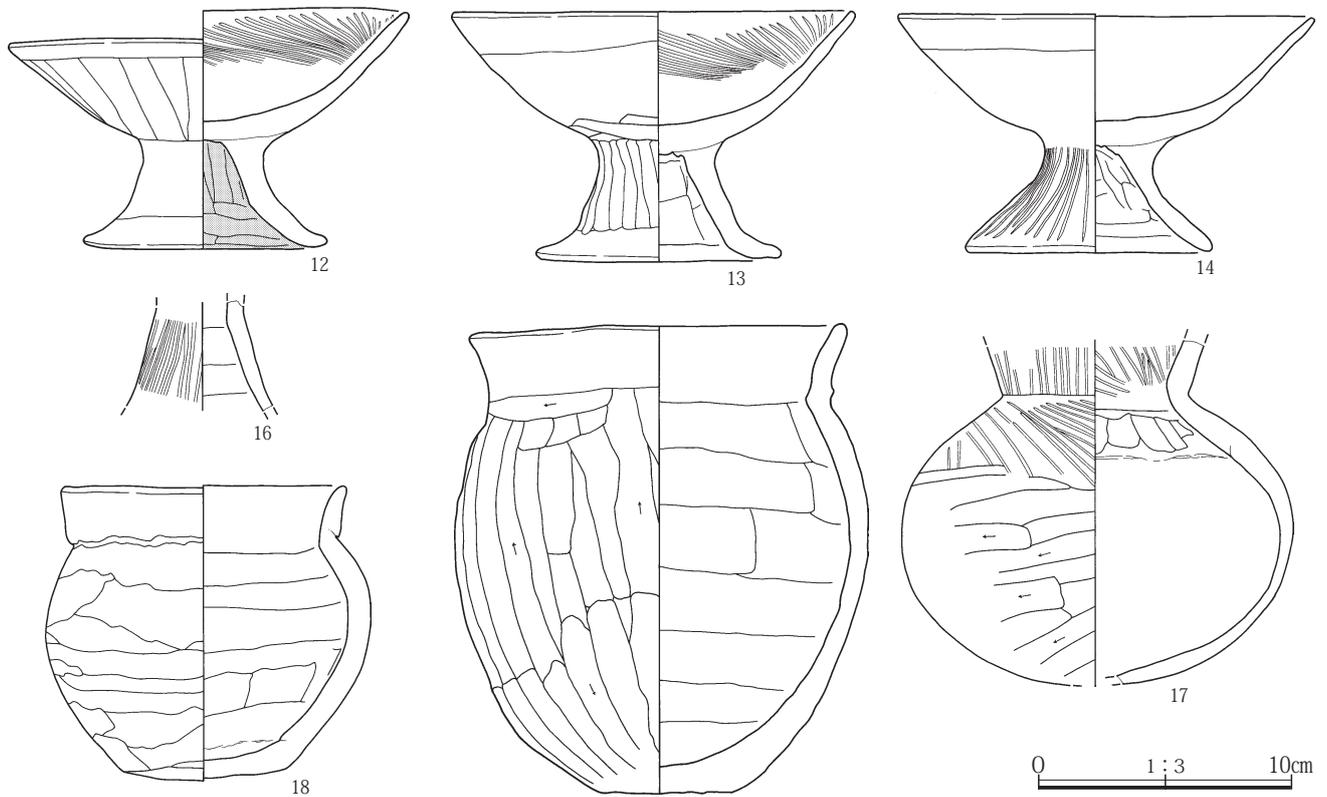


16号集石

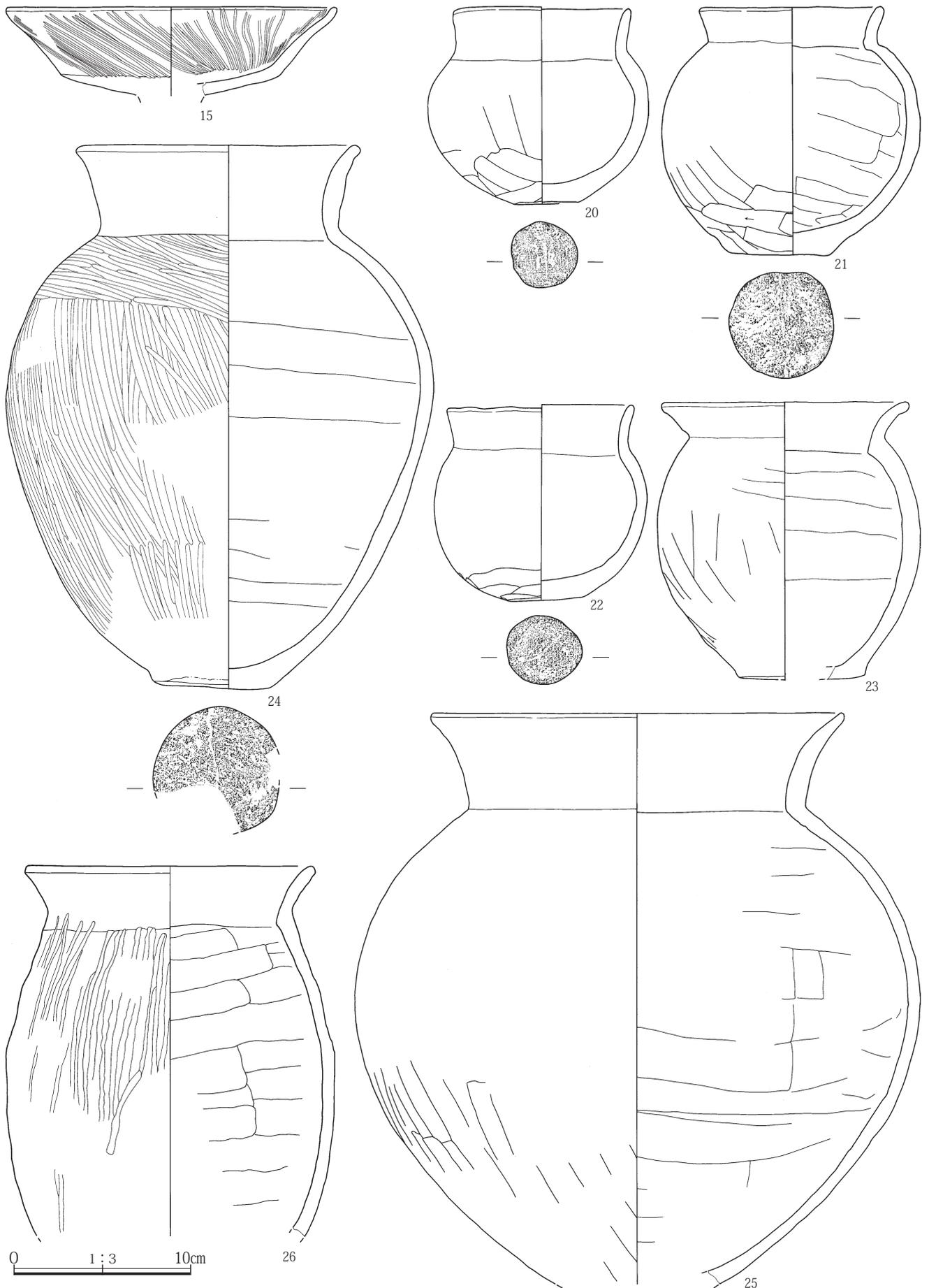
1. 黒褐色土(10YR2/3) ローム、白色軽石微量含、細粒均質。



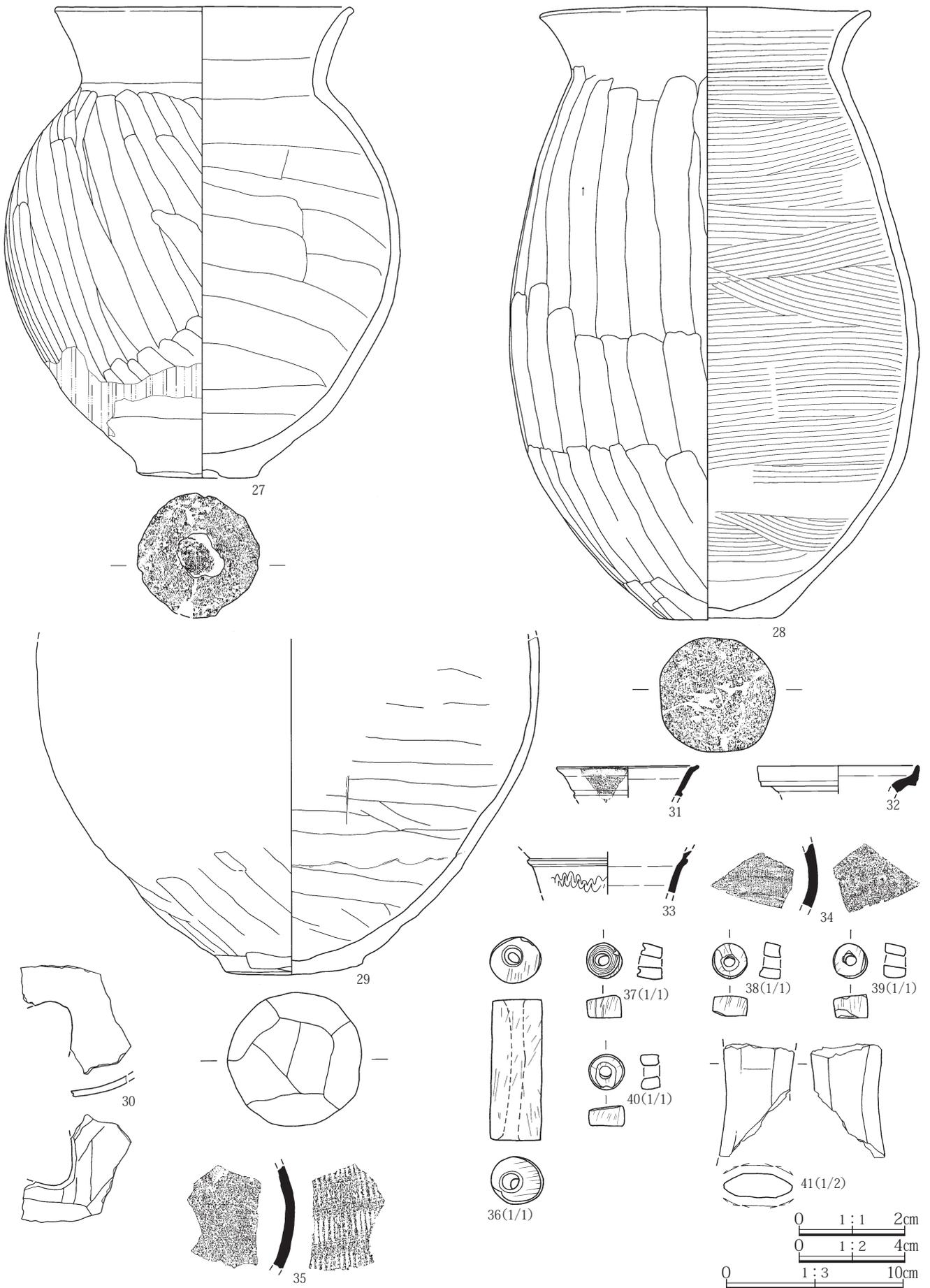
第199図 32号竪穴建物集石図・集石出土遺物図2



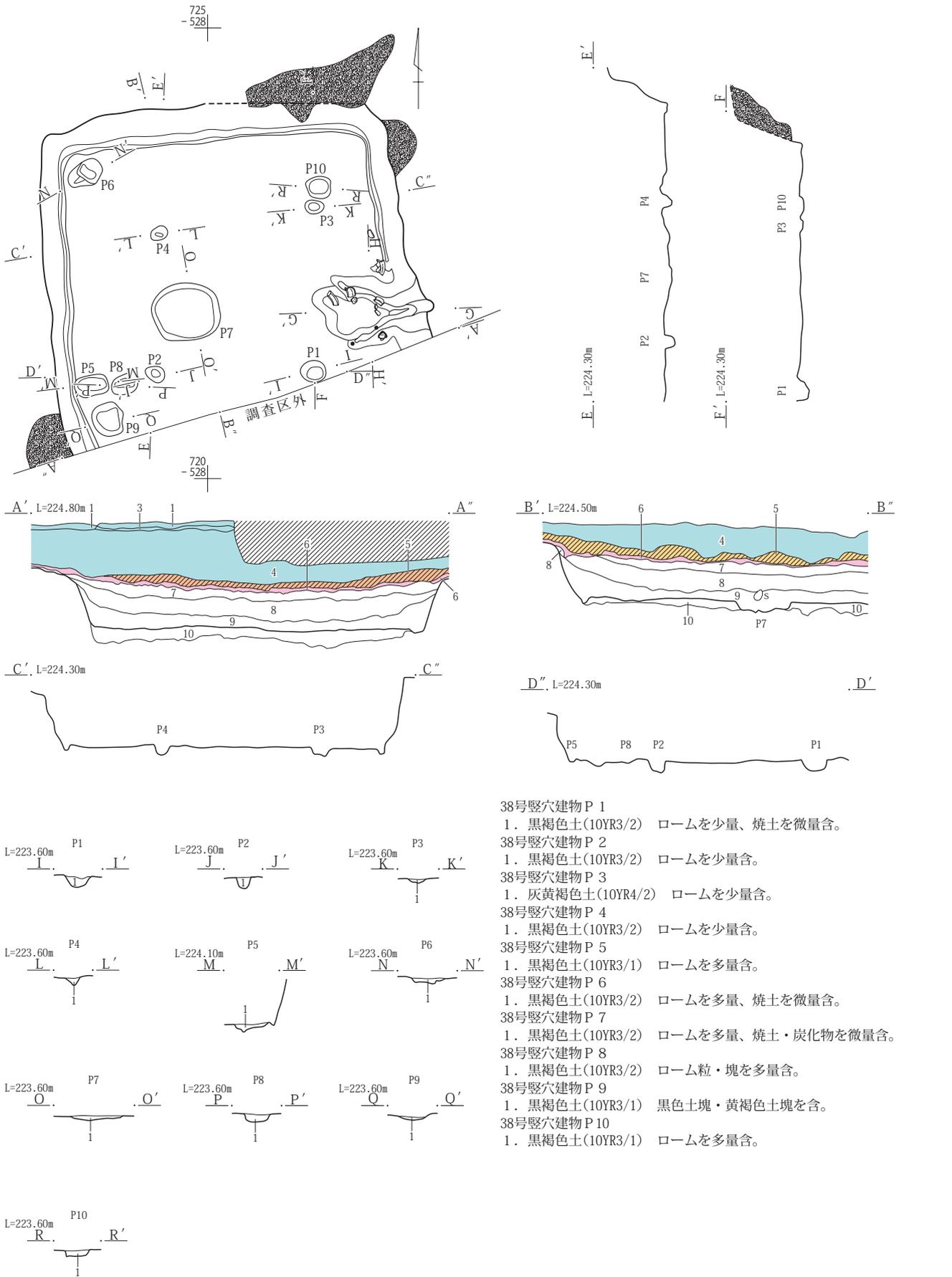
第200図 32号竪穴建物出土遺物図1



第201図 32号竖穴建物出土遺物図2



第202図 32号竪穴建物出土遺物図3



38号竪穴建物 P 1

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを少量、焼土を微量含。

38号竪穴建物 P 2

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを少量含。

38号竪穴建物 P 3

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームを少量含。

38号竪穴建物 P 4

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを少量含。

38号竪穴建物 P 5

1. 黒褐色土(10YR3/1) ロームを多量含。

38号竪穴建物 P 6

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを多量、焼土を微量含。

38号竪穴建物 P 7

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロームを多量、焼土・炭化物を微量含。

38号竪穴建物 P 8

1. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊を多量含。

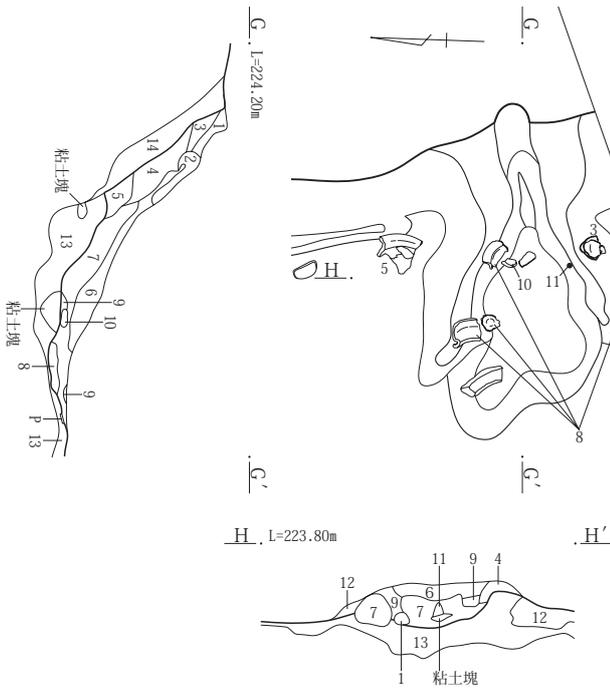
38号竪穴建物 P 9

1. 黒褐色土(10YR3/1) 黒色土塊・黄褐色土塊を含。

38号竪穴建物 P 10

1. 黒褐色土(10YR3/1) ロームを多量含。

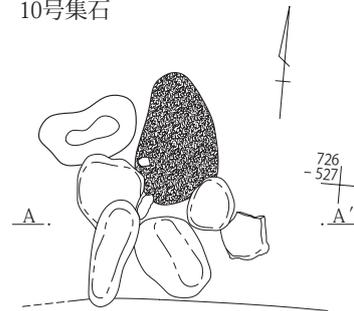
第204図 38号竪穴建物平面図・土層断面図



38号竖穴建物カマド

1. 焼土主体。
2. 黒色土と焼土粒の混合土。
3. 黒褐色土(10YR3/2) 赤褐色焼土粒を含。
4. 暗褐色土(10YR3/4) 焼土塊を少量含、締まりない。
5. 焼土粒、焼土塊を多量に混在する。
6. 黒色土(10YR2/1) 黒色土主体で焼土粒を僅かに含。
7. 焼土粒、塊、灰塊が混在する。
8. 灰白色土塊、焼土粒の混合土、粘質性を帯びる。
9. 焼土塊主体。
10. 褐灰色灰塊。
11. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・焼土粒を少量含、粘質土。
12. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒・塊主体、焼土粒を少量含。(カマド袖部)
13. 黒褐色土(10YR3/1) 焼土粒・ローム粒を少量含、粘質性を帯び、締まりない。
14. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・焼土粒極少量含。

10号集石



38号竖穴建物周堤

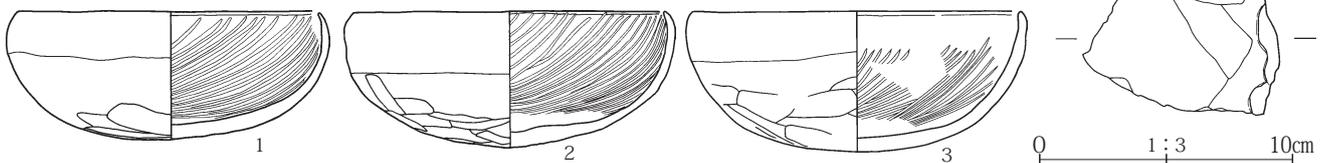


10号集石SPA-A'

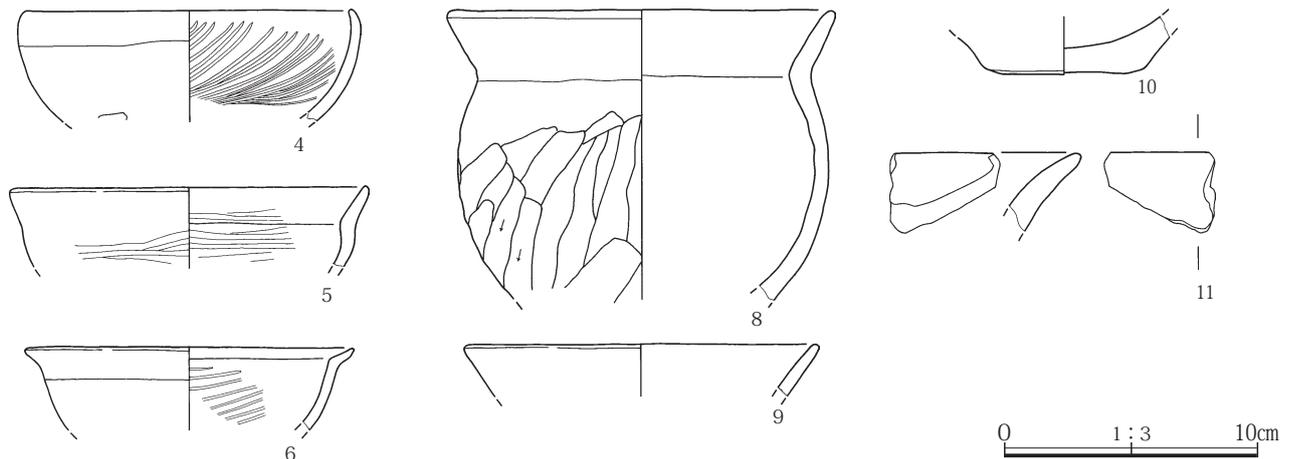
1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒ローム、S₁小塊を含、やや締まりあり。

第205図 38号竖穴建物掘方図・カマド図

第206図 38号竖穴建物集石図・集石出土遺物図



第207図 38号竖穴建物出土遺物図 1



第208図 38号竪穴建物出土遺物図2

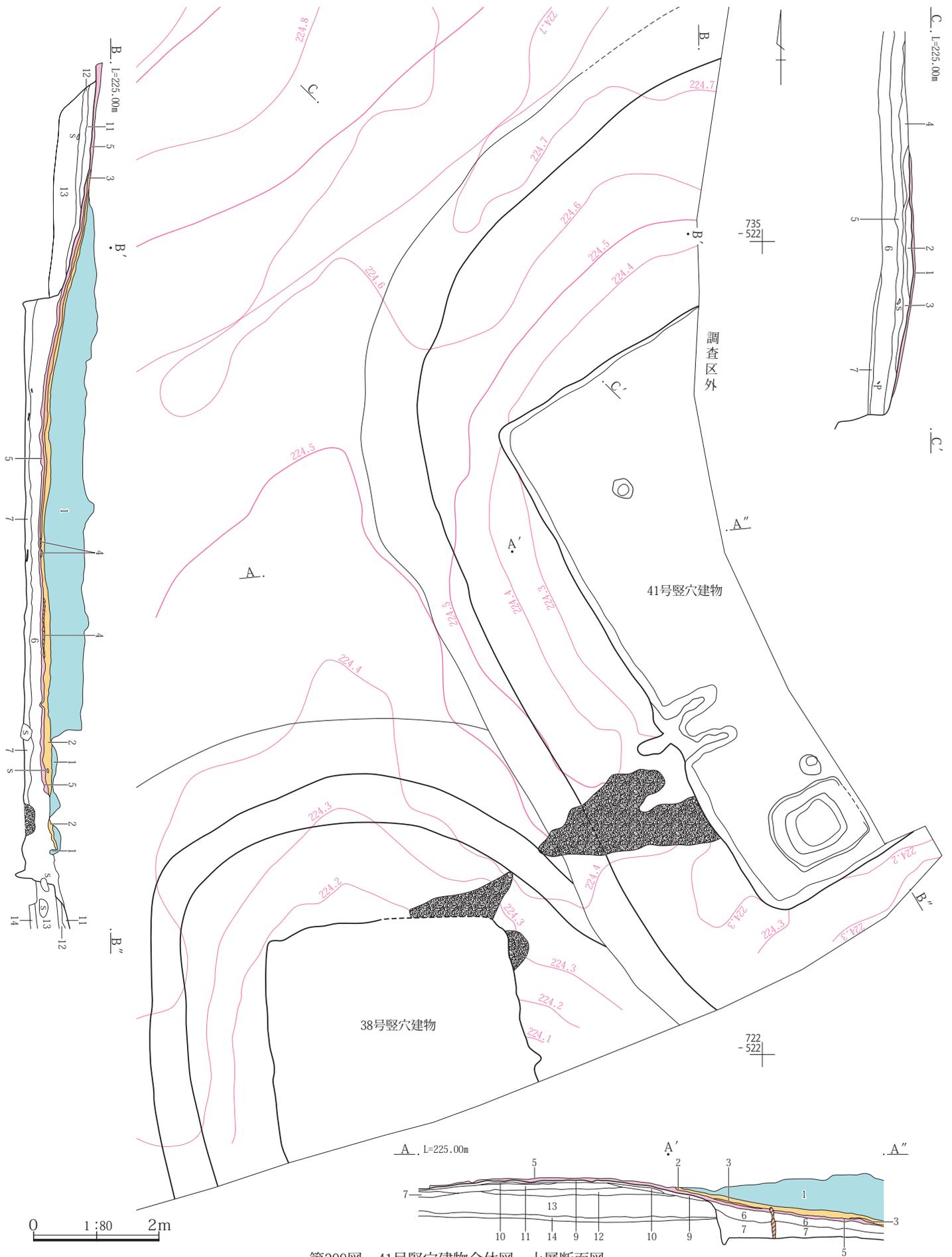
(6) 38号竪穴建物(第203～208図 PL.83・299)

位置 調査区南東部端の41号竪穴建物の西側にある。
重複 南東部が41号竪穴建物の周堤に切られている。
遺存状況 南側が調査区外で、全体の3/4程を調査した。
埋土状況 廃棄後、土が堆積してまだ少し窪みがある段階で、Hr-FAが降下している。
掘方 全体に下げている。
規模 東西長4.12m、現存南北長3.30m+、壁高58～77cm、床面積は12.98㎡、主軸方位はN-85°-Eである。柱穴数は4本である。**周堤** 周堤は、幅2.1m、高さ10cmほどである。**壁際溝** 幅9～14cm、深さ4～5cmでめぐっている。**集石** 北東隅周堤上に、長径102cm、短径86cmの範囲に22～58cmほどの石を5個程置いている10号集石がある。土師器内湾杯1点が出土している。
柱穴 P1～P4の4本で、長径20～28cm、短径15～25cm、深さ6～14cmである。浅いのが特徴。**カマド** 東向きで、焚口～煙道長133cm、焚口幅86cmである。カマドは崩されているが、石は確認できないので、石を利用しての構築は無いものと考えられる。**貯蔵穴** 調査区外にあると思われる。**ピット** 床面に6基の土坑状のピットがあるが、用途不明。**出土遺物**(第206～208図 PL.299) 杯B I・II類及び杯A II、杯D IV(第208図2)の構成で、特に杯B類が中心となる。小型甕C類、不明蓋形品などが出土している。**年代** 周堤の重複の状況から41号竪穴建物よりは古く、杯Bを中心として杯Aとの組成で、杯をC含まないことなどから、5世紀後半でも中頃に近い方である。

(7) 41号竪穴建物(第209～213図 PL.84・85・299・300)

位置 調査区南東に位置する建物で、38号竪穴建物の北東にある。**遺存状況** 西側1/4程が調査できた。周堤

が西～北にかけて痕跡がある。**埋土状況** 廃棄後、土があまり堆積しない中で、Hr-FAが降下している。**規模** 南北長9.04m、東西長3.82m+、壁高72～73cmで、主軸方位はN-61°-Eである。**掘方** カマド周辺と北辺、南辺の貯蔵穴を中心に掘削している。カマドの掘方では、特にカマド燃焼部付近をU字形鍬鋤先で刃先を北にして、後ろ方向南に進みながら掘削した痕跡が明瞭に残っている。カマド焚口周辺を特に湿気対策で掘削したものと思われる。**周堤** 周堤痕跡は、幅2.0～3.4m、高さ20～40cmで西・北側を巡っている。**壁際溝** 幅11～28cm、深さ7～14cmで西～北に巡っている。**柱穴** 長径28～38cm、短径25～30cm、深さ36～49cmの西辺の3基の柱穴P2～P4が検出された。本来は8本の柱穴を持つ建物と想定する。**硬化面** 貯蔵穴の前の床面が硬化している。**カマド** この遺跡では珍しい西向きで、焚口～煙道まで184cm、焚口幅96cmで、煙道付近及び袖の先端端部に石を内部に置いてあり、周りに粘土を被せている。**貯蔵穴** 南西隅に、長径1.4m、短径1.2m、深さ15～20cmの隅丸長方形の落し蓋を設置する段差の下中央に隅丸長方形の長径93cm、短径59cm、深さ30cmの貯蔵穴を設ける。**床面小溝** 西辺の柱穴P3・P4の柱間中央部から東西方向に西壁に向かい1条、P3を起点に東西方向、西壁に向かい1条の溝が出ている。**ピット** 他に、ピットがP3の周辺から2つ、北壁よりに2つの計4基のピットが検出された。用途は不明である。**炭化材** 建物北部やカマド周辺から出土している。コナラが中心でクリが一部入っている。**出土遺物**(第212・213図 PL.299・300) カマド周辺を中心に出土しており、杯B Iが中心である。異形杯としての杯D IIIがまとまって出



第209図 41号竖穴建物全体図・土層断面図

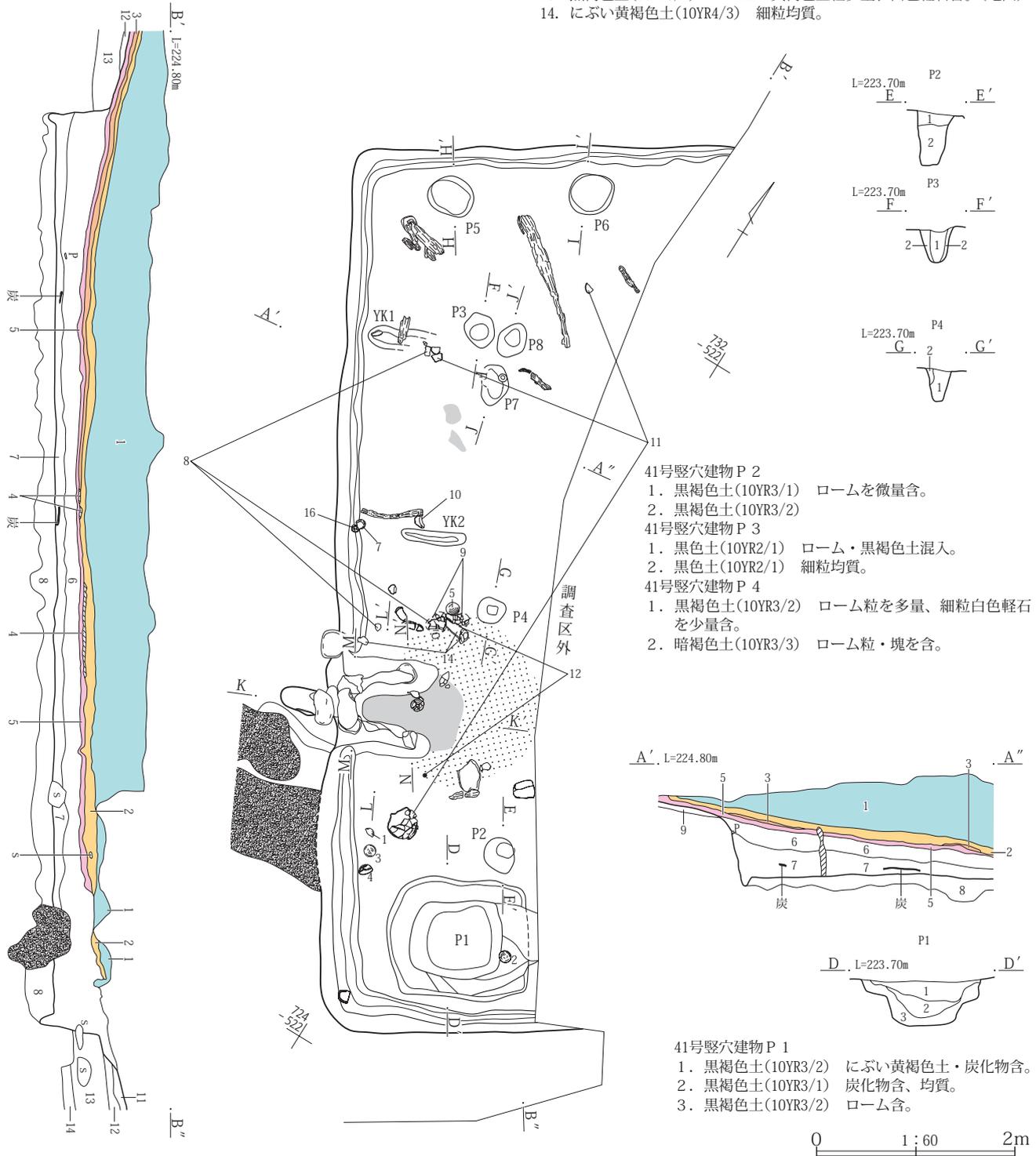
第三章 発見された遺構と遺物

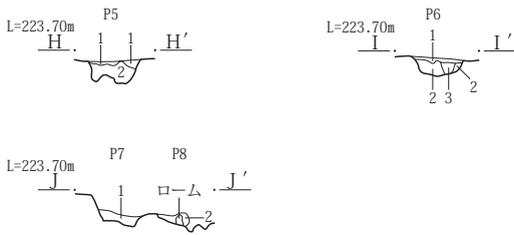
41号竪穴建物周堤

1. FA(S₁)
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム含。(盛土)
3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム多量含。(盛土)
4. 黒色土(10YR2/1) ローム少量、白色軽石含。(盛土)
5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム少量、白色軽石含。(地山)
6. 黒褐色土(10YR3/2) ローム少量含、漸移層。(地山)
7. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細粒均質。

41号竪穴建物

1. FA(S₇)
2. FA(S₃)上部
3. FA(S₃)下部
4. FA(S₃)上部・下部混合土。
5. FA(S₁)
6. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石・鉄分沈着層を有。
7. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・ローム粒を有。やや締まりあり。
8. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊・褐色土塊を有。(掘り方)
9. 褐色土(10YR4/6) 細粒白色軽石・ローム粒・褐色土塊を有。
10. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・ローム粒を有。
11. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ローム粒・炭化粒・褐色土塊を有。締まり弱。
12. 黒褐色土(10YR3/1) ローム・黄褐色土粒微量含。(周堤盛土)
13. 黒褐色土(10YR3/1) ローム・黄褐色土粒少量、白色軽石含。(地山)
14. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 細粒均質。





41号竪穴建物P 5

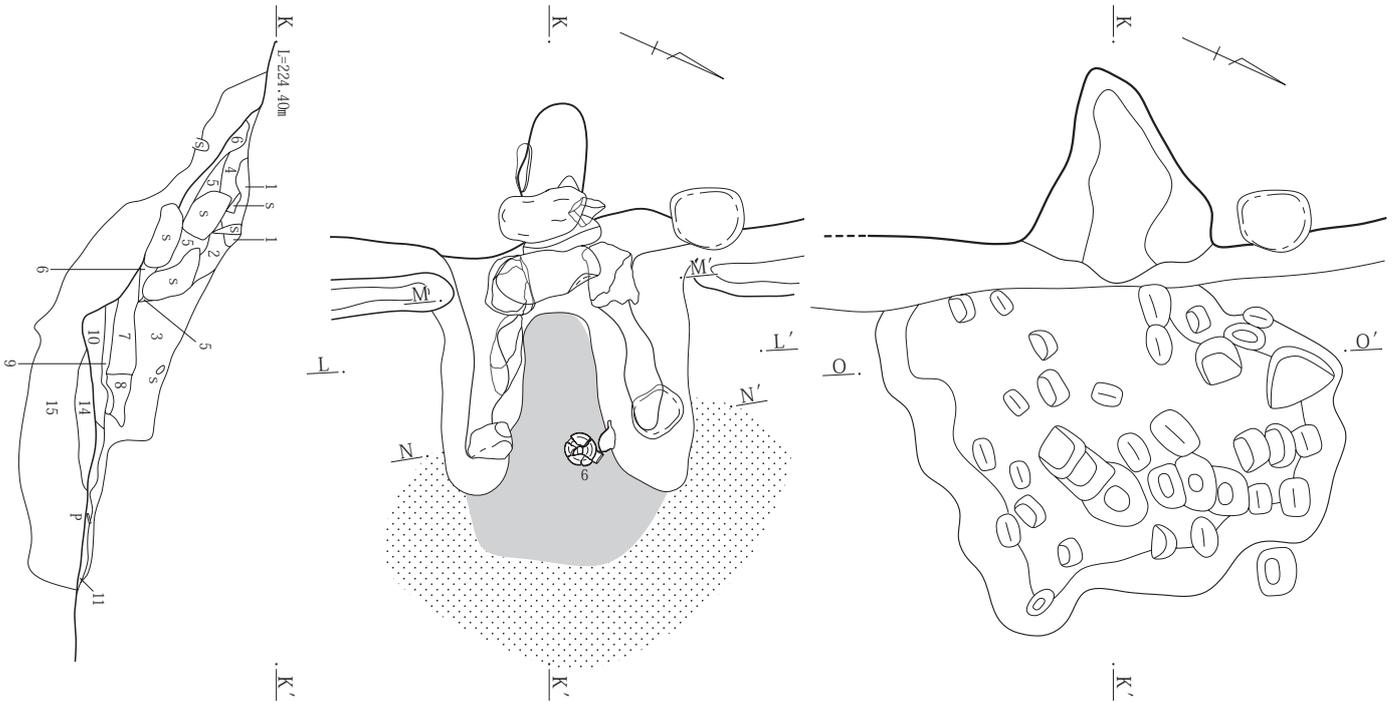
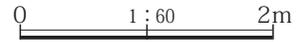
1. 黒褐色土(10YR3/1) ロームを微量含。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・塊を多量、細粒白色軽石を含。(人為的埋没土)

41号竪穴建物P 6

1. 黒色土(10YR2/1) ローム、黒褐色土混入。
2. 暗褐色土(10YR3/3) ローム粒・塊を含。
3. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ローム粒・塊を多量含。(人為的埋没土)

41号竪穴建物P 7・P 8

1. 黒色土(10YR2/1) 粗粒均質。
2. 黒色土(10YR2/1) ローム混入。

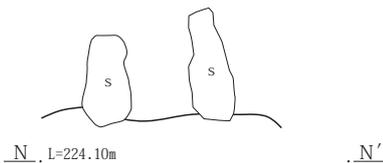


L, L=224.40m

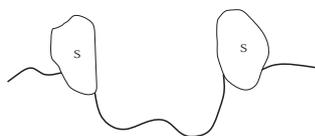
41号竪穴建物カマド

1. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒・塊を少量含。
2. 黄橙色土(10YR8/6) ローム粒・焼土粒を少量含。
3. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒・塊、灰層塊を含。
4. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒を少量含。
5. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒・塊、黒色土塊を含。
6. 褐灰色土(10YR4/1) 焼土粒・塊を多量含。
7. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒と灰層が混在する。
8. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒・塊を少量含。
9. 灰赤色土(2.5YR6/2) 焼土塊主体。
10. 黒色土(10YR2/1) 焼土粒・塊、褐色土塊を20%含。
11. 褐灰色土(10YR5/1) 灰層主体、焼土粒・塊を少量含。
12. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) ローム粒を含。
13. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) ローム粒・黒褐色土塊を含。
14. オリーブ褐色土(2.5Y4/4) 焼土粒を多量含、締まりない。
15. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石を含、褐色土塊を少量含。

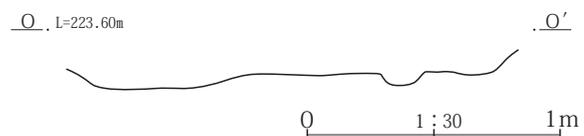
M, L=224.10m



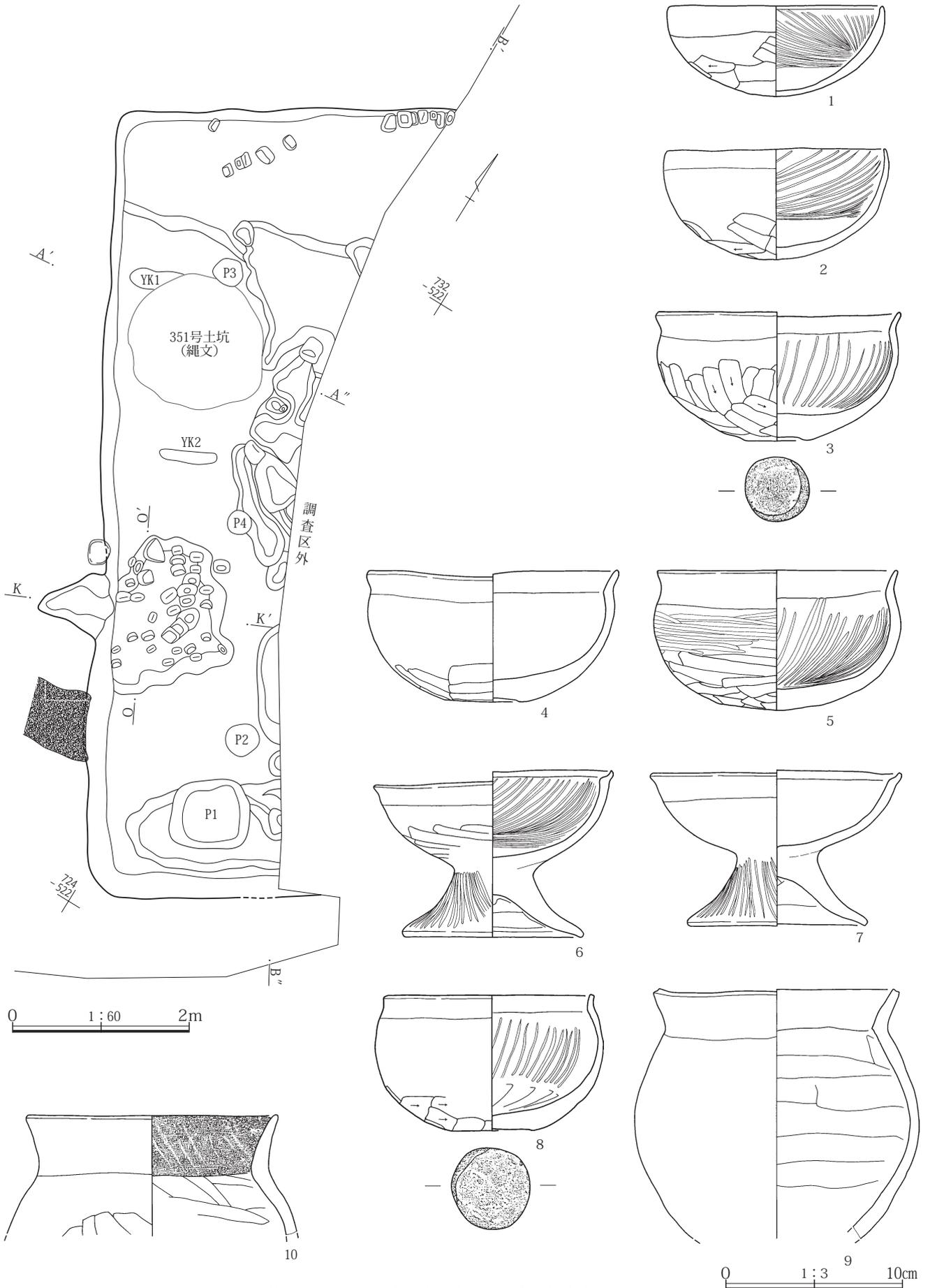
N, L=224.10m



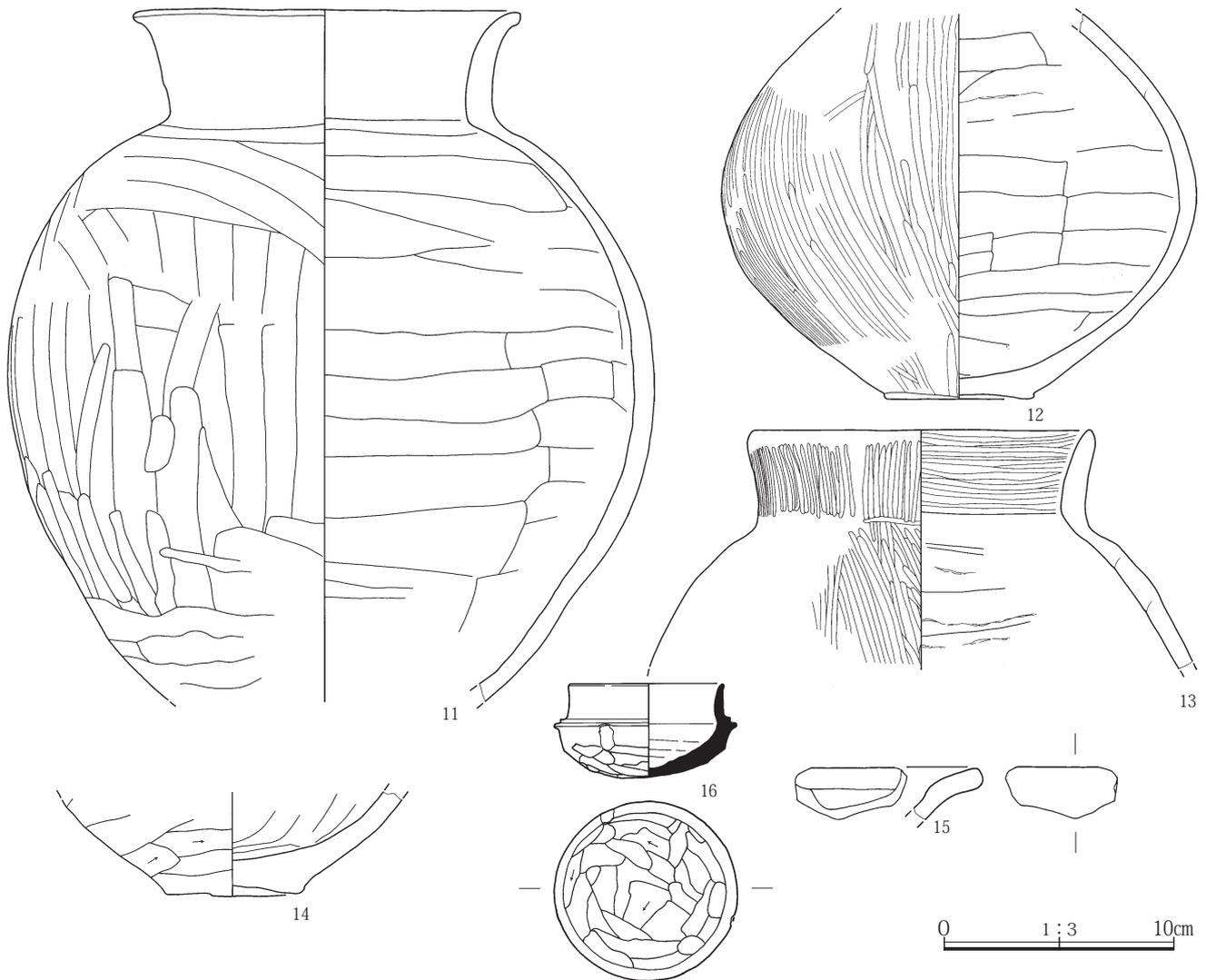
O, L=223.60m



第211図 41号竪穴建物カマド図・土層断面図



第212図 41号竪穴建物掘方図・竪穴建物出土遺物図1



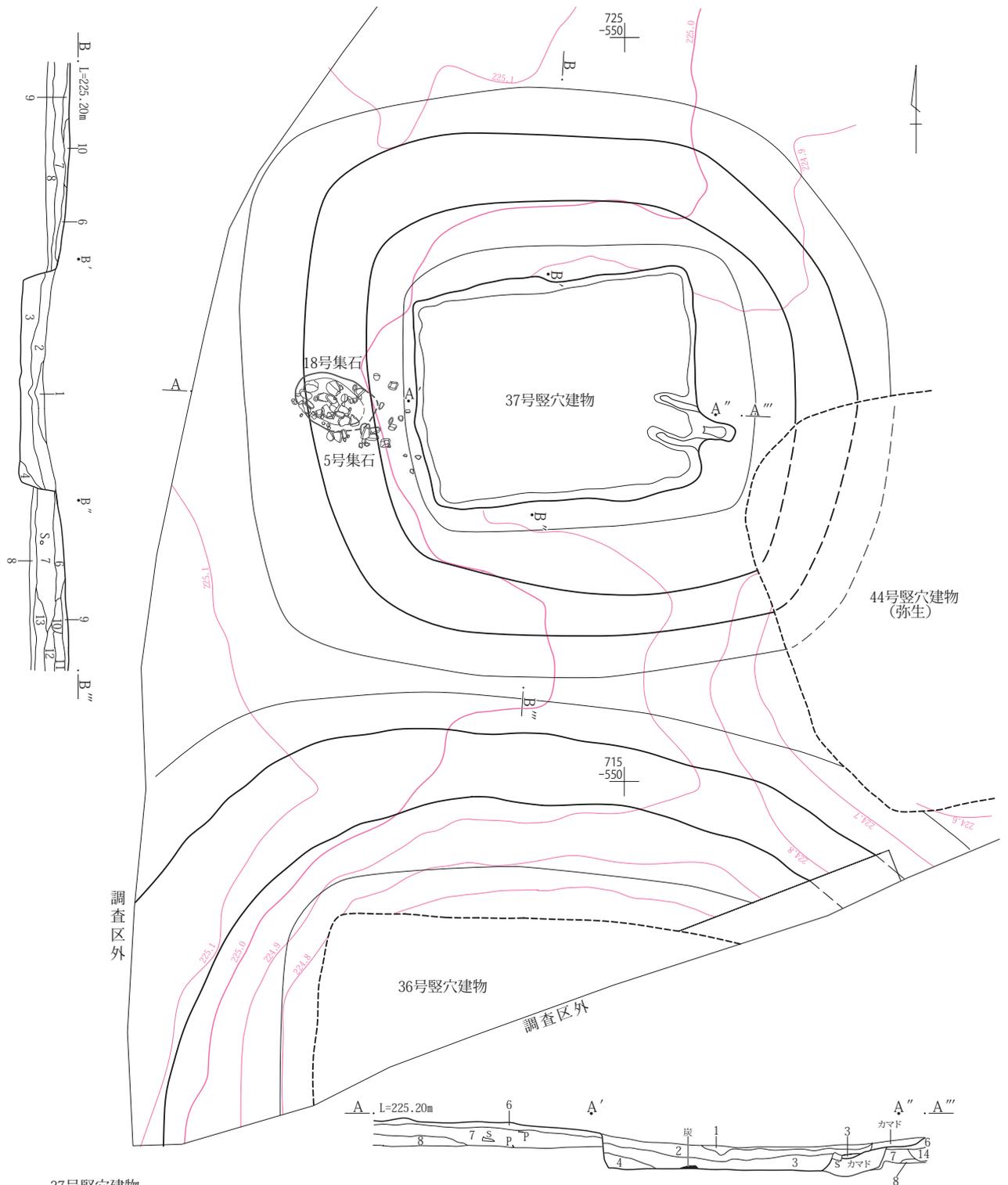
第213図 41号竪穴建物出土遺物図2

土している。高杯は短脚系のF I類が中心で、椀B、小型甕、壺Bが出土している。また、特徴的な小型の須恵器杯身が出土している。年代 杯B・杯DⅢが主体となる組成であるが、Hr-FAが竪穴建物廃棄後あまり時期を経ないで堆積すること、高杯が短脚化していることなどから5世紀後半と推定する。

(8)37号竪穴建物(第214～218図 PL.86)

位置 調査区南西部36号竪穴建物北側に位置する。**遺存状況** 完存している。周堤痕跡が四周を巡っている。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積し少し窪みが残る段階でHr-FAが降下している。**規模** 東西3.78m、南北3.14m、壁高52～56cm、床面積は11.41㎡、主軸方位はN-85°-Eである。**掘方** カマド周辺を掘削し、南入口付近や、中央部東西端などもやや深く掘削をしている。床下土坑が、入口東側と中央部西端にある。**周堤** 幅220cm、高さ5cmほどの周堤痕跡が四周を巡っている。**集石**

周堤西側に、長径231cm、短径182cm、深さ4cmの浅い窪みに4～26cm大の石を50個程埋めている5号集石がある。同じく周堤西側やや北寄りに、長径112cm、短径72cm、深さ6cmの浅い窪みに4～18cm大の石を10個程埋めている18号集石がある。**壁際溝** 確認できず。**柱穴** 確認できず。**入口** 南側と考えられる。南壁際に、長径42cm、短径39cm、深さ26cmのP1が検出された。入口ピットと考えられる。**硬化面** 建物床ほぼ中央部にある。**カマド** 南東隅に近い東壁に煙道をやや南東向きに、焚口～煙道まで126cm、焚口幅55cmのカマドがある。袖の端部に石を置き、焚口に天井石を架構している。**出土遺物** (第217・218図) 5号集石から杯B Iが出ている。建物からは、壺口辺部片と甕片が出土している。年代 5世紀後半と推定される。

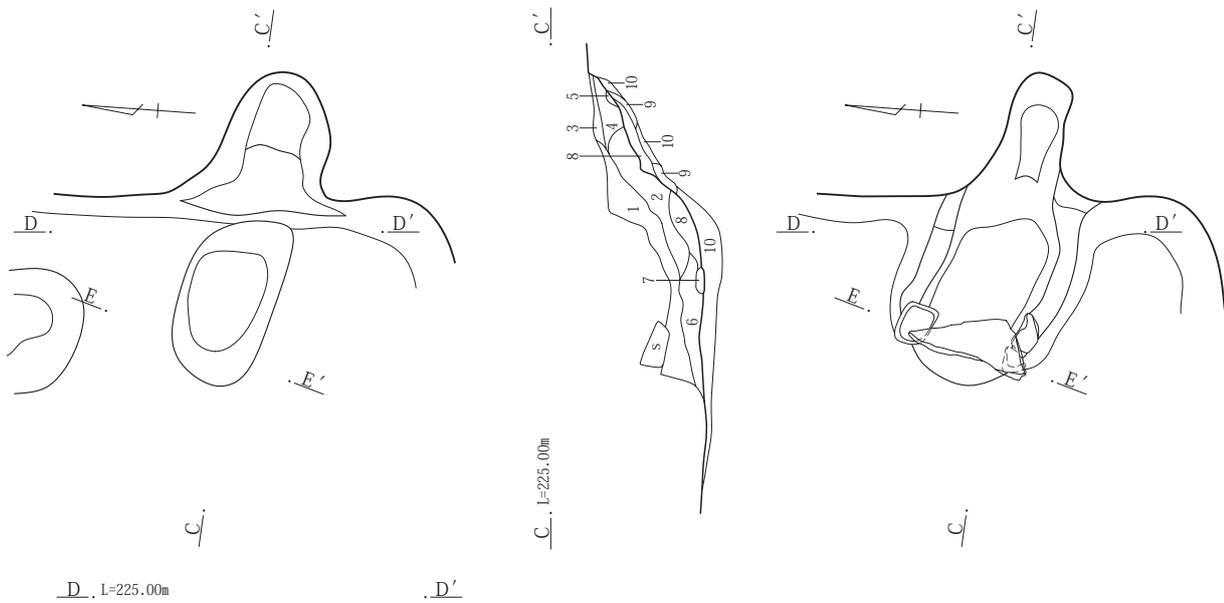
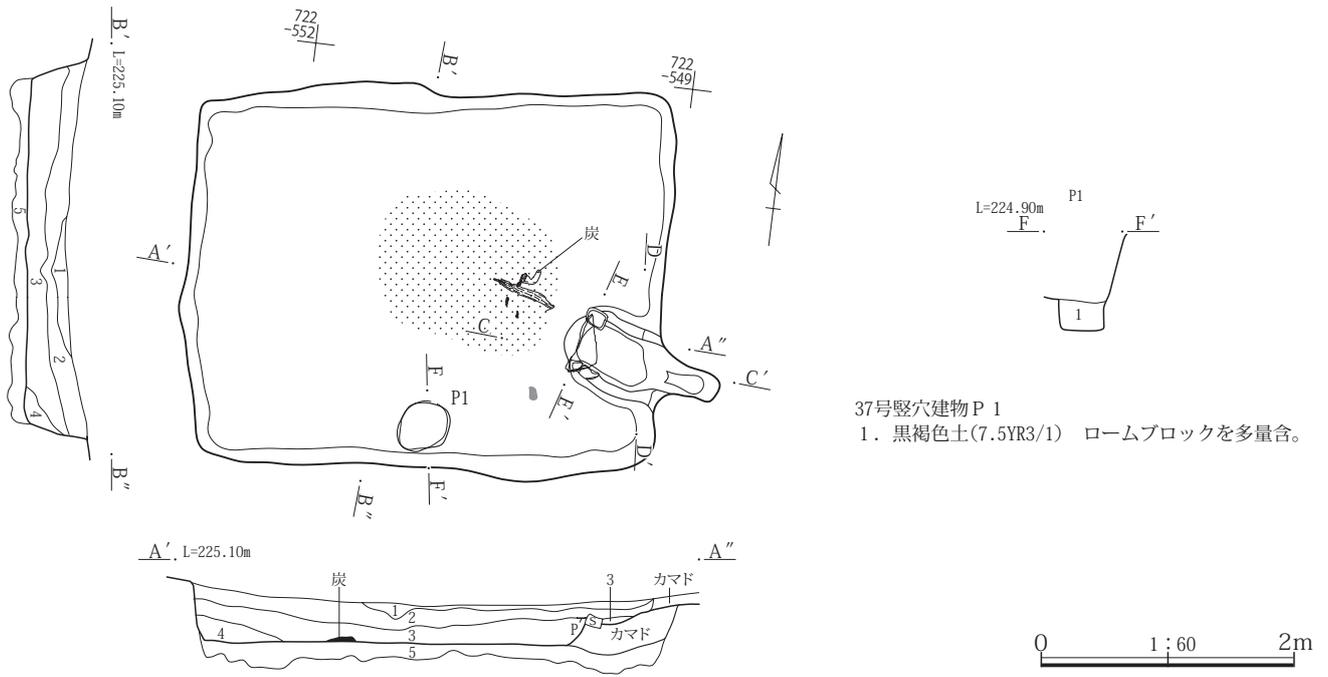


37号竖穴建物

1. 暗褐色土(10YR3/4) 僅かに細粒白色軽石・ローム粒を含、締まりない。
2. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石・ローム粒を含、やや締まりあり。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・塊を多量含、ローム塊の混入状況が不整で人為的か。
4. 黒色土(10YR2/1) 混入物はほとんど見られない、粘質性を帯びる。
5. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒・塊と黒色土が混合する。(掘り方)
6. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ローム粒を含、明赤褐色土粒を僅かに含。
7. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石・ローム粒を多量、明赤褐色土粒を僅かに含、締まりあり。
8. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒・褐色土塊・明赤褐色土粒を含、やや締まりあり。
9. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石・ローム粒・褐色土塊を少量含。
10. 灰黄褐色土(10YR6/2) ローム塊・褐色土塊を多量含、人為的である、周堤盛土の一部か。
11. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ローム粒を多量、明赤褐色土粒を僅かに含、鉄分沈着層が見られる。
12. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石・ローム粒・塊・明赤褐色土粒を多量含、締まりあり。
13. 黒褐色土(10YR3/2) 上層よりロームや軽石の混入が少ない、やや締まる。
14. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒3%含。

0 1:80 2m

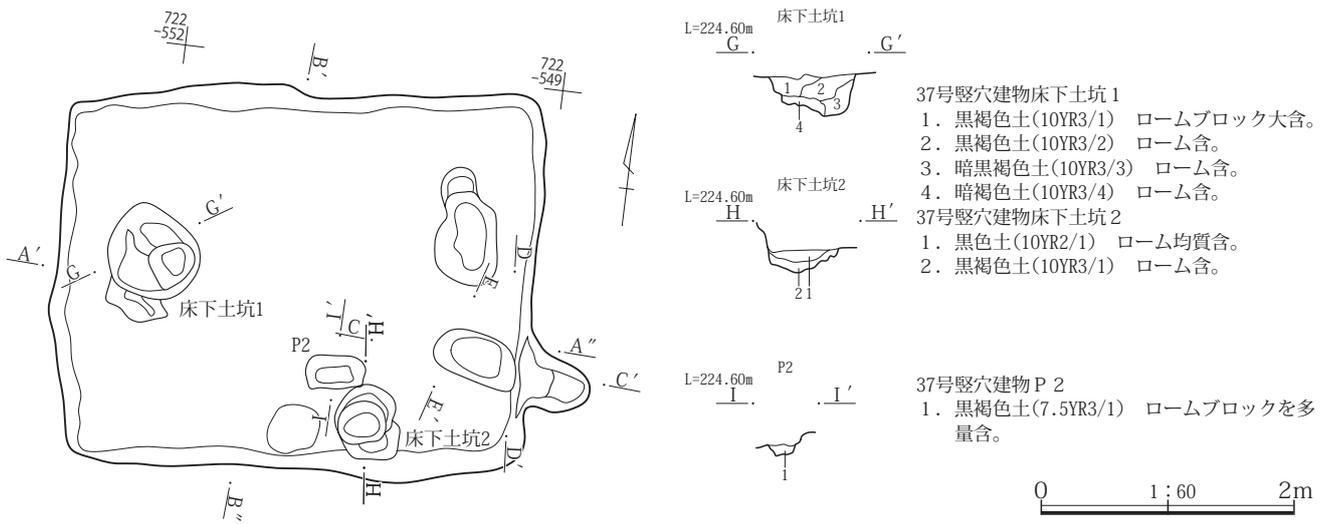
第214図 37号竖穴建物全体図・土層断面図



37号竪穴建物カマド

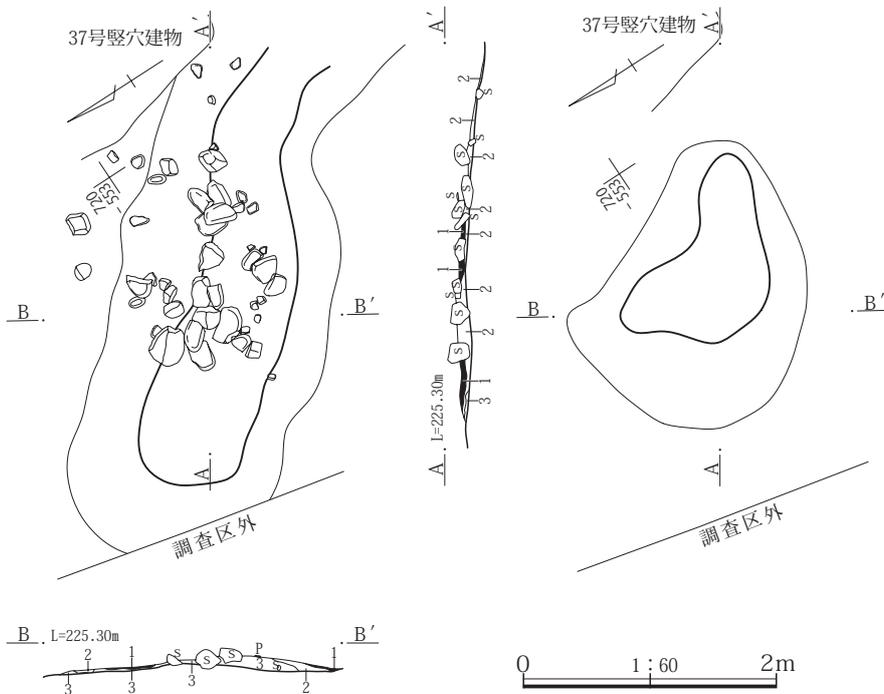
1. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・塊を含、焼土粒・褐色土塊を少量含。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊・黒色土塊・焼土粒・塊が混在する。
3. 黒色土(10YR2/1) ローム粒を少量含、縮まりない。
4. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・焼土粒を少量含、縮まりない。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 焼土粒を少量含。
6. 焼土主体 焼土粒・塊・灰・黒色土塊が相互に混在する。
7. 焼土塊主体
8. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒焼土粒を多量に含。
9. 黒褐色土(10YR2/3) 焼土を多量に含、縮まりない。
10. 黒色土(10YR2/1) ローム粒を多量、焼土粒を少量含。
11. 焼土粒・塊主体 ローム粒を少量に含。
12. 暗褐色土(10YR3/4) ローム塊を多量、焼土粒を少量含。
13. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒・焼土粒を少量含。

第215図 37号竪穴建物平面図・土層断面図・カマド図

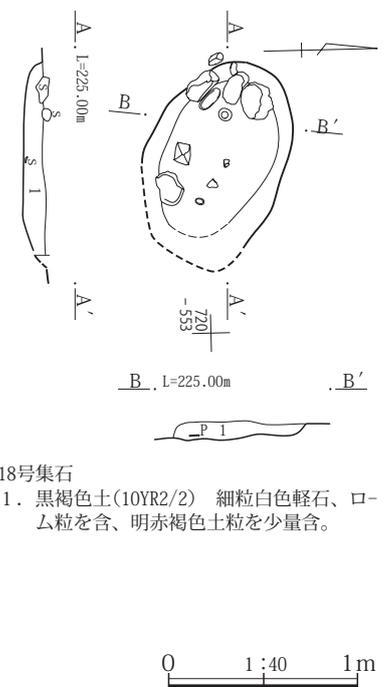


第216図 37号竪穴建物掘方図・土層断面図

5号集石



18号集石

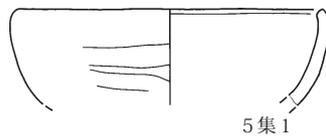


18号集石

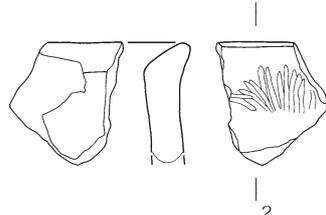
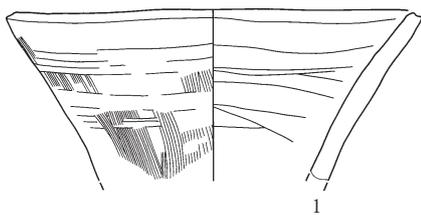
1. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石、ローム粒を含、明赤褐色土粒を少量含。

5号集石

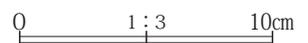
1. FA(Si)
2. FA(Si) 下黒色土にS₁小塊の混合。
3. 黒色土(10YR2/1) S₁下の黒色土主体。明赤褐色土粒が数点含、粘質性を帯び、縮まりない。



第217図 37号竪穴建物集石図・土層断面図・集石出土遺物図



第218図 37号竪穴建物出土遺物図

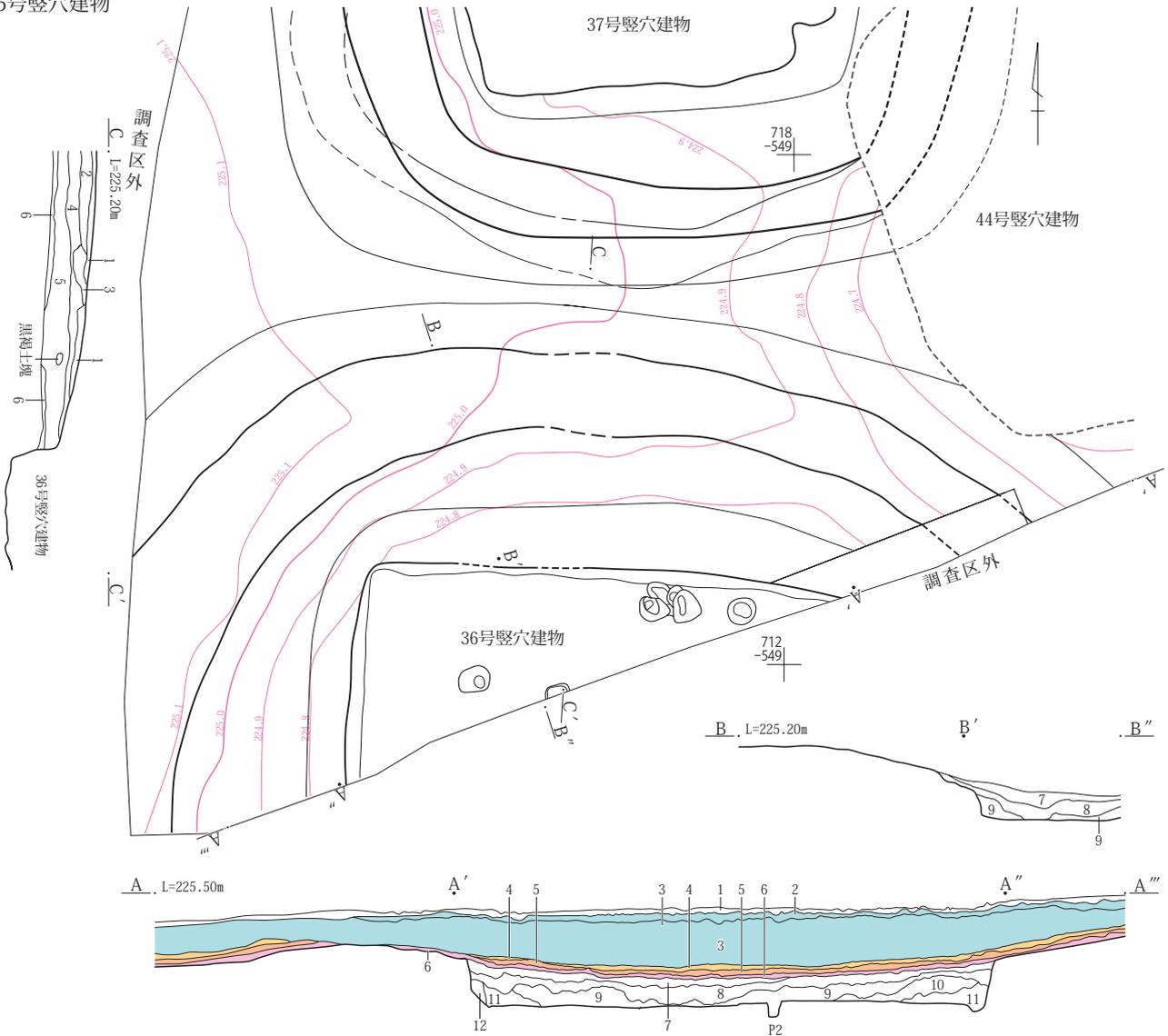


(9) 36号竪穴建物(第219・220図 PL.87)

位置 調査区南西端、37号竪穴建物の南側にある。
遺存状況 建物の北西隅1/4程調査。**埋土状況** 使用後、土が堆積して少し窪みが残っている段階でHr-FAが降下。
規模 現存長東西2.64m+、南北5.60m+、壁高56～

60cmで、主軸方位はN-90°-Eである。**掘方** 全体を下げている。**周堤** 周堤痕跡は、幅2.6m、高さ20cmで北西部を巡る部分が遺存する。**壁際溝** 西辺のみに幅28cm、深さ11cmの周溝がある。**硬化面** 柱穴付近から南東に広がっている。**柱穴** 北西のP1が柱穴と推定さ

36号竪穴建物



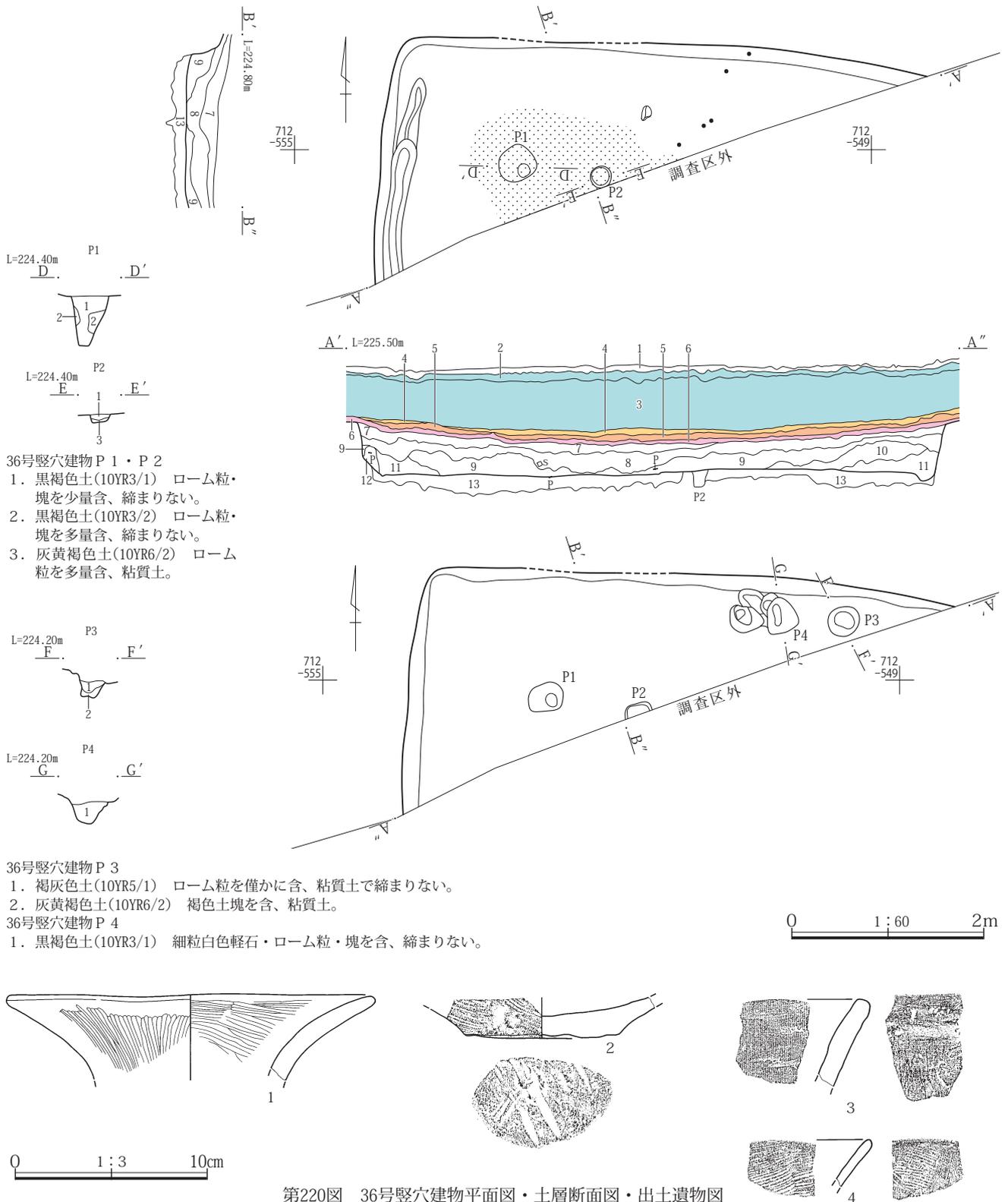
36号竪穴建物

1. 黒褐色土(10YR2/3) FA下黒。
2. FA(S₀)・S_v混じり。
3. FA(S₇)
4. FA(S₃)上部
5. FA(S₃)下部
6. FA(S₁)
7. 黒色土(10YR2/1) FA(S₁)含、均質。
8. 黒色土(10YR2/1) ロームブロック含、鉄分沈着。
9. 黒褐色土(10YR2/2) ローム混入。
10. 黒褐色土(10YR3/2) ローム混入。
11. 黒色土(10YR2/1) 均質。
12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊を多量混入。
13. 黄褐色土(10YR5/8) ローム粒・塊を多量含。

36号竪穴建物周堤

1. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石・ローム粒・褐色土塊を少量含。
2. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ローム粒を多量、明赤褐色土粒を僅かに含、鉄分沈着層が見られる。
3. 黄褐色土(10YR5/8) 10層と類似、ローム塊を多量含、人為的である、周堤盛土の一部か。
4. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石・ローム粒・塊・明赤褐色土粒を多量含、締めりあり。
5. 黒褐色土(10YR3/2) 上層よりロームや軽石の混入が少ない、やや締めりあり。
6. 褐灰色土(10YR4/1) ローム粒・褐色土塊・明赤褐色土粒を含、やや締めりあり。

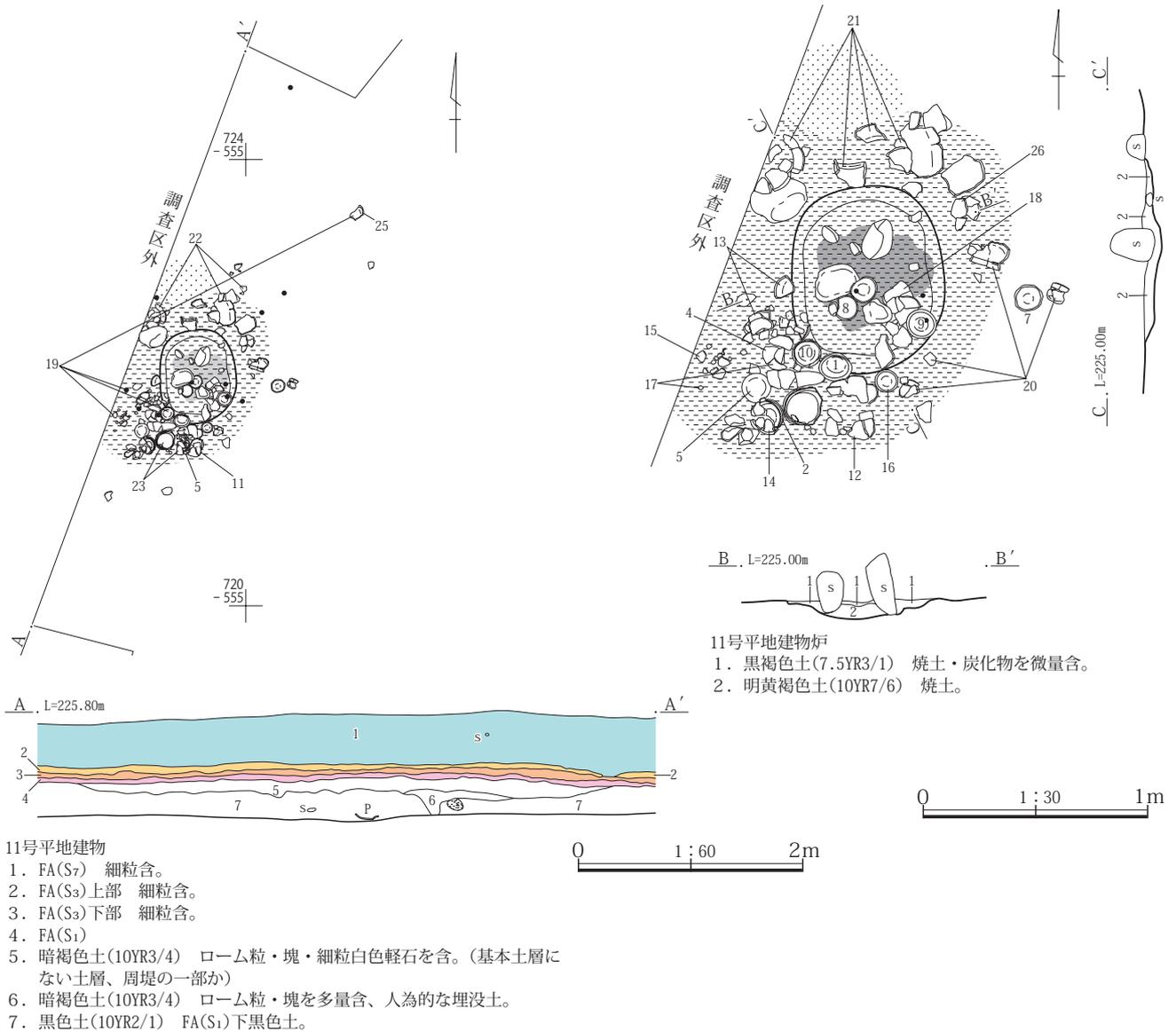
第219図 36号竪穴建物全体図・土層断面図



第220図 36号竪穴建物平面図・土層断面図・出土遺物図

れ、長径39cm、短径36、深さ65cmである。他にいくつかのピットがあるが用途不明である。出土遺物(第220図)土師器壺・甕の破片のみである。ただし1・4は弥生土器の可能性ある。年代 5世紀後半と推定される。

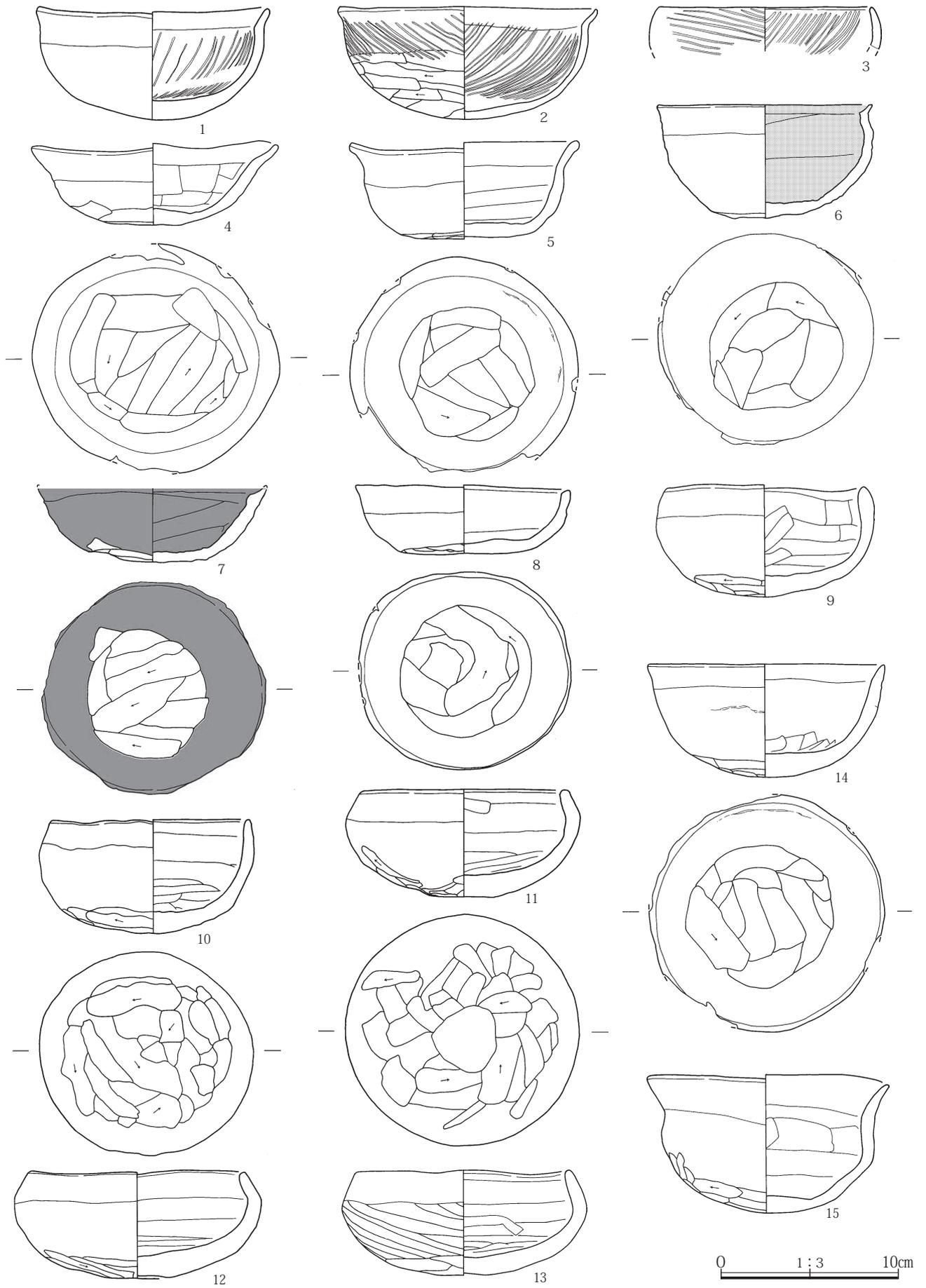
(10) 11号平地建物(第221～223図 PL.88・301・302)
 位置 調査地西南端で、37号竪穴建物の周堤がすぐ近くまでめぐっている。重複 37号竪穴建物の周堤の痕跡が残っていることから、11号平地建物の一部が37号竪穴建物に壊されてたと推定し、時期的には37号竪穴建物より遡る。調査経過 炉が中央から検出されているが、



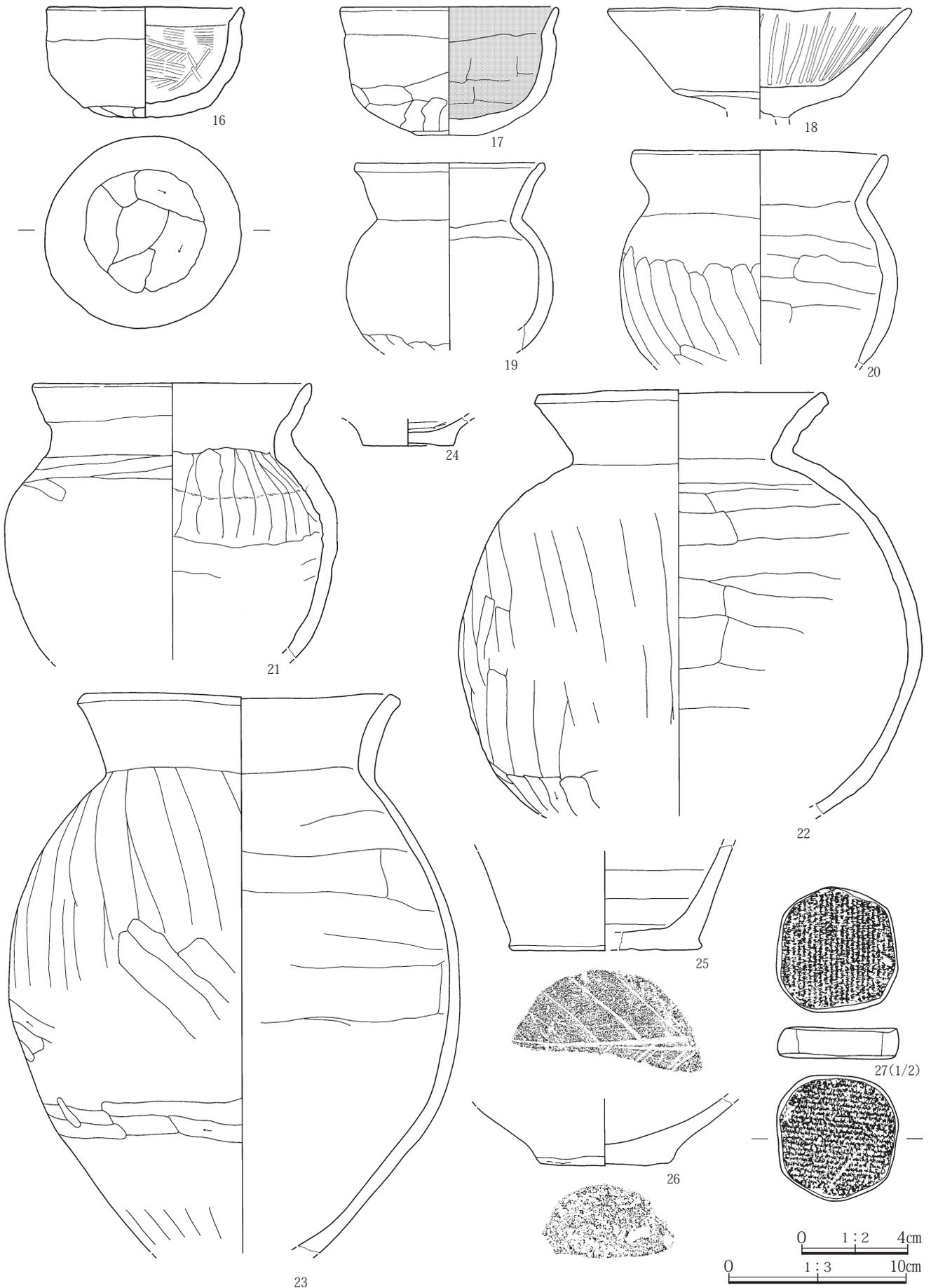
第221図 11号平地建物平面図・土層断面図

平地建物の側線は確認できなかった。屋外炉の可能性もあるが、炉の周りが平坦面を呈していることから、ここでは調査時の所見を尊重して、平地建物として扱うことにする。**埋土状況** Hr-FAI降下時には、12～18cmほど土が堆積している。**炉** 長径84cm、短径68cm、深さ8cmの炉がある。炉跡と思われる周辺から多数の土器が出土している。**出土遺物**(第222・223図 PL.301・302) 杯AⅡ、杯BⅡが少数あるが、基本は、作りが粗雑で、他の竪穴建物から出るいわゆる杯A・B・C類の杯とは明らかに異なることが分かる一群の杯群が中心である。異形杯群として設定した杯D類に含まれるものであるが、他の遺構から出ているD類杯と比べても造りの粗雑さは際立っている。杯DⅠ(第222図9・10)、杯DⅡ(第222図4・5・14)、杯DⅢ(第222図6)、杯DⅧ(第222図11～13)があ

る。椀も粗雑な造りで、椀BⅠ(第223図16・17)、椀FⅡ(第222図15)がある。これら特徴的な製作を行う一群については、遺構との性格も検討して考慮すべきものとする。杯以外の土器の製作は普通である。他に他に高杯A、小型甕、甕D、壺が出土している。甕の底部に木葉痕があるもの(第223図25)がある。円板状土製品は甕の胴部の周囲を磨いて製作したものである。**性格** 先述したように、屋外炉の可能性もあり、土器の様相からすると祭祀遺構の可能性も考えておきたい。**年代** 周堤の重複関係から、37号竪穴建物より遡り、少数の杯A、杯Bがあるが、杯Cは含まれないこと、古式の様相を示す杯D類が粗雑な造りながら主体を成すことや、高杯A類があることなどより、5世紀後半でも中頃に近い方と考えられる。



第222図 11号平地建物出土遺物図 1



第223図 11号平地建物出土遺物図2

(11) 1号方形周溝遺構

(第224～227図 PL.89-92・303)

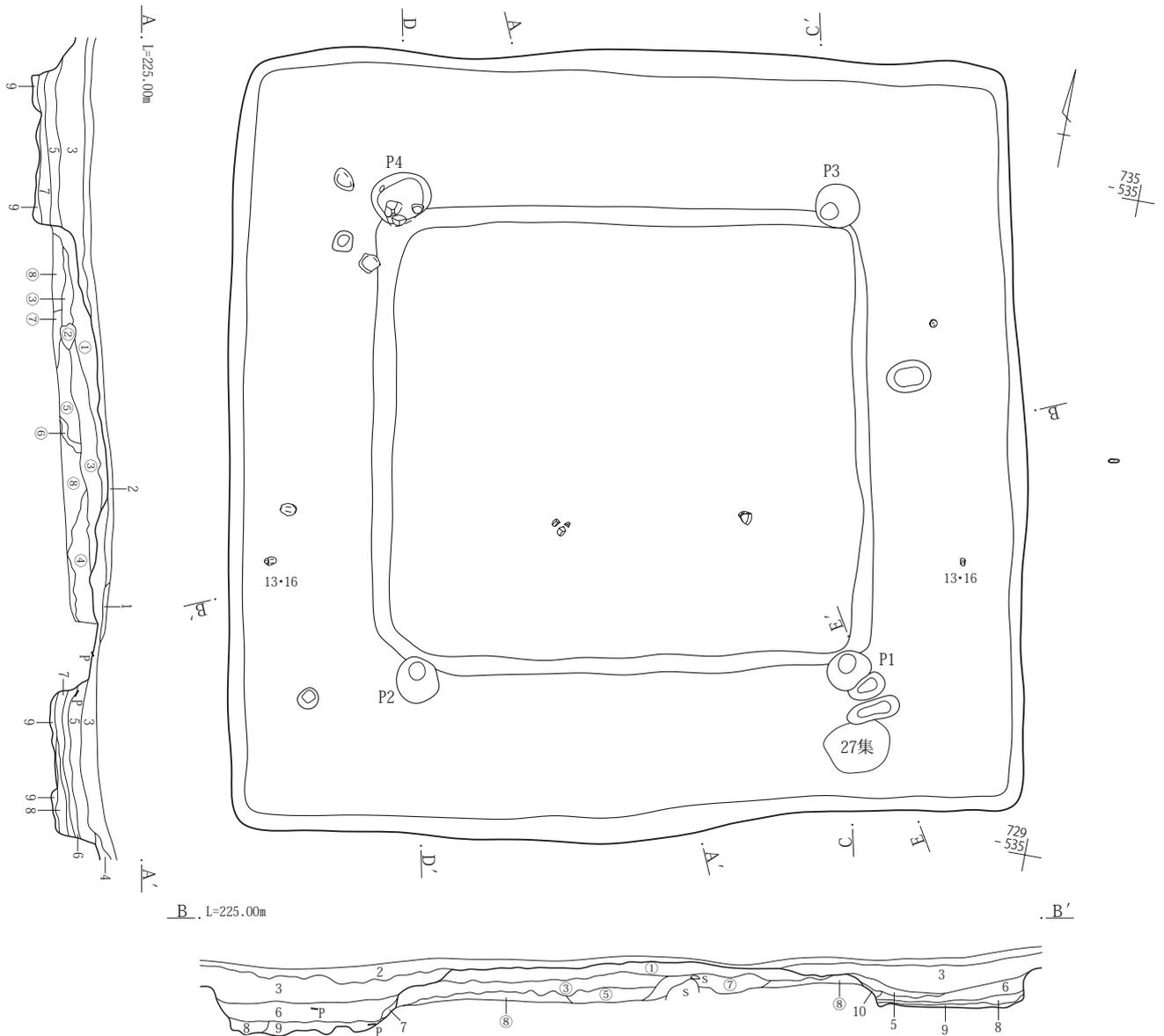
位置 調査区南の39号竪穴建物の南。**調査経過** 当初は、方形状を呈することから竪穴建物として調査を開始したが、周溝状に溝がめぐり、四隅の対角線に柱穴状のピットを確認するも、床面が形成されないことから竪穴建物でもなく、墳丘や墓坑と思われる土坑の検出もないことなどから、方形周溝墓ではないと判断し、方形周溝遺構と呼称することにした。出土土器も弥生時代中期が中心で、古墳時代の土器はほとんど出土しないことから、当初は弥生時代の遺構として捉えていたが、その後のほぼ同じ形態の方形周溝遺構で、古墳時代の土器やU字形鍬鋤先の掘削痕跡が明瞭に残る遺構の調査により、当遺構も古墳時代の遺構とすることにしたものである。**重複** 39号竪穴建物の下面より検出されたので39号竪穴建物より古い。**遺存状況** ほぼ完存している。**埋土状況** 廃棄されて、ほぼ窪みが分からなくなった段階でHr-FAが降下している。**規模** 一辺7.2mの平面方形の竪穴状の遺構で、四辺の壁沿いの四周に幅1.50～1.68mの溝を巡らせる。中央部には、四周の溝により区画された一辺4.2～4.4mの方形状の高まりが残るものである。**周溝** 四辺の壁沿いの四周に幅1.50～1.68mで、立ち上がりからの深さ40～50cmの溝を巡らせる。周溝の底面は、ローム混じりの土を多く含む土で固く叩きしめて、底面を意識して平坦に造作している。**掘方** 全体的に周溝を掘り下げていて、2号方形周溝遺構のようにU字形鍬鋤先の掘削痕跡は出なかった。**台状部** 中央部にある台状部は、平坦ではなく中央に向けて緩やかに高くなる形態である。周溝底面と台状部の比高は40～45cmある。この中央の高まりには、周溝を掘削した際に出た、ローム土などを盛り土していることが断面観察で分かった。**柱穴** 四周の隅にある柱穴状のピットは、長径36～61cm、短径30～36cm、深さ66～90cmのしっかりとしたもので、形状などから柱穴と考えて良い。P1周辺や、溝底面にいくつかピット状のものがある。**集石** (27号集石) P1の南側にあり、この集石は、柱穴の南の小ピット状のものを埋めてローム土でたたきしめ、地業を行った後に石を内側長辺34、短辺30cmに、四周に配置したものである。焼土・炭化物混じりの土が石で囲われた内部の土に入っていることから、火を使用したもの

と考えている。この囲いに使われた石の外側に弥生時代の石鍬が1個出土した。石囲みに使用した石の一つと考えている。**出土遺物** (第225～227図 PL.303) 古墳時代の土器の出土は少なく、壺、甕、高杯破片と土製円板が出土している。他は、ほとんどが弥生時代の中期の土器であり、石鍬も2個出土した。これらの遺物は、この遺構の年代を示すものではなく、この地区の弥生時代の包含層に含まれていた遺物が周溝のフク土などに含まれたものである。**年代** 数少ない古墳時代の土器から推定するのは難しいが、後述するほぼ形態が同じの2号方形周溝遺構からすると、5世紀後半に比定される。

(12) 2号方形周溝遺構

(第228～230図 PL.93～95・303)

位置 調査区北側で72号竪穴建物の南。**遺存状況** 形状は1号方形周溝遺構とほぼ同じで、西側が一部調査区外になる。この周溝遺構の調査により、この類の遺構が明らかに古墳時代のもので、建物でも墓でも無いことが明らかにされた。**埋土状況** 廃棄されて、ほぼ窪みが分からなくなった段階でHr-FAが降下している。**規模** 西辺が一部未掘で、現状での大きさは、一辺6.8mの竪穴状の遺構。四辺の壁沿いの四周に溝をめぐらせる。中央部には、四周の溝により区画された一辺4.0～4.3mの方形状の高まりが残るものである。**周溝** 幅1.40～1.55mで、立ち上がりからの深さ60～70cmの溝を測る。1号方形周溝遺構のように、溝底面を全面的に平坦な造作はしていない。ただし、一部にはローム混じりの土を叩きしめている箇所もある。**掘方** 溝内にU字形鍬鋤先の掘削痕跡が南辺と北辺の2ヶ所から確認された。南辺では東に向かって掘削している。北辺では、西に向かっていて、いずれにせよ、U字形鍬鋤先で溝を掘削したことが分かった。**台状部** 中央部には、四周の溝により区画された一辺4.0～4.3mの方形状で、溝からの高さは30～50cmの高まりの台状部がある。台状部は1号同様に平坦では無く、中央に向かい高まりを持つ形態である。高まりを構成する土は、あまりローム土を多く含まない、礫の混じりの多い灰褐色土が中心である。盛り土と考えている。**柱穴** 四周の隅にある柱穴状のピットは、長径45～65cm、短径40～48cm、深さ38～60cmで、しっかりとした造りで柱穴として間違いないと思われる。**集石** (36号集石) 石が、かなり多く出土し



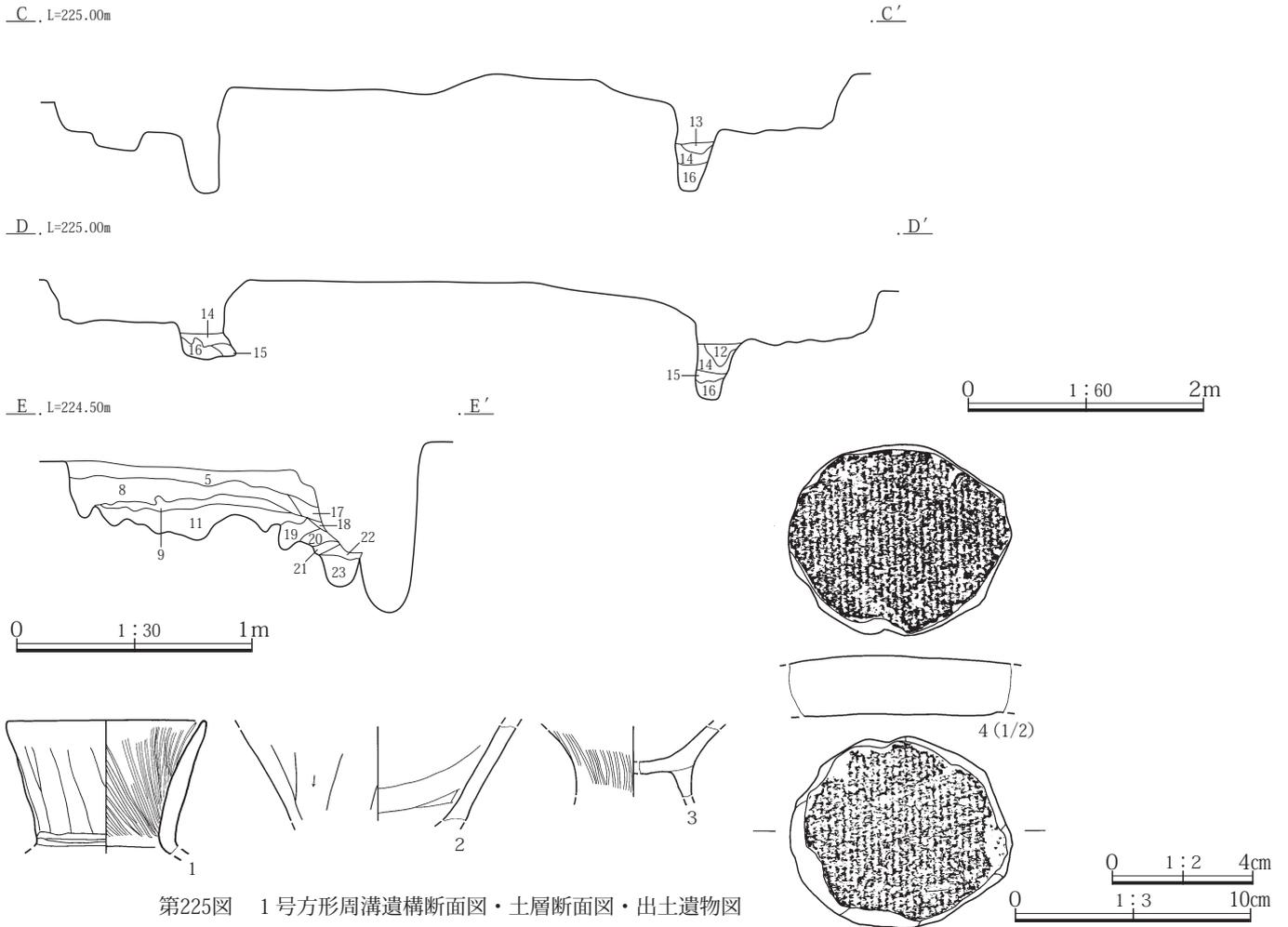
1号方形周溝遺構

- | | |
|---|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・粒を20%含む。 2. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土を2%含む。 3. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土を2%、炭化物粒極少量含む。周堀埋土最上層。 4. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土を5%、軽石を少量含む。 5. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土を2%、軽石を少量含む。 6. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土を1%含む。 7. 黒褐色土(10YR3/2) ローム塊を5%含む。 8. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム塊を40%含む。 9. 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム塊60%含む。地業した面で固く締まる。 10. ローム塊。 11. オリーブ褐色土(2.5Y4/3) IX層と黒褐色土の混土。 12. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含む。 13. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・塊10%含む。 14. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・塊5%含む。 15. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・塊を50%含む。 | <ol style="list-style-type: none"> 16. ローム粒・塊を主体に黒褐色土(10YR3/2)を10%含む。 17. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土1%含む。 18. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土を1%含む、17層より黒色味強い。 19. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土2%含む。 20. ローム塊を主体に黒褐色土10%含む。 21. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土2%含む。 22. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含む。 23. ローム粒・塊を主体に黒褐色土(10YR3/2)を5%含む。 ① 黒褐色土(10YR3/2) ローム土を1%、炭化物粒・焼土粒極少量含む。 ② 灰黄褐色土(10YR4/2) 木根の攪乱層か。 ③ 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土を20%含む。 ④ 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム土を30%含む。 ⑤ 暗灰黄色土(2.5Y5/2) ローム塊5%、炭化物粒・焼土粒を極少量含む。 ⑥ 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム塊20%含む。 ⑦ 黄褐色土(2.5Y5/3) ローム塊10%含む。 ⑧ 黄褐色土(2.5Y5/3)ローム土を5%含む。 |
|---|--|

0 1:60 2m

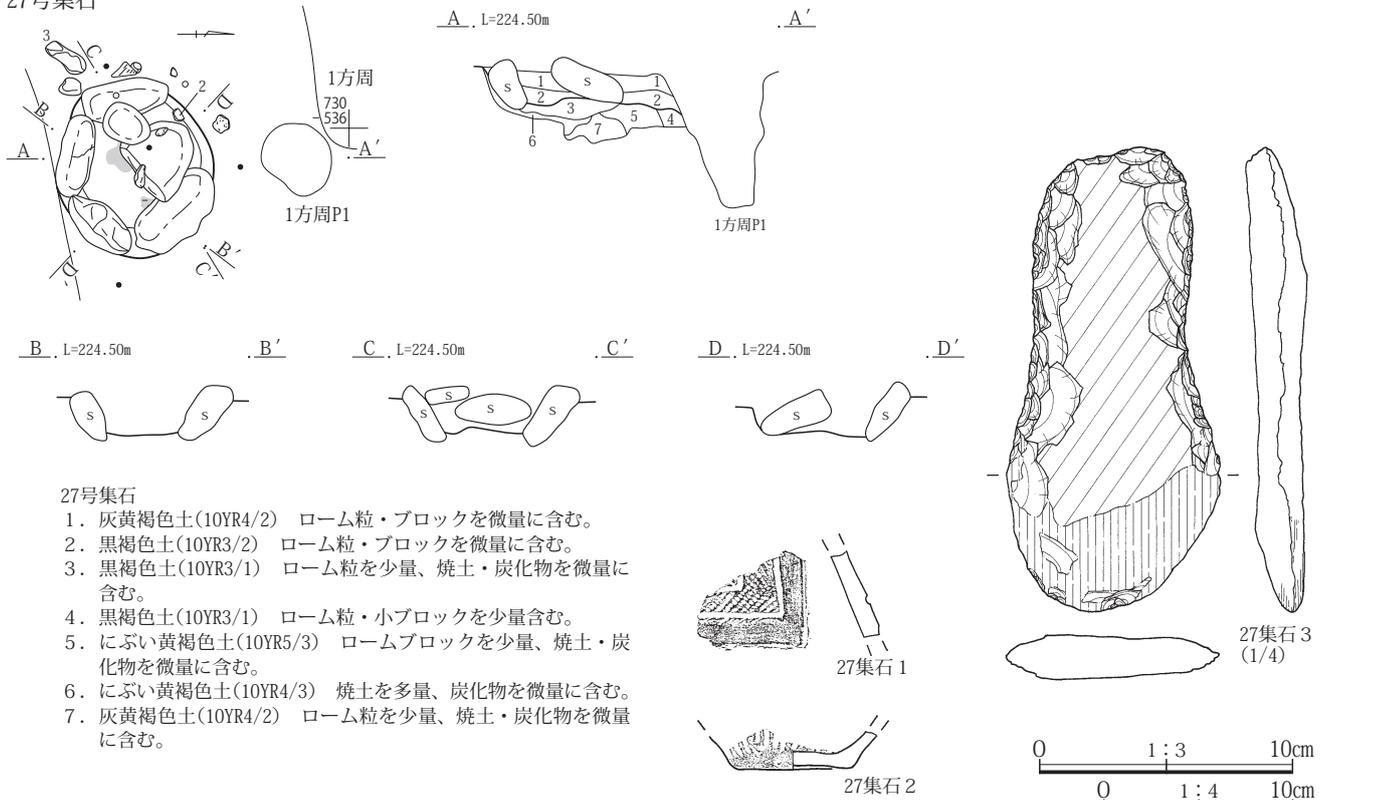
第224図 1号方形周溝遺構平面図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物



第225図 1号方形周溝遺構断面図・土層断面図・出土遺物図

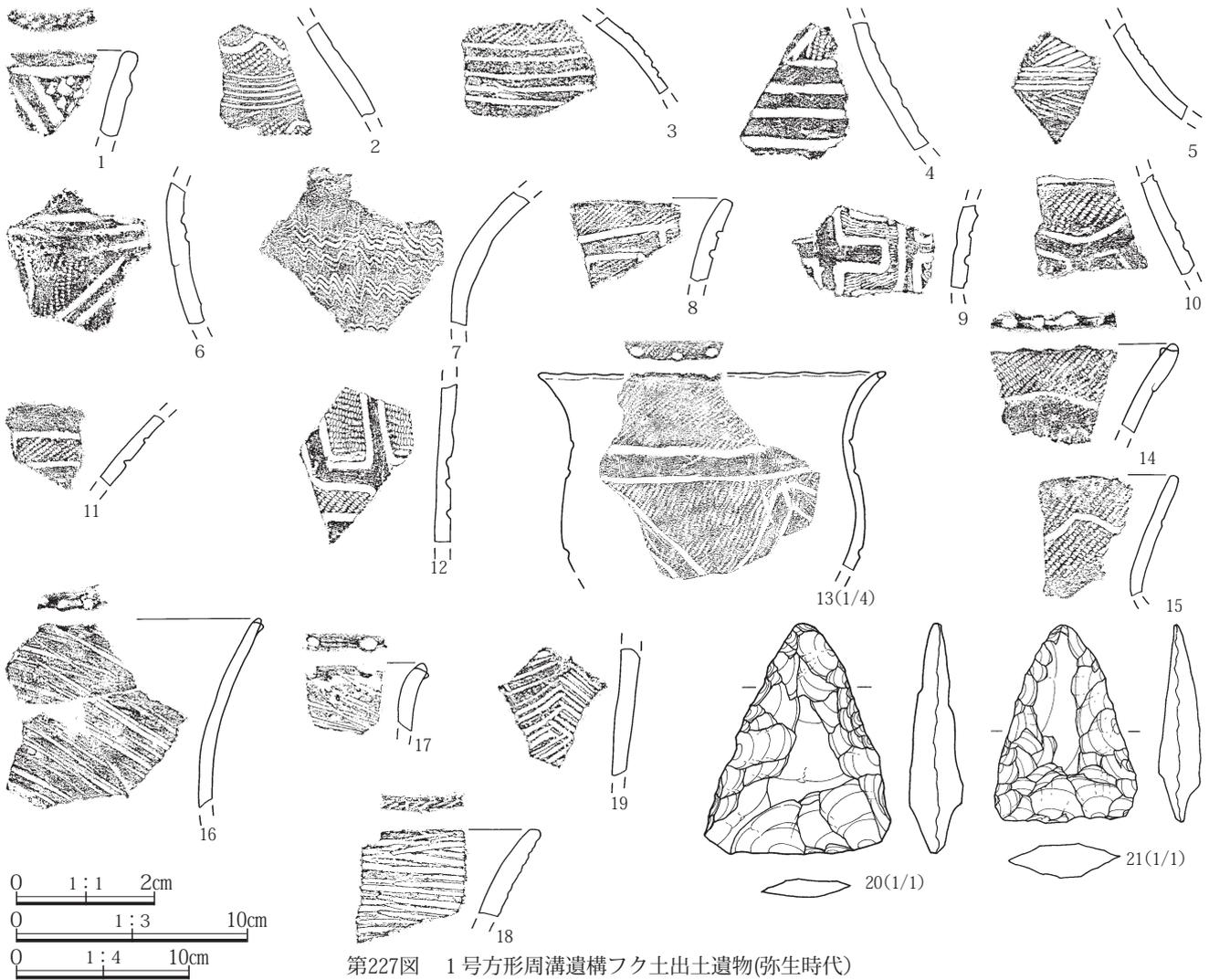
27号集石



27号集石

1. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒・ブロックを微量に含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒・ブロックを微量に含む。
3. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量に含む。
4. 黒褐色土(10YR3/1) ローム粒・小ブロックを少量含む。
5. にぶい黄褐色土(10YR5/3) ロームブロックを少量、焼土・炭化物を微量に含む。
6. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 焼土を多量、炭化物を微量に含む。
7. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒を少量、焼土・炭化物を微量に含む。

第226図 1号方形周溝遺構集石図・出土遺物図



第227図 1号方形周溝遺構フク土出土遺物(弥生時代)

て、溝内部や方形の高まりにもあったが、意識的に石を集めたり、置いたりといった状況は認められない。ただし、中央やや東側にコの字形状に石を突き刺すように配置した長28～38cmの3つの石は意識して置いたものと考えて、36号集石とした。集石からは焼土及び遺物は無い。**出土遺物**(第230図 PL.303) 古墳時代の土器がかなり溝・方形の高まり及びフク土から出土している。杯A I・II、杯B I、杯C I、杯D II(第230図4・8)、杯D III(第230図5・7 PL.303)～IVが出ていて、杯Aと杯D類が主体である。他に、椀、高杯、鉢、罎、手捏ね土器、甕などが、須恵器では臙・甕破片が出土している。弥生土器がフク土からいくつか出土している。弥生中期前半のものに後期(第227図7)が混在。この地区周辺からの流れ込みと考えられる。**年代** 杯Aと杯Dが主体となっているので、5世紀後半と推定する。

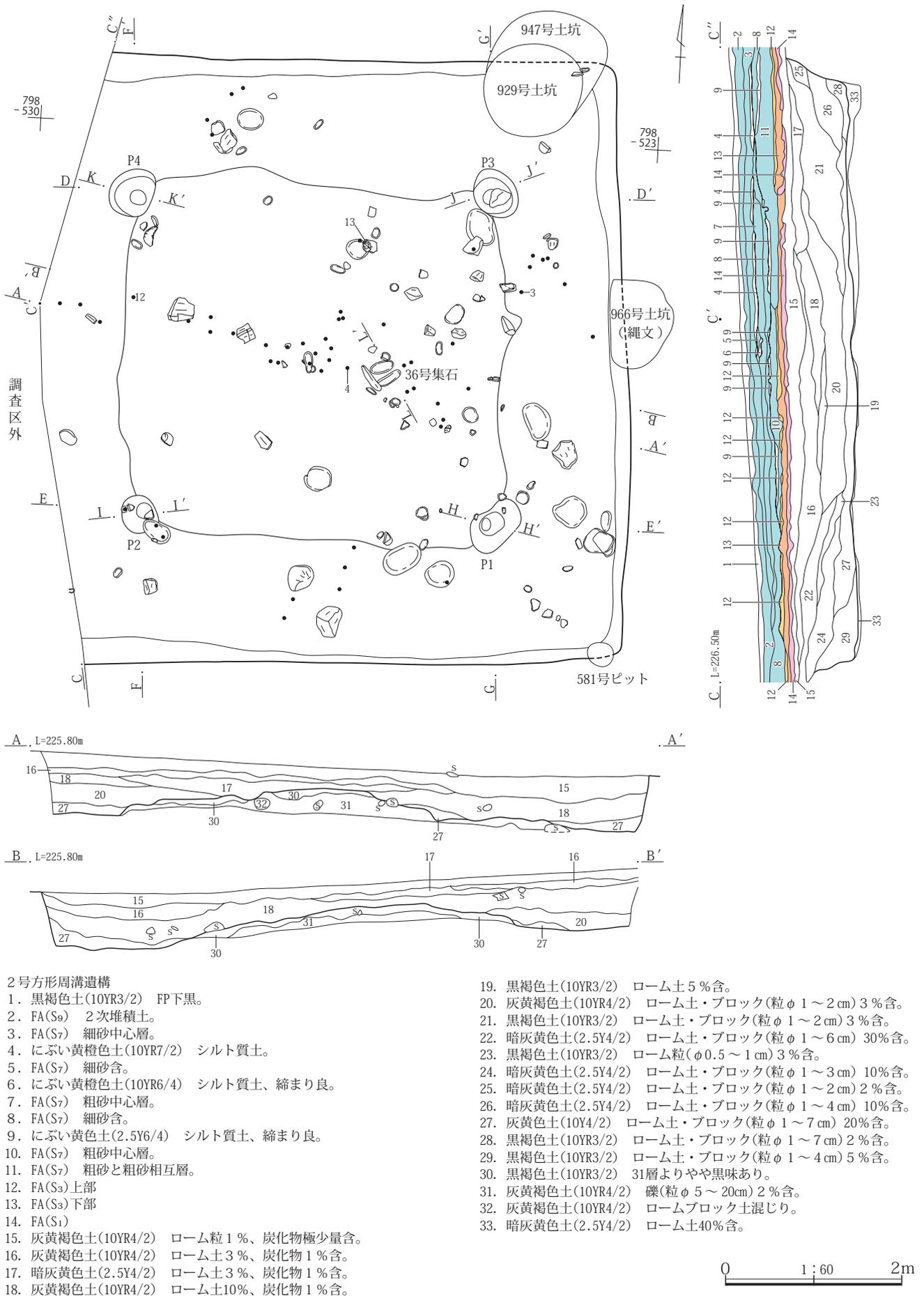
(13)集石・焼土・畠・土坑群

(第231～234図 PL.96・97・303～305)

1号集石(第231図 PL.96・303・304) 53号竪穴建物の周堤外の北東に位置する。長径318cm、短径198cm、深さ20cmの穴に4～50cm大の石を120個程を埋めているものである。土師器内斜・内湾口縁杯、甕、石皿が出土した。S₁が遺構直上に降下している。杯B I、杯C II、杯D III(第231図1集2 PL.303)、甕、石皿が出土した。石皿は当該時期のものでは無い。5世紀後半でも末に近いほうである。

2号集石(第232図 PL.96) 2号方形周溝遺構の南東側に位置する。長径64、短径60cmの範囲に14～40cm大の石を5個集めているものである。

3号集石(第232・233図 PL.96・304) 32号竪穴建物の南側周堤外に位置する。長径468cm、短径354cm、深さ14cmの穴に4～45cm大の石を150個程を埋めているものである。杯B II、杯C II、小型甕C IIがいずれも破片で出



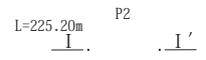
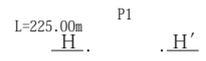
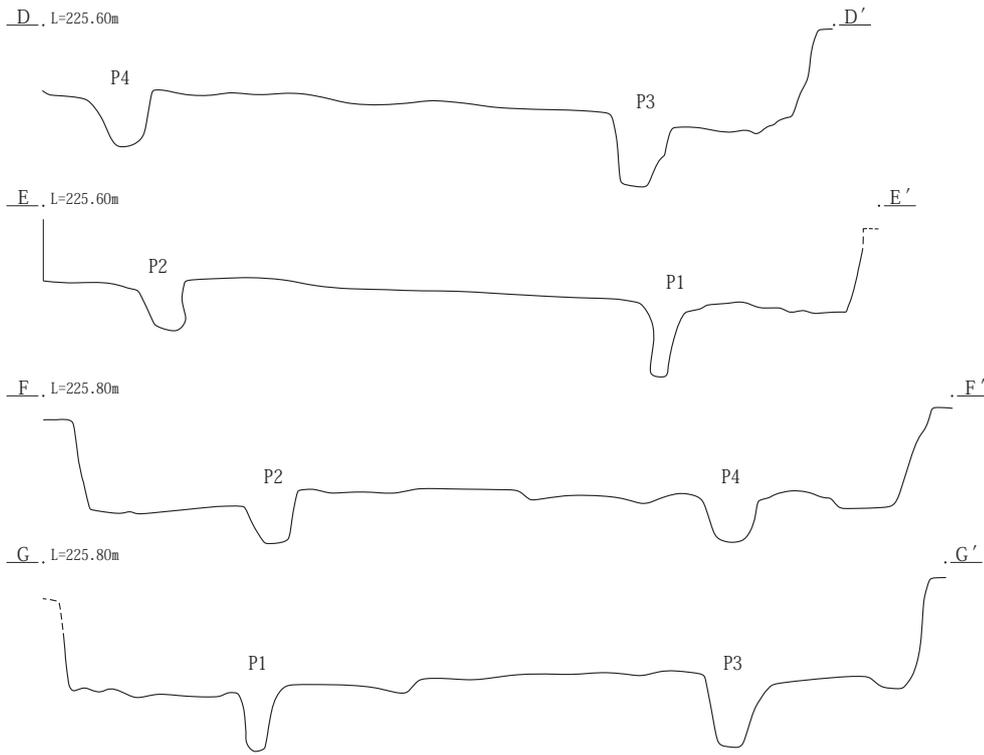
2号方形周溝遺構

1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下黒。
2. FA(S₉) 2次堆積土。
3. FA(S₇) 細砂中心層。
4. にぶい黄褐色土(10YR7/2) シルト質土。
5. FA(S₇) 細砂含。
6. にぶい黄褐色土(10YR6/4) シルト質土、締まり良。
7. FA(S₇) 粗砂中心層。
8. FA(S₇) 細砂含。
9. にぶい黄色土(2.5Y6/4) シルト質土、締まり良。
10. FA(S₇) 粗砂中心層。
11. FA(S₇) 粗砂と粗砂相互層。
12. FA(S₃) 上部
13. FA(S₃) 下部
14. FA(S₁)
15. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム粒1%、炭化物極少量含。
16. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土3%、炭化物1%含。
17. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土3%、炭化物1%含。
18. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土10%、炭化物1%含。

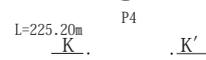
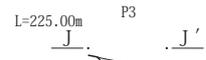
19. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土5%含。
20. 灰黄褐色土(10YR4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~2cm)3%含。
21. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・ブロック(粒φ1~2cm)3%含。
22. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~6cm)30%含。
23. 黒褐色土(10YR3/2) ローム粒(φ0.5~1cm)3%含。
24. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~3cm)10%含。
25. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~2cm)2%含。
26. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~4cm)10%含。
27. 灰黄色土(10Y4/2) ローム土・ブロック(粒φ1~7cm)20%含。
28. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・ブロック(粒φ1~7cm)2%含。
29. 黒褐色土(10YR3/2) ローム土・ブロック(粒φ1~4cm)5%含。
30. 黒褐色土(10YR3/2) 31層よりやや黒味あり。
31. 灰黄褐色土(10YR4/2) 礫(粒φ5~20cm)2%含。
32. 灰黄褐色土(10YR4/2) ロームブロック土混じり。
33. 暗灰黄色土(2.5Y4/2) ローム土40%含。

第228図 2号方形周溝遺構平面図・土層断面図

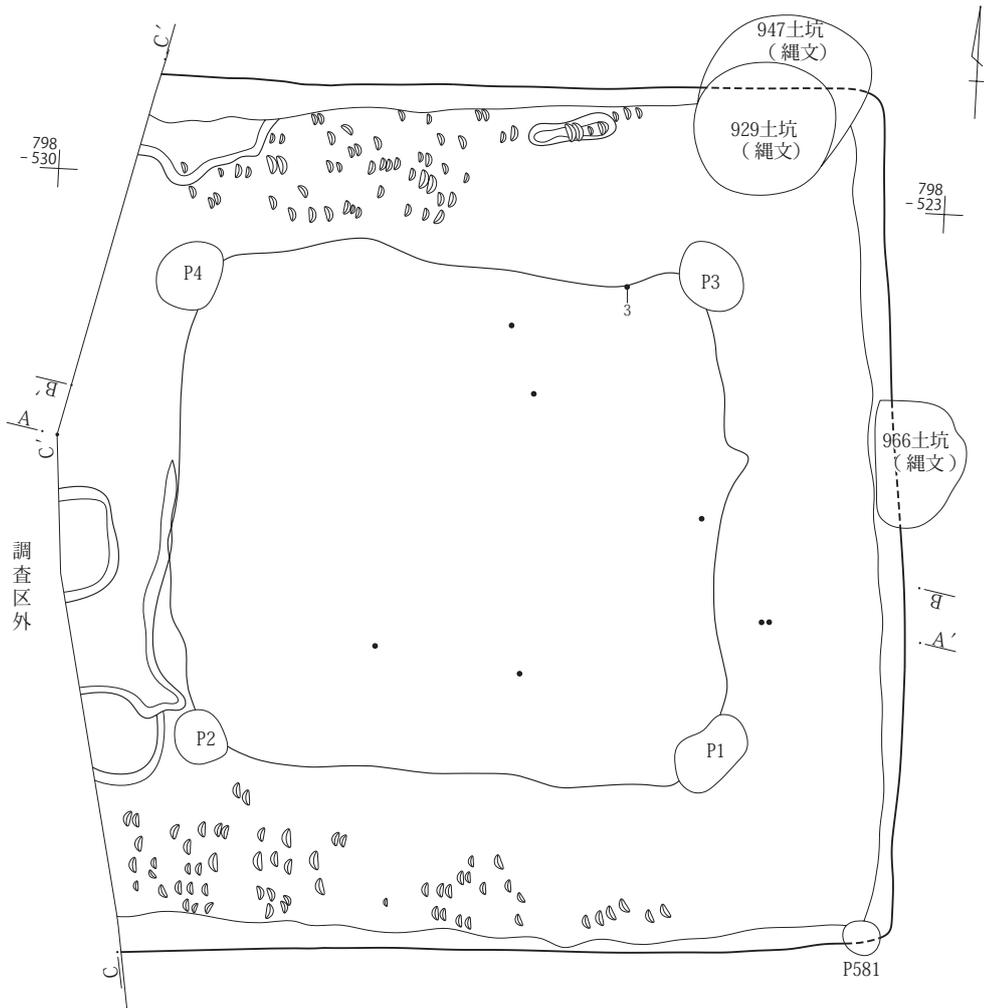
第1節 5面遺構



2号方形周溝遺構 P1・P2
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを多量含。



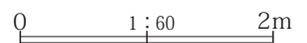
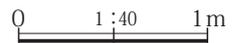
2号方形周溝遺構 P3・P4
1. 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを少量含。



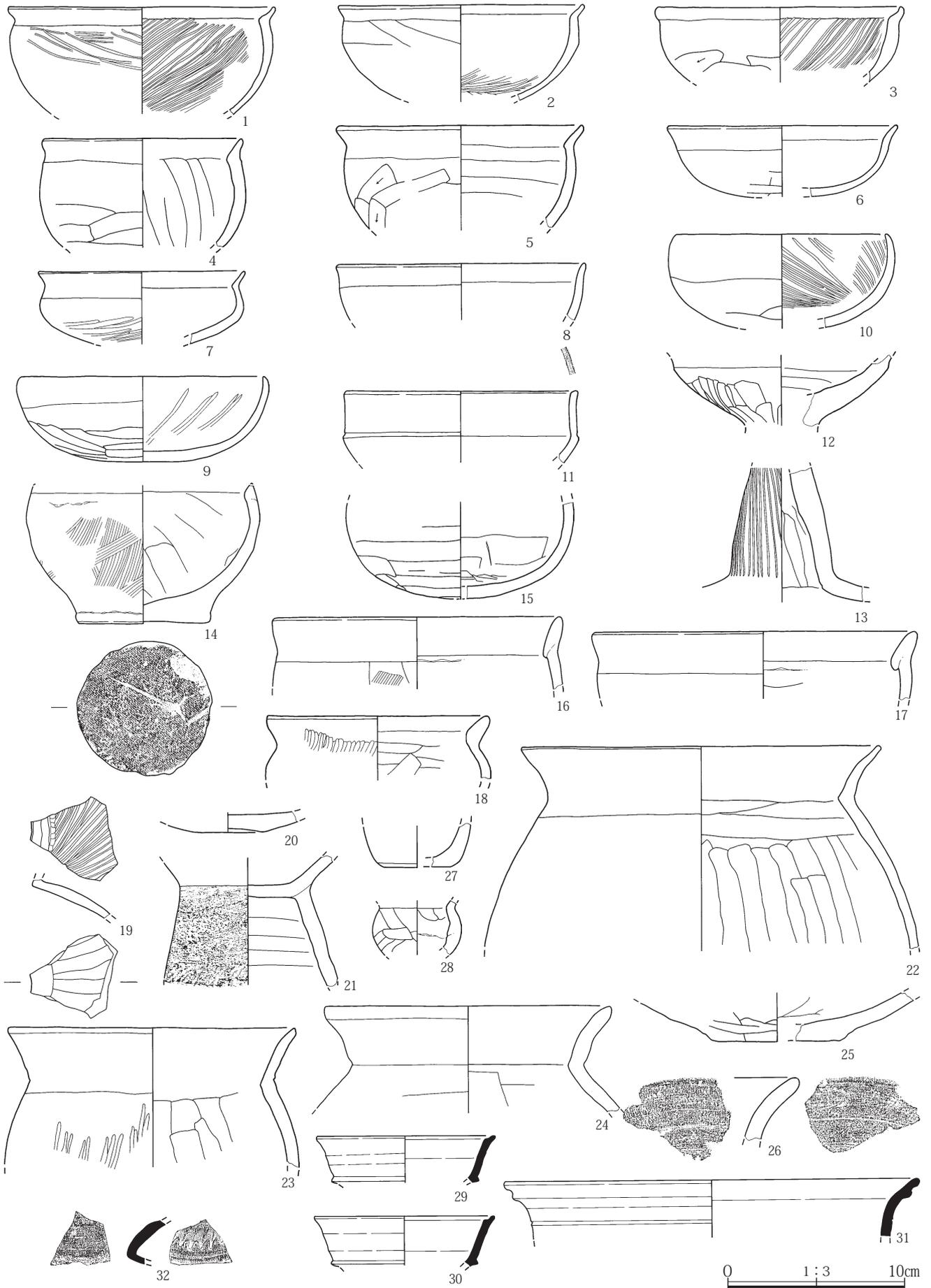
36号集石



- 36号集石
1. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石を含、明赤褐色土粒を少量含。
 2. 褐色土(10YR4/4) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒を含、ローム粒を少量含。
 3. 暗褐色土(10YR3/4) 細粒白色軽石・ローム粒を全体に含、締まりあり。
 4. 黄褐色土(10YR5/6) ローム塊主体、細粒白色軽石・明赤褐色土粒を多量含。



第229図 2号方形周溝遺構断面図・掘方図・土層断面図



第230図 2号方形周溝遺構出土遺物図

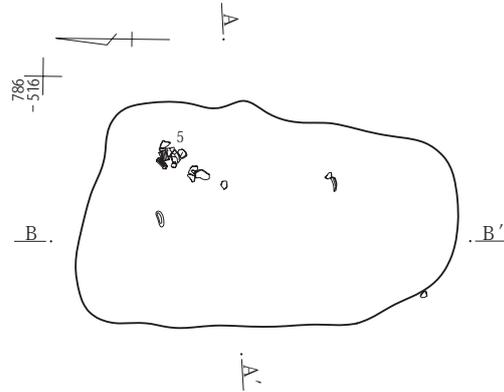
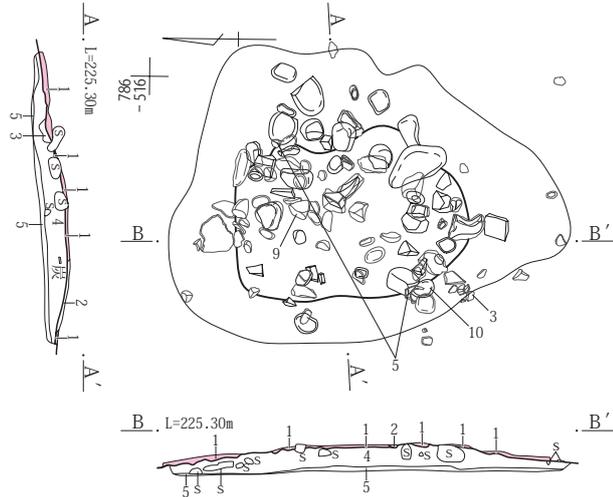
土した。石鍬1点、滑石製剣形模造品1点が出土した。石鍬は弥生時代のものである。集石する際に集められたものである。5世紀後半に比定される。

7号集石(第233図 PL.96) 40号竪穴建物の南西周堤外側に位置する。長径202cm、短径138cm、深さ18cmの穴に10～40cmほどの石を5個埋めているものである。杯

A II、杯B I、甕がいずれも破片で出土している。5世紀後半でも早い方に比定である。

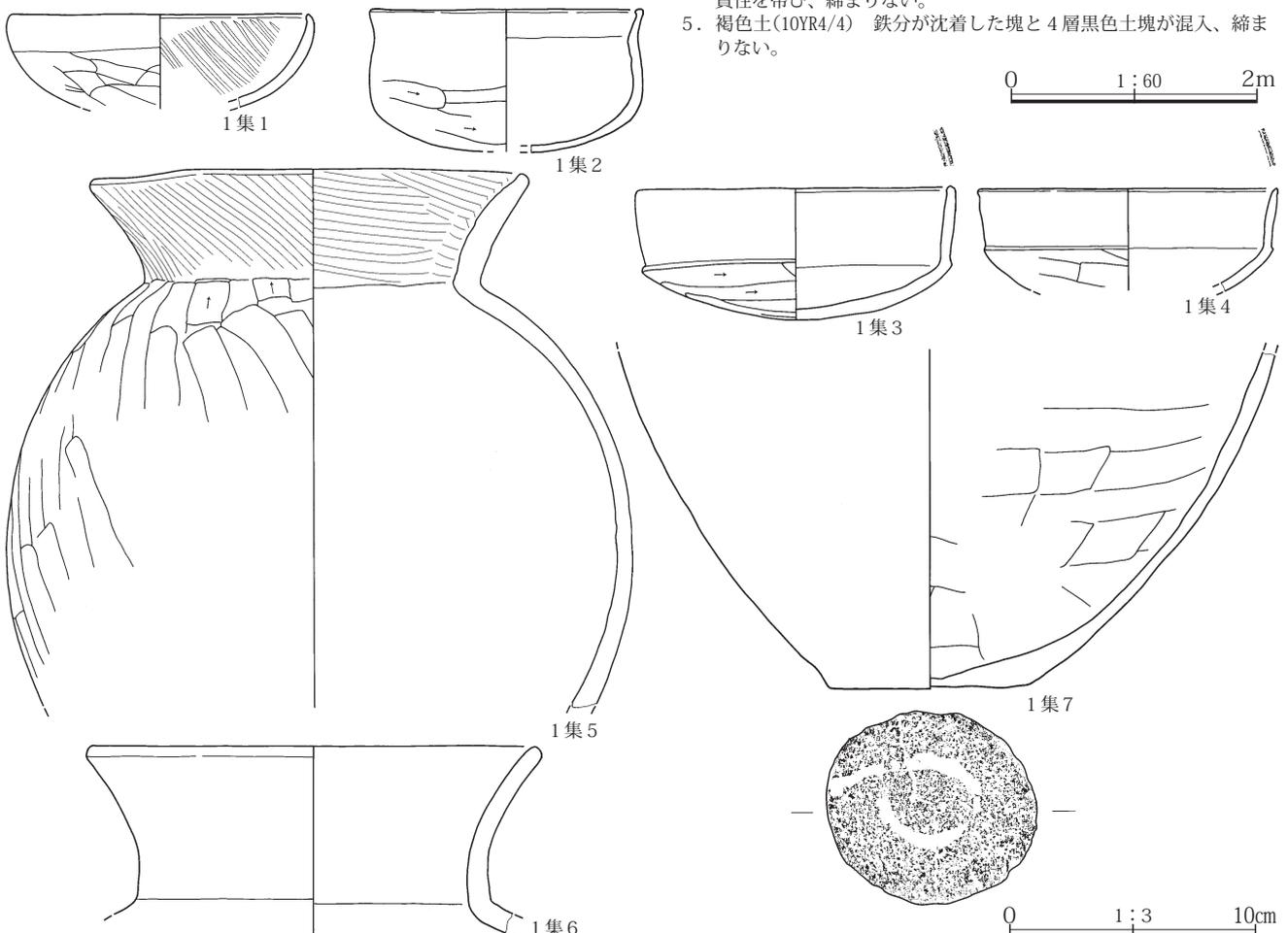
8号集石(第234図 PL.96・305) 40号竪穴建物南側周堤外に位置する。長径178cm、短径162cm、深さ28cmの穴に3～38cm大の石を30個程埋めているものである。杯A I、杯B、碗D II、短脚の杯Aを載せる形態の高杯F

1号集石

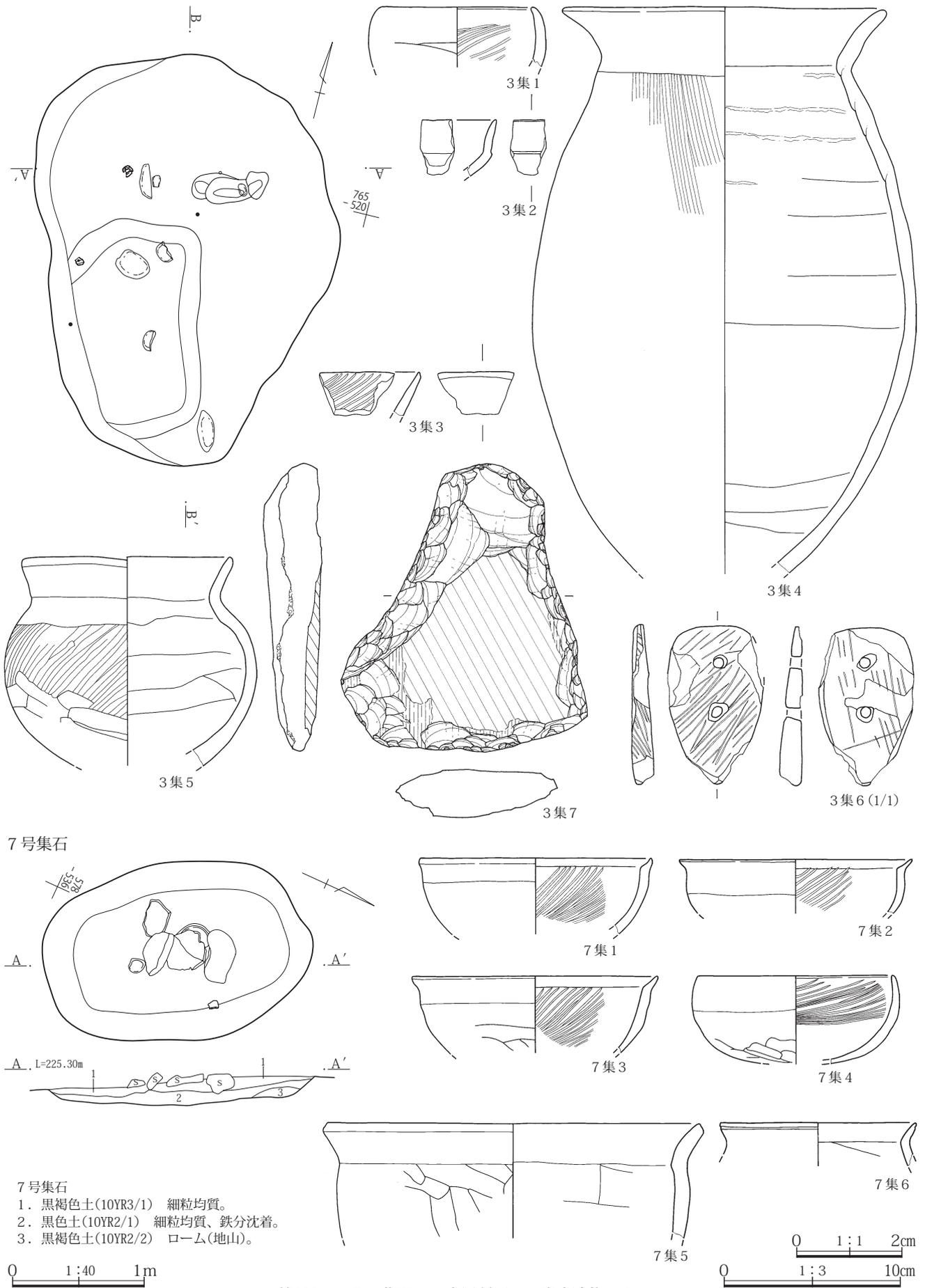


1号集石

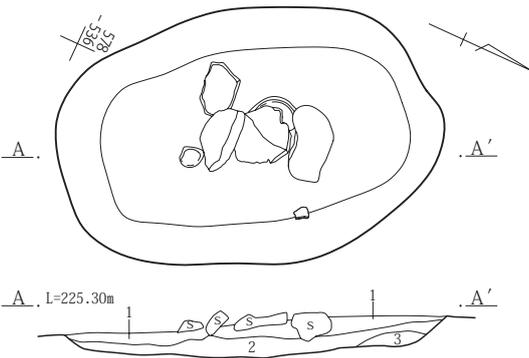
1. FA(Si)
2. FA(Si) 下黑色土にS1小塊の混合。
3. 褐灰色土(10YR4/1) 粒子粗い砂質土主体。
4. 黑色土(10YR2/1) S1下の黑色土主体。明赤褐色土粒が数点含、粘質性を帯び、縮まりない。
5. 褐色土(10YR4/4) 鉄分が沈着した塊と4層黑色土塊が混入、縮まりない。



第231図 7区集石図・土層断面図・出土遺物図1



7号集石



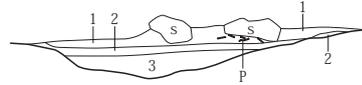
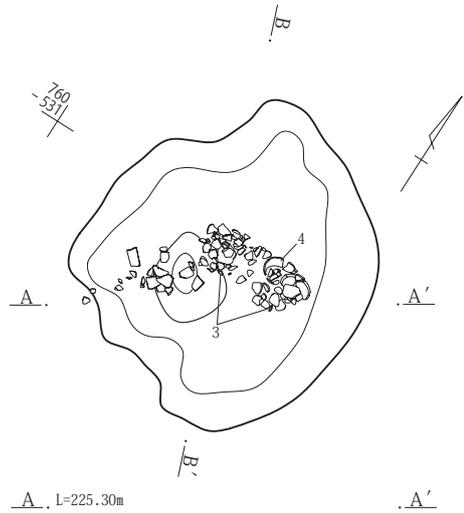
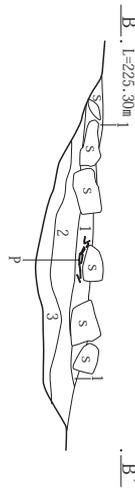
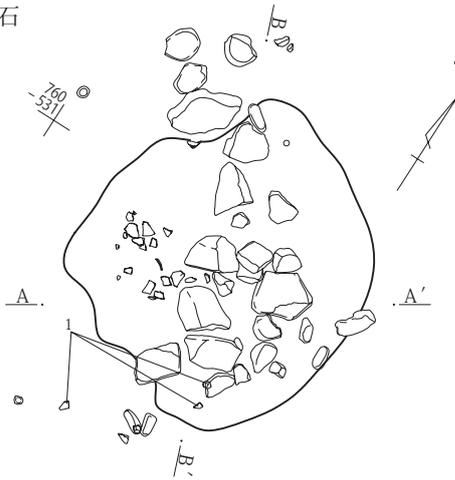
7号集石

1. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒均質。
2. 黒色土(10YR2/1) 細粒均質、鉄分沈着。
3. 黒褐色土(10YR2/2) ローム(地山)。

0 1:40 1m

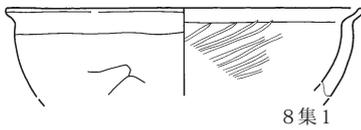
第233図 7区集石図・土層断面図・出土遺物図3

8号集石

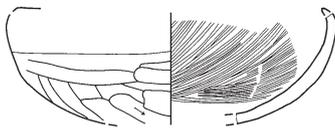


8号集石

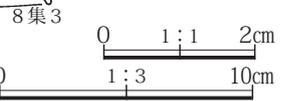
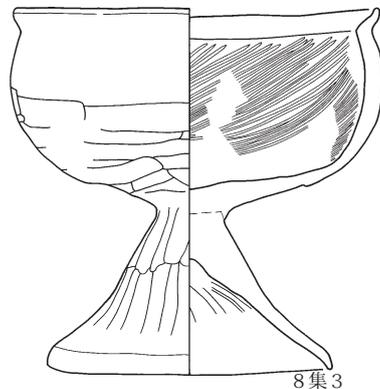
1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石・ロ-ム粒・明赤褐色土粒を含む。
2. 黒褐色土(10YR2/2) 細粒白色軽石・ロ-ム粒を含、明赤褐色土粒を少量含。
3. 黒色土(10YR2/1) 細粒白色軽石を少量含。



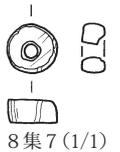
8集1



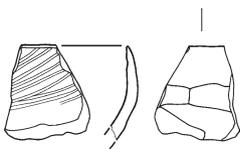
8集2



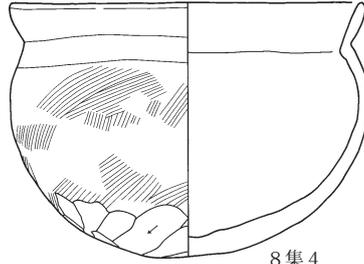
8集6 (1/1)



8集7 (1/1)

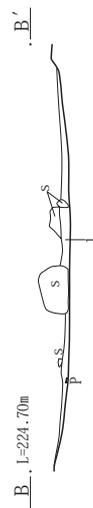
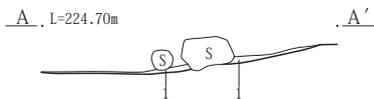
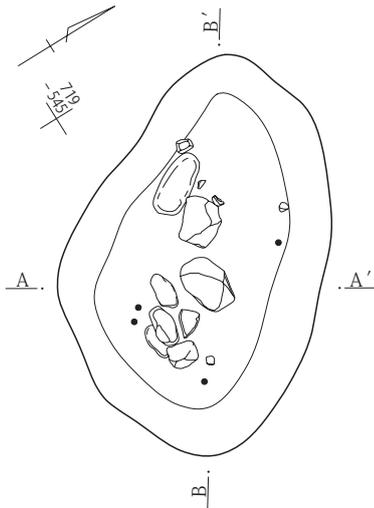


8集5



8集4

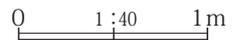
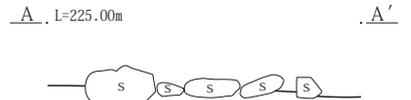
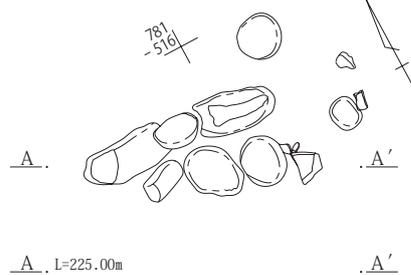
14号集石



14号集石

1. 黒褐色土(10YR3/2) ロ-ム粒を微量含、一部に鉄分の沈着による黄褐色土の変色が見られる。

22号集石



第234図 7区集石図・土層断面図・出土遺物図4

Iが出土した。5世紀後半でも早い方に比定される。白玉2点も出土した。

14号集石(第234図 PL.96) 37号竪穴建物東側周堤外側に位置する。長径212cm、短径138cm、深さ6cmの穴に4～34cm大の石を15個程埋めているものである。

22号集石(第234図 PL.96) 32号竪穴建物の周堤外の北東に位置する。長径150cm、短径90cmの範囲で、4～44cm大の石を13個集めているものである。

以上の集石の年代は出土土器、出土層位から、5世紀後半と推定される。

22号焼土(第236図 PL.97) 72号竪穴建物と2号方形周溝遺構の間に位置する。長径98cm、短径70cm、厚さ4cmで平面不整楕円形である。年代は5世紀後半に推定される。

14号畠(第235図 PL.97) 40号竪穴建物の南側に位置する。40号竪穴建物の周堤下、構築の際の遺構である、58・59号溝に切られているので、40号竪穴建物より時期的に遡る遺構である。幅6～12cm、長82～178cm、深さ4～6cmのサクが南北方向に8条並んで検出された。建物構築の前にここが畠であったことを想定させる遺構である。年代は、40号竪穴建物より遡るといって、5世紀中頃に推定される。

土坑群・ピット(第236図 PL.97)

599号土坑(第236図 PL.97) 41号竪穴建物の周堤北側の下にあり、長径186cm、短径108cm、深さ28cmの平面隅丸長方形の土坑である。立ち上がりはやや緩やかである。土師器内湾杯が出土している。

946号土坑(第236図 PL.97) 2号方形周溝遺構の東側にあり、長径216cm、短径168cm、深さ23cmの平面楕円形の土坑である。立ち上がりは緩やかである。

948号土坑(第236図 PL.97) 72号竪穴建物の南東にあり、長径49cm、短径32cm、深さ14cmの平面楕円形の土坑である。立ち上がりは急である。

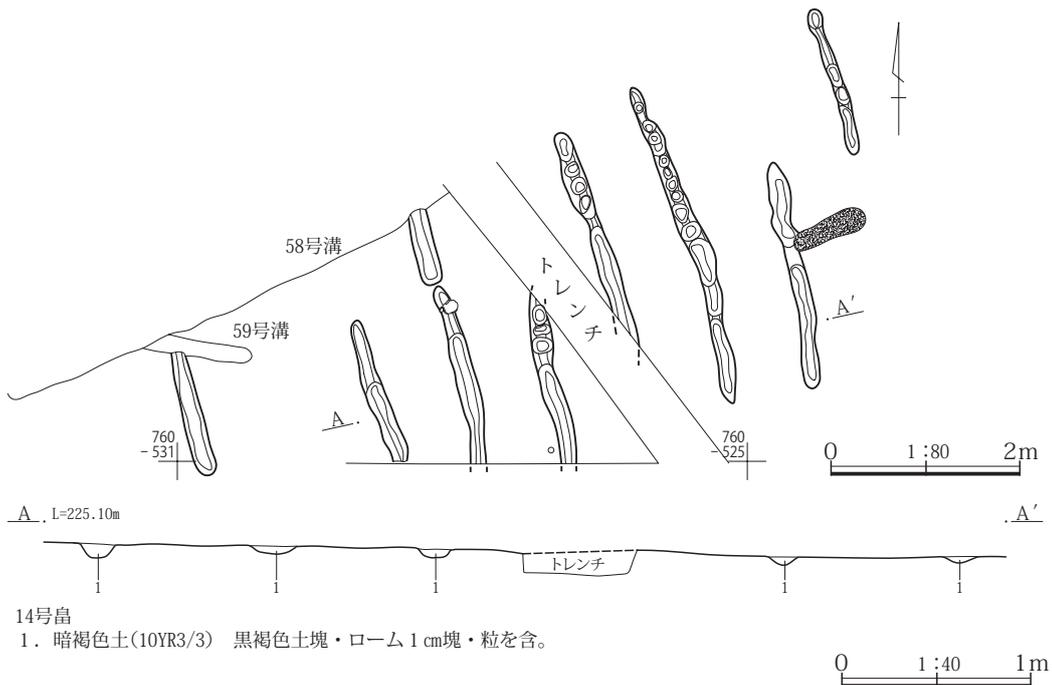
949号土坑(第236図 PL.97) 72号竪穴建物の南東にあり、長径48cm、短径31cm、深さ18cmの平面楕円形の土坑である。立ち上がりは急である。

950号土坑(第236図 PL.97) 72号竪穴建物の東にあり、半分ほど調査した。長径24cm+、短径40cm、深さ31cmの平面推定楕円形の土坑である。立ち上がりは急である。

951号土坑(第236図 PL.97) 2号方形周溝遺構の東にあり、長径42cm、短径28cm、深さ20cmの平面楕円形の土坑である。立ち上がりは急である。

455号ピット(第236図) 2号方形周溝遺構の南西にあり、径13cm、深さ28cmである。

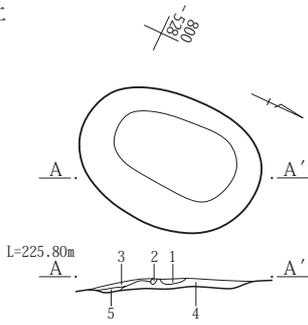
以上の土坑・ピットと共に、5世紀後半に推定される。



第235図 7区14号畠平面図・土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

22号焼土



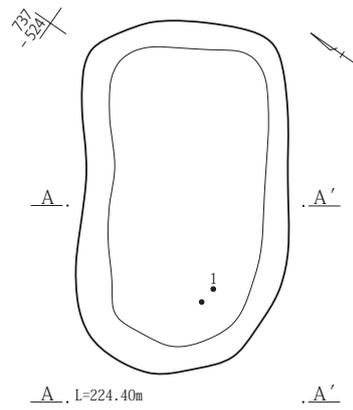
22号焼土

1. 灰黄褐色土(10YR6/2) 焼土塊・黒色土塊・ローム塊が混在。
2. 灰白色土(10YR8/1) 粘質の白色物塊。
3. 褐灰色土(10YR5/1) 細粒白色軽石を多量、焼土粒を少量含。
4. 黒褐色土(10YR3/1) 細粒白色軽石を全体に、ローム粒・焼土粒を少量含。
5. 褐灰色土(10YR4/1) 細粒白色軽石を含、ローム粒少量含。

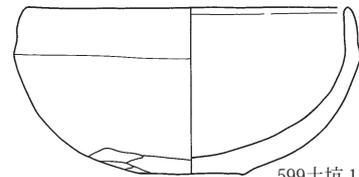
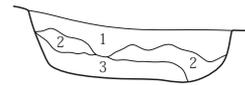
599号土坑

1. 黒褐色土(10YR2/2) 暗褐色土塊を含、黄橙色土粒少量含、締まり粘性あり。
2. 灰黄褐色土(10YR4/2) 黒褐色土塊を含、締まり粘性あり。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) ローム小塊を含、締まり粘性あり。

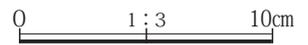
599号土坑



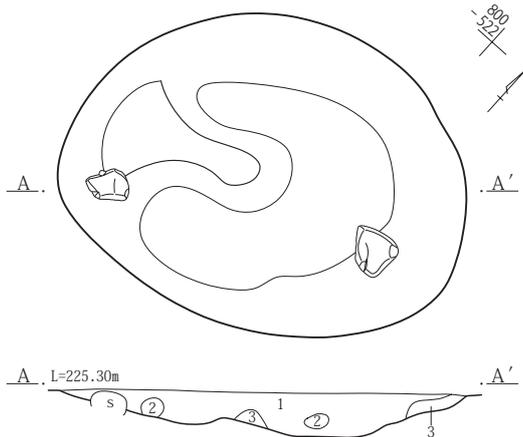
A. L=224.40m A'



599号土坑 1



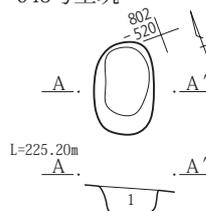
946号土坑



946号土坑

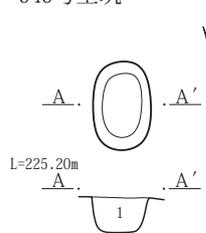
1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・浅黄橙色軽石を多量含。
2. 褐色土塊 浅黄橙色土軽石を少量含。
3. 暗褐色土(10YR3/4) 褐色土塊・浅黄橙色軽石を少量含。

948号土坑



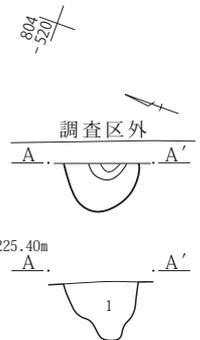
L=225.20m

949号土坑



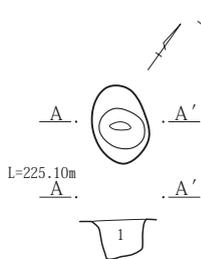
L=225.20m

950号土坑



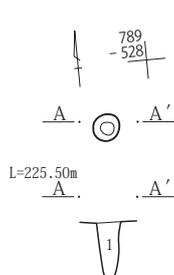
L=225.40m

951号土坑



L=225.10m

455号ピット



L=225.50m

948号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒を多量含、やや粘質性帯びる。

949号土坑

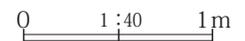
1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒・褐色土塊を少量含。

950号・951号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/2) 細粒白色軽石・明赤褐色土粒・褐色土塊を含。

455号ピット

1. 暗褐色土(10YR3/3) 細粒白色軽石を全体に含、炭化物を上層に僅か含、締まりあり。



第236図 7区焼土・土坑図・土層断面図

10 5区5面遺構(第237図)

5区5面遺構は、2棟の竪穴建物が南北に並置し、大形の土坑がその間に掘削されている。2棟の竪穴建物にはそれぞれ周堤の痕跡があり、主軸方位はずれるが、出土土器を見ると、同時併存していた可能性がある。

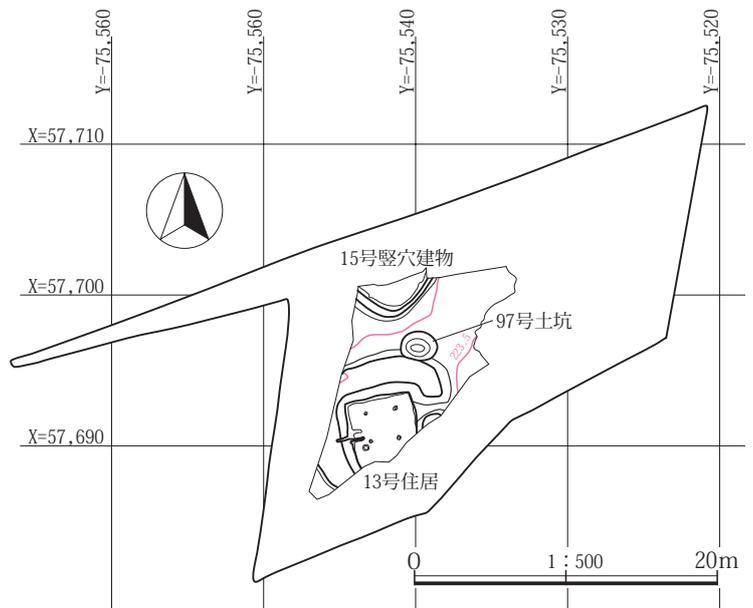
(1) 13号竪穴建物(第238～241図 PL.98・305)

位置 調査区南側 **遺存状況** 南辺を除く全体の3/4。**埋土状況** 廃棄後、土が堆積し、少し窪みが残る状態でHr-FAが降下している。**規模** 東西長4.51m、南北長4.50m+、壁高41～83cmで、床面積は17.42㎡+である。**掘方** 全体に下げる。**周堤** 幅2.4～2.6m、高さ20～30cmで、周りをめぐるが、東北部には、東方向に橋状の張り出し部があり、入口の可能性もある。**壁際溝** 幅11～17cm、深さ2～9cmで、西辺北部と北・東辺にめぐる。**柱穴** 4本で、長径20～34cm、短径19～25cm、深さ23～37cmを測る。柱穴のP3、P4のそばに、P6・P7の柱穴が隣接する。柱の一部を立て替えた可能性がある。**カマド** 焚口～煙道長が180cm、焚口幅30cmで、袖の芯に石を各2石ずつ置き、周りを粘土で被せている。燃烧部には、細長い支柱石を置いて

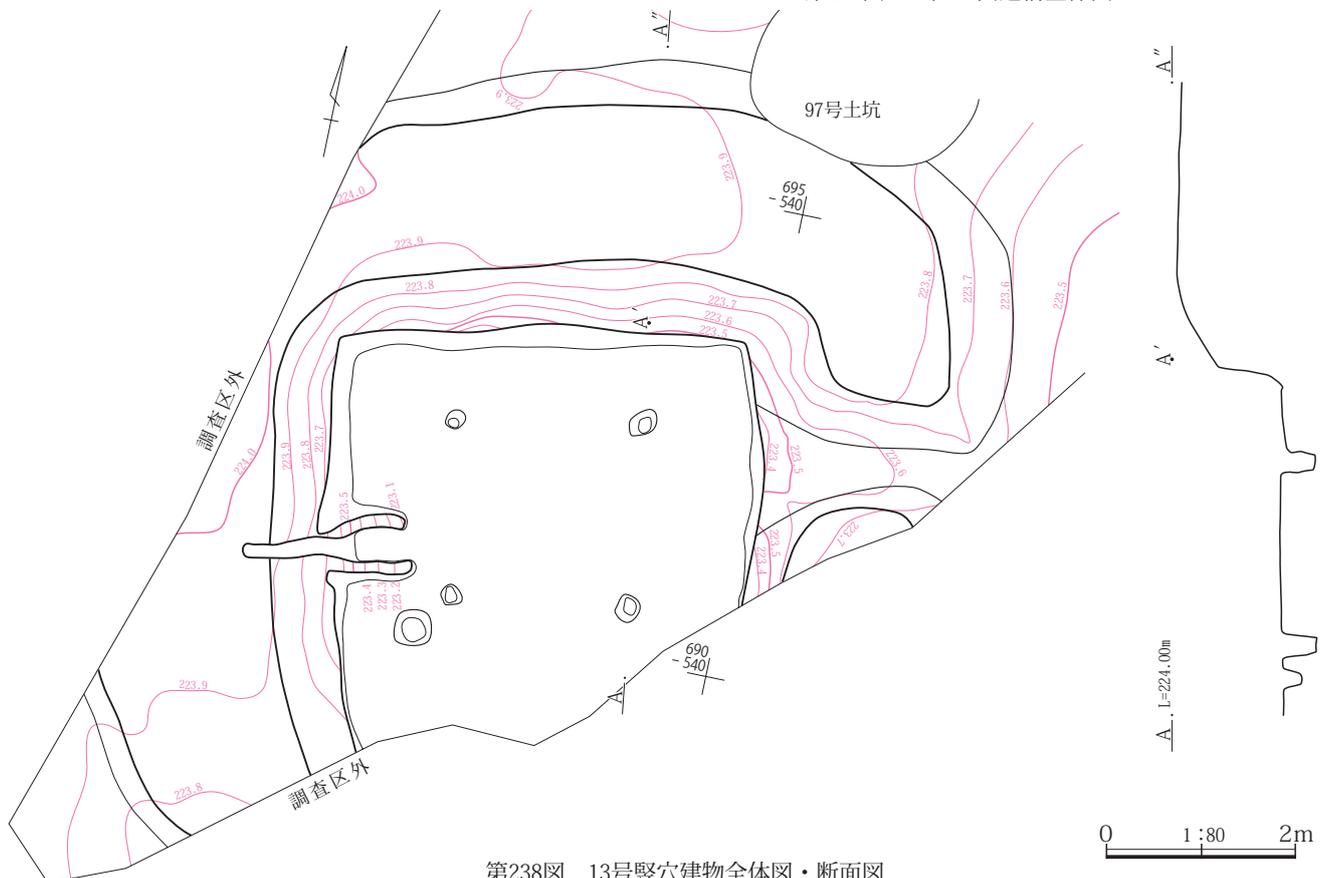
いる。貯蔵穴(P1) カマド南側の一辺39cm、深さ43cmの隅丸方形のP1は貯蔵穴の可能性もある。

出土遺物(第240・241図 PL.305) 杯AⅣと、杯DⅣ(第240図1 PL.305)、杯DⅨ(第240図3 PL.305)、高杯、甑D、小型甕BⅠ②、高杯、甕と、須恵器甕片が出土している。

年代 土器様相では、杯Aと杯D中心の組成で古相を呈しており、5世紀後半でも中頃に近い方に推定される。



第237図 5区5面遺構全体図



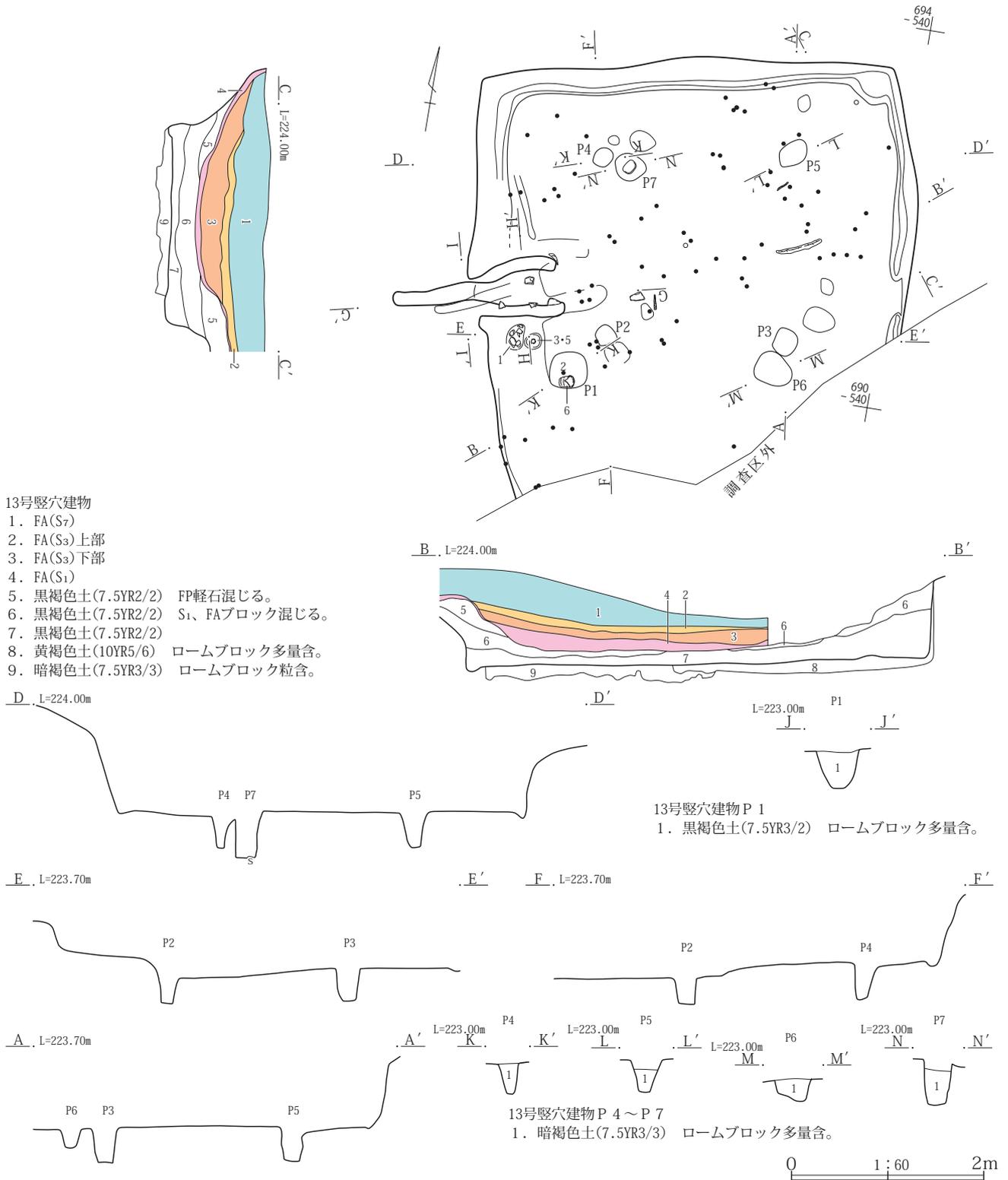
第238図 13号竪穴建物全体図・断面図

(2) 15号竪穴建物(第242～244図 PL.99・306・307)

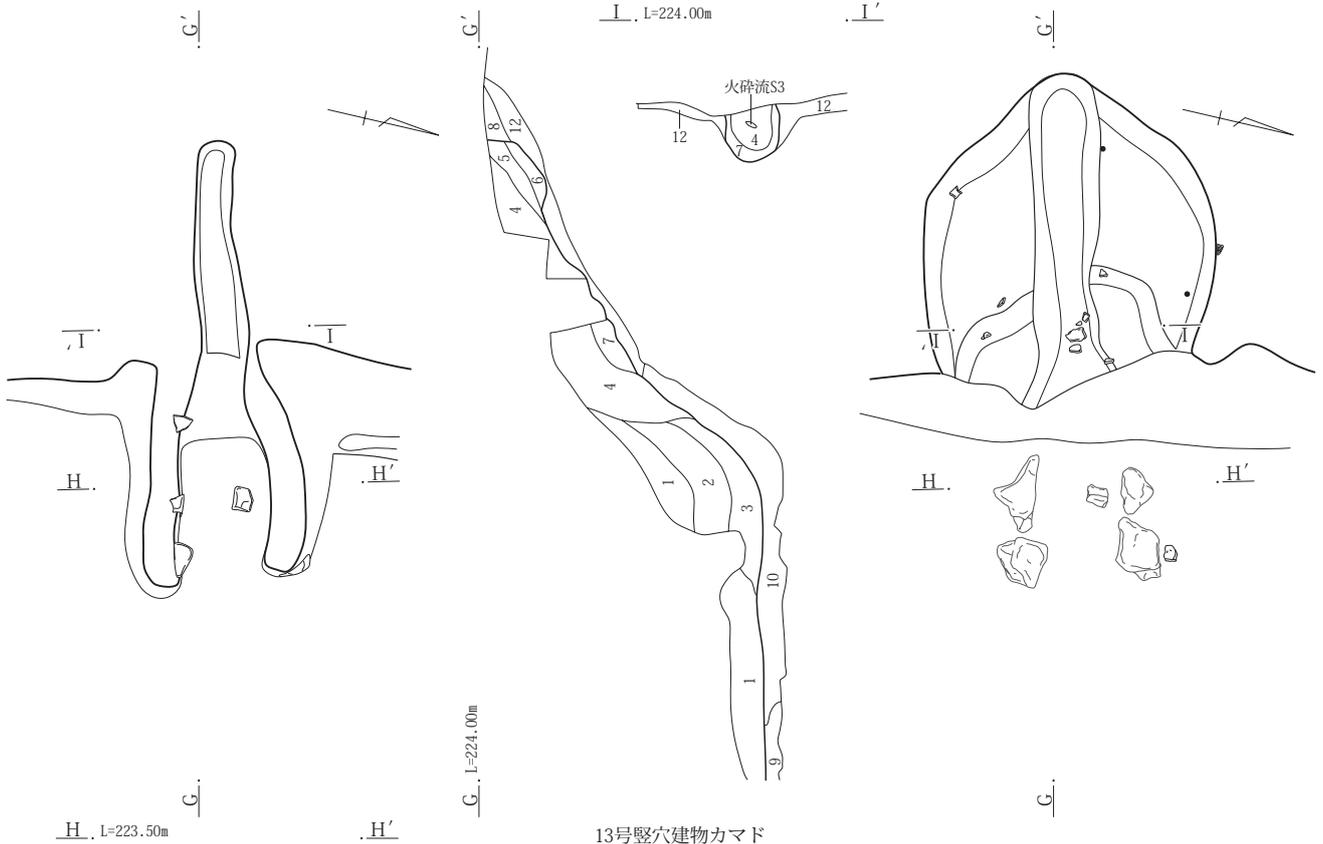
位置 調査区北側 遺存状況 建物の南側1/3

埋土状況 廃棄後、土があまり堆積しない段階で、Hr-FAが降下している。周堤 幅72～96cm、高さ10cmほどの痕跡がめぐっている。規模 東西長2.76m+、南北長3.64m+、壁高57～66cmで、床面積は4.88㎡+である。

掘方 全体に下げている。柱穴他 柱穴・カマド・貯蔵穴ともに検出されなかった。出土遺物(第243・244図 PL.306・307) 杯AⅡ、杯BⅠ、杯DⅩ(第243図4)、甑E(第243図5)、小型甕AⅠ③(第243図10)、小型甕BⅡ(第243図8)、小型甕D②(第243図7)と小型甕が多く、甕A①(第243図11)、甕D①(第243図9)が出土し、須恵



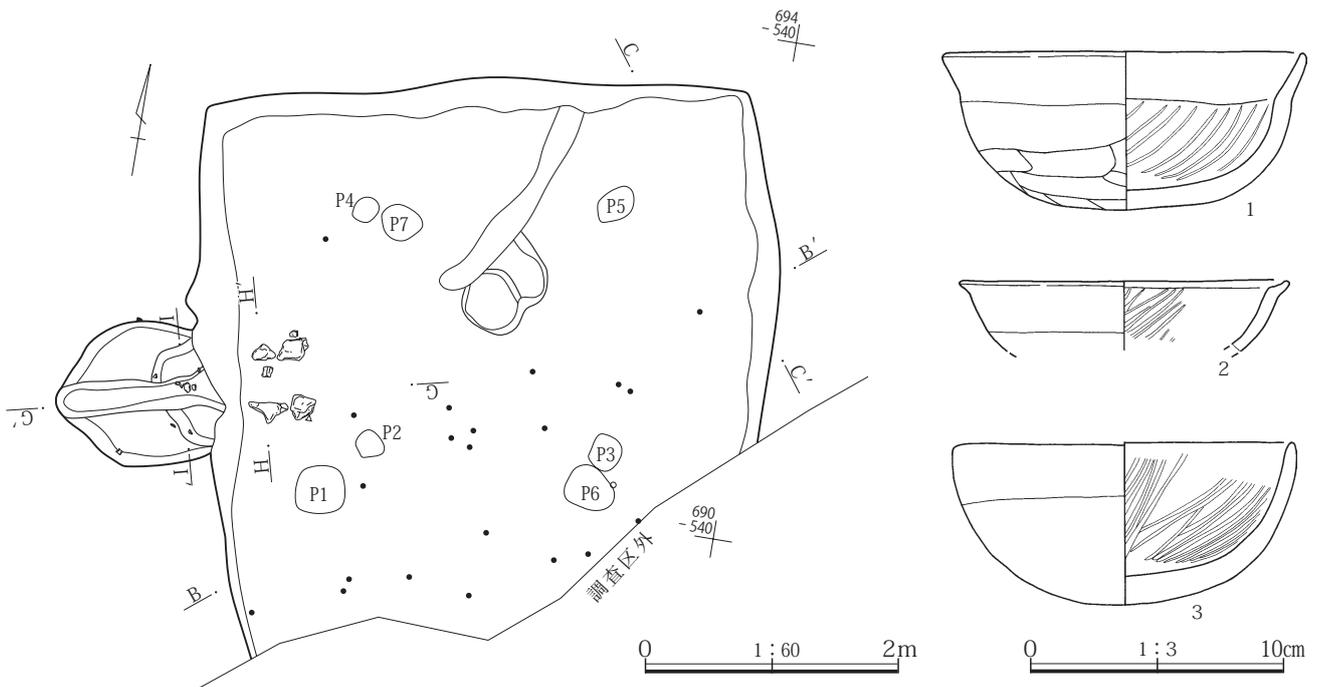
第239図 13号竪穴建物平面図・土層断面図・断面図



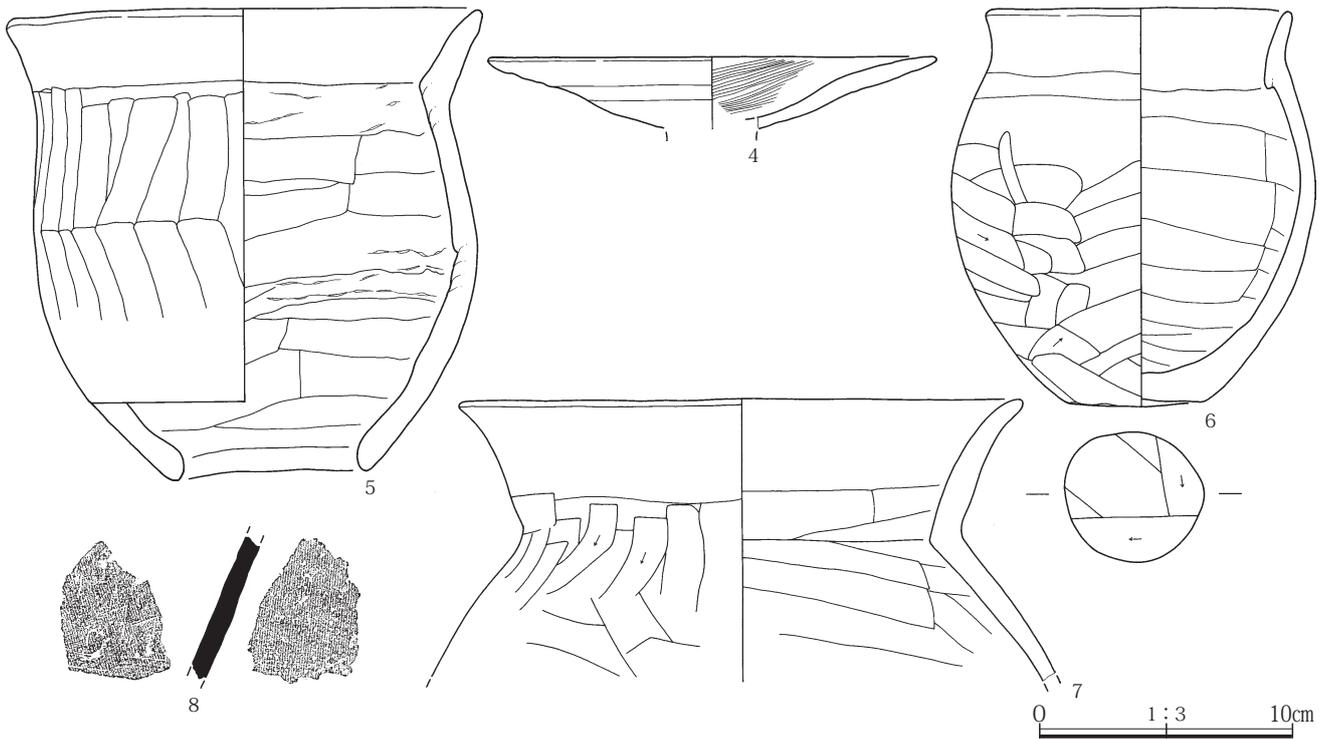
13号竪穴建物カマド

1. 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロック多量、焼土・灰を含。
2. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ブロックを含。
3. 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土多量・ローム粒を含。
4. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・焼土粒を少量含。
5. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム粒・焼土を多く含。
6. 灰黄褐色土(10YR5/2) ローム粒・焼土粒を多く含。
7. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・焼土含。
8. にぶい黄橙色土(10YR7/4) ローム土中心層、焼土粒含、カマド煙突の残存部。
9. 暗褐色土(7.5YR3/3) ローム粒・焼土を多量含。
10. 黒褐色土(7.5YR2/2) ロームブロック多量、焼土・灰を含。
11. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒・ブロック含。
12. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒少量含。

0 1:30 1m

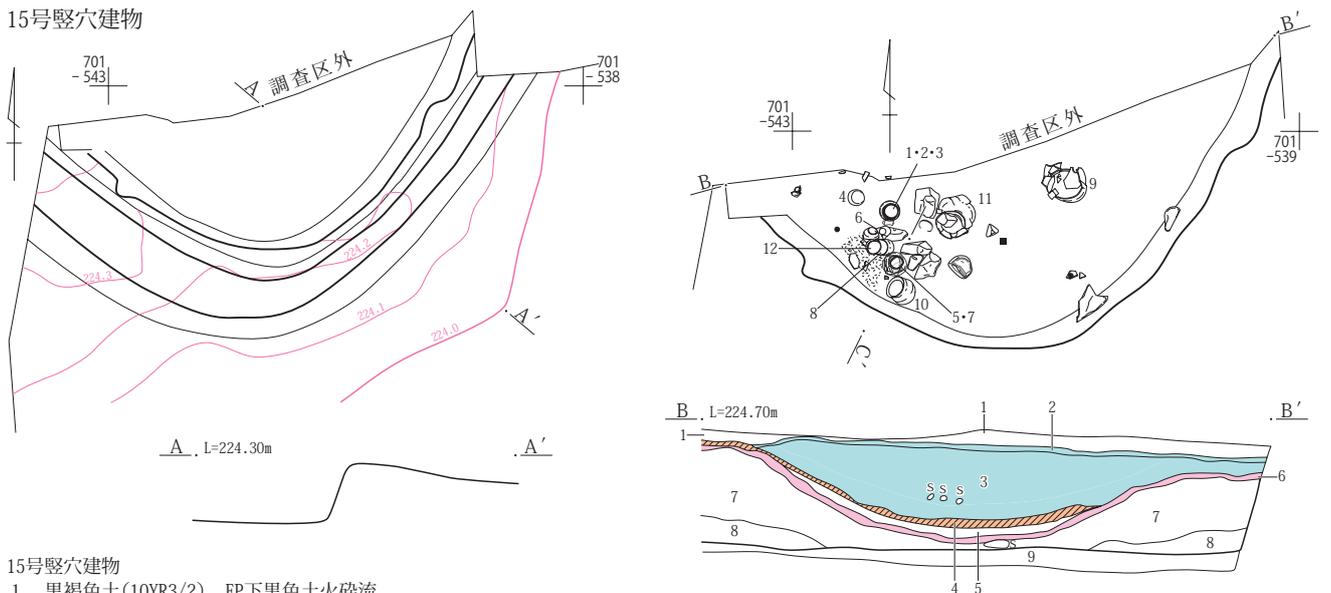


第240図 13号竪穴建物カマド図・竪穴建物掘方図・土層断面図・出土遺物図1



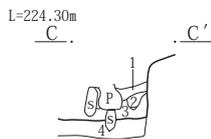
第241図 13号竪穴建物出土遺物図2

15号竪穴建物

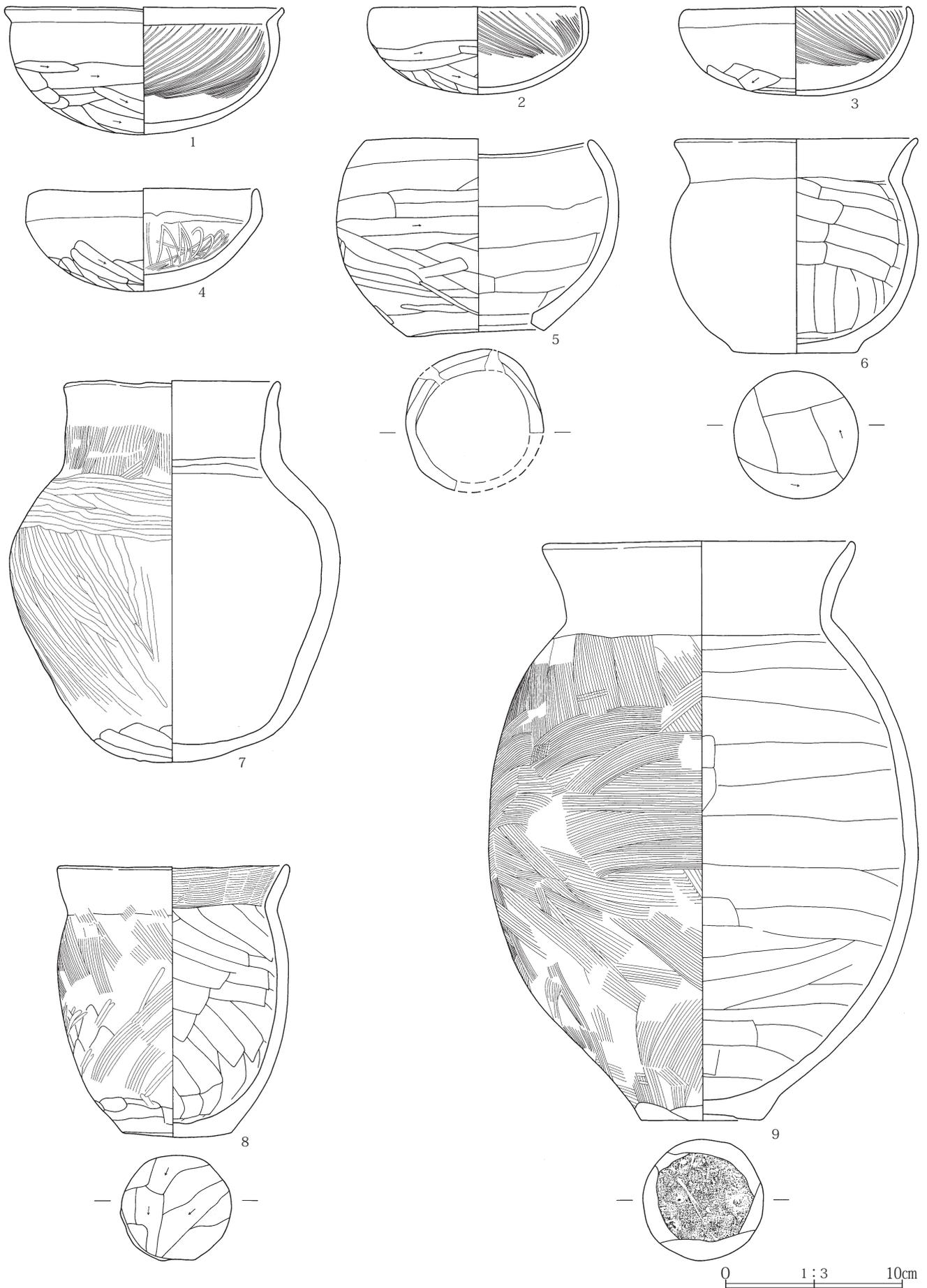


15号竪穴建物

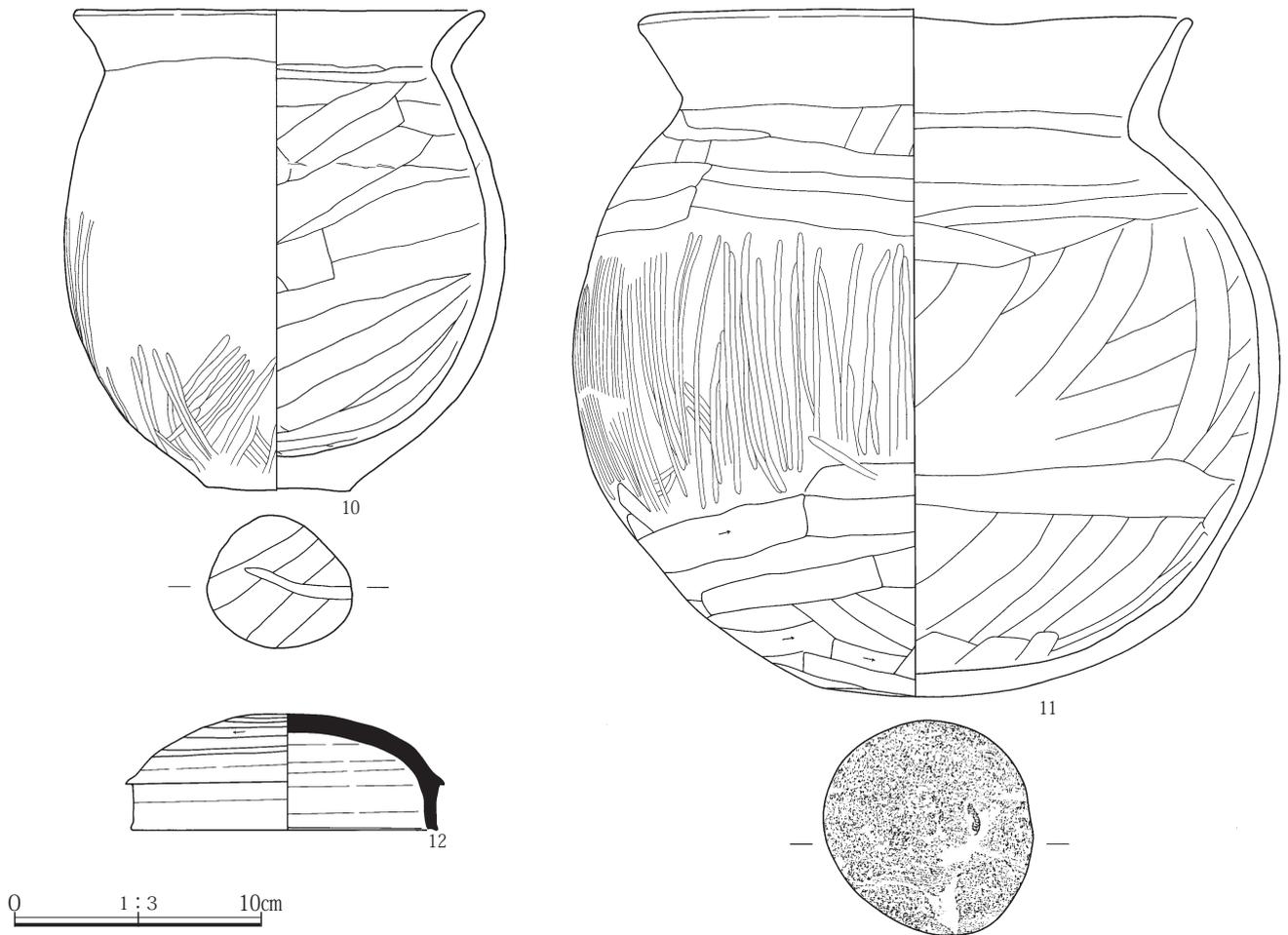
- 1. 黒褐色土(10YR3/2) FP下黒色土火碎流。
 - 2. S₁₃
 - 3. FA(S₇)
 - 4. FA(S₃)上部、下部
 - 5. FA(S₂)
 - 6. FA(S₁)
 - 7. 黒褐色土(7.5YR3/2) 黒ボク土・大量の縄文土器混じる。
 - 8. 褐色土(7.5YR4/4) 焼土・炭化物含。
 - 9. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロック含。
- 15号竪穴建物カマド
- 1. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロック
 - 2. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロック・焼土含。
 - 3. 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土含。
 - 4. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒含。



第242図 15号竪穴建物平面図・土層断面図

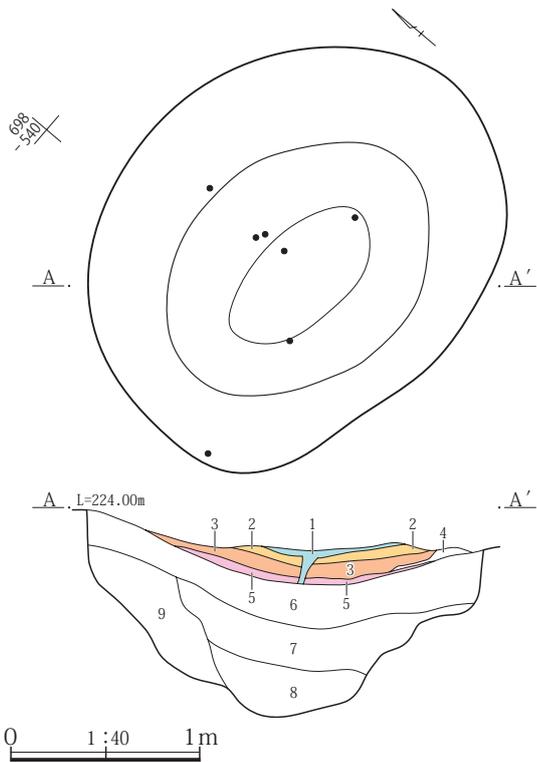


第243図 15号竖穴建物出土遺物図1



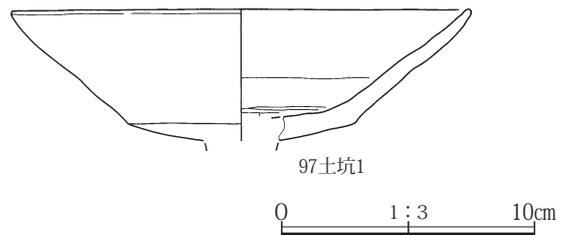
第244図 15号竪穴建物出土遺物図2

97号土坑



97号土坑

1. FA(S₇)
2. FA(S₃)上部
3. FA(S₃)下部
4. FA(S₂)
5. FA(S₁)
6. 黒色土(7.5YR2/1) S₁ブロック、黒ボク。
7. 黒褐色土(7.5YR2/2) ローム粒含。
8. 極暗褐色土(7.5YR2/3) ロームブロック含。
9. 極暗褐色土(7.5YR2/3) ローム粒・ブロック含。



第245図 97号土坑図・土層断面図

器杯蓋も出土した。年代 杯A・B・Dの組み合わせで、球形状の胴部を持つ甕A類の存在、及び須恵器などから、5世紀後半と推定される。

97号土坑(第245図 PL.99)

97号土坑は、13号竪穴建物の北東周堤に一部かかる箇所検出された。廃棄後、少し窪みが残る段階でHr-FAが降下している。長径240cm、短径96cm、深さ96cmの楕円形状の大型土坑である。高杯Aが出土した。年代は5世紀後半と推定される。

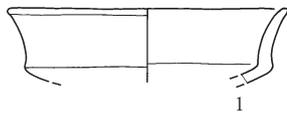
11 5面遺構外出土遺物

(第246～251図 PL.307～311)

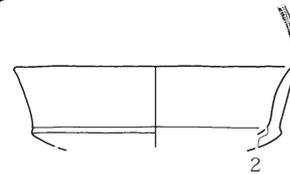
5面の遺構面からは多くの遺物が出土している。9・4・2・1・8・7区からそれぞれ出土している。

土師器では、杯A・杯B・杯Cが多数出土し、他に高杯、小型壺、壺、小型甕、甕が出土している。須恵器模倣杯の比率が多いのが特徴である。須恵器は、杯身、杯蓋、椀、高杯、甃、甕など多種類の須恵器が出土している。他の面と同様、須恵器の出土量が多いのが特徴である。滑石製模造品の剣形品、玉類では、管玉が4点、滑石製白玉が数点、ガラス玉3点が出土している。他に、砥石や棒状鉄製品(素材)が出土している。

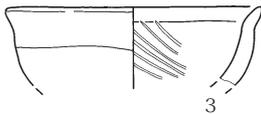
9区1トレ



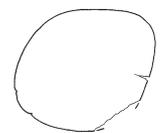
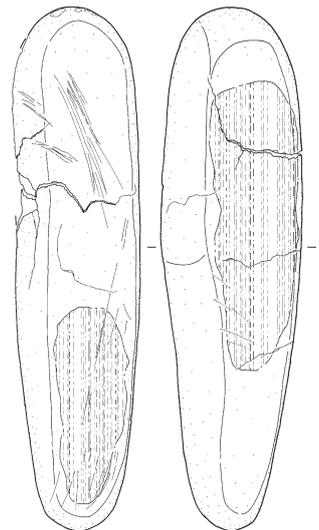
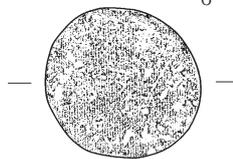
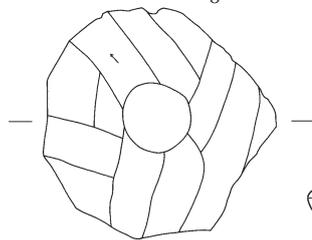
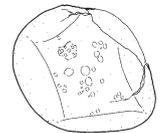
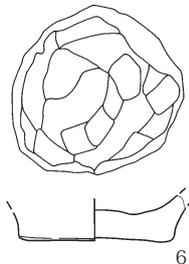
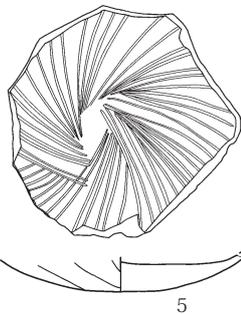
9区2トレ



9区3トレ



9区

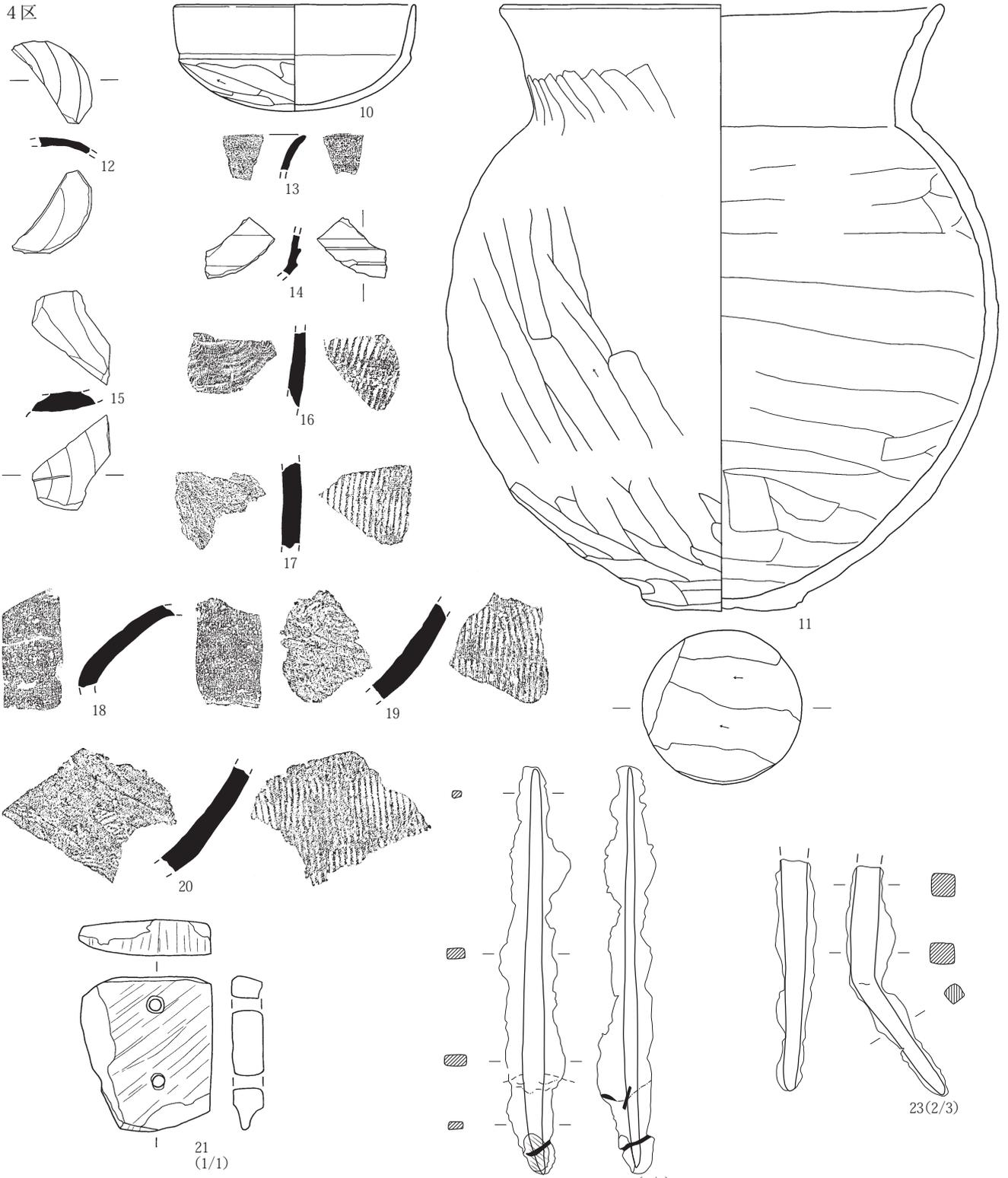


9(1/4)

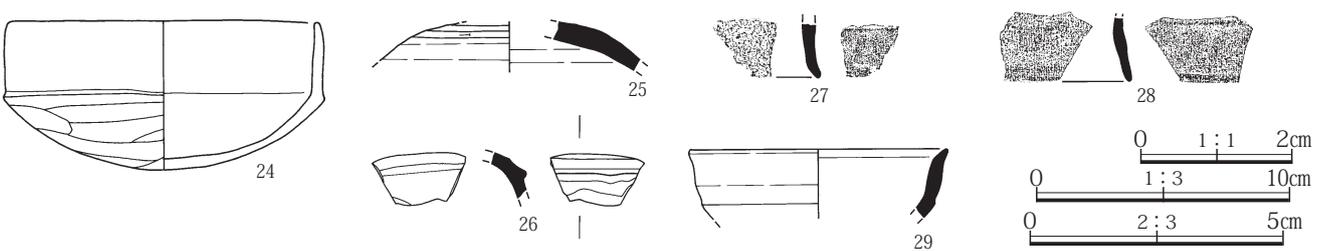


第246図 5面遺構外出土遺物図1(9区)

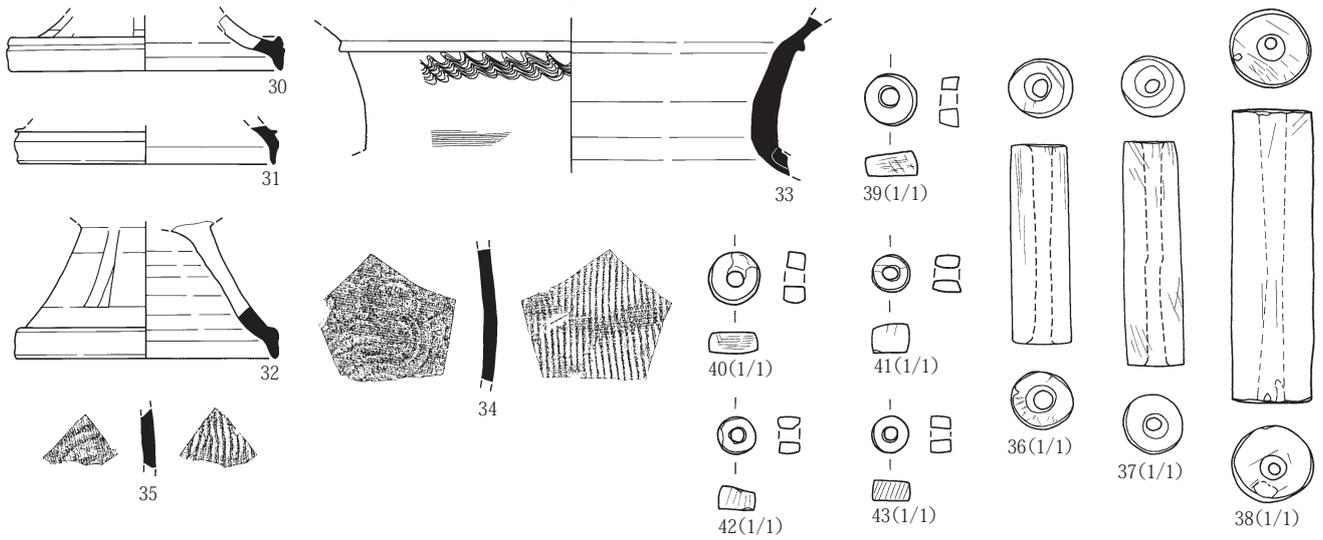
4区



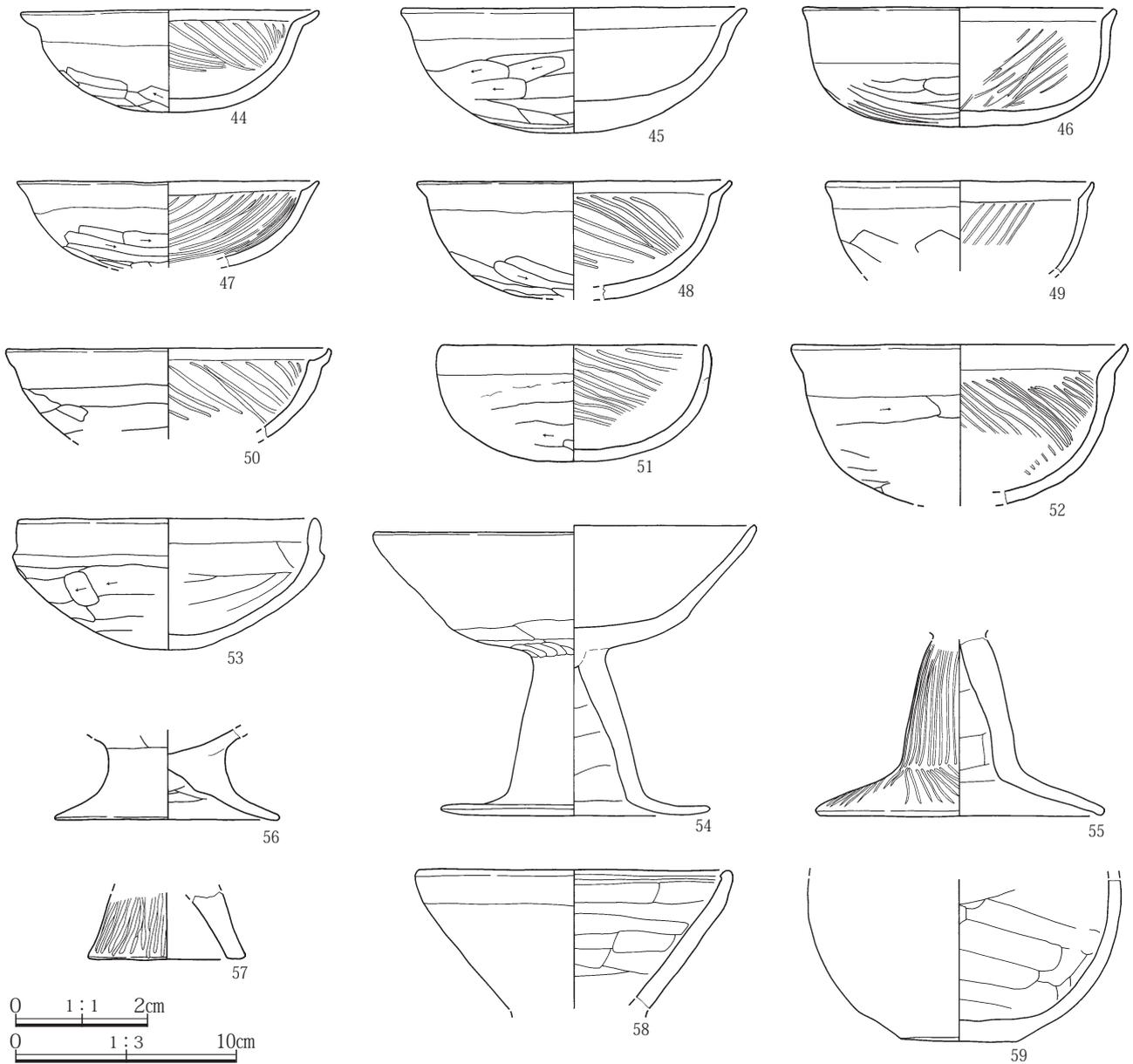
2区



第247図 5面遺構外出土遺物図2(4・2区)

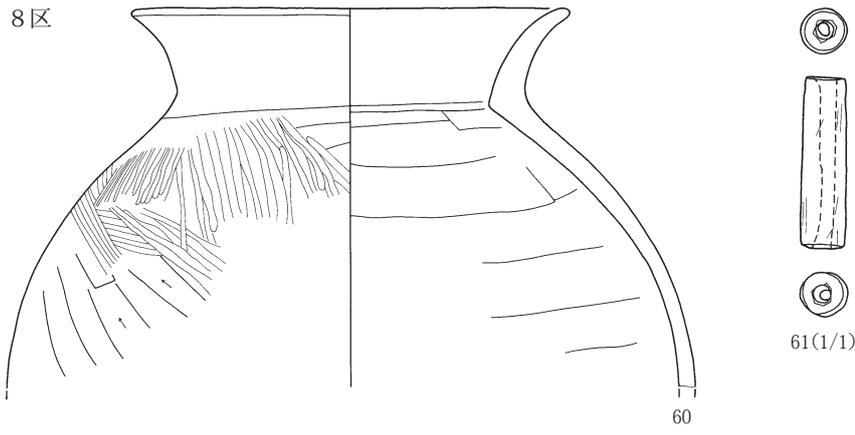


1区

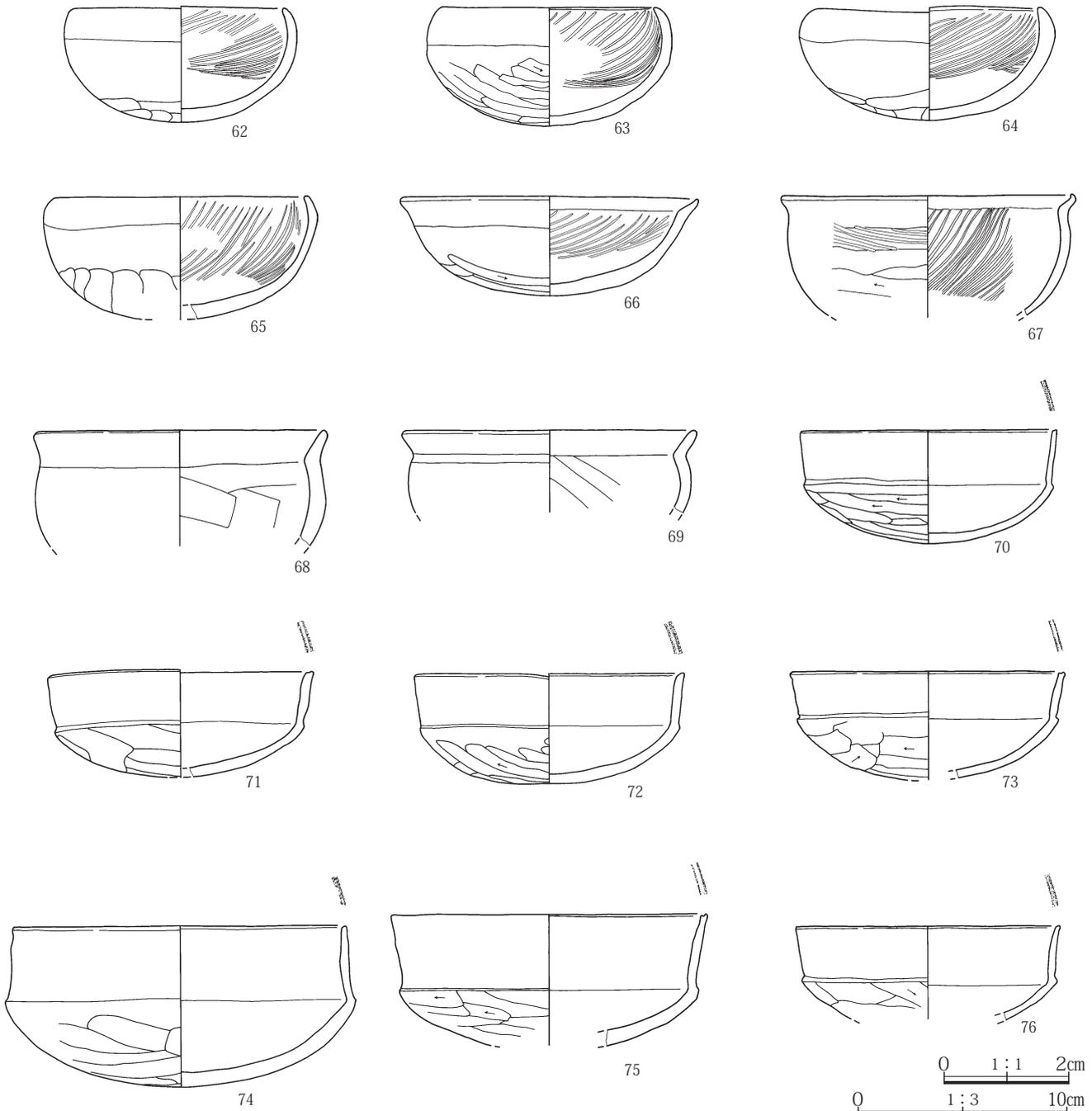


第248図 5面遺構外出土遺物図3(2・1区)

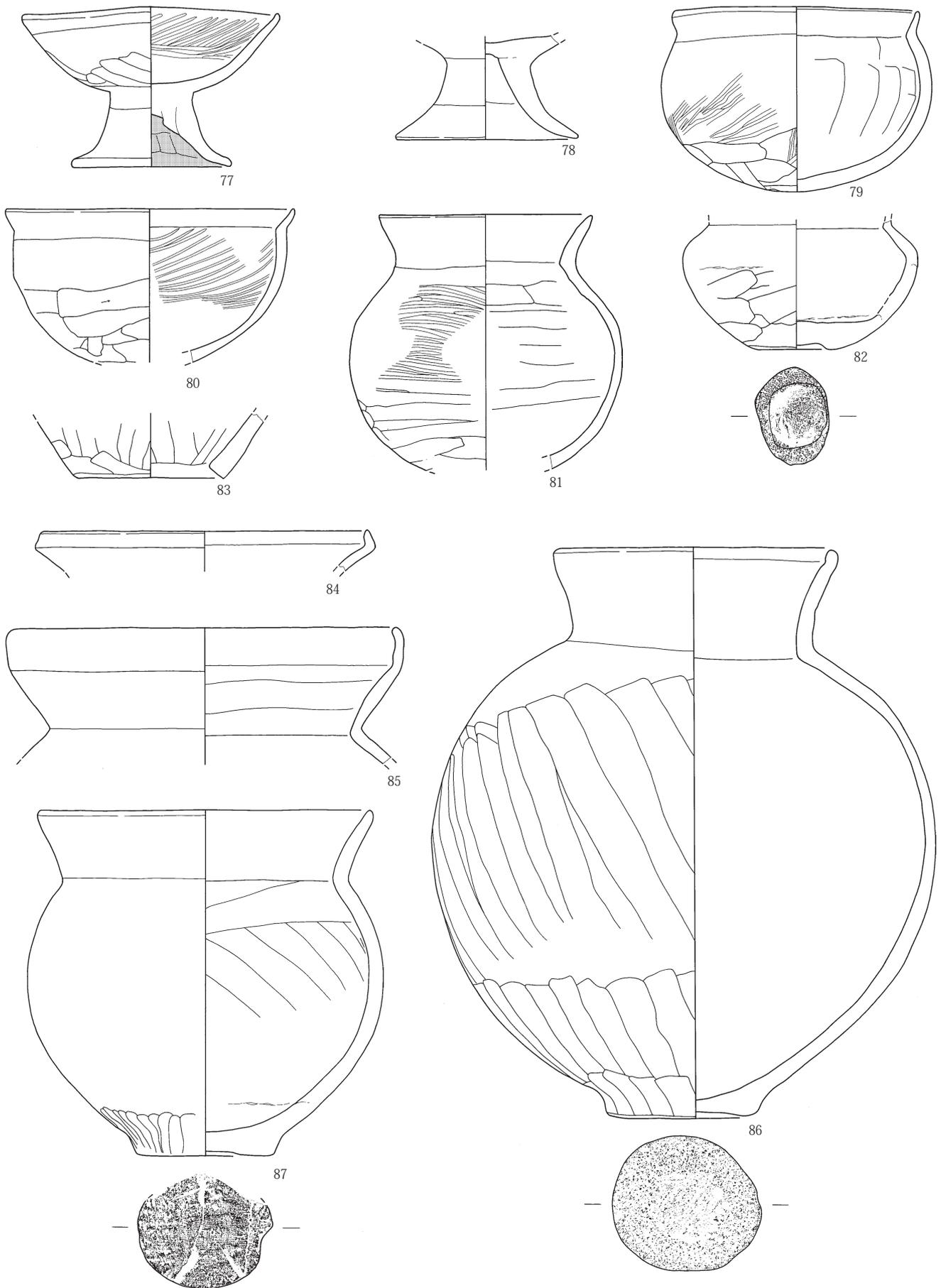
8区



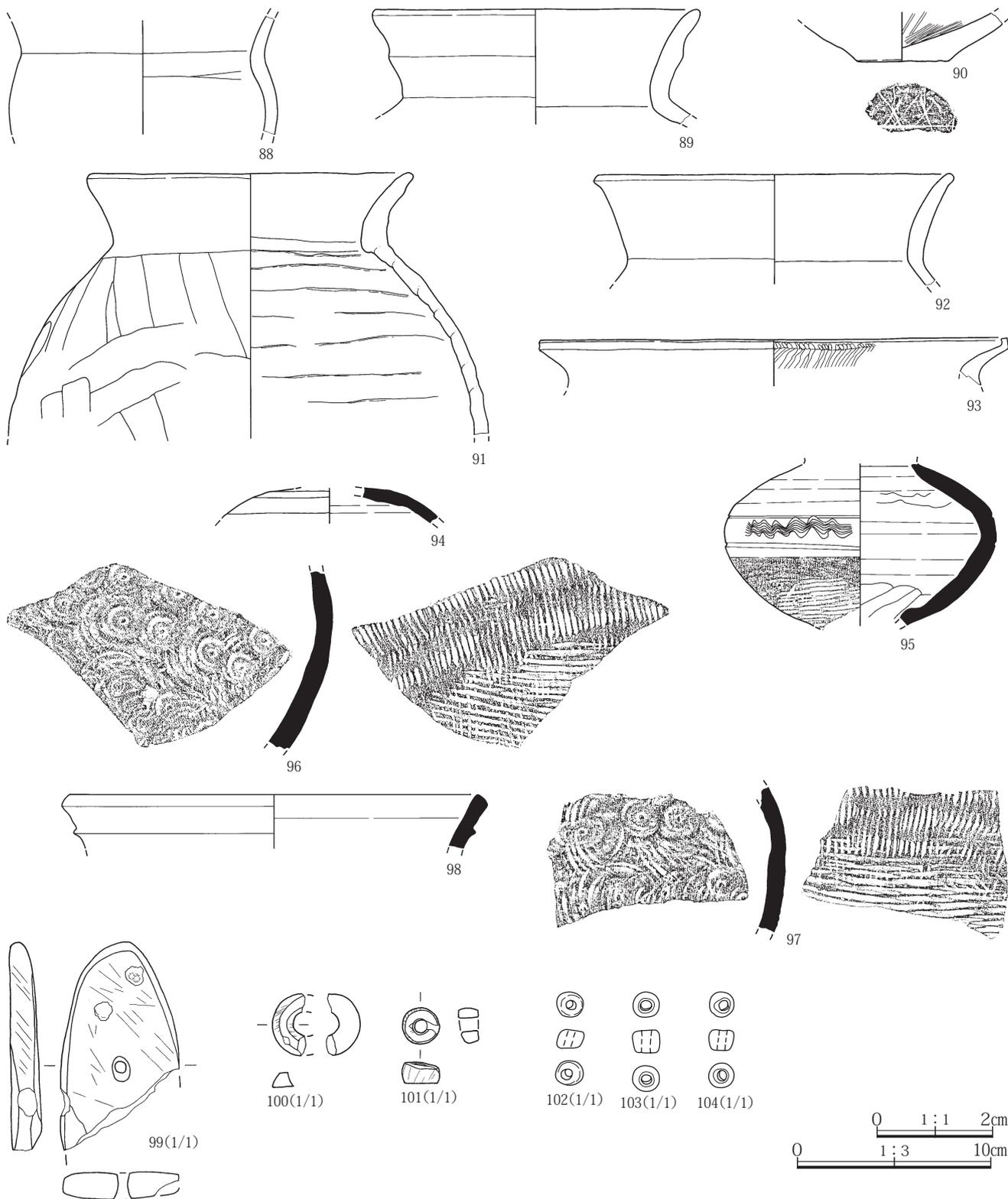
7区



第249図 5面遺構外出土遺物図4(8・7区)



第250图 5面遺構外出土遺物图5(7区)



第251図 5面遺構外出土遺物図6(7区)

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第652集

金井東裏遺跡《古墳時代編》 本文編1

(国)353号金井バイパス(上信自動車道)道路改築事業
(国道・連携)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

平成31(2019)年3月8日 印刷

平成31(2019)年3月15日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／朝日印刷工業株式会社
